とある世界の剥離要素（エラーポイント）

観葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある世界の剥離要素（エラーポイント）

【Ｎコード】
Ｎ７６４５Ｒ

【作者名】
観葉

【あらすじ】
現代から転生してきた元ごく普通の男・現女が、危険から逃れようとして別の危険に巻き込まれる物語。世界と世界が交差するとき、剥離（ものがたり）は始まる――のか？／小豆の過去編↓　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４２３６ｔ／

01

皆さんは転生とか、そういったものを信じるタイプの人間だろうか？

私は信じる。だって私、いわゆる転生者だし。

皆さんは異世界とか、そういったものを信じるタイプの人間だろうか？

私は信じる。だって私、異世界出身だし。

皆さんは神様とか、そういったものを信じるタイプの人間だろうか？

私は信じない。だって神様が本当にいるなら……、

私はきっと、こんな悲惨な運命は辿っていないはずだ。

私の名前は親船小豆。

元男で『とある魔術の禁書目録（インデックス）』愛読者という前世を持つ。学園都市の統括理事会が一人、親船最中の孫娘にして、原作では存在すら語られなかった『剥離要素（エラーポイント）』だ。

そんな私の目標は『平穏に暮らすこと』。

ちなみにその目標は、今のところまったく達成できていない。

＊＊＊

「きりーつ、きをつけー、れーっ！」

キビキビとした少女の号令と共に、クラスの全員が立ち上がり、『無人の教壇』に向かって礼をする。

空は青く、日は高い、夏を感じさせる陽気だ。今日は七月一九日、そう、七月一九日。待ちに待った夏休みの前日である。

礼を終え、今この瞬間から夏休みを謳歌できる資格を持った者たちは、各々の頭の中に描く夏休みの活動計画を友人と語り合う。

そんな彼らを尻目に、私は少な目の持ち物を学生かばんの中に詰めてさっさと帰宅の準備を整えていた。

「はーい、今学期はこれでおしまいなのですよー！　みなさんよい夏休みを送ってくださいねー！ただーし！　上条ちゃんは残ってください！　補習がありますー！」

「だーっ！？　不幸だー！！」

『無人の教壇』から、生徒の喧騒に負けないように強く、しかし教師というにはあまりにも高く、可愛らしすぎる声が届くと同時、私の隣に座っているツンツン頭の少年が悲鳴を上げた。

彼の名は上条当麻。私こと親船小豆のクラスメイトであり、『この世界』の主人公（ヒーロー）。彼は無能力者であると同時に、とんでもない『女垂らし（フラグメイカー）』でもある。

転生してから一六年、主に最中お祖母ちゃんの教育の甲斐あって完全に女性の仕草や口調をマスターした私といえど、趣味嗜好は男性そのもの。

男の人に惚れるというのには大いなる抵抗があるもので、この上条にだけは関わらないようにしようと心に決めていた。

ちなみに、上条のフラグ生成能力には戦慄するものがある。女のほうが彼を毛嫌いしていても、ちょっとした拍子に上条のことが好きになってしまうケースが多々あるのだ。

現に私は、今まで幾多のアンチ上条少女が一瞬にして上条派閥へと“作り変えられる”瞬間を目撃してきた。

つまり、元男だろうがなんだろうが上条にかかっては一瞬にして堕とされる可能性があるということでもある。

「確か……今日の補修って瞬間移動（テレポート）系の能力だったよなー……。はぁー、全然ダメだ、絶対できねー……」

先ほどの小萌先生の死刑（いのこり）宣告に、上条はグダっているようだった。

そこに、私よりもそそくさと帰宅の仕度を整えた彼の友人、金髪グラサンの土御門が通りかかる。

「諦めるんだにゃー、かみやん。っというわけで、俺は一足先に愛しの義妹の許に行くぜ――っ！！」

「待て土御門ーっ!?　ちくしょう……あの薄情者め！　青ピ！　お前だけは……」

机に臥せった状態のまま土御門を掴もうとし、失敗した上条は次に青髪ピアス（本名も知ってたんだが……忘れた）の方へ振り返る。

「いやー、小萌せんせーと二人きりで補習とは胸が高鳴るんやけど

ー、ボク今日はバイトなんやー、ごめんなー」
「青ピ、お前もかーっ！？」

青ピが全然申し訳なさそうな苦笑を浮かべると同時、上条は悲痛な叫び声を上げた。

さて、私のほうも準備は終わったし、さっさと帰宅するか。
今日は待ちに待った高校一年生の夏休み前最後の日。ここを乗り切ってさっさと上条の前から消えてしまえば、上条はインデックスと出会い、その後はめくるめく魔術生活へと飛び込むことになる。
一介の生徒である私の出番は……確か、大覇星祭と、ヴェント襲撃のときくらいだったと思う。今後、私の平穏は確保されたも同然というわけだ。

今後の平穏のことを考え、思わずウキウキしてしまう自分を抑え、迅速かつ正確に鞄を肩にかけて教室を出ようと……、

ガシ。

「……どうしたの？　上条くん」
「親船ぇー、助けてくれぇー」

……。

……と、まあそんな風に行けたら私は今こんな場所にはいないわけで。今私は上条に肩をガシっとつかまれちゃったりしてる。

ちなみに、私、身長は一六五センチ、体重は五五キロ、髪型は黒髪のセミロングを風斬よろしくサイドテールにしている。
私自身は自覚がないのだが、常に目が半分閉じているような無気力そうな表情の為、周りからは大人びているとよく言われる。

そのくせ、乳だけはあまりないという、よく言えばスレンダー、悪く言えば貧乳という残念な体系でもあるのだが、（命の危険から来る）気苦労が多いせいか肩凝りが絶えない。

吹寄から肩凝りに効く学園都市製の健康グッズをよく貸してもらったりしてはいるものの、どうもよくならない。心労が原因だからだろう。

で、何故こんな説明をしているのかというと、私は先ほども言ったとおり若干肩こり気味であり、上条が今つかんでいる風に肩を触られると、ちょうどなんか気持ちいいポイントが揉まれている状態となり、『あんっ』と艶やかな声をあげてしまうという事態が起こる。

くどいようだが私の風貌は大人びていて、大人の女性のようである。そんな大人な女性を艶やかに啼かせた上条は……、

「まぁた女引っ掛けて貴様は――――っ！！」

「ぎゃあああ！？　冤罪だぁーっ！！」

額部発光（シャイニングデコ）こと吹寄制理のアッパーカットを食らい、宙を舞った。

……上条、南無。

さて、現実逃避も済んだので正直に告白しよう。私がさっき述べたモノローグのように、私は順風満帆ではない。

まず、なんだかよく分からないままに転生したと思ったらそこは既に学園都市で、当然のように学園都市で生活する。それはいいのだが、能力開発を受けて能力を発現したらなぜかアレイスターの逆鱗に触れて『直々に』宣戦布告され、捕まったら即死亡という暗部との追いかけっこを演じるアグレッシブ極まりない小学校時代をす

ごし、中学生になったら暗部との追いかけっこも終わったものの、何故かずっと上条の隣の席をキープし続け、嫉妬に狂った女子生徒との逃避行（このころ、私の女に対する幻想は殺された。とんだ幻イマジンブレイカー想殺しである）や上条の巻き起こすさまざまな事件の尻拭いをさせられたり、その上で上条とのフラグを立てないように腐心したりと忙しい中学校時代をすごし、なんとか高校生になってアレイスターから『昔はゴメンネ☆　これからは殺そうとしたりはしないよ！』と『直々に』謝罪を受けて、これでやっと平穏な生活ができる……と思っていたら最中お祖母ちゃんの政敵を名乗る組織から暗殺されそうになり、お祖母ちゃんの助けもあって他の暗部を味方につけたと思ったら今度はそれが原因で大規模な暗部組織同士の抗争が起きてしまったり、尚且つなぜかそれが私の所有権を巡って起こっていることになって便乗犯が現れいよいよ収拾がつかなくなり、それでも不用意に上条に助けを求めたら上条が死ぬか、全部すっきり解決して私が上条に惚れるという最悪の二択なので勝手に絡んでこようとする上条をなんとか宥め賺して誤魔化してフォローするという二重生活を送り、アレイスターの助け（これは今にして思えばの推測なのだが）もあってその騒動が最近やっと収束したところなのだ。

そんな平穏とは程遠い、文章にしたら間違いなく破綻する（というか破綻している）生活、それが私の日常。

だが、このままではいけないのだ！

私は平穏が好きだ。

一番好きな言葉が平穏、二番目が平和、三番目が安全というくらい——それこそ学園都市統括理事会の潮岸とかいう全身アーマージジイに勝るとも劣らないくらい平穏な生活が好きだ。

その平穏が、せっかく最近暗殺未遂もなくなってやっときた平和

な生活が、これからの上条とつるむとガラガラと崩れ落ちてしまう!!!

それはいけない。絶対的にマズイ。私のこれからのためにも、一人でなんでもできる上条とは決別せねばならないのだ!!!

「ぐ、ぐふう……吹寄の奴、思い切り殴り飛ばしやがって……。た、頼む親船ぇ」

「ごめんなさい上条くん、私もこれから行くところが……」

「頼むぅぅぅぅ親船ぇぇぇぇぇ!!　いや親船様!　お願いしますううううう!!」

「……っていうかそもそも、上条くんはどうして私にお願いなんか？」

中学三年間＋高校に入ってからの数ヶ月、上条の隣の席にいる私が言うべきことではないが、私と上条はびっくりするぐらい親しくない。仲が悪いわけじゃないが、親しいわけでもないのだ。

学校での会話は上条から話しかけられたときに数言くらいだし、普段は朝に『おはよう』というくらい。そんな上条が私に縋り付くなんて、普通に考えておかしいのだが……。

まさかフラグ建立の前兆か？　注意せねば。

「確か親船の能力って瞬間移動（テレポート）系だろ？」

「いや……正確には一一次元を演算することで空間に時空の穴を生み出すだけで、移動とかはできないんだけど……」

上条に言われて私は得心が行った。そう、私の能力は……簡単に言うと、なんでも『しまっちゃう』ことのできる穴を出す能力。

まあ、これだけだとショボイ能力なわけなんだが、この能力にも色々裏があるわけで……。いや、これは今のところ詳しくは説明しないでおこう。それどころじゃないし。

「それでも同じようなもんだろ、時空の穴も一一次元理論とか利用して開けてるんだろうし」

上条にしては珍しく真理を突いた発言だ。

私の扱う『ダークホール』（漢字を当てると『割裂空洞（ダークホール）』）は、空間を一一次元に置き換えて、通常は認識できない『世界そのもの』を引き裂くことで、次元の狭間とでも呼べる『穴』を生み出すことができる。

同じように『瞬間移動（テレポート）』も自身の存在を一一次元で計算し座標移動するだけで、フィクションにあるようなテレポートとは毛色が違うのは皆が知るとおりだ。

そして私は、同じ一一次元計算を扱うという共通点から、この『瞬間移動（テレポート）』に関しても厳密な意味で使用はできないが理論は分かっていた。

「うー……それを言われるとそうなんだけど……」

痛いところを突かれたといっても、普通に断れば良いのだが……このまま拘泥してもラッキースケベが勃発する可能性があるので折れておくか。

『いーやーだー！』→『たのむぅー！』→どさっ→胸タッチ……なんて光景が目に浮かぶようだ。

そんなことをされたら確実にフラグが立つ。親船ＥＮＤまで迎えさせる自信がある。冗談じゃない。

「分かったよ、でも小萌先生にダメっていわれたらダメだよ？」

「ありがとうございます小豆様あああああ！！」

「お、親船でいいって……」

正直、小豆という名前はあまり好きじゃない。
素甘や最中みたいなモロ和菓子な名前じゃないだけまだマシなんだが、現実世界の感性から言ったら相当キツイネーミングセンスだろう。なんで上条さんちみたいな普通のネーミングができないんだ？

「上条ちゃん、上条ちゃーん！！　さっきから呼んでるのに反応しないとは何事ですかー！？　親船ちゃんも親船ちゃんです！　上条ちゃんはこれから補習なのですよ！　補習にお手伝いさんが付くとは前代未聞なのですよ！！」
「でも、上条さんは『瞬間移動（テレポート）』をまったく使えませんのですよ？　一一次元の計算なんざサッパリのパーだし。小萌先生だって一一次元の計算に詳しい親船が居たほうが補習楽じゃないかなと上条さんは愚考する次第ですが！」
「う……」

『無人の教壇』……もとい、その先にいる小萌先生の苦言に、上条は必死こいて弁解する。
この感じ……今の上条は戦闘中並みに脳味噌を回転させてるな。通常の上条がここまで二枚舌使いこなせるわけないし……。

「そ、そういうことなら、仕方ないですねー……。特別ですよー？」
「やった！　ありがとう小萌先生、親船！」

ま、今日だけなら別に良いだろう。

＊＊＊

「真に、真に申し訳ありませんでした……」
「あ、上条くん顔上げていいよ？　私気にしてないし……」

あんなに青かった空はいつの間にか赤いどころか紫色に染まっている。

私は無様にも土下座を敢行する上条の肩に手を置き、引きつった頬で無理やり笑みを浮かべた。

結局小萌先生の愛と情熱の補習授業は日が没するまで続いていた。いくら理論を教え込んでも、やっぱり一朝一夕じゃどうにもならず、上条が『瞬間移動（テレポート）』を発現することはなかった。

まあ、幻想殺しがあるって知ってるし上条に他の異能を扱うのは不可能だろうな。そんなことより上条には格闘を教えるべきだ。

これから魔術師と戦うっていうのに、一介の高校生レベルの能力じゃ駄目だろう。生兵法は怪我の元というけど、喧嘩殺法くらい覚えて欲しい。

「いや、本当にゴメン。あとありがとう。今日はもう暗いし、上条さんが晩飯おごってあげるアーンド送っていきますよー」
「気にしなくてもいいのに……。それに、上条くんこそもう遅いし悪いよ」

冗談じゃない。今日は夏休み前日、原作が始まる日である。確か、原作が始まって最初に起きた事件といえば、上条が御坂美琴に一晩中追い回されるアレだ。私まで巻き添えくらいたくない。

「忘れたのか？　今日は七月一九日、つまり夏休み前日だ！　心配はご無用のことですよー」
「いやでも、ご飯まで奢ってもらっちゃ悪いよ……。そこまでするようなことしてないし」
「いやいや、結局俺のせいでこんなに遅くなっちまったんだし、さ。何か礼させてくれよ」

押し問答である。
このまま拘泥しても『奢る！』→『いーやーだー！』→ばさっ→裸を見られる……な展開が目に見えている。
そんなことをされたら確実にフラグが立つ。親船ＥＮＤまで迎えさせる自信がある。冗談じゃない。

むやみにフラグを立てるのは嫌だが……まあよく考えたらどうせ上条は記憶喪失になるから、ある程度フラグが立っても構うまい。
それに、上条が女を連れてたら御坂だってそこまで強くは出ないだろう。

「分かった。良いよ。でもその前に家の人に連絡しなきゃ」
「そっか、親船んちって家族が学園都市にいるんだもんな」

とはいっても、両親は研究やら仕事でいないから、いつもお祖母ちゃんしかいないけどね。統括理事会の一人で忙しいのにいつも家にいるのは、私のためなんだろうか……？

『今日、友達とご飯食べて帰るから遅くなるね。ご飯はいらないよ』

と、お祖母ちゃんにメールを送り、鞄を背負って先に扉を開けようとした上条を追おうとして……待っていたかのように返信が返っ

て来た。

……こういうのってお祖母ちゃんは機械に疎いとかが普通だと思うんだけど。学園都市の統括理事会の一人に言っても無駄か。

『了解しました。ところで友達というのは隣の男の子ですか？　ご飯はいらないと言っていましたが、赤飯を炊いて待っていますね』

……ツッコミどころ満載の返信だが、とりあえずフラグ立てるような返信すんじゃねえとツッコんでおく。

っていうか、どうして私の隣にいるのが男だって分かったんだ？

あれか？　滞空回線（アンダーライン）か？　滞空回線（アンダーライン）なのか？　ここまでして御坂と遭遇したら死んでも死にきれないな……。

＊＊＊

「あの子……悪い親船、ちょっとここで待っててくれ」

「あ、上条くん……」

死んでも死に切れなかった。

ファミレスに行ったら、案の定御坂絡まれてるし。っていうか上条の登場が原作より遅れてるっていうのにどうして原作どおりになる？

確かあの『絡まれてる』ってのは幻想御手（レベルアッパー）の聞き込みだったような。本来ならそれだけ長くなったと言うことか。あれか、世界の修正力もといアレイスターのプラン修正か。

あいつが元凶なら納得が行く不思議。

でもこのままだと色々アレだよなー。一晩中追い回されて停電は私もイヤだしー。適当なところで打って出て、御坂の怒りを鎮めるか。

などと思っていると、既に不良が上条をにらみつけ始めている。上条……南無。原作と違い、私がいるから上条は食い逃げ呼ばわりされないのが唯一の救いだな。

それを見越して注文した私は、追い回される上条を見送りながら上条の分まで料理を平らげる。

苦瓜（ゴーヤ）と蝸牛（エスカルゴ）の地獄ラザニアは私の趣味には合わないので、それとなく回避させた。

たびたび思うが、よくカタツムリなんて食べられるよな。

「……けぷ。それじゃ、そろそろ上条のところに行こうかな」

詳しい位置は分からないが、騒がしいところに行けば会えるだろう。

＊＊＊

ビリビリビリ！

夜の鉄橋に紫電が迸る。黒い空に青い稲妻のコントラストは、どこぞのテーマパークのイベントのようで結構綺麗だった。……なーんて考えてる場合じゃない。

既に上条と御坂は交戦しているようだった。……さっさと止めに入ろうか。無闇に停電を誘発しては最中お祖母ちゃんに悪いし。

「だからアンタは――――！！！」

「すとーっぷ。貴方、常盤台中の御坂さんだよね？　超能力者（レベル5）が無能力者（レベル0）に攻撃ってちょーっと大人気ないかなー？」

上条の眼前に飛ばされた電撃を『割裂空洞（ダークホール）』で防ぎ、御坂と上条の間に躍り出る。

御坂は額に青筋を立てて鼻息荒くこちらを睨みつけているが、ツンデレからくるものだと分かっていれば可愛らしいものだ。

「アンタ誰？　コイツの何なのよ！？　今取り込み中だから邪魔しない、」

「『ただの』クラスメイトだけど？」

ここで『彼女でーす！』と言って虚を突いて逃走も考えたのだが、今後の上条と御坂の関係に亀裂が走りそうなのでやめておく。

『ただの』と強調することで、私が没個性的な上条の取り巻きの一人だと認識させることもできるだろう。

上条の取り巻きだと思われるのはそこはかとなくプライドが傷つくわけだが、まあ仕方がない。

「だったらアンタさっさとどかないと痛い目、」
「見せられるのはいやだからさっさと退散するね！　上条君付きだけどー！」
「えっ、ちょ、ま」

このままみすみす停電を誘発させても面白くない。正史の流れを変えてしまうことになるが、大筋は変化しないだろう。精精上条の不幸が少しだけ少なくなる程度だ。

＊＊＊

そんなこんなで私の家（親船家の家だけあって、豪邸だ）に到着した。御坂はというと、私と言うイレギュラーがあったせいか、後を追ってくることはなかった。

というよりは、立ち竦んでいるようだった。もしかして、私が上条の彼女だと勘違いしたとか？　ひええ、それは困る。

幻想御手（レベルアッパー）事件にちょいカスりしてついでに誤解を解こうか……。

いや、リスクが高いな。

まあ、これは気にするほどのことでもあるまい。御坂が上条に対してちょっと距離を置く可能性もあるが。

だが、アレイスターのプラン修正もあるから絶対能力進化計画（レベル6シフト）で上条の介入は決定事項。

となれば、御坂が上条に対し好意を抱くのも決定事項だから、少々の距離は誤差の範囲で目を瞑れる筈。

今後のことを考えつつ、上条の様子を見ようと視線を上に上げて確認してみる。すると上条のほうも私のほうを見ていたところだったようで、ぴったりと目が合ってしまいちょっと気まずくて目を背ける。

「ホント、何から何までありがとな、親船」

上条が私の方へ目を合わせないままに口を開いた。

が、礼を言うときは相手の目を見て話すべきだと思う。まあ、気まずいのは分からないでもないけど。

「いや、いいんだよ。それよりも彼女、御坂さん……だよね？　大変かもしれないけど、仲良くしてあげてね」

「ん、俺はあんまりお近づきになりたくないんだが……。でもどうして親船が？」

上条は私の言葉を聞いて不思議そうにこちらを振り返った。

いや、御坂のアレがツンデレだって分かってる立場からしてみたら、ねぇ……。

それに、御坂が上条と疎遠になったら、主に一方通行戦や第三次世界大戦で原作と違う展開になってしまうかもしれないし。

「上条くんは少し、女の子の扱い方を学ぶべきかもねー？」

「え？　それどういう意味？」

ふっふっふ、分かっていたがな。上条に『こういうこと』を言っても、フィルターがかかったかのように伝わらないということくらい。まあ、ここで扱い方を学ばれても困るし、ここは適当にはぐらかしておく。

「それじゃ、ここまでで。上条くん、エスコートありがとね。お礼に夏休み、何か困ったことがあったら連絡していいから」

「……ホント、何から何までありがとな、親船」

夕食を奢る約束が全然果たせてないことを黙ってるのは私の優しさだ。どうせ、もう『この』上条と会うことはもうあるまい。

これは私から彼への、最後の貸しってことにしておこう。……なんか今生の別れだと思うとセンチな気分になるな。

そういえば三年強も隣の席だったんだし、それなりに愛着は沸いてるはずだしな。まあ、簡単に吹っ切れるレベルだが。

上条はというと、私の優しさに思わず涙ぐんでいるようだった。そういえば、彼の周りの女の子は揃いも揃ってアグレッシブだったような……。南無。

「じゃあね、上条くん。連絡楽しみにしてるよ～、なんちゃって」

あはは、と笑いながら自宅へ帰っていく。お祖母ちゃんへの連絡は済ませてあるから、多分家で起きてる人は誰もいないはず。

ジャラジャラとポケットの中にある鍵束から家の玄関の鍵を探り出し、取り出す。一見誰もいないようだが、実際は物陰に何人もの護衛（ボディガード）がいるのだ。防犯警備は万全である。

＊＊＊

私は、自室のベッドの上に寝転びながら考える。

それにしても、今日は少し面倒くさかったが有意義な日々だった。御坂の暴走を抑えることで翌日起こるはずだった停電も起こってないし、上条ともフラグが立たないまま夏休みに行けた。

このまま行けば学園都市が攻められる何回かのイベントさえ回避すれば私は晴れて自由の身だ。

私が最後に読んだ二二巻以降のイベントが気になるところだが……学園都市が壊滅するようなイベントはないと思いたい。

っていうか、アレイスターはおそらくローラよりも上手（うわて）だから、学園都市が攻められるような事態、そもそも起こらないだろう。

にしても、明日何しよっかなー、夏休みは暇だからなー、宿題やりながら、幻想御手（レベルアッパー）事件の確認でもしてよっかな？

01（後書き）

・このＳＳは二二巻までに開示された原作の情報を元にプロットを立てているので、
　新約以降の設定とは若干またはかなり食い違う部分が出る可能性があります。
・本文中にいくつか『違和感を感じる点』がありますが、そのうちいくつかは故意である可能性があります。
　そういった箇所だった場合は指摘を頂いてもスルーする場合がありますので予めご了承ください。
・また、故意であってもそれが重要な伏線になっていない場合もありますので、その場合も重ねてご了承ください。

三月二八日修正
七月二二日修正
八月一三日修正

02

「学園都市の園～は～遊園地～の園～♪」

夏の空の下、私は上機嫌で街を闊歩していた。上条の束縛から逃れて、私は晴れて平穏を手にしたのだ。

暗殺未遂だって早々起こるようなものじゃないから、あとは適当に原作の事件から距離を取りつつ、最中お祖母ちゃんの助力を受けてそれなりのポジションでのんびりしてれば、上条が適当にアレイスターその他をそげぶしてくれることは確定的に明らかなので、私の心労はほぼゼロと言える。

薄緑系の丈の短いワンピースの下に足のシルエットが分かりやすいジーンズ、ワンピースと同じ薄緑系の上着を羽織って茶色い革のパンプスを履いた私は、極限までとまではいかなくともかなり表情を緩めていた。

それは、油断しているとも言う。

そんな風に、油断していたのが間違いだったのだろう。というかそもそも、私だけが『特別』っていう考え方自体、間違ってるよな……。

＊＊＊

「親船小豆と見受ける」

公園でクレープを食べながらのほほんと日和（ひよ）っていると、ガタイの良いお兄さんが私の目の前に現れた。

私は、あまりに唐突な出来事に口の端に生クリームをつけたまま男のことをぽけーっと眺めてしまった。

……学生服を着てるから、ガタイはいいもののどうやら能力者のようだ。ちなみに、私にこんな堅っ苦しい口調で話しかけてくる奴は大抵研究者か暗殺者である。

学園都市の研究者に学生はほとんどいないので、十中八九暗殺者と見て間違いないだろう。

はぁ……。こないだの暗殺未遂を乗り越えたからもうしばらくは暗殺もないだろうと思っていたが、どうやら楽観しすぎだったようだ。

夏休みなんだから、暗殺者も休めばいいのに……白昼堂々襲ってくるとか、もう暗殺者の鑑過ぎて泣けてくるぞ。

「……何者かな？　目的は私の命？」

だが、暗殺者としては三流もいいところだ。

まず、私の周囲には何人もの護衛（ボディガード）がいる。すぐにでも銃殺されないところを見ると何らかの対策を練ってるのだろうが、それにしたって計画性がなさ過ぎる。

そもそも、暗殺するのならば『護衛（ボディガード）に妨害されないように』対策を練るのではなく、『護衛（ボディガード）に襲撃を悟られないように』対策を練る

のが常識だ。
その点、彼は三流でさえないと言えるだろう。

このことから、彼が暗部の人間であるという可能性は排除される。
大方、チンピラに雇われて私を人質に金を取ろうというところだろうか。
暗部の人間ならともかく、ただのチンピラに襲われるのは何気に初体験だが、そこまで怖いとは思わなかった。当然か。今まで命のやり取りをしてたんだし。

……この程度なら、私でも立ち回れるか……？

「――『割裂空洞（ダークホール）』――――！！」

「待て！　俺はあなたに危害を加えるつもりはない！　あなたの『同郷』の徒だ！」

――――ッ！！？　『同郷』？　同郷って……ハッ！　まさか……コイツ……！　『同郷』って、まさか『アレ』を意味しているのか？　アイツは『アレ』ということなのか？

コイツ、取り返しのつかない真似を……。

『同郷』、それは私と生まれが同じとか、そういう意味じゃないだろう。『別世界で生まれ、この地に転生してきた』……そういうことを、意味している。
私は原作ではいなかった存在だし、原作を知るものが私の存在を

知れば、ちょっと頭が回る奴なら『親船の孫娘なら原作で紹介されないわけがないだろう』と気がつき、連鎖的に私が転生者であることに気がつく。

ナチュラルに日本語を喋っている点で、私の前世での生まれが日本だということも想像できるだろうしな。

そこまではこいつが『同郷の人間である』と告白した時点ですぐに思い至った。しかし、それを『口にする』という馬鹿げた行為。これは度し難かった。

ああ、ムカつく。ムカつくとも。この街には『滞空回線（アンダーライン）』という、ナノマシンによる偵察回線が存在する。

滞空回線（アンダーライン）は街のいたるところに存在し、ほぼすべての場所の情報を感知している。

当然、一度にすべての情報を見聞きされるわけではないと思うが、最初に説明したとおり私はアレイスターから命を狙われていたことがある。

『あの』アレイスターが、殺し損ねている人間のことをノーマーク、なんて考えられない。つまり、十中八九この会話は筒抜けというわけだ。

そして、アレイスターならば『同郷』という言葉から、『私が並行世界出身である』ということにも気づけるはず。

無論、確証を与えるわけではないが、アレイスターにとっては『可能性』であっても与えたくはなかった。アレイスターの計画（プラン）の駒は既に完成しているのだ。

原作で浜面が不用だったように、後付けの私は不用な存在。この能力だけで始末されそうになったのに、この上並行世界出身などという不確定要素が加われば、今度こそ本当に私を殺しに来るだろう。それも、暗部組織をよこすなんて遠回りじゃなく、フィアンマにやったみたいに直接ドゴンと。そんなことやられたら確実に死ねる。

「『割裂空洞（ダークホール）』、か……。底知れぬ能力だな。俺の『空力使い（エアロハンド）』と違って珍しい」

　あああもうムカつく！　なんでコイツ余裕ぶっこけるわけ？　今コイツ完璧にアレイスターに殺される原因作ってるんだぞ？　そうでなくても、お前初対面のくせに私に突撃して、尚且つ護衛の攻撃を阻止するなんて意味の分からない行動とってるから、どっちにしても殺されるんだぞ？　何でそんなに余裕ぶっこけるわけ？　危機管理能力ないの？　死ぬの？　ああ、死ぬのか。

「まさかあの親船の家に生まれた者がいるとは思わなかったが。あなたに頼みがある。聞いてくれないか？」

　頼み……？　なんだろ？　まあ、もうアレイスター直々に襲ってくることは確定事項だから別にいいけどなー。

　こうなれば学園都市から逃げ去ってしまおうか……？　いや、出来るか？　……。

　うーん、暗部の大抗争を早めに起こして、一方通行（アクセラレータ）の絶対能力進化（レベル6シフト）計画の中止やらと併発させてその機会に乗じて逃げる？

　いや、一方通行（アクセラレータ）の騒動は確かに普通の研究員からしたら寝耳に水な出来事だったが、アレイスターにとっては計画通りだったんだ。

　それに、暗部の大抗争は早めに起こそうとして起こせるモンなんだろうか……？

　『スクール』は遅かれ早かれ事を起こすつもりだったみたいだし、最中お祖母ちゃん以上に警備の薄い統括理事会役員を作り出し、『アイテム』の人員による暗殺要因の殺害を未然に防ぐことが出来れば、とりあえずクーデターは起こさせることは可能だろう。

問題は『グループ』に一方通行（アクセラレータ）と結標と海原がいないことくらいか。……そういえば、土御門も一方通行（アクセラレータ）のお目付け的な役割だったんだったか？

ということは、『グループ』がそもそも存在しない、ということになるな。

あそこまでの混乱は『グループ』他の暗部組織の力量が均衡していたからこそ起こりえたことだが……、今回の場合、『グループ』の戦力は７０％以上減、『アイテム』は私が何とかして動かせなくするから、学園都市側の暗部組織はほぼゼロとなる。

……うわぁ、実行したらそこはかとなくアレイスターに恨まれそうだなぁ～……。だが、やらなくてもどっちみち消されるか。

「俺は他の何人かとグループを組んでいる。活動内容は『原作の改変』だ。『原作の改変』で、世界の情勢を上手く制御できれば、死亡フラグどころか億万長者だって夢じゃない。どうだ？　俺たちの仲間にならないか？」

私がそんな風に生きる為に策を弄そうと準備している間に、こいつはついに確定的なことを言ってしまった。そういえば、仮にクーデターを起こすとして、最低でも五日ほど時間は必要だろう。

……その期間、アレイスターが私のことを見逃してくれるだろうか……？

……ないな。

あ、そうだ！！

今この段階で、第七学区には上条たちがいる！　夏休み前の話と

か聞いて、一〇三〇〇〇冊の記憶の矛盾を指摘して、さっさと自動書記潰（ヨハネのペン）してイギリス清教に匿ってもらう、というのはどうだろうか？

ステイルはじめ神裂も何だかんだ言ってお人よしだから、『学園都市の全てを敵に回し、それでもなおまったく見ず知らずの他人（インデックス）を助けようとした少女』を演出すれば結構簡単に懐柔できるに違いない。

これぱっかりは楽観的ではないと断言できる。彼らにとってインデックスの存在はそれほどデカイはず。

必要悪の教会（ネセサリウス）はローマ正教だろうと関係なく受け入れてくれるような場所だし、ローラに命を握られるのは怖いが彼女も策士だから、私と言う貴重な学園都市の存在をそう簡単に使い潰すような真似はしないはずだ。

学園都市も、逃げられたという面子を潰すようなことは口外できないから、内々に始末するか、公式に留学生として認めるかするだろうが、前者はローラの手腕にもよるがありえないだろう。

仮にも貴重な学園都市の能力者のサンプル。みすみす殺害を見逃すようなことも、学園都市の追っ手に気づかないというような不始末も起こすとは思えない。

うん、これはイケるな。即時展開が可能かつ限りなく安全度も高い。

なまじ『同盟しているものの敵対勢力』という裏事情があるだけに、学園都市内部よりも安全だ。

「……親船小豆？　どうした？」

「……何を言ってるのか分からないけど、何かを改変して成功したいと考えているんだね？」

さて、阿呆が何か言っていたが、私にとってはもう知ったこっちゃない。正直こいつの言葉も思考の片手間でよく覚えてない。

学園都市で最中お祖母ちゃんと幸せを享受できないのは残念だが、上条がどうせアレイスターをそげぶしてくれるだろうからそれまでの辛抱だ。

ローラはおそらくラスボスだろうアレイスターよりも先にそげぶされてくれるだろうから、イギリス清教での安全はさらに先に確保できるし。

「私が最中お祖母ちゃんの孫だから言ってるの？　呆れた人だね……。世界の情勢を制御？　馬鹿馬鹿しい！　私は学園都市統括理事会親船最中の孫娘！　世界を手中に収めようなんて夢想家とはお付き合いしたくないね！」

「そうか……」

とりあえず、聞いていたうろ覚えのないようにプラスして何言われてても当たり障りのないような建前を付け加えておく。

どうせアレイスターにとっては噴飯モノな弁解だろうし、正直こんな台詞を考えることに頭を使いたくはない。それよりも先ほどの計画の細かいところを詰めていかなくては。

早くても今夜には暗部襲撃が起こるだろうし、長居はしたくない。

阿呆は、そんな私の上辺を見て軽く鼻を鳴らして笑い、幼い子供を諭すような目でこちらを見てきた。

「ところで気が立っているようだな。俺がこんなところでいきなり重要機密を喋ったからか？　安心してほしい。ここで話した内容が漏れる事はない。滞空回線（アンダーライン）は爆風や強風でやられてしまうほど脆いのだろう？」

――――――――――――――――なん、……だと？

男が右手を掲げ、その拳を握り締めた。同時に、私は呼吸が苦しくなる。

「……何、を……？」

「話を聞いていなかったのか？　俺の能力は空力使い（エアロハンド）。触れたものから空気を噴出させる『空力使い（エアロハンド）』だが、その対象の大きさに制限はない。制限があるのは、空気を一度に吹き出させることの出来る量、だ。当然、この地面だって対象にすることが出来る」

男は誇らしげに両手を広げ、言葉を続けた。地面を……対象？　上昇気流を起こしている、ということか……？

「『妨害気流（ウィンドディフェンス）』を知っているだろう？　原理はそれとさして変わらない。ただ、気流を絶え間なく発動することで能力範囲内に局地的な低気圧を生み出し、内部にいる人間の運動能力を低下、なおかつ射程限界に強力な下降気流が起こるように計算して風力を調整することで、空気の壁を生み出す。ちなみに、『滞空回線（アンダーライン）』はこの気流に全て乗せて、例外なく地面にたたきつけて破壊した。いわばこの空間は俺の独壇場（ライジングゾーン）。人呼んで『空間支配』だ」

なるほど、先ほどから一向に護衛（ボディガード）がこの男に攻撃しないのは、この妨害気流（ウィンドディフェンス）もどきの為か。

「婚后とやらは触れたところから空気を噴出させていたが、そんな派手な真似をせずとも、こういう風に話を伸ばして時間を稼げば、無類の力を誇るのだ。当然、呼吸のための酸素がなくなるのだから反射だろうと無駄無駄！　強能力（レベル3）で一方通行（アクセラレータ）を倒しうる術を持つのは俺くらいのものだろうな！」

男はそう言って高笑いした。私は立つ事もままならなくなる。男は勝利を確信した笑みを浮かべているが、私もまた歓喜を表情に出すことを抑えるのに苦労した。

……ああ、本当によかった。今まで長～い思考を続けてきたが、思考しながら『これマジで魔術サイド行きなのか？』なんて恐怖していたのだ。

先ほどはいい点しか述べていなかったが、原作で主な事件がほぼ魔術サイドであることから見ても分かるとおり、魔術サイドは科学サイド（裏の世界除く）とは比べ物にならないほど死亡フラグが転がっている。

イギリス清教だけに限ってもカーテナのクーデターがあるし、イギリス清教所属になれば私も任務かなんかに出なければならない。むしろ学園都市関係のことに関しては何度も駆り出されるだろう。

それだけ上条との接触も増え、フラグを立てられる危険性が高まり、同時に死亡フラグと言う名のフラグが立つ可能性も上がってしまうわけだ。それでも死亡確定よりは格段にマシだったが。

しかし、この馬鹿のとんでもないウルトラシーのおかげでなんとか首の皮一枚つながったようだ。

いや、それでも滞空回線（アンダーライン）が蹴散らされたということで、なんらかの秘密があることを悟られただろうが、アレイスターに『並行世界出身』であることを悟られなかっただけでもまだマシというものだ。

「さあ、もう勝ち目がないことは分かったろう？　おとなしく俺に従えば、痛い目は見せない。約束しよう」

馬鹿（仮名）はそういって私に対して勝ち誇った笑みを浮かべた。私はうずくまっていて、相手は立ち踏ん反り返っているのだから、

勝ち誇っても当然だが……ド素人もいいところだな。私ならば、この時点で相手の頭に銃弾の一発でも撃たないと安心さえできない。まあ、私は表の人間だから拳銃なんて持ってないが。

つまり、普通に考えて『割裂空洞（ダークホール）』しか持たない私に残された選択は降参しかない。……いや、正直に言うと隠し玉はあるし、準備もしてる。だが、それはほいほい使っていいものでもないし、できれば使いたくない。

となると“このままだと”一旦こいつに従ってみるしかないのだが……。

（冗談だろう。表面上でもしたがってみろ。私のことだ、きっと何か不幸な偶然が重なって本当に反逆したことになるぞ）

主にアレイスターの陰謀で。

かといって、こいつの『空間支配（ライジングゾーン）』がある限り、無策で食い下がっても痛い目を見るだけだろう。命が懸かっているのだからある程度痛い目見ても気にしないが、こんな三下程度にただ痛い目見せられるのは癪だ。何より割りに合わなすぎる。

……どうやら、出し惜しみはできないようだな。どうやら『空間支配（グゾーン）』とやらで人払いはしているようだし……護衛（ボディガード）には相応のことは知られている。こいつの長話のおかげでなんとか下準備も終わったし……。

やるか。

０２（後書き）

・小豆の☆への評価は彼女が襲われた経験も込みなので、客観的評価ではないです。

三月二八日修正
七月二二日修正
八月一三日修正
九月二五日修正

03

side『空間支配（ライジングゾーン）』

俺がこの世界……とある魔術の禁書目録（インデックス）の世界で目覚めたのは今から三年前。

この肉体が一五歳の頃だった。最初は意味が分からなかったが……直前の記憶――トラックが目の前に迫る映像――から、自分が死んでこの身体に『憑依』したということは理解できた。

その後の俺は現状確認をしてこの世界が禁書の世界であると判断し――未来を知っていることに感謝した。

俺が死ぬ前に出ていた禁書の巻数は一七巻。上条がイギリスへ行くあたりだったか――ここまででも十分だ。

この後何が起こるかはわからないが、原作のメンバー、いわゆる『上条勢力』に上手く食い込み、イギリスあたりでクーデターに加担すれば、アレイスターの手からは逃れることが出来、イギリス騎士派の中でも地位を築くことが出来るだろう。

幸い、転生者は自分だけではなく、他にも何人か存在していた。みな、なんらかの形で原作に介入することを望んでおり、全員で協力することが決定した。

しかし、そのためにはまず上条と接点を持つ必要があった。

俺は空力使い（エアロハンド）の強能力（レベル3）だったが、能力も触れたところから空気を噴射させるくらいで、応用などまったく考えたこともないごく一般的な学生だったようで、周囲の評価も『ただの強能力者（レベル3）』だった。

しかし、現実で禁書を読んでいた俺からしてみれば、この空力使(エアロハンド)いも中々応用性のある能力だ。

禁書世界の超能力はかなり体系立ったものがあるようで、メジャーな種類の能力者はマニュアルどおりの運用しかしない傾向があるが……、ものは試しと、色々試してみたところ、やはり俺の考えたとおり空力使(エアロハンド)い、中々強い能力だ。

俺が自分の能力の象徴としている『空間支配(ライジングゾーン)』も、その応用の一つ。地面に触れ、じわじわと効果範囲を広げることで、射程距離を広げてごく小範囲での上昇気流を発生させ、低気圧を生み出す。

同じ志を持つ仲間を見つけ、強力な武器を手に入れた俺は、次に上条の身辺を探してみて――驚愕した。

親船小豆。苗字に聞き覚えがあったので調べてみたが、あの統括理事会の一人、親船最中の孫娘だというではないか！

そんな重要人物が、あの上条当麻の近くに居て、原作で何のタッチもないわけがない。おそらく、彼女は原作にはいない存在だ。『同郷』、そんなことばが脳裏をよぎる。同郷のよしみと彼女を唆し、上条との架け橋になってくれれば……俺はそう考えた。

のだが。

やはり現実はそう上手くはいかないらしい。彼女は、俺が思っていた以上に用心深く、そして堅苦しい性格だった。

「私が最中お祖母ちゃんの孫だから言ってるの？　呆れた人だね……。世界の情勢を制御？　馬鹿馬鹿しい！　私は学園都市統括理事会親船最中の孫娘！　世界を手中に収めようなんて夢想家とはお付き合いしたくないね！」

凛とした調子で俺の提案を切り捨てた少女は、キッと俺を睨みつ

けた。

「そうか……。ところで気が立っているようだな。俺がこんなところでいきなり重要機密を喋ったからか？　安心してほしい。ここで話した内容が漏れる事はない。滞空回線（アンダーライン）は爆風や強風でやられてしまうほど脆いのだろう？」

しかし、俺は冷静に返した。まあ、この彼女の『真面目なフリ』は十中八九演技だろう。

上条がインデックスと遭遇するこの時期に彼と行動を共にしていないというのは、彼女は原作に干渉するつもりがないということ。

彼女が発言どおりの、気丈で正義感に溢れる人間性なら、まずもって有り得ない選択肢だと思う。

とすると、彼女が怒っているようにも見えるほど強大な敵意をむき出しにしているのは、単なるポーズとしての意味だけでなくこちらの不手際を責めていると考えて相違ないだろう。

最初に思い当たるのは滞空回線（アンダーライン）の存在だった。

原作介入……いや、正確には『原作に巻き込まれること』を忌避しているのなら、『原作』などという統括理事会を刺激する内容は確実に禁忌（タブー）であり、絶対に口にしてはいけない内容だと考えているのだろう。それならば、これほどの敵意も納得が行く。

「……！」

思ったとおり、親船小豆は一瞬顔を驚愕の色に染めた。同時に、彼女の呼吸が乱れる。暑さか、それとも息苦しさか、彼女の額には大粒の汗が浮かび上がっていた。

そういえば、気圧攻撃もしていたんだったな。……驚愕はこのためだったか？

「……何、を……？」

「話を聞いていなかったのか？　俺の能力は空力使い（エアロハンド）。触れたものから空気を噴出させる『空力使い（エアロハンド）』だが、その対象の大きさに制限はない。制限があるのは、空気を一度に吹き出させることの出来る量、だ。当然、この地面だって対象にすることが出来る」

親船小豆は俺の言葉を聞き、粗方の能力の推測ができたのか、悔しそうに拳を握り締めていた。

万策尽きた、ということの証明だな。それでも命乞いをしないところは、流石統括理事会ナンバーワンの善人の孫、といったところか。

「『妨害気流（ウィンドディフェンス）』を知っているだろう？　原理はそれとさして変わらない。ただ、気流を絶え間なく発動することで能力範囲内に局地的な低気圧を生み出し、内部にいる人間の運動能力を低下、なおかつ射程限界に強力な下降気流が起こるように計算して風力を調整することで、空気の壁を生み出す。ちなみに、『滞空回線（アンダーライン）』はこの気流に全て乗せて、例外なく地面にたたきつけて破壊した。いわばこの空間は俺の独壇場。人呼んで『空間支配（ライジングゾーン）』だ」

親船小豆は俯いていて、その表情をうかがうことはできないが、俺は構わず能力の説明を続ける。彼女も、自分が敗北した能力くらいは完全に知りたいだろうし、な。

「婚后とやらは触れたところから空気を噴出させていたが、そんな派手な真似をせずとも、こういう風に話を伸ばして時間を稼げば、無類の力を誇るのだ。当然、呼吸のための酸素がなくなるのだから反射だろうと無駄無駄！　強能力（レベル3）で一方通行（アクセラレータ）を倒しうる術を持つのは俺くらいのものだろうな！」

一方通行（アクセラレータ）も、妹達（シスターズ）の電気分解によるオゾン攻撃（正確にはオゾンの生成による酸素不足だが）は喰らっていたようだった。

つまり、普段反射していない『空気』というベクトルの攻撃ならば、彼を倒せる可能性さえある。と、これは関係のない話だが。

『空間支配（ライジングゾーン）』による低気圧攻撃の効果が出た以上、『割裂空洞（ダークホール）』では勝ち目がない。それを教えるために、能力の説明をして戦意を削ぐ。彼女は賢いようだが、所詮は少女だ。

彼女の賢さなら俺が真空による爆断攻撃を行う可能性は考えるだろうし、そうなることは極力避けようと考えるはずだ。これで堕ちたか――――頃合を見て彼女の表情を覗き込んだ俺は、次の瞬間飛びのいた。

瞬間、今まで俺が居た空間が抉れた。余波によってなのか、地面が、まるでそこだけ切り取ったかのように綺麗に、不自然に抉れている。

ゆらり、と少女が緩慢な動きで立ち上がる。その顔に表情はなく、今までの健気で弱弱しい雰囲気など消えうせていた。まるで、幽鬼。俺の脳裏に、そんな言葉がよぎった。しかし理解できないのは、空間を抉った彼女の能力だ。

「な、馬鹿な!?　何だその能力は!?　知らないぞ、確かに書庫（バンク）には『割裂空洞（ダークホール）』しか……」

「私は親船の人間だぞ？　何故その情報が『秘匿された結果』だという可能性を考えなかったんだ？」

いつの間にか、目の前の少女は今までとは比べ物にならないくら

い凄絶で、残酷な笑みを浮べていた。口調も最早今までのどこか平和ボケした友好的なモノではなく、彼女の本性だろう感情のない口調へと変貌している。

俺は確信した。コイツは『統括理事会ナンバーワンの善人の孫』などというチャチなものじゃない。同時に禁書のキャラは大体何かしら口調の特徴があったな、と今更になって思い返す。

「くっ……！？　一体……」

「さあな？　お前に教えるつもりはない。ただ、お前自慢の『空間支配（ライジングゾーン）』とやらはそんなに万能なモノでもないようだったみたいだぞ？　その程度で一方通行（アクセラレータ）を倒せる術を持つなんて、お笑いだな」

にやり、と俺の方に一際大きな笑みを見せた親船小豆は、そのまま俺に背中を見せた。くッ！？　馬鹿な、俺に背を見せることが何を意味するか分かっているのか！？

『空間支配（ライジングゾーン）』の能力下ならばほんの一瞬だけでもゼロ気圧に限りなく近い状態を再現することは難しくない。ゼロ気圧を生み出すことで、物体の内圧によって自ずから爆裂裁断する俺の切り札。

勿論、動く物であれば命中率は五〇パーセント程度だが、あの程度の単調な動きであれば当てる自信はある。何故、こんな自殺行為を……？　だが考えている時間はない。食らわせるのだ、『真空爆断（アブソリュートゼロ）』を。

正直、あれは狙いが定めづらいから最悪殺してしまう可能性もあるのだが……いや、ここで逃がすよりはマシだ。

「喰らえ……『真空爆断（アブソリュートゼロ）』！！」

「それ、いちいち命名しなくても『空間支配（ライジングゾーン）』でいいよな？　厨二

病だったりするのか？」

グッ！　と拳を握り締め、彼女の右肩の付け根あたりの気圧を『ゼロ』にするよう意識したが、何故か上手くいかない。もう一度能力を行使するが、彼女の周りの気圧を致命的に下げる前に能力が霧散してしまう。

「馬鹿な、どういう……！？」

「最後に良いことを教えてやる」

そういうと、親船小豆はこちらを少しだけ振り返った。その表情は、先ほどの凄絶な笑みなどかけらもない、『純粋な少女』そのものだった。

「話を伸ばして時間稼ぎしていたのは、あなただけじゃなかったんだよ？」

は？

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

『それはどういう意味だ？』、と言うことは叶わなかった。そう、永遠に――。

と、言ったところだろうか。私が再度踵を返した直後、背後で何かが爆散する音が聞こえたが、振り向きたくはない。

『空間支配（ライジングゾーン）』が銃撃された音だろう。別に食事ができなくなるとかそういうのではないが、やっぱり気持ち悪いものは気持ち悪い。

それに、頭部が破壊されたのは『空間支配（ライジングゾーン）』の断末魔で大体分かった。頭部破壊が確認できれば問題はない。

頭部破壊が重要な理由だが、それは学園都市では人は死んでも情報源になるからだという他ない。垣根は確かに死んだはずなのに脳みそを回収され、能力を吐き出すだけの機械に成り下がったという。

同様に、こいつも脳さえ残っていれば知識を吐き出すためだけの機械に成り下がったことだろう。そして、それは並行世界からの転生、さらには“原作知識”の露呈を意味し、ひいては私の死亡を決定付ける。それは絶対駄目だ。

……善良な一般市民的にはそれ以前に人間が惨殺されたことに心を痛めるべきだと思うが、そんな甘ったれたことを言ってたら私死ぬような境遇だし。というかもう、ちょっと前の暗部の抗争とかなんとかでそんな良識は失われてしまった気がする。

良心と、冷徹さに上手く折り合いをつけないと手に入れられないなんて、学園都市の平穏というのは大分取得難易度が高いと思う。

さて、ここで私の能力を紹介しておこう。

最初に説明した『割裂空洞（ダークホール）』という能力名、あれは『嘘（ダミー）』だ。

公式には私は『瞬間移動（テレポート）』系統低能力（レベル1）、能力詳細名『割裂空洞（ダークホール）』ということになっている。

『瞬間移動（テレポート）』は能力の種類から大別して学校からつけられた名前、『割裂空洞（ダークホール）』は、能力が一般の『瞬間移動（テレポート）』とあまりにもかけ離れてるから別名つけてくれと研究者から依頼されて、私がつけた名前。ネーミングセンスがないのは気にしてはいけない。

で、この強度（レベル）判断は一一次元座標の演算で空間に亀裂を入れることはできても、瞬間移動（テレポート）ができないが故の判断だが――、……実際、この評価は大間違い。

私の本当の能力は『瞬間移動（テレポート）』系統超能力（レベル5）、能力詳細名『並行結合（シンクロニズム）』。

世界と言うのは一一次元演算で全部まるっと説明することが出来、その一一次元のスケールの世界に亀裂を入れることで一一次元の壁を越え、並行世界（禁書の原作世界だった。この世界が原作の世界の並行世界であることの証明だな）と接続するところまでが『割裂空洞（ダークホール）』。

で、この『割裂空洞（ダークホール）』にはどういう原理かは私にも分からないんだが『ＡＩＭ拡散力場を記録する』という性質があって、この性質で記録した拡散力場を私の発する拡散力場に上書きすることで、任意の拡散力場――能力を扱うのが、『並行結合（シンクロニズム）』。

ちなみに、一一次元の世界の外面から並行世界を逆算することで、断片的ながらも並行世界の様子を観測できたりもする。

つまり、早い話が『穴から何でも出せる多才能力（マルチスキル）』というわけだ。

理論上発火能力（パイロキネシス）から一方通行（アクセラレータ）まであらゆる能力を使えるという、トンデモチート能力なのだが、精精異能力（レベル2）から強能力（レベル3）程度の威力までしか出力できず、しかも現物を記録してそれを転写する、という無駄な二工程をはさんでいるせいで演算が面倒くさく、発動までにちょっと時間がかかってしまうとか、拡散力場を放出しても瞬間移動（テレポート）

動とか能力使用そのものの演算が高難易度なモノに関しては安全面で使用できなかったり（もっとも瞬間移動（テレポート）は系統が似てるから使えるが）、未元物質（ダークマター）やら念動砲弾（アタッククラッシュ）やらといったどういう演算してるのか意味不明な能力は使えない、と実用面ではそこまで強い能力じゃない微妙なものである。

私はこれを、『能力複製（AIMトレース）』と呼ぶことにしている。

先ほど地面を抉ったのは、この『能力複製（AIMトレース）』で発動した削岩能力（ロックブレイク）によるハッタリだ。

この削岩能力（ロックブレイク）というのは、鉱石の分子を演算で解析し、適切な力をかけることで分解するというもの。

通常、異能力程度の強度（レベル）ではあそこまで精密な分解の座標指定はできないが、私の場合は一一次元演算による座標指定のスキルがあるから、それを応用してあそこまで精密な座標指定を可能とすることができた。

ちなみにアニメ版超電磁砲（レールガン）で出てきた表層融解（フラックスコート）はこの削岩能力（ロックブレイク）の亜種である。

さらに、この能力は面白いもので、記録した拡散力場を元に逆位相の拡散力場を計算することで、その理論値を求めることが出来、尚且つそれを放出することで流石に完全ではないが能力の効き目や威力を弱めたりすることも出来る。

先ほど『空間支配（ライジングゾーン）』の能力が弱まったり不発になったりしたのは、この逆位相の拡散力場の所為だ。

私はコレを仮に、『能力相殺（AIMキャンセル）』と名付けた。

ちなみに先ほども言ったが、『並行世界』というのは『とある魔術の禁書目録（インデックス）』の原作世界――いわゆる正史だ――。正史の時期を把握するのにも使わせてもらっている。情報収集の点から見るとこれ以上ないほど有益な能力だ。

……が、アレイスターの周辺を覗いて原作の不明点を知ろうとしても何故か霞がかかったように見えないのだ。アレイスターのことだから、異なる次元からの偵察も魔術か何かで無効化しているのだろうか？

とすると、並行世界の存在もアレイスターは認識してる……、つまり、『原作世界』を知っている？　……え、縁起でもないな。だとしたら異分子たる私は即座に抹殺されてるはず。おそらく、偶発的に私の能力を無効化する何かがあるのだろう。

さて、ここまで見ると何だかんだで超能力（レベル5）に相応しいトンデモチート能力じゃないかという諸兄の声が聞こえてくるようだが、そうではない。

『能力複製（AIMトレース）』だって最大で強能力（レベル3）程度だし、『割裂空洞（ダークホール）』から数メートル程度が射程限界で、それ以上は大した威力を持たせることも出来ない。

『能力相殺（AIMキャンセル）』も、相手の拡散力場の系統を正しく見抜いてそれを記録した拡散力場の中から選び出し、さらに選んだ拡散力場を逆算して理論値を求め、求めた拡散力場を私の拡散力場に上書きして能力を放出する、という面倒くさい工程があるからその場で集中して演算しなくてはならないため、激しい運動を伴う戦闘中じゃまずもって使えないという取り回しづらい能力なのだ。

そもそも、それを扱う使用者たる私がド素人というのが最大の問題である。

もちろん、自分の命を狙う人間は確実に殺すつもり、と言う点では素人ではないと自負しているが、これまでの戦闘による経験を鑑みても、私の戦闘的な能力は下の下、ド素人といって相違ない。性格的にも戦闘的にもド素人な現在の上条でも倒せるお手軽レベルだ。

現に、今回だって敵の『空間支配（ライジングゾーン）』を『能力相殺（AIMキャンセル）』で解除して護（ガード）

衛に消させただけで、私一人だったら間違いなく消されていたか、誘拐されてあいつの仲間らしいやつら（精神感応（テレパス）の一人や二人くらいいるだろう）に捕まって洗脳されたり、最悪用が済んだら慰み者に……うっ、自分で言ってて吐き気がしてきた。

……ん？　今私はなんて考えた？

『捕まって洗脳されたり、最悪用が済んだら慰み者に』……いや、その前だ。『あいつの仲間らしいやつら』。

そう！　あいつは『グループを組んでいる』と言っていなかったか！？　それも、あいつの口ぶりからして、おそらく全員転生者……。しかも、全員原作乖離を起こして自分らが甘い汁を啜ろうとしているときたもんだ。

正史から歴史を剥離させる要素、エラーポイント……クソ、洒落で言っていたことが真実になってしまうとはな。

正直に言ってやつら――これからは『剥離要素（エラーポイント）』と呼ぼう――知能レベルは知れている。

正史で起こる危険だけが自分に降りかかる危険だと思い込む程度の思慮深さしかなく、尚且つそれを乗り切れる自信を持てる程度に身の程知らずであり、原作知識を活かそうとできるだけの無謀さを持つ。要するに無理無茶無謀に気付けないアホだ。

極め付けに、アレイスターがその程度の知能レベルの人間を潰すことなど造作もないということに思い至らない計画性のなさ。

……うん、計画の邪魔なんて目指す阿呆をどうしてアレイスターが始末してないのか少し不思議だったが（転生者だということはバレていないにしても、彼らの行動からよからぬ事を企んでいる事くらいバレているだろう）、このくらい馬鹿な集団の集まりならアレ

イスターは『勝手に自滅するだろう』と判断したか、それすらも計画に組み込むつもりなのだろう。

だが、私としては気が気じゃない。

これまでは私も協力者候補と言うことで、拿捕されてもそれなりの待遇を受けることができただろうが、連中のうちの一人を殺してしまったのだから、今度からは拿捕されたら最期、人間以下の扱いが待ってることは明白だ。つまり、絶対に捕まるわけにはいかなくなる。

しかも、アレイスターは私の暗殺をやめたといっても依然として存在を煙たがっているに決まっている。

コイツの『空間支配（ライジングゾーン）』のおかげで転生者だということは判明していなくとも、アレイスターのことだからおそらくこいつらと私が同じ『異常性』を持っていると言うことには感付くはずだ。

ということはつまり、こいつらが襲い掛かってきて、仮に殺したとしても、その脳を使って情報を取り出すに決まっている。

そうなれば、先ほども説明したとおり、私は本格的に死亡確定となってしまう。

つまり、この時点で私は『襲い掛かってきた追っ手を、脳味噌が粉々になった死体にして撃退しなくてはならない』という残酷かつ異常な難易度のミッションを与えられたに等しい状態に陥れられたことになる。

さて、問題です。この状況で私はどうしたらいいでしょう？

一、こちとら超能力者（レベル5）じゃ！　迎え撃ってやるわ！　↓死にます。

二、大丈夫、私親船の人間だし、襲撃とかマジありえないし。↓今回の時点で瓦解している前提です。死にます。

三、か、上条を頼ってみよう！　↓敵を殺させてくれない、フラ

グが立つ、そもそも時期的に無理の三拍子。死にます。

……こ、これは……！！　まさしく八方塞じゃないか……。

どど、どうしよう、どうしよう……。相手は複数、私の能力じゃ勝てるわけないし、かといってあきらめるのは論外……。

『並行結合（シンクロニズム）』って言ったって、要はただの多才能力（マルチスキル）なわけで、使える能力もそれほど強度（レベル）も高いわけじゃない。私一人でこんなレベルの能力者たちを相手取るのは、あまりにも無理がありすぎる。

どうしようもない……、何か、何か策は……、

ん？　待てよ、これなら、あるいは……。

03（後書き）

三月二八日修正
四月八日修正
八月一三日修正

04

「はい、はい。よろしくお願いします」

七月二〇日、自室。私は窓の外の暗闇を眺めながら余所行きの声色で会話していた。手には、学園都市謹製のハイテク携帯電話。

襲撃を受けた日の午後、思考中に集まってきた護衛（ボディガード）に家まで護送された私は、最中お祖母ちゃんに紹介してもらった電話番号に連絡していた。

電話の先から聞こえる声は電話窓口で応対しているような女性のものだった。といっても、まともな仕事をしている人じゃない。私がこうして彼女と電話するに至った経緯を説明しよう。

＊＊＊

あのとき、私はある解決策を考え付いた。私はそもそもド素人である。ならば、複数の敵に対して自分ひとりで立ち向かおうとするのは愚の骨頂。

餅は餅屋、戦闘は戦闘に精通したプロフェッショナルさんにやってもらえばいい。つまり、学園都市に力を借りよう、と思い至ったのだ。

「というわけで、能力者の、それも結構な力量の護衛を頼めたらなーと」
「フム……。で、なんでそれを私に？」
方針を決めた後の私は素早い。でもなければ死ぬ環境に置かれてたから仕方ないんだが。
そこで、早速最中お祖母ちゃんに新たな護衛（ボディガード）をつけることを要求してみた。
「いや、私の近くでこういうことを頼めそうな人、最中お祖母ちゃんしかいなくて……。迷惑だった？　ならいいんだけど、」
「そんなことはありません。ほかならぬ小豆ちゃんのお願いですから、しっかりお祖母ちゃんに任せてください？」
返って来たのはあっさりした了承だった。
私は心の中で謝罪しながら、感謝の言葉をつぶやいた。能力者で護衛（しかも殺したり殺されたりな）といえば、表の人間に頼めるような仕事ではないだろう。十中八九暗部の仕事だ。
最中お祖母ちゃんも一時期はそういうグレーなところに行っていたらしいが、今は違う。私は、私の都合のためにお祖母ちゃんの平穏にヒビを入れようとしているのだ。自分が平穏を愛するだけに、申し訳ないことだと思う。
「あ、出来れば私と同い年くらいの女の子だったらいいな。そんな都合が良いのがあるかも分からないけど」
「お、女の子……。分かりました。一応見ておきますが、期待はしないで下さいね？」

いるんだがな、女の子だけの暗部集団。この時期だったら、『アイテム』が該当する。原作で知ってるからある程度性格も分かるし、同じ性別っていうことで男よりも肩肘張らずにいられるだろうから彼女たちなら色々と楽だろう。

何より戦闘能力の高さが魅力的だ。超能力者（レベル5）の麦のんに、近接戦闘、護衛ならお任せの超絹旗、索敵ならドンと来いのたきつぼ。フレ／ンダは低能力者っぽいかほりがするが、暗部として彼女たちと行動する以上きっとそれなりの力量を持つのだろう。

スクール・グループ・アイテム・メンバー・ブロックの暗部大抗争でフレンダは胴体真っ二つになるし、麦野はターミネーターになるし、滝壺は再起不能になるから期間限定の護衛って感じになっちゃうけど、それまでに剥離要素（エラーポイント）と決着をつければ問題ない。

何せ超能力者（レベル5）一人に大能力者（レベル4）が二人だ。対して、敵は強能力者（レベル3）程度で粋がっていたくらいだから、そこまでレベルの高い奴はいないだろう。

こいつらを味方につければ安心だ。というかオーバーキルでごめんなさいと言いたいレベルである。

これで、一応は磐石かな。学園都市に反旗を翻そうとか考えちゃうような馬鹿とはいえ、多少強くないとそんなこと考えないだろうから、剥離要素（エラーポイント）のやつらの中にも、オリ主最強チート物よろしく激強な奴がいる可能性もあるが、現代日本人で、しかも暗部との関わりもない奴が暗部の、生きるか死ぬかの環境におかれていた集団に勝てるわけがない。

あとは出来たら『アイテム』のメンバーの性格とか丸く出来たら良いな。せっかくだし浜面の心労というか、負担は軽減させてあげたいし……。

＊＊＊

ちなみに、電話で話していたのは『アイテム』の『電話相手』。なんでも、『アイテム』のメンバーと明日にでも会って少し話をしてほしいそうな。

護衛するにあたって、依頼人の人となりや行動パターンを把握しておきたいから一度顔合わせするんだそうだ。私としては上手くすれば四人と仲良くなれるチャンスでもあるわけだから、ぜひともこなしておきたいイベントである。

「あなたが超今回の依頼人でしょうか？」

「ええ。私が依頼人の親船です。あなた方は？」

翌日、七月二一日。私は、開口一番パーカーの少女の質問をうけていた。雲ひとつない晴天、天気“予知”によると気温は三五・六度になるらしいが、私を含めたその場にいる五人は汗一つ流していない。

それもそのはず。私たちは冷房がガンガン効いている第七学区のとあるファミレスにて、私は四人の少女たちと対面しているのだ。私から見て左から麦野、フレンダ、絹旗、滝壺という順番になっている。

ファミレスで集合なのは、剥離要素（エラーポイント）の目をごまかすためという建

前と、彼女たちが普段たまっている場所だからという裏事情から。
私は普段と違って敬語使ってるのに相手は自然体なこととといい、どっちが依頼主（クライアント）か分からないな……と思う次第である。

ちなみに、「あなた方は？」と聞いているものの、彼女たちの素性はすでに資料でも確認している。これは自己紹介と言うか、一応の通過儀礼のようなものだ。

「親船……」

フレンダが私の名前を聞いてボソリとつぶやく。彼女も依頼人が親船だということは分かっていたはずだが、それでも口に出てしまうくらい親船のネームバリューは凄いのだろうか？

「フレンダ。……私は麦野沈利。超能力第四位（レベル5）、『原子崩し（メルトダウナー）』よ」

それを私に対する失礼だととったのか、麦野は軽くフレンダを諌めて自己紹介した。フレンダは合わせて頭を下げる。私は右手を振って気にしてないことを表す。

「絹旗最愛です。能力は『窒素装甲（オフェンスアーマー）』、大能力者（レベル4）です」
「……滝壺理后。能力は『能力追跡（AIMストーカー）』、大能力者（レベル4）。よろしくね」
「フレンダ＝セイヴェルンよ。『無能力者（レベル0）』だけど、結局爆発物の取り扱いなら誰にも負けない自信はあるって訳よ！」

続いて三人から自己紹介をもらった。まあ、絹旗と滝壺に関しては原作を読んでたから能力も知ってるんだけど……。フレンダが無能力者（レベル0）で、爆弾使い（ボマー）だっていうのは初耳だった。
あと、彼女の苗字が『セイヴェルン』だったというのも初耳だ。
そういえば読んでなかった漫画版超電磁砲（レールガン）では『アイテム』が登

場してたっていうし、そこで登場した設定だろうか。

「ご紹介どうも。私は親船小豆。親船最中の孫娘です。能力は『割裂空洞（ダークホール）』。強度（レベル）は一です」

「あら、私たちは暗部だから隠さなくてもいいのよ？」

私がいつもする自己紹介に、麦野は少しだけ微笑んで返してきた。勿論目は笑ってない。……隠す？　隠すって私の能力を？　確かに私の能力は超能力（レベル5）の『並行結合（シンクロニズム）』だが……。

麦野の口ぶりからすると、もしかしなくても私の能力って暗部の間じゃ周知の事実だったりする……のか？

「周囲に監視の目はないから惚けなくても良いわよ、裏第四位（アナザーフォー）さん？」

麦野は口調こそ穏やかなものの、目は猛禽のように鋭く光っている。裏第四位（アナザーフォー）ってどういう意味だ？

「ああもう、いつまで惚けてんだこのビビリが。いいから名乗っちまえっつってんだよ！　『並行結合（シンクロニズム）』、『超能力者（レベル5）』ですってよォ！」

つ、ついに麦野がキレた。っていうかファミレスで堂々と機密怒鳴るなよ。盗聴されない用意はした上で怒鳴ってるんだろうが。

しかし、回答を遅らせたのが間違いだったか。でもなんでこいつはこんなにムキになってるんだろう？　裏第四位（アナザーフォー）って言葉も何か棘があったし……。いや、それよりフォローか。

「す、すみません……。はい、そうです。麦野さんが言ったとおり、です。はい。……でも、裏第四位（アナザーフォー）ってどういう意味ですか？　私は、

実質超能力者（レベル5）なだけで、序列にはいませんが」

「てめェ……、」

「麦野、そこまでよ。結局、どうやら彼女本気でどういう意味か分かってないみたいだし」

私のフォローに激昂しかけた麦野を、フレンダが押さえた。それにしても、麦野嬢は頭に血が上りやすいようだ……。その上怖い。

『原子崩し（メルトダウナー）』の攻撃なんて私の能力じゃ抑えきれないだろうし、ここで使われたら即死だ。麦野もプロだからそんな戯けた真似はしないだろうけど。

「私が説明するね。あなたも分かってるとおり、三年前まであなたは学園都市の暗部に狙われていた。それは、あなたの能力が学園都市にとって不利益を齎すと統括理事会が判断したから。ここまでは把握してるよね？」

キレた麦野を宥めている絹旗をよそに、依然マイペースな滝壺が私に状況説明を始めた。渡りに船と、私は首肯する。注釈しておくと、私が学園都市に不利益を齎すと判断したのは統括理事会ではなく、統括理事長、つまりアレイスター。

何故なら、統括理事会でそういう議決が出ようものなら私の祖母である最中お祖母ちゃんが黙っていないからだ。そういう機会の為に、お祖母ちゃんは他の理事会役員と細かい条約を結んで備えている。それらがパーになるということは、統括理事会の権限の及ばない存在――アレイスターの独断によって、私の始末が決定されたということになる。

「その時に、あなたが超能力者（レベル5）という情報も一緒に暗部に流れたの。序列も一緒にね。そこに記されていた序列は、第四位だった」

なるほど、それが裏第四位（アナザーフォー）の「第四位（フォー）」につながるわけか。だが、なら何故「裏（アナザー）」がつくのか？

「もちろん、ここに書かれていた序列は公式ではないものだよ。本来あなたはあの騒動で暗殺されるはずだった人物だし、暗殺されなかった今も安全の為に超能力者（レベル5）である事実を隠しているから、公式に明かすことは出来ない。だから、『表は』第四位はむぎのってことになってるけど『裏は』おやふねが第四位。だから『裏第四位（アナザーフォー）』」

滝壺の説明が終わるなり、麦野が盛大に舌打ちをした。

なるほど、それなら麦野が私に食って掛かったのも納得がいく。裏では自分をしのぐ能力者が表で飄々として、自分たちを雇ってるわけだし。麦野は能力に結構固執している面があるみたいだから、私のそういった態度が許せなかったのだろう。

まあ、超能力者（レベル5）の序列に関していえば、対外的にはともかく強さはあんまり関係してないんだけどな。超能力者（レベル5）の序列は『学園都市（アレイスター）』にとってどれだけ有用か』が関係していると、私は考えてる。

一方通行（アクセラレータ）は魔術のベクトルを操ることで自分が天使みたいになってたから、たぶん天使召喚とかそのあたり。

未元物質（ダークマター）は、これは私の推測なのだが、あれは三次元世界に顕現した天使（テレズマ）の力なのだと思う。天使（テレズマ）の力はこの世に存在しないはずの物質だし、つじつまは合うだろう。

そして、超電磁砲（レールガン）は妹達（シスターズ）の有用性からだろう。あれは土御門の予想ではアレイスターの計画の肝になってるし。

で、この三人が学園都市にとって特に有用な人材。御坂に関しては用済みだが、一位と二位は死んでも脳みそは回収されるだろう。第四位の麦野からは、なくてもいい、もしくは代用できる人材になるだろう。

『原子崩し（メルトダウナー）』は未元物質（ダークマター）の加工に使うみたいなことを浜面が言っ

ていたし、そのとおりの使用法なんだろうが、
第五位……『心理掌握（メンタルアウト）』は名前しか登場してないし、第六位は不明だし。
第七位、ナンバーセブンの削板は何故七位に甘んじているのか不明だが、おそらく原石であることが関係しているか、『学園都市の利益順』という建前がある関係上、原理が分からず技術転用できないからだろう。
上条や原石の能力者はなにやら魔術の匂いがするから困る。

そもそも、普通に結標あたりにも殺されかねない私が超能力者（レベル5）という時点で、私の仮説の正しさを証明してるようなものだ。私が超能力者（レベル5）なのも、多才能力（マルチスキル）の希少価値が高いからだと思ってる。

閑話休題。

「なるほど。それで……。すみません。私は『そちら』に関しては疎いもので」
「馬鹿な、惚けてんじゃねェぞ！　四年も暗部から逃げ切った上に未だに『そっち』にいておいて『疎い』はねェだ、」
「疎い、もので」

麦野がまたヒートアップしはじめたので抑える。滝壺に周囲を探索させてるのか知らないが、能力で盗聴って可能性だってある。あまり口を滑らせるのは利口じゃないよな、ってことで。まあもう遅いけど。ムカつくのも分かるが抑えてくれ、このとおりだから。

「……ごめんなさい、熱くなりすぎたわ」

麦野も落ち着いてくれたみたいだ。すぐに感情を切り替えられるのはやっぱりプロたる所以か。頼りになるなあ。絹旗とかがポカン

としてるが、仕事なんだからしっかりしてほしい。子供とはいえ暗部だろう？

「では、資料は読んでると思いますが改めて事情を説明しますね」

静かになった四人を一瞥して、私はカバンから紙の束を用意する。暗部を雇うにあたって、あの日の出来事を詳しくまとめたものだ。

もちろん、あの場に滞空回線（アンダーライン）はなかったから都合の悪いところはぼかして捏造してる。『空間支配（ライジングゾーン）』様様だ。

「昨日、私は『空間支配（ライジングゾーン）』と名乗る『空力使い（エアロハンド）』の少年に襲撃されました。彼の言うことには、学園都市――統括理事会の『プラン』を妨害し、上手く利用して自分たちが富を築こうと画策しているらしかったです。そのために、統括理事会の一員、親船最中の孫娘である私を仲間に引き入れ、理事会の動きをけん制する狙いがあったようです。ほかにも色々訳のわからないことを口走っていましたが……とりあえず統括理事長のことを敵視しているようでもありました」

「統括理事長？　何でまたそんな超命知らずな真似を？」

私の報告に絹旗が怪訝な声を上げるが、そんなことは私にも分からない。アレイスターを甘く見てるとしか思えないな。にしてもさっきから私、妙にアレイスターを持ち上げているが、正直彼ほど『敵だと恐ろしいが味方だと心強い』存在もいない。

尤も、現状も味方かといわれると首を傾げてしまうレベルではあるのだが、共通の敵がいるという点では味方っぽい存在だろう。勿論、私もしっかりと動いて彼らの処理をしなくてはならないのだが、アレイスターも何かしら働いてくれるとものすごい助かる。

「さあ、私にもよく分かりませんが……。ただ、彼らは自分たちが敵に回そうとしているモノの強大さも理解できない身の程知らずか、あるいはこの街すべてを敵に回してなお勝算を持つことの出来る程強大な力を持つものであるか、どちらかだということです」

おそらく前者でしょうがね、という言葉は飲み込んでおく。不用意に相手を貶めて彼女たちに油断を誘わせるようなことはしたくない。

一応プロだから油断はしないだろうが、仲間内で「あいつらバーカバーカ（笑）」なんて言ってたらそりゃ気も抜けてしまうだろう。特に麦野や絹旗なんかは原作を読む限り、ちょっと自信家のきらいがあるから要注意だ。

「ま、十中八九前者だろうけど……。念のため下部組織に素性を当たらせて見るわ。話を聞く限りそいつら、情報統制は上手くないみたいだし」

無計画な誘拐未遂と言い、行動からしてド素人臭が酷いわ。と麦野。さすがに超能力者（レベル5）だけあって、侮るだけ侮っているみたいだが、そこは腐ってもプロというか、『念のため』相手の情報を収集するよう指示するあたり馬鹿じゃないな。

「んじゃ結局、今日のところは下部組織の愚図共に任せる以外は進展ナシってこと？」

「超そうみたいですね」

気の抜けた会話で話を締めくくろうとしたのはフレンダと絹旗だ。私も、伝えないと彼女たちが死んでしまうような重大な情報は持ってないので今日はここまでである。

「そうね。あとは……親船、その『空間支配（ライジングゾーン）』は味方に関して何か情報を漏らしていた？」

と、ここで終わると思いきや、麦野が最後の確認を取りにきた。

私もまじめに記憶をあさって、話してもいいことを吟味してみたが……うん、ないな。

どうせ『空間支配（ライジングゾーン）』の仲間は転生者だから、私の命の安全のために一人残らず消えてもらう予定だし。

たとえば『相手は『滞空回線（アンダーライン）』の存在を知っていて、気流操作を駆使して滞空回線（アンダーライン）を破壊して、盗聴を防いでいたよー』なんて言ってみよう。

すると、麦野たちは「あんだーらいんってなんぞや。誰か一人生け捕りにして尋問しよう」と言うに決まっている。生け捕りでは、他にも『話されては困ること』を話される可能性だってある。

「……ん～、特にありませんね」

「オーケー。それじゃ顔合わせ兼打ち合わせはこれで終了ってことにするけど」

「超異議なしです」

「結局、異議なしね」

「……異議なし……」

……にしても、作者（かまちー）の趣味かは分からないけどこの世界の人間って口調に特徴がある人が多いよなぁ……。私はもう一六年こっちで生活してて、そういう口調の人間とも少なからず接してるから違和感なんて毛ほども抱かないけど。

むしろ私自身も気がつかない口調が自分で生まれているのかもしれないけど。

「じゃ、これから互いの親睦を深める為に、ショッピングでもしま

しょっかぁ」
「えっ？」
とかなんとか考えてぼけーっとしていたら、麦野が頬を引き裂くように口元を緩めて微笑んだ。
目は、笑ってなかった。

０４（後書き）

三月二八日修正
九月一二日修正

05

どうしてこうなった……。

今現在、私は『アイテム』の連中と、セブンスミストというお店でショッピングを楽しんでいる。麦野の鶴の一声によってその後親睦を深めるという名目でショッピングに行くことになったのだが、先ほどから服を選ぶ背中に視線が突き刺さっている。

明らかに麦野のものだ。そういえば、何だかんだで煙に巻いたつもりになってたけど麦野は私に対してコンプレックス的なものを抱いているんだった。

となると、ショッピング行こうぜっていうのもただの口実、真の目的は私の精神を磨耗させること!?　流石超能力者（レベル５）……実験で人間やめてるだけあって、嫌がらせのレベルも人間じゃないな……。

「ねえ、さっきから男っぽい服ばかり選んでいるようだけど」

後ろから麦野の声が突き刺さる。悪いか、口調や仕草は女でも趣味嗜好は前世のままなんだ。スカートなんて制服でもない限り履きたくないし、現に今だって昨日と似たり寄ったりの服装だ。

私も流石に女だから、ひらひらしたり可愛い物を着るのは仕方ないと諦めている。だが、スカートだけは好んで履きたくはない。そして、できればひらひらしたり可愛い物を着るのもご勘弁願いたい。ああ、ジーンズを履いていたあのときが懐かしい……。

「趣味なんだよね」

だから、私は何か言われる前に釘を刺しておこうと、取り付く島

もない返事を返す。ちなみに、私の口調が敬語じゃないのは、麦野から「普段の口調じゃないと知り合いに目撃されたとき面倒だ」と言われたからである。

「へえ、よくないね。せっかくそんなに可愛らしい外見なんだから、それに見合った服を着なくっちゃあ」

麦野はそう言ってニタリとこちらにいやらしい笑みを向けてくる。これって……やな予感しかしないな。こういう『おめかししましょう』みたいなお約束は私には縁のないモノだと思っていたのだが……。

「お、いいじゃんいいじゃん。結局、私も賛成よ」

と、私がげっそりしながら何とか断ろうとすると、片手にスカートを持ったフレンダがエンカウントした。近い将来胴体ブッチされる相手の肩なんか持つなよ、フレンダ……。私がスクールに拉致されるの回避してあげるから。

しかし、心の中で呟いても何も変わらず（かといって現実に言ったら死亡確定だが）、スカートを持ったフレンダはにじり寄って来る。

「いや、私は可愛い系というか、スカートとかそういったものはあんまり好きじゃ……」

「ほい。結局、履いてみないと分からないこともあるモンよ」

「そうそう」

そして、スカートを手渡されてしまった。完膚なきまでにミニスカートである。今はこんなナリしているが、私はこれでも一六年前

までは男歴二〇数年だったんだ。ロングスカートやパンツまでは妥協できても、こんな娼婦がするような格好、できるわけがない。

「拒否す、」

「超面白そうなことやってるじゃないでーすかー」

丁重に断ろうとした瞬間、背後から私より幾分小さいの背丈の少女が現れ、早速拘束された。

「ちょっ、な、何するの絹旗ちゃん！？」

思わず絹旗を問い詰めようとするが、彼女は答えない、そして、身動きがぜんぜん取れない。たぶん、窒素装甲（オフェンスアーマー）でも使っているのだろう。能力の無駄遣いも甚だしい。

「題して、親船さん超ぷろでゅーす大作戦っ！　というのは超どーですかね？」

「いいじゃんいいじゃん！　燃えてきたって訳よーっ！」

「じゃあ、誰が一番上手く着せれるか勝負ね」

当事者の私を置いて、三人の話はどんどん加速していた。どうやら私は着せ替え人形の役をさせられる羽目になるらしい。まあ、これで麦野の機嫌が直れば御の字か。どうせだから着せ替え人形やりながらそれとなくこいつらと仲良くなっておこう……。

「がんばって、おやふね。そんなおやふねを私は応援してる」

じゃあ助けろ。

＊＊＊

……とまあ、そんな感じで着せ替え大会が行われたのだった。

「もう、お嫁に行けない……」

「だいじょうぶおやふね。私がもらってあげる」

三人とも思い思いのコーディネートを施していたが、接戦を制したのは――傍観者のはずの滝壺だった。

「……っく！　負けたわ……！　超能力者（レベル５）たる私に勝つとは、滝壺……恐ろしい子っ！！」

麦野が妙にすがすがしい表情で笑っている。怒り状態の彼女を知っている身の私としては、空恐ろしい感覚しかない。だがまあ、同じように怒り状態の彼女を知っている彼女たちは自然に笑っているので、私も自然な感じで笑っておこう。

「結局、親船は勝者である滝壺のコーディネートで今日一日過ごすって話でオーケーよね？」

え、何それ聞いてない。っていうか、今の私はサイドテールを分解し、白い帽子を被って同色のワンピースを着るという、「どこぞ

のお嬢様ですよー」って感じの清楚系だ。
自慢ではないが、私は育ちが良いのでこういう服装をすると『様になって』しまい、どうしても注目を集めてしまう。私が普通の人間ならそれでもいいが（全然良くないけど）、生憎今私は狙われている身だ。ただでさえ人の目を忍ばないといけないというのに、注目を集める服装など本末転倒……、

「あ、その服買っといたからー」

……本末転倒、なんだがなぁ……。麦野の醸し出すオーラがもうそんなこと言ってられないレベルだったので、諦めて受け入れることにした。……よく考えたら、これは麦野たちの自信の現れとも言えるのかも知れない。
あえて私に注目を集めることで、自分たちが対処しやすい時に敵の追っ手を呼び、退治するつもり。そして、それをできると確信するだけの自信がある。
そう考えると、なるほど、先ほどの着せ替え大会は全て計算されていた――わけではないだろうが、こういう思惑もあったのかもしれない。
……ないか。

＊＊＊

さて、市街地に出た。私の予想通りというか、視線が痛い。私は目立ちたがりな性ではないので正直これは苦痛だ。恥ずかしいやら暑いやらで私はすでに汗だくだ。

麦野たちに助けを求めるように（具体的に言うと「さっさと人通りの少ないとこ行こうぜ」と言いたげな）視線を向けるが、彼女たちは天然なのかわざとなのか、私の視線には気づかずに普通にスタスタと歩いている。

「って、皆どこに向かってるの？」

「ラ・マンチャです」

ラ・マンチャ……確か、第七学区にあるスーパーの名前だったか。で、なんでそこに行くんだろうか？

「決まってるじゃないですか。超服漁りです。まさか親船さん、自分の服だけ買って超おしまいにするつもりじゃないですよね？」

超薄情ですよー、とでも言いたげな笑みを浮かべてこちらを振り向く絹旗に、私はやっと彼女たちの行動指針を理解した。なるほど。あれは私への制裁ではなく、全員の服を買うための序章だったわけか。

そういえば私の着せ替え大会が始まる前は各々自分の服を見ていたけど、誰も彼もあまりいい表情はしていなかった気がする。

「うーん、微妙ね……。まあ、たかが量販店じゃ当然か」

で、ラ・マンチャでお買い物。ラ・マンチャとは、私の前世の世界で言うところの『ドン・キホーテ』のようなスーパーだ。中はた

くさん商品棚が並んでおり、巨大な倉庫のようである。
当然のように冷房はガンガンだが、学園都市の不思議技術により地球温暖化を促す効果はないとの事。本当にありがたい限りだ。
流れ的に滝壺の服でも決めよー！　といって今度は滝壺が着せ替え人形に。いや、浜面が「滝壺は脱いだら凄い」という予想を立てていたが、さすが超浜面。その通りだった。
白く透き通ったシミ一つない肌、そして……豊かに実ったその双丘。彼女の下着姿は私の脳内フォルダに保存して、これからもことあるごとに使用させてもらおう（『そういう』能力もあるので冗談じゃなかったりする）。

滝壺の服は選び、セブンスミストよりも品揃えが豊富（というか量が多い！）ということでここで全員分買っちゃおうという話になったものの、セレブ嗜好の麦野フレンダおよび絹旗の眼鏡に適うものはなかったらしく、三人は渋い顔をしながらこの店での服選びを断念した。
ちなみに現在の滝壺はジャージではないものの同じくらい野暮ったい感じの服装だ。だぼだぼのTシャツにジーンズって女の子としてどうかと思う。

「それに、どうやらお客さんも超来たみたいですしね」

その言葉と同時に、全員の気配が鋭くなったのを感じ、遅れて私も体勢を整える。どうやら昨日の今日で早速追っ手のお出ましのようだ。……今の私の格好、戦闘だと大分マズくないか？
っていうか、『此処』で戦闘はマズくないか？　普通の量販店だし、監視カメラとかあるだろうし。と思ったら、横でフレンダが携帯電話片手に何事かを話していた。
おそらく、下部組織に連絡して店の監視体系を妨害するように指示しているのだろう。暴れる下準備もこれで完了、というわけか。

「出てきたらどうなの？　いるんでしょう？」
「……コフッ、二〇メートル先、一一時の方向から反応あり。ＡＩＭ拡散力場の情報から、火炎系能力者である可能性大」

麦野が呼びかけ、滝壺が位置を告げた瞬間、絹旗が指示通りの方向へ突っ込んでいった。
少しは罠の可能性を……と思ったが、滝壺の能力追跡（ＡＩＭストーカー）に能力方面での誤魔化しは効かないし、窒素装甲（オフェンスアーマー）なら多少の爆撃なら効かないし、火炎系能力者ならそもそも窒素を纏う絹旗との相性は最高だった。
やっぱり何だかんだ言って暗部、とっさの判断力は私じゃ及びもつかない……。

と思っていると、ゴオ！！　と炎が巻き上がった。どうやら滝壺の判断は正しかったらしい。商品棚が炎に巻き込まれて吹っ飛んだ。同時に、火災報知機がブザーを鳴らしてスプリンクラーを噴射するが、さらなる炎に封殺された。
……ちと、強度（レベル）が高すぎやしないか？　この炎、大能力者（レベル４）程度じゃないか？　大能力者（レベル４）って言ったら、かなりのものだ。超能力者（レベル５）の私が言うのもナンだが転生者がそんなに都合よく強い能力に目覚めるものか？

「……他愛もねーなァ。資料と違って『男らしい服装』してないから探すのにちと手間取ったが、見つけちまえばこんなにあっさりだ」

……！　なるほど、これが麦野の狙いだったのか。普段女らしくない服装をしている私にあえて女らしい服装をさせることで、敵の目を誤魔化すと……。
炎の中から男の声が聞こえる。絹旗に襲われたにしては落ち着き

払いすぎた声だ。これは……もしかしたか。これはまずいと思った私は、スカートを気にしつつ麦野の後ろに隠れる。

　すると、同時に絹旗が商品棚をふっ飛ばしながら出てきた。煤けてはいるものの、目だった火傷は見られないが……。

「がハっ！　くっ！！」

　絹旗は苦しそうに喉を押さえていた。なるほど……。

「何らかの気体を体に纏う能力、か。全身を纏うように発動してるこの能力だが、全身に張り付いていたら酸欠になるよな？」

　つまり、口に窒素は纏われていない。だから、顔面に火を当てることで熱した空気を浴びせた、というわけか。尤も、絹旗も馬鹿じゃないからすぐに気づいて窒素でガードしたから、軽症ではあるみたいだが。

　にしても、流石に『窒素装甲（オフェンスアーマー）だな』とか馬鹿な発言はしないようだな。もしされてたら麦野たちは何故知ってるのか！　と尋問を開始するだろうし、不審買うのを覚悟で脳味噌ぶち壊さなくてはならなかったから助かる。

「馬鹿が……。あの程度のゴミクズに遅れをとりやがって」

　麦野は腹立たしそうに舌打ちをしている。そう、さっきまでの姦しい女の子の一面など、上っ面に過ぎない。部下が不始末を起こせば、その尻拭いをするのではなく部下を切り捨てる。それが麦野沈利という女のやり方だ。

「親船、悪いけど瞬間移動（テレポート）で絹旗回収してくれないかな？　あいつが移動するまで待つの面倒」

麦野が右腕を持ち上げて男に向ける。男はやはり転生者なのか、向けられた腕が何を意味するのか察したらしく目に見えて慌てているが、絹旗は逃げようにも気道へのダメージが大きいのか逃げられずにいる。

私の瞬間移動（テレポート）を期待しているとはいえ、外道だなぁ。

「……依頼人に仕事手伝わせるって、どうかと思うけどね」

小言を呟きながら（本当に呟きながら。麦野に聞こえるように言ったら消されかねない）割裂空洞（ダークホール）を生み出す。

能力複製（ＡＩＭトレース）は、割裂空洞（ダークホール）を介して私の拡散力場に他の拡散力場を上書きすることによって起こるから、異能を放つこと自体が能力（発火能力（パイロキネシス）とか）でなくとも使用することができるのだ。

瞬間移動（テレポート）も、扱いが難しいもののやろうと思えばできる。

「っと。助けに上がりましたよって、うおぉぉ！」

絹旗の隣に瞬間移動（テレポート）したところ、男が炎を飛ばしてきたのでそっちに割裂空洞（ダークホール）を出して盾にするついでに拡散力場を出させ、再度瞬間移動（テレポート）。

連続瞬間移動（テレポート）は黒子と違ってやりなれてない私には荷が重過ぎるが……めり込んだりはしなかったのでまぁいい。気合で能力施行に成功した私は、その直後問答無用で原子崩し（メルトダウナー）を放つ麦野を呆然と隣で見ていた。

これは男、死んだかな……。

「っぐォオオオオオオ！？　クソッタレ！　あのヤロウ！　そもそも親船小豆が『暗部』と手ェ組んでるなんて報告になかったじゃ

んか！　あああもう契約違反だ契約違反！　一旦下がらせてもらいますよもらうぞもらわせろこのヤロウどもが！！」

……死んだと思っていたのだが、どうやら炎を地面に噴射してロケットのようにして脱出していたらしい。

この分だと追撃しても同じようにして逃げられるだろう。してやられた。私としても、積極的に深追いしたら怪しまれるしこれでいい。それに麦野たちは追撃を諦めて反省会モードに移行しているようだし……。

＊＊＊

「超すみません……」

絹旗が喉の調子を確認しつつも頭を下げる。滝壺は慰めようとし、フレンダは了承し、麦野は憮然として返した。私？　私はどっちかというと「迷惑かけてごめんなさい」より「助けてくれてありがとう」って言ってほしい。謝られても気まずくなるだけだしな……。

「そうね。今回の敵を逃したのは絹旗のミス。でもあの時点では突っ込むのがベターな判断だったし、相手が上手だったってことでしょ」

あら意外。絹旗のミスを追及するものだと思っていたが、割と簡単に流したようだな。

「じゃ、滝壺。さっきの襲撃者のＡＩＭ拡散力場の検索お願い。追撃するわよ」

「了解」

……なるほど、さっき無闇に追撃しようとしなかったのはこの為か。確かに、相手が気を張ってる時に追撃するよりも、滝壺っていう便利検索能力者がいるんだから、この方が効率はいい。

体晶の使用限界もこの時点では余裕があるみたいだしな。尤も、使用限界が来ても使い続けるんだろうが。

「絹旗、報告お願い」

「はい。……敵は超強能力者（レベル３）の発火能力者（パイロキネシスト）のようでした」

……？　『強能力者（レベル３）』？　あの火量は強能力者（レベル３）にしては大きすぎるだろう。大能力者（レベル４）じゃないのか？

「間近で見たから分かるんですけど、敵は自身の能力に『酸素ビン』を超併用しているようでした」

……なるほど、酸素によって自分の能力を倍増させていた、ってわけか。『空間支配（ライジングゾーン）』といい、転生者は能力を応用させて使うのが美徳とでも思っているのだろうか？

そりゃあ、素養格付（パラメータリスト）があるから能力のレベルを上げるよりも応用で威力を上げた方が効率はいいだろうが。

「それじゃ結局、『酸素ビン』をなんとかしちゃえばいいって訳ね？」

「……そうね。……とりあえず先陣は絹旗に任せるわ。タネが割れれば対処も簡単でしょ」

「超了解です。……今度こそ超全うしてみせますよ」

方向性は大体固まったみたいだな。私は依頼人だから普通こういうことには参加しないんだろうけど、私が裏第四位（アナザーフォー）だってことを根に持ってる麦野は無理やりにでも働かせるんだろうなぁ……。

今更だけど、悪人でもスクールの方々に護衛頼めば……いや、アレに頼むと最悪殺されるな。

「親船は私の近くで待機。一人で前線にいかせるようなことはないから安心しなさい」

「あ、それなら問題ないよ。了解ー」

おや、後方支援に回らせてくれるとは予想外。てっきり「私以上なんだから最前線で突っ走れよォ！」とか言われるのかと……。そりゃあ、そうだな。能力を無効化できるスキルを持つ私は、滝壺とセットにして扱ったほうが使えるだろう。

「検索終了。目標は現在一二時の方角三〇〇メートルの地点を一時の方角に直進中」

「さあて、『アイテム』出陣と行きましょうか」

あれ、もしかして私、『アイテム』に含まれてる？

０５（後書き）

小豆の扱える多才能力（マルチスキル）の上限は強能力（レベル３）。
にも関わらず、大能力（レベル４）でないと不可能なはずの自身の瞬間移動（テレポート）を普通にできているのは、並行結合（シンクロニズム）が既に超能力（レベル５）の瞬間移動（テレポート）系能力で、自分を含めた一一次元演算も容易だから――――という『設定』です。

三月二八日修正

06

ｓｉｄｅ襲撃した発火能力者（パイロキネシスト）

……マズイ、超マズイぞこれは！！　『あいつ』からの報告じゃ、風間の阿呆が演算ミスって親船小豆の護衛に消されたってだけだったはずなのに、何だって『アイテム』が親船小豆の味方についちゃってるわけェ！？

しかも滝壺は健在っぽいし！　あいつの能力追跡（ＡＩＭストーカー）……だっけ？　で、俺の拡散力場も記憶されちゃっただろうし、逃げられねえぞ！

浜面とのフラグ成立のために麦野と絹旗と滝壺は殺すわけにはいかないし……親船を攫ってくるだけだったのにどうしてこうなった！　とりま、『あいつ』に連絡とらねえと！

「……く、出ろ、出ろ出ろ出ろ！」

ピッ！　という音が受話器の向こうから聞こえて、「もしもし」という間延びした女の声が聞こえる。……どうやら『あいつ』ではない、か。だがまあかえって好都合だ！

「おい！　どうなってやがる、向こうには『アイテム』が、麦野沈利達がついてたぞ！？　俺はどうすればいい！？」

『一度にたくさんのことを話さないでください。……どうやら『アイテム』の護衛は昨日の夕方から今日にかけて取り付けたらしいですね。昨日の時点ではいなかったようですし、おそらく襲撃を受けて急遽連絡したのでしょう。さすが統括理事会の孫娘、手が早い……』

こ、の、ヤ、ロ、ウ！！　俺は今それどころじゃねェんだよ！
消し炭にしてやろうかァ！？　そうじゃなくて、俺がどうすればいいか指示をよこせっつーんだよ！！

「いいからさっさと指示を、」
『分かりましたから。鼻息を荒げないで下さい耳がこそばゆいです。今『あの人』がそちらに向かっていますから、それまで持ちこたえてください』

『あの人』……『あいつ』か！　それはいい。『あいつ』なら『アイテム』程度など束になっても敵わない。つまり、『あいつ』の到着まで待てば俺の生存は確定だ。ったく、ビビらせやがって……。
まさか俺のばら色生活計画の前にこんな障害が立ちふさがるとは思ってもいなかったが、なんとかなりそうだな。

「……ああそうだ。時間はどれくらいかかる？」
『……今出ましたので、五分ほどかと。がんばって持ちこたえてください』
「おう」

それだけ言って、俺は通話を切った。さっきの絹旗との戦闘で、学園都市の暗部の実力も分かったし、俺程度でも絹旗くらいなら何とかなる。
麦野にだけはぶつからないようにして、できれば絹旗を戦闘不能にして親船を攫えればベター、かな。よーし、やってやんぞーッ！！

と、俺がそう心に決めた瞬間だった。

「ッラ、あ、あぁァァァァ！！」

獣のような雄たけびとともに、壁をぶち壊して少女が飛び込んできた。――絹旗か！　好都合！　コイツの手の内は知ってる。『酸素ビン』でブチのめしてやる！

「っへ！　またお前か！　さっき痛い目見たの忘れたのかァ！？俺の能力、『酸素爆炎（エクスプロージョン）』で……ッ！」

『酸素ビン』を握りつぶし、ばら撒いた酸素に『着火』を行う。瞬間、炎は俺の前方に広がっていく。

……はずだった。

「……？　何故、燃え広がらない？」

「『道具（アイテム）』を使うのが、自分だけだと思ったら超大間違いですよ」

そういって絹旗はスチール缶のようなものを取り出す。『液体窒素』の入った缶……ステファニー戦で使ってたアレか！

「私の『窒素装甲（オフェンスアーマー）』は、確かに自分の周囲にしか発現できず、呼吸が出来なくなるから口元は覆えないのが超弱点です。しかし、その操作の強度は銃弾をガードさせることもできるほどに超強いんですよ？　これが、何を意味するか、分からないわけがないでしょう？」

絹旗は、にぃっと口角を上げて解説を続ける。……つまり、『窒素装甲（オフエンスアーマー）』で気化する前の『液体窒素』を自慢のパワーで吹っ飛ばした、と。

『液体窒素』は炎の熱で急激に気化して、炎の発生地点を包み込んだ。そして、燃焼不全で火は消えた……。

あれ、マズくね？　つまりこの周囲には高濃度の窒素が生まれているわけで、俺の手元には『酸素ビン』があるけど、同じように絹旗の手にも『液体窒素』はあるわけで。いたちごっこにしかならない以上、確実に残量が少ない俺が不利。

『あいつ』が来ることを考えても、ちょっと分の悪い賭けと言わざるを得ない……。ここは、ちょっくら、

「『逃げるか』ですか？　あの手は超使わせません、よッ！」

ドッ！！　と絹旗の足元が爆発した。それが窒素を急激に凝縮し、開放した結果だと気づくのに少しかかった。

「ッ、ォ、おおおおおおおおおお！！？」

ダンッ！　と俺も足を踏み込み、そのまま下に炎をブチまけて飛び上がる。すぐ下を絹旗が通り過ぎていったが、『窒素装甲（オフエンスアーマー）』持ちの絹旗に通用しないことは分かってる。ここは一旦――、

そこまで考えて空中で周囲を見渡した俺は、思わず絶句した。

「うん、上出来よ、親船。『表』にいさせておくには勿体無い人材ね。暗部に堕ちない（こっちにこない）？」

「悪い冗談やめてよね、一瞬で死ぬよ？」

「あらそう残念。でもま、これでこいつも」

そこには、麦野の肩を抱くようにして空中に浮かんでいる親船小豆の姿があった。麦野は友達と話すような気軽さを見せた表情をこちらに向けると、一切の感情を排除し、ゆっくりと口を動かした。

オ・シ・マ・イ・ね。

クソッタレ、早く来いよあの変態ｙ、

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

「……さて、とりあえず危機は過ぎたようだけど」

そういって私は、視線を下に落とす。

「――勿体無いことしたよねぇ。指の一本でも落とせばなんでも吐

いてくれただろうに」

そう言って私は溜息をついた。勿論演技である。吐いちゃいけないものまで吐かれたら洒落にならない。……視線の先には、胸から上が消失した男の姿があった。

「余計なことされて手痛い反撃を受けたんじゃ超割に合わないじゃないですか」

私の呟きに、絹旗が呆れたようにツッコミを入れた。確かにそのとおりだが、私は絶対そんなことは起こりえないと言える自信がある。彼は、『元日本人』なのだ。平和ボケした、死の危険など考えたこともない人種。

その上、ここがなまじ小説の世界なだけに、彼らは自分たちが『主人公』だと錯覚してしまっている。どこかで助けてもらえるとか、そんな都合のいい事を考えてしまうのだ。証拠に、彼の行動はどう考えても“私たちを倒す為の行動”ではなかった。

まるで、時間を稼いで何かを待つような動き。戦力差は歴然だし、それが気づけないほどアホでもないだろう。かといって、逃げるための機会を探っていたわけでもないはずだ。『能力追跡（ＡＩＭストーカー）』の前では、逃走なんて無意味だし、な。

「……まあ、そうだけど。依頼人さんとしてはそんな割に合わないリスクを侵してほしかったなーって」

まあ、そんなこと言えないから適当にはぐらかすんだけど。

「親船さん……純朴そうな顔して超外道ですね」

「何言ってんのよ絹旗。結局、暗部の追跡から六年も逃れ続けた奴が外道じゃない訳がないでしょ？」

心外な。私はこれでも、悪行に手を染めた覚えはない。人殺しの経験も、“私が手を下した”ことはないしな。まあ、そのために多少策を弄したことは認めるけど、人外扱いされるレベルの悪行でないとは断言できる。

精精、仲間と同士討ちするように仕組んだとか、そういうレベルだ。このくらい、暗部（このせかい）では当たり前のことだろう？

「私は統括理事会の中でもダントツ真っ白な親船最中の孫娘だよ？それはもうピュアな純白に決まってるじゃなーい」

「もうその口調からして超胡散臭いです」

……ちょっとこいつらは私の苦労を知るべきだな。

「おしゃべりはこのくらいにして、さっさと行くわよ。さっきの……『酸素爆炎（エクスプロージョン）』だっけ？　あの男の行動……ちょっと引っかかるところがあるからね」

「……まるで時間稼ぎしてたみたい。そうでしょ？」

滝壺の言葉に、麦野は頷く。……そういえば、そうだった。私はあれを『都合のいい奇跡が起こるまで待ってる』ものだと思っていたが、普通に考えればそう捉えるのが普通か。

考えてみれば、その可能性が高いことに気がついた。危ない危ない、さっさとここを去ろう。

絹旗とフレンダも了承して、ここから足早に立ち去っていく。逃走ルートは事前に確保していたみたいで、素早く立ち去ることができた。

＊＊＊

side other

「……これは」

小豆たちが去ってから数分後。くだんの廃ビルには一人の少年が立っていた。彼は『酸素爆炎（エクスプロージョン）』の少年を迎えに来た者だが、彼の期待していた『助け』ではない。

彼に与えられた命令は、『酸素爆炎（エクスプロージョン）』の「死体」を回収すること。電話の女性が、『酸素爆炎（エクスプロージョン）』が言っていた『あの人』『あいつ』とは別人である。

「……また凄い惨状だな。あいつの『酸素爆炎（エクスプロージョン）』のせいか、はたまた麦野沈利の『原子崩し（メルトダウナー）』か」

廃ビルは、炎が燃え盛っている。幸い、黒煙を上げるほどの火勢ではないため、証拠の隠滅は容易だが、『これ』を起こした人物は何のつもりでこれほどの熱を加えたのだろう、と少年は思わず溜息を付く。彼の目的である少年の死体は、どこにもない。

「――ああ、だから僕が宛がわれたのか」

そこまで考えて、少年は妙に得心が行った。彼の能力は、『凝結（クリア）氷槍（ランサー）』。『水流操作（ハイドロハンド）』の上位に当たる大能力（レベル４）だ。

原理としては、空気中の水蒸気を念動力（サイコキネシス）で圧縮集結させ、水の塊として操る、というもの。空気中の水分量に左右される能力ではあるものの、それは小道具で解消できるものだし、何より有利（メリット）な点が多い。

まず第一に、水の発生地点を判断されることがまずもってない。それこそ、ＡＩＭ拡散力場を観測できる能力者でもない限り。そして第二に、水を分子レベルで操作しているため、三態変化・温度変化が容易である。

彼の能力名の由来である、氷の槍を生成し操ることは当然、相性の関係か不向きであるものの、高温の水蒸気も限定的に生み出せる。水分操作系としては、おそらく学園都市でトップの力を持っているといっても過言ではない少年だ。

その彼に、酸素爆炎（エクスプロージョン）の起こした炎の被害を文字通り『火消し』しろということなのだろう。

「しっかし、これはまさしく焼け石に水だと思うんだけどなぁ……」

『凝結氷槍（クリアランサー）』の少年は、そういって地面を見た。こびりついた血のついた地面の少し先は、未だに赤熱していた。これは確かに、ちょっとやそっとの水量では消しきれないだろう。

「これ、やっぱ原子崩し（メルトダウナー）だよね」

少年はげんなりしつつも、自分が彼女達と鉢合う羽目にならなくてよかったと、とうに愛想を尽かした神に感謝した。

＊＊＊

――同時刻、第十学区の廃ビル。

「……お帰りなさい」

「ああ、穂村の馬鹿は？」

ボロボロの室内に、新品の家具が置かれたちぐはぐの空間に、少年と少女がいた。「穂村」という人間の名前を挙げた少年は、ドアの前で立つ少女の脇を通り過ぎて傲慢な態度でソファに腰掛ける。

少年の顔つきは整っており、ともすれば美少年として学校のアイドルになれそうなモノだが、彼の醸し出す『野獣のような』とでも形容すべき雰囲気のせいですべてが台無しになっていた。

少女の年齢は一四、一五くらいだろうか。濃い茶色の髪は肩の辺りまで伸び、そこで乱雑な方向に跳ねている。顔つきは幼いが、表情や彼女の醸し出す雰囲気は不自然に大人びていた。

ちなみに、穂村とは先ほど小豆達を強襲した少年の名前だ。穂村稲刈、強能力（レベル３）の発火能力（パイロキネシス）を持つ男――。彼本人は酸素ビンと併用することで、『酸素爆炎（エクスプロージョン）』を名乗っていたようだが。

「……『アイテム』と手を組んだ親船小豆に消されました」

「――ははっ、ははははっ！　さすが小豆たん！　やるねェ、原作に登場してなくてもやっぱ重要なポジの女の子とフラグ建てるには犠牲が必要、か」

まるでアニメのキャラクターを目の前にしたような口調の少年に、少女は閉口する。彼は、常にこういう言動をする。

女性に対しては、その対象が可愛ければ、「萌えキャラ」に対するような扱いを。

男に対しては、「フラグ成立を阻害する妨害要素」、人間ではなくこなすべき「イベント」に対するような扱いを。

この世界が「小説の世界である」と知っている彼女としては、分からなくもない考え方だが、あまりに現実を見ていない、と思う。彼以外の彼女の同胞にしても、彼とは別のベクトルでありつつも同じようなものである。

彼のように、「女の子を侍らせる」ではなく、「富を築く」だの「英雄になる」だの、各々目標を持っていはいるが、誰も彼も、この世界が命ある人間で構成されている現実の世界であるという、大前提の事実を忘れているようだった。

一方、少女には大それた目標などなかった。『平和な一生を過ごす』。現実世界でそうあるようにこれが彼女の唯一つの目的だった。

学園組織の暗部と関わったり、主人公たちと関わったりして拾った命を態々無為に潰すのは常識的ではないと思っての考えだったし、学園都市の『表』は、それなりに居心地のいいものだと、ただのありふれた異能力者（レベル2）だった彼女は分かっていたのだ。

しかし、そんな平和な考えも目の前の男のせいで全て打ち砕かれることとなる。

『与謝野　菱形』。

少年の名は、そう言う。

彼女は、与謝野に見初められ、強制的に『ハーレムの一員（よめいちごう）』にされ、ここまでずるずると引き摺られて来た。逃げようと、何度か考えたこともあった。しかし、この少年の『能力』を考えると、謀反はおろか逃亡すら愚かしいことに感じられた。

そうして引き摺られてきた結果が、決定的な『死』である。与謝野が予てから狙い続けていた『親船小豆』は、ついに『アイテム』を味方につけたらしい。ちょっと考えてみれば、分かることだった。

親船小豆は統括理事会役員の孫娘で、統括理事会は『闇』と直結している。いかに『ナンバーワンの善人』とはいえ、愛しの孫娘が狙われていると知れば躊躇はしないだろう。もとより、そういう人間だ。

暗部との接触。それは彼女が最も恐れていた事態だった。確かに、彼女達の組織は強い。男の『能力』もあって、ほぼ全員が強能力者（レベル3）……いや、それ以上の力量を持っているが、学園都市の暗部に敵うほどではない。

彼女は、図らずもこの男の懐刀、参謀という立ち位置にいる。間違いなく、親船小豆の目には滅ぼすべき敵と映るだろう。

（ああ、どうして、なんでこうなってしまったんですか？　私は、彼女に危害を加えるつもりなんてなかったのに……）

こうなれば徹底抗戦？　そう考えてそれは死兵の考えだと彼女は切り捨てる。

（今、私がしなくてはならないのは、嘆くことじゃない。生きること。緩やかに死んでいく為にではなく、生きる為に何をするか。こ

んなくだらない男の許で死んでいくなんてまっぴらごめんです。このままなら確実に死ぬ。それなら、私のすべきことは一つでしょう？）

「さぁて、次は誰を送り込もうか。引潮あたりなんていいかもしれなくね？」

「いえ、次は私が」

だから、彼女は選択する。見せ掛けの平穏と引き換えに、確実な死を迎える道を捨て、

「流石に、一日に二人も追っ手が来るとは思えないでしょう？　大丈夫です。私の能力なら、上手く不意を打てます」

強大な死の危険と引き換えに、一縷の望みが存在する道を。

06（後書き）

三月二八日修正

07

まあ、想定の範囲内だった。うん。

「うはぁー、超すごい豪邸ですね、さすがは超統括理事会の孫娘って奴ですかね？」

「まあ、そこそこじゃない？」

「結局、金がものを言うのね……」

「おやふね、リッチ」

護衛（ボディガード）やらせるんだから、当然泊まりで付きっ切りなんて、それはもう想定の範囲内すぎることだ。暗部と同棲？　なんてこったー！　とかも思ったりはしない。だって織り込み済みだもの。護衛といったら当然そうなるもの。

だが、だがしかしだ。

「わー、靴脱がなくていいんですか！？　超リッチですね！」

「ベッド、もふもふ」

「結局、こんな護衛なら永遠にやってたいかも～」

「あれ、親船。ここにある隠し扉ってあなた……、！！　こ、これは……！」

私の部屋漁んなよ、部屋をよォオオオオオ――――――ッ！！！

＊＊＊

さて、ここに至るまでのあらすじを簡単に解説しよう。

一、とりあえず下部組織に後片付けを押し付け、私達は帰宅。

二、途中で「護衛だから泊り込みだよ」と滝壺から遅まきの報告。これは想定内。

三、家を見るなり絹旗がはしゃぎだす。まあこれも想定の範囲内といえば範囲内。

四、私の部屋に入るなり、物色が始まる。これはちょっと想定の範囲外。

五、私の『秘密の扉（パンドラのはこ）』を開けようとした麦野を死ぬ気で押しとどめることに成功した。↑今ココ！

「べ、別にそこまでマジにならなくてもいいじゃない……」

「駄目、絶対駄目……っ！　これは、絶対……！！」

肩を荒く上下させながら、私は必死の形相で拒否の意を示す。その尋常じゃない様子に、さしもの麦野も引き下がる。何せ、あの扉の中にはちょっと十八歳未満の子たちには話せないあんなモノやこんなモノ、ナニがナニなものまである。見せるわけにはいかない。

……いや、ね？　一応女性として生きている私だが、趣味嗜好は男だと話したのは以前の通りで、常に命を張った勝負を繰り広げるストレスを解消するというのは、やっぱりこういったモノになってくるわけで……。

そういうわけで、この扉を開けさせるわけにはいかない。開ければ最期、私は『なろう』にはいられなく……あれ、私何言ってるんだろう。とにかく、私の未来のためにもここを開けさせるわけには行かない！

あ、別に『処理』してるわけではない。ただ、眺めて愛でるだけ。流石に男の性欲までは女性化に伴い失われてしまったみたいだ。

閑話休題（はなしがそれた）。

なんとか『変態』の烙印を押されるフラグを脱した私は、四人に寝床の指示をしてからお風呂に入ることにした。

今日は苦手なテレポートを四回もやってみたり、危うく消し炭にされるところだったりで冷や汗かきまくったし、色々走り回ったので体中べとべとな気がする。女だから、というわけではないが、やはり体は清潔に保ちたいし。

いかに親船邸といえど、お風呂が立派な大浴場というわけでもなく、私が普段利用するのは普通のバスルームである。それでも前世の私が暮らしていた家の浴槽よりはずっと広く、私が思い切り寝そべっても全然スペースが余りあるレベルなのだが。

絹旗が「私も超入りたいです浴場ーっ！」と駄々を捏ねていたが、別段襲撃の危険もあるわけじゃないし、『アイテム』勢つれて風呂入りに行っても妙なフラグしか立たないことは確定的に明らかなので宥めておいた。

＊＊＊

……そんな風に考えていた私が間違っていた。

「……親船、小豆さんですね？」

お風呂に入ろうとしたら、既に入られていた。何を言ってるのか分からないと思うが（ｒｙ

目の前に、少女がいた。濃い茶色の髪を肩の辺りで切りそろえた少女だ。少女は何故か私の家のお風呂で普通にくつろいでいる。女の子の裸は私的には眼福なのだが、今はそうも言ってられない。

「……誰かな？」

そう言いながら、私は戦闘体勢に入る。現在の私の装備はタオル一枚。頼れるのは『並行結合（シンクロニズム）』のみときた。まったく、剥離要素（エラーポイント）もこんなときに来てくれなくても……っていうか何で一番風呂盗ってるんだよ……。

「まあまあ、そんな風に身構えないでください。私は確かにあなた

の予想通り――ですが……。現在お風呂でくつろいでいることからも分かるように、今日は普通に遊びにきただけです」

瞬間、私の頭の中にたった今聞こえた声と同じ質の声が響いた。

『剥離要素（エラーポイント）でしたっけ？　上手いこと言いますよね。確かに私たちの存在なんてこの世界からしたらエラー以外の何者でもないですし』

……！？　剥離要素（エラーポイント）の呼称はまだ麦野たちにも説明していない、お祖母ちゃんと私だけが知る名称のはず。何故こいつがその言葉を……しかも、今の頭の中に響くような声、考えられるのは、こいつが精神感応系（テレパス）ということか。

とするなら、心理定規（メジャーハート）や心理掌握（メンタルアウト）のような強力な能力でもない限り警戒の必要はない、が……。

「さて、サクッと始末するに限るかな。この手の相手は話術に捕らわれたらおしまいだし」

私は誰に言うでもなく呟いて『割裂空洞（ダークホール）』を発現。同時に「精神感応系（テレパス）」に狙いを絞った「能力相殺（ＡＩＭキャンセル）」を発動する。

演算終了までに相手の能力にハマらないか少しだけ心配だったがそもそも普通の精神感応（テレパス）で速攻などできるわけもなく、成功。

私の見立てが正しいならこれで強度（レベル）に関係なく相手の能力の大半は無効化できたし、後はどう始末するか……。幸い、ここにはお湯がたくさんあるし、『水流操作（ハイドロハンド）』でも使って脳を破壊して殺すか。

その後『割裂空洞（ダークホール）』の中に遺棄してしまえばほぼ確実にに死体は見つからない。完璧な証拠隠滅だ。

「――……ッ！？　うぇ、うぇーっ！？　ちょ、ちょっと待ってく

ださい！　だから違うんですって、分かりました白状します！　私の能力は『心理同調（コンフォーミティ）』！　相手の拡散力場とか『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』から逆算して相手の心理状態を読み取ったり、それを自分の脳と同調させることで思考を読むくらいしかできない異能力者（レベル２）なんです！」

どうやら少女は、自分の能力が急に機能しなくなったことに慌てて説明を始めたようだ。まったく信頼できない情報である。そもそも異能力（レベル２）というところからして信用できない。おそらくそこからもう一段階何かがあると見て良いだろう。

「で、その異能力者（レベル２）さんが一体何の用で？」

「……逃げてきたんです」

……はぁ？

「とりあえず、今かけてる能力を解除してくれないとオチオチ事情も話せません。信用できないかもしれませんが、お願いしますー」

……こいつ、揺さぶりをかけているのか？　いやしかし、これ以上は危ない範囲も含まれてくるということだろう。精神感応能力者（テレパス）なら、滞空回線（アンダーライン）に感知されることなく意思疎通できるし……。

「分かった、一旦解除するね」

私が能力相殺（ＡＩＭキャンセル）を使うまでの間に、私に具体的なダメージがなかったことから、おそらく即効性はない能力なのだろう。既に能力相殺（ＡＩＭキャンセル）は全ての演算を終了し、発動している。

この状態なら、一度止めても再始動まで二秒とかからない。つま

り、解除して、異変が現れてからでも十分に対処は可能と言うこと。それならば話を聞くのも一興というものだ。

『ん、ありがとうございます。私の『心理同調（コンフォーミティ）』は先ほども言ったとおり相互的な精神同調が深く関係しています。なので、擬似念話（テレパシー）による会話も可能となっています。方法としては、心の中で台詞を強く思い浮かべるだけで可能です』

『……こう、かな』

心理同調（コンフォーミティ）、か……。なるほど、説明に筋は通っている。まあ、精神感応（テレパス）の応用みたいだから『並行結合（シンクロニズム）』に扱うことは出来ないけど……。

『はい。それで、私がここに来た理由ですが、このままだと私の命が危ないから、というに尽きます』

『どういうことかな？』

彼女の言葉が真実なら……剥離要素（エラーポイント）の連中は夢見がちな輩が多いと思っていたが、女性だからか、現実見てる奴もいるんだな。確かに、原作を云々して自分が云々、っていうのはいかにも男の子が夢見るタイプの幻想だからなぁ。

ご都合主義がまかり通ってる世界ならまだしも、アレイスターの計画（プラン）通りの展開で進んでるこの世界で、原作を利用するって途轍もない難易度なんだがな。

上条や一方通行（アクセラレータ）……彼らのような第一候補（メインプラン）と同じくらい重要な人物じゃないと、イレギュラーとして消される。

つまり、無理。私が彼ら――剥離要素（エラーポイント）と同じ発想にたどり着かないのは、幼少時の暗殺未遂が影響してるのか、はたまた性別からか。

というのはさておき、この女――『心理同調（コンフォーミティ）』の言いたいことと

いうのは、おそらく敗北を予見した、ということだろう。
原作知識を持っていて、学園都市の暗部の恐ろしさを正しく認識しているなら当然とも言える選択だ。暗部は一つのグループを潰せば終わりというわけじゃない。
他の暗部に依頼は回り、いずれ力尽きて殺される。この街では、少なくともアレイスターの計算外などそうそう起こらないし、起こり得そうなものなら（時期的に）先手を打たれるに決まってる。
樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）があるうちは、そもそもアレイスターに『計算外』など起こりえないのだ。

『確かに、私たちのグループ……『剥離要素（エラーポイント）』は結構粒ぞろいの組織です。私を除けば大体は強能力者（レベル３）、大能力者（レベル４）ですし、非公式ですがボスは超能力者（レベル５）です。ですが、彼らの目標はあまりに夢物語過ぎる。たかが異能力者（レベル２）の私では、間違いなく途中で死にますし……』

なるほどな。『仲間はやり遂げられるかもしれないが、その途中で自分は死ぬ、それは困る、だから裏切る』か。賢明な判断だと言える。
にしても、大能力者（レベル４）がいるのは推測済みだったが、私と同じような非公式の超能力者（レベル５）までいるとは……。これは、相手をナメすぎていたかもしれないぞ。

『……ああ、そこまで警戒しなくてもいいですよ。私が見切りをつけるレベルですから。能力はともかく、人格は最低です』

『心理同調（コンフォーミティ）』の少女はそこで一回言葉を切り、

『あの……「ハーレム系ＳＳ」、って分かります？』

うわぁ、聞き覚えありすぎるぞ、その単語。前世でいくつか読んだことはあるが、ニコポやらナデポで原作に登場する女性陣を次々とハーレムの一員に変えていくその様はまさに圧巻だった。

さらにその中でも今の私を軽々超えるレベルのチートを持っていたり、嫌いなキャラを潰しにかかったりとしていたものは『最低系』と呼ばれていたが……。

この手（ハーレム系）の物語に転生するハーレムモノオリ主というと、大抵主人公ヘイトだったり、主人公のお株を奪うものだった気がする。モテない男の僻みは怖いものだ。

自分自身、そういった生き方はするつもりも余裕もなかったから久しく忘れていたが、そういえばいたな、そんな人種。（人種、というか属性なんだが、私の視点からしたら人種で間違いない）

『『剥離要素（エラーポイント）』のボス、与謝野菱形はそういう人種です……というか、『そうなる』のを目指しています。現に、私も一方的に一目惚れしてると勘違いされて仲間に引き込まれちゃいましたし……。しかも、彼の超能力（レベル５）は、全能力者の天敵です。下手をすると、一方通行（アクセラレータ）でさえ勝てるかどうか……。黒翼を得たあとなら可能でしょうが、現時点では恐らく敵いません』

ほう、一方通行（アクセラレータ）でさえ勝てないほどの能力を得て、ハーレムを作る為に色々と動いている、と……。あれ、じゃあなんで私に接触してきたんだ？　空間支配（ライジングゾーン）の男が言うには、統括理事会対策だったが……。

『……ちなみに、親船さんを狙ったのは「原作キャラに挑戦する前にモブでも堕とすか」という彼の気まぐれです……』

『心理同調（コンフォーミティ）』の念話（テレパシー）から、信じられない言葉が飛び出した。その意味を理解した瞬間、横っ面を思い切り鉄槌で殴り飛ばされたよう

な衝撃を感じた。嫌悪感のあまり胃液が逆流しそうになり、自然と口を手が覆う。

何それ、キモチワルイ。

いや、この世界で一六年生きてきたが、ここまでゾッとしたのは初めてかもしれない。本当に気持ち悪すぎる。そいつには、この世界が現実だという認識が致命的に足りていない。

最低系オリ主とか言われる時点でそれは分かっていたが、人をキャラクターか何かとしか認識できないこの人格、私からしてみれば、異常者と言うほかない。

考えてもみろ。私たちが立っているこの地面は、イラストレーターが描いた適度にリアルな『絵』か？

私は、目の前の少女は、いや、それだけじゃない。この世界に生きている人間は、誰かが描いたような可愛い『キャラクター』か？やられる為だけの『敵』か？

違うだろう。誰しも物語の登場人物とは違う。本音と建前があって、人それぞれ歴史があって、腹の中に何かを抱えて生きている。それはあの上条（ヒーロー）だって同じこと。

私がいないところでも世界は廻り、人々は営みを繰り返す。『前世』の世界でも『今』の世界でもそれは変わらない真理のはず。それを、この男はまるで理解できていない。

しかも、世界を何かの『作品』としか認識できないだけならいざしらず、言うに事欠いて『ハーレム』だと？　他人（ひと）を馬鹿にするのも大概にしろよ、と言いたい。

そもそも何故私がお前に惚れることが前提なんだ？　馬鹿じゃないのか？　現実を正しく認識できず、叶いもしない夢を見て、人を

人とも思わず、ただ得た力を振りかざすことしか考えられない愚か者。貴様なんぞに、人の心を奪えるものか！

『心理同調（コンフォーミティ）』もそんな私の嫌悪感を感じ取ったのか、機嫌をとるようにアセアセと慌てる。慌てるくらいなら少しずれて、私に湯船を明け渡してほしい。

既に話しながらシャワーも浴びてしまったし、そろそろ体が冷えてしまう。今背筋が凍る思いをしたから、余計になのかもしれないが。

視線で一連の感情を訴えると、『心理同調（コンフォーミティ）』は驚くほど素早く移動した。やはり感情を同調できる能力を持つだけに、人の心の機微には敏感な性質（たち）なのかもしれない。

「ふぅ……、分かった。あなたのことは信用するよ。で、そろそろ『心理同調（コンフォーミティ）』って呼ぶのが面倒になったんだけど」

お湯につかり、ゆっくりと一息つきながら『心理同調（コンフォーミティ）』に声をかける。

『空間支配（ライジングゾーン）』とか『酸素爆炎（エクスプロージョン）』とかの敵ならまだしも、協力関係をとる人間を能力名で呼び続けると言うのも他人行儀な話だ。

「あ、はい。私は黒花沿受（くろばなえんじゅ）と言います。よろしくお願いしますね～」

「うん、よろしく、沿受ちゃん」

黒花は、それが彼女の自然体なのか、敬語なのに敬意の感じられない、間延びした口調で挨拶をする。

私もお湯の気持ちよさに身を委ねながら気のない返事を返したが、思考は回転中だ。さぁて、この情報、というかこの少女の身柄はどうするべきか。情報も聞けたし、この場で殺して遺棄する、という

考えが浮かぶ。

……現実的だが、勿体無いな。この少女は、利用できる。勿論使い潰すほど私は悪党じゃないが、それでも協力関係を築ければ利益になる。

彼女の能力は手元においておけば誰にもバレない無線としても使えるし、剥離要素（エラーポイント）へのスパイとしても利用価値はある。

普通敵陣に行った後無傷で戻ってきた味方なんてスパイの可能性を考えられて尋問されそうなものだが、多分あの組織なら心配は要らないだろう。――うん、やっぱりここで殺すより味方に引き込んだほうが有益だな。

「……親船さん？」

気付くと私は結構な間思考の海を漂っていたのか、黒花は私の顔を心配そうに小首を傾げて覗き込んでいた。……それにこんな可愛い娘の脳味噌を破壊するとか、精神衛生的にもできないな。となれば、上手いこと彼女を引き入れる為の策を考えないいけない。

「いや、これから君の処遇をどうしようかな～、ってね」

このまま彼女を『割裂空洞（ダークホール）』の中に匿うという手もあるが、それでも恒久的には使えないだろうし、何らかの措置をとって彼女を私の手元においておく策を考えなければならない。

『多分このまま彼女達に紹介しても、尋問は免れないし』

『そっ！　それは困ります！　私、絶対死んじゃいますよ～！』

念話（テレパシー）で話すと、黒花は面白いぐらいに狼狽した。身じろぎした拍子に湯船のお湯が飛び跳ねる。……そう、そこが一番の問題なのだ。正直に事情を話せば、殺されることはないだろうが、十中八九脳内

は精査される。
　腹の内を調べるには、脳味噌の中身を覗いてしまうのが一番手っ取り早いし、学園都市ではそれが可能だからだ。ただ、そうなると困るのは私や黒花だ。脳内を覗かれてしまうと、転生関連の情報も漏れてしまう。
　アレイスターにそれが知られれば、間違いなくオシマイだ。私も死んで、黒花も死ぬ。デッドエンド一直線である。

　先ほど考えたように、脳内に水を入れて昏倒させ、とりあえず意識不明の少女として保護するということも考えたが、これも難しい。そもそも脳内に水を入れる作戦は、その後の黒花の身柄の安全を一切度外視した作戦だ。
　苛立った麦野に消されるか、よしんば命の保障がとれたとしても待っているのは精密検査と言う名の脳の精査。あるいはあの『カエル顔の医者』に掛かればなんとかなるかもしれないが、流石にそれはリスキーな手段だ。

『でも……どうしましょう……』

　二人して頭を悩ませているが、解決策は一向に見えない。まあ、ほとんど詰んでる状態だし、私や黒花のような凡人にそう簡単に解決策が思い浮かんでもおかしいのだが……。
　最悪、カエル顔の医者のところに瞬間移動（テレポート）してやるか？　滞空回線（アンダーライン）もあそこには通ってないだろうし。そこで整形手術して身元を変えてから……うーん、手間がかかるな。これは最終手段か……。どうしたものか……。

　んん？　待てよ？

　そうだ……この手があるじゃないか。

私は自分の頭脳の出来の良さが恐ろしくなった。

07（後書き）

小豆は与謝野のこの世界や人間を小説の登場人物としか見ない態度に憤慨していますが、
実は彼女も人のことは言えない状態だったりします。
しっかりハーレム作っちゃってますし、ここまで原作から乖離が進んでいるのに最終的にアレイスターは上条さんが何とかしてくれるって盲目的に信じているところも……。

三月二八日修正

08

思考が袋小路にはまってしまったらどうしたら良いだろう？

簡単だ。現実の袋小路に当てはめて考えてみればいい。

現実に袋小路にはまってしまったとき、自分ならどうするだろう？

普通に考えたら、引き返す。だが、もしも今まで歩いてきた道が綱だったら？　ターンしようものなら、落ちてしまう。なら、どうしようか。

＊＊＊

『というわけで、沿受ちゃん。明日からウチのお手伝いさんとして働いてもらうから』

『ええー……それは流石にバレるんじゃ～……』

さて、謎かけの答えをいい加減提示しないとな。

答えは『飛べばいいじゃん』。

袋小路だからと言って、天井があるなんてどこにも書いてないし言ってない。勿論、飛べないとも書いてないのだから飛べたって別

に不思議ではない。別に飛ばなくたっていい。
目の前の壁をブチ壊すのもアリだし、綱から落ちないようにしがみ付いて戻ってみるのもアリ。そもそも普通に動いたりしないで、瞬間移動（テレポート）してみたりするのもいいかもしれない。

何が言いたいかというと、前提を前提として扱う必要などどこにもないのだ、ということ。たとえば、黒花をそのまま紹介すれば危険なら、危険じゃない紹介の仕方をすればいい。
今日中にお手伝いとして書類を捏造し、明日「コイツ、私の御付兼スパイ」とでも紹介すればいい。当然、それだけの簡単な紹介をして納得するほど『アイテム』が馬鹿じゃないことは分かってる。
そこは私の腕の見せ所だ。御付なら私の近くにいても不自然じゃないし、スパイなら今まで私のそばにいなくてもおかしいことはない。
勿論、お祖母ちゃんに話は着けておくつもりだ。お祖母ちゃんの私室には滞空回線（アンダーライン）も進入できないことになっているし、今夜そっちに行くか。

『大丈夫大丈夫。ウチ、穏健派だからセキュリティはそこまで厳しくないし』

勘違いしてもらっては困るがセキュリティが厳しくない、というのはあくまで「付け入る隙がある」という意味での『厳しくない』だ。当然一般人に突破できるほどのセキュリティではない。
内部で、尚且つそれなりの権力を持つ私だからこそ「そこまで厳しくない」という楽観的な評価を下すことができるのだ。

『それより、沿受ちゃんは自分の心配をしたほうがいいんじゃないかなぁ？　書類は偽造しておくとはいえ、あんまりおかしな挙動だと怪しまれるよ？』

『ひいいい、それは困ります～！』

黒花はあせりながら風呂から上がる。大方、一夜漬けでもいいからお手伝いさんの所作を学ぼうといったところだろうが……、彼女は気付いているのだろうか？　どっちにしても書類の捏造とお祖母ちゃんへの話通しがあるから今夜は身を隠してもらうことに……。

＊＊＊

「随分長風呂だったわね？」
「そう？　いつもこんなものだけど」

さて、風呂から上がった私は寝巻きに着替えて頭から湯気を立ち上らせながら自室に戻ってきていたのだった。麦野が私のほうに訝しげな視線を向けてくるが、その程度で動じる私じゃない。……にしても麦野、鋭いな。

黒花は焦って風呂場から出ようとしてお手伝いさんに見つかりかけたので、緊急措置として『割裂空洞（ダークホール）』の中に仕舞っている。
『割裂空洞（ダークホール）』というトンデモ空間の中に仕舞って放置というと、

そのまま次元遭難みたいなイメージがあるが、アレは一応一次元での座標演算によって位置を指定してるから、能力で座標移動させない限りはまったく同じ座標に『割裂空洞（ダークホール）』を展開し直せば簡単に回収できる。

とりあえず今後の為にウチの仕事のマニュアルと制服（一応注釈しておくと、清掃員の着るような服装を女性っぽくしたものだ）を穴に放り込んでおいた。

次に彼女を引っ張り出すころには、とりあえずお手伝いさんに見つかっても不審に思われない程度にはなっているだろう。

部屋を見渡すと、『アイテム』の面々は私のベッドの上で雑誌を読んだりトランプしてたり携帯いじってたりと……お前ら修学旅行ではしゃぐガキか。

私がいない間にもう一つのベッドは届いてきていたようで、私のベッドで絹旗が映画雑誌でB級漁り、麦野が携帯いじりを、隣のベッドでフレンダと滝壺がトランプをやっていた。

「フレンダちゃん、滝壺さん、何やってんのー？」

とりあえず彼女たちがツッコミ待ちなのを察した私は、そのまま思惑に乗ってやるのも癪なのでボケに乗っかることにする。

「スピード」

「結局見て分からない？　ってうおっ滝壺速ッ！！　速度（スピード）めっちゃ速ッ！　結局貴様今まで実力を隠していたなーっ！？」

スピード――分からない人はググってほしい――をやっているらしい二人は、それっきりまた二人の世界に入ってしまった。

仕方がなく私は絹旗の方へ寄って行った。絹旗の読んでいる特集はやはりB級ホラーやらC級アドベンチャーな映画ばかり載ってい

る。

「……それ、面白いの？」

「いーえ、超面白くないです。ですが、たまにこう……超ビビッ！　と来るのがあるんですよー！　そういうのを見つけたときの快感と言ったら……これはもう超たまりませんねー！！」

そういって絹旗はこの映画は間違いなくクソだ、とかこの映画は見込みがあるかもしれない、とか、Ｂ級Ｃ級映画の薀蓄を垂れ流し始めた。正直どうでもいい内容なのでスルーして次なる相手――麦野のほうへ向かってみる。

流石に携帯の中身のぞくなんてデリカシーのない真似はできないので、隣に寝転ぶことで辛うじて存在をアピールする程度だが。……麦野は清々しいまでにスルーしている。

やることもなくなった私はおもむろに立ち上がり、四人を一度に視認できる位置に立ち、

「っておまえらくつろぎすぎやないかーい！」

気のないツッコミをかました。

反応はなかった。

＊＊＊

「と、言うわけで最中お祖母ちゃん、書類の偽造をお願いしたいんだけど」
「……また、厄介ごとですか。『暗部』の方に協力を頼んだことだし、これからは安泰だと思ったのですが」
そんなわけで私はお祖母ちゃんの自室に乗り込んでお願いをしているのだった。私の傍らには、妙に萎縮した黒花が佇んでいる。作業服を着ているから、結局のところ今更こっちに作戦を変更する意思はない。
『お願い』というよりは『報告』といった方がよさそうだ。
「まあねー……。ま、これが片付けばしばらくは安泰なんじゃないかな？　学園都市の人材も無限じゃないしね」
剥離要素（エラーポイント）に限らず、私と敵対する組織は学園都市の内部に存在する組織だ。そして、学園都市の人口は無限じゃない。その数は二三〇万人、しかもその八割は学生。
暗部だから公式に発表できない人間がいたとして、それはどれだけ多く見積もっても一〇〇人前後。中学時代の暗部大戦争（仮）で大半が死亡してるから、新たに人員を投入したとしても長続きはしない。
つまり、現状は決して無間地獄というわけではないのだ。
「はぁ……、小豆ちゃんのポジティブ思考には頭が下がります。で、そこの少女は？　あなたの言っていた『剥離要素（エラーポイント）』とやらでしょうか？」

そういって、お祖母ちゃんは黒花のほうへ視線をむける。黒花はお祖母ちゃんの視線に威圧感を感じたのか、びくりと体を震わせた。

……無理もない。おばあちゃんには『剥離要素（エラーポイント）』は生かしてはおけない危険な集団だ、と説明してるわけだし。直接向けられていない私は気付かないが、きっと黒花はお祖母ちゃんから途轍もない殺気を感じているはずだ。

「大丈夫だよ、お祖母ちゃん。彼女は信用できる。まあ、仮に裏切ったとしても大丈夫。彼女に私は殺せないから」

心理同調（コンフォーミティ）。この能力が嘘じゃないのは確実だ。原理もあれから吟味してみたが、不自然なところはなかった。能力が使えないことに気がついてからついた急造の嘘ではないし、あの能力ならばもう能力的に頭打ちだろう。

とすると、心理同調（コンフォーミティ）で私を殺す手段と言えば、自分が自殺してしまう程度しかない。というのも、彼女は「他者と心を同調（シンクロ）させることで思考を伝えている」のだ。

何もかも同調（シンクロ）させるほどの強度（レベル）は彼女にはないから、心に強く思った事柄だけ、と但し書きはつくが。ならば、彼女が実際に自殺してしまうほどの自分への殺意を同調させれば、上手くいけば……道連れを生み出せるかもしれない。

「わ、私は……黒花沿受、と言いますー……。剥離要素（エラーポイント）の、ボスの近くにいました」

「はあ、『ボス』ですか……。それではまず、『剥離要素（エラーポイント）』という組織の形態や構成員の能力を教えてもらいましょうか？」

お祖母ちゃんは黒花のカミングアウトにも特に動じず、質問を返

した。

お祖母ちゃんの言葉に、私は「あ」と声を漏らしてしまった。…そういえば相手の能力を聞くの忘れてたな。与謝野のあまりのクズさ加減に我を忘れていたのか……。反省だ。

「ええと、はい」

黒花は能力を話すことに躊躇しているようだった。多分、滞空回線（アンダーライン）のことを警戒しているのだろう。

非公式の超能力者（レベル5）ということは、それは自称のはず。麦野たちが知らなかったから少なくとも裏第〇位（アナザーナントカ）はない。で、それを話してしまえば、与謝野が暗部に狙われる可能性がある。

この場合の『狙われる』とは、命の危険という意味じゃない。捕まって、脳をいじくられて研究される、という意味での『狙われる』だ。そして、脳をいじくられるということは……あとは言うまでもない。

でも、その心配をお祖母ちゃんに言うわけにはいかない、と。だって公式には彼女は滞空回線（アンダーライン）の存在を知らないんだし。

『滞空回線（アンダーライン）、ここには通ってないから安心して』

私が念話（テレパシー）でそう告げると、彼女はほっとしたような様子になる。傍目からみても分かりやすいというのはある意味可愛らしいが、いずれ直さなければいけないな。

黒花には、常に『心理同調（コンフォーミティ）』を使わせるように言ってある。彼女の存在価値（というとそこはかとなく可哀想だが）は八割がたこの『通信』にあるといっても過言ではない。

後の二割は『アイテム』勢と違って打算抜きでからかえるこの程よい無害さだろうか。癒しはいつの世も必要なのである。

「はい。ええと……人員の数は私にも良く分かってません。ボス――与謝野菱形っていうんですけど――が勝手に引き抜いちゃうんで……。だから、構成員の連絡先も私は八人程度しか把握できていません。あとは、与謝野でも把握し切れているかどうか……。ただ、私が知る限りだと一〇人以上はいた気がします。多分、あれからもっと増えてるんじゃないでしょうか……。能力については、私が知ってるのはボス含めて四人程度です。といっても、既に親船さんに二人殺されちゃってますけど」

直接殺したのは私じゃない。護衛（ボディガード）の一人と、あと麦野だ。まあ、私が殺したといっても過言じゃないんだがな。

「一人は風間（かざま）　吹抜（ふきぬけ）。『空力使い（エアロハンド）』の能力者で、通称『空間支配（ライジングゾーン）』。地面に能力を使うことで局地的な上昇気流と擬似妨害気流（ウィンドディフェンス）を展開し、内部の気圧を自在に操る能力者です。本人は『強能力者（レベル３）』のつもりだったようですが、諸般の事情でおそらく『大能力者（レベル４）』相当の力を持っていました。彼は、最初に親船さんと接触して死亡してますね」

諸般の事情？　と聞きたくなったが、おそらくあとで説明があるだろうとこらえておく。

にしても、あそこまで精密な気圧操作を強能力（レベル３）程度の空力使い（エアロハンド）のみでこなしていたことに違和感を感じていたが、やはり何らかの事情で能力が強化されている、と。

「もう一人は穂村（ほむら）　稲刈（いねかり）。もとは『発火能力（パイロキネシス）』の『異能力者（レベル２）』でしたが、彼も諸般の事情で『強能力者（レベル３）』となっています。酸素が詰まったビンを持ち歩き、中の酸素に引火させて爆発を誘発する『酸素爆炎（エクスプロージョン）』という技を自分の通称にしていま

した。彼はおそらく『原子崩し（メルトダウナー）』に殺されてますね？」

これは、麦野に消された（文字通り）奴だな。こいつは正直、能力っつーかこれただの応用じゃないか？　と思ったりしたのは秘密だ。酸素て。絹旗が液体窒素持ち歩くのと同レベルだと思うんだが、果たして。

「もう一人……これがおそらく剥離要素（エラーポイント）の中でも一番の切れ者だと思うのですが、引潮（ひきしお）　海里（かいり）という少年です。『水流操作（ハイドロハンド）』の『大能力者（レベル４）』で、本人に自覚はないですが、諸般の事情によりおそらく『超能力者（レベル５）』に片足を突っ込んでいる状態だと思われます……。能力としては、空気中の水分から自分が扱えるレベルの水の塊を用意したり、分子レベルで水を操作することができます。能力通称は『凝結氷槍（クリアランサー）』。その名のとおり、主に氷を扱い、蒸気の類は苦手なのが唯一の救いですかね」

なるほど、超能力者（レベル５）の領域に片足突っ込んだ大能力者（レベル４）か。私の知る能力者で言うと、結標あたりと同レベルといったところだろうか？

切れ者というからには、他の剥離要素（エラーポイント）とは違い、ある程度現実的な思考もできるのだろう。要注意、だな。

「最後は私も、彼――与謝野からの伝聞でしかないんですけど。与謝野菱形の能力は……異能略奪（スキルインターセプト）。あらゆる異能を奪い取ることのできる能力、……らしいです。詳しいことは不明ですが……剥離要素（エラーポイント）の構成員の能力が私を除いて全員強能力（レベル３）以上なのは、彼の能力が原因、ということを、彼自身から聞きました。彼はハッタリを味方にかますほど用心深くないですから、恐らく真実です」

……異能を奪い取り、そして能力を高める……？　超能力の法則

をガン無視した能力だな。
　奪った分の異能を与えて能力を強化してるとか？　いや、それはないだろう。超能力の強さは『演算能力』の高さで決まる。その『演算能力』もほいほい渡せる能力ではない。『演算』の性能というのは脳の性能だ。性能という概念は単純ではない。
　さまざまな要素があり、その結果として『性能』というモノが現れているだけ。その性能を簡単に移し変えるなど、少なくとも『科学』にはできない。できるとしたら、『魔術』くらいか。
　この学園都市で魔術と接触をとれるはずもないし、その可能性もゼロだろう。となると、異能（超能力）を奪うのも能力を高めるのも、別のとある能力が根源のようだな。

「なるほど、相手は能力者の天敵というわけですね」

　お祖母ちゃんは、私や『アイテム』にとっては最悪の相性であることを確認し、それでもなお柔和な笑みを崩さなかった。
　……そういえば、この状況大ピンチなんだよな。コッチには並行結合（シンクロニズム）と原子崩し（メルトダウナー）、二つの超能力（レベル５）があるんだし。
　超能力（レベル５）の能力を奪われてしまったら、そりゃーもう大ピンチだろう。手がつけられなくなってしまうやもしれん。

「それでは、はい。小豆ちゃんにはこれを」

　お祖母ちゃんは、そういって引き出しから籠を取り出した。中には、黒光りするモノが入っている。……拳銃？

「ＨｓＣＨ－０９、通称揺り籠（マザーハンド）。反動を極限まで軽減し、たとえ赤ん坊でも使えるようにと開発された学園都市謹製の拳銃です。赤子でも握れる軽重量軽反動に加え、特殊なグリップを使用しているので手を握らなくても強い力をかけない限り取り落とすことはないで

しょう。さらに、特殊な弾丸を使うことで威力の底上げも行っているので火力不足も解消しています。私でさえ使えるのですから、若い小豆ちゃん達でも軽々使えるでしょう？　ただし、その弾丸は特殊なモノなので、現在その拳銃に入っている弾丸を使い果たしてしまえば残りはありませんから、注意してくださいね」

いや、それは分かるんだがお祖母ちゃん……。

「でも、何で六丁もなのさ？　私一人じゃこんなに持てないよ？」

「私がいつ『あなた一人にあげます』と言いました？　能力が使えないなら、そこの黒花さんや『アイテム』の方々も危険な目に遭うのでしょう。必要なときが来たら、あなたが『こんなこともあろうかとーっ！！』と皆さんに手渡せばいいのですよ。いいですね？」

おお……さすがお祖母ちゃん。なんで『表』のお祖母ちゃんがこんな物騒なモン持ってんのかなって思ったけど、多分私の為に取り寄せてくれたんだろうと納得する。

またお祖母ちゃんに余計なことさせてしまった……。銃の確保は私が自分でするつもりだったのに。ありがとう、ごめんなさいお祖母ちゃん。

「……あのっ」

黒花が遠慮がちに声を上げる。

その声に、私とお祖母ちゃん、二人の視線が集中した。

「与謝野の当面の目的について……知ってることがあるんです」

……？　与謝野の目的？　表向きには学園都市への反逆、真実はハーレムを作ることじゃないのか？　まあ尤も、どちらも成功

するとは思えないが。

「『幻想御手（レベルアッパー）』事件」

黒花の口からその言葉が出たとき、私は思わず息を呑んだ。幻想御手（レベルアッパー）事件。最近学園都市をにぎわせている事件だ。たしか、御坂たちが挑んでいる事件だったはずだが……。

「その事件に、与謝野は介入するつもりです。彼の目的は……女の子を侍らせること、らしいですから。その事件に超電磁砲（レールガン）が介入しているという情報を手に入れた与謝野は、この事件に介入することを決めたらしいです」

「……なるほど……。学園都市を統括する私の立場からしてみると、事件に介入……解決を協力してくれるのはありがたいことですが」

黒花の説明に、最中お祖母ちゃんは顎に手を当て頷く。統括理事会は木山春生が一連の事件の犯人であること、それから御坂を初めとした風紀委員（ジャッジメント）一七七支部の面々が解決に乗り出していること、犯人である木山と極めて密接に接触していることなどを知っている。

お祖母ちゃんの性格上、そう言ったモノは見過ごせないのだが、今回に関しては『裏』が動くことになっているらしく、お祖母ちゃんが動くことは許されないらしい。

そんなお祖母ちゃんの立場からしたら、確かにそうかもしれない。が、お祖母ちゃんの本心がそうでないことは私の目から見ても一目瞭然だ。

「マズイですね。女の子を侍らせる、つまり御坂美琴さんもその対象と言うこと。噂に聞く御坂さんが、そう簡単になびくとは思えない」

私はお祖母ちゃんの言葉に静かに頷く。そして、その事実を突きつけられて焦れた与謝野がとるだろう行動――、

「その能力を使って、超電磁砲（レールガン）を奪い取り、力尽くで我が物にする。そうだね、お祖母ちゃん」

私の言葉に、お祖母ちゃんはゆっくりと頷いた。そう、それこそが問題なのだ。超能力者（レベル５）の、それも第三位の能力が奪われる。

アレイスターが何も手を打っていないとは思えないが――私の予測では、御坂は量産能力者（レディオノイズ）計画の時点で用済みだ。もしかしたら、そのまま何もしないかもしれない。

そして、その先に待っているのは――――、来るべき絶対能力進化（レベル６シフト）計画での、御坂の死亡。彼女は、能力がないからといって誰かを見捨てるタマじゃない。

それを知った上条の心が、私の知る上条であり続けられる保障はない。それはつまり……私の生存確率の大幅減少。

もちろん、お祖母ちゃんはそこではなく、超電磁砲（レールガン）を失うことの危険性（リスク）、それから能力を失った彼女自身の身を案じてこの話をしているのだろうが、私にとってはソッチのほうが重要だ。

「……介入、するしかないみたいだね。私たちも」

私の言葉に、黒花は萎縮しながらも力強く頷いた。彼女としても、与謝野の暴走はなんとか食い止めたいのだろう。最中お祖母ちゃんも、柔和な笑みを浮かべつつも目は真剣そのもの。お祖母ちゃんも与謝野の行動に思うところがあるのだろうか？

「で、私は書類の偽装をして、黒花さんをあなたの侍女にすればい

いのですね？」
「じ……っ！？」
「うん、そうなるね。……まあ、侍女というにはあまりにも泥臭い制服だけど」
そう言って、私は黒花のほうを見る。先ほど「清掃員が着るような服装を女性っぽくしたもの」と言ったが、正直それでも女性らしくはない。まあ、ここで彼女にメイド服を～……なーんて「そんな馬鹿な」な展開は起きないんがな。面倒くさいし。
ところで、なんで黒花は侍女って言葉に反応したんだろうか。
さーて、これでとりあえずお祖母ちゃんの許しも得たし、明日黒花をお手伝いとして紹介して、それから麦野たちにスパイだと説明。後は適当に剥離要素（エラーポイント）の尖兵を狩り続ける日々が始まる……。
タイムリミットは抗争が始まるまでの二ヶ月、か。十数人を始末するとなると、随分大変な作業になるだろうけど……頑張らざるを得ない。私の命が懸かってるし、な。
よし、方針確認終了。
とりあえず黒花をお祖母ちゃんに預けて私は自室に戻るとす、
「いっ、異議ありですッ！　侍女なら相応の服装を、たとえばメイド服とかメイド服とかを所望しますですッ！」
……そんな馬鹿な。

＊＊＊

で、とりあえず今晩は黒花も最中お祖母ちゃんの私室で寝泊りして、明日から復帰、という形で落ち着いた。

彼女の立ち位置は『私の腹心』。少し前から私のことを狙っていた組織、仮称『剥離要素（エラーポイント）』の実情を探るためのスパイ。ちょっと抜けてるところはあるけど仕事はしっかりこなせる、そんなデキるメイドの精神感応能力者（テレパス）。

……という設定。

まあ、ほとんどの設定に関しては問題ない。私の御付にするところもスパイっぽい感じにするところも精神感応能力（テレパス）を公表するところも、私の思い通りだ。

……だが、おかしな点が一つだけ。

何さ、「メイド」って。しかも「スパイなら拳銃持ってないと駄目ですよね」とか言って拳銃先行配布されてるし。戦うメイドってお前、某ロベルタさんかっての。

そのことを念話（テレパシー）で問いただしてみたら、「私前世でコスプレイヤーだったんですよねーてへへ☆」と意味不明な回答が。

なんでも彼女の前世は私と違って普通のオタク少女だったらしく（私の前世が男ということは黙っておいた。なんかギクシャクしそうだし）、私に作業服を手渡されたときから不満を持っていたらしい。

流石に、かわいいものを着たいという欲求は前世からの筋金入り

女の子なだけはある。
ただ、メイド服がそんな簡単に手に入るのか？　という疑問はあるのだが……。
……お祖母ちゃんなら多分もう手に入れてるだろうな。何のチートだよこれ。

いや、現状殆ど計算の範囲内なんだけど。
黒花の持つ情報一（表向き）に関してもお祖母ちゃんも交えて打ち合わせたから抜かりはないし、『アイテム』四人を身辺警護に回らせて、傍受されない通信ができる通信係を手に入れて、敵ボスの能力のヒントも得て。
これ以上ないまでに計算どおり。全てが私の手のひらの上で踊っているといっても過言ではないレベル。
……でも。

……でも、なんだかな～、これ……。

08（後書き）

今回で書き溜め分が切れたので、次回からは不定期更新になります。
尚、私の素の筆速はとても遅いので、長間隔(とがし)不定期更新になるかもしれませんが、ご了承ください。
あまりにも遅くなるようであれば、不定期更新のタグを入れるのも検討してみます。

三月二八日修正

09

翌朝、私の私室にて、黒花は『アイテム』のメンバーと顔合わせした。

「初めまして。お嬢様付きのメイドの、黒花沿受と申します。以後よろしくお願いします」

黒花はそういうと完璧なメイドの『礼』をした。そのあまりのメイドっぷりに、『アイテム』の連中も唖然としている。

というか、私自身も唖然としている。……確か、黒花の前世はただのオタク少女で、今生も土御門一（妹）みたいな専門学校生じゃない……よな？

……え？　何でコイツこんな洗練されてるの？

『沿受ちゃん、『それ』、どこで？』

『私、こういうのって形から入るタイプなんですよね～』

私の問いかけに、黒花はのほほんとした口調で念話（テレパシー）を返してきた。

『形』ってレベルじゃねーぞ、マジで。

＊＊＊

「へえ、それで剥離要素（エラーポイント）とやらの実情を探るために、今までスパイに、ねぇ……。何で私たちにまで秘密にしてたのよ？　報告だと、私たちを護衛に指名した理由は能力者のチンピラ集団に絡まれてて命の危機だから、とかいうふざけた話だったけど」

『ボスの能力』と『組織の体系』、『構成員の能力』について黒花が説明し終えると、『アイテム』の連中から怪訝な視線が帰ってきた。私のベッドに腰掛けながらどこか剣呑な雰囲気を醸し出して黒花に問いかけているのは、麦野だ。

うん、麦野の違和感はご尤も。急ピッチで決めた内容だから彼女の言うような矛盾がそこかしこで出てもおかしくない。だが、とっくに想定内な疑問に対して私が何の対策もしていないわけがない。

「機密でしたからー。一応念話（テレパシー）で報告してはいたんですけど、内容が内容ですし、ねー？」

そういって、黒花は瀟洒なメイド姿には到底合わない愛らしい仕草で私の方へ目配せをした。敵ボスの能力とか組織の体系とか諸々は外でお話しするにはあまりにも重要すぎる情報だ。納得もするだろう。

しかもこれには、その情報を私からではなく黒花から言わせることで、黒花の頭をよく見せ、不信感を消す効果もある。劇的な効果があるわけではないが、こういう信頼関係は第一印象が大事だし、な。

第一印象でナメられたらちょっとしたことで「やっぱこいつは」と思われるし。

「確かに、超万全を期してるとはいえ、慎重に慎重を重ねないといけない案件ですしね……」

絹旗がそれに賛同の声を上げる。ここまでいけば一応、黒花の信頼は取り付けたも同然だろう。尤も、表面上だけではあるが。

「で、その案件で重要な情報なんですがねー。『幻想御手（レベルアッパー）』事件。その解決に、与謝野が乗り出しているんですよ～」

「剥離要素（エラーポイント）のボスが？　結局どうして？」

黒花の更なる新規情報に、フレンダが首をかしげる。

「幻想御手（レベルアッパー）事件を解決して女の子を囲むとかなんとか。私には良く分かりませんでしたね～」

黒花はのほほんとした調子でフレンダの質問に答えた。与謝野が事件に介入する理由なんて『アイテム』にとってはどうでもいいものだろう。

重要なのは、今回の依頼人の敵がどこに現れるか、という問題のみ。動機とかまで説明する必要はない。

「へぇ、剥離要素（エラーポイント）が『幻想御手（レベルアッパー）』事件に……ねぇ。じゃあ、私たちは攻める必要ないわね」

「え？　なんで？」

黒花の報告に、つまらなそうな表情で語る麦野。……警備員が倒してくれるから、みたいな希望的観測を抱いているとか？　まさかだな。与謝野の能力を聞いた以上、警備員に勝ち目がないことくらいは理解できるだろう。

能力者を何人か連れてくれれば、奴は事実上の多才能力（マルチスキル）持ちになる

わけだし、な。

「『幻想御手（レベルアッパー）』事件の主犯……木山春生だっけ？　アイツの始末、もともと『アイテム』が任されてたのよねぇ」

……原作を知っている私からしても初耳だったが、まあこれは想定内だ。一万人もの能力者を巻き込んだ、学園都市を揺るがす大事件。

統括理事会に木山の情報があがってることからも、上が彼女のことを煙たがっていることは分かりきっていた。

「ま、放っておいても沈静化する仕事に私たちを使おうって態度が気に食わなかったから請けるだけ請けて連中が泣き付いてくるまで催促を無視してやるつもりだったけどね。尤も、今回の親船の護衛任務で指名されちゃったから依頼はキャンセルしたけど」

……そういう背景があったのか。つまり、あの状況は御坂達が動いていたからこそ“成った”ということか。アレイスターにしてみたら、『アイテム』に任せても御坂に任せても幻想猛獣（ＡＩＭバースト）が現れるっていう結果は同じだったわけだ。

しかし、今回の場合は『アイテム』は動かないし、御坂も与謝野の所為で動かすのは危ない状態にある。それは分かった。……だが、それがどうして『攻める必要がない』に繋がるんだ？　……まさか。

「……」もともと（、、、、）『アイテム』が任されてたってことは」

「ご名答。『アイテム』の代わりに別の暗部組織が始末を受け持つことになったってわけ」

「その組織が何だか分かるかな」

麦野が答えるが私はそれどころじゃない。もしかしたら。『あいつ』が出てきたら大変だ。

『メンバー』や『ブロック』、『迎電部隊（スパークシグナル）』や『猟犬部隊（ハウンドドッグ）』とかならまだいい。木原はまだしもそれ以外の連中じゃ多才能力（マルチスキル）には敵わないだろう。木原は直接出てくるはずないし。

だが、だがあの組織が合流してしまえば……！！

麦野は少しばかり顎に手を当て、思案する。

「……第二位のいる組織だったか。『スクール』ね、確か。幻想御手（レベルアッパー）の原理が暗部で発表された途端、奴ら目の色変えて依頼を寄越せって煩くて……。面白かったから絶対譲ってやらねーって思ったけど、あんたの依頼がきたから譲ってやったのさ」

麦野はククク、と愉快そうに喉を鳴らした。

マズイぞ……。『スクール』、そして幻想御手（レベルアッパー）の原理が発表された途端……。ここから導き出されるのは、垣根が『幻想御手（レベルアッパー）』の可能性に気がついた、ということ。

原作では幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は木山のミスによって生まれた『災害』という形でノータッチだったが、私はそうは思わない。

おそらくアレは、ヒューズ＝カザキリの試作段階（プロトタイプ）。木山にその意思はなかったが、アレイスターはそのつもりだったのだろう。

アレイスターは木山の計画が確実に頓挫することを予見し、その結果幻想猛獣（ＡＩＭバースト）が現れることまで予測して泳がせていたのだ。

でなければ、生徒を無闇に危険にさらす、学園都市に不利益しかもたらさない行為をこの街があそこまで見逃すはずがない。

そして、おそらく垣根もまた『幻想御手（レベルアッパー）』によって生まれるモノ

を予測できた人物のうちの一人。無数のＡＩＭ拡散力場を扱える多才能力（マルチスキル）ならば、『何か』を生み出し得る、そしてその能力を自分の為に応用する。

……垣根はそう考えているはずだ。そして、それは絶対にさせてはいけない。

彼が一方通行（アクセラレータ）の黒翼を見たときに悟ったこと、それを幻想猛獣（ＡＩＭバースト）によって悟られる可能性があるからだ。そしてもし悟られてしまえば、来るべき暗部抗争で一方通行（アクセラレータ）の黒翼が通用しなくなるかもしれない。

もしそうなってしまえば、一方通行（アクセラレータ）は死ぬだろう。それはマズイ。正史崩壊的な意味で非常にマズイ。

「尚更、動かなきゃ駄目じゃん」

「はぁ？　黙っても潰されてくれるのにどうしてそんな面倒くせぇことするのよ？」

麦野が不思議そうに首を傾げて私の方を見る。いや、駄目なのは私の都合なのだが……。勿論、これに関しても言い訳は用意している。

「麦野さんたちには言ってなかったね……。幻想御手事件（レベルアッパー）、これって実は、すでに動いてる人たちがいるんだよね」

この説明に至って、麦野の顔色が変わる。それに伴い滝壺たち他のアイテムの面々の顔色も厳しくなっていった。黒花は相変わらずのほほんとしていたので念話（テレパシー）で表情を引き締めるよう叱っておいた。

「風紀委員一七七支部の面々と、超能力者（レベル５）第三位……超電磁砲（レールガン）御坂美琴が動き始めています」

私の言葉を引き継ぐように言葉を繋いだ黒花に、一同が息を呑む。

そう、これこそ一番の問題。

垣根にかかれば、木山を潰そうとか馬鹿なことをしている与謝野など物の数ではない。異能略奪（スキルインターセプト）だかなんだか知らないが、普通に射程距離外から潰されて終わりだろう。

だが、それは御坂も同じことだ。

おそらく、垣根は幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の観測とそれによる演算領域（クリアランス）の拡大の取得を目論んでいる。つまり、正史における木山と御坂の戦闘の勃発まで行動は起こさない。それは逆に、『確実に御坂と垣根が接触する』ということでもある。

第二位と第三位――第四位と第三位の差など比較にもならない、圧倒的な差。アレイスターの計画（プラン）の『候補』であるということ。

それだけの、圧倒的差がある相手が……木山を殺そうとしている。御坂の性格上、殺人など看過できるわけがないだろう。……それが、たとえ友人の心をもてあそんだ人物だとしても。

何度も言うとおり、御坂の死亡は予想外の事態を引き起こす。

この時期なら上条の記憶も失われるし、上条の心に影響が出るということもないが、ここで御坂が死亡すれば当然上条が絶対能力進化（レベル６シフト）計画に気付くこともできなくなり、妹達（シスターズ）の生き残りも生まれない。

そうなるとアレイスターの計画（プラン）に支障が出る。いや、アレイスターのことだからそれは阻止するんだろうが、その結果どんな影響が出るか、私には分からない。

私が正史の流れを知っているというのはこれ以上ないアドバンテ

ージである以上、不用意にそれを変更させるのは避けなくてはならない。
私はただでさえ命の危険と隣り合わせな生活を送っているのだ。無駄なリスクは背負ってはいけない。

「なるほど、確かに第三位は……駄目ね」

麦野も頷く。
しかし、麦野の言う「駄目」と私の言う「駄目」はおそらく別の意味を指している。麦野の言う「駄目」というのは、御坂の両親の影響力を考えてのことだ。
思い出して欲しい。御坂の母、美鈴は学園都市の保護者代表だ。その娘が、警備員（アンチスキル）という表の人間の前で、垣根提督という暗部に虐殺されたら、いったい彼女はどう出るだろうか？　学園都市は、どうなるだろうか？

私の視点からしたら、『そんなことになる前にアレイスターが動くから心配要らない』なのだが、麦野たちの視点からしたらそんなことは知ったこっちゃないわけで。学園都市の崩壊は、自分たちの食い扶持を失うことを意味する。

「あ〝ぁー、クソ。面倒くせーなァー！　ンでクソマザコンの所為で私たちが動かなきゃならねーかなァ！」

麦野は苛々しながら頭を掻き毟る。彼女も、垣根提督と戦うことのリスクについては正しく理解しているのだろう。
あの暗部抗争では頭に血が上っていた為浜面に指摘されるほど無謀な行動に出ていたが、平常時の彼女はそのくらいのリスクコントロールもできるということだ。伊達に『アイテム』のリーダーをしているわけではない。

「麦野、仕方ないわよ。結局、他にやるような奴なんていなさそうなんだし」

怒っている麦野の隣に、フレンダが座って宥め始めた。……よくあの状態の麦野と接することができるな。私なんかとばっちりが怖くてやってられない。

「……仕方ないわね。じゃあ、フレンダ下部組織と連絡とっといて。私朝ごはん食べてくる……。まったく、朝っぱらからこんなクソ情報聞かされたこっちの身にもなれってのよ」

「あはは～、ごめんね、麦野さん」

垣根、与謝野、木山、御坂、麦野（は味方だけど周りを省みたりしないだろう）の怪獣大戦争に巻き込まれた私の身にもなれっての。

『……なんとか、『アイテム』の協力は取り付けられましたね』

『まあね～、麦野さんの機嫌は損ねちゃったけど。これで、とりあえずバッドエンド直通ルートは回避かな？』

麦野が部屋を出たのを確認した黒花が念話（テレパシー）を送ってきたので適当に答えておく。

さて、今日は七月二二日。もう一六年も経ってるし、前世の記憶も大まかにしかないから、日付ごとの予知なんかできないが……それでもこの並行結合（シンクロニズム）で、現在御坂たちが何をしているかくらいはわかる。

「それじゃおやふね、私たちも朝ごはん食べてくるね」

「結局、ここのご飯ってめちゃくちゃおいしいのよね～！　昨日も夕ご飯食べたけど最高だったって訳よ！」

麦野が向かっていったのを見て、残りの三人も動き始めた。……そういえば私も朝ごはん食べてなかったっけ。朝食は一日の力なりって言うし、さっさと行くかな。

「それじゃ、私も朝ごはん食べるかな～。沿受ちゃんは？」

「私はメイドですので～。既に朝食は済ませてありますよ」

……もう突っ込むのはやめよう。

＊＊＊

「……『敵を知り、己を知れば百戦危うからず』」

「……？　麦野、結局どうしたの？　いきなり知的なこと口走って。らしくないよ？」

朝食を済ませ、自室に戻って各々好きなことをしていると、いきなり麦野が寝転がっていたベッドから立ち上がった。

私は念話（テレパシー）での黒花いじりをやめていきなり妙なことをのたまった麦野のほうに怪訝な視線を送る。

フレンダの言うとおり、麦野はどっちかというとそんなことを言うよりも「私がいるんだから心配いらねェェんだよォォ！！」とか

言うタイプだ。……いや、流石にそこまで傲慢じゃないか。
　にしても、よくフレンダは麦野に対してそんな愚かな真似ができるな……。そんなんだから胴体真っ二つにされるんだぞ。

「う、うるさいわねっ！　ふと思い立ったのよ！　第二位の『未元物質（ダークマター）』の能力は割れてるけど、あの、なんだっけ……与謝野って奴の能力は『相手の異能を奪う』とか『味方の異能を強める』とか断片的にしか分かってないんでしょ？　だったら、『もしかしたら』ってことがあるかもしんないでしょ！？　ただでさえ第二位がいるんだから、イレギュラーは避けたいと思ったのっ！」

　そう言う麦野の右手に握り締められている携帯の画面には、なんだか良く分からない文章がズラズラと表示されている。
　……ははぁ、これはこの文章に影響されてるってところか。麦野も可愛いところがあるじゃないか。
　それに、相手の能力に関して考察しておくのは重要なことだと思う。勿論決め付けてかかると逆効果だが、アタリをつけておく程度ならかなり有益だ。

「なるほどね。じゃあ、そういうわけで沿受ちゃんお願い」
「は、はい。私の知ってる情報なんてこれくらいしかありませんが……」

　黒花に視線を向けると、彼女は心持緊張した様子で居住まいを直す。さっきまで私にいじられて心の中であうあう言っていた状態ではなく、ピシッとしたメイドモードだ。

「まず、私は相手の心を断片的に読む能力を持っています。これに関しては今朝説明しましたね。
　その能力で、何度か与謝野の思考を読もうとしたことがあります」

黒花の言葉に、私を含めたその場の全員が息を呑んだ。黒花……いくら嫁認定されたからって、ぶっ飛んだ真似するな。

「しかし、彼の心は読めませんでした。それどころか、能力を使ったことが与謝野にバレました」

……なんだと？　それはおかしいだろう。普通に考えて有り得ない。

黒花の『心理同調（コンフォーミティ）』は、あくまで相手の拡散力場や自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を観測して、その様子から計算して、脳内に出力して精神状態を把握するのだ。

自分だけの現実（パーソナルリアリティ）に干渉しているわけじゃないから、演算に不具合を感じてバレる類の能力じゃない。

……つまり、『そういう』能力か。

「……読めてきたわね……」

麦野が呟く。その言葉に、私も頷いた。『同じ系統』の能力者だからか、滝壺も納得した様子になった。

「……？　麦野、それって超どういう意味ですか？」

「私も分かんないわ。結局、どういうこと？」

黒花も、私が念話（テレパシー）で分かってるフリしておけと伝えているが、理解できていない様子だ。

「私と、同じ系統。つまり、ＡＩＭ拡散力場に干渉する能力ってこと」

滝壺が能力の推測を語り始めた。

「そもそも、今朝聞いたくろばなの『心理同調（コンフォーミティ）』の能力は、自分だけの現実（パーソナルリアリティ）に干渉するものじゃなかった。能力者は通常、精神感応系能力者（テレパス）の攻撃に気付けるのは自分だけの現実（パーソナルリアリティ）に接触を受けたときくらい。たとえＡＩＭ拡散力場に割り込みを入れられても、能力が阻害されなければ気付くこともない。でも、そのよさのっていう人はそれに気付けた」

滝壺はそこで一旦言葉を切る。ここに至って黒花や絹旗、フレンダも話の筋が読めてきたのか、表情が凍り付いている。

「ＡＩＭ拡散力場の状態に気付くことができるのは、私と同じようにＡＩＭ拡散力場に関する能力を持っている能力者だけ。つまり、よさのはほぼ確実に、といって良いくらいＡＩＭ拡散力場関係の能力者だと思う」

『能力を奪う』スキルと、『能力を強める』スキル、この二つを繋ぐ共通点が分からなかったから今まで手を拱いていたが、その共通点が『ＡＩＭ拡散力場』だと判明してしまえば後は芋づる式に謎が解けていく。

「おそらく、よさのの能力はＡＩＭ拡散力場を限定的に操る能力。相手のＡＩＭ拡散力場に干渉して、自分だけの現実（パーソナルリアリティ）に強制的にロックをかけて能力を封印したり、相手の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を直接支配することで能力をコピーしているように見せたり、逆に相手の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）の出力を強めることで能力の強度（レベル）を上げているように見せているわけだね」

そういわれて、黒花や絹旗、フレンダも納得したようだ。

恐ろしい能力だが……与謝野に拡散力場に関する知識がない為か、能力を別物に書き換えられたりしない分マシといったところか。

「なんにしても、これで能力の予測が立ったわけだから、戦略も立てられるわね」

「滝壺がいてよかったーっ！　結局、滝壺様様って訳よ！」

麦野が話を締めくくったところで、フレンダが滝壺にだきついて頭を撫で回し始めた。フレンダはどうやら麦野に限らず、『アイテム』のメンバー全員に親しげなようだ。どうして胴体ブッチなんかされたんだろう。

「それじゃあ、超私から提案があるんですけど――」

一連の流れを見ていた絹旗が、鼻息を荒くしながら話し始めた。さて、私も作戦会議に参加するかな――あれ、私って護衛対象じゃなかったっけ？

……まあいっか。

＊＊＊

side other

「……動き始めたか」

『人間』が、呟いた。

男にも女にも聖人にも囚人にも見えるその人間は、逆さづりの状態でビーカーの中に浮かんでいた。

人間の名はアレイスター＝クロウリー。

世界最悪の魔術師とも、世界最高の科学者とも呼ばれている。

「予定通り親船小豆、垣根提督、与謝野菱形、御坂美琴が幻想猛獣（ＡＩＭバースト）と邂逅する。これでプランを一〇省略することができるな。この事件の顛末によっては……プランを最大で二〇省略することが可能だ。取らぬ狸の皮算用は趣味ではないが、親船小豆のことだ、私の期待通りの結果を見せてくれることを期待しよう」

銀色の髪をビーカーの培養液で揺らめかせている学園都市の統括理事長は、モニターに映し出された気だるげな眼差しの少女を一瞥する。そこには、五人の少女と近い将来に起こる戦いに向けて必死に生きるための策を搾り出している一人の少女の姿があった。

09（後書き）

三月三〇日修正
四月一七日修正
四月二一日修正
九月一九日修正

１０？（前書き）

今回は前半は小豆視点、後半は麦野視点でお送りするため、？は？から全く物語が進みません。

10?

「準備はいいか？」

親船邸の玄関前、麦野は真剣な面持ちで私たちを一瞥した。

少女はいつものブランド志向の優雅な格好ではなく、背中周りが大きく開いたシャツに、首元はチョーカー、動きやすそうなミニスカートを履いている。

普段の大人びた格好の所為で年を食って見える（というと殺されるが……）彼女は、今に限っては逆に幼く見えた。

日付は七月二四日。時刻は正午を回った辺り。

私を含めた六人組は、女の子のみであるにも関わらずその辺のスキルアウトにも劣らない緊張感を発していた。……というのも、当然か。私たちがこれから行くのは、ショッピングモールなんかじゃない。

戦場だ。

＊＊＊

数分後、私たちはマイクロバスの車内にいた。
ただのマイクロバスではない。車窓に備え付けられたカーテンはすべて閉じられており、外界の情報を遮断している。このバスは、『アイテム』の下部組織が所有している車両だ。彼女たちという戦略兵器を、安全に護送するためだけの。

全員が落ち着いたのを確認すると、リーダーの麦野が口を開いた。

「最終確認するわよ。まず、第二位は私と親船が足止めするわ。一応、『第四位』が束になってかかるけど勝てるとは思ってない。第三位が『多才能力者（マルチスキル）』と化した木山を潰すまでの足止め、といった形になるわ。絹旗・滝壺・フレンダ・黒花も同じ。フレンダを中心に与謝野の相手をしてもらうけど、唯一の攻撃能力が近接戦闘なこの布陣じゃ仲間を引き連れて多重能力（デュアルスキル）と化した与謝野に勝てるとは思ってない。同じように第三位が木山を潰すまでの足止めっていう形になるわ。聞けば与謝野って奴は相当な数奇者（すきもの）らしいから、木山が敗北したのを確認したらすぐ離脱しなさい」

麦野の、普段の彼女を知るものからしたら異常とも言える謙虚な物言いに、私は内心満足げに頷いた。
あれから二日間。作戦会議と称しながら、麦野の超能力者（レベル５）特有の驕りを矯正するために、私はかなりの時間を費やした。
プライドの高い麦野の機嫌を損ねないように、一々言葉を選びながら『相手を認めるとこんないいことがあるよー』やら『どんな弱小な敵にも常にベストを尽くして最小限の労力で狩る麦野様素晴らしいです』やらいろんなほめ方を試してみた結果、なんとか、本当になんとか、『自分だけでなく味方も利用しつくして最大限の利益を得てこそ真の超能力者（レベル５）ね』と上手く乗せることに成功したのだ。
いや、本当に辛い道のりだった。メンバーの中でも比較的慢心の

ない滝壺の助けがなければこの結果はなかっただろう。

……あー、そういえばこんなことしたら後で麦野と戦う浜面は酷い目に遭うな。今のうちに言っておこう。『ごめんなさい』。……

……それから、『ご冥福をお祈りいたします』。

「各自、退避したら原子力発電所内部に集合。ソッチの手はずは整えてるからセキュリティにかかることはないわ。合流次第、親船の能力で第三学区に借りてる私のプライベートプールまで退避する。プライベートプールの位置は私が覚えてるから問題ないわ。ここまでで質問はある？」

麦野の言葉に、一同は押し黙る。これから始まる激戦に、少なからず緊張してるんだろう。私もしてるし。

フレンダなんか物凄いビビリようだ。高位能力者を潰すことに快感を感じているらしいフレンダだが、それでも化け物の対決に巻き込まれるのは怖くて当然だ。

「はいはーい。質問です」

そんな連中の為に、私は手を挙げた。あまりに場にそぐわない私の声色に、麦野が眉をしかめる。

「何？」

「プライベートプールまで全員辿り着いたら、パーティでもやらない？　ぱーっとさ」

私の平和ボケした『質問』……というか提案に、一同は唖然とした表情のまま凍りつく。しかし、やがて黒花が苦笑したのと同時、一同を包んでいた過度の緊張が解れる。

「……くっはは、いいよ。もしも全員が生還するようなことがあったら、ぱーっとパーティでも開いてやるさ。勿論私の奢りで、な」
「やったーっ！　麦野大好き！　でもその発言は結局死亡フラグだから控えておいたほうがいいって訳よーっ！！」

麦野の男前な発言に、フレンダが二もなく飛びつく。やめろ離せとか麦野は喚いているがなんだかんだでまんざらでもない様子。

……うん、良い感じに緊張も解れたみたいだ。経験したことがあるのだが、あんまり緊張しすぎても良い事なんかない。特に、戦闘や命をかけた鬼ごっこなんかは緊張していると普段の動きの三〇パーセントも出ない。

こういうときは、かるーく緊張をほぐして、適度にリラックスする程度が丁度いいのだ。ついでに、『この仕事が終わったら楽しいことするぞーっ！！』という希望を持たせておくのも効果的だったりする。

と、そこで唐突にマイクロバスが停車した。目的地に到着したようだ。

「と、到着しました」

運転手を務める下部組織の一人が緊張で上ずった声をあげる。大の大人が情けない……とは思わない。これから、怪物どもの戦場になるところに連れて来られたのだ。パニックにならないだけマシだといって良い。

外の様子は……時々雷光が迸ったり、雷雲が轟くような音が聞こえるから、恐らくもう御坂は戦い始めているだろう。つまり、与謝野や『スクール』も到着寸前、ということだ。

「『スクール』の連中は？」
「い、今のところは……」
「そう。なら良いわ。早いところこの場から退避しなさい。いつまでもいられたら邪魔だしね」

それだけ言うと、麦野はさっさと扉を開けて降りていった。続いて『アイテム』の面々も降りていく。黒花も、かなり躊躇している様子ではあったが結局はバスを降りた。命を懸けて戦う覚悟ができたと言うことだ。

「いくわよ。――――生きて帰ればご褒美だッ！」

麦野の言葉に頷き、一同は一気に行動を開始した。

＊＊＊

「……にしても、この私がこんな小細工に走るとはね。少し前まで考えもしなかったわ」

麦野は垣根が来るだろう方向をにらみつけながら、首元につけられたチョーカーの位置を動かしている。本来は必要ない動作なのだ

が、それだけ彼女の心が緊張している、ということなのだろう。

「……大丈夫？　今のうちに使っておいた方がいいんじゃない？」

私の言葉に、麦野は首を振る。

「いや、アレは数に限りがあるんだし、できることなら使わないでおきたいわ。

それに、どうせ戦いになったら即座に使うんだしね……」

と、遠方から車が走ってくるのが見える。

「……それじゃ、麦野さんやっちゃってー」

「全く、アンタも悪辣な作戦考えるよね……。ま、この程度で潰されてくれるとは思わないけ、どッ！！」

ゴバッ！！　という発射音と共に、麦野の腕から巨大な一条の光が発射される。光は若干弧を描きつつも、前方にある黒塗りの車に命中し、ドボゴン！　という音を立てて粉砕した。

あそこには『スクール』のメンバーが入っているはずなので、まともにやれば垣根はおろか他のメンバーも死ぬのだが……。

「やってくれるじゃねえか『第四位』共……」

垣根は白い翼を丸めていた。おそらく、中に構成員が入っているのだろう。運転手をやっていただろう下部組織の構成員は……死んだか。

さて、私は心理定規（メジャーハート）対策に精神感応系（テレパス）に対応する能力相殺（ＡＩ

Mキャンセル）でも設定しときますか。
それだけじゃなく、未元物質（ダークマター）の拡散力場も逆算しないといけないし、同時進行で他のメンバーつぶしもやらなきゃいけない。
まったく、麦野も無茶な作戦を提供してくれるわ……と思ったが、垣根とタイマンする麦野が一番辛いんだろうな。

麦野はと言うと、首もとのチョーカーを少しだけ弄くり直し、それからポケットから錠剤を一錠取り出して飲み込んだ。

「自分の能力も制御できない為に第四位に甘んじてるクソガキが……飛び級で下克上ってことは容赦なくブチ殺していいわけだよなァ！　あァ！？」

垣根はその三対の翼で以って飛び上がり、一気上空に浮かぶ。空中を縦横無尽にかける垣根からしたら、地上に立っている麦野など止まっている的。その時点で既に『第四位』は第三位よりも格下なのだ。

「……へぇ、自分の能力を制御できないから第四位、ねー……」

対する麦野は、俯き加減で静かに嗤い、垣根の方を見ようともしない。その様子に垣根が怪訝な表情を浮かべた瞬間……、

「面白いわね、その冗談」

ブワッ！！　と。
麦野の背中から、不健康な輝きの青白い光の翼が現れた。

＊＊＊

さて、麦野と垣根の戦闘が始まったみたいだし、私のほうも彼女たちの戦いに茶々入れられないようにしないと、ねー。

……向こう側にいるのは、心理定規（メジャーハート）、狙撃タイプの男、それから金属製ゴーグルをつけた能力不明の少年。

色々と探りを入れてみたところ、狙撃の男は無能力者、能力不明の少年は念動力（サイコキネシス）の強能力者（レベル３）ということが分かった。

銃撃に関しては適当に磁界操作（マグネティックフィールド）で砂鉄の盾作っておけば問題ないと思うが、問題は心理定規（メジャーハート）だ。

現状、精神感応系（テレパス）の能力相殺（ＡＩＭキャンセル）はすべて準備が整っていて、いつでも相殺できるが、それでも能力を食らうことで一瞬隙ができるかもしれない。

基本的に私はどんな奴でも自分の平穏の為なら殺せるタイプの人間だが、それでも最中お祖母ちゃんとかが来たら手心を入れてしまうかもしれないし、動揺するかもしれない。

……真っ先に潰させてもらうか。

ザザ……という音と同時、私の周りに黒い壁が発生した。磁界操作（マグネティックフィールド）、それが今、私が複製（トレース）している能力の名だ。

感覚としては、砂鉄限定御坂と考えてもらって良い。最も、御坂のように砂鉄を高速で振動させて、という小細工まではできない三

流品だが。

三人と私のにらみ合いという構図が出来上がった瞬間、私は行動を開始した。ドバッ！！　という轟音と共に私の足元が爆発して私は半ば宙に投げ出されるように高速で前方に駆け出す。狙いは、心理定規（メジャーハート）。

自分が狙われていることに気がついた心理定規（メジャーハート）は冷静に銃を構えてくるが、私は気にしない。

「――馬鹿ね、私以外にも『スクール』はいるんだけど」

同時に、三方向から発砲音が響いた。流石に、磁界操作（マグネティックフィールド）と言えど、私が認識できなければ銃弾をガードすることはできない。

しかし、そもそも私には認識する必要がなかった。

「消えッ――瞬間移動（テレポート）！？」

次の瞬間、三発の銃弾は地面にめり込んだ。瞬間移動（テレポート）によって私が心理定規（メジャーハート）の後ろに回りこんだからだ。

当然、瞬間移動（テレポート）のセオリーは死角への移動と急襲だと理解している心理定規（メジャーハート）は、私の方を振り向くが……、

「残念、それもフェイク」

次の瞬間、私の方を振り向いた心理定規（メジャーハート）はわき腹を砂鉄の槍に貫かれた。

私の作戦はこうだ。まず、爆発させた砂鉄の反動を使って急加速し、正面から奇襲をかけたように見せかける。

そして、直前で背後に瞬間移動（テレポート）することで急加速はフェイク、本

命は瞬間移動（テレポート）による背後からの攻撃だと思わせる。
最後に、振り向いた心理定規（メジャーハート）に、まだ生きている磁界操作（マグネティックフィールド）で背後（最初の正面）から攻撃を仕掛ける。
引っかかるかどうかは怪しいところだったが、フェイクのフェイクに奇襲を選んだのが幸いして、相手に考える暇を与えずに済んだ。
わき腹を貫き気絶させた心理定規（メジャーハート）はそのまま砂鉄を操作して戦闘の害がなさそうなところに吹っ飛ばして、自分は瞬間移動（テレポート）で距離をとる。
さてさて、残りは無能力者（レベル０）と強能力者（レベル３）。どちらも暗部の人間だから油断できないが……、まあ、心理定規（メジャーハート）を倒せたのは大きい。あとの二人は射程距離が分かるから、対応もしやすいし、な。

――ギュン！！

そう考えた瞬間、わき腹が感覚を失った。
直後、耐え難い熱がわき腹から広がってきた。

「――――がっ、くうう……！？」

反射的にわき腹に手を当てると、思わぬ熱に同じく反射的に手を引っ込める形となった。痛みによる錯覚じゃなく、本当に傷口が熱を持っている……！？

心当たりは、一つ。垣根の方を見る。

「――っ！　テッメェェェ！　テメェの相手は私だろうがッ！」
「フン。粋がるなよ第四位。テメェじゃ相手にならないから『スクール』の連中に手助けしてやっただけじゃねえか。忘れたのか？

テメェらは俺と他のメンバーを分断して戦ってるつもりだろうが、俺たちはどんな状況だろうと一つのチームとして戦ってるんだぜ」

やはり、垣根の未元物質（ダークマター）で性質を歪められた太陽光……！　クソッタレ、麦野には一応の補強策を渡しておいてあるが、それでも私の方を攻撃する余力がある、か……！

流石に第二位は伊達じゃない。しかし、私としても死んでやることはできないからな……！

（く、身体変化（メタモルフォーゼ）を展開しつつ、発火能力（パイロキネシス）と発電能力（エレクトロマスター）で牽制……いけるか！？）

手近なところに割裂空洞（ダークホール）を展開し、三つの異能を同時発動する。炎と電気で二人の攻撃を牽制し、時間を稼いでいる間に傷を癒す。攻勢に打って出るのはそれからだ。

複数の演算を同時に使用するというのは非常に骨の折れる作業だが、記録した拡散力場を演算するだけの私は、その分演算にも空きがあるから複数の能力を扱える。……尤も、基本的に三次元演算に限られるが。

「――食らえっ！」

カッ！！　という輝きと共に、紫電と火炎が同時に放たれる。無能力者の狙撃役は銃を盾にするがカバーしきれず、感電してその場で気絶した。

ゴーグルの少年はどうやら空気を念動力（サイコキネシス）で遮断し、両方とも防いだようだ。面白い、ならば真空では対応できない異能も併用して――、

と考えた瞬間、私はあらゆる異能を解除して右側への防御に向け

た。

轟！！　という暴風と同時に、真っ白な塊が私を横殴りにしたのだ。

念動力（サイコキネシス）による防御、さらにその上から緩衝材にすべく磁界操作（マグネティックフィールド）を砂鉄を敷き詰めたが、それでも甘い。

「ごっ、がァァぁぁあああ！！？」

まるで腹のそこからすべてを押し出されるような感覚だった。内臓の位置がことごとく入れ替わってしまったような錯覚さえ感じる。

「く、そ……。垣根……提督……ゴフッ！！」

私の視線の先には、麦野の放つ原子崩し（メルトダウナー）にわき腹を焼かれながら、それでも私の始末を優先させた垣根の姿があった。

彼を見る麦野の形相は最早麗しい女性のものではなく、屈辱と怒りで極限まで表情を歪めた悪鬼のものだった。

「くゥ……。流石にこの局面で横槍はキツかった……か。だが、テメェに参戦されるのはもっとキツイんだよ、裏第四位（アナザーフォー）。テメェの能力相殺（ＡＩＭキャンセル）は特に、な……。この状況で能力を奪われたら、流石の俺も一瞬で消し炭だ」

「なら私の方もブッ放させてもらうが構いやしねェよなァァ！！？」

麦野の叫び声と同時、垣根の一瞬の隙を突いて麦野の背中から数条の光が飛び跳ね、ゴーグルの少年に襲い掛かる。

ゴーグルの少年は念動力（サイコキネシス）で空気を遮断し、真空による絶縁状態を生み出すがそれでも甘い。光線は真空状態を避けるように少年の体

へ襲い掛かり、その身を焼こうとする。

「ぐっ、くそォォォおおお！！」

少年はたまらず真空状態を維持しながら念動力で空気を凝縮、開放することで吹っ飛んで退避する。退避と同時、少年はその勢いを利用して私の方へ飛んできた。追撃を避け、瀕死の私に止めを刺すためだろう。

麦野も、私がいる為に攻撃の手を緩めざるを得ない。そして、垣根の猛攻も相まって私の方に気を向けられない状態だ。

だが、ここまでお膳立てしてもらえれば十分。

私が選択するＡＩＭ拡散力場は、『電撃使い（エレクトロマスター）』の拡散力場。

「麦野さん――――……原子崩し（メルトダウナー）、ちょっと借りるよ！！」

次の瞬間、完全に私を仕留められると考えていた少年の表情が、凍りついた。

「――――うおおおおおおおォォォォおおッ！！？」

少年の腹には、握りこぶし半分ほどの穴が開いていた。この学園都市では致命傷とは到底いえない傷だが、それでも戦闘不能に追い込むには十分すぎる怪我だ。

超能力は演算の力。激痛で演算にかまけていられない能力者は、まともに能力を扱うこともできない。

少年の腹に穴を開けたのは、『私の原子崩し（メルトダウナー）』……――ではない（、、、、、）。私が選択した拡散力場は、あくまで電撃使い（エレクトロマスター）。自由電子を操る能力などない。というか、そもそも私に原子崩し（メルトダウナー）は扱えな

いしね。

使ったのは、『麦野の原子崩し（メルトダウナー）』である。彼女の放出する膨大な光線の一部を、電撃使い（エレクトロマスター）の能力で文字通り少しだけ『拝借』し、その方向を変換させることで不意打ちを成功させたのだ。

すべてを焼き尽くし蒸発させるオリジナルの力からしたら、握りこぶし半分程度の傷しか残せないなど、惨めなモノだが、それでも私には十分だった。

「く、さぁて垣根提督……。あなたのお仲間はこれで全部倒したよ？　どうする？　これ以上やっても勝算はないと思うけど」

正直死にそうな感覚をぐっと押し殺し、震えるひざに手をかけて無理やり立ち上がる。

服は既にボロボロだし、私自身もボロボロ。こりゃしばらく病院生活かもしれないけど……、それでも、ここは強がる。

「は、ハハハ。面白ェ。やっぱ面白ェよテメェ！！　幻想御手（レベルアッパー）の『本当の目的』とやらを見ようと思って来たが、此処に来てもっと面白ェモン見つけちまったよ！！　やっぱテメェだ、親船小豆！！　俺の未元物質（ダークマター）を成長させるのは！！」

垣根は牙をむき出しにし、獣のような笑いを私に向けて吼える。

クソ、よりによってお前からの宣戦布告（ラブコール）とか微塵も嬉しくないぞ……。

さっさと臆病風吹かせてお暇してもらう計画だったが、余計に煽ってしまったか……。

「へぇ、私よりも親船のほうにご執心って？　結構なことね。浮気とかしてんじゃねえ、よッ！！」

ドバッ！！　と私と垣根の間に入るように麦野が移動する。間近で見る青白い光の翼は、まるで天使のような神々しさを誇っていた。

「『第四位』が揃って仲良しこよしで第二位に宣戦布告ってか？甘いな、甘い甘い。大アマちゃんだよテメェら。超能力者（レベル５）の序列ってのはな、簡単に乗り越えられないから『序列』なんだ。ましてたかが『第四位』程度の実力のテメェらが、この俺に楯突こうって考えてる時点でもう――――」

垣根はそう言うと、思い切り翼をはためかせる。

「――甘すぎるんだよ！！」

しかし、それでも私たちは気にしない。

「行くぞ親船。『第四位』の下克上だ」

「了解麦野さん。さあて――」

メルヘン天使さんとの必死の防衛戦と、行きますか。

10？

ｓｉｄｅ麦野

『とりあえず、麦野さんは今のままだと確実に死ぬよね』

作戦会議の最中、親船にそういわれた瞬間、私は何も考えずにアイツの胸倉を掴んでいた。

『ンだとォ『裏第四位（アナザーフォー）』ッ！！　上層部に気に入られてるからってイイ気になってんじゃねェぞォ！！』

あの時は怒りで頭が沸騰しそうになっていたが、今ならその意味が分かる。

私の原子崩し（メルトダウナー）は、超能力者（レベル５）の中でもトップを争うほどの火力を誇っている。浴びせたものは須らく消し去る。誇張でもなんでもなく、超電磁砲（レールガン）だって消せるほどだ。

だが、その火力ゆえに原子崩し（メルトダウナー）は制御が難しい。私の気分次第で威力が大幅に変化するのだ。

気分が悪ければ火力は低く。

怒りに狂っていればその身を焼く。

そのどうしようもない威力の揺れ幅とリスクの大きさが、私を『第四位』という地位に押し込めていた。

しかし、それも今となっては違う。

この二日間で、私は劇的に『変わった』。精神面が、というわけじゃない。悔しいが私の短い気性は生来のもので、二日間程度で変えることはできない。

私が変わったのは、その『短い気性』という弱点を認めること。自分の弱さを受け入れること。その上で、自らの弱さを征服し、利用し、乗り越えること。

そして弱さを自分のものにした私は、新たな力を得た。それがこの『チョーカー型演算補助装置』と――『錠剤』だ。

チョーカー型演算補助装置は、私の脊髄を流れる電気信号に干渉し、演算を補助することで私一人では為し得なかった『原子崩し（メルトダウナー）』の完全な制御を可能にし、錠剤はそれに含まれるβエンドルフィンで私の興奮を抑える作用がある。

全て、親船の財力と技術力を使って作らせたものだ。まだ試作品ということだから、効果があるのはほんの一五分程度だが……それで十分。これによって、『心は怒り、頭は冷静に』という状態に辿り着いた結果、得た能力が――、

「……へぇ、自分の能力さえ制御できないから第四位、ねー……。……面白いわね、その冗談」

『電翼』、だ。

＊＊＊

『原子崩し（メルトダウナー）』によって生成した多量の自由電子を背中から放出し、同時にその全てを制御することで翼の形に押しとどめ、纏うスキル――『電翼』。

わざわざ露出度の高い服を選んだのも、この能力で服を焼かれないようにという配慮からだ。

「テメェ、その『翼』……ッ！！」

「似合ってるでしょう？　アンタと違ってさ。依頼主（クライアント）からのリクエストだったけど、結構気に入ってるのよね」

『電翼』には、二つの役目がある。

ドパッ！！　という轟音と同時、私の足元の地面が爆裂し、私の体が宙に投げ出される。『電翼』はその巨大な体をうごめかせ、空気抵抗を利用して私の体のバランスを保つ。

一つ目が、これ。足元の地面を自由電子で熱し、急激な膨張によって地面を爆発させ、推進する私の体のバランスを上手く制御する役目。

元々、物質を熱して爆発させて移動する方法は今までにも何度か使ってきたが、バランスが崩れてしまい、その後の反撃につなげられなかったので精精緊急脱出用にしか使えなかったが、翼でバランスをコントロールすることで、飛行に応用することができるようになったのだ。

さらに、足元で空気を断続的に熱し、その際の余剰パワーを『電

翼』で相殺することで、空中浮遊もできる。これによって、空を飛ぶ第二位とそれに狙いを定める私、という一方的な構図を打ち崩したことになる。

そして、もう一つの役目。

「さあて、第二位。良いモン見せてやるよ。これが、原子崩し（メルトダウナー）だ……！！」

私の言葉を合図に、『電翼』から一〇数本の『触手』が現れる。触手と言っても、色はは普段私が扱う『光線』と同じもの。私が電子の制御を完璧なモノにすることで、ここまで細かい形状を作れたのだ。そして、これは私を守る『腕』であると同時に、移動砲台でもある。

これが、第二の役目。

『電翼』は膨大な自由電子から生み出されている。そこから適時、状況にあったものを生成することで、どんな状況でも臨機応変に対応することができる。

「食らえ、一斉掃射だッ！！」

触手の先端部分の制御を『あえて』弱くすることで、それまで私が抑えて制御していた分の電子の勢いを一気に一定方向へ向ける。これにより、一〇数本の触手から普段と同レベルの『光線』が一気に垣根に放射される。

「……ッ！！　クソッタレが。親船小豆の入れ知恵か？　小細工に走りやがって……！！」

垣根は憎らしげに吐き捨て、私の『光線』の射線上から逃れる。
かわしたっていう事は、垣根にとって今の攻撃は防ぎきれないということを証明してることに気付いていないのか？

「人は策を弄してこそ人なのよ……！　自分の能力をただの力としてしか見れない奴は、原始人と同じ……アンタの能力（ダークマター）は原始人の松明。私の能力（メルトダウナー）は、洗練された近代兵器、ってトコロかしら？」
「ほざけ、第四位……！！」

ギュバッ！！　と派手な音を立て、白い翼が展開される。翼、と表現しているものの、アレはやはり鳥類の持つ翼とは別次元のもののようだ。
現に、翼のようでありながらゼリーのように伸縮して大きさを変え、私を叩き潰そうと動いてくる。

正直いくら原子崩し（メルトダウナー）の制御を高めたところで、パワーは変わっていない。おそらく『電翼』をあの翼に叩きつけたところで、『電翼』のほうが蹴散らされ、私はあの白い翼を彩る赤絵の具にしかならない。

かといって、直撃を避けるために逃げ回っていても待っているのは時間切れ（ゲームオーバー）。ならば、第二位（ダークマター）にはなく、私にあるモノ（メルトダウナー）をフル活用するしかない。

瞬間、空気が不自然な音を上げて爆発する。足元で原子崩し（メルトダウナー）を循環させ、その熱によって空気を急激に膨張させたのだ。

私にあるのは、この爆発の移動による瞬発力。第二位の飛行は完全に翼による揚力に頼っているから、持続した高速移動はできても瞬間的な加速には至らない。そこを突くしか、方法はない。

「ッらァあああああ！！」

懐に入り込み、指先に集めた自由電子を思い切り第二位のほうへブチ撒ける。

「――ッ！？　しまった、指先か――！」

第二位はさっきの攻防で私の『電翼』の方に注意を割いているはずだから指先からの攻撃には対応しきれない。以前の私の通常時ほどの一撃、第二位はかわすしか対応策がないはずだ。

しかし、瞬発力のなさがそれを許さない。第二位は苦し紛れに私と自分の間に翼を滑り込ませることしかできない。

光線は翼を貫通し、垣根の元にまで届いた。

「……あー、ったく。まさか第四位程度に手の内見せることになるとはなぁ」

……！？　この声、光線が全く効いていない……！？

「何時まで近くにいるつもりだクソアマ、挽き潰すぞ」

――――ッ……！？

「ごばあッ！？」

第二位の、翼の一撃を食らった……！　咄嗟に『電翼』でガードしたが効果はあまりない。クソ、腕の骨が折れたか……？　いや、まだ動かせる。まだ巻き返せる。このミスは――、

……駄目だ、思考が失敗にとらわれてる。私は一旦距離をとって、ポケットから錠剤を取り出し飲み込んだ。……うん、大丈夫。ミスはミス、それでも得るものはあった。これを生かして次に繋げるしかない。

「……クハハ！　それか、第四位！　テメェの都合の良いパワーアップの正体は！　何だそれ、なァにが洗練された近代兵器だ！　薬剤と演算補助で成り立ってる見せ掛けのオブジェ如きがよ！」

……！　やっぱり、チョーカーも見破られてたか……！！

「まさか、一回攻撃をかわしたくらいで自分の攻撃がこの俺に通用するとか淡い幻想抱いてんじゃねえだろうな？　甘い、甘いぜ第四位。所詮、普通の物質を操る能力制御して喜んでる時点で第二位の敵じゃねえってわけだ。自由電子だ？　粒機波形光速砲だ？　ンなチンケなモン持った程度で喜んでんじゃねえよ。――俺の未元物質に、通常物質は通用しねえ」

……！　第二位の『未元物質』、理論上どころじゃなく、正真正銘どこにも存在しない新たな素粒子で構成された物質を生成する能力。確かに、『原子崩し』は奴の未元物質を貫通したはず。何故ダメージがない……？

「オラオラぁ！　来ねェならこっちから行くぞォ！」

第二位がそう吼えた瞬間、太陽に翳された翼から『何か』が出てきた。『何か』が何なのかは分からない、とにかく『何か』だ。一発目は辛うじて私から外れたが、かすった頬から肉が焼ける匂いがしたのを感じた。

……発火能力（パイロキネシス）!?　いや、今のは『光』だった。発火能力（パイロキネシス）の応用で赤外線を操っているのか？　……いや、そもそも第二位は多重能力者（デュアルスキル）じゃなかったはず。

一体何がどうなって――――ッ!!

「二発目ェ……」

ま、マズイ!　次が来る!　『電翼』でガード……、

「――――がっ、くうう……!?」

……何？

聞こえたのは、『電翼』が攻撃を防いだ音ではなく、少女の呻き声。見ると、第二位の攻撃を食らったのは私ではなく、私の仲間、親船小豆だった。

つまり、アレか？　コイツは、私と戦闘しているにも関わらず、仲間の援護をする為に親船を攻撃した。私なんかじゃ足元にも及ばないから、余裕を持った第二位は親船を攻撃した？　親船が負傷した？

親船は作戦通り、三人も敵を押し込めて私と第二位の一対一を演出しているって言うのに、肝心の私は第二位に手も足も出ず、あろうことか親船の足を引っ張っている、だと？

「――っ!」

――――冗談じゃねえッ！！

「テッメェェェ！　テメェの相手は私だろうがッ！」

「フン。粋がるなよ第四位。テメェじゃ相手にならないから『スクール』の連中に手助けしてやっただけじゃねえか。忘れたのか？　テメェらは俺と他のメンバーを分断して戦ってるつもりだろうが、俺たちはどんな状況だろうと一つのチームとして戦ってるんだぜ」

ふざけるな、ふざけんなよテメェ。私が相手にならないだと？　『アイテム』のリーダーたるこの私が！！　超能力者（レベル５）のこの私がか！！　ふざけるのも大概にしろよ！！

「テメェ……絶対ブチ殺す」

現在制御できる限界量の自由電子を展開。この状態だと演算補助装置のバッテリーは五分もしないうちに切れるだろうが、そんなことは気にならない。

第二位に手も足も出ず、その上与えられた役割さえ果たせない私なんて認めない。私は麦野沈利だ。学園都市の超能力者（レベル５）だッ！！

「オラオラオラァァああああああッッ！！　吹っ飛べッ！　吹っ飛べよォ！　肉片以下のミンチになって吹き飛べっつってんだよォォォ！！　テメェみてぇなクズごときが私に立ち向かって良いとか思ってんじゃねぇぞォォぉぉおお！！」

あらん限りの声で叫びながら、最大出力で展開した『電翼』を力任せに発射する。あまりの出力に、制御が上手くいかず背中の辺りが焼けるのが分かる。

私の中の残り少ない冷静な部分が警鐘を鳴らす。

――――何をやってるんだ、それじゃ今までと同じじゃないか。

――――つまらない拘りは捨てろ、『私たち』の目的は第二位を殺すことじゃない。

この二日間、親船に何度も伝えられ、植えつけられた思想があるからこその自己叱責だった。そうだ、このままだと演算補助のバッテリーが切れるどころか、私自身も能力の使いすぎでオーバーヒートするかもしれない。

この後もまだ与謝野や木山と第三位がいるんだから、コイツとの戦闘で余力を使い果たすわけには行かない。

……分かっては、いるんだけど。

「うお、おお、危ねえッ！　くそったれ、ヤケッパチになって全力攻撃とかしてんじゃねぇよ」

こいつの、この余裕ぶっこいた態度を見てると――――！！

「――ブチ殺したくなるじゃねぇか」

「ナメんなこォのクソッタレがァァァぁぁぁぁああああ――――！！」

連射、連射連射連射連射連射ァァ！！　このクソカスが、私の前に立ちふさがってんじゃねえぞ！　そのフニャ●ン叩き潰して晒し者にしてやろうかァ！？

これだけやってんのに、第二位の未元物質（ダークマター）は私の攻撃を物ともし

ないですべてを防いでいる。それどころか、私の連射が止んだところを狙って親船にさっきの『何か』を撃つ攻撃をしかけようとさえしてる。

ナメやがって……！！

ッ！！　あった、隙！　そこに一発叩き込んでやるッ！！

「ぐう！」

すかさずそこに『原子崩し（メルトダウナー）』を叩き込んでやる。

第二位がわき腹の痛みに思わず声を上げた。ハハッ！　やったぞ！　ここでさらに畳み掛けて――、

「ごっ、がァァぁぁあああ！！？」

――――え？

聞きなれた声が苦痛を伴った声色で響いた瞬間、私は思わず呆然と振り返ってしまった。

「く、そ……。垣根……提督……ゴフッ！！」

そこには、口端から血を垂れ流している親船の姿があった。その近くには、倒れているドレスの少女と、スナイパーライフルと拳銃を持ったまま伏した男の姿。コイツは、足止めどころか敵を潰してまでいるっていうのに、私は――！！

「くゥ……。流石にこの局面で横槍はキツかった……か。だが、テメェに参戦されるのはもっとキツイんだよ、裏第四位（アナザーフォー）。テメェの能

力相殺（ＡＩＭキャンセル）は特に、な……。この状況で能力を奪われたら、流石の俺も一瞬で消し炭だ」

フザけんな、私は最初から眼中にないってのかよ。もう、我慢ならねえ。

「なら私の方もブッ放させてもらうが構いやしねェよなァァ！！？」

そう言い、即座に『電翼』をゴーグルの少年に向ける。少年は念動力（テレキネシス）で真空を生み出し、絶縁空間を発生させることで私の攻撃をやり過ごすつもりのようだが……、――しゃらくせェ！！

コイツを殺さねえと、『借り』が返せない。今まで散々私の撃ち漏らしで親船を傷つけておいて、私が何もできないなんて私が許せない！！

絶縁空間を覆いこむように『電翼』を展開し、問答無用で少年を焼き殺そうとするが……、

「ぐっ、くそォォおおおお！！」

少年はどうやったのか知らないが、親船の元へ飛んでいった。

……しまったッ！　逃がしたのもそうだが、親船のところに接近されては追撃が難しく――、

「ほらほら、いつまでも余所見してんじゃねえよ。磨り潰すぞ」

「くっ、邪魔してんじゃねェよォォおおッ！！」

第二位が私の方へ攻撃を再開したから親船のほうへ援護を飛ばすこともできない。クソ、こんなモンじゃ全然借りを返せてないって言うのに……。

「麦野さん――――……原子崩し（メルトダウナー）、ちょっと借りるよ！！」

ドゴォン！！　という轟音と共に、親船が私の展開していた自由電子のうちの少量を使って少年を倒していた。あの程度の発電能力（エレクトロマスター）に操作を割り込まれるほどに私は頭に血が上っていたのか、と冷静になるのとは別に、私は内心唖然とした。

私が、あれだけ作ることを嫌がっていた『借り』を、親船はいとも簡単に作ってしまった。しかも、借りた後もそれを返そうとか、そんなことはまったく考えていない様子で。

そんな姿を見てると、私は今まで自分がこだわっていたことは何だったんだろうと思ってしまう。

『心は怒り、頭は冷静に』。そのおかげで、『電翼』っていう武器を手に入れたんじゃなかったのか。今までにない戦闘能力を得て、強くなって、そのおかげで第二位とここまで渡り歩いていられるんじゃなかったのか。ここで借りとか、貸しとか、そんな馬鹿みたいなことに拘ってる場合じゃないって、コイツが今身をもって教えてくれたじゃないのか。

「――ハッ」

そうだ、冷静になって考えてみたら、私は目の前のことに囚われて一番大事なことを忘れていた。それは、第二位を殺すことでもない。親船に借りを返すことでもない。まして分担してそれぞれの担当を足止めすることでもない。

こいつを、護衛することだ。

「く、さぁて垣根提督……。あなたのお仲間はこれで全部倒し

たよ？　どうする？　これ以上やっても勝算はないと思うけど」

全身ボロボロのくせに、最後の気力まで振り絞って、通用するはずもないハッタリをかまして。コイツは、この女はどんなときだって手段を選ばない。モラルとかプライドだとかそういったことも気にせず、ただただ『生きる為』に行動する。

「は、ハハハ。面白ェ。やっぱ面白ェよテメェ！！　幻想御手（レベルアッパー）の『本当の目的』とやらを見ようと思って来たが、此処に来てもっと面白ェモン見つけちまったよ！！　やっぱテメェだ、親船小豆！！　俺の未元物質（ダークマター）を成長させるのは！！」

だから、なんだろうか。

……コイツのようになりたい、と思うのは。私も、大事な一つの『ナニカ』の為にプライドもモラルも何もかも投げ打って行動してみたいと思うのは。

「へぇ、私よりも親船のほうにご執心って？　結構なことね。浮気とかしてんじゃねえ、よッ！！」

垣根と親船の直線状に立ち塞がる。大切な『ナニカ』が何なのか、私にはまだ分からないけど……、それでも、ここでコイツを殺されたら、『ナニカ』が何なのか、一生分からなくなる気がする。

「『第四位』が揃って仲良しこよしで第二位に宣戦布告ってか？　甘いな、甘い甘い。大アマちゃんだよテメェら。超能力者（レベル５）の序列ってのはな、簡単に乗り越えられないから『序列』なんだ。ましてたかが『第四位』程度の実力のテメェらが、この俺に楯突こうって考えてる時点でもう――――」

頭は十分に冷えた。

『電翼』の動きは戦闘が始まったときよりもずっとスムーズになってる。とはいえ、第二位の未元物質（ダークマター）には敵わない。だからこその『序列』だというのはとうに理解した。

『序列』は一簡単に（、、、）超えられないからこそ序列。真っ向勝負じゃ敵わないから上下関係があるのだ。だが、『絶対に』超えられないわけではない。

第二位が苛立ちまぎれに翼をはためかせる。

「――甘すぎるんだよ！！」

さっきまでなら恐怖を怒りに変換して噛み付いていたところだが、今の私は不思議と落ち着きを保ったままだった。

私の背中には、『仲間』がいる。護るべき対象、そして護ってくれる存在が。それが、私の精神に予想外に大きな安心を齎していた。こんなことは、生まれて初めてだった。

「行くぞ親船。『第四位』の下克上だ」

「了解麦野さん。さあて――」

親船はそんな私の心情など全く気付かない様子で、相変わらずどこかの下っ端のような受け答えをする。

「――メルヘン天使さんとの必死の防衛戦と、行きますか」

望むところだ。堕天させてやるよ、第二位（かきねていとく）。

１０？（後書き）

・麦野魔改造は、演算面もそうですが精神面の改変が強いです。
・しかし、現状だと能力の優劣関係で第三位には勝てません。
・本編中で麦野の原子崩し（メルトダウナー）が垣根に効かなかったのは、未元物質（ダークマター）の回折を受けて性質が変化し、それによって電子が原子崩し（メルト ダウナー）の制御を離れた為です。
　麦野の能力自体が、操作している電子を自分が操っていい電子じゃないと誤認した訳ですね。

九月一九日修正

11

「麦野さん」

垣根と私の間に入っていた麦野に、私はとりあえず声をかける。

「……何？」

麦野は私の方を向かないで答える。麦野は戦闘中とは思えないくらい平静を保った声だった。さっき私が垣根に茶々入れられたときとは比べ物にならないくらい穏やかな声色だ。

私が見ていないあの戦闘で、麦野の心境を変えるような『何か』があったということだろうか。

……だが、それは今は関係のないな。今考えるべきは、麦野の変化ではなく如何に『私が』生き残るか。正史をゆがめるのは避けたいが、それでも私が優先だ。

手負いで死に掛けの私と、バッテリーもあと五分と残っていない麦野じゃ、どう考えても垣根相手には真正面からじゃ太刀打ちできない。今打てる最善策は、

「垣根を抑えて。その間に私が垣根の拡散力場を逆算する」

麦野に足止めを頼む、ただそれだけ。

だが、勿論勝算はある。今までにも麦野は垣根と互角に渡り合ってこれたし、今は私も拡散力場の逆算に専念するとはいえ、敵もいないから垣根の攻撃に対応するくらいの余裕は見せられる。逆算してしまえば、後はもうこっちのものだ。

垣根も逆算されたと悟れば、命のほうが大事だし勝手に去って行ってくれるはず。

麦野は、私の言葉に『そう』とだけ答えて後ろからでも分かるくらいに獰猛な笑みを浮かべていた。……の割りに、原作を読んでるときに感じた『恐ろしさ』を感じないのは、私の意識が朦朧としてるから、かな……。

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

「そんじゃ第二位。そういうわけだか、らッ！！」

ドバッ！！　という轟音を伴って、麦野の纏う『電翼』が濁流のような勢いを以って垣根の許へ向かう。その威力は、先ほど麦野が激昂した際に扱っていた『電翼』の威力を超えるほどであったが、当の麦野がダメージを受けている様子はない。

麦野は以前の自分なら軽く腕が吹き飛んでいるだろう能力を扱っている事実を前に、自身の成長を確かに感じ取っていた。

その後方で、小豆はわずかに視線を落として瞑目していた。垣根の拡散力場を逆算しようとしているのだ。能力相殺（ＡＩＭキャンセル）は、まず割裂空洞（ダークホール）に記録されている拡散力場を一々選別して対象を選び出すところから始まる。

現在小豆は、その工程を終えて未元物質（ダークマター）の拡散力場の逆算と、それにかかる時間の概算の算出を行っていた。やがて、小豆は瞑っていた目を開いた。その目には、明らかに焦燥の色があった。

「ゴメン麦野さん！　解析完了まで五分くらいかかりそう！　大丈夫！？」

「言うのが遅ェよこの馬鹿！　大丈夫だ！　今からペース配分直せばギリギリ保（も）つ！」

麦野の言葉にほっと一息をついた小豆は、心中で『こんな綱渡りもうやるかーっ！！　これが終わったら隠居してやるー！』と叫ぶ。

しかし、垣根も敵（それ）の勝利条件を聞いて黙って待っていてくれるほど甘くはない。

「そのペース配分とやら、直させるわけには行かねえよなァ！！」

轟！！　と垣根の白い翼がはためき、麦野に襲い掛かる。麦野は小さく舌打ちすると足元の空気を爆発させて上空に逃げる。余波によって生まれた暴風は小豆の体を強かに叩き、その衝撃だけで小豆は軽く吹き飛ばされそうになり思わず蹲る。

逃げる麦野をさらに垣根の翼が追いかけるが、瞬間、麦野の斜め後方の頭上で空気の爆発が起こり、その勢いを『電翼』で操作して自分の推進力としてコントロールして垣根の翼を撹乱する。

「チッ、ちょこまかと……羽虫風情が刃向かってんじゃねえぞッ！！」

「おっせェよ愚鈍がァ！」

ギュン！　という電子音と同時、麦野の指先から限りなく細い光線が発射される。麦野は演算補助装置の電力節約の為に能力を節約していた。

しかし、そんな威力では当然未元物質（ダークマター）を貫通させることもできない。垣根は翼のうちの一枚をガードに回して難なく防ぐ。

「なんだぁもう弾切れかあ！　チンタラしてっとプチッと潰しちまうぞ！」

垣根が叫ぶと同時、未元物質（ダークマター）が無数の羽に変換され、宙に浮かぶ。

（――――くッ！　未元物質（ダークマター）によるチャフか！）

麦野に詳しい原理は理解できないが、とにかく未元物質（ダークマター）には原子崩し（メルトダウナー）を無効化する性質がある。

たとえ小さくとも、おそらくそれは同じこと。無数の羽毛状の未元物質（ダークマター）を展開することで麦野の攻撃の幅を狭め、その間に演算中の小豆を潰そうとしていることは明白だった。

「させっかよッ！　なめんな第二位、原子崩し（メルトダウナー）にはなァ――――」

直後、麦野が空中浮遊をやめた。

今まで空中を縦横無尽に駆けることによって垣根と互角に渡り歩いていたといっても過言ではない状況で、そのアドバンテージを手放したことに、垣根は思わず怪訝な表情を浮かべるが……次の瞬間、そうまでして得たかった『武器』が何なのか理解できた。

「こういう使い方もあるんだよォ！！」

叫びながら、麦野は左の『電翼』を地面に深々と突き刺し体を固定する。『電翼』の熱によって地面が少しずつ赤くドロドロになっていくが、深々と刺しているため本体の麦野は動かない。

そして飛行を止め、自由になった右の『電翼』が地面に浅く食い込む。地面は『電翼』による熱で赤熱し、急速にドロドロしたマグマに変化する。それを認めた麦野は『電翼』を思い切り振りかぶり、垣根の方へブチ撒けた。

雫が何滴か小豆の方に向かい、彼女が思い切り慌てふためきながらかわしたのを見た麦野は思わず眉を顰めるが――これで麦野の思惑は成功した。

「……液体化した地面を利用して、攻撃すると同時に空中に浮遊する未元物質（ダークマター）の欠片を押し流す、か……」

三対の翼を瞬時に丸め、マグマによる熱攻撃を回避した垣根が翼を広げながら呟く。当然ながら、そこには一筋の傷も存在しない。しかし、鬱陶しいと感じるほどに空中に散布されていた未元物質（ダークマター）は一連の攻防で消滅していた。

「ははッ、やるな第四位、テメェもう『表』だけの第四位じゃねえよ」

「そりゃどうも。今の私は序列なんざ興味ねえけどなッ！！」

軽口を叩きつつ麦野は垣根に肉薄する。翼の射程内に入り一発撃ち、その後攻撃される前に退避する、それが麦野の戦法だった。チャフが発射されそうになれば空中浮遊を一時的に止めて牽制する。それは結果的に垣根をどんどんとジリ貧に追い詰めていた。

（クソッタレ……『爆発』の現象はこの局面じゃ起こせねえし、未（ダークマター）

元物質のチャフも効果はいまひとつだ。幻想御手（レベルアッパー）の……多重能力者（デュアルスキル）の『先』とやらを見れないのは残念だが、まあ、親船小豆と接触できただけでも良しとするか？　――――いや、せっかくだしもう少し『試して』おくか）

勿論、麦野と垣根は互角などではない。

現在は攻撃をいちいち妨害する形で拮抗しているが、これも電源切れになれば即座に崩れる拮抗だ。それに、仮に電源切れがなくとも、麦野が勝利することはありえない。表面上は拮抗しているように見える戦況だが、事実はそうではなく、少しずつ、本当に少しずつだが麦野が押されているのが現状だ。

しかし、制限時間があるとなると話が変わってくる。現状、残り五分やそこらで麦野のことを圧倒できるほど戦況は垣根に傾いていないし、奪い取れるほど力量差があるわけでもない。

当然、まともにぶつかり合えば一瞬にして垣根が勝るほどパワー差はあるものの、麦野はそうせず、ただ飛び回り時間を稼ぐ戦闘法を採っているから始末が悪かった。

（……ここで引くにしても連中を回収する必要がある。こんなところで俺以外のメンバー総入れ替えっつーのは面倒だし、何よりあの中でも心理定規（メジャーハート）は代わり（スペア）が中々いない）

最悪、ドレスの少女だけ回収すれば良いか、と考えて、垣根は幻想御手（レベルアッパー）事件が事件として顕在化する前、自分の許に届けられた手紙のことを思い出した。

『七月二四日、木山春生を狙え。多重能力（デュアルスキル）の『先』に『未元物質（ダークマター）』が成長する『鍵』がある』

手紙の送り主、真意、内容の真偽など、一切不明だが、垣根にと

って自身の能力の成長とは第一候補（メインプラン）に成るために重要なことだった。
だからこそ、この手紙と暗部で公表された情報によって木山が多重能力（デュアルスキル）を得る可能性に行き着いたとき、『たとえ罠だとしても引っかかりに行く程度の価値はある』と踏んでこの場に来たのだった。

最初、垣根はこの手紙の意図を木山の幻想御手（レベルアッパー）による副産物のことだと勘違いしていたが、今しがた、自分のチームの殆どを蹴散らした能力を見てその認識を改めた。

手紙の主は、第二位がこの場所に現れるように誘導したのだ、と。

（く、ハハ。面白ェじゃねえか。まさかこの期に及んでこの第二位のことを欺いて掌で躍らせようとする命知らず（クソバカ）がいるとはよお！）

一箇所に垣根、御坂、麦野、小豆の四人の超能力者（レベル５）に多重能力（デュアルスキル）者の木山が集合するなんて出来すぎている。誰かが裏で糸を引いているのに気がつくには十分すぎる状況だった、

垣根はそのことに気がついた先ほど、途轍もない憤りを感じていたが、同時にソレを上回る愉悦も感じていた。手紙の内容は、自分を躍らせるための内容だったが嘘はない。
事実、親船小豆は擬似的ながら多重能力（デュアルスキル）に酷似した能力――並行結合（シンクロニズム）を所持している。手紙には『木山を狙え』と書いてはあるものの、木山が自分を成長させる多重能力（デュアルスキル）とは書いていない。
つまり、その『先』に未元物質（ダークマター）が成長するための『鍵』があるという情報も嘘ではない。

第四位の所為で最早木山の『先』を見ることは叶わないだろうが、自分には親船小豆がいる。そう考えると、なまじ犯罪者な木山よりも長い目で観察する余裕のある親船小豆の発見は、垣根にとっては

これ以上ない僥倖だった。

「ッ、くそ！」

愉悦に表情を歪める垣根とは対照的に、麦野は焦っていた。先ほどから自分にしか聞こえない程度だが、首もとのチョーカーから定期的に電子音が発せられているのだ。

この電子音が意味するのはつまり、電池切れ。小豆には五分保たせると言った麦野だが、垣根の猛攻により少しだけそれが崩れてしまっていた。

「……ほう、第四位。そろそろスタミナ切れと見えるが」

「……ディッ！！」

垣根の問いに、麦野は答えない。答えられない。こうしているうちにも、バッテリーは刻一刻と減っている。もう、バッテリーの残量も三パーセント程度――一〇秒相当しか残っていない。

（まだか……まだなのかよ、親船ェ！）

と、そのとき。

プヅン、という音と同時、演算処理装置の電源が切れ、それに伴い麦野の脳では処理しきれない多量の『原子崩し（メルトダウナー）』が制御を失い、虚空に霧散した。

（お、終わっ――）

その瞬間の麦野は、真の絶望を感じていた。

第二位の未元物質（ダークマター）相手に、麦野は最早演算補助の反動でまともに能力も使えない。小豆は、未だ演算中。この状況で、第二位垣根提督を止めることのできる能力者は誰もいない。

（お、終わりなの、か？　ここで。折角『大切なモノ』を見つけようと思えたのに？　まだまだこれからなのに、ここで終わりなの！？）

奇跡は、起きないのか――。麦野は思わず縋ってしまう。

ありもしない神様に。都合のいい奇跡に。

現実にそんな奇跡を起こしてくれる、優しい神様なんていない。

それは暗部に堕ちて血も涙もない経験をしてきた麦野なら分かっていたことだった。

普段の麦野なら、こんな絶望的な状況に陥ってもありもしない神様なんかに縋ったりはしない。最後に、相手に罵詈雑言を投げかける程度に足掻くことはする。

だが、今の麦野はそうではなかった。『大切なモノ』を見つければ、小豆のようになれる。そういう希望を抱いてしまっていた所為で、その可能性が潰えた瞬間、ほんの一瞬だが――心が折れてしまったのだ。

残る数瞬の時間。これは麦野にとっての寿命だった。奇跡なんて都合のいいことが起こらない以上、このまま麦野は死んでいくしかない。

そう、奇跡なんて都合のいいことは、願っても起こるはずないのだから――――。

「待たせたね麦野さん！　演算終了だ！！」

しかし、奇跡は起きた。

それは、小豆が予告していた演算終了時間よりも三二秒早い時間だった。

その言葉に誰よりもすばやく反応したのは、麦野でも、小豆本人でもなく垣根だ。

「チィッ！　ここはひとまず退散させてもらうぜッ！」

垣根は翼で麦野を吹っ飛ばし、小豆に命中させることで時間稼ぎをしながら、同時進行で倒れ伏している『スクール』構成員を拾い上げる。

「行か、すかァ……！！」

吹っ飛ばされた麦野は小豆に抱かれながら、死力を振り絞った、という様子の形相で右手を掲げ照準を垣根に向けるが、演算が上手くいかず狙いが定められない。

何とか撃った『原子崩し（メルトダウナー）』も垣根の翼にあっさりと防がれ、そのまま垣根は飛び去っていった。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

「……にしても、あの時は流石に駄目かと思ったわ……」

目の前でへたり込んでいる麦野は、彼女にしては珍しく弱音らしきものを吐いていた。それほど、死力を尽くしたということか。見れば彼女は大きく開いた背中に少しでは在るものの火傷をしているし、服も結構焼け爛れてボロボロといった様子だ。

足を覆うストッキングも所々穴だらけである。元々露出度の高い服装だから、これはこれで危ない雰囲気を感じるが……、いかんせん、相手が麦野なので私にはちっとも魅力が感じられなかった。第一印象ってやっぱ大事ね。

「にしても、親船も根性見せるじゃない。まさか三二秒も演算時間を縮めるなんて」

「ああ？　アレ？　三二秒も縮めるなんて無理無理。四分の時点で諦めて演算なんかやめてたよ」

どこか私のことを褒める感じの空気な麦野に、私は半笑いで右手を振りながら答える。その瞬間、麦野が浮かべた表情は多分一生忘れないだろう。

ぽかん、という擬音がこれほど似合う表情もそうない。これは電気感知式精神感応（テレパス）と出力関係の能力を併用してＰＣのフォルダに残しておこうと思う。

「え、でも。それって、……ちょっと待って？　――そうよ。じゃあなんで私が電池切れになった瞬間に演算が完了したなんて嘘ついたのよ？　それならもっと早くに演算終了を宣言してればよかったじゃない」

「あー、だって、あんまり早すぎても苦し紛れの嘘だってバレちゃうでしょ。それなら麦野さんが暴れられるだけ暴れて、時間稼いでくれた方がいいじゃん。それに、垣根が麦野さんのバッテリーが切れたことに気付いて、少しでも冷静さを失ってる瞬間に宣言する方が、私の嘘が見破られないかなってね」

この世に――特に、彼女の住んでる世界や私が相手をしている世界に奇跡なんてない。有り得ない。奇跡っていうのは、護るべき他者を護るために自身を犠牲に出来るような、そんな殊勝なヒーローにしか起こりえない。

だが、何も神様が奇跡を起こすのを待つ必要なんかない。というか、居もしない神様に奇跡を求めてたって何時まで経っても奇跡なんか起きない。

そんなことをするくらいなら、最後の最後まで見苦しく足掻いて、足掻きまくったほうが圧倒的に有益だ。

奇跡なんて何時の世も――最後まで諦めない人間の悪足掻きが起こすものなのだから。

どうだ、分かったかな麦野？　お前も暗部に生きるんならこのくらいの浅ましさは身に着けておくべ――――、

「あ、あああアンタは！！　私が一体どんな思いでバッテリー切れの瞬間を迎えたとッ！！？　ブチ殺す！　テメェは絶対ブチコロス

！！」

あがばばばば！！　な、何事か分からんが麦野が切れてええええ！？　ちょ、マジ胸倉掴んで揺らすの止めて、アンタ浜面を生身で叩きのめせるレベルの身体能力持ってんだから！！

うわああ景色が歪むぅ、ゆ～れ～る～～～……。

ハッ！？　一瞬意識を失ってた……。まったく、麦野もじゃれつくのはいいがもう少し手加減を……、ん？　おかしいな。麦野があらぬ方向を見て呆然としてる。

「……麦野さん？　どうしたの？」

「親船……見て、あれ」

麦野に言われた方を振り返り見てみると、そこには目もくらむほどの光の塊。あれは……幻想猛獣（ＡＩＭバースト）か！！

とすると……連中は！？

私がそう考えた瞬間、待ち構えていたかのように念話（テレパシー）が送られてくる。当然、黒花だ。

『親船さん！　そっち終わりましたか！？　終わってたら助けてください！　幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に出くわしてしまいました～！』

……案の定だよッ！！

内心舌打ちしながら後ろを振り仰いで見ると、そこには既に色々と膨張した『赤子』の成れの果てがあった。破壊されるたびに再生膨張し、その結果がコレ。まさしく試作段階（プロトタイプ）に相応しい醜さだ。

おかしい。この状態になっている頃には既に幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は原子力発電所に向かおうとしていて、御坂と一騎打ちになってるはずだが――まさか、『アイテム』が加勢した所為で下手に押しとどめることが出来てるのか！

「ａｃｃ虚ｒｋｍ憎ｉｌｇ――――！！」

と、遠方に居た幻想猛獣（ＡＩＭバースト）がこちらの方をにらみ付けて咆哮する。

うおお……流石一万人の無能力者やら低能力者の無念の集合体……ノイズに紛れながらも聞こえる怨念、恐ろしい……。

「麦野さん！　行くよ！　沿受ちゃんたち、まだ逃げられてないみたい！　動ける私たちが助けに行かないと！」

麦野の手を引っ張って黒花の逃亡の手助けをしてやろうとしたが、麦野は動かず、その所為で体に余計な力が入って私のわき腹が痛む。何してんだ麦野、面倒くさいから動きたくないとか言ったら地面に埋めてやるぞ。

「……はは、ごめん親船。ちょっと体に力が入らない」

麦野は地面にへたり込んだ体勢のまま、私の方に力なく苦笑いを浮かべる。……ちょっと可愛いかも。……じゃなくて！

チッ、無茶させすぎたか。そりゃそうだ、演算補助があったとはいえ普段なら確実に全身爆破してる量を扱っていたのだ。

しかも演算補助装置には途中で機能停止したときに麦野の体が爆発しないように能力を強制終了する機能もつけておいたって話だしな……。全力以上の力を出した上に、その力を強制終了させられたんじゃ、肉体に不具合が出たっておかしくない。

「……立てそう？　無理ならここで待っててもらうのもアリだけど」
「ちょっと待って……自分で立つから」

麦野はそういうと、手を膝に置いてぷるぷると震えながらも自力で立ち上がった。立ち上がるときに目が血走っていたり、口の中で『立てよ、立てよこの役立たずの足が……！』とか怖いことを呟いていたのは知らないことにしておく。

麦野がやっとの思いで立ち上がるのを見た私は、それでも満足に立てなさそうな麦野に肩を貸しながら、

「原子崩し（メルトダウナー）は？」
「有難う……。……撃ててあと二、三発ってところね。まあ、それでもあんなゴミクズを消し去るのには十分だと思うけど」

流石超電磁砲（レールガン）を凌ぐ火力の持ち主。弱体化しても幻想猛獣（ＡＩＭバースト）程度敵じゃない、と。

「ここからだと少し遠いね……。瞬間移動（テレポート）で行くよ。今ちょっと全身痛いから演算ミスっても勘弁ね」
「え、ちょ。それなら別に徒歩でも――」

麦野の異議は聞かずに瞬間移動（テレポート）行使。っていうかアンタその体じゃ徒歩だと着く前に全部片付くだろうが。

ピシュンッ、と小気味のいい音（実際には移動物（わたしたち）が周りの空気を押しのけた音）と同時に瞬間移動は成功した。地表から、丁度一メートル程度の地点か。痛みに耐えて能力を使った割りに正確な位置だ。

……まあ、ボロボロの私たちじゃ受身なんかとれないんだけど。

何故か与謝野こそいなくなっているものの、周囲は、結構な地獄絵図だった。

黒花は支給された拳銃を持ちながら汗だくで苦しんでいる滝壺を介抱してるし、フレンダはもうすっかりビビっちゃってる。それでもビビりながら爆弾使って攻撃してるのは高評価なんだけど。木山？　木山は既に倒れ伏しとるよ。ここだけは私の知るとおりだな。

で、一番キツそうなのが絹旗だ。御坂は電撃使って遠距離攻撃で幻想猛獣（ＡＩＭバースト）と戦っているが、絹旗は接近戦程度しか立ち向かう術がない。途中途中で瓦礫を持ち上げて投げつけてるけど効果ないし。その結果、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の攻撃をモロに受けたりして結構グロッキーだったりした。

私の隣にいる麦野は、その様子を見て何か思うところがあるのか、拳を握り締めて幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を睨み付けていた。

でもま、麦野がこの場に来たからには安心、か。そもそも御坂だけでも潰せる敵だったしな。

「さあさあ皆さん真打の登場だよ！！」

せっかく瞬間移動までして駆けつけたのに、誰も気付いてくれないので私は大きく声を上げて全員の注目を集める。こっちを見た御坂がぎょっとした顔をしてるけど、どうしたんだろう？　あの日のこと、未だ覚えてるのか？　女々しい奴だ。

まあ、原子崩し（メルトダウナー）もあと二、三発程度なら撃てるっていう話だし、このまま麦野に任せておけば中の核ごと蒸発させて全部解決してくれるだろう。

私が集めた注目の前で麦野は私に肩を借りながら凛とした声で言い放つ。

「――――お疲れみんな。後は……私『達』に任せなさい」

……んん？

今こいつなんて言いやがりました？

12

「親船さん！！」

黒花が半泣きでこっちに視線を送ってくるので、とりあえず私はにっこりと微笑んでおく。内心は冷や汗だくだくだが。隣の滝壺は苦しそうにうめいてはいるものの、私の方に視線を向ける程度の余裕はあるようで、意識はしっかりしているようだ。

「黒花、現状を説明できる？」

麦野はそこら中に転がっている瓦礫に寄りかかりながら黒花の方に近寄って話しかける。すると、黒花はぽつぽつと話し始めた。

彼女によると、与謝野との戦闘の途中で降ってきた御坂が与謝野に能力を奪われて、それ自体は滝壺のウルトラCによってなんとか解決できたが、その後遺症なのか能力が本調子じゃないため幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を倒せなかったそうだ。与謝野は結局逃げたらしい。

（なるほど。それで私たちが来るまで幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を倒せていなかった、と……）

私はとりあえず納得して幻想猛獣（ＡＩＭバースト）と格闘している御坂の方を見る。彼女の扱う電撃は私の扱える電撃使い（エレクトロマスター）のモノよりも弱いくらいだ。

おそらく、超能力者（レベル５）の証であり彼女の通称でもあるレールガンも使えないはず。やはり、ここは他の超能力者（レベル５）である麦野がとどめを刺すべきなのだろう。

黒花から事情を聞いた麦野は、瓦礫に寄りかかるようにして私の方へ戻ってきて声をかける。

「親船。力を貸して。正直、今の私じゃ原子崩し（メルトダウナー）を撃てても照準が定まらないわ。能力の強制力を極限まで弱めるから、親船の電撃使い（エレクトロマスター）で照準補正をしてほしいの」

……あー、なるほど。そういうことだったのか。確かに、さっき私は麦野の『電翼』から原子崩し（メルトダウナー）を一部拝借したからな。そういうことなら麦野が私『達』と言った意図も頷ける。御坂は既に原子崩し（メルトダウナー）を操作するだけの余力もなさそうだしな。

「了解麦野さん。まあ何とかするよ」

流石に麦野の全力で出した原子崩し（メルトダウナー）を誘導するとなると、相当骨が折れる、というか私じゃ無理なのだが……、幸いにも、麦野は今弱りに弱っている。幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に誘導するくらいの操作なら辛うじて出来る。

麦野の依頼を了承して、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に照準を定めようとすると、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の周りに氷の槍のようなものが現れる。これでは照準が定められないので、どうしたものかと私が考えていると、絹旗が反応した。

幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の周囲に浮かんだ氷のようなものを破壊しながら、絹旗が攻撃の手を休めてこちらに近づく。フードはボロボロになっており、彼女自身の体も傷がないところのほうが少なくなっていた。

「……っ！　麦野、親船さん！　コイツに攻撃するなら超気をつけてください！　コイツ、超自動再生能力持ちです！」

「……自動再生ですって？」

絹旗の言葉に、麦野が思わず聞き返す。その呟きに御坂がダメージにもならない電撃を放ちながら答える。

「そうよっ！！　なんでも木山の話じゃコイツ、幻想御手（レベルアッパー）の使用者のＡＩＭ拡散力場が集合して出来たとか！　多分自己再生も肉体操作（メタモルフォーゼ）の応用よ！　多才能力（マルチスキル）の成れの果てってわけね！　全くもう、面倒なことしてくれるわよ！　それでコレ、アンタが潰してくれるの！？」

「……なるほど、拡散力場の集合体、ね……。さっきからその化け物が使ってる妙な能力も、その産物って訳。……ああ、安心しときなさい。いくら手負いとはいえ、この程度を消せないほど私も弱っちゃいないし」

そう言って麦野はニヤリと口端を歪め幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を睨み付ける。その眼光に恐怖したのか、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は最早ノイズしか聞き取れない咆哮を上げて麦野から逃げようとする。

絹旗と御坂は必死に食い止めようとするが、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の気迫たるや凄まじいもので、どんどん押されていっている。

麦野は自分で照準をつけられる余裕などないから、私が麦野の代わりに照準をつけないといけないのだが、その照準も、当然相手が止まっていないとつけられない。これはマズイと思ったのだが――、

『♪♪♪～～～～』

突如、心が安らぐような音声があたりに流れ始める。これは……

確か、初春がワクチンプログラムをかけたんだったか。ナイスだ初春。このお陰で幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の動きが鈍くなった。……照準がつけられる！！

私が照準をつけ終えるのを見計らうと、麦野は右手を掲げる。その周囲に青白い光が纏わりついていき、『原子崩し（メルトダウナー）』がその姿を顕わにする。私も、電撃使い（エレクトロマスター）の能力を使って麦野と照準をつけた先を繋ぐようなイメージでレールを作る。

「き、気をつけろ……！　『幻想猛獣（ＡＩＭバースト）』は核を潰さない限り永遠に再生する！」

もう撃つ三秒前といったところで木山が痛みを堪えながら叫ぶ。しかし、麦野の表情は変わらない。当然だ。麦野にとって原子崩し（メルトダウナー）を撃つということはイコール幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を消し去ること。

原子崩し（メルトダウナー）を撃つと決めた時点で幻想猛獣（ＡＩＭバースト）が欠片さえ残らず消えてなくなるのは決定事項なのだ。

「問題ないわ。核は潰す。……コイツがね」

木山の言葉に事も無げに返した後、麦野は私の方へ顔を向けてパチリとウインクしてまた正面に向き直った。当然だが今の私に電気によるレールを維持した後新たな能力を使う余裕などない。

はて、麦野は何を言いたい……？　私が他に持っているものと言えば、……なるほどな。ここでお祖母ちゃんからもらった揺り籠（マザーハンド）が活きてくる訳だ。麦野が原子崩し（メルトダウナー）で幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を消し去る。しかし、万が一核を消せなかったときのために私が銃を使う、と。

私が答えに辿り着くと同時、麦野の腕に収縮していた青白い光は臨界点に突破し、発射直前の様相を呈していた。麦野のこめかみを汗が伝い、それが顎を通って地面に落ちた、その時。

「行くわよ――――食、ら、えェェェぇぇぇえええええ――――ッ！！！」

ゴッ！！　という轟音と同時、麦野がコレでもかと言うほど目を見開きながら原子崩し（メルトダウナー）を開放する。そのあまりの威力に、私が電撃使いで作ったレールもところどころ穴が……開いちゃ駄目だろ！！

頑張って堪える……！

原子崩し（メルトダウナー）の高威力の為に吹き飛びそうなレールを全身全霊で強化し、何とかギリギリ抑えようとするがそれでもやはり穴が開いてしまい、それをすぐさまふさぐ、という作業を繰り返す。

……それでもやはり数パーセントほど外部に漏れてしまったが、大部分は幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に命中。幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の殆どは消し炭と化して蒸発した。……が、三角柱型の核は残っている。あの『核』は不思議物質で出来ているからな。原子崩し（メルトダウナー）の熱では破壊できなかったのかもしれない。

これは、麦野の用心深さが功を奏した。私は核も蒸発してくれると勝手に安心してたわけだし。……が、これでもう問題ない。私という最後の切り札があるわけだしな。拳銃の扱いは初めてだが、この拳銃は反動が少ないから命中率も高い。『赤子でも使えるように設計された』という謳い文句は、嘘ではないのだ。

「まあ、君たち憧れの超能力者（レベル５）にトドメ刺してもらえなかったのは残念かもしれないけど、これが現実。いつだって最後に良い思いをするのは、私みたいに備えるだけ備えておいた人間だけなんだよね～？」

正史において御坂が幻想御手（レベルアッパー）の使用者にかけた言葉の代わり――ではないが、自分への戒めとして呟きながら、引き金を引く。

パキィン！　と盛大に砕ける音をあたりに飛び散らしつつ、『核』は砕け散った。核に纏わり着き始めていた新たな肉片も消滅する。……救われないラストだが、これで良いだろう。私はヒーローじゃないし、ヒーローになるつもりもない。正しくこれが『現実』なのだ。

ぶっちゃけ幻想御手（レベルアッパー）で昏倒してる奴だって自業自得だし、可哀想とは思うが助けてやろうとは思えないしな。

「――――ふぅ」

全てが消滅して、何も再生しないのを確認した私は一息ついて、それから全身の力を抜いた。

……やっと、終わった……。ホント、今日だけで何回死ぬ目に遭っただろう。垣根とか垣根とか垣根とか、挙句宣戦布告までされるし。

とりあえず――――回復だ。

瞬間移動（テレポート）もアリだが、今の状況じゃどう考えても途中でどこかにめり込む。少なくとも垣根の翼に叩かれたときのダメージは回復したい。

それ以前に、さっきからわき腹の感覚がなかったり熱かったりひりひりしたりと凄まじいし、肋骨なんか確実に何本か折れてるし。

私はとりあえずその場にへたり込み、設定を肉体変化（メタモルフォーゼ）に変更して能力を行使する。……そういえば、御坂の目の前で思いっきり『素』の能力使ってるな。今度から喧嘩売られるかも――いや、あれは上条だけの特権か。

後でいろいろ聞かれるかもだが、心配するようなことでもないだ

ろう。とりあえず、怪我の治療をしながら私は周囲を見渡してみる。

……絹旗はなんか満ち足りた笑顔で大の字になって気絶してる。パーカーは最早殆ど布切れ状態だし、肌も傷のない部分を探すほうが大変なくらいだ。今まで戦ってたのがおかしいくらい。

多分、麦野が幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を破壊したのを見届けて安心して倒れてしまったのだろう。超能力（レベル５）で倒せるレベルの化け物相手によく頑張ってくれたと思う。

隣の御坂は絹旗の方に呆れたような視線を送って、それから私の方に視線を向けてきた。……目が合う。御坂は常盤台の制服だが、木山との対決のときについただろう砂埃がある以外は大したダメージはなさそうだ。

とりあえず、今は色々問い詰めるのは勘弁してくれ、と目で示すと、御坂は目を逸らした。了承と言うことだろう。助かる。

フレンダは麦野に指示されたのか、携帯でどこかに連絡を取っている。多分、下部組織の人間だろう。彼女は、少し服装に乱れがあるが、それ以外は至って普通。爆撃中心でやっていたから攻撃を食らわなかったのだろう。

黒花は滝壺の額に浮かぶ汗をハンカチで拭いながらアワアワしていた。黒と白を基調にしたメイドっぽい雰囲気を醸し出しているシャツとスカートには、特に目立った汚れはない。本当に銃撃オンリーで戦っていたようだ。

滝壺も、援護射撃だけだったためか怪我はない。こっちは体晶の影響だけだな。

木山は……あ、麦野に首絞められて気絶（オチ）した。木山を絞めた麦野は、こっちに近づいてくる。……麦野はこの中じゃ、一番痛々しい

有様だ。シャツは背中部分が少し焦げてるし、スカートも破けてる。
タイツも穴まみれだし何より肉体の損傷が凄い。口の端には夥しい血の痕が残ってるし、破けたシャツの隙間から見えるわき腹は凄い痣がある。

「親船、瞬間移動（テレポート）行けそう？」

麦野が心配そうに聞いてきた。麦野たち『アイテム』は非公式の組織だし、私も公式には低能力者（レベル１）だからこんなところにいたらおかしいしな。警備員（アンチスキル）もそろそろ来る頃だし、麦野の心配は尤もなのだが……。

「ちょっとキツイ、かなー……。五分くらい待って欲しいかも」

流石に負傷が大きすぎる。さっきまで緊張状態だったから何とかやっていけていたが、今は下手に緊張の糸が切れてしまったから中々演算に集中できないのだ。すると麦野は、

「五分は……無理ね。あと数分もしたら騒ぎを聞きつけて警備員（アンチスキル）が来るだろうし。私たちは公式の組織じゃないから、あいつらのお世話になることはできないわよ」

「だよねぇ……。どうしよっか。とりあえず絹旗ちゃん起こして原子力発電所の中に隠れておく？」

あそこならばセキュリティに前もって穴を開けてあるから、潜入は簡単だ。警備員（アンチスキル）も流石にそこまで捜索する余裕もないだろうし。
しかし、麦野は私の提案に首を振り、

「その必要はないわ。さっきフレンダに下部組織と連絡をとらせたから。すぐにでも瞬間移動（テレポート）できるならしてもらうつもりだったけど、

無理なら無理で下部組織に助けに来てもらうから問題はない。アンタはそこでゆっくり回復してなさい」

「あいあいさー」

私は麦野のありがたいお言葉に従っておくことにした。

……しかし麦野、さっきから沸々と違和感は感じていたが、何だかキャラが変わってないか……？　勿論表面上の態度というか、性格が変わっているわけじゃないと思うが、それでも根本的な行動指針みたいなものは変わった気がする。

私の知る麦野は、こういうギリギリでの勝利では満足できず、すぐにでも滝壺を叩き起こして垣根を追跡するような奴だった。確かに麦野の傲慢が治るように矯正した覚えはあるが、それでも『そういう考え方』を教えただけで麦野の傲慢がなくなったわけじゃないし、何より仲間のことを思いやる彼女の言動は傲慢な態度を押し込めただけじゃ説明がつかないものだ。つまり、私は身に覚えがない。

人っていうのは簡単に変われないものだと私は思っているけど、麦野はそれが起きるくらいの大きな出来事を経験したってことか？

まあ何にしても、この変化が恒久的に続くなら私にとっては願ったり叶ったりだ。正直今の麦野の力量だと浜面は確実に消し炭にされるところだったから、麦野が丸くなることで衝突そのものがなくなればそれは有難い。

代わりに麦野と浜面の衝突っていう正史の歴史がなくなってしまうところがネックだが、浜面はロシアに行きさえすればいいので衝突自体に意味はないと言える。

むしろ、『アイテム』が一致団結してロシアに行く可能性もある分、正史よりも有利に展開が進む可能性さえある。……うん、良いこと尽くめだ。何か大事なことを忘れてるというか、想定外のことが起こる可能性を考慮に入れてない気がするけど今は良い。後で考えることにする。

そうこうしているうちに黒塗りのマイクロバスがやってきた。私たちを『回収』するための車両だ。勿論、『アイテム』の下部組織が所有しているものである。とりあえず回復を継続しながら私はさっさと乗り込む。

負傷の少ないフレンダと黒花が絹旗と滝壺を車の中に押し入れ、最後に麦野が堂々と乗車した。何気に一番大怪我なのに凄い気合である。

さぁて、これで幻想御手（レベルアッパー）事件、ジ・エンドだ。私のすべきことはもう終わった……。

幻想御手（レベルアッパー）の後は時系列的に上条とインデックスのあれやこれやがあるが、これは私が干渉する余地がないし、何より上条の記憶喪失は今後の正史の流れを再現する以上絶対に必要になるモノだからな。私に干渉するつもりはないのでしばらくは安定した生活が約束されている。

で、バスの中。

御坂は別れ際、バスに乗ろうとしてフレンダに取り押さえられていた。どうせ、私の素性についてバスの中で洗いざらい聞こうっていう魂胆なんだろうがそうは行かない。一応『アイテム』は私の護衛ってことになってるしね。そのくらいの妨害はしてくれるさ。

絹旗も意識を取り戻し、滝壺の状態も落ち着いたところで、麦野は私を含めた全員の顔を見渡して頷く。全員が無事に生還したことを確認して、満足しているのだろう。

「麦野、結局約束は忘れてないよね？」

フレンダが麦野のほうににやにやとした笑みを向ける。麦野は、その表情に若干呆れながらも頷いた。

『よっしゃーっ！！　こりゃー帰ったらパーティって訳よー！！』

とはしゃぎまくるフレンダだが、彼女は一つ忘れていることがある気がする。

……この場に居るメンバー、大体病院で治療を受ける必要があるということを。

＊＊＊

「フレンダちゃん……。そんなに落ち込まないで。みんなが退院したら改めてパーティやるって麦野さんも言ってたし」

そんなわけで私たちは第七学区の病院に辿り着いていた。カエル顔の医者がいる病院だ。現在位置は診断室の前のビニール椅子。私の隣にはフレンダと黒花と滝壺が腰掛けている。

麦野と絹旗は負傷が酷いため、応急処置を受けているとのことだった。負傷が酷かった私だが、バスの中で自身を治療したお陰で現在は大した怪我もなかったりする。

しかし、私は現在みんなよりも一足先に入院時に着るバスローブのような服になっている。いや、私自身の怪我はもう治ったのだが、

服のほうは酷い有様だったので、運び込まれるなり着替えてしまったのだ。

ドラゴンボールの戦闘後みたいな感じで上半身の服は殆ど消し飛んでるし、R指定かからなかったのが奇跡というレベルの損傷の仕方だったらしい。もしかしたら御坂が私の方を凝視してたのは、その所為かも知れないな。

実は別に暗部御用達の病院に行っても良かったのだが、わざわざお祖母ちゃんがこっちに行けと紹介してくれたのでこの病院に来ている。それにしても大小さまざまな負傷を負った暗部の人間を治療してくれる公共施設など、ここを置いてはどこにもない。

『アイテム』の彼女たちはカエル顔の医者とは面識がないのだが、私は以前遭った騒動の治療で何度か会っている為顔見知りだ。

「だって、結局麦野と絹旗は入院して五日間安静っていう話な訳でしょ？　しかも護衛の主戦力が抜けた状態じゃマズイからっていう理由で小豆も肉体変化（メタモルフォーゼ）で入院しなくて良いって話にも関わらず偽装入院することになってるし、それなら折角だから殆ど無傷の私たちも、ってことで一緒に偽装入院する羽目になってるし！！　病院食なんていやだーっ！！」

そういってフレンダは足をバタバタバターっ！！　とバタつかせて入院を拒否する構えを決めている。最初に言っておくが、麦野と絹旗があの負傷で五日間の入院で済んだのは、一〇〇パーセントカエル顔の医者のお陰だ。

通常の患者とは別の、忙しい暗部の人用の治療を施してくれたとか何とかで、なんと二五日も入院期間を縮めてくれたのだ。……それに、病院食がマズイっていうのはかなり昔の話なんだけどな。ましてカエル顔の医者のモットーは『患者に必要なものは何でもそろえる』ことだ。

何度か入院したが、マズイ飯を食わされたことは一度もない。同じ病室らしいし、もういっそ病院でパーティするのもアリかもしれない。

「まぁまぁ。此処の料理はウチに勝るとも劣らないくらいおいしいし、意外と快適なんだよ？　私が保証する」

「……病院食のおいしさとか入院暮らしの快適さを保障されても逆にそれを保障出来るほど入院してるアンタの方を心配しちゃうって訳よ……」

未だにブツクサ言っているフレンダを慰めるべく、私は慎ましい胸を張って偉そうにしてみるが、フレンダはふぅと溜息をついてしまった。言われてみればその通りである。と、その時ガララ、と扉が開けられた。そっちに視線を向けると、松葉杖をついた状態の麦野が呆れた様子でこっちを見ていた。

「何を馬鹿話してんの。親船、アンタの家の従業員に入院用の荷物とか届けるように言っておいて。私の分の必要な荷物はそのメモに書いておいたから」

麦野は電光石火でメモを押し付けて病室に行ってしまった。麦野と入れ替わりになるように、絹旗も診断室から顔を出した。絹旗は松葉杖をつくほど体のダメージも酷くはないらしく、露出してる部分の九〇パーセントに包帯を巻かれている程度で済んでいる。多分、服の中も相当包帯でグルグル巻きになっていることだろう。

「親船さん、今日は超お疲れ様でした。とりあえず私は超疲れちゃったのでさっさと病室に戻っちまいましょう」

絹旗に言われて、私が立ち上がったと同時に馬鹿話をしていたフ

レンダや滝壺と黒花も一緒に立ち上がる。

……病院でパーティ、か。どうやれば看護婦さんに見つからずに片付けられるか、今のうちに考えておかないとな。

＊＊＊

side other

麦野が診断室を出る十数分前。カエル顔の医者と麦野は向かい合っていた。麦野がまず最初に思ったのは、絹旗は別室で応急処置を受けているため、この会話を聞かれる心配はない。ということであった。

これから話されることは、まだ絹旗にとっては刺激の強すぎることだろう。

「……随分と、無茶をしたようだね？」

カエル顔の医者はカルテに目を遣ると、そういって溜息をついた。彼と麦野は初対面であったが、それでもこの病院に来た以上、彼にとって麦野は立派な患者、救うべき対象である。

「そうでもしなきゃ、今こうしてアンタの所にさえ来られなかったでしょうね」

カエル顔の医者の声色から、麦野の体には相当の負担がかかっていることが予想されるが、彼女は気にしない。

そのお陰で、自分が目指すべき道が見えたからだ。今までのように、暗部で終わりのない地獄を歩くだけじゃない。救いようのない彼女でも、救われる道があるかもしれない。それに比べれば、体が壊れるくらいの代償は安いものだった。

「演算補助装置、といえば聞こえは良いけど、実質は脊髄を通る神経に過剰な電流を流すことで反応速度を向上し、それによって思考能力を高めるというドーピング……。神経にかかる負担を度外視している上に、鎮痛作用のある錠剤と併用することでその負担に気付かせないように細工しているね？　これを開発した人間は、よほど君のことを潰したいようだよ？」

「それはないわ。『方法は何でもいいから演算補助が出来る機構を寄越せ』って言ったのは私自身だし、彼らは二日でその無理をかなえてくれただけ。そのくらいの欠陥があったってちっとも不思議じゃない」

カエル顔の医者の口から語られる演算補助装置の実態は、黒花や他の『アイテム』の構成員が聞けば驚愕する内容だっただろう。しかし、麦野はそれを聞いても眉一つ動かさなかった。その様子を見て、カエル顔の医者は眉を顰める。

「医者として、患者である君に言わせてもらうよ？　――――金輪際、この機構を使うことは許さない。絶対にだ」

カエル顔の医者――冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は、今までの遊びを一切排除した口調で、麦野に宣告する。このまま演算補助装置を使用し続ければ、いつか麦野は間違いなく壊れる。それが彼の下した診断だった。

しかし、麦野はそんな先刻を告げられても眉一つ動かさない。全ては予想通りの展開であると言うかのように。

「まあ、真っ当な医者ならそう診断するでしょうね。でも、それは聞けない。『大事なモノ』を見つけられそうなのよ。プライドもモラルも、全て投げ出してでも護りたいって思えるそんな『大事なモノ』をね。今此処で止まるわけにはいかない」

垣根との戦闘中に自覚した、自らの思い。『大事なモノ』がまだ何かは分からないが、それはきっと小豆と行動することで見つかる。小豆の生き方を間近で見て、彼女と触れ合うことできっと見つかるものだと麦野は考えている。

そして、小豆と一緒に居るにはこの先さらなる危険が伴うはずだ。与謝野との殺し合いもそうだし、垣根にも狙われている。この先、『電翼』なしで勝ち抜ける戦いだとは思えない。そう考えると、絶対に手放すことは出来なかった。

「あなたの矜持に障るかもしれないけど、これだけは譲れない。これは、私にとって必要なもの。アイツの傍にいるためには、絶対必要なもの。だから――――」

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）の信念は暗部にいる麦野も知っている。彼は、患者をみすみす壊すような手段は絶対にとらせない。一介の医者とは思えない手段でもなんでも使う、患者を護るエキスパートなのだ。

だからこそ、麦野は必死に頼む。プライドも外聞も投げ捨て、自分なら一ひねりで殺せる無能力者（レベル０）の医者に。

しかし、その言葉は唐突に止められた。

「勘違いしないで欲しいね？　『演算補助装置（それ）』は金輪際使うなとは言ったけれど、僕は君の力を奪うとは一言も言ってないよ？　君は僕については少し知識があるようだけど、それならこの知識も加えて欲しいね？」

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）はそう言って少しだけ笑った。

患者が本当に必要としているならそれを集めるのは彼にとって当然の責務なのだ。その彼が、麦野が必要と感じるものを奪うはずがない。

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は言う。

『僕は、患者に必要なものならなんでも用意する人間だ』、と。

12（後書き）

御坂ｖｓ木山ｖｓフレンダ・絹旗・滝壺・黒花ｖｓ与謝野については、後々番外編で書きたいと思います。

幕間０１／とある少女の事後考察（リーズニング）（前書き）

今回は幕間になります。

幕間０１／とある少女の事後考察（リーズニング）

幕間０１／とある少女の事後考察（リーズニング）

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

その日、御坂美琴は正史の通りプール掃除をさせられていた――――わけではなく、第七学区のとある病院に入院していた。といっても、美琴に目立った外傷があるわけではない。

昨日美琴が介入していた戦闘において、美琴は一時的だが能力を奪われていた。その戦闘に同じく介入していた少女によってその能力は解除され、美琴は能力を取り戻しているのだが――自分だけの現実（パーソナルリアリティ）というのは、繊細なモノだ。取ったり付けたりしてもオーケーというものではない。

そのため、万全に万全を期して『とある名医』のいるこの病院に入院させられているのだ。

美琴は、ベッドの上で所在無さげに視線をさ迷わせる。病室は四人ほど収容できるのだが、美琴はＶＩＰ待遇なのかその部屋に一人でいた。

誰かが居るなら会話なりして暇を潰せたのだが、誰も居ないのでそれもできず、こっそり持ち込んでいた携帯やゲームも電磁波に影響が出るからと没収された。

つまり、まるでやる事がない状態なのである。この数ヶ月、ことあるごとに自分にちょっかいを出していた後輩の有難みを今更になって感じる美琴だった。

「おぉーねぇーえーさぁーまァァァあああああッ！！」

ガダン！！　という轟音と共に扉が派手に開け放たれると同時、赤茶けた色のツインテール少女がその姿を現す。噂をすればなんとやらだな、と美琴は考えつつ、彼女の後輩である少女の次の一手を考える。

先ほどの血迷った思考は、早速前言撤回しなければならないようだった。

「フッフッフッフ……！　お姉様。黒子は聞いていますわよ？　不敬な殿方によって自分だけの現実（パーソナルリアリティ）に干渉され、その影響で能力が本調子でない、と！　つまり今のお姉様は黒子に何をされても反撃できないむ・ぼ・う・び状態☆」

わきわきわきわき！！　と高速で動く指に「どんなことをすればそんな指遣いを覚えるんだ」と美琴は戦慄を抱きつつ、彼女の後輩――白井黒子の次の言葉を待つ。

白井は体の影に隠しておいた何に使うかと問われれば「ナニ」と即答できるブツを引きずり出し、

「さあさあさあお姉様！　今日がお姉様のロストバージン♪　風紀委員（ジャッジメント）で培った捕縛術をフルに活用してお姉様に女の悦びを味わせてあげますの。入院期間中は退屈どころか睡眠さえさせてあげませんのよ――ッ！！」

脳内の桃色空間を現実世界にまで広げながら、白井は瞬間移動（テレポート）で瞬時に間合いを縮めて美琴に反撃の隙さえ与えない。

美琴はその高速移動ににわかに目を見開き、咄嗟に体を動かすことさえ出来ないのだが――――

「あぎゃばばばばばッ！！？」

しかし白井が美琴に飛び掛ることはなかった。空中にいた白井に美琴のこめかみから放たれた電撃が放出されたのだ。電撃により体勢が崩れ、美琴のちょうど膝辺りに落下した白井を、美琴は冷ややかな目で見つめる。

「お、お姉様……どうして、電撃、が……？」

「あのね、私は昨日の時点で善意の能力者さんの協力によって能力のロックは解除されてるわけ。今ここにいるのは、言わば検査入院みたいなモン。つまり、私の能力は既に完全開放済みってわけ。分かる？」

「がァァァああああ――――ん……」

衝撃の事実に、思わずベッドの上に崩れ落ちる白井。しかしそこは美琴の膝の上であるため、崩れ落ちると言うより擦り寄ると言ったほうが正しい。

本来は能力のロックが解除されていたとはいえ、リハビリには最低でも一ヶ月はかかるだろうというのが医者の見込みだったのだが、美琴はその一ヶ月間病院にいるということを良しとしなかった。折角の夏休みが一ヶ月も消滅するなどと言うのは耐えられなかったのだ。

そういうわけで、美琴はご自慢の電撃使い（エレクトロマスター）としての能力を使い、自分の脳に電撃を与えて刺激を加えることでたったの半日で元の能力を取り戻したのだった。

「ぐふ、ぐふへへへ……」

「っ！？　ちょ、黒子！！　まったくアンタって奴は油断も隙も―

――ッ！？」

自分の膝に埋もれて動かなくなった後輩に、呆れを感じながらもそれなりに心配してくれていたのだろうとほうっておいた美琴は、その優しさにつけ込まれた。

膝に埋め込まれていた顔面は急速に這い上がり、太腿を越えてその先に向かってゆく。美琴の現在の服装は流石に制服ではなく、普段寮で着ているような子供っぽい柄のパジャマである。当然、布は薄く柔らかい。

「わたくしは！　わたくしは何度転んでもめげませんの！！　何度でも何度でも立ち上がって、必ずや辿り着いてみせますの！！」

状況が状況ならこの上なく格好良かっただろうその言葉も、女の子の股間に顔面をうずめようとしながらでは格好がつかない。何より、一度慈悲の心をかけられておきながら調子に乗ってしまったのがまずかった。

「くぅぅ～～ろぉぉ～～こぉぉ～～……！！」

「ひぃ――――っ！？」

バリバリバリ！！　と。

病院内のため比較的弱めに放たれた電撃が白井の意識を焼いた。

＊＊＊

「でさぁ、黒子」

何事もなかったかのように、美琴は自分の傍らに横たわっている少女に声をかける。

少女からは呻き声しか帰ってこない。ギャグ補正などこの世に存在するわけがないと言わんばかりの重傷だった。しかし、美琴は構わず続ける。

「暇だったから携帯を没収される前に書庫（バンク）で調べ物してたんだけどさ」

「またお姉様はそんな……」

美琴のあんまりな物言いに、（いつの間にか回復していた）白井は思わず溜息を吐く。

書庫（バンク）にある情報と言うのは、基本的に個人情報保護の為に風紀委員（ジャッジメント）を初めとした治安維持組織以外閲覧できない。

それを閲覧すると言うのは、当然一般人の範疇外の越権行為であるのだが……この超能力者（レベル5）は、その自覚が足りない傾向にある。

治安を維持する風紀委員（ジャッジメント）の白井としては、今日こそ彼女に『一般人とは何か』ということを教え込んでやろうとするが、

「お説教は後で聞くから。今は私の話を聞いて。で、その書庫（バンク）で調べてたんだけど、データが二つ登録されてる能力者を見つけたのよ」

先手を打って告げられた美琴の情報に、白井は思わずクエスチョンマークを浮かべる。

通常、書庫（バンク）にある能力者の情報というのは能力者の持つ能力の強度、詳細、成長の遍歴や関係した研究所などが書かれている。

しかし、書かれている能力は多重能力（デュアルスキル）でもない限り一つだし、そもそも学園都市に多重能力（デュアルスキル）は存在しないので書かれている能力が『二つ』もあるということなど到底有り得ないのである。

「そいつの能力、表向きは低能力（レベル1）なんだけど実は超能力（レベル5）らしくってさ。正直私も信じられないんだけど、

確認作業する前に携帯没収されちゃったから黒子に確認して欲しいのよね。いい？」

「まあ、確認することに吝かではありませんが……」

言われて、出鼻を挫かれた白井は渋々美琴に従う。こういう美琴に対して白井が強く出れないと言うのもあるが、それ以上に美琴から感じる雰囲気がいつにも増して『真面目』だったというのもある。

「名前は？」

「親船小豆」

「おやっ……！？　それって統括理事会の一人、親船最中の孫娘じゃありませんの！？」

即答する美琴に、白井は今度こそ目を剥いた。

親船の孫娘の能力が、表面上は低能力（レベル1）だが実際は超能力（レベル5）。有り得ない位怪しい。怪しすぎて逆に罠だと思ってしまうレベルだ。これは藪を突いて蛇出たか、と白井は半ば諦めつつ携帯を操作し、書庫（バンク）にアクセスする。

書庫（バンク）には、確かにこう書いてあった。

能力者名、親船小豆。

年齢、一六歳。学年、高校一年生。
能力、割裂空洞（ダークホール）。低能力（レベル1）。
詳細、一一次元上での干渉により三次元でも観測可能な空間の亀裂を発生させる。
備考、希少な能力だが、一一次元上での移動が不可能である点を考慮し、低能力（レベル1）とする。
成長遍歴、低能力（レベル1）を発現して以来変化なし。
関係施設、特になし（所属高校のみ）。

「……特に変わったところはありませんのね」

実際は白井のセンサーは詳細の時点でビンビンに反応しているのだが、これ以上藪を突いて竜を召喚したくない白井は知らないフリをする。

「ね？　おかしいでしょ？　ちょっと携帯貸してね。これを、ビリビリっと」
「ああーっ！？　やめてくださいましお姉様！　わたくし風紀委員（ジャッジメント）として悪と戦うのは良しと出来ても別段悪くもない人に自業自得で恨まれて命を狙われるのはご免ですの！　後生ですから勘弁してくださいまし――――っ！！」

白井は必死に美琴のハッキングを止めようとするが、電撃でビリビリされながら美琴を止めると言うのは至難を極め、結局ハッキングは成功してしまった。
美琴はそんな白井の心境も知らず、「ほらほら見てよー」と無邪気な顔のまま白井の鼻面に携帯の画面を見せ付ける。そこには、こう書いてあった。

能力者名、親船小豆。

年齢、一六歳。学年、高校一年生。
能力、並行結合（シンクロニズム）。超能力（レベル5）。
詳細、一一次元上での干渉により三次元でも観測可能な空間の亀裂を発生させ

「裏の情報もダウトじゃねぇかッ！」

詳細の最初の一文を途中まで読んだ時点で白井が吼えた。いきなりのことに美琴が愕然とし、白井がへこへこ謝りながらその続きを読む。

――一一次元上での干渉により三次元でも観測可能な空間の亀裂を発生させる。
なお、この亀裂にはＡＩＭ拡散力場を記録する性質があり、記録した拡散力場を能力者の拡散力場に上書きすることにより、擬似的な多才能力（マルチスキル）となることのできる能力である。
備考、基本的に扱える能力の強度（レベル）は強能力（レベル3）が限度だが、一一次元の演算が可能なため瞬間移動（テレポート）は大能力（レベル4）相当が使用可能。
備考、分子レベルより細かい演算、膨大な量の演算、ＡＩＭ式精神感応（テレパス）などの三次元以外の演算を必要とする能力は扱えない。瞬間移動（テレポート）は前述の理由で例外。
備考、この能力を暫定的に序列第四位とする。
成長遍歴、超能力（レベル5）が発現して以来変化なし。
関係施設、不明（情報開示なし）。

「……黒子、どう思う？」
「どう思うも何も、論外ですわね」

美琴は白井の顔色を確認するように尋ねるが、仮にも大能力（レベル4）の瞬間移動能力者（テレポーター）であり、一一次元系の演算のエキスパートでもある白

井からしたら、この能力詳細は噴飯モノの詭弁だった。

「そもそも、一一次元は三次元では観測できない『位相』だからこその一一次元なんですの。瞬間移動の原理は重力子が三次元や四次元では観測できない形で移動しているように、対象物を三次元では観測できない形――つまり、一一次元の形式に直して座標移動を演算する、というものですの。三次元では観測できないことが一一次元の定義ですのに、その定義をぶち壊すっていうのは最早科学で出来るような所業を越えてる、というわけですのよ」

白井は溜息をつきながら説明する。それに、他にもおかしな点はあった。

「しかも、そもそもからして多才能力（マルチスキル）を実現できる原理が意味不明ですの。百歩譲って一一次元の空間に拡散力場を記録する性質があったとしても、拡散力場を上書きすることで、自身の拡散力場を変更することは確かに理論上可能ではありますが、能力の演算までできるわけじゃありませんの。たとえ三次元の演算といっても、それを扱うには専用に脳を『開発』し、専用の『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』を確立する必要がありますの。瞬間移動（テレポート）系の能力者に扱える道理はありませんわ。もし彼女にそんなことができるんなら、今頃わたくしなんかは多才能力（マルチスキル）の実験台として引っ張りだこだったでしょうね」

矢継ぎ早に捲くし立てる白井に、美琴はポカンとした様子でいた。内容は聞き取れたようだが、話が突飛過ぎてついていけない、といったところだろう。

現に美琴は瞬間移動をした小豆が直後発電能力（エレクトロマスター）によってボロボロの少女の能力を補佐していたところを見ていたし、肉体変化（メタモルフォーゼ）の応用で怪我を治そうと試みていたのも知っている。現実に見た事実を否定されたのだから混乱して当然だ。

「それってつまり……、どういうこと？」
「『全く分からないですの』、ってところですわね」

とどのつまり、それが白井の下した結論だった。
有り得ないはずの亀裂、有り得ないはずの演算、全てに説明をつけるとしたら、小豆が人間でないとか、それこそ――そう、何か今の科学では解明されていない、『説明の出来ない力』が働いているとしか言いようがない。

「そう。それなら丁度いいわね」

要領を得ない回答に、しかし美琴は平然として答えた。
美琴の性格を知る白井は、彼女が「あーもう」と軽く癇癪を起こしてこの話を打ち切りにすると思っていた為、少し意外そうな表情をして、それからさらなる面倒ごとに巻き込まれる予想を立てて顔を青ざめさせた。

「ねえ、知ってる？　実はこの部屋の隣の隣の病室に、私よりもほんの少し早く入院した団体様がいるのよ。そのうちの一人の名前を見たんだけどね、確か……名前は……そうだったわねぇ、『親船小豆』、とか言ってたかしら」

にたり、と美琴は嗤う。
白井の経験上、こういった疑問があるときの美琴はあんまり手段を選ばない。面倒ごとが巻き起こるのは明確だった。

どうやって先方の怒りの矛先を納めようか――と相手が怒ることを前提に考えた白井は、さっさと飛び起きて部屋を出て行った御坂を追うのだった。

ここは第七学区のとある病院。
『とある名医』――冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）のいる患者の楽園である。

幕間０１／とある少女の事後考察（リーズニング）（後書き）

四月一七日修正
八月二四日修正

13

……暇だ。

私は心の中でそう呟いて、ベッドから体を起こした。

現在地は第七学区のとある病院、二〇七号室。冥土帰しがいる病院として、裏の世界ではそれなりに有名な場所だ。で、私は先の幻想御手事件で負傷した麦野と絹旗の穴を埋めるため、ここで五日間の偽装入院を始めたわけだが……。

開始一日目で早くも飽きた。

いや、飽きたからといってどうにかできる話でもないのだが、それにしたって飽きた。

そういえば、今までの私の人生と言えば大抵暗殺者に狙われているか、暗部に狙われているか、上条にフラグを立てられないよう気を張ってるか、そのどれかだったような気がする。言わば、『仕事が趣味』と言ってしまうようなワーカホリックと同レベルなのだ。

だからこうして、『アイテム』と冥土帰しという学園都市でも最強レベルの布陣を揃えてベッドに寝転んでいると、面白いくらいに暇になってしまう。

しても意味のない自己分析を終えると同時、私は大きくあくびをした。

「そういえば滝壺。『体晶』は冥土帰しにバレなかった？」

私の右隣にある補助器具つきのベッドに寝転んで携帯を弄ってい

た麦野が、思い出したように右隣のベッドで寝ている滝壺に声をかける。

「うん。あの人にバレると厄介だからね。『形だけの偽装入院』ってところと外傷ゼロってところを利用して精密検査はさせなかったから、たぶん気付かれてない」

滝壺は誇らしげに胸を張るが、私はそれはないと断言できる。正直、アレの観察眼は人外レベルだ。わずかな痕跡から滝壺が体晶を使ったことに辿り着くだろう。

おそらく、それでも十中八九気付かれているんだろうが、確たる証拠がないから動けないところだろうな……。だがまあ、それでも十分。逆に滝壺が崩壊寸前になったときに浜面に教えてやれば、症状を食い止める手助け程度にはなるだろう。

暗部の襲撃部隊を相手にしているわけだから、流石に病院に入院させることはできないが、それでも症状を食い止めればロシアでの行動も楽になるはず。

「……おやふね、暇なら今のうちに準備しておいたほうが良いと思うよ？」

欠伸をしながらそんなことを考えていると、滝壺が不意に私の方に顔を向けてそう言った。いってる意味が理解できなかった私に、滝壺はさらに声をかける。

「……超電磁砲（レールガン）。なんだか猛スピードでこっちに来てる」

……マジか。っていうか滝壺何時の間に御坂の拡散力場記憶したんだ。抜かりないな。

そう心の中で思った瞬間だった。

ガダッ！！　という盛大な物音を立てて、病室の扉が開けられた。
扉の先には、不敵な笑みを浮かべながら表情の固まっている御坂と、おびえている白井の姿が。
瞬間、突然乱入してきた御坂に対し、『アイテム』の面々から一気に敵意がぶつけられる。いかに超能力者（レベル５）とはいえ御坂は『表』の世界を生きる中学生。『裏』に生きる彼女たちの殺気をその身に受けて自然体でいられるはずもない。
証拠に、何かあればすぐに飛び掛りますと言わんばかりの表情でこめかみから電気を発している。

「私が此処に来た理由、分かるわよね？」

こめかみからバチバチと紫電を撒き散らしながら、御坂は私の方に近づいてくる。御坂は戦闘時に匹敵する緊張を伴っている。ここで私が少しでも突いてしまえば即座に牙を剥くだろう。

『Ｍ－Ｏ「潰そうか？」』

と、黒花から念話（テレパシー）が届いた。「Ｍ－Ｏ」というのは『麦野（Ｍｕｇｉｎｏ）から親船（Ｏｙａｈｕｎｅ）へ』という意味だ。私や『アイテム』の連絡網は、黒花を起点にしている。
黒花しか念話（テレパシー）が使えないのだから当然なのだが、その関係上、念話（テレパシー）を行う際にはこのように『誰が誰に』念話（テレパシー）を送っているのかを明確にしないといけないため、こういう暗号を使っている。
先の戦闘では私が使うことはなかったが、念のために先の戦闘の二日前に決めておいたものだ。
……と、そんなことを考えている場合じゃないな。今のは麦野が私に「（御坂を）潰そうか？」と言っているということ。潰す、といっても殺すわけじゃないと思うが、あまり御坂と敵対されても動

きづらい。

『Ｏ－Ｍ「私に考えがあるから動かないで」って伝えておいて』

『了解です』

黒花からの返事が返ってくると、麦野の放つ殺気は治まった。気を利かせて他の面々にも念話（テレパシー）送ってくれたのか、他のメンバーの緊張感も大分薄まっている。

「……結構余裕なのね……。……はぁ。ちょっと聞きたいことがあってきたのよ。別に喧嘩とか売るつもりないわ」

一瞬室内の全員から放たれた敵意に身を強張らせていた御坂だが、すぐに解かれてしまったのを見て逆に肩透かしを食ったのか、彼女自身も緊張感のない体勢に変化していた。白井だけはビビリまくっているようだったが。

……御坂に攻撃の意思がないと聞いて、私は内心舌打ちしていた。先日のフレンダの件や、上条逃走補助の件もあったから私の挑発次第では電撃による報復に出てくれただろうと思っていたからだ。

怒りで我を忘れて私に電撃を仕掛けてくれたら、今後かなり有利に話が進められたと言うのに。電撃をほどほどに受け流す算段もついていたし、その後の御坂の罪悪感特典もかなり魅力的だっただけに、残念だ。

＊＊＊

「……何だか途轍もなく命拾いした気がするんだけど」
「さあ、気のせいじゃない？」

そんなわけで現在御坂と白井は私の向かいのベッドに腰掛けていた。相変わらず黒花は私の隣に、他の『アイテム』の面々は御坂と白井を取り囲むように突っ立っていた。

ヤーさんが借金を貸した奴を取り囲んでいるような絵面である。なまじ裏の人間だから洒落になってない。

「で、聞きたいことって何なの？」

私はどこか顔色の悪い御坂の様子を意図的に無視して語りかける。まあ、大体予想はついてるがな。

大方、私の能力についてだろう。書庫（バンク）には私の能力は低能力（レベル１）ってことになってるし、あの後気になって調べてみた情報と自分の目で見た事実が食い違ってるから私を問い詰めることで事実関係を問いただす、という腹なのだろう。

当然だが、御坂だけならともかく白井もいるこの状況で私の能力の正体を晒す、などというカードを切るわけもない。この場はシラを切らせてもらう。

なに、所詮脳筋御坂さんだ。適当にあしらえば癇癪起こすだろうから、そうしたら麦野あたりに取り押さえさせればいい。

「ええ。そうね。アンタも分かってると思うけど」

そら来た。なんて答えようか……。なるべく、相手の精神を逆なでするやり方がいいよな。『私はただの低能力（レベル１）だよ？』……、うん。これでいいな。コレで行こう。

「アンタの能力、『何』？」

「私はただの低能力（レベル１）だ、」

「いや、そうじゃなくて」

私が相手の精神をこの上なく逆なでする微笑を浮かべながらシラを切ろうとした瞬間、御坂はそんなことも気にせず真面目に返してきた。

……うーん？　ちょっと想定外だな……。白井に入れ知恵されたか？　まあいい。いざとなれば「いきなり何なんですか」とかいって麦野たちに追い出してもらえばいいわけだし。

「何を言ってるのかさっぱりなんですけど……。私の能力は割裂空洞（ダークホール）で、」

「嘘。アンタの能力が超能力（レベル５）で、暫定第四位の『並行結合（シンクロニズム）』ってことは分かってるのよ。その上で聞くわ。アンタの能力、『何』？」

……！　流石に、そこまで掴まれているとは思わなかったので、私はわずかに目を見開いて驚いた。暗部しか知らないはずの私の本当の能力を御坂や白井が知ってるという事実に『アイテム』が殺気立つ。

私が片手で制するとすぐに殺気は納まったが、御坂は既に彼女たちから発せられる殺気は歯牙にもかけていない。しかも、御坂はここまで比較的穏便な形で話を進めている。だから麦野たちを使って追い出す手段も使えない。

……これは、御坂を侮っていた、な……。

「黒子から聞いたわ。あなたの能力、一一次元関係の能力にしては説明できないところが多すぎる、って。そもそも一一次元空間に干渉することで三次元でも一一次元を認識可能にするっていうところからおかしいし、拡散力場をダウンロードすることで多才能力（マルチスキル）になれるっていう説明も説明になってない。おかしなところだらけなのよ。ねえ、親船小豆。アンタの能力って、一体、」

「その前に私の質問に答えてもらうわよ」

御坂の詰問に、麦野が間に割って入った。正直考える時間がほしかったから時間稼ぎは助かる。御坂はと言うと、質問に質問で返されたことが不服なのか表情をゆがめていたが、一応質問を聞くつもりのようだ。

「第三位。その情報、どこで知った？」

麦野がそういった途端、この場全体に重圧がかかったような錯覚に囚われる。先ほどまで余裕のあった御坂も、冷や汗を垂らしている。

おそらく、麦野はその情報如何――例えば、『暗部の人間から教えてもらった』とか――によっては御坂をここで始末するつもりなのだろう。

私の傍らにいる黒花の表情の緊張具合から察するに、彼女は尋問の際に御坂の心に強く浮かび上がった『ワード』から嘘か本当かを判別する役割を任されたらしい。

「……情報は黒子の推理だけど、大元は書庫（バンク）にハッキングして調べたわ」

……え？

「ちょっと待って。公式（バンク）では私の能力は割裂空洞（ダークホール）になってるはずだよ」

思わず言い返してしまったのは私だ。もうこの際『何でハッキングしてんだよ』なんて初歩的なところには突っ込まない。それよりも、公式――書庫（バンク）の内容には確かに割裂空洞（ダークホール）の情報しかない。ここから私の本当の能力が漏れることは有り得ないはず。

「だから、さらに詳しく調べると『並行結合（シンクロニズム）』の情報が出てくるんだってば。もういいでしょ？こっちの質問に答えてよ」

それに対し、御坂はまるで飲み込みの悪い教え子に語りかけるように辟易した調子で答えて、次の言葉を続ける。

「アンタの能力、一体……『何』？」

「……分かんない」

私はその質問に少し間をおいて答えた。私にとって並行結合（シンクロニズム）は並行結合（シンクロニズム）でしかないわけだが、そこに御坂が疑問を抱くと言うことは、その前提がそもそも間違っている、ということなのだろう。ならば、私にとってそれは未知の領域。知る由もないことだ。

「わ、分かんないって……。はあ。アンタならそれが何なのか分かると思ったのに……」

「納得行かない？」

意気消沈する御坂に、私は軽く笑みを浮かべながら尋ねる。

そういえば、上条に対して電撃を放つのも『自分の能力が無能力

者（レベル０）に無効化されたのが納得行かない、お前は何かの能力者だろ黙ってないで吐けーっ！』という動機だったはず。後はまあ、照れ隠しとかなんとかだろうが。

とにかく、御坂は分からないことや納得行かないことがあるのが許せないタイプなんだろう。典型的な主人公タイプである。

「行かないに決まってるじゃない。行かないけど……本人も分からないものは仕方がないわよねぇ……」

はあ、と溜息をつく御坂。どうやらここで電撃を使って～という対上条用の発想は出てこないらしい。やっぱり、あれは上条に対する照れ隠し的な要素も含まれてるんだよな。

「で、白井さん、でいいのかな？」

「は、はい」

白井は未だに緊張しているようだ。しかし、私としても聞きたいことがあるから気にせずに続ける。

「さっきの説明、もう少し詳しく説明してもらえるかな」

「……はい、分かりましたわ」

何だか意気消沈している御坂よりも、一一次元関係に詳しそうな白井に聞いたほうが早いと考えた私は、御坂ではなく白井に追加の説明を頼んだ。

「まず、『割裂空洞（ダークホール）』の矛盾についてですの。割裂空洞（ダークホール）は、一一次元の演算により三次元空間上で一一次元の空間を現出させる、という理屈らしいですが、そもそも一一次元というのは『三次元では観測できない位置ベクトルを含んだ』空間概念ですの。つまり、一一

次元を三次元に接続したとしても三次元空間上ではそこはただの三次元空間にしか映らず、亀裂として見えることは有り得ませんの」

……うわー、盲点……。っていうか何で気付かなかった私。能力が希少すぎて割裂空洞（ダークホール）の原理が書いてある参考書がなかったから、瞬間移動（テレポート）系の演算方法やらを重点的に勉強していた、という言い訳はあるけど……、それにしたって、もう少し調べておけば分かったことなのに。

すっかり自己嫌悪に陥った私を尻目に、緊張が取れ始めた白井はさらに続ける。

「次に多才能力（マルチスキル）ですが、これに関しては割裂空洞（ダークホール）の希少さを盾にしたただの詭弁ですわね。割裂空洞（ダークホール）には拡散力場を記憶する性質があるとのことでしたが、それならば瞬間移動能力者（テレポーター）はみんな瞬間移動（テレポート）するたびに拡散力場を上書きし、多才能力（マルチスキル）を使えることになってしまいますわ。そこが一つ。そして仮に、拡散力場を記憶する性質があり、それをダウンロードできたとしても、能力と言うのは脳を専用に『開発』して専用の『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』を獲得することではじめて使えるものですわ。一一次元演算の式が解ける自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を持つから、二次関数の式を使って一次関数の式を解くみたいに、三次元演算の式を解くことはできませんのよ。まして、多重演算なんて脳がパンクしてしまいますわ」

確かに、その通りだ。同じ多才能力（マルチスキル）でも、木山は一万人の脳の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を使うことで多才能力（マルチスキル）を実現したんだしな。私一人の頭脳で多才能力（マルチスキル）の実現など、絵空事もいいところだ。

「……しかし、一番の問題は……」

「『不可能な筈の理屈』で、実際に物理現象が起こってしまってる

こと、だね」

私の言葉に、白井は項垂れるように頷いた。白井は、そこで考察が終わってしまうことが問題、としてるのだろうが、私の考える問題はそこじゃない。

『科学』で説明がつかないこと、そこ自体が問題なのだ。白井と御坂のコンビで見つけることの出来る程度の矛盾なら、学園都市的に大した重要度じゃないのは分かる。

しかし、私には『不可能なはずの理屈』で実際に物理現象を起こすことの出来る能力、というか異能を知っている。

『念動砲弾（アタッククラッシュ）』。

削板の能力だが、私はアレに分類されるのではないだろうか？

『説明の出来ない力』と言い、ぱっと見はただの超能力に見えるところと言い、偶然の一致にしては似すぎている。

そして、だとすると私は『原石』というカテゴライズに含まれることになる。

私自身、並行結合（シンクロニズム）は開発によって目覚めた能力だと思っていたが、学園都市の能力開発によって『説明の出来ない力』が目覚めた事例など聞いたことがない。私だけ都合よく例外というのも有り得ないだろう。

だが、すると決定的に不自然な点がある。

暗部襲撃の時期だ。

仮に私が『原石』で、生まれつき能力を持っていたのならば、滞空回線（アンダーライン）の解析によって私の呼吸に含まれる二酸化炭素から逆算して能力の有無を調べられるはずだ。上条にしたみたいに。

そして、能力があるとが分かったならば下手に能力が目覚める前に私のことを始末するはず。それをせず、小学生になってから律儀に宣戦布告までして攻撃したのは、何故だ？

……アレイスター、お前は一体何のために私と命を懸けた鬼ごっこに興じたんだ？

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

「……これにて、幻想御手（レベルアッパー）編完結、っていうわけだね」

巨大なビーカーの前で、そう言って笑う少年の姿があった。少年の顔は、暗がりに隠れてよく見えない。ビーカーからは大小さまざまなケーブルが繋がれており、ただのビーカーを生命維持装置へと格上げしている。

「……ご苦労だった」

そのビーカーの中で逆さに浮かんでいる、男にも女にも聖人にも囚人にも大人にも子供にも見える『人間』は、そう労った。労いに対し、少年は軽く会釈して返す。

「いやホント。大変だったよ。剥離要素（エラーポイント）……って親船嬢は呼んでるんだっけか。そいつらのボス、お山の大将の与謝野を上手いこと乗せて幻想御手事件（レベルアッパー）に関与させたり、垣根に手紙を送って幻想御手（レベルアッパー）に関与させたり。流石に親船嬢はそういう小細工をしなくても向こうから勝手に関与してくれたから、そういう意味では有難かったけどね」

親船嬢マジ女神、などと冗談っぽく言って笑う少年に、『人間』アレイスター＝クロウリーはくつくつと喉を鳴らして笑う。

「『女神』、か。なるほど確かに馬鹿にはできない表現だよ。あれも『女神』の部類に入るかと言われたら『ＹＥＳ』だしな」

「……まったくもう、アレイスターには冗談が通じないな。『そういう』女神じゃないって」

拗ねた様に口を尖らす少年に、アレイスターは肩を竦めて微笑む。それはまるで、友人と会話しているような穏やかな、それでいて不倶戴天の敵を目の前に罵り合う様な空恐ろしさを内包したやり取りだった。

「えっと、これで親船嬢は『拡散力場の複合による物体生成』、『新たな接続（コネクション）領域の獲得』、『第一・五段階（フェイズ＝ワンポイントファイブ）への移行』、への布石が打てたんだっけ。ヒューズ＝カザキリの一端と垣根の役割を一人で担えるなんて、さすが『補完要員（サイドプラン）』だよね。もう第一候補（メインプラン）に格上げでいいんじゃない？」

「……そうでもない。彼女は他の計画（プラン）の主要人物と違って、私と対

等な思考レベルで牙を剥いてくるからな。下手に第一候補（メインプラン）にしてしまっては、彼女が反乱を起こしたときに計画（プラン）に与えるダメージが甚大すぎる」

「『裏第四位（アナザーフォー）』なのも、それが理由？」

アレイスターはゆっくりとした動作で頷き、

「それに、彼女は私の思い通りに動いていても予想外の結果を起こしてくれる。本当ならば並行結合（シンクロニズム）はあそこで『拡散力場の複合による物体生成』まで進んでいるはずだった。だが、あれを見ただろう？　原子崩し（メルトダウナー）の強化。アレによって彼女は自身が労することなく危機から抜け出した。お陰で廃案を使えるようになるかもしれないが」

フフフ、と心底愉快そうな笑みを浮かべるアレイスターに、少年は「そういえばアレは面白いサプライズだったね」と笑う。

麦野の発した『電翼』は、アレイスターにとっても想定外の要素だったらしく、そこでプランに誤差が生じたのだ。尤も、この程度の誤差はアレイスターにとっては何てことはなく、既に修正済みのプランは始動しているのだが。

「それじゃ、麦野関連の『廃棄計画（ロストプラン）』も始動させるの？」

「廃棄計画（ロストプラン）……『〇次元の極点』を原子崩し（メルトダウナー）に与える計画だったか。与えた際のリスクが大きすぎる為に凍結となったが……、あれは依然変わらず凍結だ。今の原子崩し（メルトダウナー）〇次元の極点を与えたときのリスクが高すぎる。扱わせるとしたら、彼女の精神がもう少し安定してからだな」

その言葉に、少年は「これは麦野の強化も遠くないな」と心中で呟く。これは誇張でもなんでもなく、幻想御手（レベルアッパー）事件の顛末を見た少年の素直な感想だった。

最早、麦野沈利は彼の知る『原作』の麦野ではない。『大切なモノ』を無意識ながら認識し、その為に全力をかけられるようになった彼女は、ただの狂戦士（バーサーカー）ではなく守護者（ガーディアン）へと変貌しつつある。

「じゃあ、そろそろ与謝野も不審がるだろうし僕はそろそろ行くよ」

少年はそう言うと、後ろを向いて自分がこのビルに入ったときに現れた位置まで戻っていく。窓のないビル『連絡人』、結標淡希の『座標移動（ムーブポイント）』によってビルから出るためだ。

少年は後数歩で目的地まで辿り着く、といったところで唐突に足を止めてアレイスターのほうへ振り返る。

「……ああ、『宵闇の祖（ヴァンパイアロード）』対策はできてる？」

『宵闇の祖（ヴァンパイアロード）』。正史において語られることのなかった剥離（それ）要素は、無限の生命力と魔力を持つカイン（ヴァンパイア）の末裔よりも強大な響きを持っていた。

にもかかわらず、それをまるで今日の夕飯を聞くように問う少年に、『人間』アレイスターは軽く「ああ、抜かりない」と頷く。その答えに満足したのか、少年は数歩移動して、それからビルの外へと『消えた』。

「……『宵闇の祖（ヴァンパイアロード）』、か」

彼以外のあらゆる存在が消えうせたビルの中で、アレイスターの呟きが木霊する。

「ある意味、並行結合（シンクロニズム）よりもアレのほうが厄介なのだがな」

『人間』の呟きは、ビーカーの中の気泡となって消えうせた。

13（後書き）

四月一七日修正

幕間０２／とある少女の四角戦線（スクランブル）（前書き）

今回は幕間です。

幕間０２／とある少女の四角戦線（スクランブル）

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

「うぅぅ～～……」

ここはとある病院の二〇七号室。

ベッドの上で不機嫌そうに唸っているこの少女は、黒花沿受。親船小豆の側近であり、最も小豆から信頼されている直属の部下。彼女の能力、心理同調（コンフォーミティ）によって諜報活動もでき、つい最近まで敵対組織の実情を探っていた。さらに、彼女は諜報技能だけでなく家事能力にも長けており、小豆専属のメイドとして常に傍に仕えている。病院の、それもベッドの上で寝そべっているにも関わらずメイド服を身につけているほど凄まじいメイド魂の持ち主である。

……という設定だ。

その彼女のいるこの二〇七号室には、現在『アイテム』のメンバーしかいない。当の小豆はと言うと、

「ねえ、黒花。さっきからそうやって唸ってるけど、親船のところにいなくていいの？　お前メイドでしょ？」

「そうなんですけどぉ～……、お嬢様、何だか『裏を取る』とかで。パソコン室は人一人がやっと入れる小部屋が無数に並んでるタイプですから、私は邪魔だとかで入れなかったんですよ～」

さっさと病院にあるパソコン室に引きこもってしまい、そのことで黒花から顰蹙を買っているのだった。

普段ののほほんとした様子とは違い、真剣にイライラしている（心の底からメイドだから、主人が居ないため禁断症状が出たのだろう、と麦野は考えた。本当は小豆の同席を拒否する時の態度が気に食わなかったから苛々しているだけなのだが、それは言わぬが花である）黒花を見た麦野は、「そう」とさっさと話を切り上げて、黒花の目を見つめる。

麦野の目を直接見た黒花は、これから麦野が切り出そうとしている話が真面目な話だと察し、何だかんだで緩みきっていた表情を引き締める。このへんの『駆け引き』の機微は、暇なときはずっと小豆から（無理やり）教わっていたので、既に相当な手腕になっている。

「この間の『幻想猛獣（ＡＩＭバースト）事件』のときにさ……」

そういって、麦野は話を切り出した。

巷では『幻想御手（レベルアッパー）事件』で一くくりにされているこの事件だが、事件に直接関わった『アイテム』及び『スクール』は最終日の一件のみをさす場合、その呼称ではなくこの『幻想猛獣（ＡＩＭバースト）事件』という呼称を用いている。

それほどまでに、あの事件は『幻想御手（レベルアッパー）事件』全体を通してみても展開が異質な事件だった。

「死体、ひとつもなかったわよね？」

麦野の質問に、黒花は静かに頷く。かなり物騒な話だが、これは麦野にしてみたら当然の疑問だった。事前の考察では、与謝野の能力は『能力者の拡散力場を介して自分だけの現実（パーソナルリアリティ）に干渉する能力』であるとのことだった。

擬似的な多才能力（マルチスキル）というのも、拡散力場に干渉することで能力の使用を支配することで為し得ている、とのことだったはず。しかし、

それならば干渉する拡散力場の持ち主は能力者である与謝野の近くにいなくてはおかしい。滝壺だって、検索は銀河系の外までできるが干渉はそれなりに接近しないといけないのだ。

それならば、少なくともそのうちの一人くらいは殺せてもいい。それがないというのは、プロである『アイテム』にしては珍しいことだった。

「いや、実は与謝野、一人で来たんですよ」

「えっ？　一人で？　与謝野の能力は拡散力場を介して自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を操作する能力だったはずだけど……？」

麦野の疑問に、黒花を始め絹旗、滝壺、フレンダは静かに頷く。確かに、与謝野は『幻想猛獣（ＡＩＭバースト）事件』の時、たった一人で美琴や木山の元に向かっていた。

それはつまり、

「……能力の考察、間違ってたってこと？」

「より正確には、あの解釈でも擬似的な多才能力は再現可能。ただ、よさのは『違う方式を使ってた』ってだけ」

負け惜しみである。解釈が正しかろうと、それが与謝野の能力の理論でない時点で考察は間違っていたに過ぎない。

滝壺もそこを理解しているのか、苛立ち紛れにわざと難解な説明を麦野にたたきつける。当然、いかに麦野と言えどそんな情報で全てを理解できるはずもない。これでは仕方ないと感じた黒花は、静かに嘆息して能力の使用準備を整えた。

「説明するよりも“見せた”方が早いですね」

瞬間、麦野の意思に関係なく、脳裏にあの日の道路下の光景が正

確に浮かび上がる。映像だけでなく、土ぼこりの匂いに夏の湿気、風の吹く音までが感じられるその感覚に、思わず麦野は小さく声を上げた。

麦野だけでなく絹旗やフレンダ、滝壺も同じ感覚に囚われているのか、ぴくりと小さく体をふるわせている。

「黒花……強度（レベル）上がったの？」

「いいえ、残念ながら。これはただの応用ですよ。今まで『文字としての思考』を同調させることで擬似念話（テレパシー）をしていましたが、よく考えたら擬似念話（テレパシー）なだけで別に本当の意味で念話（テレパシー）しかできないわけじゃないですからね～。私の思考を相手と同調させているだけなわけですから、当然言葉だけじゃなく『映像』も同調させることが出来ます。そこで、『映像を思い浮かべる』ことで『映像としての思考』を同調させて、脳内映像を披露できると考えたわけです。私の記憶を元に分かりやすくなるように若干脚色してあるので、そのときの事を知るだけならこれが一番手っ取り早いかな、と」

実はこれは黒花が考えたことではなく、幻想御手（レベルアッパー）事件への介入に当たって小豆から伝えられていた情報だったのだが、如何せんこういった事態にしか使い道がないため、今まで『アイテム』のメンバーには秘密にしていたのだ。

さり気に自分が考えたことにしているあたり、虎の威を借る狐スタイルが定着し始めている黒花だった。

麦野達の脳裏に展開されている『風景』は、彼女たちが一時的な動揺から立ち直ると同時、静かに動き始める。

＊＊＊

「……超来ましたね」

絹旗が遠方を眺めながら呟く。『来た』というのは、彼女の視線の先にいる、バイクにまたがった男のことである。何時の間にあの男は免許を取ったのだろう、と黒花は内心不思議に思っていた。

「結局、忠告だけはしとこうかな」

男の姿を認めたフレンダがそういって携帯の通話口を自分の口元に持っていく。学園都市の携帯には拡声機能もあるので、少し設定を弄くれば拡声器としても使える。黒花は『こちら』に転生してもう三年になるが、この科学技術だけは慣れていなかった。

『ハーイ、そこの君ー。何しにきてんの？　っていうか結局お仲間はどうした訳？　結局、確かにこっちにゃ『アイテム』最強の麦野はいないけど、それでも出来損ないの多才能力者（マルチスキル）くらいなら消せるって訳だけどー。それに、これ以上こっちに接近するなら私たちにも考えがあるって訳よー？』

フレンダは、相変わらずのんびりとした調子で警告を発する。しかし、与謝野はというとあまりにのんびりした声色の所為で今自分が向けられているのが最後の警告だと気付いていないようである。

ノーヘルの与謝野はフレンダの姿を一目見ると、端正な顔つきをにたり、と醜い笑みで歪め、さらにバイクの速度を上げた。

大方、フレンダの『ド直球な萌えキャラっぽい容姿』を見て劣情を催したのだろうと見当をつけた黒花は、与謝野への嫌悪感を隠そうともせずに表情を歪め、敵意に満ちた視線で彼をにらみつけた。

他の『アイテム』のメンバーも、与謝野の笑みの真意に感付いているのか全員が全員嫌悪感に満ちた表情で固まっている。

「……はぁ、超気色悪い笑顔で忠告無視、ですか。超死にたいみたいですね」

「殺そうとしちゃだめだよ、きぬはた。一応、むぎのからは『生け捕りにして尋問する』っていう指示が下ってるわけだし」

引きつった笑顔でドン引きの絹旗に、相変わらず無表情な滝壺がセオリーどおりの常識的意見を言う。

たとえ全員がぶっ殺モードだろうと滝壺はそう忠告するだろうと予想していた絹旗が、『はいはい超分かりましたよー』と言いたげに舌打ちをしたと同時、本格的に戦闘に入るかと思われた現場だが、

「『殺そうと』しちゃ、ね……。……でも、予想外の事故でついうっかり殺害しちゃいました、だったら許されると思うよ、私は」

次の瞬間、左目の眼輪筋をピグッ！　と大きく痙攣させた滝壺の言葉で全員がズッコケることにより、戦闘への突入は二秒ほど遅れることとなった。

＊＊＊

与謝野キモイ、で全員の心が一致した彼女たち四人のコンビネーションは目を見張るものがあった。

まず黒花が仰々しい動きで拳銃の撃鉄を引き、バイクのタイヤめがけて拳銃を一発当て、パンクさせることで相手の初手を崩す。次に絹旗が岩を抉り取って投げつけ、そこにフレンダが爆薬を取り付けることで爆煙と瓦礫により視野狭窄を起こし、その隙に接近して得意の格闘戦で与謝野を追い詰める。

滝壺は遠距離から能力追跡（ＡＩＭストーカー）で割り込みをかけることで、絹旗の能力が封印されるのを防ぐ。黒花も、全員のコンビネーション（コンフォーミティ）を心理同調によってサポートし、自身も拳銃を構えることで銃弾を温存しつつ与謝野の行動を牽制していた。

しかしそれでも、それほどの苦境でありながらも、与謝野の表情に焦りはなかった。どころか、ここまでの熾烈な攻撃を受けているにも関わらず、与謝野は未だに傷一つ負っていない。

フレンダが急所に攻撃を叩き込もうとも、爆薬つきの岩が衝突して圧力と爆撃の攻撃を受けようとも、ダメージがない。ただただ、超然とした笑みを浮かべるだけである。

「ハァッ、ハアッ……！　ちょっと滝壺さん！？　コイツ、超どうなってるんですか！　コイツの能力……今やり合っただけでも身体（スーパーフィジカル）

強化とか空力使い（エアロハンド）とか、超たくさんの能力を使ってるみたいなんですけど！？　異能略奪（スキルインターセプト）は手元に能力者がいないと多才能力化（マルチスキル）は超できないはずなんじゃないですか！？」

「まって、今くろばなと共同で能力の解析をしてるから……！！」

割と切羽詰った感じの絹旗の声に、滝壺は同じく切羽詰った様子で答える。

現に、滝壺は切羽詰っていた。ただでさえ絹旗の能力が略奪されないように与謝野の能力に割り込みをかけているというのに、その上心理同調（コンフォーミティ）の協力で負担が軽くなっているとはいえ能力解析まで行っているのだ。消耗しないほうがおかしい。

「チッ！　とっかえひっかえいろんな攻撃を……！　結局めんどくさ過ぎ――わひゃあ！？　何この氷！」

プラスチック爆弾に信管を差し込み、与謝野に投げつけることで隙を作り出そうとしていたフレンダは、その自らの手が少しずつ凍り付いていることに驚愕して爆弾を取り落とす。

氷はプラスチック爆弾を対象に展開されていたらしく、対象を手放したフレンダの手は少し霜が張っている程度だったが、肝心の獲物を取り落としてフレンダはショックを受けていた。

（……！　あれは、『凝結氷槍（クリアランサー）』……！？）

しかし、フレンダの他にも氷による攻撃にショックを受けた人物が居る。黒花だ。

事前の滝壺の考察どおりなら、アレを使うと言うことは与謝野の近くに凝結氷槍（クリアランサー）を使う引潮がいるということになる。しかし、引潮に無言念話を送ることで把握した位置情報は明らかにここから遠く離れた学区、第七学区を示している。

現在激闘が繰り広げられているこの学区は第一〇学区。第七学区とはかなりの距離があり、多才能力化（マルチスキル）には対象が近くにいる必要があるという異能略奪（スキルインターセプト）の事前考察とは一致しなかった。

「……！　ごめん、みんな！　私の予測が間違ってた！」

そこで能力の解析を終えた滝壺が、思い切り声を張り上げた。

『おそらく、よさのの多才能力（マルチスキル）のタネは、「自分と相手の自分（パーソナル）だけの現実（リアリティ）に親和性を持たせる」こと！　自分だけの現実を改変することでＡＩＭ的なネットワークを形成することによる、擬似的な幻想（レベル）御手（アッパー）、それが彼の多才能力（マルチスキル）の正体！』

念話（テレパシー）でそう告げた滝壺の言葉を、黒花は即座に全員に伝達する。

一見、分かっても何の意味もない情報のように感じられるこの新事実だが、実際はそうではない。

黒花は、アニメ版と漫画版、両方の『とある科学の超電磁砲（レールガン）』を読んでいるから知っている。擬似的とはいえ、原理が幻想御手（レベルアッパー）と同じならば、そこに付け入る隙はある。

（『親和性を持たせる』、っていう話から、おそらく私を含めた『ネットワークを形成している剥離要素（エラーポイント）』に害はありません……！　でも、その『ネットワーク』を維持するためには集中力が必要なはず……。強い動揺を与えれば、そこに決定的な勝機があるはず！）

決意も新たに、黒花は右手の中の拳銃『揺り籠（マザーハンド）』の感触を確かめる。幸い、与謝野の動揺を誘う要素はいくらでもある。容姿と破壊力のギャップが著しい絹旗に、爆撃による豪炎のインパクトが大きいフレンダ、能力を奪うというイレギュラーさの滝壺。

そして、彼が『嫁候補』として侮りに侮っている異能力者（レベ

ル2）、黒花。

（行ける。勝てる。与謝野は、超能力者（レベル5）だけど一方通行みたいに『圧倒的な敵』じゃありません。武器を持った私たちなら、十分に対抗できる存在。現に、効いてはいないけど押せてはいます。大丈夫。負けるはずがありません！！）

そう心の中で自分を鼓舞しながら、黒花はテレパシーで周囲に指示を送りながら与謝野の目の前に立つ。

「……沿受か。見ないと思ったらこんなところで油売ってたのか？今なら“オシオキ”で済ましてやるから、戻って来いよ」

しかし、決死の覚悟で立ち向かう黒花に、与謝野は全く本気で取り合わない。与謝野には確かに油断があったが、それ以上にそれが正当化されてしまうほど、彼と『アイテム』には実力的な開きがあった。

「は、はは。何を血迷ったことを？　私たちは四人で、あなたはたった一人。いかにあなたが超能力者（レベル5）だとしても、フレンダさんや私に能力はないも同然、能力を奪っても意味はありませんし、絹旗さんだって暗部なんですから能力なしでも戦えます。滝壺さんの能力を奪おうなんて考えないほうが良いですよ？　あの人はＡＩＭを操る能力者。あなたの同類なんですから」

「ＡＩＭとかなんとか訳の分からんことを……。強がるのもいい加減にしたらどうだ？　撃鉄も下ろしてないくせに強がるなよ」

その一言に、黒花はハッと目を見開いた。見ると、確かに指摘されていたように撃鉄は下ろされていない。一番最初、バイクのタイヤに穴を開けた時に発砲してから、まったく動かさないままだった

のだ。あまりの失態に、黒花はそのまま銃を構えて動けなくなった。

それを見て舌打ちした絹旗が地面を抉りながら与謝野に飛び掛る。手には、大小さまざまな大きさの瓦礫が収められている。

不愉快そうに眉をしかめた与謝野は、どういう原理なのかすうっと氷の上を滑るように絹旗の攻撃範囲から逃れ、右手を掲げて電撃を流す。

大きく身をひねってかわした絹旗だが、そこには隙が生まれてしまい、その隙を埋めるようにフレンダが攻撃を仕掛けるも、与謝野は同じようにかわしてしまった。

二人の猛攻をあっさり回避した与謝野は、すっと前を見て言葉を続ける。

「お前ら、分かんないのかよ？　今自分たちが何をしてるのか。今この上では、美琴と木山が戦闘を繰り広げてる。美琴はたった一人で上で戦ってる怪物を相手に頑張ってるんだぞ？　俺は、それを助けに来ただけだ。お前らがしてることってのは、たった一人の女の子に怪物を押し付けてるってだけだ。お前らが何を考えてこんな妨害やってるのか分からないが――……俺の今話した事実を知ってもまだ立ち向かうっていうんなら、たった一人の女の子を見殺しにするっていうんなら、その幻想を俺がぶち殺してやる！！」

「へぇーそう。ぶち殺す、ねぇ……。ところで与謝野くんとやら、死因は何が良い？　結局、私のお勧めは爆死ね。結局さ、爆死がキテる訳よ。プラスチック爆弾ね、プラスチック爆弾が最高」

は？　と与謝野が声を上げようとした次の瞬間、黒花は撃鉄を下ろさないまま、与謝野の足元に転がっている氷漬けの爆弾めがけ引き金を引いた。

……『揺り籠（マザーハンド）』はダブルアクション。引き金を引くだけで銃弾が出てくるタイプの拳銃だ。最初、わざわざ与謝野に撃鉄を下ろしたところを見せて銃撃を行ったのも、わざと余裕なさげな行動を取ったのも、すべてはこの時のため。

打ち出された銃弾は、プラスチック爆弾のすぐ近くに着弾し、破壊力不足を補うために内蔵された爆薬の爆発によってプラスチック爆弾を与謝野の鼻面まで浮かび上がらせた。

「――結局、詰めが甘かったって訳」

にたり、と残酷な笑みを浮かべたフレンダが懐に忍ばせてある極小の無線機のダイヤルを操作した瞬間、轟ッ!!　という爆音と煌炎を放ち、プラスチック爆弾は弾け飛んだ。

ただし、与謝野の遥か上方で。

「っっっっぶねェェえええええ――――っ!?　俺じゃなけりゃ顔面吹っ飛んでたぞ今の!!　カワイー顔してなんつーまねを!?　もう許さねえちょっと痛い目見てもらうぞコラッ!」

「……それは超叶わない望みです、よッ!!」

狙っていたはずの必殺の一撃が弾かれようとお構いなしに、ドッ!!　と、爆発の煙に紛れて接近していた絹旗が、与謝野に肉薄する。与謝野は一瞬ギョッとした表情を顔に浮かべたが、すぐに持ち直すと自分のわき腹に潜り込もうとする絹旗から逃れるべく思い切り飛び上がった。それだけの動作で、身体強化（スーパーフィジカル）を発動している与謝野の体は五メートル近く飛び上がる。

「……そう、普通そう動きますよね、与謝野。それが良い。それですべて計算どおりなんですよ」

飛び上がり、自ら煙の中に突っ込んでいった与謝野に、黒花は静かに笑みを浮かべる。最初から、与謝野のポテンシャルなら裏の裏をかく程度の攻撃などかわされるのは目に見えていた。

与謝野は常人では考えられないほど『馬鹿な思考』をするが、頭が悪いというわけではない。仮にも、超能力者（レベル５）と目されるほどの頭の回転を持つのだ。ただの女の子に劣るほどの思考回路のはずがない。

だから、黒花は詰め将棋を行った。

与謝野は頭が良い。だが、彼は深く考えない。目の前の問題に対してその優秀な頭で叩きだした答えをよく吟味もせずに実行してしまう。そこを利用し、黒花は『相手が一番に選ぶだろう行動を計算に入れて』作戦を練っていたのだ。

真上で戦闘している美琴と木山。当然、鉄橋にはダメージが来ている。それは、超電磁砲（レールガン）を読んでいる黒花も承知だった。

真上に投げ上げられて盛大に爆発したプラスチック爆弾。小さいとはいえ、人の握りこぶし程度の大きさだ。壊れかけのコンクリートを破壊するくらい容易である。

これらが意味するのは――

「「なっ！？」」

少年と少女、二人の『超能力者（レベル５）』の声がシンクロした。

＊＊＊

（計画通り――――！！）

黒花は心中で余裕のない笑みを浮かべつつ、表面上はメイド的ポーカーフェイスを貫き通していた。

原作ではもう少し後になるだろう高速道路の崩落を、フレンダの爆撃で早めることにより、与謝野の驚愕を誘い、多才能力（マルチスキル）を解除する作戦。

テレパシーでその旨を伝えると、『アイテム』のメンバーは驚くほどすばやく行動を始めた。フレンダは陽動、滝壺はバックアップ。一番肝心なトリガーの部分は黒花が行ったが、これも無事成功することが出来た。

現に今与謝野は、肉体強化（スーパーフィジカル）を使っている様子もなければ他の能力を使用している様子も見られない。

危ない作戦だった、と黒花は思う。

少なくとも、彼女が（表向きは、だが本人は半ば真面目に）仕えている小豆ならば、この数段スマートかつ安全な作戦を考えていたことだろう。

いかに、自分が『小豆の威を借る弱者』であるかが身に沁みて理解できる戦いだった。

だが、勝ち取った。

作戦は成功し、与謝野は多才能力（マルチスキル）を失い、美琴はこの戦闘に合流した。美琴、木山、与謝野、『アイテム』の四角戦線（スクランブル）は、ここに完成したのだ。

「な、何よ、何なのよ、これ！？　何で勝手に道路が崩壊するワケ！？」

パニクった声を上げた美琴は、油断なく電撃で周囲を牽制しながらも状況を確認する。木山も、その無表情には少しだけ驚愕の色が浮かび上がっていた。

「――はは、ははは！　なるほど沿受！　これがお前の『作戦』って奴か……。確かに、俺の攻撃手段を奪うっていう作戦は間違いじゃないな。だが、お前は一つ、大事なことを忘れてるんじゃないか？　俺の能力の所以――なぜ俺の能力が『異能略奪（スキルインターセプト）』と呼ばれているのかをな！！」

煤だらけの顔で笑う与謝野には、先程のような余裕は既にない。与謝野は、暗に『美琴の能力を奪い戦力とする』と言っているようだったが、『アイテム』及び黒花に動揺はない。それも、計算づくのことだったからだ。

直後、美琴の周囲を迸る電撃が消滅し、彼女が大いに動揺するが、ここまでは想定どおり。あとは美琴にかけられたロックを解除し、滝壺に与謝野の能力の妨害（ジャミング）をさせれば、自然と相手は詰む。

その場の誰もがそう考え、行動に移そうとしたとき、予想外の出来事が起きた。

美琴の能力にかけられていたロックを解除した瞬間。

ぱたり、と。

滝壺が倒れた。

「た、滝壺さんッ！？」

思わず駆け寄る黒花だが、滝壺の調子は優れない。考えてみれば、当然の事態だった。ただでさえ、体晶を用いた能力の使用は滝壺の体に悪影響を及ぼす。そんな能力で、能力の妨害、解除、解析まで行ったのだ。

まだ時期的にも滝壺には『体晶』を使う余裕があるとはいえ、これ以上の連続使用はそれだけで彼女の命を削りかねないものだった。

（く……滝壺さんはここで戦闘不能（リタイヤ）ですか……。まあ、それならそれで仕方がないとも言えます。私たちの勝利条件は与謝野を倒すことじゃない。木山を倒せれば、それで第一目標は達成できます。まずはそこから……！）

そう考え、戦況を好転させられる要素はないかと黒花が辺りを見渡したそのとき、木山が動いた。

「君たちの目的が何なのかは分からないが……私には為すべき目的がある！　悪いが押し通らせてもらう！！」

どこから引っ張り出したのか、アルミ缶を中空に浮かび上げている木山。黒花はそれの意図するところをすぐさま思いついた。

（量子変速（シンクロトロン）――！！）

少し前まで学園都市を賑わせていた、虚空爆破（グラビトン）事件に使用されていた能力である。

アニメや漫画の知識ではなく、その世界に生きる人間としてそのニュースを見ていた黒花からしたら、記憶に新しい情報だ。そうい

えば、正史では木山が御坂さんとの戦いでこの能力を使っていたな――と黒花は曖昧に考えるが、特に対応するようなことはしない。

「っちくしょうアルミ爆弾か！　美琴は今能力使えねえんだぞッ！？　死ぬだろそんなの！」

自分がその状況に陥れた張本人だということは完璧に棚に上げた与謝野が、余裕なく叫びながら電撃を放ち、量子変速（シンクロトロン）の能力に誤差を与え爆破する。美琴が能力を使えないと言う事実と、自分の能力が爆破されたという事実にショックを受けた木山には、一瞬隙が生まれた。

そして、黒花はその隙を狙っていた。美琴に関しては与謝野が彼女の能力を使って助けるだろうということは最初から分かっていた。ならば、重要なのはそれによって生まれる『木山の隙』を使って、最短の手間でこの場の戦闘を収めることである。

勝利は必要じゃない。必要なのは、『誰もが戦闘する理由を失う』一手。

そしてその一手とは――、

「チェックメイトです！」

黒花は迷いなく、木山の足元に撃ち込んだ。弾丸に内蔵された爆薬が破裂し、木山に一瞬の隙が生まれる。

「しまっ――」

「アンタ、私の電撃を散々防いでくれたけど」

木山はすぐに自分の失策に気がつくが、体制を取り直す間もなく美琴がその隙を狙うように懐に飛び込み、

「流石に、あの馬鹿みたいにゼロ距離でも防げるってことはないわよねぇ？」

ビリビリビリビリ！！　と、正史の通りの幕引きで、木山と美琴の勝負は決着がついた。与謝野は、自分が木山のことを倒すと言う筋書きが崩れたことが癪に障ったのか、思い切り不機嫌そうに表情を歪めて踵を返した。バイクは破壊されているため、与謝野は徒歩で帰っていくのだろう。その惨めさを考えると、黒花は思わず笑みがこぼれた。

「はは、あはは。やった。やりましたよ！　酷い有様ですけど、私たちはお嬢様や麦野さん抜きでもここまで戦えましたよ！！」

若干ハイな気分の黒花は、思わずへたり込んでいる絹旗やフレンダ、横たわっている滝壺の方を向いて一四歳という肉体年齢に相応しい様子ではしゃぎだす。しかし、彼女はとある重要な事実を忘れていた。木山が倒れたと言うことは、即ち『アレ』が現れるという事実を。

ゴパッ！！　と、聞く者全てが生理的な不快感を催す音と同時、木山の制御を離れた『ソレ』がこの世界に『顕現』した。

＊＊＊

「もー、何なのよコイツ！！」

その後、息も絶え絶えな木山から『幻想猛獣（ＡＩＭバースト）』についての説明を受けた『アイテム』と御坂は、それぞれ協力して戦闘行動をとっているのだが、電撃を放っても瓦礫を投げつけても、銃弾を打ち込んでも爆弾を投げつけても、破壊は出来るのだが即座に再生してしまいたちごっこが続いている。

否、この状況にも終わりはある。彼女たちは人間で、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）はバケモノ。スタミナが切れてしまえば、彼女たちは一巻の終わりだ。

最早ここに留まる理由のない黒花たちは即座にここを離れ逃亡しようと考えたのだが、消耗している滝壺の存在がそれを許さない。

「ぐごっがァァァあああ！？」

不用意に近づきすぎてしまった絹旗に幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の触手が叩き込まれ、小さな体がノーバウンドで一〇メートルほど吹っ飛ばされる。

先ほどから、こんな調子だった。開口一番絹旗が思い切り吹っ飛ばされているという圧倒的な状況を目の当たりにしたフレンダは一瞬にして萎縮してしまい、つかず離れずの位置から爆撃を繰り返すと言う消極的な行動を、黒花も銃弾しかない以上無駄弾は撃てないと攻撃を渋っている。

美琴は中距離から電撃を放ってはいるものの、威力の小さい攻撃では幻想猛獣（ＡＩＭバースト）にダメージを与えることは出来ない。対する幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は、ダメージを受けた箇所

を補強するかのように肥大化し、最早肉達磨の様相を呈していた。

「も、もう無理ってわけよーっ！　黒花、麦野呼んで麦野！　きっとあの人の原子崩し（メルトダウナー）ならコイツも吹っ飛ばしてくれるはず！」

「へ、あ、はい！！」

俄かに呆然と現実逃避を行っていた黒花は、フレンダの悲鳴のような指示に我を取り戻し念話（テレパシー）の準備を開始する。

『親船さん！　そっち終わりましたか!?　終わってたら助けてください！　幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に出くわしてしまいました～！』

なるべく、焦燥感を煽るような声色で救援を送った黒花は、少しだけ自己嫌悪に陥る。

（助けを求められるような立場なわけ、ないじゃないですか。親船さんたちは今、二人きりで『スクール』と戦ってるんですよ?　私たちは、四人で、与謝野を倒せばそれでオーケー。それなのに、私の不手際で、結局はあの人たちに迷惑をかけてしまってる……）

その証拠に、今も小豆からの念話（テレパシー）の返事は返ってこない。念話（テレパシー）の通話状況を見るに、存命はしているようだが、よほど消耗してるんだろう、と黒花は考える。

幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は、今も不気味な雄たけびを上げて行く手を阻む存在を吹き飛ばそうと暴れている。アレは、超能力者（レベル５）だから太刀打ちできたようなものだ。自分たちじゃ、相手にならない。そんな絶望感が黒花を襲っていた。無意識に、目が潤み始めていた。

そのあまりの絶望の為だったのだろうか。

彼女は、自分の背後で発生したドサッという落下音に気付けなかった。

そして、唐突に彼女は宣告したのだ。

「さあさあ皆さん真打の登場だよ!!」

わき腹に穴を開けているくせに、明らかに体中ボロボロのくせに、服なんか目も当てられないくらいに破れているくせに。

細身の少女は、同じくらい重傷の少女に肩を貸して、その場にへたり込んでいながらも、毅然と、そう宣言したのだった。

「親船さん!!」

黒花は、最初とは別の理由で涙をこぼしそうになりつつ、自分のヒーローの名前を叫んだ。

＊＊＊

「「「「……」」」」

一方、そんな感動の対面を見せられた二〇七号室にいる『アイテム』の面々は何ともいえない微妙な空気になっていた。

「いやーホント、あの時のお嬢様は男前でしたよね～。思わず惚れちゃいそうになりましたし！　まあ私女の子同士はＮＧなんですけどね！」

与謝野の能力を簡単に説明するための映像は、いつの間にか極端に小豆が美化された映像に摩り替わっていた。

そのあまりに自然なシフトの仕方及び構成力のために、一瞬全員が小豆に惚れかけるというある意味恐ろしい状況になりそうだったといえば、心理同調（コンフォーミティ）の何気ない恐ろしさが分かるだろう。

尚も小豆ちゃんは半目可愛いなどと先ほどまでの不満などどこに行ったのかという調子で話している黒花に、麦野は軽く溜息をついた。

「もう、アンタがどれだけ従順なメイドなのかは分かったから……。アンタもう、喋るか映像流すかどっちかにしてくれない……？」

そう呟く麦野。今も心理同調（コンフォーミティ）による記憶劇場は続いており、親船が必死で麦野の原子崩し（メルトダウナー）を押さえつけている場面が尺十割増で流され続けていた。正直、これ以上は心に毒である。

「……って、聞いてないし……」

結局この後、黒花の脳内劇場はその日冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）の病院に到着するあたりまで続けられた。余計なことを聞いたと後悔する麦野だった。

幕間０２／とある少女の四角戦線（スクランブル）（後書き）

注意ですが、これは黒花との百合フラグではありません。
黒花は基本的に小豆のことを『頼れる魔王様（外道だけど頼もしい人の意）』だと思っています。

小豆ハーレム（？）は、絵面だけ見ればハーレムだけど、ハーレムを形成する大事な何かが抜けている、そんな集団を目指しています。

四月二一日修正

14

「あ、親船」

私が病室の扉を開けると、開口一番に麦野が声を上げた。雑誌から顔を上げた麦野は、すっとベッドから降りるとこちらに歩み寄ってくる。他のメンバーは病室から出ているようで、麦野だけが残っているようだった。黒花は今は隣にはいない。どうやら、昨日調べ物をするときに同席を拒否したのがよほど頭にきていると見えた。

ちなみに麦野の現在の服装は、普段のセレブっぽい感じじゃなければ七月二四日のような動きやすそうな服装でもない、純粋にけが人が着るようなバスローブ的なもの。本当は今頃優雅な服装に身を包むつもりだった麦野なのだが、予想よりもギプスを外す時期が遅れてしまったため運び損となってしまったのだ。

「『裏を取る』って言ってたらしいけど……、何か掴めたの？」

麦野の質問に、私は静かに頷いた。

今日は七月二六日。

御坂と白井から並行結合（シンクロニズム）の能力についての情報が舞い込んできた七月二五日から、一日が経っている。

七月二五日は、御坂と白井の証言の裏を取るために院内のパソコンを使って一一次元関連の論文を調べつくすことに使った。

あまりに慎重すぎる行動だと思うかもしれないが、それも今日行う行動に伴うリスクを考えれば、当然とも言えるだろう。勘違いで連絡を取るには、あまりに危険すぎる人物だ。

「まあ、最低限こちらの正当性は確保できたね」

私は適当に麦野に返しながら、私は論文漁りの合間に組み立てた傍受対策の妨害電波発信装置を携帯に取り付け、番号を入力していく。これも傍受を防ぐ為の迂回措置だ。

本当は、私が並行結合の能力の新たな情報を得たことは誰かに知られても別に問題ないのだが（御坂が喧伝したせいで暗部にはもう伝わっているだろう）、彼女と連絡を取る際には、こうして傍受されないような措置を施しておくのが私と彼女の間の不文律のようなものだった。

別にそうしないとマズイというわけではないのだが……まあ、彼女はそういう『遊び』が大好きな人間なので仕方がない。

「誰にかけてるの？」

麦野はここまで厳重に機密保護を施している私に怪訝な表情を浮かべながら問いかける。それに対し、私はなんでもないように返す。

「先輩だよ。ちょっと異常なまでに頭の良い、ね」

そう言って携帯を耳元に当てると、きっちり三コール鳴った後に相手が出た。これも、相手の癖のようなものだった。とにかく、彼女はこういう下らない『遊び』のことを気に入っている。

電話先の彼女は、友人と会話するように楽しげな、それでいて重要な取引先と連絡するように隙のない声で応対した。

『もしもし、雲川だけど？』

……この人と話すの、すっごい神経使うんだよなぁ……。

＊＊＊

「こんにちは、雲川センパイ。最近話してなかったけど、そっちはどう？」

学園都市統括理事会の一人、貝積継敏の『ブレイン』雲川芹亜に、なんでもない世間話をするように、私は話しかける。

単なる先輩と後輩の世間話にしては余所余所しく、近況を問いかけることから始まるこの会話だが、これは近況を聞く、というよりは『挨拶代わりの定型句』と言ったほうが良い。私は開口一番この質問をし、雲川は決まって次に、

『楽しいよ。これでなかなか、私は今の生活を愛しているけど』

と帰してくる。この答えを聞いた私は、改めて本題に入るのだ。

「並行結合（シンクロニズム）について」

『……どうやら、気付いたようだけど。察しの通り、今小豆が得ている情報に間違いはない。おそらく、小豆が予測していることについても。その能力は、『科学では説明のつかない力』によって発生しているけど。……学園都市にいる能力者としては『最大原石』

の削板軍覇が一番近いか』

私の一言に、電話先の相手はすらすらと情報を伝えてくれる。その全てが、御坂と白井の情報の正当性を改めて示してくれていた。電話口から漏れる声に、麦野の表情が思わず強張る。

彼女が雲川を知っているわけではないのは分かっている。おそらく、並行結合（シンクロニズム）の核心に迫る情報を立ち聞きできる機会に出くわしたことに緊張しているのだろう。電話先の雲川はふっと小さく笑い、

『……ふむ、どうやら、そっちに他人がいるみたいだな。察するに、小豆が護衛にした「アイテム」の連中だろうけど。悪いけど、ここから先は「機密」扱いだから、お前たちに聞かれるわけにはいかないんだけど。小豆に伝えた情報は、彼女から伝えられる分にはかまわないけどな』

どこから推測したのか、雲川は『アイテム』がいることを正確に言い当てる。かなり高圧的な口調だったが、麦野は噛み付くことなく無言で頷き、そのまま病室に出て行った。

「どこに行くの？」と聞くと「あいつらのところにでも行ってるわ」とあっけらかんな答えが返って来た。おそらく、私が情報を伝えるならそれでよし、伝えなくても構わないと考えているのだろう。

「……はぁ。麦野さん、どうしてこんなに義理堅くなってるのかなぁ」

誰に言うでもなく、私は呟く。本当に麦野はどうしてしまったんだろう。今まで考える暇もなかったが、垣根との戦いの前後で明らかに性格が変わっている気がする。

少なくとも、今までの麦野なら引き下がるにしても何かしらの攻防をして、少しくらいは拘泥しただろうし、引き下がるにしても不

機嫌そうに、だったはずだ。それが、今回は完全スルー。しかも気分を害した様子もないときた。一体どうなっているんだろうと思う。

（……考えても、仕方がない、か。まあいいさ。勝手に扱いやすくなってくれるなら、精一杯利用してやるだけの話だ）

結論の浮かばない疑問についてさっさと見切りをつけた私は、受話器に意識を傾ける。

『……フフ、小豆もアレに負けず劣らずの色男……いや、色女のようだ。自覚がないというのは罪なものだけど？』

「はは、まさか」

笑いながらここ最近の麦野の表情を思い返す、紙を引き裂いたような笑み、目の笑っていない微笑、相手を心の底から馬鹿にした笑い。……駄目だ。全部好意を持っている人間に向ける笑いじゃない。

私だって、今生じゃまともに好意を向けられたことがないとはいえ前世じゃラノベ中毒という事以外は普通の人間だった。彼女だって居たこともあるし、友人もそれなりにいた。こんなに近くにいるのに大事に思われてて気付けないわけがない。

「で、本題だけど」

雲川の戯言を適当に切り上げた私は、話したいことについて切り出す。この一言のためだけに、私は彼女に連絡を取ったのだ。

「どうして、私は命を狙われたの」

あの時、白井から齎された情報を自分の中で吟味したときに辿り着いた疑問。仮に私が原石と呼ばれる存在ならば、どうして私は小

学一年生になるまで襲撃を逃れることができたのか。それが、私がここまで準備を行ってまで聞きたい事柄だった。

『おそらく、だけど』

それに対し、雲川は大して考える様子もなく切り出した。

『そもそも、狙われてすらいないけど』

「は？」

私は思わず唖然としたが、雲川は続ける。

『つまり、プランに必要だったから「狙っているポーズ」をとっただけだと思うけど。まあ、対外的には「小豆の能力の不確定性と小豆自身の社会的地位を鑑みた結果、ここで洗脳もしくは逃走の際にかかった暗部の消費を補う為という名目で暗部への編入を行ったほうが得策」とかそういう公式発表だったはずだけど。私からしたら裏にあるアレイスターの狙いが透けて見えるようだったけど』

言葉を失う私などお構いなしに、雲川はさらに続ける。

『具体的なプランの内容としては、小豆の能力「並行結合（シンクロニズム）」の覚醒と多才能力（マルチスキル）による能力の同時使用の可能化だけど。発現当初は「割裂空洞（ダークホール）」しか目覚めていなかったようだし、』

「ちょ、待って、ねえ、待って待って」

思わず私は雲川の言葉を遮っていた。どこでそんな闇の奥の奥にあるような情報を引っ張り出したか気になったから、ではない。彼女は統括理事会の一人のブレインだ。それくらい調べるのは造作もないだろう。

私が気になっていたのは、全く別なことだ。

「私の能力を成長させる為？　その為だけに命を狙われたの？　私がイレギュラーだからじゃなくて？　流石にそれはおかしいでしょ？　だって私の存在は、」

『エラーでもなんでもない、つまりそういうことだけど。アレイスターにとっては小豆の存在は起こるべくして起こったことで、それをプランに組み込んで第一候補（メインプラン）の歯車のひとつにでもするつもりだと思うけど』

何か手元の資料でもめくっているのか、電話の向こう側からペラペラと紙が擦れる音が聞こえる。

『この資料によると、「小豆が多才能力（マルチスキル）を同時使用したり、同時使用による複合した物理現象を利用するようになったのは暗部との戦闘中だった」らしいけど。まあ、普通に開発するだけじゃこんな目覚しい成長はしないと思うけど。証拠に、小学六年生の一二月に小豆が始めて多才能力（マルチスキル）による能力同士の相互干渉を発生させた時を境に、暗部の襲撃は起きてないけど』

「そう、――か」

それ以上は、言葉が出なかった。

ショックだった……とでも言おうか。私は、暗部から命がけで逃げ回った、という過去を『途轍もない不幸』だと忌み嫌っている一方で、どこかで『私の存在はイレギュラーなんだ、アレイスターに使い潰される駒なんかじゃないんだ』、と安心していたのかもしれない。

だが、現実は違った。

そう私に思わせることすらアレイスターの策。全て、アレイスターの掌の上で動いていて、私はもれなくアレイスターの思い通りに成長した、と。私は、上条と一方通行（アクセラレータ）の成長を促すための、使い捨ての駒だと、そう宣言されたも同然だった。

『後はさっきも言ったみたいな狙いも少なからずあるみたいだけど。暗部からの逃走で、小豆のことを暗部に「堕とす」ことで最中に首輪をつけ、小豆自身も暗部の人間として体よく戦力にしてついでに能力を成長させる狙いもあったんだと思うけど。……まあ、この狙いに関しては小豆の病的ともいえる不殺（こだわり）によって達成は出来なかったみたいだけど。しかも首輪をつけるどころか、結果最中は吹っ切れて今まで以上の傑物になっちゃったわけだし』

雲川が何を言っているのか分からないくらい、私は追い詰められていた。

どうする。どうするどうする。

私がプランの駒ということは、アレイスターはたとえ私がどんな予想外な行動を取ろうとその予想外をプランに利用することでプランへの致命的なダメージを避けてしまうということだ。

エイワスは『それでも穴がある』と言っていたが、あのアレイスターに限ってそんなことが有り得るか？　エイワスはアレイスターのことを、『人間』のことを軽視しているからあんなことが言えたんじゃないか？

幻想殺し（イマジンブレイカー）だろうと、プランの一部なんだからアレイスターを叩かない限りプランにダメージはない。私だって同じだ。

私がいくら原作知識を持っていようと、私が行動してしまってはプランの一部の行動にしかならないからダメージにはならない。何をしても無駄だ。

それどころか、私はプランには必要のない存在なんだから、あま

り乱そうとしても対応が面倒になったアレイスターに潰される可能性もある。それも、今度は本気で。今までのように『プランの一部だから』と手加減されることもなく。

『――の完成体を生み出すことが、並行結合（シンクロニズム）の存在意義かも、と私は思うのだけど……小豆、聞いてる？』

「うん、聞いてるよ……。ありがと。もういいから、もういいから……」

雲川は何事かを説明していたようだが、それも私の耳には入らなかった。電話の恒例となっている、終わりの長話と最後の挨拶代わりの定型句をすっ飛ばし、私はそのまま一方的に通話を切る。

雲川の残念そうな表情が目に浮かぶが、生憎相手のことを気にしていられるほど私に余裕はなかった。

しばらく呆然としていたが、やがて私はふうっと溜息をついてベッドに倒れこんだ。

「……あー、久々に挫折だなぁー。いや、最初から挫折してたのに、私が気付かなかっただけ、か。はは、ここまでの絶望は、小学生の時アレイスターに宣戦布告された時以来かなぁー」

涙は出ていないが、多分私の表情は相当酷いものになっているだろう。きっと世界の終わりが来たみたいに真っ青になっている。

しばらくそうしていると、麦野が扉を開けて中に入ってきた。他のメンバーや黒花の姿はない。

「……皆は？　一緒にいるんじゃなかったの？」

「なんか話についていけなかったから適当にその辺で時間潰してた。話は終わったの？」

「見れば分かるでしょ」

麦野にそう吐き捨てている自分を自覚してから、心が荒んでるな、と思った。でも、仕方ないだろう。私がどう動こうとアレイスターにはダメージを与えることは出来ず、いつかは使い潰されると分かっている運命なんて知らされたら、誰だってショックを受けるし落ち込む。私だって、上条みたいな超人じゃないんだから不都合な事実を突きつけられてもそれをどうにかしようと動くまでには時間がかかる。

というか、こんなのどうにかしようっていうレベルを超えている。私が超能力者（レベル５）だろうと意味なんかない。超能力者（レベル５）くらい他にもいる。与謝野だってそうだし、この麦野だってそうだ。私より順位が上の連中も、アレイスターには一矢報いることさえできてない。まして私なんか上条にだって負ける自信がある程度の実力だしな。相手にすらならないに決まってる。

しかも麦野に至ってはただの無能力者（レベル０）の浜面にだって負けたくらいだし、同率第四位の私も当然……、

……ん？

浜面？

……そうだ！！　浜面がいるじゃないか！！

浜面仕上、暗部の抗争で殺されるはずだった無能力者（レベル０）。にも拘らず抗争を生き残り、麦野を撃破し、滝壺を生かすためにロシアに行き、学園都市と対等に交渉する為の武器を手に入れた、正真正銘の異分子（イレギュラー）。

浜面は『アイテム』に配属される。それは確定事項だ。
あれはプランで『殺されるはず』だった人間。つまり、プランには『殺される』という予定があったはずだ。おそらく、スキルアウトのリーダーを二回殺すことで反撃の芽を完全に潰す、という思惑でもあるのだろう。
それがプランである限り、浜面が『アイテム』に組み込まれることは必定。ならば、『アイテム』と行動を共にし、友好関係を築いている私が彼と接触できない道理はない。
むしろ、積極的に接触し利用することだって可能なはずだ。
禁書目録（インデックス）の主人公の一人であり異分子（イレギュラー）たる浜面ならば、プランを破壊する武器としては十二分。
そこに、私というこの世界のどの人間も超越した物の見方ができる頭脳が加われば、いかにアレイスターといえど簡単に潰すことはできないんじゃないか？

暗部に堕ちた浜面が参入した時点で、『アイテム』を親船の権力で私の傘下に置き、『アイテム』の一員のような役回りで正史の事件をやり過ごす。『アイテム』を私の傘下に置くこと自体は、それほど難しいことでもないはずだ。
あの暗部の抗争で浜面が死ぬはずだったということ、そして浜面が『アイテム』に参入させられたことから考えるに、アレイスター的に『アイテム』は簡単に尻尾を切れる存在のはず。現に、私は簡単に『アイテム』を雇うことが出来た。このまま完全に飼い殺しにするのも難しくないはずだ。というか、意地でもする。
問題があるとすれば……『連絡人』の存在だが、こいつもまとめて『闇』から引っこ抜いてやれば良いだけの話だ。

浜面が暗部に堕ちて、『アイテム』に参入するのを待つ理由だが、単純にこのタイミングが一番ベストだからだ。

浜面が参入する前に『アイテム』を傘下においてしまうと、警戒したアレイスターが浜面を別の組織の下部組織に編入させてしまうかもしれない。

だからといって浜面が暗部に堕ちるのを促すとしても、予想外の事態が起きてしまうかもしれないから危険だ。私が使い捨ての駒だとしても、消費されるタイミングとして思い当たるのはヴェント襲来、暗部の抗争、くらい。

ヴェントの襲来は『アイテム』の連中と乗り切るとして、暗部の抗争の頃には浜面はいることになる。問題はない。

……随分と個人の能力任せで、普段の私ならば絶対にとらない作戦だが、この状況ではこれが一番マシな行動指針、だろう。というか、こんな策でもやらなければデッドエンド直行なのだ。やるしかない。

「……なんか深刻そうな顔してるから慰めてやろうと思ったら、今度は悪人面で嗤ってやがるし……」

麦野の疲れたようなツッコミを聞き、私は思わず口元を押さえた。しまった、笑ってたのは気付かなかった。

「まあ、自分で吹っ切れたんなら別にいいけど。お前がそんな調子だと私たちまで調子狂うし、それに黒花だって悲しむだろうしね。それよりも、さっきそこでフレンダたちが話してたんだけどさ。なんか退院まで待てないから明日パーティやろうよとか――――」

「いいじゃんパーティ！　やろうやろう！」

麦野の言葉に、私は目をきらめかせて飛びつく。昨日今日と暇はしなかったが、明日、明後日、明々後日は何もない限り暇だ。御坂の病室にでも行って『親睦』を深めようかとも思ったのだが、当の

御坂は今日の朝に退院してしまったらしいし。

パーティ、か。いいな。こういう平穏な日常。暗部組織と、っていうところが何とも残念なんだけど、ここだけ見ればきっと普通の女の子の日常なはずだ。

よし。調子が出てきた。これがいつもの私だ。

いいぞアレイスター。

私の安全の為にも不干渉を貫くつもりだったが、お前が私の『平穏』を害するというのなら仕方ない。

受けて立ってやる。私のことを捨て駒だと思ってるんならそう思ってるが良い。

今は無理でも、私では無理でも。無理なら無理で、私には『策』がある。ギリギリ『人間』なだけのバケモノめ。正真正銘の人間舐めてんじゃないぞ。

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

彼女は、夏休みにも関わらず高校の食堂で友人と通話していた。

「――あの日の『幻想猛獣（ＡＩＭバースト）』。おそらく、あれの完成体を生み出すことが、並行結合（シンクロニズム）の存在意義かも、と私は思うんだけど……小豆、聞いてる？」

途中から明らかに反応が薄くなったことと、直前に彼女がショックを受けるような内容を話したことから、少女は電話相手が茫然自失状態になっているんじゃないかと考え、即座にフォローを出せるように問いかける。が、それは彼女にしては珍しく一手遅い対応だったようで、通話は相手側から一方的に切られてしまった。

通話を切られてからしばらく、ぽかんとした表情で自身の携帯電話を見つめていた彼女だったが、ふいにふっと表情を崩したかと思うと、携帯を持っていないほうの手で口を覆って笑う。それは、失笑というよりも『恋に悩む後輩を目にしたときの微笑ましい笑み』のような、日常的な暖かさを持つ笑みだった。

「……まったく、あいつは思い込みの激しいところだけは昔から治らない欠点のようだけど」

携帯を手の中で弄くりながら、少女は電話相手――小豆の狼狽した表情を思い浮かべる。

彼女が絶望した表情は、意外と簡単に思い描くことが出来た。しかし、その表情は十秒としないうちに不敵な笑みに塗り替えられる。つまり、彼女の中で小豆とは、そういう人間なのだ。

どんなに絶望した状況に陥れられても、すぐに希望を見つけ出して引っ張り出す、そんな規格外。小豆は自分のことを『ヒーローじゃない』と卑下しているが、彼女からしてみたらそんな小豆のあり

方こそヒーローそのものだった。

誰かを救うヒーローではなく、自分自身を救うヒーロー。

そんな、どこまでも自分勝手なヒーローがいても、いいんじゃないかと彼女は思う。そんな彼女の自分勝手な行動を見ているだけで、手助けするだけで、救われている人間がいるのだから。

絶望を希望にする者。それは、ヒーローの最大公約数的な概念じゃないかと彼女は思う。彼女が心理的無血開城をしている少年だって、何度となくその『意味不明の右手』を振りかざし絶望を希望に変えていた。

……どういうわけか、小豆に限ってはその『意味不明な右手』の恩恵にあずかることをかたくなに拒んでいたようだったが。

（本当に、『まったく』なわけだけど。多分、あの子は知らないんだろうけど。自分が一方通行（アクセラレータ）と同じくらいの重要度を持ったプランの対象だと言うことを。そもそも、暗部組織をいくつも消費させるほどの大掛かりなプランの対象になった人間が、使い捨ての駒なわけがないんだけど……な。しかも、あの調子だと折角教えてあげた『並行結合（シンクロニズム）』の『科学側の』答えも聞いてなかったみたいだし……。まあ、アレイスターの意図しないところでプランを進行させることで、タイミングを崩してやろうと言う嫌がらせだったがそこまで重要度が高いわけでもないし、達成できなくても構わないけど）

彼女は、そこまで考えて携帯をしまい、顔を上げる。そろそろ、見回りの教師が彼女のことを発見する時間である。どんな奴が来ようともはぐらかすのは簡単だが、面倒ではある。見つかる前にさっさと退散するに限る――と、彼女はさっさと食堂を後にする。

「そういえば、資料によると『能力相殺（ＡＩＭキャンセル）』は

習得を予想してなかったスキル、という話だったけど。アレは一体、プランにどういった影響を与えたんだろうか――。それも含めて、次に小豆が起こす予想外（イレギュラー）が何なのか。楽しみなところではあるけど」

考えることが自分の仕事だ、と言って憚らない彼女は自らの後輩が巻き起こすだろう次なる波乱に思いを馳せ――そして思考をやめた。

まるで彼女に関しては、そうやって思考をすること自体が無粋なことであると言うかのように。

１４（後書き）

唐突ですが、次回で小豆編はとりあえず終了となります。
最終話は、これまでとは打って変わって平和な雰囲気になる……はずです。きっと。

15（前書き）

小豆編？最終話です。
小ネタとしてかまちー先生の著作『ヘヴィーオブジェクト』ネタを使用しているので、
一部、未読の人には優しくない構成になっています。

15

「でい！　やあ！」という無数の掛け声に、私は思わず眉をしかめた。

七月二七日。

私たちは、冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）のいるとある病院の中庭に集合していた。麦野の腕を覆っているギプスもまだ外されておらず、既にメイド服装備な黒花を除いて全員手術着のようなバスローブのようなモノを着ている。

この中庭と言うのは、心に傷を負った人やリハビリに疲れた人が心を休める為にあるので、作戦会議には丁度良いだろうということで私や黒花をはじめとしたいつものメンバーは今夜決行する生還記念パーティの打ち合わせをしようと集まっていたのだが……、

「……なに、これ」

私の視線の先には、組み手をして運動能力を高めている男子学生、発電能力を使って自分のパソコンに何らかの操作を施しているインテリメガネ、瞬間移動（テレポート）を使って空中で積み木をお手玉している女学生、などなど。何故か肉体やら能力やらを鍛錬している学生の姿があった。

特筆すべきなのは、その『訓練』の方向性だろう。肉体はもとより、能力に関しても『開発』を頑張っているのではなく、『使い方』の技術を伸ばしているような印象を受ける。こんなの、正史での幻想御手（レベルアッパー）事件の後には起こっていない現象だ。

麦野に事情を聞いてみたが帰ってきたのは憮然とした表情の『知らない』という回答。お前、昨日部屋の外に出てただろうが。せっ

かくなら情報くらいしておけよ……。これだからお嬢様育ちは……。まあ、私もお嬢様育ちなんだけどな。肩書きだけ見れば。

「それなら結局私が知ってるって訳よ」

そこで、フレンダが慎ましい胸を張りながら一冊の文庫本を取り出した。表紙に描かれている金髪碧眼の少女を見るにライトノベルのようだが、それにしては少しだけ厚い気もする。

「……ん？　っていうかどうしてこのタイミングでライトノベルを？」

私は、馬鹿みたいに表紙の紺色系のボディスーツらしきものを纏っている少女を見つめながら聞いていた。少女の服装は紺色のスーツに水兵服の襟のようなものとジャケットのようなモノを纏っている、女学生の着るセーラー服を特殊工作員っぽくしたものだ。

「これが、この『馬鹿みたいな努力現象』のすべての答えを握ってるって訳。ちなみにこの現象、既に学園都市全体の一万人以上の能力者、大多数の無能力者（レベル０）、スキルアウトにも飛び火してるらしいって話よ」

なん……だと……？　確か、私が入院する前にそんな話はなかったはずだが。仮に私が入院してからそんなことが起こったとして、精精二、三日程度だぞ？　そんな簡単に広まるのか？

「幻想御手（レベルアッパー）事件の後目を覚ました使用者たちの中で、『何故か』能力を向上させる努力をやめて自分たちの創意工夫で能力を使おうっていう運動が広まってね。最初の一日で一万人がやり始めて、次の一日で他にも飛び火したって訳よ。ちなみに、これは『ヘヴィーオ

ブジェクト』って言って、元々知る人ぞ知るって感じだったんだけど学生たちのブームによってブレイクしたライトノベル。学園都市内レーベルのライトノベルでは珍しく『超能力』じゃなくて『進んだ科学』を題材にしているところとか、超能力者（レベル５）みたいに派手な能力を持ってなくても自分たちの知恵と肉体で強大な破壊兵器『オブジェクト』を潰すっていうストーリーが今の学園都市のトレンドに謀ったかのようにマッチ！　かく言う私もプラスチック爆弾片手に頑張る主人公にシンパシー感じちゃってるって訳よ！！」

……『ヘヴィーオブジェクト』一ミリも関係ねえじゃねえかお前それ自分の好きなラノベ紹介したかっただけだろ、という無粋なツッコミはおいておくとして。

さて、ここまであからさまに説明してくれれば、馬鹿でも分かるだろう。うん、それ、私も読んだことある。ヘヴィーオブジェクトでしょ？　『お姫様』可愛かったし、既刊三巻全部読んだよ。

……ただし前世でな。

＊＊＊

なんかもういちいち取り繕うように説明するのが面倒くさいが、一応自分の心を落ち着ける為にもやっておこう。

うん、私の前世で刊行していたはずの『ヘヴィーオブジェクト』がこの世界にあったっておかしくはない。

この世界を構成している要素や起こる事件は基本的に『禁書目録（インデックス）』の史実に基づいてるしな。私の読んでない二三巻以降で、かまちーの遊び心が爆発してヘヴィーオブジェクトが作中作として登場していれば、このような形で現れてもおかしくはない。

「でねー！　もう二巻の発売が待ち遠しい訳よ！」

フレンダはスイッチが入ってしまったのか、文庫本をブンブン振りながら何事かを喚いている。

一瞬、二巻のネタバレをしてしまおうかと思うくらいムカついた私だが、そこは軽く抑えて「私も俗物だけどなんだかんだで面倒見がいい不良の相棒ほーしーいーって訳よー」とのたまうフレンダに、「はいはい、もうしばらく待てば自然と来るから」とあながち洒落になってない予言を放ちつつ溜息をついた。

「結局、何でこんな意味不明な現象が起こってるのかは分かんないんだね……」

そもそも、学園都市は強度（レベル）主義である。強度（レベル）によって人間の優劣は決定し、下位能力者はそのことにコンプレックスを抱いている。だからこそ今の学園都市が存在しているのだ。

しかし、この状況。これは、間違いなく学園都市全体の意識革新といっても過言じゃない。下位能力者が、強度（レベル）を上げるのではなく自分自身の技量を高めるこの社会現象とも言える傾向。浸透すれば、

学園都市の常識は恐らく変わる。
それはつまり、原作乖離を発生させる可能性もあるということだ。
まあ、所詮ただの学生だし、スキルアウトはもうこの段階で後戻りできる状態は過ぎてるからそこまで深刻にはならないだろうけど、それでも元凶があるなら手を打っておいたほうが良い。

「……お前、それ本気で言ってるの？」

そんな風に割りと真面目に思考を走らせていた私に、麦野は溜息交じりで問いかけてきた。……目の色に、そこはかとない呆れがあるのは気のせいだろうか。

「大丈夫だよおやふね、いつも妙に勘が鋭いのにそんなところだけは鈍感なおやふねも私は応援してる」

「……馬鹿にしてるでしょ」

鈍感？　私が？　……私が一体何をした？　幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に最後の一撃を入れたのは確かに私だが、他は全部麦野がやってくれたし。……確か、原作で幻想御手（レベルアッパー）使用者が真面目に開発に取り組むようになったのは御坂の最後の一言が原因だったっけ。とすると、あの時最後の言葉を投げかけたのは……、私か。

……え？　あのセリフ？　アレが原因なの？　いや確かに、素養格付（パラメータリスト）の存在を知っちゃった私としては『頑張って開発すれば能力伸びるよ！』なんて慰めを言えるわけもなく、あんな風に自戒の意を込めた嘲りしかできなかったわけだけど、それにしてもあれが原因？
だって、アレ完全に慰めじゃないぞ？　むしろ安易な方法で強くなろうとしたお馬鹿さんたちを嘲るような意味も含まれてるくらいだぞ？　アレがむしろ発破をかけちゃったとかそんなオチ？　……

馬鹿な。

『まあ、君たち憧れの超能力者（レベル５）にトドメ刺してもらえなかったのは残念かもしれないけど、これが現実。いつだって最後に良い思いをするのは、私みたいに備えるだけ備えておいた人間だけなんだよね～？』

――っ！？　な、何だこの頭の中に直接響く黒歴史（イタいセリフ）は！

「一応、あの日の模様は私が記憶してますので～。お嬢様かっこよかったですよ？」

「いつだって最後に良い思いをするのは、私みたいに備えるだけ備えておいた人間だけなんだよね～？　って訳よ（笑）」

……フレンダ殺す。あと黒花も殺す。

＊＊＊

「……まあそれはともかくとして」

そんなわけで、フレンダを血祭りに上げ、黒花を絶望の淵に落とした私はそう言ってどことなく浮ついた空気のその場を鎮める。全

然鎮まってないけど、鎮めたってことにしておく。

「ここからさっさと移動しないとね」

ここは、流石に五月蝿すぎる。何のブームだか知らないが、静かだと思ってやってきたのに五月蝿くては敵わない。そもそも私たちがここに来たのは、今夜開催するパーティの計画をつめる為である。

そういうわけで移動を始め、中庭から院内に戻ったところで絹旗が、

「見張(ナース)りの巡回周期は昨日のうちに超リサーチしておきました。あとはそれに合わせて片づけが出来るような可変式パーティセットの建設ですけど……できますか？」

と言ったのを皮切りに、会議が始まった。

「それに関しては私に良い考えがあるよ。昨日のうちに必要な材料の殆どは私んちに注文しておいたから、このリストに載ってある部品を売店で購入できれば、ほぼ問題はないと思う」

「どれかな。……でも、ここにあるリストには『お菓子』が計算に入ってないようだけど？　お菓子も含めてこのリストに書いてあるものを購入するとなると、結構な量になるよ。そんなに大量の物品を購入したら、周りに『これから何かします』って自分から喧伝してるようなものだと思うんだけど」

「じゃあ、そのリストを元に代用できるものや親船家から取り寄せた物品で併用できるものを削除。『お菓子』については各自一九時までに売店の店員に不審に思われない程度に数度に分けて購入。これで良い？」

「でも、それだと結局建設班はどうする訳？　病室でやるには音が五月蝿いし、中庭だと目立ちすぎるけど」

「パーティセット建設は親船さんの『並行結合（シンクロニズム）』の力を借りて、病室でやるのはどうですか？　念動力で空気の動きを止めて音漏れを防げばある程度の効果は得られると思いますよ。加工も並行結合（シンクロニズム）なら余裕でしょうし～」

「それは何とも超親船さん任せな考えだと思いますが……まあ、良いでしょう。大した労力でもなさそうですし」

そんな風に会議をしているうちに、私たちの滞在している病室――二〇七号室に到着した。っていうか、いくら万能だからといって『困った時は小豆ちゃんに任せとけ☆』な風潮はいかがなモノかと思う。

「で、パーティセットを建設する為の機材は？」

「昨日のうちに運んでもらっておいて、『割裂空洞（ダークホール）』の中に収納しておいた。座標は記憶してるから問題はないよ」

麦野の言葉に、『多才能力（マルチスキル）』の影に隠れてしまって目立たない『割裂空洞（ダークホール）』を使っていたことを説明する私は、さっさと部屋に入って病室の隅に手を翳す。座標的には、この位置に物品を収納していたはずだ。

手を翳した空間に、音もなく亀裂が走り黒い空間がその先に見える。

「にしても、その能力も大概意味不明よね。未元物質（ダークマター）みたいな意味不明な物質を生成する能力があったから流してたけど、ソレ、そもそも一一次元空間じゃないんでしょ？　だったらその奥の空間ってどこなのよ？」

「さぁ？」

麦野の言葉に、私は振り返って答える。いや、本当に「さぁ」としか言い様がない。知らないんだから。

そういえば、何気に黒花を収納したりと活用していたこの割裂空洞（ダークホール）だが、一一次元の空間じゃないってことはここは別の何かってことになるな。まあ、完全に封鎖しても窒息したりしてないことから、無害ではあると思うんだけど。

……イレギュラーな空間に置かれたりして、黒花がチート能力に覚醒したりしないかなぁ……。そしたら少しはアレイスターの注目も……、いや、むしろ能力を変質できるっていう価値から私の狙われ度が上がる一方か……。それにそれだと黒花が解剖とかされちゃうかもだし。

＊＊＊

機材を運び込んだ後は、パーティ設備の建設作業が始まった。

私が念動力（サイコキネシス）で防音をしている間、怪力の絹旗が機材の建設を始める。素で怪力の麦野は、まだギプスが外れていない為買出し要員だ。

並行結合（シンクロニズム）の同時能力使用で建設作業のお手伝いをしつつ、私は絹旗と世間話をしていた。

「にしても、親船さんの能力って超不思議ですよね」

普通ならば専用の機械を使って持ち上げる部品を、絹旗はさくっと持ち上げて差し込んでいく。

「私もそう思うよ。今まで納得してたのが全部ガセだったわけだし。わけがわからないよ」

念動力（サイコキネシス）による運搬の手を止め、私はそういって肩を竦める。絹旗はそれに小さく笑って返し、

「私は、自分だけの現実（パーソナルリアリティ）をちょこっと弄るだけでも超命がけでしたけど……。親船さんなんか、複数の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）をいとも簡単に切り替えちゃってますしね。実験の時、同じようなことをしようとした馬鹿研究者がいましたけど、能力者の爆発に超巻き込まれて一緒に爆死してましたね」

その時の状況を思い出したのか、顔を真っ青にさせる絹旗。

そういえば、コイツは一方通行（アクセラレータ）の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を埋め込まれたんだっけか？　細かい用語は違った気がするが、ニュアンスはそんな感じだったはずだ。

「一体、どういう原理なんでしょうか……。そもそも、自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を切り替えてるっていう考えが超間違いなんですかね？」

「そこはホラ。原因不明の小豆ちゃん☆パワーでさー」

「……親船さんって、どうでもいい時は超投げやりな受け答えしますよね」

「だってどうでもいいんだもん」

いや、実際どうでもいいわけじゃないが、今この場に限ってはどうでもいい。私はパーティを楽しみたいのだ。他の瑣末なことなど今は考えたくない。

「……まぁ、それもそうですね。それじゃ、さっさとパーティの準備を超終わらせてしまいますか！」

ゴッ！！　と轟音を響かせて、絹旗が機材を持ち上げる。

……壁と床と天井の念動力防音、もっと強めたほうがいいか？

＊＊＊

「「「「「「かんぱーい！」」」」」」

そういうわけで、私と絹旗、たまにフレンダの尽力の甲斐あって二〇七号室はパーティ会場と化していた。様々なギミックを組み込んだお陰で、ボタンを一つ押せば〇・七秒で各パーツが七つのスーツケースサイズに収まる機能つきだ。一応、外に大気系能力で常に探査結界的なモノを張っている為、誰かが来たら気流の乱れで私は察知できる。私すごくね？

「隣、いいです？」

一通り騒ぎ終えて（当然防音は私の担当である）、ベッドに腰掛

けていた私に、黒花が声をかける。私が頷くと、黒花は私の隣に腰掛けた。

『……それにしても、これって、現実なんですよね？』

『……まだ、実感沸かない？　流石に十幾年も過ごしてたら実感も沸くモンなんだけどね』

私の言葉に、黒花は安らかな表情で首を横に振る。

『いえ。そうじゃなくて今、この場に私がいられることが、です。短い間に色々なことが起こりすぎて。親船さんに出会う前は、本当に絶望しかない日々でしたから～』

グスッ、と内心涙ぐんでいる黒花をよそに、私は手に持ったグラスの中のジュースを一口含む。

『……あれ、そういえば親船さん、十幾年とか言ってましたけど、一体いつ転生したんですか？』

『一六年前だけど、それがどうしたの？』

『……いや、別に。私は三年前にこっちに来たものなんで。……おかしいなぁ。まあ、転生にも色々あるってことなんですかね～……』

黒花は勝手に思案に入ってしまったので私はさっさと立ち上がって『アイテム』の面々の輪の中に入っていった。

＊＊＊

「やっほぉーい、楽しんでるぅーっ！？　って訳よー！」
「ふれんだ、そこでその口調はちょっと無理がある」
「うるせぇーっ！　って訳よー！」

……なんかフレンダが酔っ払ってる。

「どうしたの？　この酔っ払い」
「勝手にビール持ち出して自滅した」

私の質問に答えたのは、呆れた様子の麦野だ。酔ったフレンダは麦野さえ恐れないのか、さっきから頻繁に麦野に絡んでいる。大分丸くなった麦野だから今のところ上半身と下半身は繋がっているが……ホント、フレンダはよくやるなと思う。

と、戦々恐々としながらも和やかな気持ちになるという不思議な体験をしている私へ、滝壺が難しい顔をしながら近づいてきた。

「おやふね。念動力（サイコキネシス）は？」
「天井、床、壁、窓、全方位抜かりないけど。いきなりどうしたの？」

そう言って慎ましやかな胸を張る私に、滝壺は怪訝な表情を浮かべる。……やっぱ、こういう胸を張る動作って胸があった方が様になるのか？　どーでもいいが。

「……いや、おやふねから拡散力場が観測できなかったから、つい。

そういえば確かに割裂空洞（ダークホール）からは拡散力場の反応を感じるね」
「珍しいわね、滝壺が能力の出所を見誤るなんて」
「……言い訳するつもりじゃないけど、親船から発せられてる『なんだか良く分からない力』のせいで観測が上手く行ってないのもある」

言い訳である。どんな理屈を並べようと滝壺が拡散力場の出所を見誤ったという事実は揺るがない。……まあなんというか、そこまで自分の能力の正確さにプライドを持っていると却って可愛く見えるというものだが。

「んー、あれかな。やっぱり小豆ちゃん☆パワーが」
「あながち間違ってないかもしれないから冗談にならないよ」

なんとなくギスギスし始めた場の雰囲気を和ませる為に笑った私の言葉に、滝壺は真面目に返す。
そりゃそうだな。削板のアレも謎の軍覇くん☆パワーによって成り立ってるようなもんだし。こんなことなら前世で真面目に禁書の考察とかしておけばよかったと思う。
だが、後悔先に立たず。並行結合（シンクロニズム）によって正史の状況を把握できている私も、そこから得られる情報で推測できるほどの頭脳はない。
……そういえば、この『正史の情報を得られる』っていう並行結合（シンクロニズム）のスキルも矛盾するな。……考えても仕方ないことだが、

ん、廊下の気流に乱れが。

「――っ、見回り（ナース）が来たよ！」

と、私の感知圏内に見回りが入ってきたのでさっさと知らせると、『アイテム』及び黒花は素早くお菓子やら飲み物を片付け、スイッ

チを押す。オーディオやらなにやらといったパーティ用具は即座に折りたたまれ収納され、七つのスーツケースに収まるサイズとなる。

そして、ガチャリと言う音。

「皆さん、具合は、……セイヴェルンさん、麦野さん。まだ病み上がりなんですから、あんまり暴れないようにしてくださいね」

中に入ってきた見回り（ナース）は、急いでベッドに戻った麦野とくんずほぐれつしてるフレンダを見て溜息をついてそう言う。麦野の顔がひくひくと引き攣っているのは……気のせいだと、思いたい。フレンダ、南無。むしろよくここまで生き延びてこれた。

数分後、「あんたのせいで変な噂が立ったらどうしてくれるーっ!!」という絶叫と共に、とある金髪女子高生の悲鳴が響き渡ったのだが、そんな騒音は私の能力で全部打ち消したのでその事実を知っているのは私を含めた極少数の少女のみである。

＊＊＊

見渡す限り、漆黒の空。

夏の夜風が、喧騒でほてった頬を冷ます。

「……なーんて詩人みたいに語ってみたり、ね」

私は、とある病院の屋上に立っていた。フェンスの金網に指を絡めて体重をかけ、空を見ている。

色々なことが、あった。

剥離要素（エラーポイント）との遭遇。最初の風間の時はマジで死ぬかと思った。まあ逆に殺してやったが。

『アイテム』との邂逅。原作とは高校卒業さえすれば二度と関わらないとまで思っていた私としては、一番の誤算だったかもしれない。だが、こうして私の『本性』を晒して付き合える人間と言うのも、中々良い物だと思える。開き直ったからだからだろうか。

黒花との結託。現状、彼女は表向きだけじゃなく本当に私の腹心になりつつある。アレでもう少し平和ボケが治ってくれたら、だが。少なくとも、出来る限り手を尽くして守ってやろうというくらいには思える存在だ。

そして、幻想御手（レベルアッパー）事件。結末は、当然のことながら私の知るものとは全くと言っていいほど異なるものになってしまった。

だが、『本筋』は変わっていない。

それを確認する為に、今私は此処にいる。

私の見ているほうの空には、一棟のアパートがある。あのアパートは、教職員が入る集合住宅にしては珍しく八学区ではなく七学区に存在している。

私の記憶――というか、並行結合（シンクロニズム）による並行世界観測によればこの夜、この時間、あのアパートから一条の光が天へと上る。

既に日付は変わっている。私の観測している並行世界の上条はインデックスの放つ光線を右手で押さえつけていた。後数分もしないうちに、上条はインデックスを救い――そして、死ぬだろう。

感傷がないわけじゃない。あの日も思ったように、三年強も隣の席だったのだ。それに、常にそっけない態度をとっていた私に対して、全くと言って良いほど悪感情を抱いていなかった彼だ。友達になってみたかった、という思いもある。

だが、彼を見捨てたことについては後悔するつもりもないし、してはいけないものだと思っている。私は上条を『見捨てる』と決めたのだ。ならば、そのことについて後から悔やむのは上条の命に対する侮辱だ。

アパートの天井から、音もなく極細の光線が放たれる。

「うわ……何あれ凄い」

分かってはいたはずだが、この目で見ると余計に凄い、と感じる。人間が立ち向かえるレベルを遥かに越えた熱量だ。あれで人工衛星が――樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）が墜ちたわけだし。

なんにしても、これで上条は確実に『死んだ』。

それを確信した私は、静かに踵を返す。

「――――あ、そうだ。今のあの光、一応麦野たちに報告しないとね」

思い出したように呟いた私は、そのまま麦野たちのいる二〇七号室へと引き返した。

後ろは、振り返らない。

１５（後書き）

小豆編？完結。

これから、第二章的なモノを上げていくのですが、筋書き作りが非常に難航しているので、
その間を埋める為というわけではありませんが地味にストックしておいた
外伝「とある科学の並行結合（シンクロニズム）」を不定期に投稿していきます。
小豆の初々しい転生初期の物語や仁義なき暗部抗争は外伝の方で書いていく予定です。

01（前書き）

第二章、一話です。
『カイン編』と銘打ちつつ、しばらく上条側三人称視点で物語は進みます。
冒頭部分は『とある魔術の禁書目録？』ｐ３７　１１４からの引継ぎです。

……こういうのって、著作権的に大丈夫なんでしょうか……？

01

side other

――『本来の筋道から剥離した物語』にて。

「……吸血殺し（ディープブラッド）」

ポツリと。呟いたステイルの顔は、解けない疑問に突き当たった学者のそれ、

ではなく。

「吸血殺し（ディープブラッド）。それを抑える手段くらい、学園都市（このまち）にはあるんでしょう？　それを使わず、野放しにしておくということは、それは――」

ステイルはその先が言えなかった。吸血殺し（ディープブラッド）。そう呼ばれるからには、殺すべき『ある生き物』がいなければ話にならない。つまり、吸血殺し（ディープブラッド）を認めるという事は、『ある生き物』が存在する事をも証明してしまう。

――……いや、そんなことは、最初から証明されている。

つい最近――自分が『今の』インデックスを追いかけ始めている間に、一人の男と二人の少女がイギリス清教を頼ってきた、という情報は入っている。

そのうちの一人に、他でもない宵闇の祖（ヴァンパイアロード）がいたというのだ。隙あらば自分を殺そうとする組織を頼るというのだからどれほど切羽詰

った事情があるのかと思えば、何でも、呪いにかけられた少女を匿うので、その助力を請う為にイギリス清教の元に下った、という話だったのだから、なんとも肩透かしを食らう話である。

何故なら、宵闇の祖（ヴァンパイアロード）は今まで幾度と自分を襲ってきた魔術師を殺すことなく撃退し、しかもその魔術師が悉くカインに心酔してしまう為、肝心の宵闇の祖（ヴァンパイアロード）の実態は今まで何一つつかめなかったのである。その、性別に関しても。

宵闇の祖本人（ヴァンパイアロード）とは、ステイルも面識はある。というのも、インデックスの一件が終わってからイギリス清教に帰還した際、清教の寮で偶然ばったりとあったのだ。あまりにイメージとギャップがあったため、普通の新入り魔術師と思いソレ用の対応をしたのだが、後から宵闇の祖（ヴァンパイアロード）の信奉者に集団リンチの刑に処されたことで「アレが宵闇の祖（ヴァンパイアロード）だったのか」と気がつくことになった。

……集団リンチの刑を執行した信奉者の中に、死んだことになっていたはずの魔女王（ウイッチクイーン）までいたのにはさしものステイルも呆れるほかなかった。

ちなみに全治二週間の怪我を負ったが、治療魔術でなんとか治ってステイルは今ココにいる。

閑話休題。

「ふむ、どうやら魔術師（きみたち）は宵闇の祖（ヴァンパイアロード）に関しては度を過ぎるほどに慎重と見える」

ステイルの目の前にいる、あらゆる人間の可能性を内包した『人間』は、興味深そうにステイルの言葉を遮った。

当然だ、とステイルは心の中で噛み締める。宵闇の祖（ヴァンパイアロード）はそれ個人だけで『聖人』に匹敵するほどの力――つまり、魔術界隈では核兵

器並みの戦略的価値を有する。
さらに始末の悪いことに、宵闇の祖（ヴァンパイアロード）には多くの信奉者が存在する。
それも、信奉者の成り立ちから言ってかなりの高戦力が。ステイルが知るだけでも、魔女術のエキスパートであり今は失われた純粋な“ガードナー派”の魔術を扱う、『魔女王（ウィッチクイーン）』ドロシー＝ガードナー。
そして、四大属性のうちの一つ、『火』の属性を扱うことに長けた魔術師（つまり、ステイルとキャラが被っている）、フレッド＝ゲティングス。
フレッドに関してはドロシーに比べれば雑魚もいいところだが、それでも実力で言えばステイルと比肩するほどの凄腕だ。
しかも、これだけでも氷山の一角。
噂によれば、流離の獣王やら通りすがりの聖人やらアニメスタッフをやってる空論使い（マジカルメイカー）やら、粒揃いの連中が揃っているらしい。
最早冗談である。

通常、それらの『信奉者』がいっせいに一つの対象に牙を剥くことはない。信奉者とはいえ、彼ら彼女らは魔術師であり、基本的に自分の主義主張によって行動する。
だが、大恩ある宵闇の祖（ヴァンパイアロード）が死んだとあれば話は別になる。

カインの末裔――――吸血鬼。
それは絵本に出てくるような『十字架』や『陽の光』があれば大丈夫、などという易しい生き物ではなく、それ単体が核爆弾に匹敵する『世界の危機』である。
しかも、その生命力は無限大であり、したがって生命力から生み出される魔力も無限大。『不死身』と『最強』を体現するという、冗談みたいな存在である。

だが、そんな吸血鬼にも弱みはある。
それが、この吸血殺し（ディープブラッド）。この血を吸った吸血鬼は、一瞬にして灰

燼に帰すこととなる。冗談みたいな存在を、教会にとっては忌わしさの極みである存在を消せる、最強にして最善の武器。

しかし、この場合それは最悪の形にしか働かない。

吸血鬼が――『宵闇の祖（ヴァンパイアロード）』が死ぬということは、世界に散在する粒揃いの強者たちが一気に学園都市に牙を剥くということと同義である。

そんなことが起こってしまえば、学園都市は大混乱になるだろう。この統括理事長がいる限り、完全崩壊はないと思うが未曾有の事態に陥るのは間違いない。

確実に、戦争が起こる。それも学園都市内部で。そうなってしまえば、学園都市にいるインデックスはどうなる。つまるところ、ステイルの懸念はそこだった。

「だが安心していい。宵闇の祖（ヴァンパイアロード）が死ぬことなどないよ。その為に私は手を打っているのだから」

フフフ。と楽しそうな遊びを思いついた子供のような、それでいて超然とした余裕を持った老人のような笑みを浮かべる『人間』に、ステイルが抱いたのは戦慄――ではなく安心だった。こいつは、この『人間』は、どうまかり間違っても宵闇の祖（ヴァンパイアロード）を殺さない。

『人間』の厄介さを知るステイルだからこそ、そこに関しては逆に信頼を置くことができた。

最早どうしようもないくらいに剥離した世界で、『人間』は笑う。

吸血殺し（ディープブラッド）の存在が『ある生き物』の存在を証明したのと同じように、幻想殺し（イマジンブレイカー）が証明する存在を考えて――ではなく。

これから始まる、もう一人の剥離要素（エラーポイント）が紡ぎだす物語に思いを馳せて。

＊＊＊

とある物語が終わった。

右腕を切断されて先日何とかそれが繋がった不幸の権化（ミスターアンラッキー）こと上条当麻は、今日も元気に補習の旅に出る。本来、上条のクラスの補習は七月一九日から七月二八日に行われているべきであるのだが、その彼が今も補習を受けているのには、理由がある。

それは、『彼が知らないうちに補習をサボっていた』……などという、なんともファンタジーというか、聞く人が聞けばすぐに脳外科を紹介するような現象が起こっていたからだ。

勿論、彼の脳に重要な欠陥があるわけではない。いや、欠陥が全くないといえばそれは間違いになるのだが――、

簡単に言うと、彼、上条当麻は七月二八日以前の記憶を持っていなかった。

記憶を失う前の上条が補習をサボっていたのだから、『今の』上条にサボっていた記憶がないのは当然な話である。そんな、常人であれば相当な大事件の当事者になった上条だが、意外と彼を取り巻く環境に変化はない。

というのも、上条はとある事件以来、記憶を失った今の自分と記憶を失う前の自分に折り合いをつけることが出来るようになった。

今の自分と以前の自分、それが同じものであると不思議と『すんなり納得できた』のである。

当然、彼が頭の中でそう思考したわけじゃないが、それよりももっと深い部分で納得できたのだから、彼の表情に憂いはない。

……いや、訂正しよう。憂いはある。もっと即物的な要因によるものならば。

『「世界を構成する第五の要素エーテル、私に力を貸して！　シニカル・マジカル・悪いの悪いの飛んでいけーっ☆」

説明しよう！　超機動少女カナミンは呪文を唱えることでエーテルパワーといろんな小難しい理論を用いることで最終的に悪い怪物を相殺消滅できるのだーっ！』

「おおっ！　これはエーテルの持つ『万物と似ている』と五大元素と四大元素の差を用いて顕現したテレズマと魔界の悪魔を対消滅させてるわけなんだね！　まさしくこれはロシア成教の幽霊狩りの理論を応用したものなんだよ！　これは最早製作スタッフに魔術師がいるとしか思えないんだよ！！」

今日も今日とて、記憶を失う前の上条が一番大事にしていた、そして今の上条が一番大事にしている純白シスター少女はアニメの再放送に夢中だった。

「はぁ……。お前まだそれ見てんのかよ。よく飽きねぇなー……。ってかそれに魔術的意味なんざあるわけねーだろ。ただのアニメだぞ？」

「むむ！！　そんなことはないかも！」

純白シスター少女ことインデックスは憤慨して、

「まず、これを見てほしいかも。カナミンのコスチュームは不自然に胸元と下腹部と臀部が露出してる形になってるけど、」

それはお金の出所（おおきなおともだち）を釣る為の武器です、ともいえない上条は黙ってインデックスの講釈を聞く。

「これには、魔女術（ウイッチクラフト）の伝統的な儀式、『裸の儀式』の応用が組み込まれているんだよ。『裸の儀式』は通常全裸で行われるんだけど、この場合は『心臓』、『子宮』を象徴する『胸元』と『臀部、下腹部』を露出するに留めてその魔術的意味を強調することで、普通に『裸の儀式』を行うよりも効率的に儀式を展開しているんだよ！」

上条はもうこの解説だけでおなかいっぱいなのだが、インデックスの講釈はまだ続く。

「他にも、四大元素の利用が見て取れるね。火・水・土・風の四大元素と、それにエーテルを加えた五大元素、その二つの要素をあえて両方とも組み込むことで、両方の理論に競合を起こさせ、その時の誤差によって『エーテル』をこの世に存在（テレズマ）しない物質として顕現させ、光線状にして打ち出している、というわけなんだね！　こんな強引な魔術理論、並みの魔術師じゃまず思いつかないんだよ！　これを思いついた人はもはや魔術師じゃなくて魔導師レベルかも！！」

「ハイハイ、スゴイデスネーインデックスサン」

目を輝かせているインデックスに、上条は全く取り合わないすぐさま反駁するインデックスを片手で抑えて、上条はふっと考えた。

（にしても、魔術師の専門家がここまで細かく考察できるって凄い

よな。真面目にアニメスタッフに魔術師でも紛れ込んでるってのか？）

全く同時刻、とある場所で『空論使い（マジカルメイカー）』と呼ばれる、机上の空論をひねくれた理論により現実のモノとしてしまうという桁外れなメガネっ子地味系魔導師がくしゃみをしたりしたのだが、彼にとっては知る由もない話である。

そんな風に感心していた上条だが、ふとした拍子に見えたデジタル時計の示す時刻に一瞬唖然として、

「あっやっべ！　早く補習行かねぇと遅刻だ遅刻遅刻――っ！！」

と慌て始める。

実際は慌てなくても普通に走っていけば間に合う時間なのだが、こういう風にいちいち慌ててしまうのが彼の不幸の一因と言ってもいいかもしれない。

「じゃあインデックス！　飯はそこにあるからちゃんと『ペース配分』して食えよ！　昼には帰ってくるからーッ！」

そう言って上条はさっさと玄関を出て、補習に向かうのだった。

……当然、彼に平穏な日常など待っていない。

＊＊＊

まず上条にとって最初の非日常（ふこう）は、魔術師からの電話だった。

『全く、一々ボタンを押さないといけないだなんて科学（そっち）の通信手段は面倒くさいね。きみに通信用の霊装が扱えればもっと簡単に連絡が取れるんだけど……ま、幻想（それ）殺しを持つ君に言っても仕方ないことか』

何だコイツ、と上条は溜息をついた。急に電話してきたと思ったら、開口一番嫌味（これ）である。コイツは喧嘩を売ってるのだろうか？だとしたら買ってやろうかなどと上条は思う。

「ったく、いきなり何だよ。魔術師（ステイル）。嫌味言う為に連絡入れたんなら切るぞー上条さんは今学生の本分で忙しいのっ！！」

半ばヒステリックに叫び声を上げる上条に、しかしステイルは動じない。それはつまり、彼の用事がただの嫌味でないことを指している。

『随分つれないじゃないか超能力者（かみじょうとうま）。いや、ね――。君に、有難い情報をあげようと思ったんだ。君としても、折角救った女の子を殺されるのは面白くないだろう？』

電話先の声に、剣呑な色が混じる。上条もそれを察し、思わず立ち止まってステイルの言葉に耳を傾けた。

『おそらく今日、「吸血殺し（ディープブラッド）」が狙われるよ。相手は魔女と吸血鬼

と炎の魔術師だ。友人を失いたくないならば、君も学生の本分ではなく主人公（ヒーロー）の本分を果たすことだね』

そう言って、通話を打ち切ろうとするステイル。しかし、上条はそれをされては困るとすぐに止める。

「待てよ！　もう俺がそれに挑むことになってるのはまあ構わないとして、それを知ってるってのにお前は一体何してんだよ！？」

『……僕は少し、野暮用でね。安心してくれたまえ、前回のように君一人に大役を押し付けようとするほど僕も薄情じゃない。今、その野暮用を終えて学園都市に向かっている最中だよ。君は、三人の魔術師から吸血殺し（ディープブラッド）を護るだけで良い』

じゃあ、切るよ――というステイルに、上条は思わず制止しようとしたがそれは遅く。プツッ、という音と同時、ステイルとの通話は切断されてしまった。

「――――っ……。切れやがった」

しばらくポカンとしていた上条だが、やがて苛々を発散するようにつんつん頭を両手で掻き毟ると、覚悟を決めたように前を見る。なんにしても、姫神の命を護る為にはステイルの言うとおり、三人の魔術師相手に戦わなくてはいけないだろう。

だが、それにしても魔術師相手に三人というのは何とも絶望的な数字である。そもそも、上条は道端の不良相手にだって三人以上なら迷わず逃げるような程度の力量しかない。それが魔術師となれば、勝てる道理などあるはずもない。

だが、ステイルは三人の魔術師から吸血殺し（ディープブラッド）を護るだけで良い、と言った。そして、彼自身も学園都市に向かっている、とも。

それはつまり、彼が来ることによって勝算が出てくる、ということでもある。二対三、相変わらず劣勢ではあるが、勝ちの目はある。だから、上条は姫神を見つけ出し、三人の魔術師からステイルが来るまで逃げるだけでいいのだ。

なら、姫神を見つけ出せば良い。姫神は霧が丘女学院の生徒である為、今も霧が丘女学院の寮にいるのだろう。

「……ったく、俺はただの高校生だってのによ」

呆れたようにつんつん頭を掻きながら、携帯で大体の方角を調べると、上条は勢いよく足を踏み出した。そして。

第二の非日常（ふこう）。パキィン、というおなじみの効果音と共に、目の前に黒衣の女性が現れた。

「なぁっ！？」

女性は自身の姿があらわになったことに驚愕したのか、上条の方を呆然と眺めていた。

胸元が不自然に開き、乳房の下端あたりがはみ出るほどに丈の短い黒タンクトップに、ひじから先を覆う振袖のような黒い袖。下は黒いロングスカートだが、それも下腹部をこれでもかというほど露出するように下げられており、左脚部分には深いスリットが入っている。

スリットから見える左脚には、太腿の半ばまで黒いハイソックス。ウェーブがかった長い金髪の上に、黒くて大きな尖り帽子があることから彼女が『魔女』のようであると辛うじて認識することが出来るが、それがなければただのエロいお姉さんである。

どこぞの白黒と紅白を混ぜてエロくしたみたいだな――と世界観を越えた考察を入れる上条だったが、そんな思考は次の瞬間に受けた衝撃によって打ち切られることとなる。

「っだらぁ！」

現れた魔女に、思い切りハイキックを食らわせられたのである。咄嗟に魔術師だからそこまで身体能力は高くないと考えていた上条は、完全に不意を打たれた。

太腿の隙間から見えた黒く大人っぽいパンツに思わず目を取られた上条は、かわす事さえできず魔女のハイキックをモロに食らってしまった。

「がっぶぁ！」

女の蹴りだと思って甘く見た上条は、そう考えた一瞬前の自分を殴りつけたい気持ちでいっぱいだった。頬が、途轍もなく痛い。ステイルのような『魔術に頼ってばかりの魔術師』では、決して得られないような体捌きである。

少なくとも、ただの素人である上条では男女と言う性別の差を差し引いても勝てるかどうか難しいレベルだった。

（コイツ、一体……？）

呆然と魔女の方を眺めていた上条だが、彼女が踵を返して走り去ったのを見てやっと我に返った。

（そ、そういえば！　ついさっきステイルから『魔女が来る』って言われたばっかじゃねぇか！　俺の右手で急に姿を現したこと、『現代』には似つかわしくない服装、そしてあの尖り帽子……十中八

九、魔術師！！）

逃がす手はない、そう考えた上条は、すぐさま魔女の後を追うことにした。

＊＊＊

「っ……！　クソッタレ！　アンタ一体何モンだい！？　どうしてアタシのことを襲う！？　っていうか何でアタシの『隠匿術式』を打ち消せるんだい！　学園都市め……対魔術用の超能力を開発してたって言うのかい！？」

魔女は、上条の五メートル程前を走りながら背後の上条に向かって歯を剥いて叫ぶ。対する上条は、『長距離走には自信がある』という自己評価を下方修正しつつ叫び返す。

「っはあ……！　はあ、一度にいくつも質問すんな！　俺は聖徳太子じゃねえんだよ！　あと俺のコレは超能力でも、魔術でもねえ！　襲う理由なんざテメェの胸に聞いてみやがれっつうんだ！」

「はっ！？　まさか強姦目的！？」

「テメェブチコロス！！」

とても敵同士とは思えないくらい滑稽（コミカル）なやり取りをしつつ、二人の逃避行の舞台は路地裏に移った。道幅は一メートル程度。足元には障害も置いてあり、中々に走りづらいコースだが、こうした場所を減速せずに走る『知識』を持つ上条は、さほどスピードも落さず走ることが出来た。大変なのは、敵の魔女の方である。

「くっ、そ！　この道を選んだのは失敗だった、かね！」

当然、魔女も何も考えずにこの道を選択したわけではない。本当なら、空を飛んで追っ手を撒く算段だったのだが、上条との距離が予想以上に縮まってしまっていた為飛行するわけにもいかなくなってしまったのだ。

「ちっくしょう埒が明かないね……！　なあアンタ！　アタシの邪魔するってことは死ぬ覚悟があるってことだよねェ！？」

魔女が逃走の足を止め上条の方へ向き直る。振り返った魔女の表情は、獲物を目の前にした猛禽のような獰猛さを帯びていた。上条は思わずその表情に戦慄して後ずさりする。

「くっ――――」

「ＧＣＤＭＤＧＭＴＷＯＳＡＴＴＬＯＴＷＡＴＧ！

（ダーン神族の母ダヌよ、魔女と二柱の理に従い我に救いの水を与えよ！）」

魔女の声に呼応するように、ゴポポポ！！　という音と同時に水塊が発生した。

「くそったれ、空気中の水分の操作と凝結じゃなく、普通に水の発

生かよ！　質量保存の法則はどこいった！？」
「あいにく、アタシら魔術師に物理法則（じょうしき）は通用しないねェ！」
「そいつはテメェの台詞じゃあねえ！」

今にも押しつぶさんと襲い掛かる水塊に、上条は右拳による防御で以って応える。幻想殺し（イマジンブレイカー）に触れられた水塊は、パキィィン！　と音を響かせてそれまでの質量が嘘のように塵も残さず消えていった。

「チッ……！　なるほどねぇ、魔術を打ち消す能力、かい！　じゃあこういうのはどうだい！？
ＳＯＦＡＳＯＦＧＭＴＰ！
（火と水の精よ、我に力を貸し与えたまえ！）」

ゆらり、と。

瞬間、上条の視界が歪んだ。
思わず目をこするが、こすった右手に違和感はない。ゆらめいた景色のせいで、魔女との距離感がつかめない。

「く――でも、魔術なら！」

さぐるようにして手を振るがしかし、景色の歪みは解消されない。

「な、幻想殺し（イマジンブレイカー）が通用しない！？」
「へぇ、アンタのそれ、幻想殺し（イマジンブレイカー）って言うのかい。良いこと聞いたね。それに、アンタの動きから察するにどうやら右腕にしか効力は宿っていないみたいだ。それならいくらでも料理法はあるよ！」

魔女はそういって構え、

「ＧＣＤＭＤＧＭＴＷＯＳＡＴＴＬＯＴＷＡＴＧ――（ダーン神族の母ダヌよ、魔女と二柱の理に従い我に救いの水を与えよ――）」

魔女の言葉に呼応するように、彼女の傍らを取り巻くように透き通った聖なる水が現れた。

「ＮＳＯＨＡＷ――（ニーズヘッグよ、水と地獄の源――）、」

歌うように紡ぐ魔女の言葉に呼応し、聖なる水は地獄を流れる川の水源のように黒く邪悪な色に変貌する。

「――ＭＥＲＡＳＣ！（――一一の川と蛇を対応し、顕現せよ！）」

「な、これは――！？」

蛇が、現れた。

それも、ただの蛇ではない。魔女の傍らにある黒い塊から枝分かれするようにして現れた、一一の蠢く蛇。

「『ニーズヘッグ』さ。アンタの『能力』も教えてもらったからね。アタシの手持ちの術式のうち一つくらい教えてやるさ」

魔女はドロドロに溶けたような蛇たちを傍らに従え笑い、

「蛇ってのは日本神道においちゃあ、川の化身とすることが多い。そいつを利用してヘルヘイムに存在するフヴェルゲルミルっていう

泉とそいつを源とする一一の川をフヴェルゲルミルに棲む蛇ニーズヘッグと同一視して、一本一本を蛇として扱う術式さ。ちなみに、フヴェルゲルミルを源とする川――エーリヴァーガルには猛毒が存在するから、命中したらお陀仏とまではいかなくても相当酷い目に遭うことになる、よ！」

「だぁーっ！？　一パーセントも理解できなかったがとにかく食らえば死ぬってことは分かった！」

「死ぬこたあないっつってんだろ全く理解できてねぇじゃんか！」

ゴッ！　と加速した『ニーズヘッグ』を見た上条は、咄嗟に防御することを諦めて飛びのき後退することで攻撃をかわす。上条にかわされ地面に衝突した『ニーズヘッグ』は、衝撃で頭部をぐちゃぐちゃにしながらも地面を溶かす。

「ど、毒っつーか強酸じゃねえかこれ！」

上条は思わず悲鳴を上げるように叫ぶが、魔女は全く取り合わない。

「アタシの道を邪魔するってこたぁ、そういうことだよ。安心しな。魔女は無駄な殺しはしない。他人に迷惑をかけない範囲で我侭放題するってのがアタシら魔女の信条だからね」

魔女はそういって路地裏に転がるゴミクズを蹴り飛ばしながら、

「――――まあ、アンタがこれ以上アタシの邪魔をするってんなら話は別だけど」

絶対零度だった。

魔術のプロでもなんでもないただの高校生である上条は、その言

葉に喉が干上がるような錯覚をおぼえた。指先がしびれ、この場から逃げ出したいという欲求が彼の体を支配する。

魔女はそんな上条の様子に満足そうに目を細め、

「そう。それでいい。アンタが何のために動いたかしらないけど、わざわざ自分の命を投げ打ってまですることじゃないだろう？　吸血殺し（ディープブラッド）を守るために動いてるのかもしれないが、そもそもアンタに命を懸けて助ける義理なんざないはずさ。そこで止まっててくれればそれでいい。無駄な犠牲は出したくないしね」

さっきまでとは打って変わった、粗暴ではあるが優しい声色で、魔女は上条を諭す。

上条は、

「――はは、そうだよな」

馬鹿らしいものを目にしたかのように、苦笑してうつむく。その表情は、魔女からは読み取れないが、きっと自分の無力さを痛感した表情なのだとあたりをつけた。魔女の表情に、嫌なモノを見てしまったときの嫌悪感――いや、罪悪感のようなものが浮かぶ。

「確かに、命をかけてまで助けてやる義理なんかねえ。最初に会ったのは食い倒れてるアイツを見つけたときだったし、その後も特に何かがあるわけじゃなかった。ただ命を助けたっていうだけで、それ以外何の接点もない。あの時だってそれで腕を切り落とされたんだ。これ以上、命を懸けて何かをするような義理のある人間じゃねえ」

上条はそこまで言って顔を上げる。

「――その通りだよ」

その表情に、絶望などなかった。

「助ける義理なんかねえよ。アイツとはまだ知り合って何日も経ってないし、俺はアイツの好きなモンも知らねえ。でもな。それが『助けない』理由になんかならねえ！　黙ってたら殺されるっていう女の子の為に立ち上がらない理由になんかならねえんだよ！！」

ただただ、純粋な戦意だけがその双眸に灯っていた。

「……」

魔女は信じられないものでも見たような表情のまま上条の言葉を黙って聞いている。その態度から、自分が絶対に姫神を見捨てるとでも思われていたと悟った上条はどこからか沸いてくる怒りのままに目を剥く。

「見くびってんじゃねえぞ魔術師！　テメェが何のために姫神を狙ってるのかなんて知らねえ。誰かを助ける為かもしれないし、自分の為かもしれない。だがな、それが姫神の命を狙って良い理由になんかなんねえんだ。もしもテメェがそれでも姫神を狙うって言うんなら――――」

上条は握り締めた自らの握りこぶしに目を落す。この手に宿る力は、誰かを救う力さえも消してしまう厄介な力だ。

でも、だからこそ。

「まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！！」

自分の大切な誰かを脅かす力くらい、消してしまってやりたいのだ。

01（後書き）

魔術サイド（オリジナル）は、本編にあんまり関連しないのを良いことに好き放題しています。

02

「……悪かったよ」

魔女は、神妙な面持ちで上条に頭を下げた。そのあまりに素直な反応に、上条は思わず眉を顰めて怪訝な表情を浮かべる。対する魔女は、そんな上条にも気にすることなく言葉を続けた。

「アンタが、そんな覚悟を持ってアタシに挑んでるなんて、思いもしなかった。精精、知り合いが殺されるのを黙ってみてるのは後味が悪いからとか、そういう理由で挑んできてるモンだとばかり思ってた。それを悪いっていうつもりはないけど、『その程度の覚悟しかないんだ』って無意識に見くびってたのかもしんないね」

そう言って贖罪するような魔女の声は、今まで上条が聞いた魔女の声の中でも一番優しい、穏やかな色を持っているように思えた。

「――『ｃｕｐｉｄｉｔａｓ６１６』」

「……魔法、名」

魔女の呟いた言葉に、上条はボソリと返した。魔女は意外そうな表情をしながらも確かに頷く。

「何さ。魔術に疎いのかと思ったら、随分詳しいじゃないか。そう、魔法名さ。意味は『欲ある限り翼は潰えず』ってとこか。まあ、なんだ。魔女の信条って奴さね。アタシにとって重要なのは言葉じゃなくて数字だけど」

本来魔法名で重要となる『言葉』の意味ではなく、本来『魔法名

が重複しないように』という目的でつけられている数字の方が気に入っている、という魔女の言葉に、上条は少し引っかかるものを感じながらも臨戦態勢に入った。

――上条の『知識』は言っている。魔法名は、名乗る者によっては『殺し名』としての役割も持つ、と。目の前の『魔女』、彼女が魔法名を、どういうつもりで名乗っているかなど、火を見るよりも明らかだった。

そして、魔女が名乗ってからの戦況の変貌は凄まじかった。

「ダーンの秘宝の一は五つ又の槍！　顕現せよ貫くもの（ファンジアス）！」

ゴバッ！！　と、魔女の右手の指先から放たれた質量さえ伴っていると思わせるほどに膨大な量を持つ五条の光が、上条を襲う。咄嗟に右手で防ごうとした上条は、背筋に冷たいものが走るのを感じてその場に留まろうとした筋肉に鞭を打ち、後ろに飛ぶ。

すると貫くもの（ファンジアス）と呼ばれた五条の光（レーザー）は、急にその軌道を変えて今まで上条が居たところにピンポイントで襲い掛かった。

「な……操作！？」

「正解。正確には元々の性能である自動追尾機能に細工してアタシがある程度その動きを操作できるようにしてるだけだけどね」

魔女は未だに光の残滓が残る指先を再度上条に向ける。

「チッ！！　指先からレーザーとかどう考えても科学の領分だろうが！！」

「行き過ぎた科学は魔法みたいなモンだってよく言うだろ！　その逆に行き過ぎた魔術もまた科学みたいなモンなのさ！」

「クソッタレ！　デタラメすぎんぞその理屈！！」

上条が魔女に背を向け全速力で疾走した瞬間、魔女の指先からレーザーが放たれる。

（マズイ……。どう考えてもあのレーザーの方が速い！？　このままだと……！！）

背を向けた上条に、五条の光が直撃、どころか貫通、上条デッドエンドコースまっしぐらである。

「――くっ！！」

舌打ちをしながら、苦し紛れにそのへんに落ちていたゴミを後ろ足で蹴り飛ばし、レーザーにぶつける。レーザーの類であれば、こうやれば一緒に巻き上げた砂埃による光の屈折の影響で曲がりし、その操作に相手が意識を割いた隙を突いて逃げることができた――のだが。

ボガァ！！　という音と共に、後ろ足で蹴り上げた空き缶は吹っ飛ばされ上条の頭に激突した。その衝撃で、上条は転倒してしまう。

（まずっ……死ん――）

無駄と知りつつ、上条は地面を転がり右腕を前に突き出す。当然、レーザーは上条がこけたことを感知したのか狙いを下方修正して飛んでいく。もう駄目か――と上条は目を瞑るが、何時まで経っても上条の体に激痛は走らない。

「……な、んだ？」

おそるおそる目を開けると、レーザーは確かに上条の頭上に残っ

ていた。それどころか、上条の頭上で急降下さえしている。しかし、それらは上条の眉間ではなく、上条のツンツン頭を少しだけ貫く形で地面に突き刺さっていた。

光り輝く線は地面に突き刺さっても尚存在しており、しかし一度動いたその軌跡を変更することはできないらしく、それ以上の動きは見せない。

（もしかして、レーザーの自動操縦機能を俺の右手が打ち消したとか……？）

貫かれた上条の髪の毛も特にこげていると言う様子はない。すぐさま右手で地面に突き刺さっていた光を打ち消すと、起き上がり走り出す。そのとき、上条の視界の端に先ほど貫かれたと思しき空き缶が目に入った。

（……？　あの空き缶、溶けてすらいない？　そういえばさっきも光の屈折はおきなかったし、貫かれた俺の髪の毛も焦げてない。一体、どういうことだ？）

「……チッ、自動操縦機能をその右手で打ち消したか。悪運の強い奴だね。でも、次はそうは行かないよ！」

考えている暇もなかった。さらに出てきたレーザーに対して素早く右腕を振って、先ほどと同じように自動操縦を解除し逃走する。

（よく考えれば、当然なことだったんだ）

全力で走りながら、上条は考える。

（速いレーザーを撃つってところに気を取られてたけど、本当に重要なのはそこじゃなかったんだ。自動操縦オンリーなら、学園都市

で開発されてる簡易ＡＩみたいに予想外の行動に対しては対応できるわけがない。つまり、あのレーザーの異様な追尾は学園都市風に説明するなら自動操縦による対象の選別と、手動操作を組み合わせたモン……って感じか？）

おそらく、その推測は合ってるだろうと上条は考えた。でなければ、不意に転んでしまった自分にレーザーの軌跡が対応できなかった理由がなくなる。

敵の魔女が、まさか温情で自分を生かしたなどというほど甘い相手だとも思えなかった。まして殺し名を名乗っているのだからなおさらだ。

（……とはいえ！）

上条はレーザーを限界まで引き付け、自分の心臓目掛けピンポイントで突っ込んできたところを幻想殺し（イマジンブレイカー）で一網打尽にする。

「畜生！　このままじゃ埒が明かねえ！」

叫びながら、上条は携帯を取り出して番号を入力していく。入力するのは、上条の自宅の電話番号。

（……インデックスなら、相手の魔術師の弱点が分かるかもしれない！）

ピッ、という電子音と同時に、コールが鳴る。一回、二回、三回、四回……出ない。やがて、プツッ、という音の後に感情のない平坦な女性の声が流れる。

『ただいま留守にしております。ピーッという発信音の後、』

「テメェインデックス！　そこにいんのは分かってんだよ！　いいから受話器とってくれじゃないと俺死ぬぅぅ――――っ！！」
『もしもし！？　とうま！？』
上条の力ない叫びが聞こえた直後、インデックスの声が受話器越しに聞こえた。
「遅ェ！　何してやがった！」
『だ、だって……「でんわ」の使い方なんてわかんないんだよ？』
「……まあいい！　とにかく質問だインデックス！　答えてくれないと正直俺の命がマズい！」
そう前置きして、上条は話し始めた。インデックスに無用なプレッシャーをかけるのはよくない、と思ったが、そうも言ってられない状況だった。
「――というエロい魔女なお姉さんなんだが！」
相手の外見やレーザー、毒々しい強酸（？）の黒蛇のことなどを説明するとインデックスは興味深そうに頷いて（尤も、音声なので想像だが）、
『……その魔術師はおそらく、「魔女」だね』
「んなこと分かってるっつーの！！」
すかさずツッコミを入れる上条に、インデックスは呆れて溜息をつく。
『いいから聞いて。その人の使っているのは、「魔女術（ウィッチクラフト）」っていう、「魔女」独特の魔術なの。「魔女」っていうのは、童話とかで悪い

人っていうイメージが浸透してるけど、実際は別。十字教以前の多神教の神々を崇拝していた人たちが、十字教の伝来によって崇拝していた神が「悪魔」扱いされて悪者扱いされてしまっただけ。だから、悪魔崇拝というよりはむしろ自然崇拝。本来は魔術師と言うよりも「巫女」としての側面の方が強いんだよ』

「それが一体どう関わってくるって言うんだ!?」

焦りながら聞き返す上条。とそのとき、上条の頬をレーザーが掠めた。自動操縦機能を破壊していなければ直撃しているところだ。

『そして、魔女っていうのは自らの信仰する「主神」を二柱定めているの。つまり、自分に力を貸してくれる神様を二人用意してるってわけだね。もう、この手法の魔女術（ウィッチクラフト）は廃れていたはずなんだけど……。多分その魔女は「ガードナー」の系譜の魔女なんだね』

「良いから結論を早く！　さっきからレーザーが俺を、俺を!!」

結論を急かす上条に、インデックスは辟易したような溜息を漏らし、

『まったく、とうまはせっかちなんだよ！　こういうのは前説明が大事なんだよ？　……まあ、話を聞く限りだとその魔女は相当の手練だね。朝話した魔女の行う「裸の儀式」、とうまは覚えてる？』

「ああ、一応」

『とうまの話だとその魔女は、「不自然にあいた胸元」で心臓を、「乳房の下端が見えるタンクトップとずり下げたスカート」と「深いスリットとオーバーニーソックス」で臀部と下腹部……つまり子宮を強調しているんだね。それだけじゃなく、十字教において悪魔の数字とされている「６１６」を魔法名の数字に組み込むことで十字教における悪魔――多神教の神々の恩恵を受けやすい環境を整えて、普段なら下準備が必要な大魔術を速攻で使ってるんだね』

インデックスはそこで一息入れ、

『とうまの戦ってる魔術師は、「ダヌ」っていう女神様と「ヘル」っていう女神様の二柱を信仰してる魔女かも。「ダヌ」はケルト神話における「ダーン神族」っていう神様の一族の一番のお母さんみたいな神様で、主に川を司ってる。多分、そこからの派生で水の発生や水の操作なんかを行ってるんだと思う。次に、「ヘル」っていうのは北欧神話の地獄（ヘルヘイム）を治める女神様のことだね。とうまが最初に打ち消しちゃったらしい「隠匿術式」っていうのも、「ヘル」の「目立ったエピソードがなく、最終戦争（ラグナロク）のときにも襲撃を免れた」っていう特性の少なさ……いわば「影の薄さ」を逆手に取った認識阻害の術式みたいだし。さっき言ってた「ニーズヘッグ」も地獄（ヘルヘイム）に棲む蛇のことで、「ヘル」の持つ数少ない特性のうちの一つ「地獄（ヘルヘイム）の長」という属性を応用した術式なんだと思うよ』

「んで、俺は具体的に何すればいいっつーんだよ！！」

そこまでインデックスの長台詞を聞いていた上条は、話が切れた瞬間を見計らって叫ぶ。

先ほどから上条を掠めるレーザーの数は多くなるばかり。何度か右手で打ち消しているものの、そのたび自動操縦も打ち消さなくてはならないから大変だ。

『あんまり焦らないで欲しいかも。さっきも言ったように、「魔女」っていうのはその信仰――いわば自分の魂自身を霊装代わりにしてるから、特別な霊装を持ってたり、それを制御する為の機構なんてないと思う。でも、それにしたって「ヘル」や「ダヌ」みたいな凄い女神様の術式は、それだけで大魔術扱いで、使う魔力だって相当なモノになっているはずなんだよ。必ず、何かで魔力を補給しているはず。例えばさっき言ってた服装とか、』

「上条さんにうら若き女性の服を剥けと!?」
『そんなこと言ってないかも!!　っていうかとうまはいつもいつもいつも何だかんだ言って女の人の服を剥いてるじゃん!!　最悪今回はその女の人がとうまの犠牲になるだけなんだからあんまり問題ないかも!!　とうまのエッチ!　スケベー!　もうしらないっ!!』

『だーっ!!　インデックスさんゴメンナサイー!!』と必死こいて純白シスターの機嫌を取り始めた上条を、さらなるレーザーが襲い掛かる。

「うわっ、とッ!　悪かった、悪かったインデックス!　もう冗談言わな、うおお!」
『……冗談だったの?　私は真面目な話をしてたのに、とうまは冗談を言っていたというのかな!?』
「だーもうコイツめんどくせーな!　うわだだだッ!　とにかくインデックス!　何か策はないのか!?」

少し間をおいて冷静になったインデックスは、少しだけ沈黙していたが、

『……とりあえず。服装や数字で環境を整えたからと言って、それだけで魔力が充填されるはずはないんだよ。この魔術師(ヒト)……川と蛇を対応させてるところといい、服装で儀式を行うところと良い……どこか天草式の匂いがするから……。――もしかしたら……!
……普通、魔女術(ウィッチクラフト)の為の儀式は「一三人」で行うものなんだよ!
なくても問題ないけど、効率はそれだけ悪くなる!　それがないってことは……この魔術師(ヒト)のやり方から言って、行動のどこかに「一三」を織り込んでる可能性が高いかも!とうまとうま、相手の魔女の動作に何か「一三」が含まれてるものって、ない!?』

「じゅ、一三っていきなり言われても……！」

上条は、遠くからレーザーを撃ちつつ走ってくる魔女の方を見る。歩調も一三は関係なさそうだし、レーザーを撃っていない左手の動きも普通だ。瞬きの回数も数えてみたがばらばら、とくに法則性は見つからなかった。

（一体……）

と、そこまで考えた時、上条は気がついた。

（――そういえば、どうして俺はこんなに思考する余裕があるんだ？）

あともう少しで考えがまとまりそうだと考えた上条だが、その思考はレーザーによる追撃によって中断させられる。上条は先ほどと同じように集まった五条の光を右手で打ち消す。当然、タイミングは学習されないように毎度毎度変えている。

そして、次のレーザーに備えるが……少しばかり間がある。

（何だ、この『間』？　一体何があるっていうんだ……？）

しかし、思考をまとめているほどの間もない。次にきたレーザーを打ち消そうとする上条だが、

「ぐああ！？」

レーザーのうちの一本を打ち消し損ねてしまったようで、腰を掠めてしまう。熱さと痛みで、もう先ほどのような動きはできなくなった。

（ま、マズイマズイマズイ！　どうすりゃ……）

『とうま、「呼吸」だよ！』

最早打つ手なしかと思われた上条の耳に、インデックスの助言が入った。

『呼吸しかないんだよ！　呼吸っていうのは生命の象徴、「心臓と子宮」っていう、生命の象徴を用いた「裸の儀式」を使うんなら、一番相性の良い要素は「呼吸」による簡易儀式による「生命」の象徴の増幅効果なんだよ！』

（呼吸――！！）

正しく数えては居ないが、魔女はさっきレーザーを撃ってからまだ数呼吸程度しかしていないはずだった。上条と魔女の彼我の距離は、五メートル前後。

「――行ける！　うォォおおおおおッ！！」

腰の痛みを堪え、渾身の勢いで飛び掛る上条に、しかし魔女はにやりと笑みを見せる。

「……アタシが、この魔女王（ウィッチクイーン）が、その手を予想してなかったとでも思うのかい？」

魔女は飛び掛る上条を前に一歩下がり、

「馬鹿だね！　確かに『二柱の術式』には莫大な魔力が必要になるが、魔女ってのは『二柱』を定めるだけで別に他の神を否定してるわけじゃないんだ！他にも神様はいて、魔女は『二柱』ほどじゃな

いにしたって他の神様の力を借りることだってできるんだよ！！
吹っ飛びな！
ＳＯＷ！！
（風の精よ！！）」

轟！！　という音と同時、明らかに自然ではない突風が上条を襲う。しかし、上条は全速前進の姿勢を崩さないまま不敵に笑う。

「テメェこそ、こうは思わなかったのかよ……」

グン、と右腕を振りかぶる。ここに至って、魔女はハッとした。

「そんな魔術（モン）、俺には通用しないってなあ！！」

パキィン！　という音が響くが、上条はそのまま突き出した右腕をさらに引く。魔女は右手の五指を突き出したまま後方に下がろうとするが、間に合わない。

「遅ェぜ魔女――テメェの幻想はもう俺の掌の上だ！！」

頬に上条の右手がめり込み、そのまま魔女はノーバウンドで数メートル吹っ飛ばされる。

「――ハァッ、ハァッ、ハァッ、やったぞ、チクショウ」

転がったまま動かない魔女を見て、上条はふっと安心して俄かに体の力を抜き、魔女を殴った右手でそのままガッツポーズを取った。そう、彼はこれでとりあえず危機は去ったと思ったのだ。炎の魔術師や吸血鬼はいるが、魔女は倒せた。

この分だと、他の二人も単独行動をとっているのかもしれない。

これなら、上条一人でも（大変だが）何とかなる。そう思った。

倒れ伏している魔女が、余裕なさげに口元を笑みの形にゆがめているとも知らず。

「――――フレッドォ！！　さっさとこっちに来い！！　緊急事態（エマージェンシー）だッ！！」

『……分かった』

突如大声を出した魔女に、上条は驚きの色を以って視線を向ける。そこにいた魔女は、口端から血を流し、端正な顔を若干腫れさせながらも、不敵な笑みを浮かべながら右手に札のような霊装を持っていた。

不敵な笑みを口端に貼り付けさせた魔女はフラフラと立ち上がりながら、もう立ってるのもやっとな様相で、それでも上条を見下すように睨み付ける。まだ、心は死んでいないとでも言いたげに。

「まだだ、まだ終わってない……！　こんなとこで、蹲いてなんかいられないんだよ……ッ！　来いよ超能力者！　アタシはまだ戦える！！」

そんな魔女を見て、上条は拳を握り締める。

まだ、戦いは終わっていない。

03

「何でだよ……」

震える足を押さえつけ、それでも牙を向こうとする魔女を前に、上条は俯いたまま声を震わせて呟いた。

「何でだよ、どうしてそこまで本気になれるっていうのに、そこまでなりふり構わず戦えるっていうのに、その力を『姫神を殺すこと』に回しちまうんだよ！　テメェが何のために姫神を狙ってるのかなんて知らねえよ！　でもな、姫神がテメェに恨まれるようなことをしたのかよ！？　違うだろうが！　テメェは何か違う目的の為に姫神を殺そうとしてる！　ならどうして、『姫神を殺すこと』以外の方法を考えられねえんだよ！」

それは、言いようのない不条理だった。

目の前の女性が、私欲から姫神の命を狙っているわけではないことは、上条もうすうす分かっていた。上条のことをなるべく殺したくないというような言葉も漏らしていたし、敵である自分にも敬意を払う姿勢は、とても悪人とは思えない。

多分、根は善人なのだろう、と上条は思う。しかし、それだけに納得が行かなかった。それだけに許せなかった。

そんな善人なのなら、どうしてここで道を間違えてしまったのか、と。

どうして自らの目的に、他人の犠牲を組み込んでしまったのだろうか、と。

「もしかしたら、テメェは姫神を殺すことで世界を救おうとしてる

のかもしれねえ。姫神を殺すことでたくさんの人が笑顔になれるのかも知れねえ。だが、たとえそうだとしてもそれは『何の罪もない一人の女の子の犠牲』の上に成り立っちまってる時点で許されることじゃねえんだよ！！　そんなことで、救われた人間が本当に幸せになれるとでも――、」

「うっせェんだよ！！　何もしらねえくせにグダグダ文句言ってんじゃねェ！！」

上条の説得に、魔女はなりふり構わず吼えた。その目は猛獣のように獰猛な光を宿し、牙を剥くように息を荒げている。一言吼えた魔女は、荒げた息を静かに落ち着けて口を開く。

「……なあアンタ。たとえ話をしようじゃないか。もしも自分の大事な人が、当人の意思に関係なく無理やり自殺を強要させられてるとして、その自殺をやめさせるには別の誰かを殺すしかないとしたら、アンタはどうする？」

魔女の声色は、何かに疲れたように弱っていた。魔女の言葉の意味を測りかねている上条に、魔女はさらに言葉を続ける。

「殺すしか、ないだろ。自分の大切な人を守るためなら。もしもその後で、大切な人から軽蔑されたとしても。もう二度と昔の関係に戻れないとしても。それでも、大切な人を助けるしかないだろ。名前も知らない誰かを殺すしかないだろ。失うのが嫌なら……！」

それだけで、上条は理解してしまった。いや、上条の中で何かが繋がった、と言うべきか。

『その血に触れた吸血鬼を灰に還す「吸血殺し（ディープブラッド）」』。

『三人の魔術師。魔女に、炎の魔術師に、吸血鬼』。

『無理やり自殺を強要させられている、大切な人』。

それら全てが意味する、『とある事実』。

（コイツ……、コイツの言う『あの子』って、まさか……）

あの事件の折、上条は姫神から聞いたことがあった。彼女の出自を。昔、彼女は大量の吸血鬼を『殺して』しまったことがあると言った。何人かの吸血鬼が彼女の住んでいたところを襲い、住人たちはすべて吸血鬼になってしまい、そしてすべて灰になったと言った。そんな住人は勿論、すべての元凶である吸血鬼でさえも、姫神は『救いたかった』と言った。

そんな不条理を打ち砕く為に、魔法使いになりたいと言った。

そんな想いが、まさかこんな形で踏みにじられるなんて。

（せっかく。せっかく、救われるかもしれないっていうのに……。イギリス清教の力で、能力を封印して吸血鬼を呼び寄せなくても済むようになりそうだったっていうのに……）

何も、このタイミングでなくてもいいじゃないか、と上条は心の中で叫んだ。そうすれば、この哀れな魔女が大切な人の為にこんな残酷な決断をしなくても済んだと言うのに。こんな残酷な覚悟を決めなくても良かったと言うのに。

「それでも、やっぱり駄目だ。尚更、許せない。あんたが、その『大切な人』っていうのの為に、そんな悲しい覚悟をしてるっていうなら、尚更。そんな悲しい最悪（バッドエンド）の失敗を迎えさせるわけには、いか

ない」
「じゃあどうしろってんだよ！　アタシたちはもう、後戻りできねぇんだ！　あの子を救うには、こうするしかねェっつってんだよォ！！」
「そんなこと、」
「茶番は終わらせろ、ドロシー」
と、問答を繰り広げていた魔女と上条の間に男の声が聞こえた。言葉のイントネーションが通常とはズレているような、そんな不思議な口調だった。
「――っ！？」
弾かれたように声のした方を向くと、そこには顔全体に葉脈のような刺青を施した長身の男の姿があった。刺青は男の纏っている黒いローブまで続いており、袖の先から見える無骨な手にも同じような刺青があることから、全身に刺青が彫られているだろうことが分かる。男の顔つきは彫が深く、髪型も金と銀が混じった奇妙な形であり、まるで彼が異世界の住人であるような錯覚を抱かせていた。
男は感情を感じさせない表情で上条と疲弊している魔女――ドロシーを交互に見て、呆れたように嘆息する。
「だから、『敵』と会話するなと最初に念を押していたじゃあないか……。ただでさえ最近のお前はカインの影響を受けすぎているんだからな」
そう呟いた男は、上条のほうへ視線を送る。先ほどまでのドロシーとは真逆の、人間味のない男の言動に、上条は体を強張らせる。
「ドロシーが世話になったな……。俺の名はフレッド＝ゲティング

ス。貴様にやられた魔術師、ステイル＝マグヌスと同様炎を扱うルーンの魔術師だ」

「お前……、お前がステイルの言ってた『炎の魔術師』か」

額に汗を滲ませ、敵意の炎を瞳に宿して問いかける上条にフレッドは静かに笑い、

「いかにも。俺が『炎の魔術師』だ」

「ああ、そうかよ……！！」

悠々としているフレッドのことを待つ義理など上条にはない。呪文を唱えられる前に殴り飛ばそう、と考え相手の懐に飛び込んでいく。しかし、フレッドはそれでも気にした様子もなく笑って、

「無駄だ。――『君臨する炎（サラマンダー）』」

フレッドがそう言い放った瞬間、彼の体に刻まれた刺青が輝き、体から熱気があふれ出るように現れそして彼の傍らに像を結ぶ。サラマンダーとは炎の中に棲む蜥蜴のような姿をした精霊……といわれているが、彼の傍らに現れた『サラマンダー』は違っていた。頭部こそ蜥蜴のようであるが、胴体は屈強な男そのものであり、さながら『蜥蜴人間（リザードマン）』のようだった。噴出す炎の轟音は、竜の慟哭のようにさえ聞こえる。

生み出された『君臨する炎（サラマンダー）』はフレッドの体を離れ、上条の拳に対し自らの腕をクロスさせ防御しようとするが――、案の定パキィン！　という音を響かせて『君臨する炎（サラマンダー）』は破壊された。

「――！　俺の能力も打ち消すか。だが……まだ足りないな」

フレッドの体に刻まれた葉脈のような刺青が生き物が蠢くように輝いた次の瞬間、ゴオ！　という音と共に先ほどと同じ『君臨する炎（サラマンダー）』がフレッドの背後から現れる。

「な……自動再生？」

「その通り（イグザクトリー）。術式の元である俺を倒さない限り、この術式は終わらないぞ。さあ、」

「くははっ」

それを聞いて、上条は思わず不敵に笑ってしまった。

「自動で炎の人形を生み出す魔術なら俺も知ってるよ。魔女狩り（イノケンティ）の王（ウス）。だが、あれにだっていくつか弱点はあったんだ。たとえば術式のためのルーンを潰しちまえば魔術全体が成立しなくなる、とかな。見たところ、テメェの魔術の発動にはその光ってる『刺青』が関係してるんじゃないか？　だとしたら、俺がテメェを殴っちまえばそれでオシマイだ。その点じゃ、テメェの魔術はステイルよりも格下だ――――！！」

右拳を構え、走りこむ上条。しかし、肉薄が致命的な展開を生むフレッドは依然無表情を貫きながら、

「――格下とは言ってくれるな」

轟！　という音と共に一陣の風が上条を吹き飛ばした。

「ぐがっ！？　な……」

「『魔女狩りの王（イノケンティウス）』とこの『君臨する炎（サラマンダー）』を同じにするんじゃあない。アレとコレでは方向性からして違う。　アレは重油と炎、ルーンと十字教の組み合わせだがコレは炎のみ、単なるルーンの魔術。

当然、純粋な炎の属性なのだから『炎は熱風を生む』といったように他の属性との複合属性を経由することで複数の属性を操ることも容易、というわけだ」

そう言ってフレッドは『君臨する炎（サラマンダー）』に手を掲げさせ、その掌の上で風を回す。掌に使われている炎が少しだけ削れて風を形作っているため、上条からもその様子が見えた。

「さて、貴様がいきなり殴りかかってくれたから中断してしまったが、一度拳を下ろして話を聞いてもらおうか。一応、今のところ俺に害意はない」

肩を竦めて『君臨する炎（サラマンダー）』を消し去ったフレッドに、上条とドロシー、二人の驚愕の声が重なる。

「どうして攻撃をやめた？」

「通信用霊装は生きていたからな。こちらの状況を聞かせてもらいながらこっちに向かっていたというわけだ。お陰で互いの目的はお前たちよりも理解しているつもりだが」

「な、何やってんだバカ！　テメェフレッド、もしかして裏切るつもりか――！？」

「それこそまさかだ、このアホが。この状況、このままこいつとの戦闘に拘泥してカインの生存確率を下げることよりも、百歩譲って『姫神の殺害』を諦めてカインの救出に回ったほうがよっぽど有益だということにどうして気付けない？」

そこにきて初めて『苛立ち』と言う形で感情を露にしたフレッドの言葉に、ドロシーは思わず二の句を次げなくなる。ドロシーが矛を収めたのを確認したフレッドは溜息をついて、

「……ともあれ、随分と時間をロスしてしまったのは確かだ。超能力者、お前にも協力してもらうが構わないな？　誰かを殺すのではなく――俺たちの大切な友人を助けるために」

上条は一寸の戸惑いもなく首肯する。

「ドロシー。お前、さっき言ってたよな。『大切な人を助けるために他の誰かを殺さなくちゃいけないってときには、他の誰かを殺すしかない』、ってさ」

言いながら、上条も同じ状況を想像する。もし自分だったら。あの白い修道服の少女を助けるために、他の名前も知らない誰かを殺さなくてはいけないとしたら。上条は、悩みなどしなかった。答えなど、とうの昔に出ている。

「答えなんざ決まってんだろ。『誰かを殺さなくちゃ大切なモノさえ救えない』なんてふざけた幻想――欠片も残さずぶち殺してやるだけだ」

＊＊＊

「で、結局その『姫神』という少女はどこにいるんだ？」

「……分からない……」

十数分後、上条たちは霧が丘女学院の女子寮受付で途方に暮れていた。『隠匿術式』の応用により『都合の悪い情報に関する違和感や手続きを相手に認識させない』ことでスムーズに受付作業を終え、姫神の所在を聞くことに成功したドロシーだが、当の姫神は『外出中』とのことで、現在の消息はつかめていないのが現状だった。

「チッ……。後手に回るのは気に入らないが、カインを追跡したほうが早そうだね」

そういって、ドロシーは懐から『赤い液体』を取り出した。

「……それは？」

怪訝な表情を浮かべる上条に、ドロシーはなんでもないように『赤い液体』の入ったビンを揺らし、

「『羊飼（アベル）の血』、さ。アベルの血が神話のカインを断罪した伝承を元に、『カインの末裔』であるカインの血液から作ったカイン専用の捜索霊装って奴さね。アイツは昔っから目を離した隙にすぐ消えちまう厄介な子だったからね……。この手の霊装は必須だったって訳さ」

どこか懐かしそうに笑うドロシーに、「まるで子離れできない親じゃねえか」と心の中でツッコミを入れた上条は、しかし次に「笑えない喩えだな」と思い直した。現に、この『子離れできない親』は『子供』を守るために赤の他人を殺す覚悟まで決めていたのだ。とても、軽々しく茶々を入れられる感情ではない。

「この血は磁石に吸い寄せられるようにカインのいる方向を示してくれるからね。そこから位置を把握するんだ。……これによると……どうやら、カインはここから西の方角で立ち往生してるみたいだね」

「分かった。じゃあ西に行けばいいわけ、」

そう言って既に日が高く上りつつある東に背を向けた上条は、そこでポケットの中に入っている携帯が振動していることに気がついた。二人に断って携帯を取り出すと、その番号はステイルのものだった。

「もしもし、ステイルか？　どうした？　コッチは何とか『魔女』と『炎の魔術師』を味方につけたけど」

『「味方」？　……はぁ、全く君はいつも常識外れな行動を取ってくれるね。まあいい。僕は今イギリスを発ったところだ。後数分で学園都市の第二三学区に到着するから、早いところ君達も姫神秋沙の確保に乗り出してくれ』

「ああ、それはいいんだけどさ……」

上条は気まずそうに頭をかき、

「いやさ。俺たち、その姫神の現在地がよく分かってねーんだ。今も手探りでさ。ステイル、何かしらの方法で分かったりしない？」

『はぁ？　君たち、電話番号も交換してないっていうのかい？　……いや、君にそんな心遣いを求めるほうが馬鹿だったな。……僕が『念には念を入れるタイプ』で良かったね。姫神秋沙はこちらのほうで手を回して『第二二学区』の温泉スパに行ってもらっている。その方が変に動かれるよりも僕としては動向をつかめて好都合だからね。君たちも、そっちの方に向かうといい』

「ああ、分かった。ありがとな、ステイル」

『……君に礼を言われる筋合いはない』

憎まれ口を叩きながら、ステイルは通話を切った。その態度に上条は苦笑しながら、ドロシーたちに向き直る。

「聞いたか？　それじゃこれから、二二学区に行くぞ」

「了解」

「分かったよ」

そう言って走りはじめかけた三人だったが、直後に上条が声を発した。

「ちょっと待て。そういえば、お前らの仲間の『カイン』って奴、いったいどういう奴なんだ？」

思わず肩透かしを食らうドロシーとフレッドだが、ドロシーの返事は早かった。

「いい子だよ」

「いや、そうじゃなくて……。性格とか、どういう魔術を使うのかとか。あと、吸血殺し（ディープブラッド）の影響もあるんだったら」

呆れながら付け加える上条に、ドロシーの表情が曇った。これは答えづらいことだったのかと思う上条をよそに、代わりにフレッドが返答した。

「性格については今回考える必要はない。吸血殺し（ディープブラッド）の影響で現在カインの自我は殆ど壊滅状態だからな。言葉にならない声を呻いている程度のものだろう。……だからこそ、一刻も早く救ってやりたいんだがな」

拳を握り締めるフレッドに、上条は無言で頷く。

「魔術については、お前に言ってもわからないと思うが……まあ、気をつけるべきは『神罰術式』だ。原理は話すと長くなるが……簡単に説明すれば、『御伽噺の吸血鬼になる』、といったところか」

「な、なんだそれ……？」

「正確には、『負の聖人』となるといっても良い話だが……これは今は捨て置くとしよう。強大な力と強大な再生能力を持つ、とでも思っておけば良い。だが、その引き換えとして『炎』と『光』の持つ魔術的意味に極端に弱くなる。……ただし、あの状態のカインは正直洒落にならない。俺も一応炎の魔術師だが、あまりあてにはしないでもらいたい」

あれほどの力を持つフレッドが、こんなにも弱気になるほどの力量。それについて考えて、上条は背筋が薄ら寒くなる思いがした。

「あとは『北欧猛獣（グレンデル）』という術式があるが……まあ、これに関しては気にしなくても良い。パワーは侮れないが、それだけだ。アレは素手での攻撃にはめっぽう弱い仕様だし、そうでなくともお前の能力ならば触れればオシマイだ。それに、そもそも今のアイツの精神状態で『北欧猛獣（グレンデル）』を御しきれるとは思えないしな」

意味深なことを言って笑うフレッドに上条は怪訝な表情を浮かべるが、当のフレッドはこれ以上答えるつもりはないらしかった。

＊＊＊

第二二学区。

そこは学園都市の地下に存在する最小面積学区。円筒型の地下階層は全部で一〇の区画に分かれており、下層部は丸ごと核シェルターになっている。地下へいたる道路は直系二キロの外周を這うようにらせん状になっており、上り・下りの車線をあわせると理髪店のポールのように見える。

各階層の天井部は地上のカメラが撮影した『空』をリアルタイムで映し出すプラネタリウムのスクリーンになっており、町の照明も同じ色で統一されているため、地下にいるからといって時間感覚が乱れない辺り、学生への配慮もきちんと為されている。

また、換気や排水などにまかなわれる電力には地下であり風力発電があまり使えない関係上、人工の川を造り水力発電をすることでまかなわれている。これにより水栽培技術の応用で作られた森や川など、科学の街学園都市の、技術の結晶の一つともいえる地下空間であるにも関わらず一昔前の片田舎的空気を感じる学区だった。

ちなみに、上条がいるのは地下九〇メートル、第三階層にあるとある温泉施設である。

「ここだな……。にしても、スティルの奴どうやって姫神に温泉行かせたんだろ？」

「どうせ統括理事長と何かキナくさい取引でもしてたんだろうよ。それよりもまず、行くよ。カインだってそうもたもたしてもいないはずなんだ。早く行かないとコッチが準備する前にカインが到着し

ちまうよ」
「……！　分かった！」
その言葉に慌てた上条は、さっさと走ってしまう。
（もう、ここまで来たんだ！　後は姫神と合流しちまえば後は問題ねえ！　あとはステイルがこっちに合流するまで待てば……！）
頭の中で幸せな結末（ハッピーエンド）を夢想しながら、上条は暖簾をくぐる。先ほど温泉に入る際、此処が混浴であることは聞いていた上条だったので、男性用脱衣室から入っても姫神と合流できるだろうことは分かっていた。
しかし、そこで終わらないのが上条の良い所である。
「あっ、お客さん、そこ女性用脱衣室ですよー」
「――え？」
直前まで思考をめぐらせていたためか、はたまた急ぎに急いでいたため無意識に体が姫神に近いだろう女性用脱衣所に向かったのか。ともかく、次の瞬間上条の目の前に広がっていたのは桃源郷だった。
「……上条くん。一体。どうしてここに」
奇しくも、上条の存在に一番に気が付いたのは一糸纏わぬ姿でタオルを使い体に付いた水気を落としていた姫神秋沙だった。

＊＊＊

「……というわけで、姫神さんを確保したわけなのでせうが……」

数分後、まだ戦闘が始まったわけでもないのに既に満身創痍な上条当麻がそこにいた。現在地は、先ほどの人工温泉スパから少し離れた、二二学区に無数に存在する川の上に架かった橋の上である。

脱衣所にてどういうことが起こったのか、詳しく書くまでもないが――ただ、桃源郷にたどり着いた代償は大きかった、とだけ言っておこう。学園都市の女性は意外と気が強いのである。

「アハハハハ！　ホント、アンタって奴は面白いねェ！　女性用更衣室に突撃って、突撃って！　アハハハハハ！！」

ゲラゲラと腹を抱えて笑っているのはドロシー、その隣で憮然としているのがフレッドだ。

姫神はというと、顔を真っ赤にしながら頬を膨らませて一応『怒ってます』というポーズを作っている。『ポーズ』、というのは、つまり姫神は本心ではそこまで怒ってないということである。

何せ、先ほど『「吸血殺し（ディープブラッド）」に引き寄せられた吸血鬼と姫神を守るために急いでた』という弁解が入ったのだ。自分の能力がまた悲劇を生みそうになっていたことに愕然とする姫神だったが、悲劇を繰り返させない為、そして自分を守る為という二つのプラス要素があるのである。怒るに怒れないのが心情だった。

「そんなに笑うなって……。いててっ、ん？　ステイルからメール

が着てる」
「……アイツ、メールとか出来たの？」
何気に失礼な言葉を吐くドロシーだが、上条としては『どうしてアイツ俺のメアド知ってんの？』という疑問と言うか危機感の方が大きい。
「えーっと何々……、ああ！？　クソッタレアイツ英語で書いてやがる！　しかも最後に『近くにドロシーたちがいるなら英語でも構わないよね？』とかご丁寧にここだけ日本語で書きやがって！　こっち一刻を争う状況なんだぞ！？」
「あーあー、読んでやるから静かにしな。……『今学園都市に到着した、あと一五分ほどでそっちに向かう』、だってさ」
騒ぐ上条に露骨に嫌そうな顔をしながら携帯をぶんどったドロシーは、そのまま英語を同時翻訳して話す。ちなみに、ステイルの英語はそこまで難しいものではない。高校受験を切り抜けた普通の学生なら簡単とまではいかなくともあっさり訳せるはずである。それが出来ないことまでは、流石にステイルの責任ではなかった。
「ったく、これだから魔術師ってのは……」
「ム、何それ偏見？　ちょっとそれは聞き捨てならないねぇ……」
「あの。上条君。さっきからいるこの人たち――」
と、すっかり事件解決ムードの上条たちだったが、次の瞬間姫神の体が凍りついたのを見て、ドロシーとフレッドの顔つきが強張る。
何事かと振り向いた上条は、そこで三人の硬直の理由を知ってしまった。
そこには、一人の少女がいた。

肩甲骨の辺りまで伸びた黒髪と透き通った黒い目に良く映える真っ白な肌。日本人的な符号にも関わらずどこか西欧的な雰囲気のする目鼻立ち。服装は黒のタンクトップに黒のジャケット、黒のホットパンツに黒のニーソックス。隅から隅まで『白と黒』で埋め尽くされた容姿。

いかにも『吸血鬼少女』といったような、そんな少女だった。

しかし、彼女から発せられる『雰囲気』は明らかに異質なモノだった。フレッドの話やドロシーの言葉の端々から上条が予想していた、『吸血殺し（ディープブラッド）の匂いで我を忘れている』という様子とは、まるで別物。

少女から発せられる雰囲気には『理性が感じられない』どころか、『本能』を含めたあらゆる感情の働きが感じられなかった。それでいて、彼女という存在の歯車が正しく回っているだろうか、と聞かれれば少女について何も知らない上条でさえも『ＮＯ』と即答できた。

たとえるならば――ボタンを掛け違えた存在、歯車が外れたまま動き続ける時計、致命的なバグが発生したプログラム。そんなちぐはぐな存在感の少女が、そこにいた。

少女は、無機質な口元を無機質に歪め、あくまで無機質に愉悦の表情を形作り、一言だけ、ノイズがかかったような不明瞭な声色で呟いた。

「ｇｈｅａ見つけｑｅ」

03（後書き）

上条視点は次回で終わる予定です。

04

「姫神、逃げろ！！」

少女を目視した上条がまず叫んだのは、これだった。

「で。でも……」

「いいから逃げろ！　アイツが狙ってるのはお前だ！！　アイツを助けたくないのか！」

自分だけが戦闘から逃れるということに後ろめたさを感じていた姫神だったが、上条のその言葉に表情が引き締まる。そう、姫神が襲われるということは、すなわち吸血鬼であるカインの死亡をも意味しているのだ。姫神は静かに、しかし力強く頷くとその場から走り去った。

「……ｅｒａｐｉ後回しｏｆｊａ」

その一部始終を見ていたカインだが、逃げる姫神に追いすがることはなく、そのまま見送った。俺たちを殺した後でゆっくり追うつもりなのか、と上条は適当に辺りをつけて、改めて戦闘体勢に入る。

「な、なんなのさ、あれ……」

呆然と、ドロシーは呟く。その呟きを聞いた上条は、思わず疑問符を浮かべた。

「何って、あれが『吸血殺し（ディープブラッド）』に中てられた状態じゃないのかよ？」

「違う！　学園都市に入る前、暴走しだした時はまだ人格の欠片み

たいなものはあった。それに、あの体の構造はもう吸血鬼っていうより……！」

能天気にもとれる上条の声色に、ドロシーはイラついた様子で叫んで返した。

「あれを見ろ」

フレッドが指したのはカインの右腕だった。よく見てみると、傷口は塞がっている様だがカインの白い腕には血の跡が残っている。

「あれは、『神罰術式』に必要な『自らの血を地面に落す』というプロセスの痕跡だ。つまり、カインは今『神罰術式』を使って身体能力その他諸々が向上している状態ということになる。……見た目に騙されるなよ」

「ああ。でも、だいたいどのくらい強いんだ？」

フレッドの指摘に納得はしたものの、具体的な脅威が分からない上条は聞き返す。フレッドは静かに、

「……あの術式は、『カインの末裔』が元々持つ『原初の罰』という魔術的属性を重ねがけし、その双方で相乗効果をもたらすことで『カインの末裔』の特徴である『身体能力』と『再生能力』を通常の数百倍レベルで向上する術式だ。もっとも、『原初の罰』は『人間の血を吸うこと』によって真の完成に至るから、そこまでと言うほどでもないが……それでも今のカインは、既に聖人に迫る身体能力を持っているということになる」

「その、『聖人』ってのが俺にはいまいちピンと来ないんだけどさ」

「……お前、神裂火織と戦ったんじゃあなかったのか？」

そう言われて凍りついたのは上条である。彼は、七月二八日以前の記憶がごっそり抜け落ちている。ステイルと邂逅したときもそうだったが、彼が記憶を失う以前に『神裂火織と言う聖人』と会っていたかも知れないのだ。

「あ、あははは、そういえばそーだったような気がしなくもー……。でも上条さん科学サイドの人間だから『聖人』とか良くわかんなかったりー」

「……やれやれだ。聖人というのは、生身で巨大ロボットと喧嘩して勝てるレベルの身体能力を持っている、とでも思えばいい」

「なるほど、スゲー分かりやすい反則（チート）だな……、って何で魔術サイドでしかもどう見ても外国出身のテメェが巨大ロボットとか知ってるんだよ！？」

「……カインが、大好きだったもんでな……」

カインの人間性がまた一つ分からなくなる上条だった。

ボソリと呟いて遠い目をしてしまったフレッドは放置して、改めて上条はカインの方を見て——それから違和感を感じた。どうして、ここまで長い間喋っていたにも拘らずカインのほうから攻撃が来ないのか？

カインは先ほど見たままの無機質な表情を浮かべ、しかし足をずらしたりして上条たちと間合いを取っているようだった。

（まさか……俺の右手を警戒してる？）

だとするならば、これは上条にとって思わぬ僥倖だ。相手が警戒すると言うことは、今の状況のカインに対しては幻想殺しは非常に有用だと言うこと。

そして。

（もしかしたら、俺の右手で触れば、カインのことを元の状態に戻せるかもしれねえ！）

「ドロシー！　フレッド！　もしかしたら、アイツに俺の右手で触れれば元に戻せるかもしれねえ！　援護頼む！」

「――ッ、了解、だよッ！」

「任せろ」

ダッ！　と走り出した上条の背後で、『君臨する炎（サラマンダー）』が現れたのが分かった。しかし、上条はそれには見向きもせず突っ走る。高速で移動してきた『君臨する炎（サラマンダー）』とドロシーが、上条の後ろにつく。

「言っとくけど、今のアタシはアンタに殴られたせいで『魔女の理』と『裸の儀式』以外の魔力補正はないから、『四宝術式（ファンジアス）』――貫く（ファン）ものとかは使えないからね。使える魔術は精精回復魔術とニーズヘッグくらいだ。期待はするんじゃないよ」

ドロシーの言葉に頷くと同時、『君臨する炎（サラマンダー）』が動き始めた。

『神罰術式』を使った状態のカインは『光』や『炎』の持つ魔術的意味に弱いと言う。前者は第二二学区が地下であるということ、ドロシーの『貫くもの（ファンジアス）』が使えないことなどから狙うことができないが、『炎』に関しては違う。『君臨する炎（サラマンダー）』という強力な炎属性の魔術があるからだ。

心強く思う上条だったが、次の瞬間の光景を見てフレッドの不自然な弱気の理由を知った。

ズバン！　という小気味のいい音を立て、『君臨する炎（サラマンダー）』の上半身が消し飛んだからだ。

「な、一体どういうことだ!?　生身で出せる音じゃねえぞアレ！

！」

「だから言ったろう、聖人にも迫ると！　今のは拳を振るう速度があまりに速すぎて発生した衝撃波（ショックウェーブ）で炎が吹き飛ばされただけだ！　あの程度なら再生できる！」

狼狽する上条に、顔に刻んだ刺青を不規則に光らせつつフレッドが叫ぶ。その言葉通り、『君臨する炎（サラマンダー）』はすぐに元の形を取り戻すが、上条にはその姿が先ほどまでと同じ頼りがいのある姿には到底思えなかった。

（拳で衝撃波を起こす、だと……！？　ふざけんなよ、そんなもんにどうやって太刀打ちすりゃあ良いって言うんだ……！？）

幸い相手は上条のことを警戒しているため、上条がバテるまでは直接的な攻撃をしかけてくることはないが、あんな桁外れな身体能力にどうやって太刀打ちすればいいのか、と上条は思う。

いくら特異な力を持っているとはいえ、上条はただの高校生だ。殴ったり蹴ったりするだけで衝撃波が発生するような身体能力は持ち合わせていない。

「安心しな、カインにできることなんざアタシが全部まるっと把握してる」

戦慄する上条に、ドロシーは不敵な笑みを浮かべつつカインに突進を開始する。ドロシーの足は、地に着いていなかった。地面ギリギリのところを浮遊しているのだ。上条は思わず小さく声を上げたが、何かの魔術だろうと自分を納得させると、改めてドロシーの手数の多さに呆れるのだった。

「ＧＣＤＭＤＧＭＴＷＯＳＡＴＴＬ

ＯＴＷＡＴＧ！
（ダーン神族の母ダヌよ、魔女と二柱の理に従い我に救いの水を与えよ！）」

ゴポポ！　と音を立てて発生した水塊を、ドロシーは右腕を振って操作する。当然、カインは亜音速の拳速を誇るその身体能力でかわそうとするが……、

「――っ！？」

かわし切れず、ひじの辺りから先が水につつまれ、連鎖的に全身が水中に飲み込まれた。しかし、捉えたのは先ほどドロシーが虚空に発生させた水塊ではない。水の源は、無数にある川から伸びていた。

「ハッ！　ばぁーか！　アタシが出した水は『フェイク』さ！　どうやら血の匂いに興奮してアタシの手の内も忘れちまったみたいだねぇ！？」

予想外だったと言うほかに、体全体の移動となると腕よりも空気抵抗が大きくなること、慣性などの影響で方向転換が難しかったことなどが挙げられるが、それにしてもカインが水の檻に閉じ込められたのに変わりはない。

さしものカインとはいえ、直径が一〇メートルほどにもなる水の中に捉えられては一瞬で移動するのは不可能。しかも、ドロシーは水流操作によってカインを常に水塊の中心に据えるように絶えず操作している。最早手詰まりだった。

無限の生命力を持つカインに窒息死の心配はないが、動けないのでは最早戦闘行動はできない。

「――ゴポポｉｌｆｊガポｅｒｑｉｏｐ」

……そう思った自身の楽天さを、上条は恨んだ。

バガッ！！　という轟音と共に、水塊の中に『異形』が現れる。

『異形』は、出来の悪い粘土人形のように醜い姿をした巨人だった。

盛り上がった上半身と、引き締まった下半身。

「「北欧猛獣（グレンデル）！？」」

ソレを見たドロシーとフレッドは、ほぼ同時に叫んだ。

「どういうことだよ！　その『グレンデル』って奴は今のカインには使えないんじゃなかったのかよ！？」

二人の悲鳴のような叫びに、上条は思わず叫び返す。フレッドは罰の悪そうな表情で下唇を噛み、

「『あの時は』そう思っていただけだ。今のカインを見てみろ。確かに感情は持ち合わせていないようだが、知性はあると見える」

血を吐くように言葉を吐き捨てるフレッドの目の前で、現れた北欧猛獣（グレンデル）は暴れまわる。まるで、水塊の檻を破壊しようとするかのごとく。

「まずいね……！　このままだと、ヤバイ！」

言いながら、ドロシーは指を動かして水塊を川の真上に持って行き、並行作業で別の川から水塊を生み出していた。その動作に、上条は思わず怪訝な表情を浮かべてしまう。

「……なんでそんなに焦ってるんだ？　確かにあの北欧猛獣（グレンデル）って奴は相当強そうだしデカイが、あれだけで水塊が破壊される力を発揮するっていうのか……？」

「……グレンデル、っていうのは元々北欧や英国（イギリス）に伝わる神話の初期の初期、『ベーオウルフ』っていう物語に登場する巨人でね」

しかしその問いに対して、ドロシーは全く違う話題を語る。

「一説には、グレンデルってのはカインの末裔だった、っていう説があるんだ。その『同じ血族』っていう親和性を用いてカインは北欧猛獣（グレンデル）を操ってるんだが……。ところで、グレンデルっていうのには母親がいてね。グレンデルを追い詰めた勇者ベーオウルフは、グレンデルの母親を倒すために『フルンティング』っていう不思議な力を持つ剣を持って行くんだが……どういうわけか、フルンティングはグレンデルの母親が棲む洞窟についた瞬間、ただのナマクラになっちまったのさ」

「一体、何が言いたいんだよ！？」

「カインはその伝承を使ってるってわけさ。北欧猛獣（グレンデル）を倒し、母親（カイン）を倒そうとする武器は、ただのナマクラになっちまうってわけだ」

「チッ……！　いたちの最後っ屁って奴か！！」

話を聞いた上条は、すぐさま走ってカインの元へ向かう。

「なッ……！　アンタ一体何を……、」

「いや、あれでいい」

すぐさま制止しようとしたドロシーの肩を、フレッドが掴む。

「おそらく、カインはグレンデルに無茶な稼動をさせることで自滅

させ、そのときの効果で自身を戒める檻を破壊しようとしているのだろうが……、それはつまり、自分を守る盾を自分で壊すと言う、無防備な瞬間を生み出していることに他ならない。狙うなら、今が最大の好機、というわけだ」

「ドロシー！　『水塊』の表面を硬化させることって、できるか！？　いや、無理でも頼む！　水流を操作するなりして何とかなるだろ！？」

フレッドの説明を証明するように、上条が叫ぶ。

「できるに決まってんだろ！　魔女王なめんじゃないよ！！」

ドロシーが叫び返したと同時、上条は橋の柵を蹴り一気に飛び上がる。そしてそのままドロシーが新たに生み出した水塊の上を走り――、派手な音を立てて破裂した水塊の中から現れたカイン目掛け、一気に飛び込む。

中空に浮かぶ吸血鬼の少女は、無機質な表情を無機質な驚愕の形に歪めて、しかし上条の拳に対応することは出来ない。上条は空中で自らの右拳を振りかぶり、その狙いを少女の頬に定める。

「――安心しろ、カイン。お前の幻想（にちじょう）は、俺が守り抜いてやる！！」

そして、中空で身動きの取れないカインに向かって、その右拳を振り下ろす。何かが砕ける音と共に、上条の持っていた運動エネルギーは拳を伝わりカインに移動し、結果としてカインは川の端まで吹っ飛ばされた。

そして、そのまま落下するかに思われた上条だったが……気を利かせたドロシーが上条の真下に水塊を配置していたお陰で、びしょ濡れになるのは避けることが出来た。

器用にも階段状に変化した水塊を上りつつ、上条は喜びに拳を握

り締める。神罰術式は封じられた。これで、カインのあのバケモノじみた力は出ない。

数百倍にスペックが向上して亜音速程度なのだから、筋力と速度がイコールでないことを鑑みてもそこまですばしっこいわけではないだろう。先ほどのように水塊で拘束してしまえば、何も問題はなくなる。

はずだった。

橋を上った上条が見たのは、君臨する炎（サラマンダー）と壮絶な格闘を繰り広げているカインの姿。

「クソ！　おかしい、平常時のカインは普通の女の子と変わらない身体能力だったはずだ！　神罰術式が相殺し切れなかったのか！？　『聖人並』と戦えるほどのスペック、俺にはないぞ……！」

上条にやったような『風属性』の攻撃のほかに、地面をドロドロにする『地属性』、そこらじゅうに散っている水を使った『水属性』の拘束なども使っているが、やはり分が悪いのか手も足も出ていない。

「うゥゥううう、がああァァああああああ！！」

先ほどとは違い、明らかに人外じみた声で、カインがひときわ素早く拳を振った瞬間、君臨（サラマンダー）する炎の体に無数の風穴が開く。

「く、散らされた――！」

流石にあそこまで破壊されては即時再生はできないのか、思わず後退するフレッド。彼とカインの間には、ドロシーの姿。

「く――」

亜音速で迫るカインに、ドロシーは即座に防御する術を持たない。飛行も、水塊も駄目。他にも数多の精霊の力を借りても、間に合わない。ドロシーの脳裏に幾百の解決策がよぎっては、その全てが無駄の烙印を押される。

フレッドも『君臨する炎（サラマンダー）』を再度呼び出そうとするが、最早間に合うタイミングではない。

そして。

「あ、」

……しかし、ドロシーにカインの必殺の拳は届かなかった。カインの拳が、そのドロシーの少し手前で停止しているからだ。

「う、が、ァァあああ、があァァあ！」

まるで暴れまわる自分自身を押さえつけるかのように、カインは殴りかかった体勢のまま身を震わせていた。急いで橋に駆け上がった上条は、やっとその姿を目撃する。上条から見たその姿は、自分ではない自分に必死に抗おうとするカインそのもののようにも見えて。

「――――い、ヤだ」

その言葉を聞いた瞬間、上条は自分の胸が熱くなるのを感じた。

（は、ハハ。なんだ、俺は何を思い上がってたんだ。何が『守ってやる』、だよ。俺の出番なんか、最初（ハナ）っからなかったんだ。だって、

この場の主人公（ヒーロー）は）

上条はそう考えて目の前で必死に自分に抗っている主人公（ヒーロー）を見る。

（吸血殺し（ディープブラッド）に中てられて、神罰術式が暴走して、一ひねりで誰でも殺せる力と、その力を振るわずにはいられない破壊衝動を与えられて。それでも、自分の大切な日常を守り抜こうって、最後の最後の土壇場で必死に戦ってる、あいつのことじゃないか）

それを理解したからこそ、上条は硬く握っていた拳を解く。

「いいぜ、主人公（ヒーロー）。お前が自分の大切な幻想（にちじょう）を守りぬきたいって、そう思ってるんなら」

上条が今すべきことは、他者を殴ることではない。

上条が今すべきことは、他者の背中を押してやること。

自分の手で、自分の力で自分の大切なモノを守り抜こうとしている素敵な主人公（ヒーロー）に、ほんの些細な手助けをしてやること。

「一丁、俺にもその幻想を守らせてくれ！！」

バン！　と上条がカインの背を叩いた瞬間。

何かが砕けるような音が聞こえ、カインの体が傾いた。

まさか、魔術的な何かが破壊されたことでカインの意識にダメージでも、と一瞬胸をよぎった上条の不安は、しかし次の瞬間消し飛んだ。傾き、地に落ちると思われたカインは、自らの足で地面を踏みしめ直したのだから。

「……じょ、状況が良く分からねえが、そこのアンタ」

少女は、その風貌からは想像もつかないぐらい粗暴な口調で上条を指差し、

「とりあえず、俺の体の一部でも良いから掴んでくれ。俺の自我が、残ってるうちに……！」

少女の声が震え始めたのを見て取った上条は、慌てて少女の言うとおり少女の手を握り締める。すると、震えがすうっと収まっていった。と、同時に。

「カイン――――――っ！！！！」
「ひゃんっ！？　ちょお、ドロシー、やめぇっ」

今までの狼のようにも思える粗暴で粗野な雰囲気などかなぐり捨てて、ドロシーがカインにダイブを敢行した。

＊＊＊

「よかった、よかったよお……。アンタがこのまま死んじゃったらどうしようって、アタシ、アタシぃっ……」

そんなこんなで、カインの吸血衝動が治まったと聞いた姫神が合流し、ひとまずカインとの戦闘は終了したのだが。

未だステイルが到着していないため、上条は未だカインと右手と左手を繋いだまま、ドロシーは童女みたいにカインにすがり付いて泣きじゃくっている。カインはそんなドロシーにかなり狼狽しつつ、空いた右手で恐る恐るドロシーの髪を撫でていた。

「――……ごめんなさい。私のせいで。あなたたちに途轍もない迷惑をかけてしまった」

そんなカインに、姫神はただ頭を下げる。姫神にとっては、これ以外にできることがなかったのだ。可能なら、今後こんなことが起こらないように死んで詫びたいとさえ思っていたのだが、おそらくこの場にいる人間はそれをしたら悲しむ人たちばかり。

罵倒されることも覚悟して、姫神は頭を下げたままカインの言葉を待つ。

「……うんにゃ。お前のせいじゃねえよ。むしろこっちこそごめんな。怖い思いさせちまっただろ？」

しかし、返って来たのは存外軽い謝罪の言葉だった。思わず顔を上げた姫神の目の前には、屈託なく笑う少女の姿があった。少女は続けて言う。

「大体、今回の件は本当に運が悪かっただけなんだ。誰が悪いってわけじゃねえ。俺たちがたまたま日本に来ているときに、たまたまアンタの能力が開放されちまった、ただそれだけの話だったんだ。それに……危ないところだったけど、結局こうやって新しい『友達』も出来たしな」

何でもないことのように笑う少女に、姫神は虚を突かれたようにしばらく唖然としていたが、やがて顔をくしゃりと歪めて泣き始めてしまった。

「え、ちょ、な、どうして!?」

わたわたと慌てるカインに、姫神は泣きながら、しかし本当に幸せそうな笑顔で言う。

「違うの。私。嬉しくって。こんな能力（チカラ）だけど。あなたたちにとっては本当に迷惑な能力（チカラ）だけど。それでも。そんな風に言ってくれるなんて。思わなかったから。そんな風に言ってもらえたのは。初めてだったから」

涙を拭い、そう言って笑う姫神に、上条とカインは互いに目配せをする。両者とも、その表情には清々しい笑みが浮かんでいた。

「――いい感じになっているところすまないが、待たせたね」

唐突に聞こえた声に上条が振り返ると、そこには黒衣の神父――ステイル＝マグヌスその人がいた。そのスカした表情を見た瞬間、上条はかっと自分の頭に血が上るのが分かった。

「『待たせたね』じゃねーよ！　テメェがチンタラしてる間にコッチは大変な目に遭ってたんだっつーの！　カインが頑張ってくれたからどうにかなったものの……そうじゃなかったら、なんてこと想像もしたくねえ！」

「……ふむ？　『カインが』？　彼女は吸血殺し（ディープブラッド）の術中だったはずだが」

疑問に思うステイルに、今まで黙っていたフレッドが、

「……この男が、カインに触れたことで吸血殺し（ディープブラッド）から開放されたんだ。大方、この男の右手の能力が『原初の罰』に反応した吸血殺し（ディープブラッド）の能力を打ち消したことで興奮状態が解かれたといったところだろう。『原初の罰』は細胞レベルに組み込まれた術式だから……、破壊したところでどうとでもなってしまうしな」

フレッドの説明になるほど、と頷いたステイルはそこで何かを思い出したようにポンと手を打ち、

「そうだった。姫神秋沙。君にプレゼントがあるんだったよ」

そういって、ステイルは懐から十字架のネックレスを取り出して姫神に手渡す。

「教会に必要な必要最低限の要素を抜き出した簡易版『歩く教会』だ。これをつけていれば吸血鬼を呼び寄せることもあるまい」

「……ありがとう。ございます」

ネックレスを手渡された姫神は、それを自分の首につけると、深々とお辞儀をした。それを見て満足げに頷いたステイルは、それから上条のほうへ目をやり、

「……で、君はいつまでそうやって女の子と手を繋いでるつもりだい、上条当麻。代わりになら事欠かないだろうに」

「っと、うわぁ！　ってかステイル！　代わりに事欠かないとは聞き捨てならねえな！　出会いならほしいくらいだっての！」

（それは本気で言ってるのか……？）

微妙に呆れるカインだった。

「それじゃ、僕はこれで帰るよ。悪いがこの後も予定が詰まってるんでね。……全く、この僕に運び屋の真似事をさせるとは……最大主教（アークビショップ）め……」

不穏な言葉を吐きつつくるりと踵を返すステイルに、上条は心の中で『何でカインたちと一緒に帰らないんだ？』と思いつつ、ふうっと溜息をついた。

――これで、終わったのか。上条の体に、どっと疲労感が押し寄せる。今日だけで、いくつの死線をくぐってきたことか。それだけの死線をくぐるに相応しいモノを見せてもらったので、上条としてはむしろ今回の出来事は幸運とさえ考えていたが。

「……えっと、上条、さんでいいのか？」

「ああ、上条でいいよ。俺も呼び捨てで読んでたしな」

「ああ、分かったよ上条。今日は本当に有難うな」

「いや、気にすんなって。それに、気持ちの良いもの見せてもらったしな。こっちこそ有難う」

お礼を言ったはずなのに何故かお礼返しされて疑問符を浮かべるカインに、上条は意味深に笑ったまま何も言わない。

やがて考えても無駄だと悟ったのか、カインはおもむろに携帯を取り出し、

「あ、そうだ。せっかくだし連絡先交換しようぜ」

「ん、ああ。いいぜ。――――え？」

完全に友人のノリで言ったカインの申し出に携帯を取り出してか

ら、上条は急速に我に帰った。

（え、え、えええええ！？　いかに男っぽい口調とはいえ、女の子と連絡先交換ですかー！？　これはついに上条さんにも春が到来ッ！？）

あたふたと慌てているうちにカインは上条の手から携帯を取って勝手にピコピコと操作してしまう。学園都市製の携帯だが、上条のものは比較的スタンダードな携帯なのでカインでも簡単に操作できたようだ。

「……ってか、どうして魔術師のお前が携帯持ってんだよ？　ドロシーたちみたいに『通信用の霊装』だかなんだかで済ませてるんじゃねえのか？」

「えー……。魔術師だからって文明の利器に頼ってないわけねえだろ。それに、ドロシーやフレッドだって携帯は持ってるぜ？」

「カインは『北欧猛獣（グレンデル）』の効力で霊装持ってもあんまり意味ないからね。いつでも連絡取れるように用意してあるのさ」

ドロシーの注釈になるほどと頷いた上条に、カインは天真爛漫な笑みを浮かべ、

「俺たち、これから数日くらい学園都市に滞在するから。何かピンチに巻き込まれたら連絡くれよ。助けになるぜ」

「そうそうこんな事件に巻き込まれたりなんかしね……いや、ないって言い切れないのが悲しい……。ってか、どうしてお前ら滞在すんの？　っていうか、滞在できんの？」

「ん？　いやだって、元々この近くに来たのは学園都市に来るためだし。清教の方からＩＤカード的なのはもらってるぜ？　ちなみに、コッチに来たのは俺の体を治す為な」

「……『治す』？　だってお前不老不死だし再生能力あるんだろ？」

上条の疑問に、カインは不敵に笑う。

「ああ。『治す』んだよ。その『不老不死』をな」

「はぁ？　不老不死を『治す』？」

思わず聞き返してしまった上条に、カインは誇らしげに頷く。

「ああそうだ。長生きはしてみたいもんだが、あんまり長生き過ぎても困るだろ？　幸運にも俺はまだ一五歳の生まれたてほやほやな吸血鬼だからさ、体の成長が止まらないうちに不老不死を治そうって思うわけ」

簡単そうに言うカインだが、上条はその言葉に愕然とした。

そう、吸血鬼と言うのは『不死』だが同時に『不老』でもあるのだ。

老いないというのは権力者にとっては夢のような能力だが、ただの小市民にとっては『大事な人が老いていくのを昔のままの姿で見届けていかなくてはならない』という残酷な運命を背負わせる能力でもある。

そこでカインが『不老不死を治す』という結論に至ったこと。それ自体が凄い。人間になるという発想は勿論、不死を捨てるという決断も。

おそらく、そこに至るまでにはかなりの苦悩があったはずだ。悩み、苦しみ、そしてその上で出した結論。人と同じように老いて、人と同じように『死ぬ』という決断。

一五歳という彼女の年齢から考えたら、有り得ないほど円熟した精神性だ、と上条は思うが、そんなことをいちいち言ってもカイン

はきっと困ったように苦笑いするだろうということはなんとなく予想がついたので顔には出さない。

「……でも、お前の不老不死って吸血鬼の能力なんだろ？　それって治そうとして治せるもんなのかよ」

「ああ。これでも俺、結構いろんな魔術師に力とか貸してもらったりして、結構頑張ってるんだぜ？　そのお陰で、何とか吸血鬼から人間になるとっかかりくらいは手に入れてるのさ。後はそれをどうやるかなんだが、」

「その辺にしときな。どこに耳や目があるか分かったモンじゃないんだし。それに、方法が見つかっても他にも色々やることがあるからね？」

「……わぁってるって」

得意げに語っていたカインだが、ドロシーに窘められてショボンとする。こういうところは年相応だな、と上条はなんとなく思った。

「……はい、携帯。登録終わったぜ」

「ん、あんがと」

そして、携帯を受け取った上条は思わず愕然とした。

「じ、じ、じ、時間っ、」

「……時間？」

何故なら、携帯の時刻表示が示している現在の時刻は……、

「いっ、急がないと補習が終わっちまう！！」

既に一〇時を過ぎていたのだから。

＊＊＊

その後、カイン一行に簡単な挨拶をして補習に向かった上条だが、結局その日補習に行くことは叶わなかった。

いや、正確には終了一時間前に何とか到着することは出来たのだが、そこで子萌先生に『な、なんですかその怪我！　びょうっ、病院に行かないと駄目なのですよーっ！？』と言われてしまい、カエル顔の医者のところに直行していたのである。

「……全く、君は病院と自分の家を勘違いしてるみたいだね？」

「そんなことはないと言いたいのですが案外言い切れなかったり……」

呆れたような表情のカエル顔の医者に、上条は苦笑いとも泣き笑いともつかない微妙な笑みを浮かべて答えた。

「さて、これで治療は終わったんだけどね？　どうも君の知り合いがお見舞いに来ているようだよ？」

「え……」

「――流石に、もう一度入院、なんて措置は君の経済的にできないだろうからほどほどにしておいてほしいんだけどね？」

カエル顔の医者の言葉に、上条は短い期間で培ってきた『不幸センサー』が痛いくらい反応するのを感じていた。そして、ガララと言う乾いた音とともに現れた少女は案の定――、

「と～～う～～ま～～？」

「ひっ、い、インデックスさん！？」

「とうまはどうしてそうやってすぐ怪我するのかな！？　特に今回は困った時に私に連絡を入れてきたからそれは殊勝なことだと思ったけどいつの間にか通話切ってそのまま音沙汰なしだし！　教会の魔術師から大体の説明はしてもらったけど、あろうことか吸血鬼と戦ってたらしいね！？　それも女の子の！！　もうとうまのそれは確信犯としか思えないんだよ！　この浮気者！　馬鹿！　すけべ！　あなたを殺して私も死ぬーっ！！」

「だーっ！？　インデックスさん一体それはどこで覚えたというのでせうか！？　っていうか目をギラつかせるな歯をカチカチ鳴らすなリアルに生命の危機を感じるからーっ！！」

そして、上条は飛び掛ってくる純白のシスターを目の前にいつものように叫ぶ。

「あ〝あ〝あ〝あ〝！！　不幸だー！！」

＊＊＊

「……フム。宵闇の祖（ヴァンパイアロード）は学園都市に入り、これで『ライン』は確定したも同然、か」

窓のないビルにて。

巨大なビーカーの中に逆さに浮かんでいる銀髪の『人間』は、手元に表示されたウィンドウを見て一人静かにほくそ笑んでいた。

「『アレ』の試作品の一つを、一時的とはいえ魔術サイドに渡すことになるのは不本意だが……まあ、解析する暇もないだろう。それに、丁度いいデータも手に入る」

そう言って、『人間』はビーカーの中で指を左右に移動させる。すると、それに対応してウィンドウが移動し、透明な、それでいて中心が黄金色の美しい宝石が表示される。

宝石の名は、『天使の涙』。

魔術サイドでは、天使と対話するための重要な霊装として。

科学サイドでは――ルビーやサファイアと組成は非常に似ているが、それらとは違う『何か』が織り込まれた鉱石として。

両サイドで認知され、つい最近学園都市が極秘裏に複製に成功したものである。

その効力は、『光の刺激を利用して人間の精神を消しゴムみたいにかき消し、「怪物」を入れるための器にする』こと。

おそらく、『天使との対話』という観点で見れば十字教内ではこれほど貴重な霊装など稀だろう。

「……まあ、どうせ『コレ』が使い物にならないのは分かりきっていることだし、な」

――しかし、『人間』アレイスターにとってはこんなものは宵闇（ヴァンパイアロード）の祖を呼び出すための単なる餌に過ぎない。本当に重要なのは、これから。

「……さて。そういえばまだ『三沢塾』の残党が残っていたか。丁度消すための労力をどうにかして節約できないかと苦心していたところだ。どれ、『彼』にでもお願いして少しばかり焚き付けてもらうか」

『人間』は愉快そうに笑い、それから指先をすい、と動かして新たなウィンドウを表示させる。ウィンドウには、こう表示されていた。

『剥離要素（エラーポイント）　引潮海里』。

０４（後書き）

次回より、やっとカイン視点となります。
カイン編はひとまず後数話で終了です。

05

皆さんは転生とか、そういったものを信じるタイプの人間だろうか？

俺は信じる。だって俺、いわゆる転生者だし。

皆さんは異世界とか、そういったものを信じるタイプの人間だろうか？

俺は信じる。だって俺、異世界出身だし。

皆さんは神様とか、そういったものを信じるタイプの人間だろうか？

俺は信じる。だって神様がもしもいないとしたら……、

俺はきっと、こんなに幸せな日常を送ってなどいられないはずだ。

俺の名前はカイン。

元男で『とある魔術の禁書目録（インデックス）』愛読者という前世を持つ。

魔術サイドでは核爆弾並みの戦略的価値があると言われる『カインの末裔』の生き残りにして、原作では存在すら語られなかった『剥離要素（エラーポイント）』だ。

そんな俺の目標は『人間になること』。

ちなみにその目標は、今のところあんまり順調じゃない。

＊＊＊

「もう、さ。遊園地行こうぜ遊園地」

上条さん――いや、上条と邂逅した翌日、俺はホテルのベッドでぐでーっとしながらそう言い放っていた。

隣で肩甲骨まである俺の黒髪を弄くっていた（やめろといってもやめないので最近は放置している）ドロシーと、顔の刺青の手入れをしていたフレッドがその言葉に俺の方を振り向く。

「……はぁ？　何でまた遊園地？」

気だるげに疑問符を浮かべたこの下乳丸出し露出狂魔女がドロシー＝ガードナー。

一応、俺の保護者を気取っちゃいるがぶっちゃけ前世の分を合わせりゃ俺の方が年上だ。

何でも、魔女術（ウイッカ）とかいう最近は廃れた魔術系統の開祖であるジェラルド＝ガードナーという魔術師の孫娘らしく、コイツ自身も相当の使い手だ。

北欧系などにおける『巫女』としての魔女から十字教での『忌々しい存在』としての魔女まで、様々な『魔女にまつわる術式』を操ったり、魔女術（ウイッカ）以外にも日本神道やら仏教やら色んな系統の術式に片っ端から手を出してたりしていて、同じ魔女連中からは『魔女の頂点でありながら最も魔女から遠い存在』と忌み嫌われたりしているらしい。

だが、コイツの通り名が『魔女王（ウイッチクイーン）』というあたり、それでも案外実力は認められてるのかもしれない。

コイツとは俺が魔術を知って間もないあたりからの付き合いで、もう今年で出会って一〇年近くになる。一番親しい仲間というやつだ。一番最初に会った時は軽く命を狙われたのも懐かしい思い出だ。今じゃ俺のことを玩具代わりにもみくちゃにする始末。でもこれはやめてほしい。

「……一応、敵地なのだがな」

呆れたように呟いた黒ローブ全身刺青金髪銀髪混合野郎がフレッド＝ゲティングス。

ゴツく濃い顔つき、妙な言い回し、それから妙な魔術と、『なんだかお前だけ別作品のキャラじゃね？』と言いたくなる見た目二〇代後半なコイツだが、実は今年で一九歳らしい。しかも、彼女持ちである。

彼女と結ばれるためだけに魔術師になって顔面に刺青彫ったりと色々していたのだが、色々あってやさぐれていた時期に俺たちと遭遇、そのとき俺が愛の拳を叩き込んでやってからの付き合いになっている。

基本的にルーン魔術を自分なりにアレンジしたサラマンダーっぽい奴を召喚する魔術を使うのだが、サブで色々な術式も持ってるらしい。

ちなみにメインで使う君臨する炎（サラマンダー）というのは自分の体から剥離するように現れ、主に殴ったり蹴ったりといった格闘戦で戦う人型の炎人形だ。ただし、コイツ自身からはあんまり離れられないらしく、射程距離は大体二メートル前後、らしい。……どう見ても首筋に星型の痣がある感じの……、いや、やめておこう。

ちなみに、コイツらを初め俺が関わってきた連中は、多分『原作』

じゃ存在してない人物だと思ってる。
なぜかと言うと、俺が関わってきた連中っていうのは大体『死ぬ直前っぽい状況にまで追い込まれてる』奴ばっかりで、俺と関わったことで何とかその危機から逃れてた、って感じの境遇ばっかりだったからだ。
ドロシーなんか俺を始末した後は加わってた組織から暗殺される手はずになってたくらいだし。

俺と言う異分子（エラー）と関わったことで本筋から剥離し生まれた新たな要素……まあ、差し詰め剥離要素（エラーポイント）ってところかな。
え？　厨二病？　……心配するな、自覚はある。

「確かに『天使の涙』があっさり不発に終わっちまったせいでやってらんない気分なのは分かるけどさ」
「うっせ。そんなん関係ねーし。別に残念に思っちゃいなかったし」

『天使の涙』。
透明な宝石の中が金色に輝いているという、『どういう成分で組成されてたらそんな色になるんだよ』というツッコミどころ満載の鉱石だが、魔術（おれたち）サイドの間では『天使と対話するための霊装』として十字教界隈で特に重要視されたりしてる霊装だったりする。
まあ、『何で出来てるか』っていう疑問に関してはルビーやサファイアの親戚みたいなモンだと思ってくれりゃあいい。
ルビーやサファイアの主成分はアルミナ――いわゆる『酸化アルミニウム』という奴で、その中にわずかに含まれるクロムや鉄、チタンなどによって光の屈折具合が変わり、ルビーやサファイアといった違いが出来るのだ。
『天使の涙』の場合は、とりあえず科学的に解明できているかどうかは不明だが『ルビーやサファイアとは違う何か』が含まれているらしい。まあ、十中八九天使（テレズマ）の力関係だろうなー、と曲がりなり

にも魔術師な俺は推察してみたりするわけだが、専門家なわけじゃないので分からない。

そして実はこの霊装、俺が前世でプレイしていた、『ＰＳＰ版とある魔術の禁書目録（インデックス）』のストーリーモードで出てきたものだ。俺自身も名前を聞くまでその存在を忘れていたんだが、名前を聞いて思い出した。

確か……学園都市が入手して、その情報を聞いたミーシャ（？）っていうロシア成教の魔術師が御使堕し（エンゼルフォール）で変質した体質を治す為に学園都市に潜入して奪ったんだっけ。

結局、『天使の涙』はミーシャ（？）みたいな『天使の力（テレズマ）』をたくさん容れられる体質にする』程度の効果しかなかったらしいからボツになったってオチだった気がするけど。

俺の場合、体の中に大容量の『魔力』は入っちゃいるが『天使の力（テレズマ）』はない。それを容れることで、色々なって『原初の罰』を相殺するためにこの街に来たのだが……結果は駄目だった。

なんていうか、まったく効果がなかった。ドロシー曰く、『天使の力（テレズマ）』が入る容量くらいならもう既にあったらしい。ただ、無限の魔力があるから満杯になってて目立たないだけで。

むしろ、何だか良く分からないが『原初の罰』と『天使の涙』の組成に含まれてる成分が何だかよろしくない相性だったようで、勝手にブチ壊れてしまったのだ。

あの時はマジで肝が冷えた……。必死で平謝りしたら許してもらえたが、研究員が半狂乱で「木原主任！」って叫んだ時は人（吸血鬼）生終わったな、って思ったわ。

まったく、『ＰＳＰ版』で何だか重要そうな霊装だったから『もしかしたら』……と思ったんだがなー。

そんな風に思考の渦に入りながら拗ねていると、フレッドが溜息

をつきながら呟くように話す。

「……とてもじゃないが、俺たちは大衆の前に出てもいい格好とは思えないが」

「お、れ、は、問題ないだろ！　露出狂なドロシーと金髪銀髪ブレンドなフレッドさえなんとかすれば問題ないじゃん！　黒のタンクトップに黒のジャケット、黒のホットパンツに黒のオーバーニーソ！　このくらいいるって！　そこらの路地裏とか覗けば普通に出てくるって！」

下乳マックスの露出狂に、明らかに不審者なフレッドと比べれば俺なんてまだ可愛いモンだ。魔術師の中じゃ一番まともな部類じゃなかろうか？……まあ、こういうパンクなファッションしてる奴っていうのは大抵『闇』の人間だった気がしなくもないけど。

あー、禁書の元愛読者っつっても記憶が薄れててよく覚えてないわ……。

ま、それはいいとして。とにかく遊園地、遊園地だ。学園都市っていったら、『外』とは比べ物にならないくらいの科学技術を持った科学都市！　魔術師は忌避してる感があるが、俺に限ってそんなもんはない！

せっかく学園都市に来たんだし、トンデモ科学アトラクションの一つや二つくらい楽しまなきゃ損ってモンだろ！　まさしく男のロマンだぜ！

「ホラ、実は『天使の涙』をもらいにいった時に研究所で会ったお姉さんに遊園地のチケットもらってたんだ。人数分あるし、行こうぜ？　お前らの服は俺が買ってくるからさー。フレッドだってまともな服着ればあんま目立たないだろうし」

「いや、それ間違いなく罠……はぁ、もういいよ。学園都市だって馬鹿じゃないからアタシ達に喧嘩売ってイギリス清教との関係を悪

化させる訳ないだろうしね。……仕方ない。一応ここが敵地って認識持ってんのかい？　服はこのままでいいよ。『隠匿術式』かけて違和感消しとくから」

「ういー。で、フレッドはどうする？」

ベッドで足をパタパタさせながら、フレッドの方に話を振ってみる。コイツは存外無口な奴だからな……。話しかけないとそのままスルーして居残りとかありそうだ。

「……仕方ない。俺も行くか」

よし。これで三人揃った。やっぱ皆して結局暇してたんじゃないか。というわけで、出発ーっ！　いやー楽しみだなー。学園都市の遊園地！　どんなハイテク機械なんだろ？　空飛ぶジェットコースターとか出てきたりして！　竜巻を起こすメリーゴーランドとか？　ロボットに変形するお化け屋敷とか、ありそうだな～～～……。

＊＊＊

ｓｉｄｅどっかの腹黒少女

……え？　『妹が遊園地に行きたがってるから私休みます』？

馬鹿言っちゃ駄目だよフレンダちゃん。何だって私が護衛のうちの一人を減らすようなリスキーな真似しなくちゃいけないのさ。

良いよ。私も一緒について行ってあげるから。折角だし『アイテム』総出にしちゃお？

え、『嫌』？　『それお前が宿題やりたくないだけだろ』？

あはは、何言っちゃってるのかなぁフレンダちゃん。

じゃあいいよ、麦野さんには『フレンダちゃんは妹と遊びたいから今日の仕事はお休みだって』って言っておいてあげるから。

……うん。分かればよろしい。は？　『鬼畜』？　『外道』？

――フレンダちゃん、口には気をつけようね？

＊＊＊

ｓｉｄｅカイン

そんなわけで、やって参りました第六学区は学園都市ドリームパーク！　いやー、入場券（フリーパス）のおかげで長蛇の列に巻き込まれずに済んだぜ。にしても夏休みすげーなー。フリーパス所持者用の列の隣に並んでたあの長蛇の列、全員学生なんだもんな。

「ホラホラ、さっさと行くよ。フリーパスっつったって今日限定なんだ。もらいものだから出費はゼロだけど、せっかくなんだからたくさん乗っとかないと損だろ？」

「……その思考回路、日本人の考え方だぜ」

事実、フレッドや俺が今まで会ってきた魔術師は『たくさん乗らないと勿体無いっ！』というより『折角無料なんだし楽しむかね』って感じの連中だ。魔術師ってのは大概マイペースなやつらが多いからなのかもしれんが。

……まあ尤も、俺もドロシーみたいに『折角だしたくさん乗るぜーっ！！』っていうＭＯＴＴＡＩＮＡＩ精神の権化なんだがな。

「……誰のせいだと思ってんだい。ああもうそういえば学園都市に行ったから今月の出費が……、っていうかあのウニ頭に魔力補正用の儀式破壊されちまったからそれも修理しないといけないじゃないかい！　がああああ！　あの野郎次に会ったらブチコロス！」

……ご迷惑おかけしてます。……ってか、上条が不幸ってマジだったんだな。本人に全く落ち度ねえのに知らぬ間に恨まれるって……。せめてアイツの不幸の一パーセントでも全人類に分配されたら……いや駄目だ、そしたら人類が滅亡するかもしれない。

「ドロシー、安心しろ。今月から清教からの給料が出る」

「！！」

あー、また馬鹿話が始まった……。めんどくせえ。こうなったら長いからなー、ドロシーの奴。俺は俺で適当にジェットコースターでも行くか。どうせこいつら羊飼（アベル）の血で俺のこと探知できるんだし。

そう考えて歩き出した俺を見て、二人は話をやめて俺に着いてきた。まったく……と心の中で思っていると、

ゴガッ！　という爆音が響いた。頭頂部を起点に駆け巡る痛覚信号に、視界が真っ白に染められる。一瞬遅れて、体がそれを『痛い』ということなんだと認識した。

「がッ～～……！　――ぁがァァあああああッ！？」

思わずかまちー的リアクションをかますほどの激痛に頭を押さえ身悶える俺。つまるところ、ドロシーに拳骨かまされた。フレッドの呆れたような視線が痛い。

この感じ……土精霊の力を拳に集めやがったな！　多分一石の如き拳（ＮＬＡＲ）あたりを創作で唱えたんだろ。魔術の無駄遣いしやがって……。

『隠匿術式』は今のところフレッドとドロシーの服装への違和感しか『隠して』ないので、俺とドロシーの一連のやり取りは『隠されて』ない。周囲の人たちにとってはこのくらい日常茶飯事らしく別段奇異の目で見られることはないが、フレッドとしては往来でこんな滑稽なやり取りをしている連中の仲間だと思われたくないのだろう。

「なななな、何しやがるこの暴力魔女！　魔女！　まーじょ！！」

「魔女を罵倒語っぽく連呼すんなジャリん娘（こ）。アンタそれで何度迷子になったと思ってんだい。いちいち霊装取り出すこっちの身にも

なりな」

いががが、だからホッペを引っ張るなって！　吸血鬼だから実際はそんなに痛くないけど、それでも前世から染み付いた習慣はこの手の攻撃に精神的苦痛を発信するんだから！

俺が十分に反省したことを見て取ったドロシーは、フンと鼻を鳴らし俺の頬から両手を離す。ダブルはキツイって、ダブルは……。

「アンタには『こういうの』の方が効くみたいだからね」

「テメー……」

ちなみに、ドロシーは俺が転生者だということを知っている。出会ってから少したった頃に色々あったわけだが、まあこれは割愛しておく。ともかく、ドロシーは俺が転生者だと分かっても別にどーだこーだ言うわけではないらしい。

というのも、『転生』という現象は魔術界隈では非常に稀ではあるものの起こりうる現象らしいからだ。自然現象における『オーロラ』みたいに、特定の状況が揃えば起こる魔術的現象に『転生』というものがあるらしく、俺はそれによって生まれたんだと。

何でも、『転生』の原理は仏教術式の『現在から見て未来の自分の魂の情報を現在（過去）の自分に送信する「輪廻」という術式』の発展系らしい。

使ってる法則は預言書とかと同じようなモンだよ、とかなんとか言ってたけどぶっちゃけソッチは専門外なので全く意味は分からなかった。

そういえばゲーム版に『過去を操る魔術』ってのが出てきたなあ、とか思ったが、関係性はよく分からない。何気に核心っぽい気がするんだが、どうだろう。

尤も、自然的魔術現象としての『転生』は大概不完全であり、魂の情報の一部――記憶の断片や既視感などしか送られないのだとか。

俺みたいな、『自我そのものが完全な状態で送られる』という状態は稀らしい。

……まあ、『異世界』からの転生ってことは教えてないから、ドロシーにはそういう形で納得してもらうことにしておいている。いくら転生が魔術的に解明できてるとしても、『異世界』からなんていくらなんでも無理だからなぁ……。ホント、不思議なモンだ。

「ん？　カイン、アレに乗んのかい？」

そんなことを考えながら歩いていると、ドロシーが疑問符を浮かべながら俺に尋ねてきた。おっと、考え事をしててあんまり回りを見てなかったな……。そう思いながら意識を前に戻すと、そこには見事な螺旋やらなにやら凄まじいモノを描いたジェットコースターの姿があった。

「うおおぉ……スゲー……」

学園都市ということで、スーパーアトラクションを期待していた俺だが、これは流石にビビった。螺旋、螺旋、逆回転、直角上昇、急降下、しかも途中レールまで途切れてさらに逆さのまま直進……これもうジェットコースターじゃなくて拷問だろ。

空飛ぶジェットコースターって洒落で考えてたけど実物眼にしたら洒落になんねぇ……。これで理論上は絶対に運転できるっつーんだから不思議だよな。ジェットコースターの技術に超能力を使用してたっつっても俺は信じるぞ。

「……アタシパスね。ああいうの駄目」

「ええ！？　ドロシー飛行術式とかたくさん持ってんじゃん！」

武者震いをしつつジェットコースターに向かおうとしていると、ドロシーが自分の腕を抱きながら若干顔を青くして立ち止まった。
……コイツ、普段飛行術式とか使って俺を引っつかんで空中遊泳とかして遊んでるくせに……。

「いやだって、ああいうのってアタシが制御できるじゃん。でも、高いところで、しかも自分が制御できないまま拘束されるって無理じゃない？」

その『無理』なことを俺は毎回されてるんだがな。低空ギリギリとかマジやめてほしい。いくら吸血鬼だからって怖いもんは怖い。

「……俺も遠慮しておこう。高いところにはあまりいい思い出がないからな」

何故か無駄に意味深なことを呟くフレッドはいつものことだから放置して、……となると、俺だけがあの怪物ジェットコースターに乗るってことになるのか。
……なんか気乗りしないが……、まあ、面白そうだし行ってみるか。

「じゃ、行ってくるよ」

この時の迂闊な思考が、後々色々と面倒なことを巻き起こすのだが……、そのときの俺は、そんなこと思いもしなかった。

＊＊＊

ｓｉｄｅどっかの腹黒少女

え？　ジェットコースター乗らない？

フレメアちゃんが怖いんなら仕方ないよねー……。じゃあ私と麦野さんと沿受ちゃんだけで行ってくるよ。

＊＊＊

ｓｉｄｅカイン

「動くな」

……その結果がご覧の有様だよ。

今、俺は背中にナイフを突きつけられてる状態にある。どうやら、後ろにはこわーい男の人がスタンバってる状態らしい。いや、俺別に背中をナイフで刺されても死なないんだけどな。そもそも刺さらないし。さりげなく周りを見渡してみると、俺のほかにこんな難儀な状況に陥ってる人はいな……、

あ、いた。俺と同じくらいの背丈の、純朴そうな顔をしたサイドテールの女の子と、何でか知らないけどメイド服っぽい感じの服を着た黒髪セミロングの女の子。

傍目からも分かるくらい真っ青になってるけど、なんというか悲壮感を感じないと言うか危機感を感じないというか……滑稽な感じさえする雰囲気だ。隣にいる茶色い長髪の大人っぽい女の人も同じようにナイフを背中に当てられてるけど、こっちは涼しい顔だ。逆にこえーよ。

……あれ、あの人どっかで見たことがあるような……？　気のせい？

「おとなしくしていれば悪いようにはしない。我々としても騒ぎは避けたいしな。こちらの誘導に従えば、悪いようにはしない」

後ろで男がそんなことを言ってるのが聞こえるが、ぶっちゃけ信用ならねぇ。っていうかナイフ突きつけてる時点でＮＧだろ……。とりあえず通信用霊装でも使ってドロシー達に救援を……、

む？

……この間『北欧猛獣（グレンデル）』出してから通信霊装用意すんの忘れてたァァァあああああああッ！！

何たる不覚……ッ！！　これ後で確実にドロシーにどやされるぞ

……。『だから敵地で遊園地に行くなんて無用心だって言ったじゃないか！　お小遣い抜きにすっからね！！』みたいな。うぅ～……、せっかく久々の日本だったから色々お土産とか買いたかったのに……。

仕方がないので黙って男に従って物陰に連れて行かれることにする。……今更だけど、服剥いてうんぬんかんぬんとかそういう展開じゃないよな？　もしそうだったらちょっと手加減できそうにないなぁ。

（内面的な問題とか力量的な問題はともかくとして）か弱い女の子を痛めつけて乱暴しようとする輩はちょっと懲らしめないといけないしな！

チラッと横を向くと、どうやら例の三人組の女の子たちも従うことにしたらしく、大人しく男たちに言われるまま動いていた。……うえぇっ！？　なんか純朴そうな顔した方の目が異様に据わってやがる！？　こいつも大人っぽい方の同類かよ！

他の乗客にナイフがバレないように上手いこと俺たちを物陰に誘導した男たちは、そこで俺たちを一列に並ばせて喋り始めた。

「……、原子崩し（メルトダウナー）、割裂空洞（ダークホール）、超速再生（オートローディング）、……もう一人は能力も分からん雑種か。原子崩し（メルトダウナー）しまで確保できるとは……予想外だったが中々幸先がいい」

男のうちの一人の呟きに、メイド服っぽい色彩の服装をした少女が軽くむっとした。なるほど、となると大人っぽい方とサイドテールの方が原子崩し（メルトダウナー）、割裂空洞（ダークホール）、超速再生（オートローディング）のどれか、っていうことに……、ん？

この三人の中には俺も含まれてんのか。じゃあ超速再生（オートローディング）は俺って

ことになるのか？　……何故俺の能力が科学サイドの能力として説明されてんのか意味不明だが、まあいいとしよう。

……んん？　原子崩し（メルトダウナー）？

ああ！！　原子崩し（メルトダウナー）って確か……第……第……第五位くらいの能力じゃねえか！　確か能力者の名前は麦野なんちゃらって感じだった気がする。禁書のゲームにいたなー、確か。内容忘れたけど。

確か、兵……浜……名前が出てこない。まあいいや。三人目の主人公のライバルキャラで、ロシアの最後のほうで仲間になってたような気がする。まあ、思い出したところで何の意味もないんだけどな。

「……えーと、『三沢塾』の残党、ってことでいいんだよね？」

ぼけーっとそんなことを考えていると、サイドテールの少女がそんなことを言った。男たちは自分たちの素性（？）がバレたことに意外そうな表情を浮かべたが、バレても問題ないと考えたのかすぐさま余裕を取り戻し頷いた。

「流石は『統括理事会』の孫娘。流石に我々が瓦解していたことには気付いていた、というわけか」

「……ふぅん、確か『メンバー』の連中が残党狩りをするって話だったはずだけど？」

ナイフを背中に当てられながら、それでもなんでもないような様子で麦野が男に問うた。男は不機嫌そうに鼻を鳴らし、

「ああ。そして、命からがら逃げてきた、というわけだ。お陰でビルは閉鎖、我々は学園都市の暗部と命がけで鬼ごっこするハメにな

ったってわけだ！」

くそ！　と叫んで地面を蹴る男に、サイドテールの少女の目に多分の哀れみが浮かんだ。あれは同情……いや、どっちかというと共感って感じだな。

『あー分かる分かる』って口が動いてるし。こいつどんな人生送ってるんだ。

「……だが、お前たちがいれば話は変わる。学園都市でも唯一の能力、原子崩し（メルトダウナー）、割裂空洞（ダークホール）、超速再生（オートローディング）。三つの希少な能力が揃えば……！　学園都市を滅ぼすことだって可能なはずだ！！」

……うーん、実は俺たちは伝説の秘宝の鍵でした、みたいな感じ？　こいつらホントに科学の街の人間なの？　ってくらい根拠が不明な理論だなー。いや、魔術（オカルト）の世界の専門家である俺が『根拠が不明』とか言うのもおかしな話だけど。

聞けば、希少な能力を集めたら学園都市だって滅ぼせるよ！　って感じにしか聞こえないし。魔術にだってもっと『こうすればああなる』みたいな理論は存在するぞ？

そんなことを考えていると、少女たちも同じようなことを考えてるのかサイドテールの少女と麦野は同じように蔑みを表情に浮かべている。サイドテールの少女は『抑えているが堪えきれない』感じだが、麦野なんかは前面に押し出してる。挑発しまくりだ。

それでも男たちは気が付く余裕がないのか、口元に余裕のない笑みを浮かべて懐から黒い機械を取り出した。

「学園都市謹製の小型洗脳装置（テスタメント）だ……！　我々に服従を誓わせる程度なら、この程度の機械でも出来る……！」

げえっ！　冗談じゃねえよ！　今まで実害がないから放置してたが、そんなふざけたことするんだったら俺にも考えがあるぞ、っと……！

「ざっけんな！　テスタメントだかなんだかしらねえが、そんなモンされちゃたまらねえよ！」

叫んだと同時、俺の背中にナイフが押し込まれた。まあ刺さらないように踏ん張ってるから刃こぼれするだけなんだけど。押し込むのに苦労してる男の顔面に肘鉄を食らわせてノーバウンドで数メートル吹っ飛ばし、次に呆然としているほかの男たちに狙いを定める。

「オラァ！」

慎重に狙いを定め、テスタメントとやらを持っている男の右手を殴る。何本かの指と一緒にテスタメントも粉々に破壊された。これでとりあえず悪は滅びた……。

だが俺のオシオキはまだ終了してないぜっ！

未だに現実に追いつけていない残りの男たちを殴り飛ばし、三人の女の子を解放。ぶっちゃけ第四位（だったらしい）の麦野は助ける必要もなかったかなぁと思うわけだが、ついでだ。流石に殺させるのはマズイしな。

「フッ……。俺の力が再生能力だけだと思ったのがそもそもの間違いだったのさ……」

さっと髪の毛をかきあげてカッコつけてから、うさんくさいものを見る目で見られていることに気が付いた。三人の少女……特にサイドテールの少女の視線がキツイ。

サイドテールの少女はメイドっぽい少女と何回かアイコンタクトをかわした後、俺の方を指差して一言。

「君、ちょっとご足労願えるかな」

……なして？

05（後書き）

次回は幕間で小豆陣営の話になる予定です。

幕間０１／とある少女の物見遊山（バケーション）（前書き）

０５の小豆サイドです。

幕間０１／とある少女の物見遊山（バケーション）

幕間０１／とある少女の物見遊山（バケーション）

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

始まりは彼女の一言からだった。

「ねえ、親船。明日ちょっと休暇もらえない？」

フレンダ＝セイヴェルン。

学園都市の暗部組織のうちの一つであり、現在は半ば親船家の傘下となりつつあるチームのうちの一人にして、主に工兵や下部組織との連絡を担っている少女である。

その言葉に、大量の宿題の前で途方に暮れていた少女――親船小豆は少なからず混乱した。確かにフレンダの戦闘力はあまり高くない。しかし、彼女の役割は主に『アイテム』の下部組織との連携だ。彼女がいなくては、絹旗や麦野は思う存分暴れられなくなる。

それはすなわち、結果的に『アイテム』の戦力を下げることになり、小豆の生存確率を下げることにも繋がる。小豆にとっては自らの存命、ひいては平穏（尤もこれに関しては既に微妙だが）は何よりも代え難いものであり、それを無くす可能性はできるだけ排除したいところなのだ。

「……なんで？」
「んー……」

当然、小豆としては相応の理由がなければ許せる行動ではない。
フレンダは何か言いづらい事情でもあるのか言い淀むが、やがて口を開く。

「実は、皆には秘密にしてたけど、私には妹がいるって訳よ」
（……え、マジで？）

小豆は一瞬呆然とした。

（……いやー、初耳だった。フレンダに妹……もしもそうなら原作でフォローがないはずないよな。……まさかそいつも転生者……？）

転生者。その単語は、小豆にとっては殆ど『敵』と同義である。
正史の人物と不用意に関わり、あまつさえ彼女のことをオトそうとする人物が首魁になれるような連中だ。前世が男とはいえ既に一五年強は女として過ごしている身としては、多分な警戒を抱かざるを得なかった。
それに、彼女が生前読んでいた『二次創作』で彼らの首魁のような人物像の主人公がたくさんいたのも、小豆が転生者を警戒する理由の一つだった。

（……二三巻以降に登場した人物、という可能性も有り得るが、もしも『転生者』なら余計な真似をしないように忠告しないといけないな。妹、というと前世の性別はともかく今生の性別は女だろうから、男の転生者よりはまだ信用できる。黒花を介した説得に応じればよし、応じなければ……そのときはまあ、取るべき策を取るしかないか。まあ、フレンダの妹らしいし出来るだけ手荒な真似は使

わずに済むことを祈ろう）

「で、その子――フレメアって言うんだけどね、フレメアが『遊園地に行きたい』って言ってる訳よ。結局、剥離要素（エラーポイント）もそこまで手強かった訳じゃないし、私一人くらい休暇をもらっても問題ないんじゃない？　って思う訳。いい？　私『だけ』よ。ソコ重要」

（……遊園地、か……）

その言葉に、宿題で死に掛けていた小豆の目に少しだけ光が灯った。

小豆は考える。

先ほども言ったとおり、フレンダに自由を与えるのはマズイ。まあ、それだけであればフレンダの挙げる条件次第では黙認しないこともなかったのだが、妹と遊園地に行きたいからと言う理由の休暇を許すのも問題だ。

まして、その妹が転生者である可能性があるというのなら尚更。

それに、丁度勉強の息抜きもしたいところだった。

「馬鹿言っちゃ駄目だよフレンダちゃん。何だって私が護衛のうちの一人を減らすようなリスキーな真似しなくちゃいけないのさ」

「でも……、」

そんなわけでふっとフレンダの提案を鼻で笑う小豆だが、フレンダも妹の願いを叶えられないのは避けたいのか、控えめに拘泥しようとする。そんな様子も、小豆にとっては計算どおりである。

ここから少しずつ話を自分の望む方向に持って行って、『アイテム』総出で遊園地に行く流れに持っていくのが彼女の目的だ。

（まあ、フレンダの言い分も分からないことはないけどな。『アイテム』のような暗部組織とフレメアが接点を持つのは、様々な意味で危険だし。保護者としては何としてもそれを避けたいと考えるのが自然だ）

そう考えつつ、フレンダの姿勢になんとなく頷く小豆。よく観察してみると、フレンダの様子はいつものおちゃらけではなく、どことなく困ったような真面目なような雰囲気を伴っている。

そして、同時に小豆は疑問に思った。

（……ん？　しかし、なら何故『遊園地に行きたい』程度の事情でそれを私に明かしてしまったんだ？　それだと麦野たちに説明する時に結局フレメアという子の存在が『アイテム』に漏れてしまうと思うんだが……）

もしもフレンダが『暗部組織と接点を持たせたくない』という理由でフレメアを『アイテム』から遠ざけるのであれば、適当な理由をでっち上げてフレメアと会えばいいだけの話だ。いくら統括理事会とはいえ休暇中のメンバーの行動を監視するほど暇ではない。

過激派ではない親船ならば、それは尚のこと。少々の嘘くらいならばれる心配もないし、バレたときのリスクだって少ないと言える。

そこまで考えて、小豆はある可能性に思い至った。

（わざと妹の存在を話すことで、私にフレメアの存在を認知させた？）

『アイテム』とはいえ結局は暗部の組織、フレンダとていつ死ぬか分からない状態にある。そんな状況で、フレメアという『大切なモノ』に何の保険もかけないほど、彼女は無用心ではないだろう。

正史では『フレメア』という存在自体描写がなかったからアプローチがあったかは不明となっているが、少なくとも『このフレンダ』はフレメアを絶対安全な環境に置ける手段を持っている。

ここで小豆にフレメアの存在を教えておけば、万一フレンダが死亡したとしても親船はフレメアの身柄を確保し、フレメアを安全に育ててくれる、フレンダはそう予測しているのだろう。

事実、小豆としてもフレンダが死んだらその忘れ形見を保護することくらいは吝かでもない、と考えている。命を賭してまで守りたいとは思わないが、そのくらいのことをする義理くらいは小豆も感じているのであった。無論、危険なようなら即座に見捨てるが。

（だがまあしかし、私には『フレメアが転生者であるかもしれない』という懸念が残ってる。当然、将来的に保護する可能性があるにしてもとりあえず一度会って人となりを確認しないことには始まらないというわけだ。遊園地にもいけるし、丁度良いと言えば丁度良いかな）

「良いよ。私も一緒について行ってあげるから。折角だし『アイテム』総出にしちゃお？」

「嫌よ！　結局それアンタが宿題やりたくないだけって訳でしょ！」

ぴく、と人のよさそうな笑みを浮かべていた小豆の眉が引きつる。ぶっちゃけ、図星だった。別に図星を突かれたところでそんなに痛いわけでもないのだが、何となくプライドが傷ついた感はある。

口元にひくつかせながら小豆はフレンダにつめたい笑みを浮かべ、

「あはは、何言っちゃってるのかなぁフレンダちゃん。じゃあいいよ、麦野さんには『フレンダちゃんは妹と遊びたいから今日の仕事はお休みだって』って言っておいてあげるから」

「えっちょっ待っ！　……分かったわよ……」

「うん、分かればよろしい」

観念したように項垂れるフレンダ。やはり、そこには『麦野たちと接点を持ったらマズイ』という危機感は感じられない。フレンダは恨めしそうに小豆をにらみつけると、そのまま恨み言を吐く。

「鬼畜っ……！　外道っ……！！」

「――フレンダちゃん、口には気をつけようね？」

尤もその悪態でさえ本気の色はなく、そこから小豆は彼女の言動が演技だという自身の推理に確信を持つのだが、それとこれとは話が別。鬼畜やら外道と言われ、半ば惰性でとはいえ『ピュアな女の子』を自称している小豆が黙っていられるはずもなく。

にこり、と満面の笑みとは裏腹に絶対零度の声色で放たれた最後の忠告に、フレンダはかくかくと壊れた人形のように頷いた。

裏に何の思惑もなければそれなりに微笑ましい光景だったのだが。

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

所変わり、第六学区のアミューズメントパーク。

「へぇ、この子がフレンダの妹、ねぇ」

「ふれめあ、可愛い」

「フレンダさんとは超似ても似つきませんね。こう、子猫オーラ的なのが」

「ホントだね～」

「（……お持ち帰りしたいです……！）」

フレンダをそのまま幼くしたような金髪碧眼に、フレンダの趣味だろうピンクや白を基調とした姫ロリ系の風貌の幼女を前に、五人は思い思いの言葉を紡ぐ。

言うまでもないだろうが、上から麦野、滝壺、絹旗、小豆、黒花である。

小声で明らかに犯罪者予備軍なことを口走った黒花を迅速に始末したフレンダは、自身のスカートの端をちょこんと摘んでいるフレメアの頭を軽く撫で、自己紹介を促す。

「……フレメア。フレメア＝セイヴェルン。大体、よろしく」

まだ人見知りが抜けないのか、遠慮がちに五人を眺めつつ自己紹介したフレメアの姿に、六人（フレンダも含んでいる）のハートは悉く打ち抜かれた。

（……かっ、可愛、……いや！　冷静になれ私！　いくら可愛くてもリスクコントロールを怠っちゃ駄目だ！）

思わず全警戒を解きそうになった小豆は、ふっと我に返って気を引き締め直す。

『沿受ちゃん。フレメアちゃんに「禁書」「余計なことするな」って念話（テレパシー）送ってくれない？　正確に伝わらなくても、「そういうニュアンス」が伝わる程度で良いから』

小豆から送られた念話（テレパシー）に、黒花はとりあえず怪訝な表情を浮かべた映像を添えつつ返事を送る。

『何故ですか？　送っても通じないと思いますけど』

『いやね……。正史で「フレメア」なんて存在、いなかったじゃん。私の例もあるし、正史の人物の親族だからって転生者じゃないって断言できるわけじゃないと思うし』

呆れたような小豆の念話（テレパシー）に、黒花はなるほどそのとおりだ、と頷くとフレメアのほうをじっと見つめる。しばらくそうしていると、フレメアは突然びくっ！　と体を震わせて辺りを見渡した。

『……白ですね～。念話（テレパシー）を送った時に脳裏に浮かんだ強い感情も「大体何事!?」といった感じで、念話（テレパシー）が送られたことに疑問を感じるだけで内容にまで注意を向ける余裕はなかったようです～』

『白か黒かは問題じゃないよ。……まあ、一応の確認だったし。それならそれでいいか。仮に転生者でもここで反応を隠し切るってことは妙な真似するつもりはないってことだろうしね』

元々、転生者……即ちある程度の常識を持つ人間であればあんな振る舞いはしないだろう、と考えていた小豆だったので、それっきりとりあえずフレメアへの警戒を解いた。

「どうしたのかにゃーん？　フレメアちゃん、具合悪い？」

「う、ううん。大体大丈夫。ありがと、おか……お姉ちゃん」

「オイ、テメェ、今私のこと『お母さん』って言いかけたよな？

私がそんな年齢（とし）に見えたってのか？　年増って言いてえの、」
「麦野ォォォおおおおおおおッ！！　結局何フレメアに詰め寄っちゃってくれてる訳ェ！？　怖がってるでしょーがこの子がァァァあああああッ！！　ショックでふさぎ込んで折角の遊園地が楽しめなくなったらテメェどう落とし前つけてくれんだコラァ！！」
「ふれんだ、落ち着いて。目が、目が人間じゃなくなってる！」

……一方、フレメア周辺ではフレンダが普段見せない意外な一面を披露し、麦野を怯ませていた。

＊＊＊

フレンダの決死の攻撃に屈した麦野が、『ごめんねー、フレメアちゃん。お姉ちゃんちょっと大人げなかったね？』と全く目が笑っていない笑みと共にフレメアに謝ると、フレメアは壊れた人形のようにかくかくと首を動かして「だだだだ大体大丈夫だよお姉ちゃん！」と叫んでいた。血は争えないようである。

（にしても、まさか臆病系お調子者だと思ってたあのフレンダが麦野相手にあそこまでマジで怒るとはなぁ）

マジで、と言っても後に尾を引くような怒り方ではなかったのだ

が、あんな風に声を荒げるとは小豆も思っていなかった。
自分の死まで勘定に入れて安全の確保を図るくらいだし、それほどフレメアが大事なのか、と小豆は思うが、それにしてもあの過保護具合は常軌を逸していた。フレメアが襲われようものなら鬼神の如く怒り狂うのではないか？　と見る者に思わせるほどであると言えば分かるだろうか。

とはいえ、一応小豆もフレメアのことは『ただの小学生』として扱うと決めた以上、こんな妙に混沌とした雰囲気のまま放置するのも忍びない。

「フレメアちゃん、どこ行きたい？」

お得意の無害アピールスマイル（表面上）を浮かべ、フレメアの瞳を覗き込む小豆を、未だ世の中の酸いも甘いも知らないフレメアは無邪気に信用した。

「大体、ジェットコースターに乗りたい」
「……メリーゴーランドとかじゃなく？」

無害アピールスマイル（表面上）に冷や汗のようなモノを追加した小豆は、おそるおそる尋ねる。

「ジェットコースター」

念の為聞いてみた小豆に、フレメアは即答する。
当然、前世が男な小豆としてはジェットコースター自体に対した忌避感はない。むしろ、ドンと来い、私も行きたいといえるレベルである。ただし、周りの『アイテム』及び黒花はそうも行かない。彼女たちは女の子であり、そういったものは苦手でもおかしくない

のだ。

……絹旗や麦野は、そんなことないかもしれないが。

「……とお宅のお子さんは言っていますが、親御さんは？」

「フレメアが行きたいって言うなら仕方ないって訳よ。学園都市のジェットコースターに身長制限とか年齢制限はないしね？」

そう。ここが学園都市の凄いところである。

学園都市のジェットコースターの安全レバーは特殊な素材で出来ており、伸縮自在、小さな子供でも安全な上、座席ごとに設置されている重心操作と気流操作装置や精神安定用電波などにより、慣性・気流・アトラクションの演出などによる乗客の負担を九〇パーセント近く軽減することが出来る。

よって、『外』のジェットコースターになら確実にある『小さいお子様や心臓に持病をお持ちのお客様はご遠慮ください』といった注意書きが存在しないのである。

もっとも、そんな技術力にあかしてレールを途中で分断、電磁レールを形成することによる擬似的な飛行体験などという途轍もない仕組みを作ってしまっている為、いくら乗ってる最中安全仕様になっているからとはいえ、小さいお子様や心臓に持病をお持ちのお客様は乗る前から敬遠してしまっているのだが。

「……じゃー、皆でジェットコースター乗ろうか」

なんとなくやりきれない感情を抑えつつ『アイテム』及び黒花に確認を取ってみるが、返ってくるのは首肯のみ。

『……なんていうか、「アイテム」の人たちはともかくとして沿受ちゃんもこういうの大丈夫なんだね』

『まあ、現実に「ジェットコースター怖い～」なんて言ってる連中

なんて大半は猫かぶりですからね～。乗ろうと思えば普通に乗れますし～』

なんとなく言ってみた言葉に帰ってきた黒花の言葉に、小豆は自分の中に残っていた女に対する幻想が改めてぶち殺されたのを感じた。

＊＊＊

そんな感じでジェットコースターにたどり着いたのだが。

「嫌、嫌」

ジェットコースターを目の前にしたフレメアは、戦闘機のアクロバット飛行さながらのコースターから聞こえる乗客の悲鳴を聞くなり、それだけ呟いてフレンダの足にしがみついてしまった。

まあ、当然か、と小豆は思った。いくら電磁レールによる安全性が確保されているとはいえ、あんなものを見せられて『安全です』と言われても信用できるわけがなかった。

『ぎィィィいいいいいやァァあああああああああああッ！！』という悲鳴をバックミュージックに、小豆は考える。

（乗りたいなあ、ジェットコースター）

あんな断末魔が聞こえる機械を人はジェットコースターなどと呼ばないのだが、そこはそれ。良い意味でも悪い意味でも小豆はこの街の住人だった。

「乗らないの？」

「フレメアが怖がってるんなら、無理強いはできないって訳よ。そしてフレメアの傍を離れるのも無理だから私も自動的にパス」

「まあ、正直私としてもあんな超バケモノマシーンに乗るのはご遠慮願いたいですね」

「ふれめあが乗らないなら、私もいいや」

そう言ってフレメアに続いて参加を辞す三人。訂正、小豆は科学の街の住人の中でもかなり奇特な部類である。一体何が彼女にこんな特異な嗜好を与えてしまったのだろうか。十中八九小学生時代の経験が原因である。

ともあれ、そもそもジェットコースターに乗りたいと言い出したのはフレメアで、そのフレメアの意思が折れてしまったのなら乗る理由もさしてない。

しかし、小豆的にはわざわざここまで来たのにアトラクションに乗らず引き返すというのも何だか時間の無駄なような気がしたのだった。

「フレメアちゃんが怖いなら仕方ないよねー……。じゃあ私と麦野さんと沿受ちゃんだけで行ってくるよ」

溜息をついた小豆だったが、やはりジェットコースターに行くこ

とは諦めない。麦野はと言うと、もとより『電翼』を使った空戦が行えるレベルである。あの程度でビビるほどの肝の持ち主ではなかった。

黒花はと言うと……、

『ええ～!?　私も参加確定ですか～!?』

流石に禁書世界在住歴三年、未だに学園都市のトンデモ機械に親しめない程度のレベルである。戦闘機の緊急脱出装置を体験できるようなジェットコースターに乗りたいと思えるほど精神は壊れていなかった。

『当然でしょ。いざってときにフレンダちゃんに連絡入れて下部組織から遊園地の監視体制に干渉できないと、私が危ないじゃん』

遊びに興じるときもリスクコントロールを忘れない小豆だが、それならそもそもそんな危険を冒さないようにジェットコースターを諦めればいいじゃないか、と黒花は思う。

しかし、表面上は優しいが実は腹黒なこのご主人様に逆らえない仕様となっている黒花は、それ以上拘泥することはできなかった。

＊＊＊

『うわあぁぁあああああジェットコースターなんて乗ろうとするんじゃなかったぁぁあああぁぁあぁぁあ』

恐慌のあまり却って起伏のない声色の念話（テレパシー）を受け取りつつ、黒花は心中で溜息をついた。

小豆と黒花と麦野は現在、見知らぬ男たちに後ろをとられている状態にある。両手も自由だし、別に拘束されているわけではない。……背中にナイフを押し当てて『動くな』と言われてはいるが。

何故こんなことになったのか、黒花は勿論小豆にさえ心当たりなど存在しない。しないが、なんとなく『こうなるのは当然の流れなんだろうな』というのを小豆は感じていたし、黒花も実際に遭遇して納得してしまった。

小豆の悲惨な過去は聞いたことがあるし、そんなトラブルの星の下に生まれているなんて……と思っていたが、実際に遭遇してみるとなるほど、確かにこれは立ち振る舞いに原因があるというよりはそういう体質だと言った方が説明がつきやすいと思い直した。

（これからずっと、こんな感じなんですか～……。もうやだこの都市……）

グスッと心象風景の中で涙を拭う黒花は、表面上はブルーになりながらも内心で気合を入れなおす。これから、小豆と麦野の意思疎通とフレンダたち待機組との意思疎通を円滑に進めなくてはいけないのだ。いつまでも腑抜けてはいられない。

『Ｍ－Ｏ「ぶちのめす？　このくらいなら最小限の能力展開だけで後は生身でもイケるけど」』

そう考えた矢先、早速麦野から親船へ通信が入る。

『Ｏ－Ｍ「いや、もう一人私たちみたいに囚われてる人間がいるみたいだから別に良い。いつでも反旗は翻せるんだし、とりあえずこいつらの目的を聞き出してから」』

『Ｍ－Ｏ「了解」』

心の中でそう言う小豆の視線の先には、白と黒の少女が同じようにナイフを背中に押し当てられてたたずんでいた。黒いシャツに黒いタンクトップ、黒のハイニーソに黒髪。黒尽くめの格好に反して、肌は不健康なまでに真っ白。見事に白黒な少女だった。

『フレンダさ～ん、下部組織との連絡お願いします～。ちょっと危ない人たちに捕まりました～』

『はぁ!?　……全く、空気の読めない連中め……。了解。結局、さっさとやっとくから』

小豆と麦野の通信を仲介する傍ら、フレンダとの連絡も同時進行で行う。

『Ｏ－Ｍ「麦野さん麦野さん、この人たち何者？」』

『Ｍ－Ｏ「そんなモン私が知る訳……、待てよ？　そういえば「暗部」の情報網に、「三沢塾」が何者かに乗っ取られたって報告があったか。「親船」を敵に回すことを視野に入れられる程度に組織の基盤が出来てて、それでいて「親船」を敵に回すことを視野に入れてしまう程度に追い詰められてる組織って言ったら、私の心当たりのなかじゃそのくらいしかないわね」』

『Ｏ－Ｍ「三沢塾ねー……」』

『Ｍ－Ｏ「前々から何か科学宗教じみてて危ない組織だって目ぇつけられてたんだけどね。「吸血殺し（ディープブラッド）」とかいうレアスキルを誘拐し

て、霧が丘の裏にいるエライ人から抹殺命令が出るかってところで正体不明の誰かに乗っ取られたって感じ。外部の協力者と「幻想殺し（イマジンブレイカー）」を使って潰して、残党は……何だったか。確か「メンバー」っていう連中が消すって話だったはずだけど。……チッ。奴ら、しくじったな」』

麦野が報告と同時に忌々しげに心中で舌打ちする。入院時、黒花が映像つきで戦闘の報告を行って以来、念話（テレパシー）は送信した本人の表情イメージつきで行えるようになり、より正確な意思疎通が可能となっていた。

『どうやら、「三沢塾」事件も正史どおり起こってるみたいですね～』

『だね。まあ上条くん二代目も上手くやってるってことかな～』

『……？　その言い方だと、上条さんと面識があるみたいですけど』

『あれ？　言ってなかったっけ？　私上条くんと友達だよ。中学校三年間隣の席だったしね。まあ今は綺麗さっぱり忘れられてるけど』

『その様子だと上条さんに惚れて……るわけじゃないみたいですね～……。そこは流石親船さんってところでしょうか……』

心中で呆れる黒花。

次いで、フレンダから念話（テレパシー）が入る。

『結局、そっちの状況はどうなってる訳？　麦野が暴れなきゃいけない感じ？　大変なようなら絹旗そっちに寄越そうか』

『ん～……ちょっと待って下さいね』

そう言って一旦黒花は念話（テレパシー）を打ち切り、

『Ｆ－Ｏ「結局、そっちの状況はどうなってる訳？　大変なような

ら絹旗そっちに寄越そうか」』

『Ｏ－Ｆ「問題ないからフレメアちゃんの護衛にでも当てといて」』

親船から届いた念話（テレパシー）をそのままフレンダに流すと、すぐさま返事が返ってきた。

『Ｆ－Ｏ「了解しましたって訳よ～」』

黒花からフレンダの念話（テレパシー）を受け取ったところで、男たちに強制的に歩かされていた足が止まる。

「……、原子崩し（メルトダウナー）、割裂空洞（ダークホール）、超速再生（オートローディング）、……もう一人は能力も分からん雑種か。原子崩し（メルトダウナー）まで確保できるとは……予想外だったが中々幸先がいい」

無事小豆たち一行を人の少ない物陰まで誘導した男たちは、四人を見渡してそう呟いた。

（超速再生（オートローディング）……？　名前から察するに、肉体再生（オートリバース）の上位互換といったところか？）

男の呟きに麦野と小豆と超速再生（オートローディング）の少女が怪訝な表情を、雑種呼ばわりされた黒花は不満げな表情を浮かべる。

「……えーと、『三沢塾』の残党、ってことでいいんだよね？」

とりあえず話を進める為に、小豆は一応の確認作業を行う。男達のうち一人がその言葉に感心したように頷いた。

「流石は『統括理事会』の孫娘。流石に我々が瓦解していたことに

は気付いていた、というわけか」
「……ふぅん、確か『メンバー』の連中が残党狩りをするって話だったはずだけど？」
そんな男に、麦野が値踏みするような視線を投げかけて問いかける。
『メンバー』……『アイテム』や『スクール』と違い、超能力者（レベル５）がいない暗部組織とはいえ、実力で言えば比肩しているともいえるレベルの組織だ。そんな組織を相手に瓦解してるとはいえこうして作戦行動をとれるほどの人数が生き残っていること、それ自体が麦野にしてみれば異様だった。
しかし、男からの返答はさらに異様だった。
「ああ。そして、命からがら逃げてきた、というわけだ。お陰でビルは閉鎖、我々は学園都市の暗部と命がけで鬼ごっこするハメになったってわけだ！」
男はそう言って腹立たしげに地面を蹴った。
聞く人が聞けば、『やはり暗部。命からがら逃げてやっとこれというわけか』と納得してしまうだろうが、麦野にとっては違う。
学園都市の『闇』というのは、そんなに甘い世界じゃない。
命からがら逃げて、大事なモノを何もかも投げ捨て、踏み潰し、それでも尚逃げられない世界。それが科学の世界の頂点に立つこの都市の抱える『闇』だ。
超能力者（レベル５）たる麦野自身が『逃げることさえ馬鹿らしい』と最初から計算の外に弾いているような世界なのだ。それをただの無能力者（レベル０）が、それも『外』からやってきたよそ者が一時的とはいえ逃れられていると言う事実。

（……泳がされてる、って訳ね）

麦野はすぐさま結論に行き着いた。

彼らに最後の武器がある、というのなら話は変わってくるだろうが、『命からがら逃げてきた』という言葉、それから『親船』を敵に回してでも能力者を得たいと考えるほどの切羽詰った行動指針が、それはないと結論付ける。

となると、誰の差し金でここまで泳がされたのかというのが麦野の次の疑問になるのだが、それについては今は分からない。こいつらを叩きのめして後で尋問にかければいいか、と思い未だ続いている男のご高説に耳を傾ける。

「……だが、お前たちがいれば話は変わる。学園都市でも唯一の能力、原子崩し（メルトダウナー）、割裂空洞（ダークホール）、超速再生（オートローディング）。三つの希少な能力が揃えば……！　学園都市を滅ぼすことだって可能なはずだ！！」

直後、麦野は思わずハッ、と男の言葉を鼻で笑い、小豆も同じようなことをしようとして慌てて口を閉じてこらえた。

まあ無理もないことだ、と小豆は思う。

元々、彼女の『正史』の知識によれば『三沢塾』というのは『この世に二つとない再現不可能な能力こそ至高』という『教え』を持つ新興宗教的な側面を多分に併せ持つ組織だった。そんな組織なら、超能力（レベル５）に統括理事会の関係者が珍しい能力持ちと聞けば飛びつくだろう。

超速再生（オートローディング）に関しては不明だが、彼女に関しても何らかの事情があるかもしれない。

一連の思考からそこに行き着いた小豆は、黒花に念話（テレパシー）で指示を出

す。

『沿受ちゃん。お仕事。超速再生（オートローディング）の子と連絡取ってみて。念話（テレパシー）で』

『へ？』

『いや、反逆の打ち合わせをね。流石にこのまま放置してたら危ないだろうし』

『あ、了解です』

心の中で頷いて、黒花は超速再生（オートローディング）の少女とコンタクトを試みる。

黒花の能力、心理同調（コンフォーミティ）は相手の拡散力場から自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を観測し、その観測時のデータから相手の心理状態を読み取り、自らの精神にダウンロードすることで擬似的に読心する能力だ。

相手に擬似念話（テレパシー）を送る際も原理は変わらないが、そのためにはまず相手と自分の間で自分だけの現実（パーソナルリアリティ）をリンクさせる必要があり、なんにしてもまずは相手の心を読む必要がある。

だから、これは当然なことである。

そもそも、超速再生（オートローディング）の少女――カインは、超能力者ではない。したがって、ＡＩＭ拡散力場もなければ自分だけの現実（パーソナルリアリティ）などというものがあるわけでもない。

『魔力』という拡散力場と同じような『周囲に発する力』はあるが、基本的にはそれだけであり、彼女の能力の肝である観測できるレベルの自分だけの現実（パーソナルリアリティ）などあるわけもない。

即ち――、

『あれ？　読めません』

『そんな馬鹿な』

当然、心理同調（コンフォーミティ）は不発に終わる。当然の結果である。

（おかしい。能力者のはずなのに読めないなんてこと有り得ない。相手はＡＩＭ関連の能力ってことか？　だとしたら超速再生（オートローディング）って一体何なんだ？　能力を自動で再生（ロード）するってことなのか？　擬似的な多重能力（デュアルスキル）みたいな？）

そんな裏事情を知らない小豆の脳裏に、様々な仮説が浮かんでは消えていく。

そうこうしているうちに、事態はどんどん進んでいった。

「学園都市謹製の小型洗脳装置（テスタメント）だ……！　我々に服従を誓わせる程度なら、この程度の機械でも出来る……！」

男のうちの一人、誰も拘束していないリーダー格の男が懐からスタンガンサイズの洗脳装置（テスタメント）を取り出し、

「ざっけんな！　テスタメントだかなんだかしらねえが、そんなモンされちゃたまらねえよ！」

カインがその風貌には似つかわしくない粗暴な口調で吼え、

……そして刺し込まれたナイフを逆にへし折り、あっという間に全員の拘束を解除させてしまった。彼女が殴った男の指は、三本ほどバキバキにへし折れて半ば洗脳装置（テスタメント）と融合してしまっている。

「フッ……。俺の力が再生能力だけだと思ったのがそもそもの間違いだったのさ……」

さっとさわやかな笑みを浮かべて髪をかきあげたカインを見て、

小豆は確信した。この身のこなし。明らかに物理法則に喧嘩を売ってる急加速と急カーブ、そして精密な動き。

超能力――肉体操作の発展系などではこうはならない。一方通行（アクセラレータ）でもなければ不可能な挙動だった。

（魔術師？　それも聖人とかその類……）

そして、小豆と黒花だけで出会ったのならスルーできるが、麦野も同行している以上彼女をこのまま見過ごすことなどできるはずもない。そんなことをしようものなら、後で麦野に『何故見逃した？　何か知ってるのか？　吐かないと両断するぞ？』と脅されるに決まっている。

麦野程度なら誤魔化す方法ならいくらでもあるが、滞空回線（アンダーライン）までは誤魔化せるはずもない。とれる選択は一つしかなかった。

「君、ちょっとご足労願えるかな」

……あーもう、どうしようこれ。

胡散臭い笑みを目の前の怪力少女に投げかけながら、小豆は心中で頭を抱えた。

幕間０１／とある少女の物見遊山（バケーション）（後書き）

捏造設定タグ発動。このＳＳでのフレンダはフレメアＬＯＶＥです。

06

後ろから、とてつもなく剣呑な声色の話し声が聞こえた。

「オイアンタら。カインに手ぇ出したら許さないからね」

「あァん？　テメェらこそ自分の立場ぁ弁えてんのか？　外部の人間同士の争いに学園都市の大事な大事な超能力者（レベル５）が二人も巻き込まれてんだぞ？　その報復にすぐさま私の原子崩し（メルトダウナー）を叩き込まれないだけでも有難ぇってモンだろうがよぉ？」

ちょちょちょちょ、ままマジでヤバイって！　む、麦野様、麦野様の口調が戦闘モードに入ってらっしゃる！　具体的なことは忘れたけどブチギレた麦野様はホラー映画みたいな感じの恐ろしさだった気がする。

マジでやめて！　下手すると魔術（オカルト）よりも恐怖（オカルト）だから！

……というわけで、俺は現在割裂空洞（ダークホール）の少女こと親船小豆ちゃんのおうちにご招待されています。

現在、小豆一行に連れられて広くて長い廊下を歩いている最中。日本なのに室内で靴脱がなくていいとかリッチすぎだろ……。

さて、隣には小豆とその従者の黒花沿受。その周辺にフレンダっていう人と滝壺っていう人と絹旗っていう子がいて、その三人の詰問される形でフレッドがたじたじとしていた。後ろでは麦野様とドロシーが凌ぎを削っている。

どうしてこうなったのか、というと。

俺がこれでもかというくらい女の子らしからぬ怪力を発揮してしまったのに能力者なら通じるはずのテレパシーが通じなかったからおかしいと思った、とか。

……うう……なんで気付かなかった……。そうだよ、そりゃそうだよ。科学の街で魔術使ったら絶対疑われるに決まってるじゃんか。

一応スピードは“少女”の括りではあったけど、細かい挙動には運動制御用の魔術を使ってたし、そもそも俺――宵闇の祖（ヴァンパイアロード）の体は特別製だ。

『原初の罰』っていう魔術属性は、超常的な自己治癒と身体能力をもたらす。血を吸わないと本来の機能の数パーセントも出ないと言う話だが、俺の場合その『原初の罰』がどうまかり間違ったのか二つ、知恵の輪のように重なり合って存在しているらしく、恐ろしく頑丈な体になっているのだ。

その体の頑丈さたるや、ふんっと力を込めれば岩よりも体が硬くなるというチート具合。流石に魔術的な祝福を受けた剣の攻撃は食らうが、生半可なナマクラ武器なんかは逆にはこぼれさせてしまうレベル。その硬度を攻撃に使えば……その結果は、さっき男の手で再現したとおりだ。

……そりゃ、そんなもんが目の前で暴れまくってたら不審に思うに決まってるよな……。

ちなみにさっきの……『三沢塾』？　の残党とか言うやつらは、後から来た小豆と麦野の仲間が通報した警察に連行されてた。……警備員だっけ？

……まあ、殺されはしないだろ。何かじゃんじゃん言ってる人が『こいつらはさっさと「外」に弾き飛ばして真人間に戻ってもらうじゃん』って言ってたし。

＊＊＊

side other

小豆は、その報告を見たとき思わず頭を抱えた。
魔術師の素性を知る為に小豆はあらゆるコネを使った。麦野に暗部方面の情報を当たらせ、祖母最中に頭を下げて学園都市のＩＤ発行履歴を調べてもらい、ここ数日の学園都市での『もみ消された事件』も調べた。

本来、あまり自分から動きたがらない彼女がここまでしたのには、理由がある。

（……警戒しすぎかもしれなかったが）

その日、小豆は『フレメアは正史で出てこなかったから転生者かもしれない』という可能性からわざわざ遊園地へと行ったのだ。
ちょうどその日に小豆の知らない魔術師が現れた。直前までの思考回路からして、そんな魔術師が転生者だと疑うのはある意味当然の帰結だろう。
上条は全く関係ない場所だったので彼女が読破していない、いわゆる『ＳＳシリーズ』に登場した人物かとも思ったのだが、そう決め付けて放置するのは愚の骨頂。たとえ労力がかかるとしても、『カインが転生者であるかどうか』は確実に見極め、今後の対応を決めなくてはならない。
それに、仮に彼女……カインが転生者であるとしたら、魔術サイ

ドの転生者の傾向把握や魔術サイドそのものとのつながりにも利用できる。科学サイドは現状、小豆にとって四面楚歌といっても過言ではない状況にある（と本人は思っている）。いざという時の逃げ道は多いほうがいい。

そして、案の定調べてみると出てくる情報の数々。

イギリス清教からじきじきに申請が出された『カイン』に『ドロシー＝ガードナー』に『フレッド＝ゲティングス』という名義でのＩＤの発行依頼。

霧が丘女学院の受付に現れ、秘密厳守のはずの生徒の個人情報を『堂々と』入手した四人組の男女。

二三学区で起こった大規模な水流の異常。急激な熱源の発生。衝撃波が発生するほどの物質の移動痕。

――そして何より。

彼らと共に、少女と戦闘していたメンバーの中に見慣れたツンツン頭……上条当麻を見つけたとき、小豆は確信した。

『こいつらは、剥離要素（エラーポイント）だ』、と。

＊＊＊

ｓｉｄｅカイン

ってな訳で、俺は今小豆の祖母ちゃん、親船最中って人の私室にいる。この部屋の本来の持ち主である最中さんは今は仕事中だとかで外出しているらしい。麦野やらドロシーやらの入室は許可されなかった。というわけで、今は俺と小豆の二人きり。

「……さぁて」

部屋に備え付けられている高級そうな執務机に体重を預けた小豆は、そう言って俺の方へ向き直った。その言葉には、先ほどまでの友好な態度は見えない。

すっ、と左手を真横に掲げた小豆の手の先に、ピシリと音を立てて真っ黒な亀裂が走る。

「……っ！？」

「ああ、安心していいよ。使ったのは『念動防音（サイレンサー）』だしね。害はない。それにしても、いきなり連行しちゃって悪かったね。……えっと、カインちゃん、でいいのかな？　それとも下の名前はＮＧ？」

「……んにゃ。それで問題ねえよ。そもそも俺ファーストネーム持ってないし」

友好的な口調なのにどこか妙に事務的な響きを持つ小豆からの問いに、俺はさらりと答えた。そういえば俺苗字持ってなかったな。まあ、里から脱走した身だし一族の名前も知らなかったから当然か。書類書くときも『カイン』の三文字で十分だし結構楽っちゃ楽なんだがな。

そんな感じの俺に小豆は大して興味もなさそうに『そっか』と言

いながら言葉を続ける。

「えっと、じゃあカインちゃん。君が呼び出された理由は、多分分かってると思う。私も一応一般人とは呼べない立場の人間だから、ある程度この街の情報は調べられる。どうやら、君は『外部』の人間みたいだね。それも、イギリスからの」

話を切り出した瞬間、小豆の声色が底冷えするようなものに変わった。

表情に変化はないから多分本人は意識してやってるわけじゃないと思うが、『敵意』のようなものが感じられる。

「この街には、『天使の涙』の貸借のためにやってきたらしいね。しかし、『天使の涙』は貸借時に大破。研究所の見解としては『天使の涙』の組成が不完全だった為に人肌程度の温度変化で組成が乱れてしまい崩壊、と……。まあ、あれは『未元物質（ダークマター）』製の新物質だからどんなことがあっても驚かないけど、流石にこれはないよね」

まるで何かのレポートを読んでるかのようにすらすらと数日前の事実を語る小豆に、俺は何か得体の知れない恐怖のようなモノを感じる。こっちの素性が何もかも暴かれてしまっているような感覚……。学園都市のものじゃない、正体不明の異能者ってことはバレてると思ったがこれはまさか……。

「一体、この街に何の用があったのかな？　イギリス清教所属の吸血鬼にして――転生者のカインちゃん？」

その言葉を聞いた瞬間、俺は思わず喉が干上がった。

て、転生者……！？　何でこいつはそんなことが分かるんだ！？

俺が転生者である証拠なんか出した覚えないぞ!?　原作のことなんかすっかり忘れてたし!

しかも、俺が吸血鬼ってことまで分かるなんて……!　今回は怪我も負わなかったから、再生能力を披露することもなかったはず……。

「……なんで分かった?」

「……どうやらビンゴみたいだね、お仲間さん。まぁ、学園都市に来てからの君の行動はこっちに全部筒抜け、って言ったら分かるかな?」

なっ……!　が、学園都市ってそんなこともできんのか!?

『お仲間』ってことは……つまり、小豆も転生者ってわけか。俺、吸血殺し(ディープブラッド)ですっかり我を忘れてたからな……。原作を知ってる小豆は、吸血殺し(ディープブラッド)で正気を失った俺を見て、俺が吸血鬼だと確信したんだろう。

……ん?　でも、それでも俺が転生者って確信は持てなくないか?

「……まだ分からない、か。それは、君が上条くんと行動を共にしていたからだよ」

「……上条と知り合いであることが、一体何の意味を持つって言うんだよ?」

俺がそういうと、小豆はさも『馬鹿だなぁ』と言いたげに大げさに溜息をついた。……そりゃ、俺だって自分の頭が良い方だとは思ってないけどそのリアクションは心外だぞ。

「正史では、吸血鬼は二二巻の時点でも『いるかどうかも分からない存在』だった。これは良い?」

「ん、まあ」

辟易しつつも説明し始めた小豆の気迫に押されるように頷く。
二三巻以降は俺も読んでないから、どんなことが起こるのかは分からないが、埃被った記憶を呼び出してみるに吸血鬼は最初に出てきたっきりだった気がする。

「でも、正史でいう二巻と三巻の間で君と上条くんが遭遇したってことは、つまり正史とこっちで剥離が発生してるってこと。私、色んな理由があって『正史とこっち』の違いには結構敏感なんだ。そういうところには大抵『転生者』がいるからね」

小豆の言葉に、俺は納得した。なるほどな。要するに、上条の周りに原作にはない変化があったからイコールその変化は転生者の可能性があるって考えたわけだ。

「で、魔術サイドの転生者に会ったからとりあえず接触を、ってことか」
「まあ、それもあるけど念押しかな」
「念押し？」
「うん。魔術サイドは科学サイドと違ってアレイスターの手が届かないからね」

……アレイスター？　ああ、あの史上最悪の魔術師にして史上最高の科学者って触れ込みの……。
魔術サイドじゃ『法の書の著者＝学園都市統括理事長』って言ったら一発で『情弱乙』って言われるレベルの眉唾情報だが、前世で原作を読んだ俺なら確信を持って言える。何せ、アイツ確か最後の方で思いっきり魔術使ってたからな。衝撃の杖とかなんとかって霊装で。

「まあ、そういうわけで万能なアレイスターだけど、学園都市っていう彼の掌を過ぎてしまえばそれは絶対じゃなくなる。ソレは分かる？」

「うん、まあ」

分かる分かる。確か最後のほうは上条はアレイスターの手を離れたとかって言ってたし。

「基本的に、魔術サイドの動向も問題なさそうなんだよ。インデックスは予定通り上条くんと出会ったし、アウレオルス――……きみが暴走する原因となった錬金術師も予定調和で挫折したみたいだし。転生者が関わってないと正史は歪められないみたいだね」

そこで小豆は「でも」、と前置きする。なんつーかもったいぶった話し方をするやつだな。

「転生者が関われば話は変わる。上条くんには正史どおりの成長をしてもらいたいし、そこにはなるべく異物を挟みたくない。別にストーリーどおりの歴史を垣間見たいなんて馬鹿げた期待があるわけじゃないよ。そうしないと、単純に私の命が危ういってだけで。そこで、きみの『正史』に対する関わり方の方針を聞いておきたいってわけさ」

……ははぁ。なるほど。要するにこいつは、俺が魔術サイドなのをいいことに上条を陥れて状況を面倒なことにしないか心配、ってわけだ。はっきり言ってそんなのあるわけないない。だって上条は俺の友達だし、そいつが困るようなことはしないさ。手助けとかはするにしても、な。

「そりゃ、当然邪魔なんかしないさ。いくら未来を知ってるからっ

て、誰かを駒みたいに扱ってまで幸せになりたいなんて思わないしな」

この世界は、確かに俺の前世の世界じゃ『創作物』だった。でも、今俺が生きているこの世界は確かに『在る』。決められた台詞を吐き出し、動くだけのプログラムじゃなく、考えて自分の心を口にする生きた『人間』が作り上げた世界なんだ。

そんな世界を、人間を、自分の都合の良い様に動く『駒』とか、ただの『キャラクター』としてしか見れないなんて、悲しすぎる。

……昔の俺も同じようなもんだっただけに、余計にな。

そんな風に拳に力を入れた俺を見て、小豆はとりあえず安心したのか、力を抜いた様子で笑う。

「珍しく『改変』を考えてない転生者みたいで安心したよ。で、ものは相談なんだけどさ」

「連絡先交換だろ？　お互い色々と情報交換したいことだってあるだろうしな」

「いや、それもあるんだけどそうじゃなくってね」

気を利かせて携帯を取り出した俺に、小豆は首を振る。……なんだ？　やっぱあれか、魔術を教えてくれ的な？　でも残念ながら俺の使う魔術はどれも原初の罰前提の魔術だからな。常人には使えんよ。

「そっちの転生者状況、教えてくれないかな」

……？　転生者状況？

「いやさ。きみの他にもいるんでしょ？　転生者。確かに『外』の

世界は広いけど、きみはイギリス清教の所属らしいし。転生者で正史に干渉するつもりがあるなら、この時期にはイギリス清教の周辺にいてもおかしくないと思うよ」

……あー、そういうことか……。考えたこともなかった。でも、多分それはないんじゃないかなー、と俺は思う。魔術師ってのは色々な辛い思いを経験して、それでも立ち向かう気持ちを捨てなかった奴がなるもんだ。『原作』がどうのとか言ってる奴らーーっていうか、現代の日本人に、そんな根性はないだろ。俺だって、普通の体で生まれてたら絶対魔術師になんてなってなかったと確信できる。

何だかんだ言って俺は特別じゃない。特別なのは『この体』であって、俺は『この体』を持って生まれた平凡な日本人なら誰もがなる形でしかない。

「んー、俺の知る限りじゃ、ないな。魔術師ってのは、色々事情があってなるモンなんだよ。小豆が危惧してるような奴ら……っていうか、そうじゃなくても大抵の日本人は魔術師になるような根性ないと思うぜ。俺だってこの体で生まれてこなきゃ、今頃普通の女の子として生活してただろうし。……あーでも、俺結構死に際の魔術師とか助けてきたから、原作では死んでることになってる魔術師とか今も生きてたりするな」

「……はぁ、そう」

小豆は頭を抱えて答えた。『こっちとそっちで剥離要素（エラーポイント）の定義が違うってだけの話か……』とか何とか言ってるが、意味は分からない。っていうか剥離要素（エラーポイント）ってもしかしなくても転生者のことか？だとしたら奇妙な偶然だな。

「じゃあ、これが最後の質問。……さっきから相当な男口調だけど、きみってもしかしなくても前世男？」

「ん？　まあ。今はこんなナリだが」

ひらっと黒いタンクトップをはためかせて答えると、急速に小豆から感じられる警戒心がなくなってきたのを感じた。……このタイミングで警戒を解くってことは……、まさか、小豆も？

いやそれはないはず。だってこんなに仕草が女の子っぽいんだぞ？　執務机に体重を預けてる姿とか、軽く妖艶な感じさえしたんだぞ？　それで中身が……嘘だろ！？

「仲間だね」

嘘じゃなかった……だと……！？

＊＊＊

そこからの小豆の変貌っぷりは凄まじかった。

「ホントに、さ……。上条くんは油断したら惚れさせられそうだし、他の転生者からは勝手にハーレム入りさせられそうになるし、アレイスターからは宣戦布告（ラブコール）されるし、垣根……ああ、学園都市の第二位ね、アイツからも宣戦布告（ラブコール）されるし……。私の男運って一体何なの？　馬鹿なの？　死ぬの？」

「小豆、落ち着けよ、落ち着け、冷静になるんだ……」

死んだ魚のような目をしながら呟く小豆を、俺は必死で宥めた。

でも、確かにソレは酷い。俺は上条なら付き合ってもいいかなーとか思うのだが、ラノベ脳に求婚されたり、ラスボスに求婚されたり、ヤの字の人（？）に求婚されるなんて恐ろしすぎる。俺なんかそういう浮ついた関係の話はなかったが……、こんだけ色々と性別関係の問題があったら、そりゃー確かに口調も仕草も女っぽくなるわな。

……言っておくが、『上条なら付き合ってもいい』というのは例えば『友人の男の中で付き合うとしたら、誰を選ぶ？』的な質問で、仕方なく、敢えて選ぶとしたら上条、という意味だ。仮に上条に『付き合ってくれ』と言われても俺は笑顔で断る自信がある。

……かといって、女の子と付き合うのなら良いのか？　と言うと『うーん』って感じなのだが。それもまた、なんか変な感じというか。すっごい可愛い女の子が目の前に現れても、『わー可愛いー』くらいの感動しか抱けない自分がいる。難儀な話だ。

「いいよねぇ、カインちゃんはそんな話なさそうで。まあそっちもそれなりに大変なんだろうけどさ」

「まあな。あとカインちゃんはやめろ。むず痒い」

ふふふ、と荒んだ笑みを浮かべる小豆を窘める。

ってか、俺の前世が男だって分かってんだからそういう呼び方はやめようぜ。別に男だったことに拘るつもりはないけど、普通に性分としてむず痒い。多分、ドロシーも俺がちゃん付けされて呼ばれるのを見たら後で大爆笑しながら俺のことをからかい倒すことだろう。

「ってか、何で小豆はそんな科学サイドの総々たる顔ぶれから求婚されてるわけ？」
「うーん……、ぶっちゃけ、よく分かんないんだよねー……。上条くんは……まああの人の存在意義は建て逃げだからそういうことにして、アレイスターは私の能力を使ってプランを簡略化させるつもりっぽいし。垣根に至ってはさっぱり。私の能力が未元物質（ダークマター）を進化させる～！　とか言ってたけど」

へ、ヘヴィだ……。

「で、転生者のほうは完璧に趣味？　っていうか。『原作キャラをオトす前のウォーミングアップ』的にしか見られてない。もう私のなけなしの女のプライドはズタボロだね。元々そんなもの持ってないけど」
「……ホント、ご愁傷様だな。っていうか、アレイスターに目ぇつけられて上条と接点を持ててるってのがもうすげぇよ」

すくなくとも、俺だったらこの体を持ってても無理だな。そして、この体を持ってなかったら間違いなく即死する。目をつけられたって事実を教えられた時点でショック死する。
だが、小豆はそうじゃないみたいだ。暗部の組織とある程度つながりは持ってるみたいだけど、普通の高校一年生の日常も送っているらしかった。じゃなきゃ、『上条』なんて名前は出てこないだろう。あいつは、この世界の光の象徴みたいなモンなんだから。

「そいえば、カインちゃんさっき『魔術師はそれなりに事情があってなるもんだ』って言ってたけど、カインちゃんも色々事情あったの？」
「そりゃー勿論。里抜けして仲間の吸血鬼に狙われるところから始まって、世界中の魔術結社から命を狙われたりしたぜー。まあ、天

草式の人から魔術を教えてもらったり、ドロシーやフレッド、他にも色んな奴と仲良くなれたからそれはそれで良かったけど。慣れりゃどうってことないさ。今となっては結構幸せな日常だぜ？　これでも」

にかっと笑う俺に、小豆は『ふーん』と興味深げに頷いていた。

まあ、小豆にとってはそんな波乱万丈な日常は願い下げだろう。

脆い人間の体だったら俺だってそうだ。俺がこんな風に楽観的に物事を考えられるのは、偏にこの体のお陰。自分が死ぬ心配がないから、こういう風に考えられるのだ。

……単純と言うか、現金な人間だという自覚はある。多分、俺は人間の体に戻ったら今みたいに善人面して色々とすることはないだろうし。

「羨ましいね。私はそういう風に考えることはできないや」

小豆は、そう言って屈託なく笑った。

まあ、仕方ないだろ。事情が事情だしな。俺の場合、殺そうとした奴も相応の理由があって俺も許せたから仲良くなれたけど、小豆の場合は勝手が違う。アレイスターも、垣根も、転生者も、別に小豆を狙わなくちゃいけない理由があるわけじゃない。

アレイスターにしたって原作じゃ小豆抜きでプランを作ってたわけだし、垣根も同じ。転生者は論外。俺の場合、追っ手や刺客には同情の余地があったけど、小豆からしてみたらこいつらに同情する余地はないんだろう。

……。

小豆は俺の顔を見ながら何かを考えているようだ。だが、俺としては何も話がないのは気まずい。

何だか気持ち湿っぽくなった室内の空気を打開する策はないかと、俺は考えてみた。

「そいえば、小豆の『ソレ』、何？」

うーんと考えていた俺は、たまたま目に付いた小豆の傍らの黒い亀裂を指差す。空間に亀裂なんて、魔術っぽい香りがぷんぷんする現象だ。少なくとも『科学』の領分じゃない。

『魔術』……その中でも、特にインデックスが使ってた『聖ジョージの聖域』みたいなモノのような感じがする。

「これ？　うーん、『科学では説明できない現象』」

「へぇ、『科学では』ねえ」

小豆の言葉に、俺はさらに好奇心を誘われた。

この世にあるのは『科学』と『魔術』。『科学』で説明できないものはたいてい『魔術』だと相場が決まってる。例外は……そう、あの『幻想殺し』くらいのもんだ。

「良く分かんない力で空間に亀裂を入れて、その亀裂の中の黒い空間から超能力の力場――ＡＩＭ拡散力場を放出して、結果的に色んな能力を操れる、っていったら理解できる？」

「要するにたくさん能力が使えるってところ以外は全く」

「だよねぇ」

科学の話は俺の領分じゃねえからな。……って、『科学では説明できない現象』でなんで科学の話になるんだよ？

「ほら、カイン。『原石』って分かるかな？　私はそれ。覚えてるかなぁ……削板軍覇」

……そぎいたぐんは？　誰だそれ。っていうか、『原石』っていう単語すら知らねえよ。

「……その様子だとさっぱりみたいだね。『原石』っていうのは、この街で開発されることなく超能力に目覚めた人間。上条くんも『原石』と似たような、それでいて同じカテゴリではない『何か』だと目されてるね。で、削板はその『原石』の中でも最大の能力を持つ能力者。『最大原石』とか『測定不能』とか色々呼び名はあるけど、能力詳細名は不明だね」

「へぇー……」

っていうと、何か？　小豆は『原石』で、尚且つ科学では説明できない『能力』を持ってる、と……。『科学』でも『魔術』でもない能力。ある意味、『魔術』の中で希少な程度の俺よりも凄い出自じゃないか？

「で、カインの抱えてる事情（のうりょく）は何なのさ？　姫神ちゃんの能力に囚われてたから吸血鬼だろうってことは分かるけども」

「ん？　ああ、俺のは……まあ、簡単に言えば『二重吸血鬼』って奴だ。誰だっけか、ローマ正教のえらい奴に二重聖人ってのがいたろ？　確か」

俺の説明に、小豆はあまり納得がいかないようだった。

「……吸血鬼って、そういう種族じゃないの？　二重とかそんな区別があったりするの？」

「ああ、そこからか」

そういえば、吸血鬼は『原初の罰』っていう魔術属性を持った『

人間』だってのは俺たちが必死こいて調べ上げた情報だったな。原作からしか知識を得ていない小豆なら、知らなくても仕方がないだろう。

「あんだーらいんとかいうので、聞かなかったのか？　俺たち吸血鬼は元は人間。遺伝子構造の中に魔術属性が組み込まれてるだけだ、ってな」

「……。まあ、滞空回線（アンダーライン）はきみたちの戦闘で結構破壊されてたし、私は冒頭だけ見てさっさと切り上げちゃったからね」

そりゃあ、俺と一緒に上条がいたらこいつの性格上びっくりするだろうし慌てるだろうな。冒頭だけ見て切り上げるのも頷ける。

「で、俺はその『原初の罰』が知恵の輪みたいに絡まってる二重吸血鬼――通称宵闇の祖（ヴァンパイアロード）ってわけだ。主な能力はさっきやったみたいな感じ。踏ん張ったら岩より硬くなれたり、すごい力持ちになれたりする。あくまで人間の域をちょいと超えた程度だけどな」

『程度』って言っても、この世界では凄いアドバンテージだということくらいは俺にもわかる。この世界の人間は例外を除けば体の強度は皆人間並みだ。銃を食らえばどんな大魔術師だって死ぬし、どんな超能力者だって死ぬ。

この時点で俺にはアドバンテージがあるのに、さらに俺は『神罰術式』を使えば聖人にも迫る身体能力を得ることができる。その代わり光と炎に弱くなるけど、それだって『懐中電灯の光』や『ライターの炎』程度のレベルじゃ通用しないし、防御用の術式だって揃えてる。

再生能力も持ってるから、めったなことじゃ俺は死なないし、死ねない。たとえ全身を切り刻まれて霊装に組み込まれたとしても、だ。

「へぇ……。まあ、これまた裏がありそうな感じだけど。カイン、私が見た映像ではきみ、ノイズのかかった話し方してたんだよ」
「えっ！？」

『ノイズのかかった話し方』――この世界の人間にとっては『聞きづらいだけ』以上に深い意味はないだろうが、俺にとって……いや、『原作を知る者』にとっては大きな意味を持つ。『ノイズがかかっている』というのはつまり、『天使』に類する者だからだ。
黒翼発生時の一方通行しかり、大天使ミーシャ＝クロイツェフしかり、エイワスしかり。多分、天界だか魔界だかの異界の情報が言語に混じってるんだろうと思うが。

ドロシーたちからは教えてもらわなかった。俺はただ、暴走していただけだって言われたから、そうなんだろうと馬鹿正直に信じていたが……、

「つまり、俺の能力は『吸血鬼』だけじゃ説明できない、別の『何か』があると？」
「それにしたって、魔術で説明できるものではあると思うけどね。暇があったらどこかの魔道図書館さんに聞いてみるのもいいかもよ？」
「……そうさせてもらうさ」

それにしても、ドロシーが隠していたってことは俺には知られたくないこと、ということなんだろう。
天使の言語を話してたってことは、多分天使（テレズマ）の力を封入されてたってことにもなるんだろうし……清教に知られたら面倒そうだな。
……あ、『天使の涙』の研究所で言ってた『天使（テレズマ）の力を入れ

るだけの器はある』っていうのは、もしかしてこれから出てきたこととなのか？

「……！」

そんな風におしゃべりしていると、突然小豆がぴくりと体を震わせた。

「どした？」

「いやね……。私の可愛い部下（メイド）から、『さっさと話を切り上げないとドロシーさんがブチ切れそうで怖いです～』、ってさ。あ、そうそう。きみが転生者だってこと、彼女――沿受ちゃんにも教えていいかな？　あの子も転生者なんだよ」

「ん？　まあ構わないけどよ」

ドロシーだって俺が転生者だってこと知ってるしな。異世界出身だってことまでは知らないけど。

「うん。ありがと。……それじゃ、行こっか。流石に私も怒られたくはないし」

冗談っぽく笑って歩き出す小豆に、俺は一緒に笑って頷いた。

……さあて。

目下の問題は、どうやってドロシーの怒りを宥めるか、ってところだな。

06（後書き）

カインと小豆で認識にそこはかとない齟齬があるのは仕様です

07

そんなわけで、二人での個人面談を終了させた俺たちは客間にいる皆と合流することになった。客間には背の低いテーブルと、それを囲むようにふかふかのソファが置いてあった。流石リッチ親船家といったところだ。

そんな部屋で、黒花とドロシーを除く全員はソファに座ってくつろいでいた。黒花はメイドだからか、小豆の傍らに立ちっぱなし。ドロシーは俺の後ろに立っている。多分敵の目の前で寛ぐものかっていう意地だろう。

この場にいるのはドロシー、フレッド、俺、小豆、麦野、フレンダ、絹旗、滝壺、黒花の九人。従業員っぽい女の人たちもたくさんいたが、入用ってことで退室してもらったらしい。それでも女の子八人に囲まれてフレッドはとっても居辛そうだ。あれ？　これ絵面だけみるとフレッドハーレムじゃね？　……なんかムカつく。彼女持ちのくせに。

「……カイン。何を話した？　答えな」

「『守秘義務があるから言えません、って言え』って言われた」

ちなみに、その他にも部屋を出る時に『私が転生者ってことは誰にも言っちゃ駄目だよ。もし誰かに漏らしたらそれが分かった時点でどんな手を使ってでも口封じしに行くから。きみの周囲の人間も含めてね』って念を押された。いや、殺されたりはしないと思うんだけど、物凄い怒られそうで怖い。なんだかんだで俺の周りの女の人は怒らせたら怖い人ばっかりだ……。小豆は元男だけど。

俺の言葉にジロリと小豆を睨み付けるドロシーと共に、小豆の方を見る。小豆は「あははー」と邪気のない笑いを浮かべているが、

その物腰に男っぽいものは感じられない。やっぱ、お嬢様育ちだからそういう教育とか受けてるのかね。俺なんか未だに大また開きで座るからそのたびにドロシーに頭をばしんって叩かれるんだが。

「テメェ……、」

「あはは。ごめんね、ドロシーさん。別に、ドロシーさんの服装が露出狂みたいとかそういう話はしてないから安心してよ」

「なっ……!?　カインッ!!」

「ひやぁっ!?　違う違う、本当にそんな話してない！　小豆のでまかせだよぉ！」

小豆の言葉にまんまと乗せられたドロシーが、俺に牙を剥く。自覚あるんならもっと布を巻け布を！　っつーか小豆の奴め、息を吐くように嘘つきやがって……！　そうまでしてはぐらかしたいかよ！

「騙したね……！」

「わたしはほんとうのことをいってますのことよー」

俺の言葉に、自分が騙されたことを悟ったのか矛先を小豆に向けるドロシーだが、小豆はやっぱりまともに取り合わない。ドロシーは尚も納得が行かず、未だに矛を収めようとしないが、

「やめておきなさい。聞くだけ無駄よ。そいつも相当念押しされてるだろうし」

小豆から何とか何を話していたのか聞きだせないかと考えていたドロシーに、横合いから声がかけられた。麦野だ。しかし、ドロシーもそれだけで納得がいくものじゃない。

「つったって、こいつとそっちのお嬢さんの間でそんな機密情報や

り取りするほど繋がりがあるわけじゃないだろ？」

うっ……、鋭い。まさか小豆も転生者なんていえないから俺は冷や汗を流しつつポーカーフェイス気取るくらいしかできないけど。……小豆は多分言い訳とか用意してるんだろうなぁ……。今までこの体に頼りきりで頭脳を鍛えてなかった自分が憎い。

「それこそ私に聞かれたって分からないっての。この上司サマは色々考えるトコがあんのよ。少なくとも目に見える形で損することはないと思うから放っといた方が賢明よ。藪突いて蛇が出ても面白くないでしょ？」

「……チッ、そういうことにしといてやる」

隣でだらけきっている小豆の頭を拳で軽く叩く麦野に諭されてドロシーは矛を収めたようだ。

「それにしても、『魔術』、ね……」

話がひと段落ついたところで、麦野が呟いた。これには、俺も小豆も驚いた。どうして麦野が『魔術』なんて言葉を知ってるんだ？

「まぁ、私の能力も『量子論を無視して電子をありえない状態で扱う』っていう、ある意味通常の物理法則を無視した能力だし。意味の分からない現象を起こす第二位の未元物質（ダークマター）もあるわけだし、今更『この世のモノじゃない法則を扱う技術』があっても驚かないけどね……。それでもまさか、学園都市が超能力を開発する技術を生み出す遥か昔から、そんな『別方式』の技術があるとは思わなかったわ。……もしかしたら、その『魔術』が何らかの形で超能力開発に影響を与えている、ってことも有り得るわね」

フン、と呆れているのか感心しているのか分からない調子で鼻を鳴らした麦野。

おいおいおいおい、何だか良く分からんが核心突きすぎだろ……。超能力開発は『稀代の魔術師』アレイスターがやったことだし。『知りすぎたから命を狙われました』、みたいなことないよな……？

小豆も、その危険を心配したわけではないようだが何故か俺と同じように多少狼狽しつつ、麦野に声をかけた。

「あのー……、麦野さん？　どこでその情報を？」

「その様子だと、私たちみたいに情報を聞き出したみたいね」

「……あー、つまりそこの方々から聞き出したってわけねー……」

尋ねた小豆に、麦野はその質問には答えずに全く見当違いの言葉を吐いた。しかし、小豆は麦野の台詞に含まれてる言葉から勝手に答えを見つけ出して納得してしまった。

ううむ、普通に受け答えするよりも効率的に情報を伝達する話し方。何だか二人のコンビネーションの良さを感じてしまうな。……まぁ、当人らは無意識にやってることなんだろうが。

「アタシらとしては、どの神話の理論も使わずにこの世の物理法則を捻じ曲げられるアンタらの方が化け物さね」

ドロシーは、麦野の言葉に同じく呆れているような感心しているような調子で溜息をついた。何だかんだで似たもの同士な、こいつら。

「いやでもさー、結局『別方式』なんてマジなの？　正直私としてはペテンな感じがする訳なんだけどー」

と、ソファにもたれながら機嫌悪そうにしているのは……確か、フレンダだっけ。『アイテム』のメンバーらしいから多分原作にいた奴なんだろうけど、記憶にない。

「……嘘はない。何なら今から示してやってもいいが」

「うぅん？　ナニナニ？　それって結局喧嘩売ってるって考えちゃっても良い訳よねぇ？　私もちょおっとイライラしててさぁ。喧嘩売ってんなら買ってやるけ、」

「あははは、ごめんねー。この子、実は今日家族と遊ぶ予定があって……。三沢塾の一件でご破算になっちゃったんだよねー」

と、見かねた小豆が助け舟を出した。……あー、そりゃ確かに申し訳ねぇな。でも、俺らに当たらないで欲しいよね。

「でもさ、俺たちが帰った後にでも家族と会えるんじゃねえの？」

「それだけじゃねェんだっての！　あのアマ……フレメアに手ェ出しやがって……。見かけたら確実に爆殺してやる！」

「まぁまぁフレンダちゃん……」

……あー、何だか良く分からんが暗部の人って怖いのね。

「……で、そろそろ教えてもらおうかね」

フレンダの怒り顔に呆れ返っていたドロシーは、その場の空気が落ち着いたのを見計らってそう切り出した。……何をだ？　と思ったが、小豆は何のことだか理解しているのか、不敵な笑みを浮かべながら何も言わない。

「君たちを私の家にご招待した理由、だよね？」

小豆の答えに、ドロシーは首を縦に振ることで答えた。知ってるか？　首での答え方は万国共通なんだぜ。……多分。

「まあ、簡単に言えば『君たちを保護して、情報を聞き出す為』かな」

ソファーに寝転がって適当に話す小豆に、全員の視線が集中した。

……ってか、俺たちを誘導したのは俺が転生者かどうか確認する為みたいなことさっき言ってなかったか？　……ああ、方便か。こいつは顔色ひとつ変えずに嘘をつきやがるから一瞬戸惑っちまう。俺の顔色からこいつの言ってることが嘘だってバレたりしたら怒られそうだ。

「まあ、悪くは思わないでよね。一応、君たちがこれ以上厄介ごとに巻き込まれるのを防ぐ意味もあったわけだし。私としても、立場上明らかに学園都市の常識を超えた能力の持ち主を目の前にして放置することは出来ないからね」

「俺は構わなかったけどな。小豆とも友達になれヴ、」

「カインは黙ってな」

ぴいっ！？　て、テメェいきなり頭抑えんな！　舌噛んだだろうが！　痛くないけど！

「その理屈じゃ納得がいかないね。大体、理由がないんだよ。『学園都市』の敗者である――三沢塾とかいう連中が、魔術サイドのカインを狙う理由がね」

ドロシーの纏う空気が、絶対零度のソレに変わる。魔法名を名乗る時のような雰囲気だ。……確かに、ドロシーの言うとおり、何か仕組まれているのかもしれない。でも、仮に仕組まれていたとして

もそれは小豆達によるものじゃない。三沢塾の連中に狙われてた時の小豆達の態度は、緊張感はなかったけど『本気』の反応だった。あれが演技とは思えない。

「……じゃあ、何か？　テメェ、私たちが何か仕組んでいたとでも言いてぇのか？」

「ご名答。アタシたちにあんなことするをメリットはない。だが、アンタらはこうしてアタシたち――魔術サイドの情報を手に入れられたんだ。全てがアンタらの陰謀だったっていう正解が一番納得できるね」

早くも剣呑な空気を発し始めた麦野とドロシー。こいつら戦力もバケモノなんだからめったなことで切れてほしくないんだが……。っていうか、ドロシーいつもより血気盛んだな。麦野と馬が合わなかったのか？

「まぁまぁ。落ち着いて二人とも。それに関しては、私も心当たりがないでもないんだよ」

「……？　聞こうじゃないか」

とりあえず間に入った小豆に、ドロシーは一旦矛を収める。小豆が動いたのを見て麦野も動きを止めた。間一髪だ。

「えっとね。まず、私は先日カインに起こった『事件』のあらすじを把握してる、ってことは断っておくね」

「「！！」」

小豆の前置きに、ドロシーとフレッドが驚愕する。

「……何故それを知っている」

「えへへ、ちょっとカインとお話してる時にね」

小豆の弁明に、ドロシーとフレッドが恨めしげに視線を送ってきた。ちげえよ！　滞空回線（アンダーライン）の情報を盗み見してたんだよ！　何でそこのところを教えないんだよ、ったく……。滞空回線（アンダーライン）のことを言えない事情でもあるのか？　なんにしてもはた迷惑だ。

「で、その原因となっていた『吸血殺し』の能力もある程度把握してる。『吸血鬼を呼び寄せ、殺し尽くす能力』――その能力の為に、三沢塾に監禁されていた姫神秋沙が『外部』の――今にして思うと、多分魔術サイドの人間と接触したことも。多分、三沢塾の残党はその関係で吸血鬼を『圧倒的な自動再生能力を持った原石』と勘違いしたんだと思う」

なるほどな……。『原石』ってのは希少らしいし、吸血鬼も希少だ。多分、俺を含めて世界に五人といないんじゃないか？　もしかしたら俺が最期の一人かも。そんな種族だから、『原石』と勘違いしても仕方ないだろう。

「そして、統括理事会の孫娘で低能力（レベル１）とはいえ希少な能力持ちの私と、学園都市の超能力者である麦野さんを手中に収めれば、学園都市を支配できる、って考えに至ったんだと思うよ。あの人たちは学園都市でもちょっとおかしな部類の人たちでね。『希少な能力こそ至高』っていう妙な教義を掲げちゃってるから。これが、カインと私と麦野さんが襲われた理由だと思う」

小豆の説明に、ドロシーは思わずうなってしまった。俺も唸った。動機に関しては、確かにアウレオルス関係から伝わったと考えれば自然だ。実際そんなことはないだろうけど、魔術サイドで当事者でもないドロシーやフレッドに対してならそういう説明でも納得させ

られる。それに、追い詰められた人間の考えなんて往々にして余裕のある人間には理解できないしな。

「だが、問題がある」

しかし、そこでフレッドが声を上げた。

「確かに、三沢塾がカインとお前たちを狙う動機を持っていたことは分かった。だが、方法の必然性に疑問が残る。カインは研究所の女性研究員にチケットを手渡された。おそらく、あの研究員が俺達サイドの仕掛け人だったのだろうが……、お前たちの場合、そこの金髪の妹が『遊園地に行きたい』と言ったのが始まりだそうじゃあないか。仮にこれが三沢塾が仕組んだモノだとするならば、金髪の妹の思考によって決定する作戦など仕組むはずがない。結局、お前らがこの一件を仕組んだ訳ではないという根拠にはならない」

「それに関しては、私の部下（シスコン）が調べ上げてくれたよ」

そう言って小豆はフレンダに続きを促す。

「……暗部の権限で超能力者（レベル５）に割り振られた『仕事』を漁ってみたら、ある人物の名前が挙がったって訳よ」

……ある人物？　まさか、ソイツのせいで何かがあって～、とかっていう？

「食蜂操折（しょくほうみさき）。能力名は心理掌握（メンタルアウト）。超能力者（レベル５）の一人で序列は第五位。精神感応系能力（テレパス）の大ボスみたいなモンで、精神に関することなら何でも出来る十徳ナイフみたいな奴よ。――そいつが、今回の一件に一枚噛んでたって訳」

フレンダは苦虫を噛み潰すような顔でそう言い切った。……精神系の能力者かー。……ん、待てよ？　この流れだと、その能力者によって干渉されたのは……、

「何でも、フレメアに『遊園地に行きたい』と思わせるだけの簡単な仕事（アルバイト）だったらしいけど念には念を入れて、コッチに気付かれないようにフレメア周辺の記憶操作も行えて尚且つ違和感が出ないほどの精巧さを誇る『奴』が選ばれたって訳よ。まぁ、フレメアの周囲を騙せても肝心の暗部（てもと）の記録を消し忘れてちゃあ世話ないけどねぇ……！」

悪鬼のような形相でしょくほう、とかいう能力者のことを語るフレンダ。……あー、そりゃ怒るよな。自分の家族が精神操作されてたら。それによって悲劇が起こってたかもしれないんだし、何よりそれに気付かなかった自分にムカついているはず。

「となると、学園都市の『上』の連中には俺たちを襲う動機と手段があったけど、小豆達にはなかったってことだよな？」

『上』の連中は……まぁ仕方ないとして、とりあえず小豆達はこの件に関しては俺たちと同じ被害者、つまり協力して頑張ろうぜー的な意味を込めて言ってみると、ドロシーもフレッドも少し黙った。……ふぅ、これでとりあえず小豆達と敵対する要因はなくなったな。

「……クソ、学園都市の奴らめ……。まさか本気でアタシたちと『戦争』する気でいたとはね……！！」

って、えええええええ！？　ドロシーさんが何故か妙に臨戦態勢に入ってらっしゃるのですが！！

「な、何言ってんのドロシー？　小豆達はなんにも悪くないんだよ？　むしろ被害者だよ？　馬鹿なこと、」
「だから、その親船どもの『上』にいる学園都市が今回のことを仕組んだって言うんなら、そりゃあアタシたち魔術サイドへの宣戦布告じゃないか！　こんなことされて黙ってたら魔術サイドは、イギリス清教は科学サイドにナメられちまう。少なくとも、ここらで手痛いダメージでも与えなきゃあね……！」

う、うう！？　ヤバイ！　ドロシー目がマジだ！　此処が敵地とか一切頭に入っていやがらねえ！　いや、頭に入ってるからこそか！　そんなこと言ったら小豆達だって俺たちと交戦せざるを得なく、……あれ？　小豆はおろか麦野もフレンダも他の連中も殺気を発してない。

「いや、うん。それ無理だよ」
「……何だって？」

けろりと言い放った小豆の言葉に、ドロシーは鷹のような目つきで応じる。

「だって、学園都市の上層部が動いてるだろうと推測できるのは私とカインを一箇所に集めたってところだけ。肝心の実行犯は、『学園都市の外部に本部がおいてある組織』である『三沢塾』。学園都市の管轄じゃないから、学園都市が攻撃を仕掛けたことにはならない。そもそも、三沢塾は学園都市の能力者を暴走して監禁するっていう『学園都市への敵対行動』を取ってたんだしね。そもそも手駒だという見方が見当違いって訳」
「そ、んな屁理屈……！」
「通るんだよね、これが」

お、おぉぉ……。なんかよく分かんないけど何とかなりそうだ……。ドロシーも、完全論破されてしまった所為か毒気が抜かれた感じだし。

「……チッ。……分かったよ。アンタらに恨みはないことだし、とりあえずこの怒りは抑えておくよ」

「……そうしてくれると、こっちとしても有難いね」

……何とか矛が納まったようだ。フレッドは何も話してなかったが、大方ドロシーと同じ感情の推移でもしていたのか、釈然としないながらも何となく納得したような空気で座っていた。

「それじゃ、一応話が済んだところで聞いてみるけど、カインたちこれからどうするつもりなの？　『三沢塾』の人たちは多分今頃学園都市の外部の法的機関に引き渡されてる頃だろうけど、もうカイン達の情報は暗部に伝わっちゃったから必ずしも安全じゃないよ。一応、学園都市の滞在ビザが切れるまではウチで匿ってあげてもいいけど」

ドロシーが黙ったのを見てとりあえず話は終わったと考えたのか、次に俺に話を振ってくる小豆。

うーん、どうするってそりゃ決まってるだろ。まだまだビザは残ってるんだし、学園都市めぐりはできないにしても小豆んちで遊びたいし。

「ここに残、」

「出るよ。すぐにでも。元々コイツのお遊びが終わればすぐに帰るつもりだったしね」

……ぐすん。

「安全上の問題も勿論あるが、こちらも清教に呼び出されているからな。……大方、先日の事件と『天使の涙』の件、それから今回の件の事情聴取というところじゃあないか？」

「あー……。上司の人から集合がかかってるんなら仕方ないね。残念だけど行ってらっしゃい。大覇星祭のときには招待状送ってあげるからね～」

フレッドの説明に、小豆はちっとも残念そうに見えない笑顔で答えた。ちくしょう！　俺は厄介者かよ！　い～や～だ～！　まだ帰らない～～！

「ホラ、いつまでへばりついてんだい。行くよ」

ずりずりと引き摺られながら親船邸を後にする俺たちに、小豆は引きとめるでもなく普通に笑顔で手を振っていた。……まぁでも、大覇星祭行けるんなら、まあいいかな……。

「あ、」

そこで俺はある事実に気が付く。

「小豆！　連絡先交換してないじゃん！　大覇星祭行けないじゃん！」

しかし、ドロシーは止まらない。うわ～！　せっかく出来た転生者の友達とここで生き別れなんていやだ～！　そんな風にじたばたしてみる俺に、小豆はさわやかな笑みを浮かべ、

「それについては安心していいよ。色々してあるから！」

……うん？　『色々』って？

＊＊＊

そんなわけで、俺は今学園都市からロンドンへ直通の音速旅客機に乗っている。

うう……。折角出来た友達だったのに……。くそ、またすぐにでも適当な理由つけて学園都市に乗り込んでやる。

「仕方ないとはいえあれだけの騒ぎを起こしたんだもんね。最悪減給かねぇー……。はぁー……」

そんな風に息巻いている俺の隣で、音速で飛行する旅客機の窓の外を眺めながら溜息をついているのはドロシーだ。俺たち一行の家計簿付け（？）を担当してるこいつは、こういう金関係の懸念に関しては結構敏感だったりする。

あー、なんか罪悪感。あの後死ぬほど土下座したら逆にしこたま抱きしめられたから、もう謝ったりはしないけど。

うおっ、窓の外すげえ！　景色が流線型だ！　なんか別世界みて

え！

と、そんな風に流線型の世界の景色を吸血鬼の動体視力を使い把握するという馬鹿なことをしていた俺は、そこで振動を感知した。携帯電話のバイブレーションだ。

ちなみにこの高圧力下で電子機器が正常に機能しているのは、俺が圧力制御用の魔術を使っているからに他ならない。ドロシーもフレッドも、俺と同じように圧力制御用魔術を使用してる。どれも全部原理は違うモノだけどな。

っと、メールが来てたんだっけ。どれどれ……。

メールを調べてみると、そこにはこうあった。

『やっほー！届いてるかな？
学園都市に入るときには　大体精密機械の類は自動精査されるんだよ（＾＾）
カインのはちょっと特殊な入り方だから無理だったけど
ドロシーさんの電話帳からアドと携番盗んじゃった（＊（ ∇（ ＊）テヘ♪

一応下に私の携番も書いといたから　アドとあわせて登録よろしくおねがいしますｍ（＿＿）ｍ』

……小豆だ。にしても、そんなのってアリかよ！？　もう個人情報もクソもねえじゃねえか！　いやまぁ、企業スパイとか普通に入ってくる学園都市的には最低限の設備なのかもしんないけどさ。なんかもう呆れて何も言えねえ……。

まあいっか。とりあえず小豆のメアドも手に入ったわけだし。こ

れで大覇星祭には行けるな。……それなら、俺もハロウィンパーティのときに小豆たちを招待しようかな。

外泊は難しいって話だったけど上条も何だかんだで天使堕し（エンゼルフォール）のときは外泊してたはずだし、行けるだろ。それはともかく、とりあえず返信返信……。

『そんな話聞いてねー！

……今度から学園都市に行く時は持って来ないようにするわ。

あと登録しといたぜーこれからもよろしく。

ps

ドロシーの携帯盗み見したことは秘密にしといたほうがいいぜー。

あいつ携帯の中身覗かれるとキレるから。』

送信、っと。

……っていうか、なんつーか、なんだかなぁ。小豆。

「なあフレッド、さっきから何そわそわしてんだい？」

「……」

ん？　そういえば確かにいつも無口無表情がデフォのフレッドが何かそわそわしてるな。……あ、そうか。こいつイギリス清教に彼女預けてるんだっけ。

「彼女が恋しいかよ？」

にやにやしながら顔を覗き込む俺に、フレッドははっとしたように表情を固める。分かりやすいやつだ。

「……彼女（ガールフレンド）じゃない。婚約者（フィアンセ）だ」

「あ、そう……」

……予想の斜め上を行く訂正が入った。いや確かに、『カインの体を治したら、俺は結婚するつもりだ』とあからさまな死亡フラグをおっ立てやがったのは記憶に新しいけど。

……早いトコ結婚させてやる為に、俺もさっさと人間にならないとなー……。まあ人間に戻ってもこの幼児体型は治りそうにないけど。吸血鬼がロリって何なの？　世界の法則なの？　死ぬの？　そりゃ俺は男だし、幼女体型でも女的な不満を感じたりはしないけどよー……。

いい加減風呂に入るたびにドロシーににやにや笑われるのは耐えられねえんだよ！！　なんだアイツ、いつもいつも俺の胸突きやがって！　当て付けか！　その無駄に実った乳房の血ぃ吸ってしわくちゃ垂れ乳に変えてやろうか！！

と、そんなことを考えていたらロンドンに到着したようだ。流石は学園都市の音速旅客機、馬鹿話してたらすぐに着いたぜ！

「まあ、とりあえずカインがこってり絞られるだけで済んだら僥倖ってトコかね……。流石に追い出されるのはないと思うけど……」

すっかり煤けた様子でぶつぶつと呟いてるドロシーを見て、俺は思わず息を呑んだ。そういや、前回会った時の印象が大きいけどローラって一応最大主教（アークビショップ）なんだよな。一応。

「おや、カインにドロシー、フレッド。もうロンドンに帰っていたのですか」

そんな風に憂鬱になりつつ手続きを終わらせ空港を出て清教の迎

えを待っていたら、丁度俺と同じように空港に到着して清教の女子寮に向かう最中な神裂と会った。いつもと同じヘソ出しルックな彼女だが、今はそのヘソは包帯が巻かれて隠れている。……お仕事の帰りか。

「ああ、一応なー。神裂も……その感じだと帰りっぽいな。傷は大丈夫か？」

「ええ。このくらいかすり傷ですよ。仮にも私は『聖人』ですからね……」

そう言って儚げに笑う神裂。そういえば、こいつは『聖人』であることにコンプレックスを感じてるとかそんな感じだったっけ。『幸運』を奪ってるとか、そんな。なんだかなー。かなり贅沢な悩みだと思うんだけど。……いや、不老不死を疎ましく感じてる俺も同類か。

まあ、多分この『なんだかなー』な気分も同属嫌悪っていう奴だろう。考えようによってはシンパシーのようなものにも感じられる。そう思うと、何だか神裂嬢にも親近感沸くな。

「丁度良かったカンザキ。なんか滅俸されそうな空気なんだよ。同い年のよしみでしばらくコッチ方面とか面倒見てくれないかね？」

「……一つ言っておくと、私は一八歳で、あなたは一九歳。同い年ではありません。二〇代半ばと間違えられるよりはまだマシですが……、ですが！！　私は断じて一八歳であって、決して一九歳ではないんですッ！！」

「え、あ、そう……」

「気分を害しました。先に寮に戻ります」

「ええっ！？　ちょいと待っておくれよ！　オカネの話は！？」

「知りませんッ！！」

そう叫ぶと、ダンッ！！　と地面を思い切り踏みしめて神裂は空を飛んで行ってしまわれた。……年齢ネタ、地雷だったのな……。たった一歳だけなのに……。

＊＊＊

「さて、此度の件に関することになりしけど、カインらは無罪放免ということになりけるから、安心すべしなのよ」

そんなわけで、俺たちは今イギリス清教の本拠地、聖ジョージ大聖堂に召集を受けてローラと謁見していた。物凄いお説教を覚悟していたのだが、意外にもローラは何のお咎めもしないようだった。

「マジで？　油断させといて後で一人だけ居残りでお説教とかない？」

「マジマジかりけるのよ、カイン。むしろ、私としては褒めて遣わしたいほど」

マジかよ……。俺、今回ので何かしたっけ？

「まず第一に、向こうの所持していた『天使の涙』を破壊したること。アレは学園都市には過ぎた霊装なりけるし、ドロシー達の報告

から『天使の涙』の霊装的属性が判明せしめたるもイギリス清教にとってはプラスになりたることよ」

『尤も、破壊した霊装は十中八九「コピー」にありけるだろうからそこまで手放しで喜べる事態でもなきしにつきなのだけれど』とローラは言う。

ムズかしいことは良く分かんないが、要するに俺が怒られることはない、つまりドロシーの給料も減ることはないし、俺の小遣いも減ることはないってことだ！　よかったよかった！

「そして第二に、向こうの重要人物たちとパイプを繋げたること。まあ、可及的速やかに利用せらるるものでもなかりしけけど、手札が増えることは喜ばしきこと。改めて褒めて遣わすわよ、カイン」

「ははーっ、ありがたき幸せー！」

とりあえずノリで平伏してみると、ローラは可愛げのある笑みを浮かべて『うむ、カインはやっぱり良く分かりけるわね！』と頷いていた。なんつーか、威厳に欠ける上司サマだ。カリスマ（笑）。

「……話が済んだのなら、俺は戻る。用があるのでな」

「タリア＝スリーピングフォレストなら清教の女子寮に居りけるわよー」

「……、……」

さっさと出て行こうとした矢先にかけられたローラの言葉に、フレッドはバツの悪そうな表情をする。まあ、分かりやすすぎるってモンだよな、流石に。俺もアイツがどこに行こうとしてるのか分かったし。

「そんじゃカイン。アタシたちも寮に戻ろっか。どうせまた日本に

とんぼ返りするんだし、霊装関係も整えておきたいからね」

優しげに微笑んできたドロシーに、俺も頷き微笑み返す。

まあ、なんだ。

色々あったが、これが俺の日常、だな。

＊＊＊

――窓のないビルにて。

『……さて、お互いの狙い通りに「二つの剥離要素（エラーポイント）」をつなぐパイプラインは完成したりけるようだけど？』

手術衣のような緑一色の服を着た『人間』は、モニターごしに見える、下手をすると宝石店に並んでいそうなほど綺麗な金髪の少女と会話していた。会話、といってもプライベートなものではない。……非公式ではあるが、『各勢力を纏める長として』の通信だった。

「はて、狙い通りとは、一体どういうことだろうか。私としては、全く以って不測の事態だったのだがな。あの少女は全くいつもいつもやってくれる。おかげで私はその後始末のために困らせられてい

るよ」

『何を白々しきことを。部下を通してうちの爆弾（カイン）に遊園地のチケットを渡したること、既にこちらの耳には入りけるのよ』

ふざけたような口調とは裏腹に、『会話相手』の少女の口調は絶対零度の冷たさを誇っていた。日ごろ、敵意を持った小豆の放つ『無感情な雰囲気』にも似たものが、彼女の声には篭っている。

『そも、そちらのお嬢様が斯様に無警戒な行動に出たのにも私は疑問を感じたりけるけど？　大方、周辺の人間の思考を操作してお前の思い通りになるように誘導しけるだけの話なめりしけど』

「さあな、アレとて人間だ。警戒が解けることだってあるだろう。それに、遊園地のチケットに関しても同様だ。『ただの親切な研究員が、打ちひしがれた様子の童女に同情して遊びを提供した』……そう、好意的に解釈することはできないかね？」

『無茶がありしわね』

即答した金髪の少女に、『人間』は呆れたような溜息をついた。

「なら、この話はやめにしよう。どちらも『真実だと思っている』ことだけを信じ、相手を信じようとしないのならば堂々巡りだ。下手に会話を続けてヒートアップし、折角の同盟関係を反故にするような初歩的なミスは私としても願い下げだからな」

『人間』のさも道義を弁えたような言葉に、少女もまた嘆息した。その溜息には『どの口がそんなことを言うか』という含みがあったが、直接言われた訳でもないので『人間』は無視する。

「ともあれ、折角お互いのサイドの重要人物が親交を深めたのだ。これを機に……といっては何だが、我々教会と科学もより一層の友

好を」

『……然様ね。統括理事長アレイスター＝クロウリー』

「分かってくれて嬉しいよ、イギリス清教最大主教（アークビショップ）ローラ＝スチュアート」

お互いがにこやかな笑みを浮かべ、それを最後に通信は終了した。

科学と魔術が交差した時、確かに物語は始まった。

ならば、科学（エラー）と魔術（エラー）が交差した時、物語はどうなる？

07（後書き）

・次話でとりあえずカイン編は最終話となります。
・心理掌握さんのフルネームは超電磁砲で出た公式設定です。

七月一三日修正

08（前書き）

カイン編？最終話です。今回は陰謀臭のないちゃんとしたほのぼの回……のはずです。

08

俺の日常（ものがたり）は、そんなに変わらなかった。

「全く、カインのココはちっとも大きくなんないねぇ。アンタと同じくらいの身長の……、親船だっけ？　アイツでももう少しあったみたいだけど」

つんつん、と俺の胸の先にちょっとした刺激が走り、続いてタイル張りの浴室に、ドロシーの悲しげな声が響く。……テメェが嘆くなよ。当事者俺なんだからさ。

そんな訳で、俺は現在ドロシーと一緒に清教女子寮で湯船に肩まで浸かり、朝風呂と洒落込んでいた。ココに来た当初は西洋だから無いもんだとばかり思ってた湯船だが、意外と普通に存在していた。

よく考えたら神裂も利用してるわけだし、ヨーロッパ人全員シャワーのみな訳ないから当然なんだけど、何となく新鮮な気分だったのは覚えてる。

さて、何で俺が朝風呂なんかしてるかの説明だが、単純な算数の計算問題だ。

俺は学園都市を午後二時に出て、午後二時半時に音速旅客機に乗り込んでロンドンへと向かった。音速旅客機はものの十数分でロンドンについてしまったので、飛行時間については考えないものとする。そして、東京―ロンドン間の時差はおおよそマイナス九時間。

さて、到着時間は何時？

答えはロンドン時間で五時半！　ローラと会談したりフレッドとタリアの逢瀬を覗いてにやにやしてから仮眠をとったから、風呂に入ったのは大体六時半になっちまったけど、この時期、六時ともな

ればすっかり日の出は終わってるので朝風呂でも間違いは無い。

「揉めば大きくなるかね？」

「……うるせぇな。その無駄にデカイ乳吸血して皮だけにしてやろうかこの乳袋」

そう言って手をわきわきさせ始めたので、そのままにさせちゃメンドクサイと思い軽く牙を剥いて威嚇してみる。吸血鬼だからなのか、俺の犬歯は中々発達している。

くっと唇を剥いてみれば、そこには獰猛な牙が～……といった感じで、いかに俺が女の子の姿であったとしても一般人が見たら腰を抜かすレベル……のはず。ドロシーには聞かないけど。

「おぉ、怖い怖い」

案の定、ドロシーは両手を挙げて肩を竦めて見せた。……全然威嚇になってねぇってことかよ。……はぁ。

「なあドロシー。お前俺に裸見られていやじゃないのかよ？　一応俺、前世は男なんだけど」

ちょっと目を伏せてみて、指で水面を弾いてドロシーに問いかける。

ドロシーは、色々あって俺が転生者であるという事実を知っている。流石に原作云々までは知らない、当然俺が元男だという事実も知ってるわけで……。

「うーん、可愛いので許す！」

「……何だソレ」

そこのところを何度も問いかけてみているのだが、ドロシーはそのたびにこんな感じでのらりくらりとかわしてしまう。

どう見ても男……としては見られてないよな。いいトコ姉妹、いや妹……悪くすれば娘みたいに思われてるのかもしれない。まあ、別に良いんだけど……。……いや、なんか嫌だ。

「それにさ、それを言ったらアンタだって精神が男ならアタシの体見て何か思わないのかい？　自慢じゃないが結構魅力的な方だと思うがね」

ん？　魅力的って、誰が？

……あ、あ～～。ドロシーがか。

「あぁ――……。……考えたこともなかったわ……」

「……ほらね。まあ、それはそれでアタシ的にちょっとプライドが傷つく話でもあるんだけどさ。アタシの体に欲情しないような男は、世間一般では『まともな趣味』とは言わないと思うんだよね。だから問題ない。可愛いし」

そう言ってドロシーは湯船のお湯で俺の顔面を濡らす。うびゃー、と言ってよけようとするが、体ごと抱きすくめられて捕まってしまった。

……なるほど、胸とか腰とか色々当たってて確かに男がこんなことやられたらR指定入りそうな状況だが、何でか普通に戯れているようにしか見えないな。

「ほら、いつまでもぶーたれてんじゃないよ。アンタ吸血鬼の癖に上(のぼ)せんだから。さっさと上がりな」

「へいへい」

……実際には上せてるわけじゃない。上せてる『気分』を味わってるだけだ。吸血鬼だからな。そんなヤワな体してねえよ。そんな言い訳を頭の中で考えながら、俺は湯船から上がった。

＊＊＊

「じゃあ、ちょっと早いけどブレイクファーストと行こうかね」

風呂から上がって自室に戻る最中、ドロシーのそんな言葉がきっかけになって、俺たちは女子寮の食堂へと向かうことになった。

食堂までの間、イギリス料理はマズくて食えたもんじゃないだの、それを純血のイギリス人が言っていいのかだのといいながら歩いていると、食堂の方から声が聞こえてきた。

「……タリア！　……」

「……から、……なるって！　……」

なんか言い争ってるような～……と思いつつ、知らない奴なら気にせんでも良いと思いスルーして食堂に入ろうとすると、ドロシーが俺の襟首を掴んで物陰に引っ込ませた。思わずぐえっと鶏が首を絞められたような声を出しかけたが、空気を読んで気合で堪えた。

「（カイン、どうやら食堂は先客がいるみたいだよ）」

そう呟かれて食堂の影からゆっくりと顔を出してみると、そこにはフレッドとその婚約者タリアの姿があった。

普段二人でいる時は全身の毛穴から轟！　と言わんばかりの勢いで砂糖が噴出しそうなオーラを漂わせているこいつらだが、今に限ってはそんなムードもノーバウンドで数十メートル吹っ飛びそうなくらいの勢いで険悪な空気だった。

「（……ドロシー、何だかここにいちゃまずそうな空気だぜ）」

「（だぁね。とりあえず食堂は諦めて、カンザキ辺りの部屋に行って飯でも強請ってくるかい？）」

「（いや、神裂は今大丈夫なのか……？　帰国直後になんか凄い怒らせてた気が……）」

そんな風に言い合っていると、食堂から聞こえてくる声が段々と大きくなってきた。

「だから、私はも……んだって！　魔……るって。そしてフレッ……を……て！　どうし……くれないの！？」

「分かっ……い……のは……だッ！　……ることが、あの雌……門に……とがどれほど危険……のかッ！」

「でもフレッ……危……でやってきたって！　ローラさ……、」

……どうやら下手に盗み聞きするのも野暮なお話みたいだ。ドロシーもそれを悟ったのか、俺の腕を肘で突き、そして袖を引っ張る。

「（カイン、さっさと行くよ。アタシゃああいう感じの話に聞き耳

立てる趣味はないんだ）」
「（……同感だぜ）」

痴話喧嘩は犬も食わないが、それは血を啜って生きてる吸血鬼だって同じだ。俺は血も啜ってないけど。妙な話を耳に入れる前に、俺たちはさっさと女子寮に引き返していった。

＊＊＊

「……で、この時間でも起きている私のところに来た、と」

午前七時。俺たちは神裂の部屋にやってきていた。
清教の朝は基本的に遅い。魔術師ってのは大抵マイペースな人種だからな、この時間からおきてるのは神裂と、早い時間に仕事がある連中のみだ。……そして、やっぱり数時間じゃ神裂の機嫌も治っていないらしく、ドロシーはともかく俺にまでツンツンした態度をとってくる。
それでも唯閃（だっけ？）の手入れを一時中断してお茶を出してもてなしてくれるあたり、神裂はやっぱり礼儀正しいなあと思う。何気に入れてくれたお茶に茶柱が三本くらいずつ立ってるし。聖人マジぱねぇ。

だが、お茶だけじゃお腹は膨れない。ココに来たのはご飯を恵んでもらう為で、おあいそはまだ後でいいのだ。

「頼む！　何だかんだで昨日昼飯食ってから何も食ってないんだ。お腹空きすぎて……死にそうなんだよ。俺死なないけど」

ちゃぶ台に手をつけ、深々と頭を下げてお願いする。そうしていると、神裂も俺の熱意を感じ取ってくれたのか溜息をついて口を開いてくれた。

「死なないなら良いじゃないですか」

「ＳＵＮ値的な何かがガリガリ削れて行くんだよ！！」

……と思ったら駄目だった。死ななけりゃ良いってもんじゃねえんだよ……。

『人間らしく生きる』ってな、結構大変なんだぜ？　一日最低でも一食、できれば毎日三食、睡眠時間は大体六時間以上、適度な運動と適度な勉強で脳と体がなまらないように、あと人は殺さない。こんな風にしてなきゃ、このチートスペックの体じゃ『人間』を忘れちまう。

「お願いだよぉ……」

「うっ……」

お腹が空きすぎて涙目になりつつ、神にもすがる気持ちでお願いしてみた。脇にいるドロシーの眼光がどんどん鋭くなっていく。これで折れてくれると嬉しいんだけど……。

「……し、仕方ないですね。ご飯と、それから鮭だけで良いのなら」

「全然ッ！　全然良いよ！　むしろ有難う！　流石神裂！」

俺の必死に交渉とドロシーのプレッシャーのお陰か、何とか一杯のご飯と一切れの鮭にありつくことができた。俺はともかく、ドロシーも結構日本暮らしが長いから和食はおいしくいただける。ましてお腹が空いてるんだから尚更だ。

「いっただきまーす！」

俺は二も無くご飯を口の中にかきこんだ。

「……それにしても、あなたたちはよく日本食が食べられますね。他の清教のメンバーは食感の違いや風味を理由に忌避していますが」

「……ん、まあ。アタシはカインと一緒に旅して長いからね。コイツ、生まれも育ちも日本だしね」

「もふもふ、」

まあ、今生でも日本で生まれて、一〇年前にドロシーと出会って色々あって『人間になる』為に海外に出るまでは日本暮らしだったし、前世は二十数年間ついぞ日本を出ることは無かったからな。

血筋はともかく（カインの末裔だから……ユダヤ人？）、精神面は完璧に日本人だ。ワールドカップでは迷わず日本を応援する。……まあ、『吸血鬼だったら普通どこどこの国を応援する』みたいなセオリーなんて知らないんだけどな。

「……、不思議な人ですね、あなたたちは。吸血鬼に、ガードナー派の魔女。十字教から毛嫌いされているのは分かっているはずなのに、それでも尚ここに来るのですから。もう少し他にやりようはあったんじゃないですか？　例えば、世界中に散在している貴女の信奉者をアテにするとか」

神裂に言われて、俺は思わずご飯を飲み込みながら唸ってしまった。確かに、それはそうなんだけどな。

一応、フリーダム世界代表と名高いイギリス清教だって十字教の宗派の一つに過ぎない。ローマ正教の部隊を丸ごと引き込んだり、ローマ正教の暗号解読のエキスパートを引き込んだり、魔術サイドの怨敵である科学サイドと同名結んでたりするのはオーケーでも、流石に十字教全体の仇敵である吸血鬼や、十字教教義に乗っ取っていない魔女狩り裁判で裁かれるような魔女まで優遇される訳じゃない、らしい。

ただの炎の魔術師で、宗教とかはそこまで関係ないフレッドだって『サラマンダーという十字教教義にはない精霊を召喚している』という理由で煙たがられてるくらいらしいし。

その点、信奉者なんてたいそうなモンじゃないけど気のいい連中であるあいつらなら、何も言わずに俺たちの面倒を見てくれたことだろう。

「確かにそうかもな。アイツら揃いも揃って良い奴ばっかだし、俺が頼めば色々工面してくれるかもしれねぇ。でもさ、それじゃ駄目なんだよ。別に俺はあいつらにそういうことを期待して動いてたわけじゃない。むしろ、俺が助けられる力を持ってたから助けたってだけなんだ。そんな俺が、助けを求める筋合いなんかねえだろ」

それに……、これはドロシーから聞いた話なんだが、万一ドロシーや俺が清教入りを拒まれても、タリアっていう呪いにかけられた少女を助ける為にやってきた『ただの炎の魔術師』であるフレッドは確実に引き取ってもらえたはずらしい。

そもそも俺たちが清教に接触した理由は『タリアの保護』だったし、そういうことなら別に俺やドロシーが弾かれても問題は無かった。今はイギリス清教だからっていう理由で魔術結社からの暗殺未

遂は少なくなったけど、まあ元々殺されることもなかったし。
元々人間に戻る方法を探る為に旅を続けてる身だし、それは今のところどこも変わってない。

つまり、俺たちの所属云々は大して重要な問題じゃない、ってことだな。まあ、何より現に受け入れてもらえてる状況で、そんな気の滅入ることを考えても仕方ないっていうのもある。

「……、……そう、ですね。すみません。無礼なことを」
「……へ？　ん、いや、まあ。何が無礼なのか良くわかんないけど別にいいぜ」

何か神裂が目を伏せて何か考えてるみたいだったけど、生憎俺には何のことだかさっぱりだった。……置いてきた天草式の連中のことでも想ってるのか？　じゃあさっさと迎えに行けばいいのに。意地らしいなあ。

――ごくん。ご飯も鮭も完食だぜ。

「気が変わりました。特製の梅干があるので振舞ってあげましょう」

色々考えてた神裂だったが、顔を上げるとふっと微笑んで棚の中から壷を取り出した。おお、梅干……！　神裂のは自家製なんだったか。想像するだけでご飯をたくさん食べたくなるぜ。

「はい、これです」
「いっただきまー、」

壷から出された梅干をすぐさま摘んで口に運ぶ。
ホントはご飯があれば一緒に食べたかったんだがなー。生憎全部

食べちゃったし。まあ、前世でもたまに梅干一粒丸ごとをご飯無しで食べる、っていうのは何度かやったことあるし、問題は無い。

……しかし、ここで一つ誤算があった。

確かに俺は、前世じゃ梅干を丸ごと摘んで食う、なんてことはままあった。

だが、それは『市販品』というのと、大人だったから舌の刺激に強かった、というのが大きな理由だ。この世界での俺は、まあいわゆる逃亡生活的な日常を送っていたから高級なモノなんか数えるほどしか食ったことがない。

つまり、舌が刺激に慣れてないのだ。そういえば思い返してみれば辛味の類も数えるほどしか食ってない気がする。まして、神裂の梅干は自家製、塩味も酸味も彼女好みの――言うなれば濃い味付けになっている。

それがどういう事態を引き起こすか。

……ドロシーが振舞われた梅干に手を伸ばさなかった理由を考えるべきだったな。

「しゅっぱ――――っ!?!?!?!?」

……俺の悲鳴が、朝の清教女子寮に轟いた。

＊＊＊

昼、午前一一時三五分、俺は太陽の光を浴びながら清教の女子寮の中をうろうろしていた。

ロンドンも既に夏真っ盛り。一二時近くなっていると、太陽はさんさんと照っている。吸血鬼の俺は、紫外線の肌のダメージも再生するからいくら太陽を浴びても問題ない。普通吸血鬼って太陽にやられる側だよな？　と思いつつ、日光浴は俺の日常の楽しみとなっている。この世界の吸血鬼ってやっぱり何か変だ。

あの後、梅干の酸っぱさにびっくりして思わず噛まずに飲み込んだ為に梅干が喉に詰まり、『くっ、苦しい！　死なないけど苦しいーっ！』と悶えてみたり、ドロシーに背中をさすってもらいながら神裂にお茶を飲ませてもらってみたり、神裂から『やっぱり味覚はお子様なのですね』的哀れみのオーラを当てられて憤慨してみたり、ドロシーにそれでからかわれてさらに憤慨したりと、朝から随分ハッスルした俺は、とりあえずその場に居辛くなったので拗ねたふりをして一旦ドロシーと分かれて単独行動を取っていた。

「……そういえば、日光浴したらビタミンEだか何だかが増えて身長が伸びるってどっかの健康番組でやってたよな……。俺、牛乳も飲んでるしビタミンEもたっぷりだし夜はちゃんと眠ってるのに、どうして身長伸びないんだろう……？　お陰でいっつもドロシーは俺のことガキ扱いだしさ。一応三歳差しかないのに……。外見年齢だって、貧乳だけど身長はあるからもうちょっとさ、姉妹とか、友達とかとして扱われないもんかな……」

そう、外見年齢。

俺だって一応一六歳、発育は……まあ悪いかもしれんが、身長はまあまあ順調に伸びていて、今は一五九センチ。一七〇、帽子を含めると一八〇あるドロシーはまあ規格外としても、一六歳の女の子の身長としてはまあ及第点なはずだ。貧乳だけど。

「あ、カインじゃん。やっほーって」

「……ん、タリアか」

そんな風にうんうん唸ってると、タリアが軽く右手を挙げながらやってきた。

……タリア＝スリーピングフォレスト。

フレッドの婚約者……で、『眠りの呪い』をかけられていた元『眠り姫』。金色のボブで、活発そうな輝きの蒼い瞳、白く、しかし少しだけ健康的に焼けた肌はお姫様（ヒロイン）というより王子様（ヒーロー）といったほうが近い。

ちなみに、身長は俺より若干高めの一六五センチ程度。……尤も、コイツは五年間眠ってたから実年齢は一九だけど肉体年齢は十四歳。……これからが伸び盛り、ってことなんだよなぁ……。はぁ……、西洋人は身長高いから困る。俺も血筋的にはユダヤ系だと思うんだけど……。吸血鬼だし……。

「なーにうんうん唸ってるのって。もしかしてまたドロシーさんにからかわれた？」

「……べ、別に」

タリアは俺の肩に手をかけながらにやにやと笑って問いかけてくる。……図星だ……。平静を装ってみたけど、思わず声がどもってしまう。そんな様子の俺を見たタリアは、すべての状況を把握したのかにんまりと口元に笑みを浮かべ、抱きついてきた。

「あ～、カインかわいい～って！　大丈夫だよ、フレッドが手伝ってくれるんだから今に人間になってどんどん背伸びるから！」

いやあの、一応、俺まだ成長止まってないから……。っていうか、吸血鬼は基本的に『老化』が起きないってだけで成長不全になる訳じゃないんだがな。

そんな風に思って呆れていると、タリアは神妙な面持ちになって俺の目を見た。その真剣な眼光に、思わず気圧されてしまう。

「……私も手伝うしね。実は私、魔術師になることにしたんだ。それも解呪師（ディスエンチャンター）！　私みたいに呪いに苦しんでた人を助けてあげるのって！　確か、カインのソレ……『原初の罰』も形式は違うけど呪いなんだよね？」

「うんまあ、神話をそのままに取れば神様が神話上のカインにかけた『カインに危害を加えたものは七倍の報いを受けるだろう』って呪いと同一の呪いだって話だけど……って、え？」

ん、魔術師？

魔術師ってアレだよな。生命力から魔力を練って、それを元手に呪文を唱えて天使の力（テレズマ）やらに変換したり、天使の力（テレズマ）を自分の体に封入して魔術を行使したり、その他諸々の神話やら超常現象の元凶っぽい連中、即ち俺らのことだよな？

……あー、それで朝、フレッドと揉めてたわけなー……。

「そ、魔術師！　やっぱり、私だけ皆に守ってもらって何もできないのは性に合わないって！　私にもできることはあるって！」

「そっか。まあ、本人がそれでいいならいいけどよ。フレッドにはちゃんと相談したんだろうな？　あいつ多分反対するぜ」

一応言っておいた俺の言葉に、タリアはにたーりと嬉しそうな笑みを浮かべた。……了承もらったんだな。しかもあの笑顔は多分その後色々と嬉しいことをした笑みだ。はいはいリア充爆発。

「うふふー、まあ、ちょっと諍いはあったけど何だかんだでフレッドも納得してくれたってー」

「……良かったな」

どうやら仲直りできたみたいで良かった。……が、まあ、この後長くなりそうだな……。さっさと退散しとくか。

「じゃあ、俺昼飯食いに行ってくるよ。タリアはどうする？」

「んー、私はこの後フレッドと行くところがあるからって。デートよデート。何せあの人滅多に帰ってこないんだもん！この歳にして単身赴任の夫を持った気分！　ああ！　フレッドってば罪な男って！」

はいはいお熱い限りでごぜーますねっと。

あれ、そういえば食堂ってどっちだっけ？

＊＊＊

「で、居た堪れなくなって歩いていたら道に迷った、と。……はぁ、君も大概……、いや、やめておこう。『また』半殺しにされちゃ溜まったものじゃないからな」

「うう……、その節は本当にご迷惑をおかけしまして……」

タリアののろけ話から離脱する為に食堂に向かったところで道に迷い、そこで偶然ステイルと遭遇した。

ステイル……こいつは、俺が最初にイギリス清教に来て色んな荷物を抱えて女子寮はどこだとうろちょろしてた時にばったり出会い、出会いがしらに『この命知らずが』とか『ここはお前みたいな乳離れも出来ていないクソガキが来るところじゃあない』とかののしられた為、一緒に居たその話を聞いていたドロシー及びフレッドがブチ切れてリンチにしていた。肉弾戦だったのでステイルは手も足も出なかったようだ。

……俺個人としては、原作を読んでるからステイルが何の意味も無く俺みたいな容姿の人間を罵ったりしないということは分かってるから、多分見た目子供な俺をインデックスと重ねて、不器用なりに気遣ってくれたんだろうと思ってるから気にしてないが……、ステイルとしては良くない思い出になったのだろうか、会う度に顔を顰められるようになったのは残念だ。

まあ、短い付き合いってわけじゃないしこれから少しずつ仲良くなれたらいいなぁと思ってる。

「いや、別に気にしてはいないさ。幸いすぐに治療してもらったからね。治療魔術にかかった費用は悉く僕持ちだったが」

「あう……」

くぅ、そんなにイヤミっぽくしなくたっていいじゃないか。……まあ俺が悪いから強く出れないんだけど……。そんな思いを込めてにらみつけると、良心の叱責があったのかステイルは気まずそうに顔を背けた。

「で、食堂に向かっているんだったか。女子寮の構造については僕にも知識があるからね。案内するよ」

「おお！　ありがと、ステイル！」

何で女子寮の構造について知識があるのかは聞かない俺。……インデックスに会いにいってて詳しくなったとか、色んな意味で言いづらいもんな。いろんな意味で。

「それにしても……」

ステイルが俺の方を見て呟く。どことなく、呆れというより同情の色の方が強い声色だ。

「『吸血殺し（ディープブラッド）』だったか。今回は災難だったね」

ステイルの意外な言葉に、俺は『はぁ』と相槌をうつくらいしかできなかった。まあ、災難なのは確かだが、結局俺は最終的に生き残れたし、上条や姫神とも仲良くなれたし、五分五分だと思うなあ。

「……本当に危機感のない吸血……、カインの末裔だね、君は。今回だって一歩間違えば灰燼に帰すところだったと理解できないのかい？」

「そんなことは分かってるさ。今回はマジでヤバかった。多分、今までで一番危なかったと思う。でもさぁ、もう終わったことだしよ。

結果死ななかったんだし、それでいいじゃん」

そういって笑う俺に、ステイルの表情は何やら微妙なものになり、それから笑みに変わった。

「……、どうやら僕は野暮なことを聞いてしまったらしい。今のは忘れてくれ」

「へいへいっと」

俺の危機感のなさに呆れた、ってトコだろうか。でもまあ、俺はこのくらいで丁度いいんだよ。どうせこの身は吸血鬼。滅多なことじゃ死にはしないんだしな。なあに、人間に戻る頃には身の振り方も考え直すから大丈夫だって。

＊＊＊

ｓｉｄｅステイル

「そんなことは分かってるさ。今回はマジでヤバかった。多分、今までで一番危なかったと思う。でもさぁ、もう終わったことだしよ。結果死ななかったんだし、それでいいじゃん」

この台詞に、僕は内心愕然としていた。

……無理もない、はずだ。この少女は、自分が死に掛けたというのに、それに関するネガティブな感情を『死ななかったから』の一言で片付けてしまったのだ。

普通、死にそうな目に遭えばそんな目に遭わせた相手を警戒するに決まっている。しかし、彼女の場合危険だとか苦手だとかと言う以前に友人になったと言うじゃないか。

どこまでお人よしを極めればそこまでたどり着けるのだろうか？

僕には分からないし、少なくとも分かろうとは思わないが。

……ただ、狂っているな、とは思う。

だってそうだろう。あの少年だって、幾らなんでも自分が殺されそうになればネガティブな感情――警戒なり敵意なりを抱く。現に二度目に会った時に僕が炎剣を振りかざしてからは、一定の警戒を置くようになったじゃないか。

そう、どんなに警戒心が薄くとも、少なくとも警戒が『ゼロ』になることなんて有り得ない。これは心が汚いとかそういう次元の問題じゃない。

命が一つしかない『人間』なら、そう思うのが通常なのだから。

――吸血鬼、カインの末裔。

今、自分の目の前にいる少女が、そう呼ばれる存在なのだと改めて再認識した。確かに、彼女は人間らしい。弱冠一六歳らしからぬ幼い体つきと、それに対抗するような男勝りな口調。人懐こい気性。

どれもこれも、言動を見ているだけで頬が緩むくらい、下手な人間よりも『人間らしいが』、一方でこういう側面――『命の危険を極端に感じていない』という面も持つ。

そもそも、過去にあれだけの魔術師から襲い掛かられれば、多少なりとも人間を信じられなくなってもおかしくない。ともに行動していたドロシーやフレッドだけならばともかく、会ったばかりの僕なんかに心を開くはずがない。

それなのに、今こんな風に無防備な姿を晒している、という事実。……『敵』としてさえ見てもらえてない、というと語弊がある気がするが。何にしても善人なんて言葉で片付けられる次元はとうに過ぎている。おそらく、『考え方』の基盤が違うのだろう。

カインはおそらく、自分が『不死』であり周囲が自分を決定的に傷つけられないと理解した上での行動指針を構築してしまっている。

さっき狂っていると言ったが、それも間違いかもしれない。そんな、ネガティブな言葉で表現できる程度の歪みでもないだろう、これは。

だって、カイン――吸血鬼にとってはそれが『普通』なのだから。仏教徒と十字教徒の『普通』が違うように、人間と犬の『普通』が違うように、彼女と僕たちの『普通』は決定的に違う。

確かに、彼女は下手な人間よりも人間らしい。少なくとも表層意識では他者と自分を同じ存在と看做しているだろうし、仮に親しい人間が死ねば彼女は悲しむだろうし、誰かが親しい人間を傷つけていれば怒るだろう。

……だが、それでも、根幹のところは悲しいくらいに歪んでしまっている。もしかしたら、彼女が仮に人間に戻れても、その精神は――、

「……、どうやら僕は野暮なことを聞いてしまったらしい。今のは忘れてくれ」

やめよう。そこから先は本当に、彼女にとって無礼な考えだ。

それに現状、彼女の意識がどうだろうと、僕たちにとって無害なことは間違いないんだ。ならば、彼女の行く末について案じていても仕方がない。

ただでさえ僕にはあの子のことや、姫神秋沙の件でやらなくちゃならない後始末が残っているんだ。こんな、昨日今日知り合っただけの少女に割いてやる意識はない。

「へいへいっと」

僕の言葉をどうとらえたのか、カインは大して気にも留めていない様子で笑って食堂への道を歩いていく。……良くも悪くも、邪気がない少女なのは間違いないようだ。

＊＊＊

ｓｉｄｅカイン

「ありがとなー、ステイルー！」

食堂にたどり着いた俺はそのまま去って行くステイルに手を振って礼を言うと、食堂の中に目を向けた。

食堂の中には既に、何人かの修道女が座って昼食をとっていた。朝食は全員でいっぺんに食べるこの女子寮だが、日中はそれぞれ色んな仕事があるから、昼、夜のご飯は各自適当に摂ることになっている……らしい。

まだ来て日が浅いからよく分からん。

「おや、カインじゃないか。やっぱりこっちに来たのかい」

手を振って食堂の中を見渡すと、そこには日本街のコンビニで買ってきたと思わしきスパゲティを食べているドロシーの姿があった。……その服装で街に出たのか？　ヘソ出しルックの明らかに不審人物な格好で？　神裂のえっちぃスタイルやステイルとかの神父服ならまだ分かるだろう。でも、その魔女装束は完璧にコスプレだろ。

「……む、その顔はまぁた失礼なこと考えてるね。安心しな。隠匿術式かけてったから、違和感感じる奴なんざいないよ」

なんという魔術の無駄遣い。

「まあ、それは別にいいけどさ――」

そういって、俺は視線をドロシーからドロシーの手元にあるコンビニ袋に移す。……中には、まだ何か一人分の食事が入っているようだった。

「その袋の中の食いモンは俺にくれるってことで良いんだよな？」

「勿論」

俺の言葉に、にかりと気持ちの良い笑みを浮かべたドロシーは、そのまま袋から容器を取り出す。餡かけチャーハンか。よくコンビ

ニでこんなモン売ってるな……。っていうか、イギリスなのにイギリス料理が出てこないあたりなんとも……。イギリス料理はマズイから仕方ないけど。

……あれ、そういえばイギリス料理って何があったっけ？　……フィッシュ・アンド・チップスとか？　まあいいか。

「ありがとよ」

餡かけチャーハンを受け取った俺は、ドロシーの隣に座る。会話は、誰からともなく始まった。

「そういえばカイン、霊装の準備は終わったから、メシ食べ終わり次第イギリスを発つよ」

ドロシーの言葉に、俺は餡かけチャーハンを口いっぱいにほおばりながら頷いた。何度か言ったとおり、俺は世界中を旅して自分のこの体質を治す方法を探してる。この間は学園都市に行って『天使の涙』を試してみたが、何もいつも日本にいるわけじゃない。

バチカン行って吸血鬼だ死ねーっつって追われてみたり、北欧行って吸血鬼だ捕獲しろーっつって追われてみたり、中国行って吸血鬼だ勝負しろーっつって追われてみたり、……まあ何と言うか、そんな風に体当たりで情報をもらいつつ友達を増やしてるというわけだ。

……まぁ、これからは『原作』が始まるから今までみたいに情報は得られないかもしれないけど、それだって精精二、三年の問題だろうし、気にするほどの問題じゃない。

「ふぇ、ふぎはほおひひくんらっへ？」

「飲み込んでから喋りな、行儀悪い」

失敬失敬。口いっぱいに頬張っていた餡かけチャーハンを飲み込むと、俺は再度口を開いた。

「で、次はどこに行くんだっけ？」

確か、バチカンとスウェーデンとフィンランドとノルウェーとスペインと中国の東側と北海道と京都と天草と陸奥と学園都市は制覇したから……、……まだ世界には行くところがたくさんあるな、うん。

「忘れたのかい？　次も日本だよ。日本の『湯治魔術』で魔術的に体質を改変させる方法を試すって話だったじゃないか」

「あー、そうだったそうだった。すっかり忘れてたわ」

二度同じ国に行ったことはなかったな、そういえば。よく考えたら学園都市からの帰り際に『日本にとんぼ返りする』って言ってたっけ。うーむ、やっぱり日本は良い。日本に滞在する時は他の国よりも気持ち長く居座っちゃう気がするし。

何だかんだで常に日本暮らし気分が抜けないのはその所為なのかも。

「でも、俺バタバタしてたから通信用霊装の準備できてないんだけど……」

「それならアンタの分もアタシが作っといたから安心しな。ホラ、これ」

そういって札の形をした霊装を取り出すドロシーから、おそるおそる受け取る。……この札、すごく薄いからちょっとした拍子に破けそうで怖いんだよな。

……魔女の癖に達筆な字で何やら簡体字っぽい文字（日本風）が

書かれた霊装作んのって、どうなんだろ……。そういえば前に札霧（ふだきり）に教えてもらったって言ってたっけ。コイツってほんとに魔女で合ってるんだよな……？

「あと、アンタの分の着替えと日用品、あと今回は『湯治魔術』だからね。一応お風呂セットも用意しといたよ」

「いやっほう流石ドロシー！　日本の心が分かってるね！」

気が利いているドロシーに抱きつき喜ぶ。ドロシーは抱きついた俺を特に引き離そうともせず、そのまま抱きかかえて歩き始めた。ん？　どこに行くんだ？　……まぁ、もう餡かけチャーハンは食べ終わってるから別に良いけど。

「どこ行くんだって顔してるね。もう食べ終わったからね、適当にイチャついてるフレッドを捕まえて空港に行くんだよ」

えー、もう日本に行くのか……。結局ゆっくり休むことも出来なかった。

＊＊＊

「このドグサレが……」

飛行機にて、俺の隣の席に座っているフレッドが憎憎しげに呟いた。俺たちの座っているのはビジネスクラス。イギリスではあんまり寝られなかったから、この飛行機の中で睡眠時間を稼ごうと言う話だ。……まぁ、ドロシーたちはともかく俺は吸血鬼だから寝なくても良いんだけどな。

で、何でフレッドがこんなに不機嫌なのかというと、普通に彼女とのイチャイチャを妨害された上にそのまま日本に飛ばされたからだ。

しかも当のタリアは『もう三年分くらいフレッド分補給できたから三年は帰ってこなくてもいいって～』と満面の笑みで送り出してしまったものだからさあ大変。フレッドのご機嫌は急速に斜めってるのだった。

……ちょっと考えればそれはタリアの強がりだって分かってもいいと思うんだけどな。乙女心が分からん男は途中で捨てられんぞ。タリアに限ってそれはないと思うけど。

それにしても、眠いなぁ……。吸血鬼だから睡眠はいらないはずなんだけど、それでも前世の経験的に眠い気分になる。あー、駄目だ。このまま起きてても後で辛そうだ。

「ぁふぁ……、ドロシー、俺寝るから日本に着いたら起こしてくれ……」

「アンタ、アタシなんか一睡もしてないってのに……。はぁ、分かったよ。お休みカイン」

「おやしゅみ、ドロシー、フレッドぉ……」

もう喋るのも億劫だ。意識がどんどんとまどろんで行く。

……確か、小豆の言うとおり“原作”通りに事件が起きてるんなら、御使堕し（エンゼルフォール）は一ヵ月後くらいか。その頃には……、多分、俺は箱根だか熱海で湯治魔術を試してる頃だろう。手が空いてたら、上条の手助けをしてやるのも良いかもしれないな。

そんなことを思いつつ、俺は意識を手放した。

日本はもうすぐだ。

08（後書き）

・札霧さんはオリキャラ、タリア嬢もオリキャラです。
・次回からはしばらく小豆サイドに戻ります。

01（前書き）

小豆の活躍をお待ちの方、お待たせいたしました。小豆編?、開始します。

01

ペンをぽいっと放り投げ、パジャマ姿の私は数時間ぶりにん～っと伸びをし、溜めた息を吐きながら呟いた。

「……終わったぁー」

八月一六日。

フレンダの妹、フレメアの転生者疑惑の真偽を判断すべく遊園地へと向かってついうっかり本物の転生者（しかも魔術師）と出くわした悪夢の八月一三日から三日後。私はついに、ついに夏休みの宿題を終わらせることに成功した。

……元々、入院してる最中暇だったからちょいちょい宿題をやっていたのもあるが、それにしても久々にこんなに一生懸命勉強した。こんなに勉強したのは前世の大学受験以来じゃなかろうか？　……いや、就職のときも勉強してたっけ。

当然、この三日間ずっと机に齧りついているほど私は勉強狂いでも無用心でもない。流石に、麦野たち『アイテム』の連中と今後の打ち合わせくらいはした。

……何の打ち合わせか、というと、剥離要素（エラーポイント）相手の対策に関する打ち合わせだ。最近色々あったから存在感が薄いが、あいつらは未だに私の中の抹殺優先順位の一位くらいに位置してるからな。

で、麦野たちとの話し合いの結果、決まったことがいくつかある。

一、私は最低でも二日に一日くらいのペースで外出する。これは剥離要素（エラーポイント）の連中を誘い出す為の罠である。

二、その際、麦野や黒花などの部下は一切引き連れてはならない。

相手も仲間がいたら警戒するだろうし、逆に離れてさえいればそこまで警戒しないだろうからだ。

三、私が外出している間、他のメンバーは少し離れたところから心理同調（コンフォーミティ）を利用しコンタクトを取りつつ、私の周囲を監視すること。

四、剥離要素（エラーポイント）の本拠地は恐らく黒花が以前居た時の場所から変わっていると思われるので、無言念話で割り出した大まかな位置情報をもとに捜索も並行して行う。当然、剥離要素（エラーポイント）の本拠地を押さえ次第襲撃を行う。

五、剥離要素（エラーポイント）の能力者は確実に頭部を破壊して殺害を確認すること。

……最後の項を決める際には、麦野から不審がる声が上がったが、『与謝野が味方の能力に何らかの修正をかけている可能性があり、油断は禁物』と説明することで乗り切った。少し強引かとも思ったが、今まで散々用心深（チキンな）いところを見せていたのが功を奏したのか、麦野以下『アイテム』は呆れたように溜息をついて納得していた。

「そう、終わったの」

黒花が出してくれた冷たいお茶を飲んでいた私に、ベッドで寝転んで雑誌を読んでいた麦野が視線を向ける。……うーむ、なんというか、面倒ごとの予感がする。宿題が終わったばかりだし、できればのんびりストレッチでもしてお昼寝したい気分なんだけど……。

そんな私の希望も無視して、麦野は報告するように淡々と告げてくる。

「じゃあ丁度いいから外に出てきなさい。楽しい楽しい魚釣り（フィッシング）の始まりよ」

＊＊＊

そういうわけで私は今そのへんをぶらぶらと歩いているわけだ。

現在の服装はこの間麦野たちと顔合わせした時に買った白いワンピースに同色の帽子、同系色のハンドバッグ。前回と違い、サイドテールは分解していない。

普段はもっと短い丈のワンピースにズボンなりを穿くのだが、今日は特に暑いことと、後一応私は『餌』なので目立つほうがよかろう、ということで令嬢オーラを発動しやすいこの服装で散策しているわけだが……。

正直日傘が欲しい。帽子があるといっても、この服殆ど袖ないから肩に日光が当たって熱い。暑いじゃなくて熱い。

まったく……。宿題終わりで疲れてるんだから、少しくらい休ませてくれてもいいじゃないか。ただでさえ勉強疲れで肩が凝ってるのに……。……うーん、まだ時間あるし、とりあえず第三学区あたりのリラクゼーション施設に転がり込もうか。

そんなことを考えていると、学生鞄を肩にかけて這う這うの体で帰宅しようとしているツンツン頭を発見した。いわずと知れた上条当麻だ。今は八月一六日……ということは、丁度補習の時期だろう。カインの一件で一日補習がずれ込んだので、おそらく間違いない。

……ということは、ぶらぶらしてるうちにどうやら私の学校の近くまで歩いてしまっていたらしい。流石の私も、第七学区を出てしまうと途端に現在地が分からなくなる。目的なくぶらつくと迷子になると言うが、今私はその直前だった訳か……。

まあ、そんなことはいい。今重要なのは、上条を発見した、ということだ。

本来なら完全スルーで良いが、既にお互いがお互いを認識してしまっている。この状況で無視すれば、新学期の時に『どうしてあの時無視されたんだ？』と怪訝な思いを抱かせるだけだろう。麦野たちに交友関係を知られれば、同じように訝しがられるかもしれない。

いきさつを説明すれば問題ないだろうが……、なんというかまあ、男に惚れたくないだのということを言うと多分に誤解を受けそうなのでやめておこう。誤解じゃないけど。

「やっほ」

そして初めまして、二代目上条君。

少ない時間で考えた末、私はとりあえず挨拶してそのまま自然にばいばーいという戦法をとることにした。基本的に私は上条と接する時はそういう感じだし、あとで聞かれても『いつもこうだけど』……と誤魔化すことができる。

「……え？　……あ、俺？」

上条は惚けながら自分を指差す。私が『何をおっしゃるか』という表情でこくこくと頷くと、上条は僅かに目を見開いた。……ああ、記憶喪失なんだったか。あんまりいつもどおりだったから一瞬忘れてた。

じゃあ、周りにいる監視さんたちに不審に思われないようにそれ

となくフォローを――、

「ど、どうも。……親船……サン？」

……何故疑問系？　っつーか何故私の名前を知っている？　……まさか、記憶喪失事件不発……？

……。もしかしたら、記憶を誰かに取り戻させてもらったのかもしれない。学園都市の転生者で、記憶を司る能力者がいたとか……。……いや、無理だろう。上条の記憶は『破壊』されたんだ。精神を操ったところで取り戻せる情報じゃない。

いやしかし……。じゃあ、私に関する記憶だけ奇跡的に残っていた、とか？　私は原作にはないイレギュラーだからとかそんな理屈で。……これも現実味に欠けるか。

「……親船さん？」

と、思考に耽っていると何だか上条が心配そうにこっちを見てきた。危ない危ない。不審に思われたらマズイ。とりあえず確認だ。もしかしたら話していく内に新たな情報が得られるかもしれない。

「ゴメンゴメン。ちょっと思うところがあってね。それにしても久しぶりだね上条くん。最期に会ったのが七月二〇日だから――あれ、もう一ヶ月ぶりくらいになるんだ。夏休みって終わるの早いよねー」

「……、ああ、そう、でございますねぇ。俺も宿題が終わらなくて大変で大変で……、あ、申し訳ございませんこんな下世話な話をー」

……なんか様子おかしくね？

「えっと、上条くんそれ、」

「あああああ申し訳ございません申し訳ございません！　忘れてください俺の宿題の話なんて！！」
「……ツッコミ待ち？」

……何となく読めてきた。上条の記憶喪失は『思い出』のみが消えている状態で、知識が頭にあるって話だったからな。『思い出』に分類される、その人の性格やその人との思い出は覚えていないが、その人の社会的地位みたいなものは覚えている、ということだろう。

つまり、今の上条は『お偉いさんのご令嬢と何故か知り合いになっていることに驚愕しつつも何とかボロを出さないように頑張っている』という状況なはずだ。

「上条くん。そのなりきれてない敬語はツッコミ待ち？　それとも私のことキライになっちゃった？」

はぁ、と呆れ気味に問いかけると、上条は自分の反応が間違えてたことに気が付いたのか目に見えて慌て始めた。……コイツ、よく記憶喪失バレなかったな。まあそれは別に良い。さらに墓穴を掘られる前にこっちで上条の印象を誘導しておこう。

「やっぱり一ヶ月も一緒じゃなかったから私のことなんて忘れちゃった？　一応中学校三年間ずっと隣の席だったのに、悲しいな……」

まぁ、その私は学校じゃ上条とそこまで口も利かなかった訳だがな。二人で世間話とかはあんまりなかったし。

「あ、あははー。ゴメンゴメン。一ヶ月ぶりだったからちょっと舞い上がっちゃってさー。いや悪乗りしすぎたわー」
「そかそか。良かった。上条くん、なんだかいつも生活苦しそうだったからねー。何か悪いものでも食べて体の調子が悪くなっちゃっ

たのかと心配しちゃったよー」

あはは、と乾いた笑みを浮かべて対応する上条。昔っから家計は火の車だった気がするが、インデックスが来てからは顕著だからな。

「上条くんは補習？」

話を切り替えるように問いかける私に、上条は微妙な顔で頷いた。……ああ、いつもの不幸（アレ）ね。途中で車に轢かれかけたとかそのへんだろ。

「そうなんだー……。上条くんも大変だね。どこか怪我とかしてない？」

「何で今のやり取りで上条さんの不幸（にちじょう）まで把握できるんでせうかっ!?」

『これが幼馴染パワーかーっ!!』と絶叫する上条を、私は冷たい目で見つめる。いやまぁ……。上条分かりやすいし。上条が微妙な顔するときは大抵不幸関連だからなー。流石に三年間も隣の席にいたらそのくらいの機微は分かる。

二代目になったからそのへんの扱いとかは変わってくるのかとも思ったけど、どうやら思い出がなくなっただけで表情の変化みたいな『習慣』は変化していないみたい。普通に話していても以前の上条と話してるみたいだ。記憶がなくなったなんて信じられないほどに。

「まあまあ。どうせ朝もごたごたしててご飯とか食べてないんでしょ？　これあげるから元気だしなよ」

そう言って私はハンドバッグの中からスナック状の栄養食品を取

り出した。
　商品名『空腹潰し（ハンガーレス）』。空腹（ないもの）がレス（ない）というところに意味不明なネーミングセンスを感じるが、気にしてはいけない。
　……ぶっちゃけ、前世で言うところの大塚食品カロリーなんたらかんたらみたいなものだと思ってくれればいい。だが、当然これも学園都市の科学力の産物であり、これ一つを食べることで日本人のちょっと豪勢な夕食に相当する分のカロリーを全てまかなえるとかなんとか。

「おお……！　おお！　聖女！　聖女だ！　聖女様がココにいるぞーっ！！」

　それを見た上条は、すぐさま私の目の前に両膝を着き、私の手を握った。……そうだね、上条の性格上こうなるよね。……まあ、今の私は『餌』だし、注目を集めるのは悪いことじゃない。うん、計算どおり。
　……でも、

「上条くん……、皆見てる……。恥ずかしいって……」
「んぇっ？　わっ！　スマン！！」

　私の顔を見て動揺した上条は、すぐさま私の手からカロリーなんちゃらもどきを抜き取ると、飛ぶように後ずさりした。……この時点で十分身のこなしは鍛えられているようだ。カインとの戦闘みたいなイレギュラーもあったし、当然といえば当然か。
　っていうかこの上条の反応、絶対私の顔赤くなってるよ……。暑いのもあるけど今の上条の叫び声で何人かこっち見てたしな、恥ずかしいに決まってる。でも、上条は童貞だからそんな過程は関係なく顔が赤くなってるって一点だけでなんかどぎまぎして勝手にテンパって……

んん？

テンパって……、いや待て、考えてもみろ。これからの流れがなんとなく読めてきたぞ……。

一、上条テンパって謝りながらバックステップで稼いだ距離を縮めようとする。

二、その途中で不幸にも石ころで躓き転ぶ。

三、いい感じに私を押し倒し、しかも膝にスカートが引っかかって私のパンツが公衆の面前に晒される。

四、フラグが建ったぜ☆

……うわぁ、何回か生で見た流れだぁ……。駄目だ駄目だ、警戒せねば。具体的に言うと上条が距離を縮めた辺りから回避する準備をしておかないと。

そんな風に考えていると、上条はやっぱりテンパりながらも『悪い悪い、ついうっかり』とか言いながら近づいてきた。……その足元に、つま先ほどの石ころが置いてあったのを私は見逃さなかった。

「いやホント、ありがとな親船。これで上条さんはなんとか今日を生きていけそうで、あっ！？」

つ、躓いたッ！　私の肩目掛け降りてくる腕を全力で回避。そして倒れていく上条の横から腰に手を回して上条自身の転倒も回避、だ。下手に転ばれてはそのときの余波でさらなる悲劇が起こりそうだからな。

「……もう、上条くんはホントうっかりさんだね。足元ちゃんと見ないからそうなるんだよ？」

「……え、あ、す、スマン……」

上条の足がしっかりと地面に立ったのを確認した私は、ゆっくりと上条の体から腕を離す。

「じゃあね、上条君。道中うっかりソレ落さないように気をつけるんだよ？　中身スナックだから、落したら粉々だからね」

「あ、ああ……。うん、ホントありがとな。それじゃ」

ばいばーい、と言いながら上条と別れて歩き出す。後ろから『今日は何だか幸運だーっ！』とかいう声が響いたような気がした。

一方私は、多分あのなんとかメイトもどきが上条の口に運ばれるまで原型を保っているなどと言う事態は絶対に訪れないだろうな、と思った。

＊＊＊

「来たわよ、親船」

携帯で現在位置を確認しながら第三学区のリラクゼーション施設に向かっていると、後ろから麦野が近づいてきた。……麦野から近づいてきたってことは、敵さんが餌（わたし）に引っかかってくれたってことか。

『沿受ちゃん、状況お願い』

私は麦野に視線を向けたまま、念話（テレパシー）で黒花とコンタクトをとる。

黒花は数秒も開けずに現在の状況を報告してきた。

『護衛中に剥離要素（エラーポイント）を発見、絹旗さんとフレンダさんと滝壺さんが交戦中です。麦野さんは、万一他の剥離要素（エラーポイント）がやってきた時に親船さんの護衛に回れるようにと』

『沿受ちゃんは？』

『現在親船さんの後方三〇メートルの自動販売機でミルクティーを購入中です。戦闘が終了次第そっちに行きますね』

黒花の言葉に、視線をちらりと背後にやる。

……尾行中ということもあってメイド服じゃなく黒と白のゴシック系の衣装に身を包んでいる黒花は、報告どおり自動販売機でミルクティーを購入していた。……なんか楽（らく）そうで妬ましい。

「今日は随分とお楽しみだったみたいじゃないか、親船」

「何が？」

とりあえず黒花ののんびり具合に呆れていると、麦野がいやにニヤニヤしながら私を肩でつついてきた。

「何がって、さっきは同級生の男の子と随分いい感じだったじゃない。お前も隅に置けないわね」

「……ああ……、上条君ね」

……麦野、今味方が敵と交戦してる最中っていう状況だって忘れてないか？　……まあ、はぐらかしても誤解されそうだからはっき

り言っておくか。

「言っておくけど、上条君にはそんな感情抱いてないよ。そもそも私、男の人と付き合うとか考えられないし」

趣味嗜好の問題もそうだが、今は色恋に走ってる暇などないからな。上条の周囲の人間はどいつもこいつも色恋に脳が沸いてる状態だが、私の場合そんなことをしていたら多分一瞬で殺されるのがオチだ。上条を庇って死にました、とか洒落にもならないしな。

ベツレヘムの墜落で上条が死んだことにショックを受けて第七学区をさ迷う私の姿とか、暗部の人間が見たら失笑ものだろう。私も多分見たら笑う。

「……え」

そんな風に考えていると、麦野が気持ち顔を青くして後ずさりした。

「それって、親船、まさか……。いや、考えてみれば当然だったのかもしれないわね……！　護衛に関しては私達よりも有能な組織はいくらでもあるはずなのに、何故か『女の子で構成された組織だから』って理由で私たちを雇ったり、その私たちの寝泊りする部屋を別室じゃなくわざわざ自分の個室に指定したり、前兆は確かにあった……ッ！！」

え、麦野何それ。それじゃまるで私が白いお花な感じの人みたいじゃないか。いやまあ否定しきれないところはあるけどさ。でも別に女の子に欲情したり、恋心を抱いたりとかそういう感情があるわけでもなくて――――ッ！！

「ゴメン親船、今更だけどこの仕事降りさせてもらっても良い……？」

「麦野さぁぁーん！！」

逃げようとする麦野にひしっと抱きついて動きを止めようとするが、麦野は私を引き摺りながらもずんずんと歩いていく。……流石麦野、私の体重（五五キロ）程度の重さじゃ動きを阻害することさえ出来ない、か。この人、身体能力もチートだな。

「……麦野さん麦野さん、実はあの男の子、幻想殺（イマジンブレイカー）しなんだよね」

そして、抱きついた拍子にぼそりと呟いた。その言葉を聞いた麦野は、何だかんだで楽しそうにしていた表情を途端に不機嫌そうに歪めて溜息をついた。……まあ、言いたいことはよくわかる。私も自分でそう思うし。

「……ったく、何でお前はそうやってやることなすこと根本に打算があんのかしら……。ちょっと可愛げがあると思ったらすぐこれだよ」

「まあ、幻想殺（イマジンブレイカー）しということを抜きにしても彼とはお友達だけどね」

正確には友達になりそう『だった』、といったところか。今のアイツは私が友達になりたいと思った上条とは別人だしな。まあ、時間をかけていけば親しくなるかもしれないけど、その前に上条は二度目の死亡を経験するらしいし。また記憶リセットだろう。

どうやら上条と私は永遠に友達にはなれない運命にあるのかもしれない。親しくなったらそれはそれで困るけど。

閑話休題。

「で、麦野さん。さっきから何となく私の移動方向を誘導してるみたいだけど、どっちに向かってるの？」
「ん、フレンダ達が戦闘してるトコ」

私の質問に、麦野は軽い調子で答えた。……大方増援のつもりなんだろうが、一応私が護衛対象だってこと忘れてないか？

「さっきから送られてくるフレンダからの念話（テレパシー）で大体敵の兵力は分かってるからね。滝壺から念話（テレパシー）で位置情報を教えてもらえばあいつらが戦闘してるビルの外から剥離要素（エラーポイント）のクソどもだけを潰せるって寸法よ」

……なるほどな。そういうことなら問題ない。もしかするとそのくらいの攻撃は推察した上で外に監視の目を置いてる可能性もあるが、そのくらいなら麦野にかかれば一瞬で蒸発できるレベルだろう。私に危険はない、というわけだ。

そんなことを考えているうちに、私たちはどんどんと人気の無い通りに入っていった。やがて、私の右手にゴンゴンと低い音が鳴り響くビルを発見した。

「一応伝えておくと、滝壺の情報だと中にいるのは電撃使い（エレクトロマスター）と念動力者（サイコキネシスト）。それぞれ強能力（レベル３）から大能力（レベル４）程度の能力者、らしいわ。……念動力（サイコキネシス）の方は『圧縮空気（コンプレッサー）』って名乗ってるみたいね……。絹旗との相性はあまり良くないらしいわ」

いいながら、麦野はビルの隣にある路地裏へと足を運んでいく。同時に、麦野の右肩口に不健康な輝きが発生、収束し、一つの塊を生み出していく。

「……麦野さん、演算代理機の調子は？」

私の言葉に、麦野は何でもないように笑いながら答えた。

「爽快ね」

瞬間、ゴバッ！！　という質量さえ伴っていそうな轟音と同時に麦野の肩口から閃光で構成された『翼』が放たれた。……『電翼』。あの日、麦野が手に入れたスキルだ。放たれた『電翼』はビルの壁をやすやすと貫通すると、しばらく内部を蹂躙していたようだった。ビルの内部から男のものと思われる怒号と悲鳴が轟く。

何秒かそうしていただろうか。麦野は静かに『電翼』を解除すると、ひとつ溜息をついた。……目の前のビルの外面には、原子崩し（メルトダウナー）によって貫通され、断面が熱によってドロドロにとけた穴が一つきり。

麦野の特徴でもあっただろう蹂躙の跡の焼け野原は、少なくとも外からは確認できなかった。まあ、滝壺から位置情報の指示があったらしいし、内部もそこまで酷い有様にはなっていないだろう。以前の麦野では有り得ないスマートな決着だった。

……ホント、私は麦野にとんでもないものを授けてしまった気がする。

『演算代理機』。

あの日、『麦野が使用していた「演算補助機」では、彼女にかかる負担が強すぎて一〇回も使用したら脳の回路が焼ききれて植物状態になるだろう』という冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）の判断により彼の監修によって製作された、能力の演算を『代理』してくれる機構だ。

彼女の首もとにあるチョーカーには、彼女の能力の演算を一部肩代わりする情報処理装置が存在している。元々、麦野の能力は『感

情による揺れ幅が激しく制御しづらい』というところが使用のネックになっていたのだから、感情の存在しない機械に演算を任せることで能力の使用を安定化させ、それによってあまった彼女自身の脳のリソースを出力増大に回している、と言うわけだ。

当然、所詮機械に代理させているわけだから『演算補助機』のスペックにまでは及ばない為、『電翼』の使用は通常一本まで、二本使用すると使用後相当な倦怠感に襲われる、という制限はつくが、『演算代理機』にはもう一つ旨みがある。

麦野の成長が促される、という点だ。

これに関しては冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）の親心と言っても良いだろう。演算代理機はその演算の手法を麦野の脳に還元し、麦野自身の素の能力演算にも改変を加えることで能力運用を効率化させる機能も持っている。これは代理機を利用して能力を使用するたびに起こる機能であり、少しずつではあるが、それでも通常よりははるかに早いスピードで麦野は成長することになる。

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）の見立てによると、大体二年と三ヶ月程度もすれば代理機の機能込みで対垣根戦で見せた演算と同等のスペックが得られるという話だった。正史で起こる事件のスピードを考えると遅いと思うかもしれないが、あれほどのレベルに成長するまでたったの二年というのは相当のチートである。

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）って本当に何者だろう、と思った。

「……どうやら、連中の脳味噌の破壊は確認できたみたいね。じゃあ親船。これからどうする？　予定通りリラクゼーション施設に行くか、それとも家に帰るか」

「ん～……、そうだね。私としてはリラクゼーション施設に行きたい気分だけど、」

そこまで言いかけて、私は言葉を止めた。何故か？　それは、麦野の背後に『見てはいけないもの』を見つけてしまったからだ。

（馬鹿な……、『実験』場所はこの近くだったっていうのか？　いや、有り得る……。この辺は最近大企業のビルがつぶれたばかりで、第三学区の中でも比較的人が少ない地域だ。『実験』をやるには御誂え向きかも……）

私の視線の先にあったのは、軍用ゴーグルを額につけている御坂美琴――いや、その妹達（シスターズ）の姿だった。肩には何か柔らかいものが入っているだろう寝袋のようなビニール製の袋を抱えている。中身は……言うまでも無いだろう。

この『実験』で死亡した妹達（シスターズ）の一人だ。

「親船？　どうした？」

「ん、いや。なんでも。なんか知り合いに似てた人がいたから」

怪訝な表情を浮かべた麦野に、私は咄嗟に誤魔化しの言葉を吐いた。……我ながら、もう少しまともな誤魔化しはなかったのかと言いたい。……それにしても、絶対能力進化（レベル６シフト）計画、か。もうそんな時期になるのか……。私としては、絶対に巻き込まれたくない事件だ。

何せ敵は一方通行（アクセラレータ）、それも上条でさえも厳密な意味で勝利はできていない初期一方通行（アクセラレータ）だ。

私に勝てる道理などない。『アイテム』総出でかかれば、絹旗の脳にインプットされてる一方通行の思考パターンから動きを割り出したり、制御の良くなった麦野の『原子崩し』で木原神拳もどきをさせて時間稼ぎしているうちに、私と滝壺で能力解析して相殺して止めをさせるかもしれないが……、……駄目だ、そん

な都合よく進むイメージが沸かない。多分逆に絹旗の思考を一方通行に読まれてそこから全員蹴散らされて終わりが関の山だ。

勝てる道理が万に一つさえ無い。そんな事件に介入したいと思う奴は、命の重みを知らない馬鹿かはたまた自分を襲う危険にも気付かない馬鹿だけだ。

……さっきはリラクゼーション施設に行きたいって思ってたが、やっぱり駄目だな。このままぶらついてたら思わぬ事件に巻き込まれそうな気がする。剥離要素（エラーポイント）は二人潰せたんだし、今日のところは帰宅すべきだ。

「……やっぱ気分変わった。このまま帰ろう、すぐ帰ろう。可能なら暗部の車出してもらってそのまま帰ろう」

「……え、まあ……いいけど。でも暗部の車は出せないわよ。下部組織（つら）は証拠隠滅の方に借り出しちゃってるから」

……まあ、期待はしていなかったが。

「それじゃあ、とりあえず黒花と合流ね。その後隠滅作業を終えた絹旗たちと合流するから」

「了解～」

てきぱきとこの後の段取りを決めた麦野に付き従い、私はビルの間の路地裏から出て行った。

＊＊＊

「あ、お嬢様に麦野さん、お帰りなさい～」

路地裏から出た途端、ミルクティー片手にこっちに向かっていた黒花から挨拶を受けた。『ただいま』と律儀に返した私とは対照に軽く右手を挙げて答えるだけに留めた麦野は、そのまま広い通りを歩き始めた。

『……あれ？　どうして麦野さんは絹旗さんたちと合流しないんですか～？』

黒花が念話（テレパシー）で私に質問してきた。……まあ、分からないからといって麦野に質問して呆れられるよりはマシか。そんなことも分からないのかと呆れる一方で、馬鹿なりに賢い行動が身についてきてる黒花に少しほっこりしながら、私は念話を返した。

『そのまま合流しちゃうと、色々とマズイんだよ。彼女たちは下部組織に死体の後片付けとかその後の隠蔽の段取りを指示したり打ち合わせたりする必要があるから。……今までは適当に下っ端任せだったらしいんだけど、私の保身がかかってる以上いい加減じゃ許されないからね。それに、傍から見たら絹旗ちゃんたちはさっき血みどろの争いが行われたビルから出てきた不審人物だし。その不審人物が私たちと合流しているところを万に一つでも見られるようなことがあったら、私が大変でしょ？　だから合流場所を別に設置して、そこに至るまでの道のりで監視を発見したら消す、という作業をする必要があるんだよ』

『……なるほど～』

私の返答に、黒花は心中で頷いた。

……まあ、それにしたって個室サロンではなく普通に私の家に集合すればいい話なんだが、そのあたりは麦野も何かしら思惑があるのだろう。

しばらく歩いていると、第三学区の個室サロンにたどり着いた。

原作では、確か一九巻で滝壺の退院祝いをやっていた時に登場した場所だったと思う。

学園都市では生徒がたくさんいる関係上、此処みたいに『個人の空間』を提供するサービスが発達してる、という話だったか。

麦野からも、基本的に『アイテム』の隠れ家は此処になるから困った時は此処に潜り込んでおけ、っていう指示を受けていた。

「絹旗達は後からココに集まることになってるから、私たちは先に中に入って待ってるわよ。……ちょっと確認したいこともあるし」

言いながら、麦野は小型の携帯機器を取り出して何やら操作しながら自動ドアをくぐっていく。私と黒花も、その後に続いて個室サロンに入っていった。

＊＊＊

「皆揃ってるわね」

個室サロンには、私を含めた六人が集合していた。六人ともなると少し手狭なこの部屋だが、空調は万全なのでむさくるしさや息苦しさは感じない。ソレに仮にも女の子だしね。

「麦野、結局どうしてここに集合したの？　合流するなら此処よりも親船邸の方が安全な気がするけど」

全員を見渡した麦野に、フレンダから疑問の声が上がる。……それは私も思っていたことだ。同じように疑問の気持ちを視線にして麦野に投げかけると、麦野はそれを認めたのか静かに話し始めた。

「流石に、向こうで話すには刺激が強い話だったから。丁度第三学区だったし、こっちの方が近場で楽でしょう？」

……とりあえず、話があることは確実のようだ。しかし、私の家で話すには刺激が強い話、ってどういうことだ？

「で、何の話なの？」

「……落ち着いて聞くのよ」

未だに麦野の真意が掴めない私たちを尻目に、麦野はおもむろに口を開いた。

「……実は、上層部の中で親船が学園都市に謀反を働こうとしてるかもしれない、っていう疑いの声が強まってるのよね」

……拝啓神様。
いい加減にしないとそのうちブッ殺しにいきます。

01（後書き）

上条との絡みは、上条視点で見ると
・令嬢／幼馴染／清楚／半目　という属性ゴテゴテ少女登場
・上条の記憶喪失を知ることで友人も悲しむだろうと悟る
・女の子に抱きつかれて幸せ
というイベントになっております。

02

待て、落ち着け、冷静になれ。キレたらそこで終わり。思考を放棄したら食いつぶされるのはコッチのほうだ。

頭に上った血を、咄嗟そう考えることで抑える。この商売（ではないけど）、冷静さを失ったら死ぬからな。こういう手段には事欠かない。

大体、麦野たち『アイテム』と私は基本的に利害関係でしか結ばれていない関係。もしも私の立場が致命的に悪化していたのならば、麦野は私に忠告だけしてさっさと仕事から下りていたはずだ。万一私が学園都市にとって『悪性』だと判断されたときに、彼女が私の側についていたら、巻き添えで消される可能性があるから。

この状況で私と行動を共にしている時点で、少なくとも麦野の頭の中には何らかの打開策が存在しているはず。

「ほら、私達、幻想御手（レベルアッパー）事件の鎮圧に動いた垣根を撃退しちゃったじゃない。アレは一応暗部としての正式な仕事だったからね。親船が家の力でその辺をカバーしてくれたから何とかなったけど、それでも不信感は募ってたみたいなのよ。しかもその上、私たちは療養とか親船の護衛を理由に何度か上からの指令を蹴ってるし、私の能力を強化したとかで軍備も強化してる節があるし、暗部からの度重なる攻撃の報復っていう『上』に反逆する動機もあるし、暗部の大抗争を起こしたっていう前科もある。この状況で疑わないほうが不自然だと思わない？」

「じょ、冗談じゃないって訳よ！！　どうにかならないの！？」

フレンダが麦野に掴みかかる勢いで飛びついたが、あっさり頭に右手を当てられソファにたたきつけられた。……多分、フレンダが

警戒しているのは私の敵対認定に伴う親船家の地位の悪化だろう。
私の巻き添えで親船家が抹殺されてしまえば、フレンダが死んだ時にフレメアを守る保険はなくなってしまう。彼女にとっては最悪の結末だ。
……それはさておき、麦野の対応がいよいよ持って余裕綽々だな。これは本当に、麦野自身に策がありそうだぞ。

「で、麦野さん。そういう言い方をするってことは、一応打開策は考えてるんだよね？」
「流石に親船は理解が早くて助かるわ」
「あ、あるんですか？　この状況を超打開できる『策』が」

麦野が私の言葉に頷くと、絹旗は食い気味に麦野に問いかけていた。

「……というより、既に上層部から用意されていた、って感じね」

そういって、麦野は部屋の電気を消し、持っていた携帯機器のプロジェクタ機能を使って壁に資料を表示させた。
……『依頼（めいれい）』、ということだろう。ここらで仕事をこなして、上層部への忠誠心を見せてみろ、でもなければ殺す。つまりそういうことか。そして、そこには私の同行も必須。護衛の仕事をさせるという面から見ても、上層部に私が反逆するつもりがないことを忠誠で示す意味でも。
勿論、薄汚い暗部の仕事に身を窶すような奇特な趣味を持ち合わせているわけでもないので、積極的に参加するつもりはないが。

「……いやに詳しいね」
「そりゃあ、今まで散々依頼を蹴ってんだからね。向こうも私たちに『はい』と言わせるための工夫を凝らしてんだろうさ」

資料を一目見て怪訝な表情を浮かべた滝壺に、麦野は涼しい顔で答えた。……それに、私がいる訳だしな。既に依頼で動いている組織を動かす為には、その上司（クライアント）を納得させる必要が出てくるだろうし。

「……どれどれ」

資料には、『研究施設の情報引継ぎの護衛』と書かれている。読み進めていくと、資料にはこうあった。

『絶対能力進化（レベル６シフト）計画』の研究施設の破壊に伴い、研究情報をを学園都市の外部組織に引継ぎ、研究を続行する。その際、研究情報の引継ぎの間、情報の伝達を確実なものとする為の護衛として、『アイテム』に活動を依頼したい。

他にも色々と雑多な条件や報酬などについて書かれていたが、私にとって重要なのはこの文章だ。

絶対能力進化（レベル６シフト）計画だと？　さっき妹達（シスターズ）を前にして絶対関わりあいになりたくないと言ったばかりじゃないか！！

どうしてそんな依頼が舞い込んでくる！

『……、ここで「正史」どおりになりますか……。人生ってままなりませんね』

そんなことを考えていたが、黒花から送られてきた念話（テレパシー）に、私は一度不満の思考を中断した。「正史」どおりってどういうことだ？

私の知識にはこんな事件なかったが……、まさか、超電磁砲（レールガン）か？

『もしかして、漫画の方でこの話あった？』
『はい。確か正史だとこの資料にあるように一基だけじゃなく、二基の研究所の護衛指令っていう形だったはずですけど……』
……ほう？　一基だけじゃなく、二基の研究所の護衛命令？　じゃあ何でこっちは一基減ったんだ？
『沿受ちゃん、詳しく説明してくれるかな』
私の念話（テレパシー）に、黒花は『はい』と言って応じた。
『確か超電磁砲（レールガン）では、御坂さんが実験関係の研究施設を壊されてしまったから別の研究所に情報を移すとかで、「アイテム」が研究所の護衛に借り出されていたんです。それで、絹旗さんと麦野さんと滝壺さんのチームとフレンダさんに別れてそれぞれの受け持ちの研究所を護衛していたんですけど、フレンダさんの護衛していた研究所に御坂さんがやってきて、フレンダさんと交戦、フレンダさんが負けたところで麦野さんと滝壺さんが救援に向かうも御坂さんに撃退される、という流れだった気がします』
『絹旗ちゃんの動向は？』
『えっと……確か、それ以前に登場してきた「布束砥信」っていう、妹達（シスターズ）が実験で殺されるのを見てられない研究者さんと一緒にいて、咄嗟の隙を突いて布束さんが妹達（シスターズ）に感情データを入力しようとしたのを絹旗さんに取り押さえられた、って感じの話だったと思います』
『もう良くは覚えてませんけど、三年も経ってますし』と申し訳なさそうに言う黒花はさておき、私は考える。
正史では二基、この世界では一基。この乖離は何だ？　黒花の記憶違い……はないだろう。研究所の残基は展開の重要なファクターだ。

では、御坂が正史よりもハッスルしていた為に正史より余計に研究所を潰してしまったとか。もしくは、他の転生者が独自に研究所を潰していた為に一基少なくなってしまったとか。

……どれもないだろう。もしもそうなっていれば、依頼が送られる時期が早くなっていただけで一基になってしまうことなど有り得ない。この街の暗部が、そんなにギリギリになるまで不具合を放置しておくことなど考えられないからだ。

じゃあ、別の組織がもう一方を担っている、と考えるのはどうだろうか？

大いに有り得ると思う。元々、『アイテム』というのは索敵、主砲、主砲の護衛、工兵という四人全員が集まって初めて最大の力を発揮する組織だ。それをバラけさせるというのは、上層部としてもあまり得策ではないだろう。私や黒花はそもそも護衛対象だから勘定に入れることは出来ないし。

……しかし確証が薄いな。そもそも、正史ではどちらも『アイテム』に任されていた案件が別の組織に分担される理由がない。

……駄目だ、これ以上の推理は難しそうだ。そう考え、私はもう一度資料に目を通してみた。そして、ある文章を発見する。

データの移設作業に際して、布束砥信研究員が割り当てられるので、彼女の護衛にも当たること。尚、彼女は絶対能力進化（レベル６シフト）計画反対派の研究員なので、不意の反逆行動も考慮に入れた上で行動すること。

……オーケー、何故仕事が別の組織に分担されたのか、その理由は分からないが、どうやら確定らしい。

この指令は暗部に送られてくるものだ。とすると、当然その情報源の根幹には滞空回線（アンダーライン）が存在している。となれば、次に御坂が襲うほうの研究所は、既に上層部が把握しているというわけだ。

その上で布束の護衛に『アイテム』を置くとすると、御坂が行くほうの研究所にはどの組織が割り当てられる？　……幻想御手事件（レベルアッパー）の流れを考えれば、答えはあっという間に出るだろう。

超能力者（レベル５）相手に護衛任務を遂行できる人物。……それは、同じ超能力者（レベル５）に他ならない。……要するに、また『スクール』が出動してる可能性が高いってわけだよ、このクソッタレ！！

さて、危険は判明した。じゃあ、どうやってこいつらを私の望むとおりに誘導するか、だが。私はその『穴』を探すべく、しばらく資料をじぃっと見つめた。

……、……、……。

よし、これなら、あるいは。

「……麦野さん」

「何？」

「この資料なんだけどさ。おかしいと思わない？　添付資料によると『絶対能力進化（レベル６シフト）計画』っていうのは『第三位のクローンを利用して一方通行（アクセラレータ）を絶対能力（レベル６）にする』っていう計画らしいけど」

そう言って私は話を切り出した。

「何でこっちの研究所、第三位のクローン――欠陥電気（レディオノイズ）の個体データしか記録されてないの？　普通、こういうのって検体である一方通行（アクセラレータ）

通行の能力の推移も記録されているはずだと思うんだけど」
「え？　……ホントね。その通りだわ」
私の指摘した矛盾に、麦野は唖然として頷いた。おそらく、その事実に気がついたと同時、私の言わんとしている『可能性』に気付いたのだろう。麦野に次いで頭の回転が速い滝壺も、資料を見て唸っている。まだまだお子ちゃまな絹旗とお調子者のフレンダは理解していないようだが。
『……親船さん、何が言いたいんですか？』
……ああ、後この駄目イドも理解してないみたいだな。
「確かに、こういう研究は複数の研究機関で研究項目を分散して行って、万が一研究施設が破壊されたときの為に備えておくのが常よね」
「破壊？」
麦野の言葉に、絹旗がクエスチョンマークを浮かべる。
「ええ。おそらくこの護衛依頼は、何者かに研究所が破壊されすぎた為に出されたものよ。……襲撃者の殺害許可まで出てるしね。……恐らく超能力者（レベル５）級の戦力を持つ人間が犯人ね。でもなければ私達が借り出されるはずがない」
「ちょっと待ってよ？　結局、『第三位のクローン』で『超能力者（レベル５）級』って言ったら一人しか思い当たらないんだけど……。アイツそういう感じの実験知ったら絶対妨害に入るだろうし、もしかして私達、アイツと喧嘩しなくちゃいけないって訳？」
麦野の言葉に、フレンダが問いかける。『まあそうなったとして

もやり切れる自信はあるって訳だけど』とか言ってるが、それでも緊張はするだろう。現に私を除いた全員の表情に緊張が走っている。……私は元々がちがちに緊張しているけどな。

「……まあ、それは特に問題ないんだけど。此処で重要になってくるのは、『研究データが明らかに不足してる』っていう事実。さっきも言ったように、こういう研究では破壊工作に備えて研究項目を分散して行うのが定石なの。ということは、最低でも後一つくらい研究所は残っているはず。それなのに、私たちは一基しか護衛を任されていない」

対して麦野はフレンダの質問をごく自然にスルーし、話を始める。

「どうして一つしか任されていないのか、それは分からないけど、状況から言って高確率で他方の研究所には別の暗部組織が割り当てられてる」

「……『スクール』ね」

私の言葉に、麦野が呟くように返した。本当に、この麦野は頭が良くなっていて助かる。此処までくれば、あとは前回と同じ流れで行ける。

「だから、今回も前回と同じように、」

「駄目よ」

私が話を進めようとしたところで、麦野がそれを遮った。

……あ。……しまった。盲点だった。

「……親船。前回の事件で第三位に情が沸いた、ってことはないわよね。もしくは昼間の『お友達』の知り合いだからとかそういう理

由から？」

麦野が私に詰問するように聞いてくる。自分の立場が悪くなったことに冷静さを欠いたか。……確かに、今のは私らしからぬ失言だった。

同じ策を二度続けて使うというのも愚策だし、そもそも今回の『護衛』の依頼は前回……幻想御手事件（レベルアッパー）、つまり木山春生の捕縛依頼とは毛色が違う。

前回においての御坂はあくまで『民間で独自に木山を捕まえる為に動いていた善意の協力者』であり、殺害許可も出ていない人間だった。だからこそ、木山を殺し、それを妨害する御坂までも殺す可能性のあった垣根を妨害することに正当性を与えることが出来たが、今回は違う。

今回の場合、その御坂が事件の発端であり、殺害許可も出されている『敵対人物』なのだ。ただでさえ立場が悪くなっている私が、下手に上層部の意向に反する行動をとれば、今度こそ終わる。麦野はそう懸念しているのだろう。

「……麦野さんには関係ない話だよ」

とりあえず御坂を殺すわけにも行かないという本音を出したくない私は、あえて意味ありげに苦い顔をして答える。いらぬ勘違いを麦野にさせるのは面倒なことだが、変に不信感を持たれるよりはこうしておいた方がずっとマシだ。

「親船、」

「でも、分かった。あくまで一番大事なのは私の保身だからね。『このやり方』は諦めるよ」

煮え切らない私の返答に追い込みをかけようとしたのか、さらに声を上げる麦野に私は被せるようにして言葉を返す。……現状、前回と同じ理屈でアプローチできないなら違う理由を見つけ出せば良い。屁理屈でも詭弁でも構わない。正当性さえあれば、上層部の不興を買うことなどないのだから。

「……流石は親船。諦めの悪さは天下一品ね」

麦野の呆れたような、それでいて安堵を浮かべた笑みが印象的だった。

＊＊＊

ｓｉｄｅ麦野

意外だった。

あの親船が、必要とあれば私達であろうと迷いなく切り捨てるだろう親船が、たかが第三位の保身の為に自らの保身を切り捨てるという行為そのものが。まさか、第三位の命そのものに価値を見出すほどこいつは善人ではないだろう。すると、昼間懇意にしていた男関係だろうか。そうあたりをつけた。

……危険だ。あの親船の思考を、ここまで乱す男の存在を、私は純粋に恐怖した。

そもそも、一人で三沢塾を制圧できるほどの『外部』――おそらく『魔術師』だろう――を相手に、五体満足で生還したほどの男だ。小豆の思考を乱せる人心掌握術の他にも、純粋な戦闘能力を見ても侮れない。

――『小豆の護衛』という観点から見たら、必要とあれば殺すことも視野に入れなくてはならない。それほどの危険人物だと判断した。

「……麦野さんには関係ない話だよ」

私の言葉に、苦虫を噛み潰したような表情で返す親船の言葉に、普段の策謀は感じられない。どうやら、これは私の危惧したとおりで間違いないらしい。こいつは、十中八九あの男――『幻想殺し』に特別な価値、あるいは感情を見出している。それがコイツの目の上のたんこぶでもある『統括理事長』に対するジョーカーとしてなのか、はたまた青臭い感情からの暴走なのか……。

当然、だからといって自分の『大切なモノ』を見失うほど馬鹿ではないと思っているが、一時的に目的を見失うくらいのことは有り得る。暗部の中で生き抜いてきたとはいえ、コイツは一六の女の子だ。なまじ中途半端に表に浸かっているから、私の思考のそれよりもよっぽど年齢相応な精神構造をしているだろう。その精神を、無理やりその強靭な理性で押さえつけていたとしてもおかしくはない。

だが、それでも本質は少女であるはずだ。胸に抱いた僅かばかりの恋心に乱され、普段では有り得ない思考に囚われることもある。

だからこそ、私は『忠言』する。

コイツならば、私がちょっと叱ってやればすぐに我に返るはずだから。

「親船、」
「でも、分かった。あくまで一番大事なのは私の保身だからね。『このやり方』は諦めるよ」

……そう思っていたのだが、どうやら余計な心配だったようだ。どうやら、一時的な動揺でカードの切り方を間違えた程度の揺れだったらしい。少し心配しすぎたか、と自分の今までの内心に苦笑すると同時、私の見込んだとおりの『徹底具合』が崩れていないことに少しだけ安心した。

「……流石は親船。諦めの悪さは天下一品ね」

呆れたような私の笑みに、親船は照れを隠すようなバツの悪さで笑みを浮かべ返した。……完全に、我を取り戻したみたいだ。真顔に戻った親船は、驚くほどの早さで『代案』を話していく。

「それじゃあ、こうしよう。絹旗ちゃんと滝壺ちゃんは依頼通り研究所の護衛と布束研究員の監視。沿受ちゃんとフレンダちゃんは研究所周辺の捜査。万が一、御坂さん以外にも敵がいたらマズイからね。剥離要素（エラーポイント）の件もあるし。そして、麦野さんと私は御坂さんの尾行と早期排除。依頼内容から御坂さんが犯人であることは一目瞭然だし、それなら先に潰しておく為に動いたっていうのにも理がある。仮に連中（スクール）が動いて妨害に走ったとしても、同じ依頼による行動なんだから先に接触しておけばこちらが先に潰す権利を得られる。あとは適当に『撃退』しておけば、『護衛』っていう依頼自体は遂行できる。……流石に、超能力者（レベル５）が二人がかりでなら御坂さんも早々に諦めるでしょ？」

……なるほど、あくまで『「スクール」が第三位を潰すのを阻止

する』んじゃなく、『「スクール」が第三位を致命的に潰す前にこっちで軽く潰す』訳か。

確かにそれなら『スクール』の仕事を『奪う』ことはあっても『邪魔』をすることにはなりえない。むしろ、今までの遅れを取り戻す為に意欲的に仕事に取り組んだという印象まで与えられる。

……無論、表向きには、という但し書きはつくし、上層部からは『女狐め』と思われるかもしれないが、それは上層部の中でもほんの一握り。机の上で政治ゲームに勤しんでいる馬鹿な老人どもには、小豆が必死になって連中に媚を売っているようにしか見えないはずだ。

当然、拒否する理由もない。私はただ満足げに頷くだけ。他の連中も、そもそも私が親船の提案を拒否したあたりから置いていかれている状態、私が認めた以上、拒否する理由もなかった。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

いやはや、今回ばかりは麦野に助けられたかな。まあ、結構金かけて強化してやってるんだし、このくらいの補佐はしてもらわなく

ちゃ困るところでもあるんだが。

それはさておき、当面の方針確認は終わった。元々危険度の低い布束対策には絹旗と、それから一応保険として滝壺。『正史どおり』となる御坂と麦野の戦闘は私を加えて勝率をほぼ一〇〇パーセントに引き上げ、高確率で現れるだろう『剥離要素（エラーポイント）』は黒花とフレンダが露払いを行う。

宙ぶらりんとなるもう一つの暗部組織――これはまあ十中八九『スクール』だろう――がネックになってくるが、これもそこまで心配はいらないはずだ。連中も何も好き好んでこちらと敵対してくるとは思えない。まあ、私のことを狙ってくる可能性もあるが、その場合は私が逃げればいいだけの話だ。

今回は前回と違って、殿的（しんがり）な意味での戦闘ではない。逃げようと思えば簡単に逃げられる、いわば撤退戦のようなものなのだから。

作戦会議を終えた私たちは、とりあえず自宅である親船邸に戻っていた。

既に全員入浴は済ませ、寝間着となって各自ベッドの上でごろごろしている。……黒花だけは、従者（メイド）ということでベッドの脇に立っているが。……ホント、こいつは一体どういう神経してるんだろうとたまに思う。いくら形から入る性質（たち）だとはいえ、こんなにもメイドになりきれるだろうか？　前世で一体何があったというんだ？　ここまでなりきって“コスプレ”できる人間などそういないだろうに。

……考えるだけ無駄か。ギャグ補正じゃ割り切れないところまで来ている気がするが、まあそういうことで割り切っておこう。

「でさぁでさぁ親船！　昼間の男の子って結局なんだったの？」

「私も超気になります！　いつも胡散臭い笑みを浮かべてるか悪そうな笑みを浮かべてるかの親船さんが“あんな顔”するなんて超初

めて見ましたし」

……目下の問題は、こっちだ。

昼間の赤面事件、それから先ほどの失策事件は、『アイテム』連中の不興を買ったり、私への不信感を与えることこそなかったものの、やっぱりというか私が上条に惚れている、という厄介な誤解を生み出させてしまった。

全く、上条のフラグ生成能力というのは恐ろしい。全くそんなそぶりを見せていなくとも、その周囲からこうして既成事実を築き上げていくのだから。

「なんだったの、ってただのクラスメイトだよ」

「ただの、と言う割には中学時代三年間及び高校生になってからもずっと隣の席だったそうですが～」

さらっと流した私に、黒花がすぐさま畳み掛けてくる。こいつはまた余計なことを……。私が転生者だということを理解してるなら、下手に上条に触れたくない気持ちも分かっているはずだろうに。

「へぇ～、そぉなんだそぉなんだ。ずうっと隣の席、ねぇ～。結局、それってウ・ン・メ・イって訳なんじゃな～い」

……、……。

「……フレンダちゃん、減給ね」

「なあっ！？　ちょ、人が悪いって訳よ親船～～～～っ！！」

全く、本当に洒落にならないから勘弁して欲しい。こっちは“人

”の力のすべてを賭けて上条回避に勤しんでいるというのに、それを全て『運命』なんてふざけた言葉で片付けられてはたまったものじゃない。

「でも、おやふね。何も言おうとしなかったら余計に疑われる一方だよ。好きじゃないならどういう風に想ってるのか、どういう仲なのか、きっちり明確に説明しないと分かり合えるものも分かり合えないよ」

そんな風に苛々としていたら、滝壺が諭すような調子で声をかけてきた。……うぅむ……。そういう風に言われると確かにその通りのような気もしなくもない。

……って違うだろ！　完璧に話術にハメられそうになってたけどこれ単純に『好き』と取れそうなワードを聞き出そうとしてるだけじゃないか！　どんな回答だろうと『それって結局好きなんだよね？』って流れに持っていって結局私をからかうだけじゃないか！

滝壺恐るべし……！！

「だぁーかぁーら！　私は上条くんには何も興味なんかないんだって！　そもそも男の人にすら興味ない！　ふざけるのもいい加減にしてよね！！」

もういい加減に勘弁して欲しい私は、とりあえず『上条に興味なし』『恋愛にも興味なし』というところだけピックアップして話を切る。はぁ、と息をついて機嫌が悪いアピールをしながらベッドに寝転んだ私は、その後で非常にマズイことを言ったことに気がついた。

「……え、親船さんって超……」

「結局……やっぱりソッチ……？」

「ほらな、私の言った通りだっただろ？　ちょっとからかえばすぐ本音出すって」
「……ご主人様が百合だったんだが何か質問ある？　っと」

あー、……完全にやらかした。っつーかコレ麦野の差し金かよ！　っていうか黒花は私の個人情報を携帯で某巨大掲示板に流すんじゃない！！　それ洒落にならないから！　マジで！！

「そんなおやふねも私は応援してる」
「そんな応援いらないからっ！？」

結局、私はこの後自身の“百合”疑惑を解くために、三時間ほど時間をかける羽目になった。

……三日後に大一番が控えてるっていうのに、私何やってるんだろう……。

02（後書き）

・上条さん、不幸にも麦野さんと敵対フラグが立ちました
・黒花はスレを建てる『フリ』をしているだけです。流石に。

03

「さぁーて、やりますか」

コキコキと、肩を鳴らして準備運動する麦野。今日の服装は薄ピンク色の丈の短いワンピースに、黒の短パン、ブーツと黒いハイソックス。何気に足が細く見える外見だ。前にフレンダに教えてもらった『麦野は足が太いのを気にしてるって訳よ』って情報はマジみたいだな……。

黒花によると『「正史」どおりの服装……だと思いますね～。因果な偶然もあるものです……』という話だ。本当に、面白い偶然もあったものだと思う。

ちなみに私は先日の白いワンピースではなく、いつもの短い丈のワンピースに薄いシャツの上着、それから下にジーンズとパンプスなっている。イメージカラーはライトグリーン。やはり、何だかんだでこれが一番動きやすい服装だ。暑くても股座がすうすうしないというのはそれだけで私の動きの正確性を上げる気がする。

さて、私もそろそろ動かなくてはならない。既に絹旗と滝壺は研究所の方へ向かったし、黒花とフレンダも周囲の警戒についている。

「第三位は？」

「んー……今はまだ学生寮だね。基本的に御坂さんは夜間に行動してるみたいだし、決行はあともう少し先なんじゃないかな？　……そこの物陰でスタンバっておく？」

「……そうね。あまりあからさま過ぎてバレても面倒くさいから、大体一〇〇メートルの距離を維持しながら物影を通して親船の『遠視能力（ファーボイアンス）』と『透視能力（クレアボイアンス）』を併用して対象の動きを監視しつつ追跡、これで行くわよ。いくら電磁波で追跡を探知できるからって、

流石にこれだけやれば探知のしようもないだろうけど……、一応、探知されたら『追跡』じゃなくて『追撃』に切り替えるわよ。証拠は既に出揃ってるんだ。必要以上に遠慮することはない」

「りょーかい」

私と麦野は、そう言って話しながら常盤台中学学生寮前までやってきていた。

既に日は傾き、人通りもまばらになってきている。最終下校時刻が迫っているからだ。この時間帯では、最早バスも中々通っていない。すぐに御坂が動き出しても良いように、私たちは近くの物陰に隠れて息を潜める。

下部組織の努力の甲斐あって、このあたりの人間は大体暗部の息のかかった人員のサクラとなっている。私達が隠れていても不審に思う人間はいない。

「……にしても、まさか第三位と争うことになるとはね……。困ったもんだわ」

「一応、話で解決できる流れだったらそれで済ませるよ。御坂さんを暗部に堕としたら、色々とマズそうだし」

御坂は学園都市の広告塔的な役割を果たしている。まあ、暗部に堕ちていない超能力者（レベル５）は、御坂のほかには第五位の食蜂と、第七位の削板くらい。そして第五位は精神系能力と陰湿で地味な能力、第七位に関しては原理さえ分からないという体たらく。

能力実演旅行やらをするのにうってつけなのは、御坂だろう。それに、親父さんは『外』で結構力を持っている人間だと聞くし、下手に敵対されてしまえばそれはそれで『厄介』なような気もする。

何より、御坂が表にいないと正史の様々な事件が正史どおりの結末を迎えないだろう。それはなるべく避けたい。一応、『正史の流れを知っている』っていうのは私の持つ重要なアドバンテージだし。

「……それは、『幻想殺し（イマジンブレイカー）』関連からの理由？」

私の言葉に、麦野は底冷えするような声色で問いかけてくる。

……昨日から妙に引き摺ってくるな。まあ、確かに御坂が上条の道筋の重要なファクターを占めていることは否めないが、御坂を失うことによる学園都市の損失と、それに伴う私の立場の悪化も計算に入れているのは間違いない。

「麦野さん、何を懸念してるのか分からないけど、今の私はクールだよ。余計な心配はする必要ない」

「……分かってるわ。ちょっと聞いてみただけ。悪かった」

「……来たよ」

麦野との会話を一旦中断し、前を見据える。その先には、髪をポニーテールにしてキャップを被り、黒のTシャツに短パンといういでたちの御坂がいた。……どう見てもモロバレだ。変装しているようだが、事前情報があるのにあの程度で騙される裏の人間がいるんだったら見てみたいものである。

「……くくっ、いや、笑うのは失礼ね、あれで相手も真面目にやってるんだろうし」

「いいから。麦野さん、行くよ」

言いながら、私は割裂空洞（ダークホール）を発動し拡散力場を流していく。私の多才能力（マルチスキル）は、発射タイプと補助タイプの二つに分かれる。

前者の例として挙げられるのは、火炎放射や電撃使い（ファイアスロアー　エレクトロマスター）など。後者の例として挙げられるのは、肉体変化（メタモルフォーゼ）や瞬間移動（テレポート）などだ。

前者も後者も射程は数メートル程度だが、後者の場合発動の時点で私が割裂空洞（ダークホール）から数メートル以内に収まっていれば、後はどれだ

け距離が離れたところで元々の割裂空洞（ダークホール）が存在していれば能力は持続する。尤も、時間制限は存在するが。

そういうわけで透視能力（クレアボイアンス）と遠視能力（ファーボイアンス）を手に入れた私は、目を凝らして御坂の挙動を確認しながら動く。

今のところ、御坂は私たちに気付いているそぶりは見せていない。一〇〇メートルも離れているのだから当然な話だが、もしかしたら気付いた上で泳がされているかもしれない。それを考慮に入れた上で、何時電撃の槍が来てもいいように警戒しておく。

「研究所までおよそ二〇〇メートル。――親船、これはもう確定だと見ても？」

「……構わない、ね。次に広いところに出たら襲撃をかけよう」

麦野は私の言葉に頷くと、そのまま顔を上げずに両肩にまばゆい光を集めた。

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

――夜。

既に人気（ひとけ）はとっくに薄れ、明かりの類もない。そんなどうしようもない闇の中で、学園都市の第三位、御坂美琴は独り立っていた。

此処は研究施設の手前の道路だ。研究機材を運ぶ関係上、大型の車両が乗り入れることもあるため、ここは比較的広い空間が確保されている。

……美琴は、自らを尾行している存在のことを知覚していた。

人間は、誰だって微かに電磁波を発している。大分念には念を入れていたようだが、それでも意味は無い。『本来電磁波のない筈の物陰から電磁波が発せられている』、ただそれだけの異常があるだけで、美琴にとっては追跡者の存在を証左しているようなものだった。

「……コソコソしないで出てきたらどうなの？　いるんでしょ。分かってるのよ」

美琴は毅然と言い放つが、追跡者は一向に姿を見せない。怪訝に思って周囲の気配を確認すると、自らの頭上から急速に接近してくる光を発見した。

相手が『光』の出力を極限まで抑えていた為か、彼我の距離は数十メートル程度にまで縮められていた。自らの不注意に舌打ちしつつ、美琴は足元の磁力を操り高速でその場を退避する。ボゴン！！という音が響き、美琴が今まで立っていた地点に何者かが降り立った。

煙が晴れ、襲撃者の姿を確認した時、美琴は思わず驚愕した。何故なら襲撃者である彼女は、あの日窮地に追い詰められた自分を助けたボロボロの、“麦野さん”と呼ばれていた少女と瓜二つだった

のだから。

「あ、あなたは……！！」

「逃がさないわよぉ、第三位……ッ！！」

神々しくすらある一対の光の翼を広げた麦野は、しかし翼を持つ者――天使としてはあまりに不釣合いなほどに邪悪で、獰猛な笑みを浮かべていた。思わずあっけにとられた美琴だったが、直後電磁波の乱れを感知し、思い切り地に伏せた。そのすぐ上を、光の翼が通り過ぎていく。

「な、何で、あなたがここに……ッ！！」

「あ〝ァ？　今更そんなこと言ってんのかぁ？　テメェは。ンなモン分かりきってんだろうが。私が、敵で、テメェをブチ殺しに来た！　それだけだろうがァ！！」

美琴は此処にきてやっと状況を理解する。目の前の少女はあの日、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を破壊したあの少女と同一人物で、どうやらあの時共闘関係だったのは単純に利害の一致からだったらしい。今の麦野は、間違いなく敵だ、と。

「食らえやオラァ！」

麦野の号令と共に『光の翼』――『電翼』が真横に薙がれる。回避の直後で動けない御坂は、『電翼』に対し電撃で干渉して狙いをそらす。

「……この能力。何の能力かは分からないけど、電撃使い（エレクトロマスター）の亜種みたいね。さっきから電磁波の乱れが観測できてるし、現に私が逸らすことができた。でも、逸らすことができたってことは私よりも格

下ね、アンタ」

勝ち誇ったように挑発する美琴に、麦野はぴくりと眉を動かした。自らの能力を『格下』と言われたのだ。自分の能力にプライドを持っている高位能力者であれば、流すことの出来ない言葉だ。美琴だって、自分の能力を『大したことがない』という風に言われればプライドが傷つくし、怒るだろう。

「ナメやがって……、一つ順位が上だからって調子に乗ってんじゃねえぞォ！！」

怒りの形相のままに『電翼』を振ると、そこから数条の原子崩し（メルトダウナー）が放たれる。

しかし、今度の原子崩し（メルトダウナー）は直接美琴を襲うものではなく、その手前の地面に狙いを定められたものだった。先の垣根との戦闘で麦野が行った戦法。高熱で高速のレーザーが衝突すれば、当然起こるのは……、

「くッ！？」

その策に気がついた瞬間、美琴は磁力の反発をフルに使って空に逃れる。彼女の足元を、真っ赤に赤熱した地面だったマグマが通過した。マグマによる水しぶき。これは、原子崩し（メルトダウナー）に電撃で干渉して回避する御坂にも有効な策だ。如何に御坂といえど、電気によって引き起こされた二次的な現象まで支配することは出来ない。

危ないところだったと美琴が息をつくのも束の間、今度は空中にいるが為に回避が難しくなる。

「くはは、空に飛んだのは失策だったわね、第三位。精精ミディア

ム程度で勘弁してやるから安心しな……！！」

轟！！　と音を響かせて、麦野が原子崩し（メルトダウナー）を放つ。これも電撃によって回避するだろうと目算を立て、次の策略を練る麦野だったが、美琴はその予想を超えて何もない空中を横滑りして回避した。

「あァ……？　一体何があって……、」

不審に思い移動した方向に目を凝らすと、そこには鉄筋が存在していた。

「……さすが超電磁砲（レールガン）。流石に応用性じゃあ敵わないわね」

「そりゃあ、どうも。コレで分かった？　アンタの攻撃は私には通用しないって……ね。能力も分からない第四位さん。……いや、暫定第四位はアイツだったわね。第五位さん？」

「オーケーオーケー、どうやらテメェ、よっぽど死にてぇみたいだなッ！！」

足元の地面を爆発させ、麦野は瞬時に地上何メートルかの位置に居た美琴の眼前にまで飛んだ。そのあまりのスピードに咄嗟に行動できない美琴に、麦野は思い切り空中で回し蹴りを叩き込む。

蹴りを入れられた美琴の体がくの字に折れ曲がり、衝撃で美琴の四肢が鉄筋から離れノーバウンドで十数メートルも吹き飛ばされる。

（がハッ……！？　な、何今の……！　い、一撃で……ぐが、内臓の、感覚が……ッ！）

「――ったくよぉ。能力開発の応用が生み出す利益が基準なせいで、私が四位でテメェが三位？」

移動のエネルギーを全て蹴りに叩き込んだのか、そのまま空中で

静止した麦野は静かに地面に降り立つ。
ごろごろと、美琴の内臓が不気味な音を立てる。まるで、今の一撃で内臓の配置がバラバラにされてしまったかのような錯覚さえした。それでも打たれた部分を押さえながら、美琴は立ち上がる。すぐにでも立ち上がらなくては、あのレーザーの餌食にされてしまうからだ。

「ここでテメェをブチ殺したら、頭の固ーいお偉いさんも考え改めるのかねえ？」

ギュバッ！！　という電子音と共に発射された原子崩し（メルトダウナー）を、美琴は殆ど転がるように回避する。

「オラオラぁ！　愉快にケツ振って誘ってんのか売女（ばいた）がァ！　テメェの×××に熱線突っ込んで内面どおりの爛れ様に変えてやろうかァ！？」

持ち直し、すぐさま相手の攻撃に備えようとした美琴は、次の瞬間自分の顔面目掛けて飛んできた原子崩し（メルトダウナー）を必死の思いでまげて回避する。そして、この場に留まるのはマズイと言わんばかりに磁力の反発を利用して飛び回る。

「ギャハハハハァ！　ぴょんぴょんぴょんぴょんぴょんぴょんぴょんぴょん、テメェはダニ虫かってのォ！　おらァ！　跳ね回ってるだけじゃ第三位の名が泣くぞぉ！！」
（勝手に泣かせときゃいいのよ、そんなもん……！）

愉悦に表情をゆがめた麦野の連撃を必死にかわしながら、美琴は歯噛みした。このままではスタミナが持たない。いつかやられる、と。

（くッ、おそらく私の電撃も相手に捻じ曲げられる可能性が高い。なら、相手の対応できなさそうな攻撃で……）

パリッ、という音が美琴の鼓膜を打ち、次の瞬間数十メートル先の鉄筋がひとりでに浮かび上がった。

「……ほぉ、さっすが超能力者（レベル５）。さっきから逃げてばっかで物足んないなぁって思ってたのよね☆」

鉄筋は寄り集まり、一つの大きな腕のように変化して麦野に襲い掛かる。……が、麦野の余裕が崩れることはない。ぐいぃと空中に円を描くように腕を振ると、その軌跡をなぞるように原子崩し（メルトダウナー）が循環を始める。

「原子崩し（メルトダウナー）の盾、ってな。さしもの私も守りは甘いと思った？　ざぁーんねぇーんでぇーしたぁー！　学園都市の超能力者（レベル５）はそんな甘く出来てねえってことくらい、自分で身に沁みて分かってんだろうがよぉ！！　このクソガキがァ！」

瞬間、盾に使われていた原子崩し（メルトダウナー）の軌道が捻じ曲がり、鉄筋の腕を全て包み込む。……一瞬にして液体を越えて気体と化した鉄が、美琴の磁力の制御下から零れ落ちる。美琴は鉄が使えないと踏むと舌打ちしてすぐさまその場から回避した。

（場所が悪い……！　開けた広場で迎え撃ったのはミスだったか！　ここじゃ小細工しようにも最初っから手の内全部見せてるようなもんよ！？）

飛びながら物陰に隠れる美琴だが、そこにもすぐに原子崩し（メルトダウナー）の追

撃が飛んでくる。麦野がやってくるまでの時間、美琴は必死に対抗策を考える。

（万全の状態ならまだしも、スタミナも切れかけの現状でアイツの能力を真っ向から潰せる訳なんてない……。とすると、能力以外のところで相手を倒さないといけない。見たところ相手は敵をいたぶるのが好きなサディスト。加えて自分の能力に自信を持ってて、私よりも順位が低いことに不満を抱えている……）

「たっくよぉ。何だって私がこんな中坊の後始末をする為にここまで来なきゃいけねぇんだっての。ガキの始末なんざ同じガキの絹旗に任せとけばいいものをよォ……。あー面倒くせえ。超電磁砲（レールガン）だか何だか知んねえが、さっさと消し潰されてくれ」

そこで、麦野がゆったりと歩いて美琴の前まで来た。これも、油断の証だろう、と美琴は考える。そもそも遠距離攻撃ができるんなら最初からそうしておいたほうがよっぽど安全だからだ。

「何だか知らないんなら、いっぺん食らってみなさいよ……！」

ぴぃん、と麦野の目の前で、コインが弾かれた。麦野は一瞬きょとんとした表情を浮かべたが、次の瞬間再び愉悦の形に表情を歪める。

「ギャハハハハハ！！　面白ェ！　乗ってやろうじゃねえか出来損ないの第三位！　テメェの切り札（レールガン）ぶっ潰せば、私も晴れて第三位越えってかぁ！」

ギャン！　と原子崩し（メルトダウナー）が循環し、麦野の右肩から右腕を模した形として発露する。そして――、

バギュン！！　という音が響いたと同時、狭い物陰で爆発が生じた。

「――ぺっぺっ。チクショウ、下手に空間が制限されてるからこっちに煙が飛んできちまったじゃねえか。折角だからもっと広いところに誘導しとけばよかったわ、ね――」

「動かないで」

爆発に吹き飛ばされた麦野が起き上がろうとしていると、背後から声がかかった。

「――――、」

「簡単な理屈よ。いくらアンタの能力（チカラ）が私の切り札（レールガン）より強かったとしても、私には他に切れる手札なんていくらでもある。アンタと違って、私の本当の切り札（つよみ）はその手数の多さにあるんだからね。たとえば――、そう、二つの能力が拮抗している間に、瞬時に磁力による反発を利用して爆発の圏内から離脱する、とか」

起き上がろうとしている麦野の背後には、右手を掲げた美琴の姿があった。服はボロボロで、被っていた帽子もどこかに飛んでしまっているようだったが、それでも五体満足の状態だ。この状況であれば、麦野がどんな行動をとろうとしてもその前に電撃を浴びせることが出来る。

「……気絶させる前に答えてもらうわよ。アンタたちは一体何なの？　なんでこんな実験の肩を持つような真似をしてんの!?　アイツの、親船小豆の仲間なんでしょ!?　『アイツ』の友達の仲間なくせして、どうしてこんな実験の肩を持ったりするのよ!!」

「……くっ、ぷ、ははは」

身を削るような悲痛な美琴の叫びに、麦野は耐え切れない、といった調子で噴出してしまった。その様子にあっけにとられた美琴の表情を見ようとでも言わんばかりに、麦野はくるりと回転して美琴と対面する。

「……バッカじゃねぇの？　人サマに迷惑かけるような奴は破滅する。そんなモン火を見るより明らかだろうがよ。実験動物（モルモット）に感情移入して、『大人の事情』の邪魔をしちまう、そんなお子ちゃまに潰されるほど、学園都市は甘くねえんだよ」

「――――ッ！！」

にたぁ、と引き裂くような笑みとともにかけられた言葉に、美琴は軽く沸点に到達した。目の前に立っているのが人間だという事実も忘れて、普段では出さないような高出力の電気を浴びせる。

「――あーあー、馬鹿ね。こんな簡単な挑発に乗せられるなんて」

しかし、それも麦野の計算のうち。麦野は指を軽く振るだけで怒りのせいで制御が甘い電撃をいなすと、すぐさま距離を詰めて美琴の腹を蹴り飛ばした。

「ぐ。ごげェっ！？」

「おらおら、第二ラウンドだ！　その死に体でどこまでやれんのか見物だが、な……、」

数メートル吹っ飛ばされるも持ち直し、すぐさま相手の攻撃に備えようとした美琴は、放たれた原子崩し（メルトダウナー）を咄嗟に電撃で防御しようと思ったが、その動きを止めた。

何故なら、美琴目掛けて放たれたと思われた原子崩し（メルトダウナー）は、彼女の

すぐ横を通り、いつの間にか後方に現れていた優男に命中したのだから。

「……おーおー、随分なご挨拶じゃねえか。久しぶりにしちゃあ、ちょっと刺激的すぎるんじゃねえ？」

……命中、したはずだったのに。美琴は振り向いて驚愕した。真っ白い実体を持った巨大な翼を三対も備えた男が、全くの無傷でたたずんでいたのだから。

「……おかしいわね？　そっちの領分は『研究所の護衛』。わざわざ遠征なんてする必要ないはずだけど」

対する麦野は、先ほどまでの狂気に満ちた空気など一片も感じさせない様子で問いかける。小首を傾げる姿など、下手な常盤台中学の『お嬢様』よりもよっぽど気品に満ち溢れた佇まいだった。

その挙動だけで、美琴は悟ってしまう。先ほどまでの罵倒は、全て仮面（フェイク）だったと。相手は、全然本気になんていなってなかったと。本気で争っていたならば、自分も相手も、敗者は確実に命を落とし、勝者でさえも五体満足ではいられない死闘になっていた、と。

（確かに、コンディションは悪かったし本気も出してなかった。でも、ここまで序列って差がないものなの……！？）

自分とあの白髪の少年、第一位は赤子と大人ほどの差があったというのに。上と下の差を見て、美琴は思わず歯噛みしようとし――、

次の瞬間、それらの思考を全て投げ捨てて全力で退避した。

「ハッ、何を白々しいことを言ってんだか。どうせ、『あの日』み

たいに第三位を逃がす為の詭弁だろうが。確かに現状テメェらに理はあるが、こっちの担当はオレらだ、ってことも忘れてもらっては困るな。なら、潰す権利は半々だろ」

美琴の今まで立っていたところには、白く巨大な翼が突き立てられていた。

麦野のような手加減した、殺さないように注意した一撃とは訳が違う。これを見てしまったら、もう麦野が手加減していたというのは疑いようのない事実に感じられた。

「なぁにを血迷ったことを言ってるのかこのメルヘン天使は……。冗談はその似合ってない翼だけにしとけよ」

「心配するな、自覚はある」

軽口を叩きながら、麦野は『電翼』を大きくはためかせて空を飛んだ。それに対し翼の少年――垣根がその三対の翼をはためかせたところで、麦野が先に動いた。

轟！　という音を響かせて、麦野の『電翼』が大きく羽ばたく。突然の風になびく髪を感じながら、美琴の発電能力者（エレクトロマスター）としての感覚がびりびりと違和感を伝えていく。

電子の量が、通常よりも違いすぎる。美琴はそう感じた。おそらく、今の風はあの翼を構成している電子も一緒に乗せていた『電子風』なんだろう、と美琴は考えた。

「……チッ、クソッタレが。面倒くせえ真似しやがって」

電子風を浴びてから数ミリほど翼を動かした垣根だったが、やがて忌々しそうに舌打ちすると麦野の方を見据えた。麦野は、垣根の殺意の篭った視線を受けても動じない。

「要は、粉塵爆発みたいなものよ。テメェの能力はあくまで『この世のモノではない物質を生み出し操ること』。この世のモノではない物質に干渉された事象は、この世のものではない性質を得る。例えばその光は人の肉を焼く熱線になるし、その風は通常では有り得ないベクトルを内包したものになる。重力子の性質が変われば、簡単に空も飛べるでしょうね。……でも、だからといってお前は異質の法則を自在に操れるわけじゃない。粉塵爆発を起こす為には粉塵が一定の密度である必要があるように、事前に必要な条件を与えて、そこに未元物質（ダークマター）っていう火種を投げ入れる。そうして初めて、お前は『この世のモノではない事象』を自在に操ることが出来るようになる」

麦野は言いながら右手の周りに原子崩し（メルトダウナー）を循環させ、

「なら、その前提を崩しちまえば良い。テメェの整えた粉塵（かんきょう）の中に原子崩し（いぶつ）を紛れ込ませれば、お前はその中でまともに能力を使えなくなる」

チッ、と垣根の舌打ちの音だけが聞こえた。まさにその通りだった。どこで入れ知恵を受けたのか――恐らく小豆だろう――と垣根は思いながら、同時に時間がないとも思う。

仮に小豆がいるのであれば、どうせ彼女は垣根の拡散力場を物陰から逆算していることだろう。もしもこの場で解析が終了してしまえば、今度は垣根が逃げ回らなくてはならなくなる。

（（とはいえ））

そこで、二人の超能力者（レベル５）の思考がシンクロした。

垣根の、第二位の余裕は崩れない。第四位、裏第四位（アナザーフォー）、第三位。その三者を敵に回して、異世界の法則を利用することさえ封じられながら、学園都市で二番目の怪物は笑みを崩さない。

（空気中を制圧した程度でいい気になってもらっても困るんだがなぁ！！）

（この程度で終わる第二位だったらこっちも苦労しないんだけどね……！）

ズガン！　という轟音が響き、垣根の背中から生えた三対の翼のうち一対が地面に突き刺さる。それを見た麦野は、すぐさま高速で美琴に接近し、抱きかかえて空を飛ぶ。人一人を抱えての飛行は初めての体験だったが、演算代理機のお陰か割りとスムーズに空を飛ぶことが出来た。

……しかし直後、ズキリと脳のどこかが痛んだ気がして、この方法はまだ私には早いか、と考え直した。

「なっ！？　アンタ、一体何をっ！」

「黙りなさい。アイツの能力は干渉した物質に得体の知れない性質を付与すること。そしてアイツはこの状況で無駄なことをするタイプの人間じゃない。地面っていう性質から言って、大規模攻撃の可能性が高いのよ。お前に死なれたら私としてはマイナスだからね。悪いけどしたがってもらうわよ」

有無を言わせない調子の麦野に、美琴は思わず黙り込んでしまう。……冷静になってみると、脇の下に腕を通されて抱きかかえる関係からか、後頭部に自分にはない膨らみを意識して少し腹立たしい気持ちになるのだが、今はそんなことを考えている場合ではないと頭を振って冷静さを取り戻す。

「で、どうすんの？　このままだとジリ貧だと思うけど。私の超電磁砲（レーガン）でも……貫通できないわよ、あの翼」

「当然だろ。超電磁砲（レールガン）の威力をはるかに凌駕する私の原子崩し（メルトダウナー）でもハンパな威力じゃ通らないんだ。だから、戦わない。私の勝利条件はあの脳味噌メルヘン野郎の始末じゃなくてお前を逃がすことだからな」

麦野の言葉に、美琴は思わず体を強張らせる。

「に、逃げる!?　それじゃ、私が逃げた後アンタはどうすんのよ！　現状、二対一だって厳しいのにどうやって……」

「二対一じゃないわ。三対一よ」

「は？」

思わず怪訝な表情を浮かべた美琴に対し、麦野は軽く顎をしゃくってビルの屋上を示す。そこには、しゃがみ込んで何ごとかの作業をしている少女の姿があった。既にあたりは暗くなっている為よく見えないが、それでもあのシルエットには見覚えがある。親船小豆、その人である。

「お前にはとりあえずアッチに合流してもらう。今から投げ飛ばすが準備はいいな？」

「え、ちょ！　投げ飛ばすってアンタ、そんな力どこに……っていうか、アンタはそれでどうすんのよ!?」

狼狽しながらも何とか苦言を呈そうとする美琴に、麦野は一切取り合わない。そうしてそのまま、麦野は軽い調子で、

「どうするって……、決まってんだろ。ちょっとあのメルヘン頭と戦ってくる」

そう言って美琴を『投擲』した。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

御坂と麦野が接戦を繰り広げている最中、私は二人の戦っている広場のすぐ隣のビルで戦況を眺めていた。

さて、さてさてさて。

麦野と御坂が交戦を始めたか。麦野さんも今のところ平常心は保ててるみたいだし、これは計算どおりかな？

「オラオラぁ！　愉快にケツ振って誘ってんのか売女（ばいた）がァ！　テメェの×××に熱線突っ込んで内面どおりの爛れ様に変えてやろうかァ！？」

……平常心、保ててる、よね？

いや、アレで麦野は内心冷静……なはずだ。口汚く相手を罵って

るのは麦野曰く、『相手の油断を誘ってるのと、罵りながら戦ったほうが快感……もとい気分が乗りやすい』、とか何とか。

習慣になってしまったのか、性癖なのか……。多分後者だと思うけど。普通に御坂の×××に熱線突っ込んでゾクゾクしそうな人だし、麦野。まあともかく、麦野には開始前さんざん『今回の目的は御坂さんを生かすことだからね！　うっかり大怪我させたら本気でキレるからね！』と念を押しておいたので、原子崩し（メルトダウナー）直撃はないだろう、多分。

と、ドゴォン！！　という音と同時に、私が立っているビルの近くの物陰で爆発が起きた。

……直撃、させてないよね？

あ、御坂が飛び上がってきた。無事みたいで安心……じゃなくて、見つからないように隠れておかないと。

……行ったか。

さあて、そろそろ時間だな。表で起こってる争いの匂いをかぎつけられて万一にでも垣根に来られたらやばいし、御坂に能力相殺（ＡＩＭキャンセル）を発動し……、んん？　アレに見えるは……、

んん？

白い三対の翼を生やした、ホスト風に制服を着崩した茶髪男。

……垣根？

いやいやいや。今『万一にでも垣根に来られたらやばいし』って言ったけどさ。正直な話垣根が来るなんて『万が一にも』有り得ないんだけど？？　だってそうでしょ？　こっちが施設の護衛戦

やってるのに横槍入れてくるとか……。

……ウーン、もしかして建前上は『一緒に共闘して侵入者を倒しませんか（＾＾）』みたいな？　……此処は、過去に私が垣根に『宣戦布告』された経験を盾にして『てっきりまた「自分の能力を成長させるため」とか言って絡んできたのかと……。そもそも仕事仲間がいるなんて聞いてなかったし』とでも釈明しておくか。詭弁だが、あの襲撃時の言動は間違いなく垣根に非があるから、こっちが責任を問われることはないだろう。

それはともかくとして、垣根が出てきた以上私の仕事は御坂の無力化ではなくなってしまった。代わりに、垣根を無力化しなくては。

割裂空洞（ダークホール）を発動。垣根の拡散力場を検索。……、……特定完了。逆算開始。逆算所要時間は……五分三秒。うん、前回から一秒たりとも変わってないね。麦野、持つかな……。

今回、私の立ち位置は麦野の補佐や一対一の演出ではなく、垣根に対する切り札（ジョーカー）になるだろう。私の能力相殺（ＡＩＭキャンセル）があれば、垣根の能力は四〇パーセントほど削れるからな。そうなれば、垣根も逃げるしかなくなる。

急場だから、麦野が持つか心配だが……アレで麦野もプロだ。前回よりも弱くなってるとはいえ、垣根の能力の情報は何回か推理する機会もあったし、五分くらい持たせるのは可能なはず。

そんなことを考えていると、私のすぐ隣にズガン！　という音が響いた。

「……、……」

……生身で投げられた人間がここまで派手な音を立てられるものか、と思いつつ未だに煙の晴れないその姿を見ていると、紫電と共に煙が払われ、中に居た不機嫌な少女がその表情をあらわにした。

……案の定投げられたほうも無事なのだから、能力者というのはチートだと思う。

多分私なら足がつぶれているところだ。まあ肉体変化（メタモルフォーゼ）で再生するなりそもそも瞬間移動（テレポート）を使って衝撃を殺すなりするだろうが。

「あーっ！　あの年増女！！　カッコつけちゃってムカつく！」

地団駄を踏みながら空中の麦野を睨み付ける御坂。……それ、麦野に聞こえる範囲で言わなくてよかったな。あの人、結構年増に見えること気にしてるから。もしも聞こえてたら『ブ・チ・コ・ロ・シ・カ・ク・テ・イ・ね』が生で聞けたかもしれない。最初で最期になったろうけど。

麦野に一通り悪態を吐き終えた御坂は、次に私の方をにらみつけた。

「……で、アンタは何なの？　統括理事会の孫娘がこんな暗いところまで何の用？」

きつい言い方だが、御坂の節々から私のことを心配していることは伝わる。まあ、私はお前の尻拭いをしてやりに来てる訳だが。

「簡単に言うと御坂さんの尻拭い」

「私の……？　一体どういうこと？」

「研究所連続爆破。犯人を潰す為に暗部動員。御坂さんの命が危ない」

「……何となく分かったわ。でも謝らないわよ。事情は知ってるんでしょ？」

御坂の言葉に、私はすぐに頷けなかった。『知っている』、というのは実験――絶対能力進化（レベル６シフト）計画のことだ。

勿論、私は『知っている』。しかし、かといってただ頷いても御坂の反発は免れないだろう。知っていて、尚且つ御坂の邪魔をするということは妹達（シスターズ）を間接的に殺そうとしているということ。軽蔑、敵対は必至だ。

「事情は、知ってる。そして、御坂さんのやってることが全部『無駄』だってことも」

「……っ！　一体、何の根拠があって、」

私の言葉に、思わず血が上ったのだろう。掴みかかろうとする御坂を手で押さえ、さらに話を続ける。

「そもそも今回の指令は、まんまと研究所をつぶしに来た御坂さんに同じ超能力者（レベル５）をぶち当てて倒すことなんかじゃない。御坂さんが来てもいいように超能力者（レベル５）の能力者を用意しつつ、戦闘している隙を突いてデータを外部に移送すること。当然、御坂さんがどう足掻いたところでデータは外部に移送されちゃって、実験は続行、妹達（シスターズ）の無駄死には止まらない、って訳」

「……ッ！　アンタ……っ！　よくもそんなぬけぬけと！！」

出来るだけ表情を変えずに言い切った私に、御坂は頭に血が上ったのか若干赤みを帯びた顔で掴みかかってきた。……何だかんだ言って、御坂はまだ子供だ。こんな子供に、自分と同じ顔をした子の死についてこんなに淡々と語るのは厳しいだろう。

というか、これが彼女にとって最期の希望のはず。ここから『正史』に繋がるのであれば、彼女は自らの死を以って実験を潰そうと考えるはずだ。そこまで追い詰められているのだ。たとえ相手が悪くなかろうと、絶望の情報をもたらした相手にここまで逆上してもおかしいことはない。むしろ、もっと取り乱してもいいレベルだ。

私はできるだけ優しく御坂の手を離させ、それからじっと目を見つめて話を続ける。

「だから、今日はもう帰りなよ。そろそろ『暗部』も本腰を入れ始めてる。研究施設を潰すだけじゃ実験は終わらない。私は立場上御坂さんの力になることはできないけど、それでも相談くらいには乗れると思うから」

真剣な目で御坂に話すと、御坂は急速に勢いを失って泣きそうな顔で俯いた。

ホントに御坂のことを思うんなら、ここはあえて憎まれ口を叩いて憎まれ役になってやるべきところなんだろうけど、あいにく私はホントに御坂のことを思ってるわけでも、ここで御坂を敵に回したいわけでもない。中途半端に同情して、御坂の敵愾心を削がせてもらう。

「……分かったわ。……当り散らしてごめんなさい」

「……ううん。こっちこそ力になれなくてごめん。送る？」

私の言葉に、御坂は俯いて答えない。

「……ううん。無駄でも、何でも構わない。たとえ無駄でも、何もしないで諦めるなんて私自身が許せない。確かにあの翼の人は訳分かんないけど、勝てないだろうけど、それでも戦うのよ。それが、私にできる最低限の償いだから。……アンタが、どれほどリスクを犯して私のことを逃がそうとしてくれてるのかは、何となく分かる。でも、私は逃げられない。逃げちゃいけないのよ。それが私の通すべき『筋』ってものだと思うから。だから……邪魔をするなら、力ずくで行かせてもらうわよ、裏第四位（アナザーフォー）！」

……やっぱりな。分かってたよ、御坂美琴。

お前は主人公（ヒーロー）だからな。私みたいに、リスクとリターンで物事を考えられないところだってあるだろう。特に、お前は今回の事件を自分の身から出た錆だと思ってる訳だから余計に、引くこともできない。

さぁーて、どうしたものか。これは当然のことだが、私が御坂と面と向かって戦ったところでまず以って勝ち目はない。強者相手の策としてまず挙げられる瞬間移動（テレポート）での回避も、既に御坂にタネが割れてしまっている以上、黒子にやってるみたいに一瞬の隙を突かれて不発になってしまうことだろう。そうしたら負けだ。

かといって、御坂の力を半減させる為に能力相殺（ＡＩＭキャンセル）を使えば、垣根の方の演算が疎かになってしまう。それにそもそも、御坂レベルの能力者に能力相殺（ＡＩＭキャンセル）を使ったところで大した効果などあるはずもない。精精、近距離での攻撃ができなくなる、程度のものだ。距離をとられて遠距離攻撃されてしまえばすぐに詰む。

……私って、ホントどうして超能力者（レベル５）なんだろう……。

まあ、それを補う為の頭脳（ここ）なんだけどね。

04

ｓｉｄｅ美琴

夜中のビルの屋上で、不穏な空気が漂う。
そこにいるのは私と親船の二人。一方は一瞬にして他方を倒すだけの力を持ち、一方は自分の身を守るだけの力もない。つまり、この状況は私にとってまさしく王手をかけているに等しいんだけど。

「……ふ、」
「……？」

互いに無言だった空間を破り、親船の声がその場に響く。私は親船の突然の笑い声にきょとんとしてしまう。

「あは、あはははは。冗談じゃないよ御坂さん。せっかく私がここまでして助けに来てあげたっていうのに、さ」

そう言った瞬間、親船の目つきが変わった。
普段の寝ぼけ眼ではなく、冷徹な策士の眼差し。夏休み前日に会ったとき、幻想御手（レベルアッパー）事件で会ったとき、病院で会ったとき、そして今相手にしていたときとは全く別物。
全く、今日は仮面の下の表情を見てばっかりだな、と思いつつ、私はすぐに電撃を放てるように警戒した。今目の前にいるのは、いつも笑みを浮かべていて覇気のない先輩じゃない。私の、敵だ。

そんな風に私が身構えていると、親船はふと表情を崩し、先ほどまでと同じような感じで口元を緩めた。……しかし、目が笑ってない。目元は普段のように少し垂れ加減ではなく、気持ち吊り上がっ

ているように見える。穏和な笑みも、これでは不敵な笑みにしか見えなかった。

「……あー、ゴメンゴメン。緊張させちゃったかな。そんなつもりはなかったんだ。ちょっと余裕がなくってね」

そう言って、親船は両手を挙げた。眼差しも一応さっきまでの柔らかいものになっているが、アレを見せられた後では胡散臭さしか感じられない。

……降参、のつもり？　信用できない。あんな目を見せられた後で、どうやって信用しろというのだ。ただ、両手を挙げた状態の人間に電撃を浴びせる趣味もない。そう思って、私はとりあえず臨戦態勢は解いた。

「……じゃあ、アンタの足元にある割裂空洞（ダークホール）を解除しなさい。そうすればアンタのことはスルーしてアッチに行くから」

「それはできない」

最低限の譲歩、のつもりで言ってみた言葉は、すぐさま否定された。しかも、さっきみたいな鋭い眼光付きで。

……何を考えてるの？　この状況、コイツに拒否権なんてないはずなのに。でも、逆に私はそんな親船の言動が気になった。無言で理由を促すと、親船は真剣な、それでいて害意は感じられない真摯な調子で答えた。

「私の能力は、単なる多才能力（マルチスキル）じゃない。相手の放つ拡散力場と逆位相の拡散力場を放出することで、波長を相殺することだってできる。私は単なる多才能力（マルチスキル）を能力複製（ＡＩＭトレース）、逆位相の拡散力場を放つことを能力相殺（ＡＩＭキャンセル）って呼んでるんだけどね……、今、麦野さんが戦ってる相手の拡散力場を逆算し

てる最中なんだ」
「それじゃあ……、」
……まさか。
ということは、つまりコイツが能力を解除しないのは……、
「あの男は――第二位は、撃退できる。私と麦野さんがいれば」
ごくり、と唾を呑む音が聞こえ、それが自分の出した音だというのに気付くのに数秒かかった。
――撃退できる。
勝てる、と言わないあたりにこの女の狡猾さが見え隠れする。おそらく、親船はあの翼の男――第二位を潰すつもりなんてないんだろう。あくまで、能力相殺（ＡＩＭキャンセル）とやらは交渉道具。多くを求めて危険を冒すより、安全に穏便に事を運ぶのだ。
……でも、それにしたって、規格外すぎる。第三位の私と、第四位の麦野が束になったって敵わなさそうな能力者を相手を、援護があるとはいえ独力で追い込むことが出来る。……これが、学園都市の『裏』にのみ存在している超能力者（レベル５）。
「だから、待って欲しいんだ。後三分で良い。垣根が逃走するまでの数分間だけ、勝負は待ってもらえないかな」
そう言って、親船は今までのどこか軽薄な感じのする雰囲気も、酷薄なまでに冷たい雰囲気も出さず、ただ真面目に頭を下げた。
その様子から、打算抜きで、全員が生還するにはこの策しかないと親船が思っていることに気が付き、私は何もいえなくなった。私が勝算のない、意地だけの戦いを挑もうとしている間に、この少女は必死になって皆が助かる方法を考えていたんだ。

……私も、こういうところは見習わないとね。自分の目的を達成する為に、本来敵であるはずの相手にも頭を下げる。無意識だろうけど、プライドに縛られつつあった自分自身を自嘲しつつ、私は親船の提案に頷いた。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

……これで、勝ちの目が見えたな。ふふふ、御坂もまだまだ青い。こちらがそっちに目を向けられないように小細工したとはいえ、こんな簡単で単純なミスディレクションも見破れないとはな。

そう。私がやったのは、ミスディレクション。私が能力を使うこと、それから第二位を撃退すること、そこに話の焦点をすり替え、御坂の頭の中から『私を倒せば垣根のところに行け、研究所を潰すことができる』という考えを追い出すことだ。

元々麦野は垣根から御坂を助けたりで、敵対心は薄れていたことだろう。そこに、垣根が第二位であること、私の能力、勝利条件、御坂のしてきたことが無駄だったこと、それでも戦う決意など、色々な情報を投げ込んだことで、麦野が敵だった、という比較的イン

パクトの薄い情報は薄れてきているはず。
だからこそ、気付けない。麦野が垣根を撃退し、こちらに戻ってきてしまえば御坂には一片の勝ち目も存在しなくなることに。まあ、気付いたところで私が提示した前提条件の上で考えている限り、御坂が私の想定外の行動を取る可能性はないんだがな。
後は適当に、『殺すのは何とか防ぐことが出来たけど、暗部に堕とすことまでは防げなかったんだよね、捕まったら最後、暗部に堕ちるよ。友達も道連れに』とでも忠告（あくまで忠告。脅すような口調ではなく、相手を心配するような口調なら御坂も私に敵対心は抱かない）すれば、さっさと撤退してくれるだろう。
戦わずして、勝つ。
いつの世も、それが長生きの秘訣なのだ。

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

麦野は、先ほど御坂が磁力を使って張り付いていた鉄筋のジャングルジムの上に立って飛行の疲れを癒していた。演算代理機を使っての能力行使では、断続的に飛行し続けることはできないのだ。

先ほどの御坂の『投擲』は、本来ならあそこで小豆の元まで飛んでいって戦況報告をすべきところだったのだが、正直あそこまで飛んで行くまでの余裕がなかったので仕方なく御坂を投げた、という事情もあるのだった。

そして、その状況も間もなく崩れることとなるだろう。

「……分かってはいたけどさっすが第二位……。格が違いすぎてもう清々しいわ……」

麦野の視線の先には、垣根を中心に真っ白く変色した地面があった。範囲は大体半径五〇メートル程度だが、白く変色した地面からは数十本ほど、ひょろひょろと細長い『翼』のようなものが生えているのが視認出来た。

（……『天使の涙』、だっけ。アレを未元物質（ダークマター）で作り上げた、っていう情報は聞いていたから、鉱物の性質を変化させることは考えていたけど）

まさか、ただのコンクリートの地面にあんなとんでもない性質を付与できるとは、麦野も考えなかった。しかも、あの『翼』が垣根の持つものと同じように、伸長して攻撃に使われるのであれば、麦野としてはキツイ。

『あの日』と違って高速空戦はそうできない。やるとしても数秒、しかもその後には致命的な隙ができることを自覚しなくてはならない。下手に空気中の物質を変質させて攻撃されるよりはマシだと思って『電子風』を使ってみたが、薮蛇だったか、と麦野は歯噛みした。

（とはいえ、既に第二位が出てきてから数分が経ってる。このまま

行けば、親船の逆算完了の方が早い）

そう考え、麦野はダン！　と鉄筋を踏みつけ、同時に足元を原子崩し（メルトダウナー）の循環により瞬時に熱し、爆発させる。従来は『飛行』という手段をとっていたが、今の麦野にはそれが出来ない。

だから、麦野は最小の能力行使で建造物から建造物に飛び移る方法で垣根と戦うことにした。

幸い、高速の飛行は麦野の『電子風』によって封じることが出来ている。飛行のアドバンテージは、向こうにはない。

「――『原子崩し（メルトダウナー）の粒子』が邪魔をして、オレが飛べない、とでも思ってんのか？」

そんな麦野の思考をあざ笑うかのように、垣根は麦野に視線を向けた。瞬間、麦野の背筋に冷たいものが走る。

「翼のインパクトに騙されたな。コイツは別に攻撃の為に配置した訳じゃねえ。確かにテメェらが平和ボケしてて即座に逃げないんだったらブチ込んでやろうとは思っちゃいたが、それは付加価値にすぎなかった。本来の目的は……こうしてやることだよッ！！」

瞬間、垣根を取り囲んでいた原子崩し（メルトダウナー）の粒子が、一瞬にして吹き飛んだ。

「コイツ……！　地面から生やした翼を羽ばたかせて、周囲の電子を吹き飛ばしやがった……ッ！」

実際問題、原子崩し（メルトダウナー）の能力で特殊な状態になっている自由電子が暴風程度で吹き飛ぶはずはないのだが、そこは第二位の未元物質（ダークマター）。おそらく、原子崩し（メルトダウナー）の影響下の電子を能力で変質させ、その上で吹

き飛ばしたのだろう、と麦野はあたりをつけた。
　慌てて麦野は跳躍し、垣根と小豆の直線上に割って入るような位置に立つ。自分の身が危うくなったからといって、退避して後悔するのはもう『あの日』に体験済みのことだ。こういう時にこそ、逃げずに最後まで策を練ることが重要になる。麦野の『一番大切なモノ』は、『自分の命』なんかではないのだから。

「チッ、やっぱ学園都市で『二番目』に頭の良いお利口さんには小細工は通用しないみたいねェ！」
「序列を皮肉るのはそのままテメェに返ってくることに気付けねえのか？　お利口さんの『第四位』サマはよぉ！」
　翼の間をかいくぐるように放たれた麦野の原子崩し（メルトダウナー）を、垣根は地面に生やした翼を動かすことで弾く。
「無駄なんだよ。テメェがいくらぶっ放したところで序列の壁は塗り替えられねえ。勝てねえって分かってるからそうやってピュンピュン逃げて時間稼いでんだろ？　所詮テメェは時間稼ぎしか出来ねえハエなんだからよ」
「この期に及んで分かってないなら言っておくけど、挑発なら聞く耳持たないわよ」
　ボッ！！　と音を立てて飛び上がった麦野の眼前から、原子崩し（メルトダウナー）が垣根の頭上へと降り注ぐ。しかし、これは垣根自身の翼に弾かれる。
　返す刃で伸びてきた翼を必要最低限の動きでかわしながらビルの屋上に着地した麦野は、思わず舌打ちする。
（クソ……。このままじゃジリ貧だ。とはいえここをずれたら親船と第二位の直線が繋がっちまう。……また、『あの日』みてぇ

な愚は犯せない。かといって、このままじゃ私は犬死だ。何か、策は……）

跳ねるように垣根の『翼』をかわしながら、麦野は考える。

未元物質（ダークマター）で変質した物質は、既存の物理法則とは違う性質を以ってこの世界に誕生する。となると、あの地面から生えた翼も同じように『何らかの法則によって成り立っている』ということになる。

……では、果たして、あの翼は『垣根の意思のとおりに動く性質』などという、あまりにも都合の良い性質を持っているのだろうか？

いや、有り得ない話ではない。何せ、相手は常識の通用しない未元物質（ダークマター）だ。そんなトンデモ性質があってもおかしくはない。……おかしくはないが、腑に落ちないのも事実。

そもそも、『垣根の意思のとおりに動く性質』なんてものがあるのであれば、どうして垣根はあの場所から一歩も移動しないのだろうか？　地面の翼に麦野が追われているうちに、自分は親船のところに向かう、そういう戦略をとれば、簡単に親船を討てるはずなのに。

それをしないのは、おそらく……、

（あの物質は、触れていないと操作できない。おそらく、体表を流れる微弱な電流に反応して伸縮・旋回してるんだ）

そういう可能性が、非常に高い。あれほど巨大な範囲の翼を操作できているのは、創造主ゆえの扱いの上手さか。

そういう可能性を視野に入れて俯瞰してみると、確かに垣根の周囲の翼の動きはせわしないが、外側――麦野の近くにある翼の動きは比較的鈍い。となれば。『垣根帝督が操作しないといけない』という法則がないのであれば、麦野にも光は見えてくる。

「――――ぁらよぉッとォ！」

ドガガガザザギギギ！！　と、麦野の肩口から発現した『電翼』が地面を抉り取る。地下深くまで潜り込んだ『電翼』は、ボン！！　という音を立てて地下で爆発を起こした。地下、未元物質（ダークマター）の干渉の及ばないところにて、麦野が原子崩し（メルトダウナー）を高速循環させて小規模の爆発を連発させたのだ。

いかに未元物質（ダークマター）が麦野の攻撃（メルトダウナー）に強いとはいえ、その二次現象である爆発まで無効化できるわけではない。未元物質（ダークマター）によって作られた地面は衝撃によってシーソーのように片方が浮かび上がる形となった。

そうなってくると、困るのは垣根である。なまじ頑丈であるが為に、転覆してしまえばさしもの垣根もただでは済まない。

「チッ！　第四位め……。コイツ本当に超能力者（レベル５）か？　搦め手ばっかり使ってきやがってイヤらしい！　大人の女気取ってんじゃねえぞ！！」

垣根は麦野の近くにある翼を操作し、彼女の体を貫かんと動かす。しかし、これこそ麦野の狙っていた展開だった。

「なぁ。この翼、触れたものの体表から送られる電気信号か何かを通して操作してんだろ？　ならさぁ――――」

向かってきた複数の翼を原子崩し（メルトダウナー）による超速移動で回避し、その側面に素手で触れる。ゴボゴボと表面が高速で伸長している為、その表面のざらつきによって麦野の綺麗な手が傷つき、血が出てくるが彼女は気にしない。

「その『操作』の優先順位って、どうやって決まってるんだろうな？　まさか精密機器よろしくパスワードとか設定してるわけじゃねえんだろ？」

瞬間、白の濁流で氾濫が起きた。

麦野の触れた一本の翼が他の翼の流れに干渉を起こし、それによって全体の流れが滞ったのだ。それだけじゃない。流石に能力者による特別な干渉力でもあるのか、全体の数よりははるかに少ないものの、麦野が触れた翼の近くにある数本の翼はぎこちないながらも麦野の意思の下に動くようになっていた。

……垣根の生み出した新物質の性質は、『送られてくる電気信号に応じて膨張・旋回すること』。確かに、麦野の推理は正しくその通りで、触れることによって垣根以外の人間でも制御することが出来る。

今はまだ先の話だが――『Ｅｑｕ．ＤａｒｋＭａｔｔｅｒ』といわれる学園都市の兵装も、これに更なる改良を施したものが使われているくらいだ。

しかし、『電気信号を送ることで操れる』というのは言うほど簡単なモノではない。そもそも、触れたところでその人間が『翼を動かす』という明確な電気信号の発し方を知らなければ、この新物質はただの固い鈍器にしかならない。件の『Ｅｑｕ．ＤａｒｋＭａｔｔｅｒ』だって、駆動鎧（パワードスーツ）による脳の認識情報の改変によって『翼を操作する感覚』をインプットされているから翼を動かせるのだ。

これを麦野が操れたのは、元々『電翼（エレクトロマスター）』という形で翼を操作する経験があったというのと、彼女自身が電撃使いの亜種であり、電気の扱いには多少心得があったからに他ならない。

「……賭けは成功。これで失敗してたらぶっちゃけここら一帯を地図から消してやるくらいしか策がなかったが、これでもう少しスマ

ートな策を選べそうだ」

――垣根の能力、『未元物質（ダークマター）』は『この世を構成している素粒子とは全く別種の素粒子で構築された物質を生み出し、操る』能力だ。

しかし、真の意味で『この世のモノではない素粒子で構成された物質』というのは、垣根の背中から生えている三対の翼のみ。他は、あくまで『未元物質（ダークマター）』というこの世のモノではない物質によって、この世のモノではない反応を起こした物質』なのだ。

それはつまり、能力によって起こされた二次的な現象であり、垣根がそれ以上支配できる類のモノではない、ある意味『平等な物資』であることを指している。いくら見かけ上垣根の都合のいいように動いているからといって、その大原則は変わったりしない。原子崩し（メルトダウナー）を操る麦野がその能力で溶かしたマグマで焼け死ぬことが有り得るのと同レベルの問題で、未元物質（ダークマター）によって鍛えられた新物質が垣根に牙を剥くことも、全くおかしいことではない。

「クソッタレ。まあ、二回目にしては及第点ってトコか」

そんな麦野に、忌々しそうではあるものの大して驚いた風も見せず、垣根は舌打ちした。確かに麦野はいいところに気がついた訳ではあるが、そんなことは垣根にとっては『いずれバレるだろう』と思う程度の情報だった。

今まで散々未元物質（ダークマター）によるこの世のモノではない反応を見せ、一ヶ月近くものシンキングタイムも与えていたのだ。忌々しい第一位は勿論、第三位、裏第四位（アナザーフォー）、ちょっと頭が回るのであればそこらの能力者であっても気付いておかしくない。

まあ、その考えに至ったとしても実際に触れることが出来る度胸があるのか、といえば確かに麦野以外では少し難しい話ではありそうだが。

しかし、これで飛行のディスアドバンテージをほぼ無効化したとはいえ、現状垣根の圧倒的有利に変わりはない。

「……チッ」

麦野は一瞬、心配するようにチラリと小豆の方に視線をずらすと、すぐに忌々しげに舌打ちして垣根に視線を戻した。バジッ！！　という音が響き、麦野は今まで乗っていた翼から体を離す。勿論、翼とは原子崩し（メルトダウナー）を使って電気的なリンクを保っている状態である。

「……あ？　第四位。さっき出してた翼はどこへやりやがった」

空に舞い上がりながら、最低限の能力しか使わずに飛行状態を維持している麦野に、垣根は怪訝な声を上げる。それに対し麦野は笑いながら、

「ああ？　アレならもう売り切れたよ」

原子崩し（メルトダウナー）を循環させて作ったアームが、垣根を真っ直ぐに襲う。

「はッ！　どうやら自慢の演算装置は大分グレードダウンしちまったようだなぁ！　そんなモンでオレを潰せるとか思っちゃってんのかぁ！？」

これは当然のように垣根のもつ三対の翼のうちの一枚に弾かれ、無駄となる。しかし、それで十分だった。麦野がやりたかったのは、自分の自慢の能力で垣根を倒すことではない。

垣根の翼が眼前に振るわれるが、麦野は笑みさえ浮かべていた。

「タイムリミットだメル ヘン天使。残念だったな」

瞬間、垣根の姿が掻き消え、数瞬遅れてゴバッ！！　という轟音が響いた。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

タネは単純だった。

戦闘中も、麦野は『私の護衛』という本分を忘れてはいない。流石に垣根と戦いながら直接護衛することはできないまでも、ちょこちょこ私の方を見て御坂が余計な動きをしていないかどうか監視はしていたようだ。

そんな麦野に対し、御坂に電撃バチバチで戦えるぞアピールをさせる。麦野は御坂の手を借りるのが嫌なのか、忌々しげに舌打ちをしていたが了承はしたようだった。

後は見たとおりの結果だ。

麦野は捨て身で原子崩し（メルトダウナー）を放ち、垣根の隙を作った。そして、御坂はその一瞬で超電磁砲（レールガン）を叩き込む。

如何に未元物質（ダークマター）と言えど、強度は強くても衝撃まで吸収できるわけじゃない。御坂美琴を軍隊一個師団並みの強さにまで押し上げている一因である攻撃を食らえば、さしもの垣根も紙切れのように吹き飛ぶしかなかった。

そして、これだけ時間を稼いでもらえばこちらの逆算も終了する。

能力相殺（ＡＩＭキャンセル）は、現在未元物質（ダークマター）を対象としている。使用すれば未元物質の出力は四〇パーセント減。麦野の原子崩し（メルトダウナー）や、御坂の超電磁砲（レールガン）でも打ち倒せるレベルとなる。

ようするに、こちらは王手（チェック）をかけている、というわけだ。それも、自分を移動させないと完璧に詰む王手（チェックメイト）を。

当然、相手もそんなこと承知の上だからさっさと逃げるわけだが。

……私は、ビルの縁に立って眼下に広がる光景を見る。垣根の落下したあたりは、まだ土煙が立ち上っていて姿が確認できないが……不意打ちなどをされても面白くない。能力相殺（ＡＩＭキャンセル）発動。私の周辺に逆位相の拡散力場を放出し、未元物質（ダークマター）と相殺させる。

しかし、これが相手に通用するとは思っていない。何せ、相手は既に土煙の向こうにはいないわけだからな。

煙が晴れる。そこには、白い翼が無数に生えた気持ちの悪い空間しかなく、あのメルヘンな天使様は影も形もなくなっていた。危険もなくなったので御坂のほうに向き直ると同時に、麦野が御坂の背後に降り立った。

「お疲れ、麦野さん」
「本当に疲れたわ。頭脳労働は三分の一くらいコイツに任せてたとはいえ、考えながら戦うってのは柄じゃないわ。やっぱり私は深く考えずに敵をバンバン原子崩し（メルトダウナー）で撃ち抜いてるのが性に合ってるみたいね」

はぁ、と溜息をついた麦野は、余裕そうに見える外面とは裏腹に非常に消耗しているようだった。余裕のない御坂は気付いていないようだが、顔も青いし脂汗も凄い。

「……！」

私と麦野が御坂を挟み込むような位置取りをしたところで、彼女の表情から余裕が消えうせた。もっとも、前門の第四位、後門の裏（アナザーフォー）第四位だ。これで余裕綽々な相手だったら私は即座に逃亡するが。

「く、あはは」

ぺたんと、御坂は負けを認めたのか、尻餅をついた。
……らしくないな。御坂だったら、最後まで諦めずに突っ込むものだと思っていたが……。……何か策があるのか？　……いやしかし……。

「あの天使男、凄かったわよね」

……？　いきなり何を……？　垣根が今何に関わってくるって言うんだ……？

「特にあの翼。そこの第四位サマがあれだけビームを撃っても焦げ目一つついてないんだもん。相当頑丈なのよね。……最後のほ

う、何か電撃で制御されてたみたいだけど」

……！　まさか……！

「麦野さん！？」

「チッ！　そうだよ！　あの翼、高位の電撃使い（エレクトロマスター）ならコントロールできる可能性が高い！　っつーか私はコントロールしてた！　つまり第三位も……ッ！！」

「プライドなんて捨ててしまえ、使えるものは何だって使ってやらないと、ねぇ……！！」

しまった、能力相殺（ＡＩＭキャンセル）で……いや違う！　まずは逃亡だ！

「麦野さん捕まってッ！」

「チッ！」

すぐさま瞬間移動（テレポート）を発動し、麦野の背後に飛んでそれから別のビルに飛び移る。私たちが今まで立っていたビルは、地面から生えた翼の濁流に中ほどからなぎ倒されていた。

「……やられたわ。悪い親船。これは私のミスよ。アレの制御を奪った時に第三位に乗っ取られるリスクを考えておくべきだった」

「……いや、良いよ。麦野さんは悪くない。垣根と戦ってたんだもん。そんなところにまで頭を回せって方が無茶だよ」

ビルの下では、翼の塊の上に乗った御坂が翼を電撃で操縦して研究所の動力部分を破壊し、爆発を起こしていた。……あの分では、あの研究所はもう駄目だろう。まあ、正史通りではあるんだが……。

……いや待て、そう考えると結構都合のいい状況じゃないか？
この状況。こっちの研究所は潰され、私たちの護衛している研究所は潰される心配もない。正史どおりで、且つ私の立場は危うくならない。素晴らしい展開だ。御坂の機転に乾杯。

「で、どうする、親船。こっちの研究所は私達の管轄じゃないからもう無視しても良いと思うけど」
「そうだね。研究所が爆発してるのに垣根達が応戦してこないところを見ると、あっちももう尻尾巻いて逃げちゃったみたいだし。念のため、御坂さんがこっちの護衛してる研究所に来ないように私たちは黒花とかを回収して研究所に戻ろう」

翼の塔を作ってその頂上で色々やってる御坂を尻目に、私達は撤退準備を決めた。

「御坂さん、気をつけて帰るんだよー！！」

大声で叫んで手を振った私に、御坂は一瞬キョトンとした表情を浮かべたが、私に害意がないことに気がつくと呆れたように苦笑し、それから親指を立てた右腕を高く掲げた。……よし、これで御坂関連も穏便に収束。後は黒花たちを回収するだけだな。念のため念話をかけたら、さっさと瞬間移動（テレポート）して回収して、その後絹旗んところに行こう。

そんな風に考えていたら、こちらから念話を送るまでもなく黒花から念話が届いた。

『親船さん親船さん、へェェェ――――ルプ！！　何故か分からないんですけど垣根が剥離要素（エラーポイント）を捕獲しようとしてます！　私達だけじゃ抑えきれません！！』

……てな感じに上手く行く訳ないって、今までの経験上分かりきってた事なんだけどねー……。

０４（後書き）

未元物質（ダークマター）関連については独自設定だらけです。

『Ｅｑｕ．ＤａｒｋＭａｔｔｅｒ』が使用者の電流によって動いているとか、原料がコンクリートとか、あのスーツが駆動鎧（パワードスーツ）で使用者の電流を操作しているなんて公式設定は存在しません。

まあ、正確にはこちらの独自設定でも『翼』の材料は『土』であることが重要で、細かい原材料あんまり関係なかったりするんですけど。

幕間０１／とある少女の争奪戦線（デストロイ）

幕間０１／とある少女の争奪戦線（デストロイ）

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

「あー、結局暇すぎって訳よー」

小豆達が戦闘していた研究所前の広場から数百メートル、街路樹も何もない、コンクリートによって形作られた街道で、金髪碧眼のフレンダ＝セイヴェルンはぶーたれていた。

周囲には撤退作業の為か、何台かトラックが路肩に停められていた。

フレンダが不満そうにしているのは、彼女の言っているとおり暇すぎるからである。

麦野と小豆が御坂を撃退している間、フレンダたちは剥離要素（エラーポイント）などが横槍を入れないよう、足止め係として黒花とコンビを組んでいる、のだが。待機してからかれこれ三時間、まだ黒花以外の人間を見ていないフレンダなのであった。

「黒花も災難よねー。メイドなのに御付から外されちゃって」

「……ええ、まあ」

暇つぶしに話しかけるフレンダに、メイド服姿の黒花は苦い表情をしながら頷いた。

彼女は今回の組み合わせにあまり納得していなかった。三手に分かれて行動する以上、六人いる小豆たちが二人一組になるのは当たり前であり、御坂の相手という危険なところに超能力者（レベル５）である小豆と麦野が向かうのが当然の成り行きだということを分かってはいたが、納得できるかどうかは別問題だ。『仲良しごっこ』じゃないのだから、と思っていても、やっぱり小豆と一緒じゃないと落ち着かない、というのが黒花の本音だった。

「大体さぁ、親船に雇われてから、給料が一定になっちゃったから私としてもやる気が上がんないのよねー。何でも麦野は『たくさん殺した奴がギャラの半分ゲット、って感じにするとフレンダが暴走するから』とか言ってるけどさー……」

「あー……、それは何となく分かる気がします」

不満げにダレているフレンダに、黒花は思わず苦笑した。そういう風に麦野に言われてバツが悪そうにしているフレンダの姿が容易に想像できたからだ。

「ん、ようやっと笑ったわね。いや結局、相方がいつまでもムスっとしてるとこっちまで気が滅入っちゃうからねー」

「あ……、」

そこで、黒花は自分がフレンダに気遣われていたことに気が付いて恥ずかしげに俯いた。

しかし、フレンダも気にした様子はない。前世の存在を知っている小豆からはともかく、フレンダから見たら黒花は中学生くらいの少女なのだ。むしろ、ここまでしっかりしている方が不自然だと常々思っているフレンダである。

そんな感じでほのぼのとしていた黒花とフレンダだったが、突然

黒花の目の色が変わったことで団欒は一時中断となる。

「……どしたの？」

「……さっきから念の為無言念話を発信して剥離要素の大体の位置を把握してたんですけど」

こめかみに指を当てる黒花に、フレンダは『何だよぶー垂れてても仕事はしてんのかよ』と突っ込みつつ話を聞き、

「この移動方向、方角……どうやら、囲まれてるみたいですね～」

直後に宣告された報告に目を丸くして、そのまま黒花を引っつかんで近場の物陰に潜り込んだ。轟！　と二人が今まで立っていたところから火の手が上がる。

「チッ……！　剥離要素（エラーポイント）、結局来たって訳ね。黒花、人数は？」

「えっと……大体三人。私から見て二時、八時、一一時の方向にいます」

「本当に囲まれてるって訳ね……。あ、そうだ。はいコレ。その辺のビルの壁に貼り付けといて。何か使う機会があるかもしんないし」

そう言って懐から取り出したシールのようなものを十数枚手渡すと、フレンダは素早く物陰から出て別の物陰へと潜り込んでいく。完全に移動を済ませたフレンダは、続けて念話（テレパシー）でこう告げる。

『黒花、心理同調（コンフォーミティ）の「画像としての思考を相手に伝える」アレあるじゃん？　私が今から煙幕使って相手の視界をかく乱させるから、アレ使って、剥離要素（エラーポイント）の連中の視界を完全に潰してくれない？　煙幕使ってる間は、流れ弾に当たらないように注意しながらそこの道路脇に停めてあるトラックの脇まで移動。その後一斉射撃でブチコ

ロシ。ここまでオーケー？』
『了解です～』

『今からアイツらブッ殺すから手伝ってね』と言っているのとほぼ同義なフレンダの提案に対し、黒花は軽く頷き、能力を展開する。

三人あった能力者の反応は継続して存在。位置情報も何ら変化していないことを確認した黒花は、念話でフレンダにGOサインを出した。ボフッ！！　と一気に巻き上げられた煙幕に乗じて、黒花は何となく、前世で『検索したらいけないワード』として紹介されていたワードを画像検索したら出てきた地雷群を思い浮かべていく。

『うわっ！　何だこれ！！』と悲鳴を上げる転生者連中を尻目に、黒花は言われたとおりそこらのビルにシールを投げて貼り付けてそくさと身をかがめて煙幕を脱出し、トラックの陰まで移動する。トラックの陰では、既にフレンダがロケット弾を指と指の間に嵌めて待機していた。

「おっ、やっときたわね。それじゃ今から派手にぶっ飛ばすから」

言いながらフレンダはトラックの陰から少しだけ身体を出して、

「たーまやー！！」

バガッ！！　という轟音と同時に、爆風によって煙幕が吹き飛ばされた。

煙が晴れた先には、赤黒い肉と瓦礫によって彩られた灰色の通路があった。赤黒い肉はおそらく人間のモノだろう。

「で、黒花。相手は殲滅できたー？　にひひ、結局、私にかかれば

こんなも、」
「死亡したのは一人だけ。あとは男性の腕を一本吹っ飛ばしたくらいです～」
自慢げに笑うフレンダに、黒花はすかさず答える。流石に一人しか殺せてなかったのはショックだったのか、フレンダは落ち込んで地面に『の』の字を書き始めてしまった。
「ほら、フレンダさん！　何落ち込んでるんですか！　まだ仕事は山積みなんですよ！　さっさと片付けてお嬢様たちと合流しましょう！　私も『援護（サポート）』はしますから！」
両肩に手を置き、『ファイト！』と言いながら熱血的に殺人教唆をする黒花に、『テメェも仕事しろよ……』と愚痴りながら懐から新たな爆弾を取り出すフレンダ。
何にしても、これからはフレンダにとっていつもどおりの血みどろな殺し合いが始まるのだった。
＊＊＊
ビルとビルの隙間の空間にて、茶色い長髪の少女は佇んでいた。
少女の年齢は大体高校生くらいで、小豆よりも一回り大きいくらい

の背丈だった。ワイシャツにサマーセーター、ミニスカートの制服を着ており、ハイソックスは左右で白と黒に色が分かれていた。

彼女の名前は神前御鐘（しんぜんみかね）。今回の事件に介入しようとしていた、剥離要素（エラーポイント）の少女である。

彼女は動揺していた。

彼女にとって剥離要素（エラーポイント）とは悪役の集団である。原作知識を利用し、上条を始めとした善人を陥れて自分たちが利益を独占しようとする集団……それは、この世界の基準では悪だろう。

だから、彼女は剥離要素（エラーポイント）を中から監視し、そうした動きをした時に反旗を翻して原作の人間の力になろうと思っていた。今回においても、彼女と共にこの場所に来た二人の剥離要素（エラーポイント）が、元々御坂に悪感情を抱いていた為、牽制として付き添いにきたのである。

しかし、仲間――といっても裏切るつもりだったのだが――が死亡したことによって、その決意は急速に揺らいでいた。

転生者、という選ばれたようにも感じる環境のせいで、油断していたのかもしれない、と神前は一抹の恐怖を感じながら思った。今彼女が立つこの場所は、上条のいる優しい世界ではない。ヒーローのいない、どこまでも殺伐とした世界なのだ。原作で一方通行（アクセラレータ）が一歩間違えば死ぬ場所にいたのと同じように、油断していれば死ぬ、そう思い直した。

「兎にも角にも、まずはあの爆撃の犯人を抑えないと……！」

思い直した神前は、掌に意識を集中させる。すると、彼女の手中に光の球が現れた。これが、彼女の能力『赤外熱線（サーマルレーザー）』だ。

発火能力（パイロキネシス）系の亜種、発熱能力（ホットスポット）の高位種で、赤外線の輻射熱による衝撃で爆風を相殺するなど、色々なところに応用が利く。たとえば、赤外線の把握による周囲の生物の探査。発熱能力（ホットスポット）とはそもそも赤外

線の輻射熱によって熱を発生させる赤外線操作能力だ。高位の能力者ともなれば、電撃使い（エレクトロマスター）同様に操る対象である赤外線を直接認識し、周囲の状況把握に役立てることも出来る。

（敵は……おそらく、トラックの傍ね）

このあたりの状況も神前は事前に能力で把握している。その上で、この短時間で爆撃を行えるような物陰といえば、必然的にそこが残ることになる。

（……悪いけど、撃ち抜かせてもらうわよ！）

トラックの位置は物陰に隠れている神前からは視認することはできないが、大体の位置は覚えているし、赤外熱線（サーマルレーザー）の前に障害物は無意味。狙いは下手人に深刻なダメージを与えないよう、あたるとしても足にあたるようなコース。

掌の上の光球から、一条の光が伸び、トラックを貫通、その先にある地面まで一直線に突き刺さった。

＊＊＊

光がトラックを貫通した。

しかし当然、そこに二人の少女の姿は無い。フレンダと黒花は、その様子をビルの屋上から観察していた。トラックを貫通し炎上させ、さらに地面まで俄かに溶かした神前の能力を見て、フレンダはわざとらしそうに悲鳴を上げた。

「ひぃ～、何あの能力。原子崩し（メルトダウナー）みたいで怖ぁい」

「なんだかよく分からないですけど、こっちの現在位置はバレてないみたいで一安心です～」

当然、いつまでもあの場所に留まるほど彼女たちも腰が重くはない。早々に移動し、相手の能力を確認する意味も込めて高みの見物をしているのだった。

「にしても、ビルの屋上まで移動したのはいいですけど、これからどうするんです？　言われるままについてきましたけど、ぶっちゃけ逃げ場ないですよね？」

自分の周囲を見渡した黒花は、下の道路を見下ろして溜息をついた。下では白黒二種類のハイソックスを穿いたサマーセーターの少女、神前ともう一人、左腕が鉄くずなどの瓦礫で出来ているガタイの良い男が何事かを話している。あの様子だとおそらく爆撃をしかけた黒花及びフレンダに対する報復をしようと話しているのだろうと想像はついた。

「んふふ。そこのところはこのフレンダ様にお任せあれ！　結局、突貫工事とはいえ既に下は罠の巣窟だからにゃーん☆」

ぺろっと舌を出してピースするフレンダに、黒花は『正史もその調子でミスってたような……』と一抹の不安を感じたが、そこは自分が何とかフォローすればいいか、と思い直して頷く。

「よおっし。それじゃあひとまず相手に喧嘩売ってやりますか、っと！」

そう言って、フレンダは懐から取り出した液化爆薬のビンを下の路地裏に放り投げた。しかし、これはビンが空中にあるうちに神前のレーザーによって撃ちぬかれ爆発したことによって無効化される。

「……、……！！　……」

男がフレンダを見て何事かを叫んでいるが、地上五〇メートルほどのビルの屋上にいるフレンダには風と距離のせいで何がなんだか分からない。そこでフレンダは、（距離が遠くてよく見えないだろうが）あえて相手の神経を逆なでするような可愛らしい笑みを浮かべる。

「ふんふ～ん☆　それじゃ行くわよ黒花～。結局、今日のＭＶＰは私たちがいただき！　そして追加ボーナスって訳よ～！」

二人が動き始めたのを確認して踵を返すと、修正テープのようなものを指でくるくる回しながら屋上に続く階段へと歩を進めるフレンダ。この修正テープのようなものも、当然のように人を殺す道具である。

本来は電気信号によって中身のテープを貼り付けたところから火花を発し壁や扉などを焼き切るツールなのだが、フレンダはこれをそのまま攻撃、または爆弾への導火線代わりに使用することが多かった。当然、今回の作戦においてもこの修正テープを三個使うほど大量にばら撒いている。そんなフレンダの様子に黒花は思わず呆れてため息をついた。

「……はぁ、やっぱり今までと変わってないような～……。……あ、そういえばフレンダさん。そのテープ結構たくさん使ってましたけど、当然私たちの逃走経路は確保できてるんですよね？」

「あ、」

「あなたは本当にプロなんですかーっ！？」

やっぱり欲に目がくらんで思わぬミスを犯してしまうフレンダなのであった。

＊＊＊

「……クソッタレ。あの金髪女とメイド女、見つけたらブチ殺してやる」

（あの金髪……フレンダよね。でも、その隣のメイドは誰？　あんなキャラ、一五巻のときにはいなかったけど……途中で死んだのかしら？）

神前と男は、先ほどの液化爆薬とタイマー式爆弾による攻撃を回避し、その犯人と思わしき金髪の少女――フレンダのいるビルに侵入していた。隣では、腕を吹き飛ばされた苦痛と屈辱からか、いつにも増して怒り狂った様子の男が鼻息を荒げている。

彼の名は如月詠次（きさらぎよみじ）。大能力（レベル４）の磁場操作（マグネティックフィールド）で、自分の周

囲にまとうように磁界を操る甲殻磁気（マグネティックアーマー）の能力者である。

「……トラップが仕掛けられてるわね」

ビルに入るなり、あたりを見渡した神前は緊張しつつ呟いた。超電磁砲（レールガン）で『アイテム』が登場したのを、時期的に神前は知らない。しかし、先ほどからフレンダが妙に爆発による攻撃を多用していたことには気が付いていた。

（浜面はフレンダを『相当の使い手』って言ってたけど、まさか無能力者（レベル０）とはね……）

それにしたって、能力者三人を手玉に取るくらいなのだから『相当の使い手』であるという浜面の評価は間違いじゃなかった、と神前は思った。少なくとも、神前たちと五分五分くらいに渡り歩ける戦闘能力の持ち主であることは確かだ。

「ハァ？　トラップ……、ンなチンケなモンフッ飛ばしちまえば良いだろうがァ！」

「あっ、如月。待って、そんなことしたら……、」

神前が如月の動きを止める間もなく、彼の左肩から生えている鉄の塊の腕が大きくうねり、ビルの内部にあった研究機材のような機械を殴り壊していく。そして、研究機材の破壊に伴うように小規模な爆発が連続して起こった。

「フン。こうしちまえば爆発だろうがなんだろうが関係ねェだろうがよ。次行くぞ次」

そういって先に進む如月だったが、神前の表情は緊張で固まって

いた。それもそのはず、耳元で金属音を発している如月は気付いていないが、先ほどは如月の攻撃に連動していた爆発音が、攻撃が止んだにも関わらず続いているのだから。

「マズイわ如月。あたしたち……というかあなた、まんまと敵の罠に引っかかっちゃったみたいよ」

「は？　テメェ何言って……、」

言いかけた如月の姿を、ボゴン！！　という音とともに落ちて来た天井が隠した。『ンだァこれはァ！』という怒声が聞こえるので如月は恐らく無事だろうと考えながら、神前は頭上に降り注いでくるブロック形の瓦礫を赤外熱線（サーマルレーザー）で消し飛ばす。

「あたしたちを二手に分断して、一人ずつ襲っていく作戦、って訳ね……。流石暗部。人が悪いわね」

崩落した天井をにらんだ神前は、穴の縁から様子を伺っていたフレンダと目が合った。威嚇程度にレーザーを撃つとフレンダは『うおっ危ね』と頭を引っ込めて逃げてしまう。如月と合流しようかと考えた神前だったが、先ほどの彼の怒り具合が怖かった神前は意図的にその方向は検討せず、一人で階段のほうへと向かった。

「さて、この階段から上に行ってしまえばあっさり相手に追いつけるんだろうけど……」

そう言いながら、神前は階段をじっと見つめた。階段にはくもの巣のように『線』が張り巡らされていた。……彼女の能力でなければ視認できなかっただろう、赤外線の罠だ。

おそらく、線に引っかかれば即座に爆発、他の爆弾にも引火して大爆発が発生して引っかかった人間を粉々にする手はずなのだろう。

（十中八九、赤外線センサーに引っかかったら爆発、っていう手口なんだろうけど、あたしには無駄よ）

当然、高位の発熱能力者（ホットスポット）である彼女に通用するはずもない。赤外線は彼女の体を避けるように捻じ曲がり、そして神前は悠々と階段を歩いて上へと上っていった。

（……二階）

「……ありゃ？　階段にはこれでもかってくらい爆弾をしかけといたはずなのに……」

フレンダは、普通にいた。二階の床に開いた大穴の傍で。携帯を片手に何事かを話していたようだ。そのあまりに余裕な様子に、神前は思わず少しだけイラっとしてしまう。

「……残念だけど、あたしには通用しなかったのよね。あたしの能力、こんな感じだから」

そう言って、神前は左手から赤外線レーザーを放つ。レーザーは床を貫通し、貫通した床は赤外線による輻射熱で発火した。

「げぇッ、発熱能力者（ホットスポット）かよ！　しかも高位の！　こりゃ下手に罠仕掛けずにスイッチ式の爆弾を使うべきだったわね」

「そうね。でももう遅いわ。この位置なら、あなたが何かする前にあたしの赤外熱線（サーマルレーザー）が命中する」

右手を掲げ、死刑宣告と同等の宣言をする神前だったが、フレンダは大して動揺した様子もなかった。

「あー確かに。私一人ならここでお手上げね」

言いながら、フレンダは携帯を持ったまま両手を挙げて、ふざけたようにひらひらと振って肩を竦めた。はぁ、と溜息をついたフレンダは、どこからどう見ても万策尽きた少女のようではなく。

「私一人なら、ね」

瞬間、ゴバッ！！　という轟音が響き、神前の頭上の天井がブロック状に切断されて崩れ落ちた。

「……ッ！！　これは、さっきの！」

即座にレーザーを打ち込み直撃を回避した神前は、赤外線走査でフレンダの様子を確認するが、フレンダは既に移動しており、崩落した瓦礫の陰に潜り込んでいた。

赤外線レーザーは、レーザー自体には攻撃力はなく物体に命中して輻射熱を発生させる関係上、遮蔽物に弱い性質を持つ。加えて、本来の赤外線の性質と違い進行方向を限定する関係上、赤外熱線（サーマルレーザー）の速度は極端に遅い。かなり痛い手を打たれた神前だった。

「結局、発熱能力（ホットスポット）の料理の仕方くらい心得てるって訳よ。麦野から聞いた第二位風に言うなら、そうねぇ……。――私の前に、てめえらの序列（じょうしき）は通用しねえ……キリッ、って奴かしらねーん☆」

「……ッ！」

神前は自分の顔に血が上るのを感じた。ここで挑発に乗せることがフレンダの策略だったとしても、神前は起こらずに入られなかった。転生者であり能力至上主義の傾向が薄いとはいえ、神前も高位

能力者の端くれ。ここまでコケにされたとあっては、さしもの彼女も我慢ならなかった。

「ちょっと、痛い目見せてあげる！！」

怒りのままに、『フレンダの現在地点』に当たるように赤外線レーザーを連射するが、これは悉く天井から降ってくるブロック状の瓦礫に阻まれる。一通り乱射しつくした神前は、そこで違和感を感じた。

（……おかしい。さっきからフレンダは遠隔操作によるリモコンで上の瓦礫を操縦してると思っていたけど、それにしては動きが迅速すぎる。私のレーザーの発射地点を先読みした上で『ワンテンポ早く』瓦礫が降って来てるわ。回避しているフレンダに、リモコン操作での着火作業は難しいはず）

事前にプログラムをセッティングして、その動きに合わせて回避しているのか？　とチラリと考えた神前だが、あまり現実的ではないな、と思い直した。となると――、

「……そういえば、さっき『私一人では』って――！」

弾かれたように上を見上げ――ずに、赤外線による走査で天井の形を把握する。すると、面白いことが分かってきた。

（この形……。結構崩落してるけど、『ある一部分』だけは崩落しないように計算されて崩されているわ。どれだけ破壊されても、その部分だけは崩落しないような形に。……恐らく、そこに仲間がいるって訳ね）

すべてを察し、勝ち誇った笑みを浮かべた神前に、フレンダは怪訝な表情を浮かべる。

「な、何よ？　いきなりコワーイ笑顔になっちゃって。もしかしてアンタってビーム撃つと興奮するタイプ？」

「フフッ冗談やめてよね。そんな変態いるわけなじゃない。これは勝ちの目を見つけて喜んでるだけよ」

「（いや割と身近に居たりするんだけど……）」

フレンダは、あからさまにギクリとする。そして、その姿は神前にとって決定的なものだった。

「あはは！　これで終わりよ！　仲間がやられちゃえば都合のいい瓦礫も降って来ないだろうし、あなたの負けは確定ね！」

あの位置を貫く、それだけでもう後は詰め将棋だ。大丈夫、殺しはしない。わき腹あたりを狙って、すぐに病院に連れて行けば命に別状は無い。そう考え、慌てて制止しようとするフレンダに不敵な笑みを投げかけてから天井のほうへ視線を向け、神前は赤外熱線（サーマルレーザー）を発射した。

……フレンダが嬉しそうな笑みを浮かべて窓から飛び出したのも確認しないまま。

――――神前御鐘は、それから間もなく死亡した。死因は爆発によってビル全体が倒壊したことによる圧死。……当然、肉体は頭部も含めて跡形も無く押しつぶされた。

＊＊＊

「……お疲れ様、フレンダさん。敵の能力者――赤外熱線（サーマルレーザー）でしたっけ？　の死亡はこちらの方で確認できました」

窓から飛び降りたフレンダは、二階からとはいえ高いところから飛び降りた反動で涙目になりつつ、リモコンと携帯を持って待機していた黒花と合流した。

「いやはやー、まさかあそこまであっさり引っかかってくれるとは思って無かったって訳よ。本当はもっと別の手を使ってあそこにレーザーを撃ちこませる予定だったんだけどね」

フレンダと別れた黒花は、あのあとすぐにビルを離脱した。離脱の方法は単純、最初の崩落の天井の崩落の際に、落とす天井を少しだけ調整して如月と神前の死角となる穴を作り出し、そこから離脱したのだ。天井は爆破によって熱を持っていたから、神前の能力も偶発的にだが誤魔化せた訳だ。

そして、黒花と別れたフレンダは、携帯電話を通して黒花と情報をかわしながら神前を追い込み、三階に仕掛けておいた爆弾を黒花と誤認させて誤射させた。爆弾の周囲には先ほどの『導火線』を用意していたため、爆発と同時にビルは倒壊した、と言うわけだ。

「何にしても、これでもう片方の能力者の方も死んだでしょ。いやー、剥離要素（エラーポイント）二人も殺しちゃって、これはもうＭ・Ｖ・Ｐ・カ・ク・

テ・イ・ねって訳よーっ！！」

だわははは―！！　と武将みたいな笑い声をあげるフレンダに、黒花は思わず溜息をついた。そもそもＭＶＰなんてモノ、小豆は一言たりとも『やる』なんて言ってないのだ。勝手に記憶を捏造してモチベーションを上げているのだから救いようが無い。

「うぐ、」

と、視界の端でガラ、と瓦礫の山が崩れた音が聞こえた。思わず、二人は黙り込んで音のした方を眺めてしまう。

「……今、明らかに人為的に瓦礫が『崩された』ような音が聞こえたんですけど……？　っていうか、人の呻き声が……」

「……ハハ、まさか……よね？　全長五〇メートルのビルの下敷きにされてんのよ？　結局、そんなんで生き残れてたら普通に考えてバケモノ認定、」

「がァァァアアアあああああああああああああああッッッ！！！」

震えながらも笑い飛ばそうとしたフレンダの声を遮って、大柄な男――如月詠次が瓦礫の山を吹っ飛ばして立ち上がった。如月の体は青あざまみれであり、良く見たら体のあちこちが陥没しているが、致命的な怪我は左腕の欠損くらいしかなかった。そこも、黒花たちの知らないうちに神前あたりにでも止血してもらったのか、そこまで血は出ていないようだった。

「「ぎゃァァあああああッ！？」」

如月当人は怒り心頭といった様子で、本来ならばここは非常にシ

リアスなシーンのはずなのだが、フレンダと黒花はそんなことお構いなしで二人で抱き合って絶叫する。あまりに緊張感のない戦場だった。

「ふざけやがって……コロス！　殺してやる！！　テメェら全員ぶっ殺してやるぞチクショォおおおおッ！！」

如月の周囲には鉄くずや鉄筋に纏わり付いたコンクリートの塊などがぐるぐると渦巻いていた。良く見ると、頬や体のいたるところに鉄くずが張り付いて如月の動きを補強しているようだった。

「……磁界操作（マグネティックフィールド）の変種みたいですね」

「結局、鉄くずを纏うくらいしか使い道が無いクズ能力みたいだけどね」

抱き合っていた体を静かに離した二人は、そんな如月を見て分析していく。何はともあれ、磁場操作（マグネティックフィールド）ならば反発力を利用した磁力砲もある程度撃てるだろう、と分析し、二人が物陰に隠れようとしたところで、如月も動き始めた。

「クハハハハハ！！　逃げてんじゃねえぞアバズレどもがァ！！テメェらの服全部剥いて皮から順番に削ぎ落としてやんなきゃこっちは腹の虫がおさまらねえんだよォォおおおおおおおおおッッ！！」

ゴキゴキゴキ、と嫌な音を立てながら、如月の周囲の鉄くず群が収束し、如月の体に纏われていく。磁力によって動かしている所為か、その体には一トンにも及ぶ鉄の塊が纏わり付いているというのに、その挙動には一片の重さも感じられなかった。

乱雑だった鉄の形は少しずつ整形され、中世の鎧甲冑にも見える姿に整えられていく。やがて全体が完成した如月は雄たけびを上げ

るように高笑いし、

「テメェら全員俺の甲殻磁気の錆（マグネティックアーマー）にしてやぶげッ、」

そしてつぶれた蛙のような声を上げて吹っ飛ばされた。衝撃と、能力者が意識を失ったことにより、鉄の鎧はバラバラと崩れてもとの鉄くずに戻る。

「おーおー、何だコレ。随分派手にブッ壊したなあ」

ソイツは、真っ白い翼をはためかせてゆっくりと瓦礫の山に舞い降りた。

「ちょっと。あんなにして、殺しちゃったらどうするつもりなの？あの男、割と満身創痍だったみたいだけど」

そんな少年に横抱きにされていた少女は、不機嫌そうに口をすぼめて文句をつける。赤いドレスを身に纏った少女と、三対の翼を広げた男。ともすれば御伽噺の一幕のようにさえ感じられる幻想的な光景だったが、翼に付いた赤い血がすべてを台無しにしていた。

「心配すんな。雑魚の料理の仕方くらい心得てる。半死半生程度で留めてるよ。アイツには情報をもらわなくちゃいけねえし」

「ならいいけど」

言葉を返す翼の少年――垣根に、ドレスの少女は大して興味もなさそうに言ってから瓦礫の山に降り立った。足元の不安定さに少しだけよろめくが、それを垣根が片腕で腰に腕を回して支える。ともすれば恋人同士のようにも見えるようなやりとりだが、二人の間にはそんな甘ったるい空気など流れていなかった。これが、垣根とド

レスの少女の距離感らしい。

一方、垣根の言葉を聞いた黒花は一瞬たりとも迷わなかった。

『親船さん親船さん、へェェェ――――ルプ！！　何故か分からないんですけど垣根が剥離要素（エラーポイント）を捕獲しようとしてます！　私達だけじゃ抑えきれません！！』

『……えぇー……』

即座に小豆に念話（テレパシー）を送る。垣根が到着している時点で小豆は危機を脱していると考えていた黒花だったが、その予想通り、小豆は即座にテンション最低調な様子で念話を返してきた。一刻を争う気分の黒花は有無を言わさず『早いトコ助けに来ないと私達共倒れですよ！！』と言って念話を切った。段々と肝が太くなってきたメイドである。

念話で救援を要請した黒花に、フレンダが泣き付くようにして顔を寄せてきた。

「（どっ、どーしよう！　あれって第二位よね！？　麦野と親船が束になっても敵わないような連中相手に、どう立ち向かえってのよ！？）」

「（あれ！？　珍しいですね！？　フレンダさんのくせにどうして立ち向かう前提で話を進めてるんですか！？　さっさと救援呼びましょうよっていうかもう呼びました！！）」

「（馬鹿っ！！　そんなことしたところで、このまま剥離要素（エラーポイント）を捕らえられたら親船に何されるか分からないでしょうが！　主にフレメアが！）」

せめて一矢報わなくちゃマジで死ぬーっ！！　と絶叫しながら囁

くフレンダに、黒花もヤケクソになりながら頷いた。そもそも原作知識がバレたら黒花もおしまいなので、もとより抗戦しないという選択肢など存在しなかった。

（ああもう儘なりませんね！！　大体ほぼ攻撃能力の無い異能力（レベル２）と爆撃が取り柄の無能力（レベル０）で、どうやって大能力（レベル４）の心理定規（メジャーハート）と学園都市の第二位を相手取れって言うんですか！？　無理無茶無謀を一〇セット用意しても足りないレベルですよ！？）

ああもういつかみたいにどこからともなくやってきて『あはは―実はもう勝負は決してるんだよー』とか言いながら助けに来てください親船さーんと心の中で悲鳴をあげた黒花は、そこでふと思い至った。

（……そういえば、ここで親船さんはどんなことを考えるんでしょう？）

それは、心理同調（コンフォーミティ）を持つ黒花だからこそ考え付いた思考だったのかもしれない。元々、何度も思考をダウンロードしている人間ではあるのだ。その思考回路の片鱗くらい、分からなくてはさすがにおかしい。

（親船さんなら……きっと、『そもそも剥離要素（エラーポイント）を取られなければいいんだからとりあえず戦うことは考えずに男の強奪だけ考えよう！』とか考えるんでしょうね……）

まあ、まずそれをどうやって遂行するか、というのを即座に出すのが小豆の恐ろしいところなのだが、さすがに黒花はそこまで頭は回らない。隠れている間、必死にフレンダと念話で作戦会議を行う。

「――で、そこに隠れている二人のことはどうするつもりなの？」
「ん？　ああ、格下っぽいからスルーな。向かってくるようならブチ殺すけど」

何気ないように会話する垣根たちの声に、フレンダと黒花は思わず肩をびくり！　と震わせる。しばしそこで考え込むように念話で会議していた二人だが、こくりと頷くと一斉にビルの物陰から飛び出した。

「あ？　何だてめえら。もう行っていいぞ。別に好き好んでてめえらを潰したい訳じゃねえしな」
「結局、そんな風に強がっていられるのも今のうちって訳よ！」

突然の宣戦布告に対し、垣根はゆっくりと溜息をつくと、その三対の羽のうち一本を動かすことで返事した。

「ああそうかい。じゃあ死ね」

ゴバッ！！　と翼が薙ぎ払われ、フレンダと黒花の肉体をただのミンチにしようと迫るが、直前にその軌道をゆがめると瓦礫の山に突き刺さった。瓦礫の山が破壊されるのと連動して、山の一部がボン！　と音を立てて爆発する。

「……なるほどな。自分たちを囮にして、翼の防御を手薄にさせたうえで別方向からの攻撃で俺たちを攻撃しようってハラか。まあ割りとマシな作戦だが無駄だったな。俺もこの程度の工作に気付かないほど驕ってるわけじゃ、」

翼を翻しながら軽く笑う垣根だったが、その言葉は途中で中断せ

ざるを得なかった。垣根の隣に建っていたビルの壁が爆発し、無数の瓦礫が垣根達を襲ったからだ。

……一番最初に黒花やフレンダが地道に仕掛けていたシールである。『後で役に立つかも』とは言っていたフレンダだったが、本当に役に立ってよかったと心の中で噛み締めていた。しかし、これも当然の如く垣根の翼によって防がれ、土煙を吹き飛ばして状況を確認するのも惜しい垣根はそのまま如月の方向へ薙がせる。

如月の拿捕に動いているだろう黒花たちを始末する為だ。状況から言って、垣根に他の攻撃の対応をさせているうちに如月を強奪しようとしている、と垣根が予想するのは当然の心理だった。

……が、よりによって二人はその心理を利用した。

「にゃははは！！　計・算・通・り！　お宝は頂いてくぜーとっつぁーん！」

二人は、剥離要素（エラーポイント）のところになど向かっていなかった。どころか、剥離要素（エラーポイント）が先ほど転がっていた地点から少し離れたところで、垣根に背を向けて走っている。しかし何故か、彼女たちは既に剥離要素（エラーポイント）を抱えている。垣根は一瞬、何故こうなったのか理解できず思考が空白で埋められた。

「……なるほど、なるほどなるほどなるほど。そういうことかよ。――――上等だクソッタレ」

単純な罠に引っかかったものだ、と垣根は自嘲した。瓦礫とビルの爆破を引き起こし、そしてその隙に乗じての接近する、という策が本命だと思い込ませる、一つ一つの動作ではなく一連の流れすべてをブラフにする入念な仕込みの『騙し』。

垣根の油断がなければ即座に瓦解していた、薄氷の上に成り立っていたような作戦だが……成功した。垣根の油断も勿論あっただろ

うが、ここはその油断を最大限拡大させるよう振舞った彼女たちの力量を評価すべきところだろう。

（腐ってもあの雌狸の部下か……。チッ、一筋縄じゃやらせてもらえねえなあ……）

心中で舌打ちしてから、垣根は再びドレスの少女を横抱きに飛び上がった。何はともあれ、ここで剥離要素（エラーポイント）を奪われたのは垣根にとっては痛いミスだった。

＊＊＊

「はぁッ、はぁッ！　や、やったわね！　とっ、とりあえず作戦成功よ！！」

「せ、成功するかは五分五分でしたけど……、第二位さんが油断していてくれたお陰ですね！」

必死に走って垣根から距離をとった二人（厳密には三人）は、とりあえず物陰に隠れてひと段落着けた。『スクール』の研究所から此処までは、一キロもない。小豆がフルスピードで瞬間移動（テレポート）してくれれば、ものの一分とかからないうちに到着する程度の距離である。

（……とはいえ、第二位を相手に一分間、ですか～……）

正直、逃げられる自信などあるはずもない。

「ひいい！！　向かってきた向かってきた！！　どーすんのよこのままじゃあと一〇秒と経たないで殺されちゃうわよ！？」

というか、既に半分追いつかれている。垣根が飛行していなければ、黒花たちが逃走経路にビルとビルの隙間を選んでいなければ、今頃三対の白い翼を彩る赤絵の具になっていただろう。

とはいえ、さらに距離を縮められればビルを破壊するなどして瓦礫による攻撃をされないとも限らない。垣根は以前の麦野と違い、自分が失態を犯したからといってその失態を別の何かで埋めようなどという思考回路は持たないのだから。

「……ッ！　私に作戦があります！！」

すぐさま走り出しながら、黒花はフレンダに話しかけた。

「作戦！？　何それ言ってみて！」

フレンダの言葉に黒花が走りながらも念話を送ると、フレンダは少しだけ黙考してから頷いた。その様子を確認した黒花はさらに続ける。

「それには、少しだけ時間が……準備が必要です。垣根の視界をサンプリングする為の時間が。一〇秒で良いです。時間を稼いでください」

黒花の言葉に頷いたフレンダは、行動を始めた。準備はほんの五

秒。しかし、その一〇秒の時間を第二位から奪うのは、容易な話ではない。

＊＊＊

まず、その前に如月を殺してしまえばいいじゃないか、と思うかもしれないが、ことはそれほど簡単ではない。むしろ、黒花達が今生きていられるのは、半分如月のお陰でもあるのだ。

垣根は如月の頭の中の情報を狙っているのであって、それは彼が生きていないと進まない。学園都市の上層部は頭脳から情報を引き出せるが、垣根にそれができるかと言われればＮＯなのである。

だからこそ垣根は格下相手にコケにされて怒りながらも、黒花達に対して『ビルを未元物質（ダークマター）で破壊して生き埋めにする』といった類の攻撃をしないのである。

しかし、かといって垣根が何も攻撃できないと言うわけではない。腐っても未元物質（ダークマター）、学園都市で二番目の怪物だ。明らかな格下に精密に手加減をしつつ殺しにかかることなど、造作もないことである。

（ど、どうする！？　第二位は今にも私たちを殺そうとしてる。対して、私たちに垣根を殺す術なんかない……、……いや、殺す必要なんかない。逃げ切れさえすればいいんだから）

如月を抱えて走りながら、フレンダは考える。

（……ならっ！！）

フレンダは如月を前方に投げ飛ばし、開いた手で爆弾を後方に投げる。垣根に当てるつもりなどない。狙いは、その脇。

「レッツ☆起爆！」

間抜けな掛け声と同時、ボガッ！　と爆風が巻き起こって垣根の手前からビルの壁が崩れた。

「……何のつもりだ？」

垣根は一瞬、あっけに取られてしまった。

当然だろう。垣根がわざわざ取らなかったビルの破壊を、ほかならぬフレンダ自身が勝手にやってしまったのだから。これでは自分の首を絞める結果にしかならないと、黒花の割くの為の準備――五秒間の時間稼ぎ――を知らない垣根は怪訝な表情を浮かべたが、すぐに思い直す。

（いや違う。こいつらはこんなときにそんな無意味なことをする連中じゃねえ。必ずこの行動には意味がある。例えば――時間稼ぎ。そうだ、意味の分からない行動をあえて『推理』させることで時間を稼ごうとしてやがるんだ）

さすがに、垣根の結論は早かった。しかし、この状況、そこまで思索していては一〇秒の時間が流れるのなどあっという間である。

「……サンプリング、完了です」

土煙の向こうから聞こえてくる声に、垣根は『あの日』の小豆の声を重ねた。

（――――！！　マズイ、『何か』される。時間稼ぎの為なのか？　それとも俺を『潰す』ことのできる策なのか？）

垣根は『親船小豆の意思』……とでも呼べるものを警戒していた。格下であるはずの麦野が、曲がりなりにも自分を撃退できるまでになった上に、無能力者（レベル０）と異能力者（レベル２）がここまで食い下がれているのだ。そこに、幼いながらも暗部を手玉に取った小豆の影を見るな、と言うほうが無理がある。

だから、垣根はここで『一歩引く』という判断を下した。下手に拘泥したら、痛い目を見るのは自分だと考えたのだ。

瓦礫の崩落による土煙が晴れる。そこには、如月を抱える黒花と爆弾を持ったフレンダが立っていた。

（……？　待て）

垣根はそこで違和感を感じた。視界が、若干ブレているのだ。しかも、間違い探しの絵を重ね合わせてみた時のように、若干ブレている視界に差異が存在する。フレンダの持っている爆弾の種類が違う。黒花の立ち位置が違う。瓦礫の数が合わない。

（……黒花の心理同調（コンフォーミティ）か？　ＡＩＭ式……とかいう珍しい形式だったか。電気式じゃねえから心理定規（コイツ）の妨害が使えねえのが厄介だな……）

他にも違いは様々あったが、直前まで土煙に隠されていた景色はどちらが正しくてどちらが間違っているか判別が付かなかった。命拾いした、と垣根は思った。仮にあそこで追撃を仕掛けていたら、ぼやけた映像に混乱したまま爆撃による攻撃を食らっていただろう。……死にはしないだろうが、そこまで屈辱的な仕打ちを受けても尚冷静でいられるか自信がない垣根だった。

「オイ、……チッ、どうやらそっちもやられてるようだな」

「……ええ。色んな映像がごちゃ混ぜでちょっと今は何がどうなってるのか判別し難いわね」

心理定規（メジャーハート）に正確な景色の情報を聞こうとした垣根だったが、彼女の狼狽ぐあいから同じようなことをされてると判断すると忌々しげに舌打ちした。それも、数秒経てば整理できる問題だが、『プロ』の前で数秒の隙を見せるほど垣根は傲慢ではない。

「……一旦距離をとるか。まあ、アレは欲しいところだったが一応の目標は達成できたことだし」

そう言って、垣根は本格的にフレンダたちから距離をとった。

「さぁて……こっからが本番だ。『親船小豆の強奪』。出来ると思うか？」

「ほぼ不可能でしょうね」

「……こいつは手厳しい」

視界の端にこちらに向かってくる二人組の少女を収めながら、垣根は口端を歪めた。

幕間０１／とある少女の争奪戦線（デストロイ）（後書き）

今回は元々二話だったのですが、幕間が二つも続いては……ということで一話に。
お陰で文章が長い上に投稿までの時間も長くなってしまいました。

神前は何気に当ＳＳ初の女の子の犠牲者です。
彼女は『普通の禁書オリ主として登場してもおかしくない善人』をイメージしました。
それでも、黒花は躊躇せず、殺した後も平然としてます。
というか、赤黒く染まった街道なんてグロテスクなものを見ても黒花は平然としてます。
……彼女も随分悪に染まってるなあ、と感じ取って頂ければ幸いです。

05

周辺は地獄絵図だった。

まず、ビルが一棟まるまる解体されて瓦礫の山と化している。これは多分フレンダの仕業だろう。何やってんだあの馬鹿。

しかも、街道の一区画が丸ごと真っ赤に染まっているではないか。これも多分フレンダの仕業。アイツは私をミートスパゲティが食べられない体質にしたいのか？　まあここまで原型がないと何ともないのだが。

で、垣根が空を飛んでいる。しかも私をガン見していた。完璧に（貞操とか命を）狙われている。……全く、作戦の都合上仕方がないとは言え酷い話だ。そもそも私が表舞台に立っている時点でもう愚策である。今更だがもう少しやりようはなかったのかと後悔している。

『Ｍ－Ｏ「親船、後悔しても仕方ないわよ」』

そんな風に考えていると、麦野に釘を刺された。……分かってるさ。現状、思いつく中ではこれが最も『私の危険が少ない』作戦なんだから。あーだこーだ言ってもどうせこれをやらねばならないことに変わりはないんだ。

垣根を……殺すことには。

＊＊＊

ｓｉｄｅ垣根

第四位と裏第四位（アナザーフォー）の登場によって、現場の状況は一変しちまった。

まず、金髪とメイドが戦闘を放棄した。

助かった喜びにむせび泣きながら剥離要素（エラーポイント）の首の骨を折って止めを刺し、そのまま路地裏に放り投げて小豆の下に駆けた。……まだ、息はあるようだな。急ぐあまり首の骨をへし折りきれてなかった、ってところか。コイツは後で回収してやろう。

そして、ここであいつらを潰そうとしたら第四位の攻撃をモロに食らうことになるから、俺は二人が逃走するのを見逃した。

「……何で頭を爆破しなかったの？」

「「あ、」」

しかし、どうやら四人が集まったからと言って戦況があいつらに傾いた訳じゃねえみたいだ。二人がやってくるなり、裏第四位（アナザーフォー）は静かに詰問した。傍から聞いてる俺でも震えが来るくらい……暗部でもそうそう出せる奴がいないほど冷たい、絶対零度の声だった。

案の定、金髪とメイドは顔を青ざめさせた。……フム。どうやら、アイツの脳味噌にある情報はそれほど邪魔なモンらしい。

「雲行きが怪しくなってきやがった。とりあえずてめえはバックア

ップに戻ってろ。アイツらくらいなら俺だけで十分だ」
「了解よ」

俺は、適当なビルの屋上に降りて『心理定規（メジャーハート）』を下ろした。流石に、コイツを抱えながら第四位と裏第四位（アナザーフォー）を潰すのは面倒くせえからな。さて、アイツらは、と……。

「……もう良い。フレンダちゃんは一旦戻って剥離要素（エラーポイント）の頭を潰してきて」
「なっ！？」

裏第四位がそう告げると、金髪は目を剥いた。
……まあ、当然だな。今からあの剥離要素（エラーポイント）をつぶしに行くってことは、俺と対峙するってことだ。ただの無能力者であるあの金髪からしてみたら、『死ね』って言われてるようなモンだろう。……それにしても、俺も油断していたら手痛いしっぺ返しを食らいそうなもんだけどよ。

「沿受ちゃんは『伝令係』としては使えるからね。此処でこの子っていう手札を切るわけにはいかないから。フレンダちゃんは……まあ、出来れば切りたくない手札だったけど、垣根と等価交換だと思えば許容できる。大丈夫だよ、フレメアちゃんは私が責任持って預かるから」

味方を、まるで取り替え可能な道具か何かと同じように扱う裏第四位（アナザーフォー）に、メイドは思わず肩を震わせた。これが、親船小豆か。握った弱みを巧みに使って、マイナスではなくプラスの要因で相手に行動を強制する手口。
……くっはは、何だあいつ。自分の命が大事だけど仲間の命も大事なんです、っていうキャラだと思ってたら、飛んだ大悪党じゃね

えか。善人の皮被ってる分、中身の醜さが透けて見えやがる。俺以上のクズに出会うなんざ、どれくらいぶりだ？

ともあれ、剥離要素（エラーポイント）の頭（じょうほう）を潰されちゃたまらねえ。金髪には、俺の翼を彩る色彩の一つになってもら、

「待てよ、親船」

……ん？　なにやら第四位がご不満な様子だな？　これは仲間割れか？　面白ぇ。そっちが仲間割れするっつうんなら、俺もその隙に乗じさせ、

俺がそう考えた瞬間、第四位が原子崩し（メルトダウナー）をこっちにぶっ放してきやがった。

「……ッ！！　テメェ！！」

「確かに剥離要素（エラーポイント）を放置したのはフレンダと黒花の失態だったが、だからといって一回の失敗で即座に尻尾切りってのもあまりに慈悲がないと思わない？　それに、フレンダを捨てて下部組織と連携が取りづらくなっても面倒だ。私とコンビなら、まだフレンダも生き延びられる可能性がある」

激昂して声を荒げる俺に、第四位は目線で『そう簡単に隙は与えねェよ』と答えて臨戦態勢に入る。裏第四位（アナザーフォー）も『それなら良いか』と考えたのか、『無理はしないでね』と念を押してからメイドと共に瞬間移動（テレポート）で逃亡を開始した。

……全く、金髪と第四位で随分扱いが違うモンだ。あんだけ露骨に扱ってるのに部下から不満が出ねェのは、今まで皮を被ってたからか……。

まあいい。それにしても、俺もナメられたもんだなあ……。まさか、第四位と無能力者程度で足止めできると思われてるんだもんな。

確かに第四位は強力だが、それにしたって出来るのは『裏第四位』が能力相殺を使うまでの足止めだ。単品で俺と張り合える訳じゃねえ。

どうやら裏第四位も第四位も、今まで大した怪我もなく乗り切っちまってたからそのことに気付けてねえらしいな。いいぜ。てめえらがそうやって油断してんなら……俺も、容赦なくその油断に付け入らせてもらおう。

「まずは小手調べと行かせてもらうかァッ！！」

轟！！　と暴風が吹き荒れる。

未元物質で形作られた純白の翼が、この世のモノではない法則の下に烈風を巻き起こしたからだ。烈風はあたりの瓦礫やビルの壁面をめくり上げ、それらを纏うようにして竜巻となり金髪と第四位の許へ向かう。烈風の発生を確認した俺は、即座に周囲の重力子に未元物質を干渉させ、その法則を歪めることで空に浮かび上がった。

元より、あの程度の攻撃で奴らを潰せるなんざ思っちゃいねえ。アレはほんの一瞬の目くらまし。その隙に別の場所に移動して、『アレ』――先ほど使った、地面の性質改変を使うつもりだ。

「……二度同じ手は食わないわよ？　第二位」

烈風の中から聞こえた声に、俺は即座に反応した。何が来るかまで考えてる時間はねえが、とりあえず『何らかの反撃』がこちらを襲うってことだけは予測できる。俺はその場で翼を使って身体を覆い、どんな攻撃が来てもいいように対応する。

瞬間、ボガッ！！　という音と共に烈風の渦が爆ぜた。大方、烈風の中心で原子崩し（メルトダウナー）を循環させて爆発を引き起こした、ってところだろう。確かに、あの烈風は通常の物理法則じゃ考えられねえ威力を持ってるが、それにしたって元は空気だ。強力な爆発にまで耐えられる訳じゃねえ。

翼にくるまったまま物陰に移動して視界を確保して、俺は思わず呆れた。周囲の景色に、転々と赤熱したマグマがこびりついていたのだ。……チッ、その上、烈風の中に混ぜ込んでおいた瓦礫もマグマ化させて散弾にしてたってか？　こりゃ、防御しておいて正解だったな……。下手に回避しようとしたら、避け切れなくて手痛いダメージを食らってたところだった。

「逃がさないわよォ……！」

そうこうしているうちに、第四位が距離を詰めて来た。チッ……、どうやら、本当に『アレ』を使われたくないみたいだな。確かに、親船が居ない現状で『アレ』を使われちまえば、それはつまり第四位の敗北を意味してるから当然なんだが……、まあいい。

無理に策を押し通してこっちが痛い目見ても割りに合わねえしな。それに、コイツらを殺すのが俺の目的って訳でもねえ。

「はッ！　美人の第四位サマにケツ追って貰ってるとは、こいつァ身に余る光栄だ！」

「言ってろ第二位！　すぐにでもテメェのケツの穴に原子崩し（メルトダウナー）ブチ込んで、口から脱糞させてやっからよォ！！」

互いに罵りあいながら、俺と第四位は低空を滑るように駆る。

俺が向かっているのは、先ほどフレンダたちが剥離要素（エラーポイント）を捨て去

った場所。アレの負った怪我は、致命傷ではあったがそれでも数分で死ぬようなレベルじゃあねえ。

すぐに回収して、アイツに心を読ませればいい。心理定規（メジャーハート）は心の距離を操作できるが、仮にも大能力（レベル4）がそれだけって訳じゃねえしな。

「ヂィッ……！　テメェ！　そっから先は行かさねェぞォ！」

いよいよ攻撃が必死になってくる第四位（メルトダウナー）だが、俺は飛行に使っていない翼を操ることで第四位の攻撃を弾く。

「ハッ！　チェックメイトだ――、」

そう言って件の路地裏に入った俺だが、勝ち誇った台詞とは裏腹に内心はこれ以上ないほどに警戒を強めていた。これまでだって、同じようなことは何度もあった。これが、『奴ら』の手口なんだ。勝ちを拾った、そう思い込ませておいて、最後の最後に伏兵を放つ。人の希望さえも手玉に取った、あの雌狸のやり口。

大体、今までの攻防戦で金髪が介入していないのもおかしい。さっきはあれだけ爆弾をフルに活用していたはずじゃないか。それを、全く使ってこないというのは……ここに使う罠を仕込んでいた、ってことなんだろう。

そう考え、すぐに攻撃に対応できるように構えつつ、速度は落さずに首が不自然に曲がったままうつ伏せで倒れている剥離要素（エラーポイント）を見つけ拾おうとすると。

バガッ！！　と音を立て、俺の頭上から無数のブロック状の瓦礫が降り注いだ。即座に瓦礫を吹き飛ばしてやろうと翼を動かしかけ、俺はその行動を思いとどまった。……野郎、ビン詰めの液化爆薬も一緒に落としてやがる。

瓦礫を未元物質（ダークマター）で叩いたら、その場で即座に俺が液化爆薬を被り、ほぼチェックメイトに近い状態になってた、って訳か。

だが、見切った。

俺は即座に未元物質（ダークマター）を振るい、物理法則を超越した烈風を発生させた。衝撃によって瓦礫を除去するのがダメなら、そもそも瓦礫の進行方向を変えてやればいい。

どうせ、剥離要素（エラーポイント）を拾った後はこの場所がどうなろうと知ったことじゃないんだ。風によって数瞬時間が稼げればそれでいい。

即座にそこまで思考を纏め、ブワッ！！　と烈風を巻き起こした、まさにそのときだった。

俺の真横から、極太のレーザーが放たれたのは。

一気に喉が干上がった。

未元物質（ダークマター）の翼を無理やり操作し、烈風のベクトルを俺の背後に流すことで、反作用を利用し一気に前方へぶっ飛ぶ。咄嗟に剥離要素（エラーポイント）を手放さなかった俺を褒め称えたかった。ここまで危険を冒しておいて、コレを手放しては元も子もない。

……ここまでが奴らの作戦か。勝利を確信した瞬間の瓦礫、それに混じった液化爆薬、そしてそれを回避する瞬間を狙った必殺の一撃。なるほど、俺でなければ確実にしとめることが出来ただろう攻撃だ。本当に、今の一撃は危ないところだった。

だが、見切った。これで剥離要素（エラーポイント）は俺の手の中。さぁて裏第四位（アナザーフォー）。今度は戦いじゃなくて、机の上でテメェを追い詰め、この手の中に収めてやるぜ。

そう考え、腕の中の図体のでかい剥離要素（エラーポイント）に視線を落とし、俺は絶句した。……そういうことかよ、此処までが作戦だった、っ

つう訳か。……全く、してやられたよ。遡って考えれば金髪とメイドがコイツの息の根を止め損ねてたところから、罠は始まってたってことか。

剥離要素（エラーポイント）の口には、拳ほどの大きさの爆弾が詰め込まれていた。

瞬間、俺は半径二メートルほどの小規模な爆発に巻き込まれた。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

『Ｆ－Ｏ「やっほーぅ親船ぇー！　名演技お疲れ様って訳よー！！　こっちもちゃんとお勤めこなしてきたわよーっ！」』

ビルの中で待機していると、フレンダから念話が届いた。……どうやら、上手く行ったみたいだな。垣根に爆発を食らわせる作戦。

そう、最初からフレンダを捨て駒にする、というのは垣根を潰す為の餌だった。追い詰められた私が、味方を切り捨てるという醜いところを見せれば、『私が追い詰められている』という事実がより

リアルになるからな。
まあ、そもそも、この私が独断で『フレンダを捨てる』なんていう判断を下すはずがない。そんなことをしたら反感を買うからな。勝手に部下を切り捨てられた麦野は勿論、絹旗と滝壺も割りと仲間思いな所はあるし。少なくとも良い感情は抱かれない。
……演技に真剣さを出してもらうためにフレンダと黒花の二人にはギリギリまで作戦を説明していなかったから、アイツらはまさしく自分が切り捨てられたと思っていたことだろう。黒花のフォローは私がするが、フレンダのフォローは麦野に任せよう。

……さて、そして作戦は最終段階だ。

今回の作戦は、大きく分けて二段階に用意してある。一つ目が、先ほどの攻防。最終的に至近距離からの爆発を命中させる、という作戦だったがこれはフレンダから成功の連絡が届いてる。
まあ間違いなく、垣根は爆発に巻き込まれたことだろう。しかし、この程度で第二位が殺せていると思うほど私は甘くはない。手負いではあるだろうが、まだまだ戦闘不能には程遠いだろう。そして、手負いであるがゆえに冷静さを欠いた状態であるはず。

その隙を突くのが、二つ目の策。

『Ｍ－Ｏ「所定の位置に付いたわ。そっちの準備は？」』
『Ｏ－Ｍ「問題ないよ。万が一失敗したときはすぐさま逃げられる位置にいる。もしも失敗したら、そのときはよろしくね」』
『Ｍ－Ｏ「失敗前提で話してるんじゃないわよ、縁起でもない」』
『Ｏ－Ｍ「えへへ」』

麦野と念話をかわし、ビルの窓から道路を見下ろす。道路の中央には麦野が待機し、道路脇の物陰にはフレンダが待機している。

フレンダが囮になっている陣形だ。

垣根なら冷静さを欠いていても麦野があからさまに出ている状況を見て、麦野が囮、フレンダが本命……程度に裏を読む知能は残っているだろう。その心理を利用し、フレンダが攻撃をひきつけているうちに麦野が攻撃、それに対応した垣根をさらにフレンダで叩く体勢だ。

そして、そこからさらに駄目押しもある。

こう言うと負けフラグが建つから縁起でもないのだが……正直、負ける要素がどこにもない。

よく、垣根が御坂に攻撃を仕掛け、それを退けたと思ったら今度は黒花のところに現れた、という寝耳に水な状況の連続からここまで理想的な状況を築けたものだ。全力で私を褒め称えたい。

そんな風に考えていると、ついに垣根が現れた。頭から血は流しているものの五体満足。そして、その形相は怒りに歪んでいた。

『お、親船さん……。相当怒ってますよ、あの人。「ブチコロス」以外の感情が見えません……』

『……そう。じゃあ、沿受ちゃんも感化されないうちに同調切っておいた方がいいよ』

『……そうですね～』

黒花から届いた念話に、私は自分の予定通りに事が運んでいることにほくそ笑んだ。垣根があえて怒っているように見せてこちらの油断を誘っている可能性も考えたが、黒花の能力によってそれもないと証明された。

自分の思考を騙せる人間はそうそういない。いたとしても私を始めとした狸爺や女狐連中くらいのものだ。少なくとも、麦野や垣根

レベルの『現場の人間』にはできない。

そう考え、私は腹を括ると静かに宣言した。

『Ｏ－ＡＬＬ「それじゃあ――始めるよ」』

瞬間、場が動いた。はよほど切れていたのか私の裏をかいたのかは知らないが、垣根はフレンダを狙わず麦野に襲い掛かってきた。しかしこの程度は許容範囲。

この攻撃に対し、麦野はすぐさま後方に離脱と同時に原子崩し（メルトダウナー）による反撃を行い、続いて垣根の頭上のビルの一部が崩落し、ブロック状に切り刻まれた瓦礫が降り注ぐ。原子崩し（メルトダウナー）は大質量の攻撃だ。生半可な防御では無効化することはできても、その衝撃で吹き飛ばされてしまう。よってすべての翼をガードしている垣根には、これを防ぐ術がない。

が、これでチェックメイトではまだ甘い。相手は学園都市で二番目の怪物だ。念には念を入れ、さらに念を入れる必要がある。

……よって、未元物質（ダークマター）はこの場で封じさせてもらおう。

私はビルの窓に掌を当てた。その動作に対応するように、掌の先――ビルの窓の外に、地上と水平になるように割裂空洞（ダークホール）が現れる。その大きさは、いつもの倍以上。直径二メートルほどもある瞳型。

能力複製（ＡＩＭトレース）ではない。正確には、その前段階。能力になる前の、拡散力場を放出する段階だ。元々、演算の都合上一度に扱える能力の数に限りはあるものの、拡散力場を放出するだけならいくらでも行けるのだ。

むしろ、いつも能力を使う際に邪魔だから他の拡散力場の放出はシャットアウトしているくらいだし。

だが、シャットダウンしていると放出できる拡散力場の量がどうしても少なくなってしまう。私が扱える能力の強度（レベル）が低いのは、その所為もあるんじゃないかと私は勝手に思っている。まあそれはともかく。

この状況、拡散力場の量が足りないと困ってしまう。……何故なら、この拡散力場を利用して垣根の能力を封じるのだから。

そこで、『能力として形成される前の拡散力場をフルで放出する』ことにより、拡散力場の量の少なさを種類の多さでカバーした。

この作戦は、先の麦野の垣根への対応法を参考に考案させてもらったものだ。

作戦は単純。

『高濃度の拡散力場を放出して垣根の作り出した環境に干渉し、未元物質（ダークマター）が狙った現象を引き起こせないようにする』こと。

単純だが、それだけに垣根にとっては非常に困ることだろう。何せ、この世のモノではない現象がなくなれば未元物質（ダークマター）はただの鈍器。

この状況で先ほどと同じように翼を生やそうとしても、その前に麦野の原子崩し（メルトダウナー）が垣根の首を刈る。……要するに、八方塞、って訳だ。

（あーあ……、まさか私が自分から歴史を乖離させちゃうとはね……）

だが、仕方がない。こいつは少し『踏み込み過ぎた』。私を付けねらうだけならまだ許容できた。暗部抗争まで垣根の襲撃を回避し、あとは一方通行（アクセラレータ）と潰し合わせるだけだった。

しかし、剥離要素（エラーポイント）を狙ってしまうとなると話は変わってくる。ア

レは私のアキレス腱と言ってもいい。捕らえられたという事実があるだけで、私は垣根に無条件降伏しなくてはならなくなる。そんな事態は許容できない。かといって、剥離要素（エラーポイント）を今すぐ消すのは不可能。

……だったら、原作乖離を承知で垣根には消えてもらうしかないだろう。幸い、彼はアレイスターのプランでもそこまで重要ではないようだし、一方通行（アクセラレータ）のプランのために消費された訳でもなさそうだった。私が殺したところで『部下が襲われた報復』という建前がある以上お咎めはないし、一方通行（アクセラレータ）に影響を与えた訳でもない垣根が退場しても壊滅的な乖離が起こるわけじゃない。

（そんな訳で、私の命のために消えてくれ、垣根帝督）

瞬間、割裂空洞（ダークホール）からゴバッ！！　という音がした、……ゴバッ！！　と？　え、おいおい。いくら高濃度っつっても拡散力場ってのは元々精密機器でしか測れないような微弱な力場だぞ？　どう転べばゴバッ！！　なんて鎌池描写（かまちー）が使えるんだよ。

……そう思って改めて見てみると、割裂空洞（ダークホール）からは何だかよく分からないけど水色を基調に色んな色が混じった巨大な『右腕』が生えていました☆

んーと、これはどういう状況だ？　高濃度、多種類の拡散力場が融合して、奇跡的に魔術が発動しちゃいました、みたいな？　んな馬鹿な。何にしても、これではおそらく高濃度の拡散力場を放出して垣根の能力を封じる、という私のプランは不発になってるというわけだよな。

……よーしよし、落ち着け私。大丈夫大丈夫。まだ作戦が失敗した訳じゃない。ただちょーっと千載一遇のチャンスを棒に振って、尚且つ致命的な隙が出来ちゃっただけ。私の安全が揺らいだわ

けじゃ……、

……も、物凄い揺らいでるぅぅ――っ！！？

駄目だ、もう逃げよう、すぐ逃げよう。麦野とフレンダをスケープゴートにすれば三分ぐらい稼げるはず。黒花を別方向に逃走させて、私が瞬間移動で即座に自宅に戻れば無事に帰還できるはず。黒花は……五分五分か。まあ関係ない。

……いや、家に戻っても報復が怖い。ここは上条に接触をとってみるか？　……プランを妨害したとしてアレイスターから攻撃されるかも。じゃあ御坂？　アイツじゃ役者不足だ。一方通行（アクセラレータ）……駄目だ、死ぬに決まってる。

あああああああああ！！？？　どうしてこうなった！？　完全に勝てる消化試合じゃなかったのかコレは！！　何で私は窮地に立たされてる！？　やっぱりあれ負けフラグだったの！？　そうなの！？　作戦の決行前に自分の策に自信を持ったらその策は失敗するっていうジンクスは本物だったの！？

く、クソがこうなったら、

『Ｍ－Ｏ「何ぼやっとしてやがんだクソアマ！！　第二位の奴はテメェが出した腕に動揺してやがる！　さっさと決着つけろよッ！！」』

麦野の叱咤に窓の外を見てみると、垣根が必死の形相で腕に未元物質（ダークマター）の烈風を繰り出していた。腕はゴリゴリ抉れているものの、すぐさま再生してしまって一向に効果がないようだ。……何だか分からんが好機（チャンス）！！

『Ｏ－Ｍ「麦野さんさっきの『電子風』お願い！　それで止め刺す

から！！」』

『Ｍ－Ｏ「任せろ！！」』

轟！！　と窓の外で暴風が吹き荒れたような気がした。しかし、私はそれに意を介さなかった。麦野が『電子風』を成功させることを疑ったりはしない。ただ、自分の与えられた役目を遂行するのみ。正直あんなモノ動かし方なぞ分からないが……不思議と、感覚で動かせた。拡散力場を放出する時の要領で、ぎこちないながらも腕を動かせる。動きを溜め――そして放出！！

ガンボガン！！　と音を立て、割裂空洞（ダークホール）から伸びた『右腕』はさらに伸びて地面に拳を減り込ませた。そこには、垣根の右腕の肘から先が、ぽつんとあるだけだった。

バッ！！　と振り仰いで見ると、そこには数十メートル先で転がっている垣根の姿が。あんなところに……と思うのも束の間、今度は覆面を被った不良と思しき服装をした男たちが垣根を回収しはじめた。

……そういえば、さっき心理定規（メジャーハート）と別れていたか。バックアップが動き始めていた、と言う訳だな。だがそう簡単にことは運ばない。麦野に追い討ちさせれば――、

『Ｏ－Ｍ「麦野さん、」』

『Ｍ－Ｏ「悪ぃ、今日はもう……本当に、品切れ……だ」』

……。あれだけ能力を酷使してたんだもんな。そうなって当然か。

『Ｏ－Ｆ「フレンダちゃん、とりあえず最後の追い討ちにロケット弾打ち込んであげて」』

『F－O「了解って訳よ！」』

まあ、こんなもので垣根が死ぬとは思っていない。下部組織が何人か死ねばいいかな、というところだ。あー……、殺し損ねたか。まあいい。剥離要素（コッチのよわみ）は消した。それさえ確実なら次善策が打てる。

＊＊＊

結局、私たちは垣根の腕を回収して自宅に戻っていた。

垣根は死んでいない。原因不明のあの『右腕』のせいで殺しきれなかったのだ。全く、ふざけた話である。私が自分の身柄を使ってまで練った策がこんな突発的な予想外によって全部チャラになってしまったのだから。

拡散力場をたくさん放出させた、というところから幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を連想したが、まあ多分その類だろう。

とりあえず、垣根に関しては炭と化した右腕を添えて、

『私の部下に対する襲撃を行ったので報復として右腕を奪わせてもらった。今後は命を狙わせてもらう。これから二度と親船小豆に対し敵対行動しないことを誓うというのであれば我々も貴君に対しては不干渉という位置をとらせてもらう。返事は明朝六時まで待つ。

それまでに返事がなかった場合、貴君の命の保障はその生命が尽きるまで「ない」ものと思ってもらいたい。尚、屁理屈をこねた場合その時点で敵対行動（ブチコロス）と看做す』

という声明を出しておくことで決着としておく。

要するに、『剥離要素（エラーポイント）について探ったら殺す』ということ。言っておくが、コレはマジだ。『アイテム』は流石に出動させないが、他の暗部組織を何個消費してでも垣根は殺す。不干渉を貫きます、と嘘でも言ってくれれば命は見逃してやるが。まあ、それにしたって嘘だと判明した瞬間殺す理由が出来たって言うことにして嬉々として襲撃を仕掛けるけどな。

いくら第二位でも、四六時中命を狙われるのは精神的に応えるに決まっている。昔に経験したことがある私が言うのだから間違いない。十分な牽制になるだろう。

「すぅ……、すぅ……」

麦野の寝息が聞こえる。

結局、麦野はあのあとすぐに疲労で気絶してしまった。電翼二本発動による本格飛行が二回、大規模な循環による爆発が一回、電子風が二回、未元物質（ダークマター）の操作略奪が一回。

……うん、素晴らしいまでにオーバーワークだね。麦野にはＭＶＰ賞として給料上乗せしてあげよう。そんなことを言ってみたら、何だかフレンダが物凄いショックを受けてるようだった。何？　ＭＶＰとか期待してたの？　どっちみち剥離要素（エラーポイント）三人潰した程度じゃＭＶＰなんかあげるわけないのにね。

「で、これからどうするんですか？　布束研究員も超捕獲しましたが、正直あの女ただの無能力者（レベル０）で利用価値なんて超ありませんけど」

絹旗が話を切り出す。

そう、今回、私は布束を個人的に『捕獲』した。理由は……まあ、軍備増強だ。アレは学習装置（テスタメント）関連では随分高名な研究者だからな。原作知識を抜きにした『素』の私の情報網にも引っかかってるくらいだし。

正史（禁書目録（インデックス）本編）において布束の名前が出てこなかったところを見ると、暗部の世界で犬死したか細々生きているといったところだろう。何にしても、正史の流れからフェードアウトしたことはおそらく間違いない。

そんな雑魚でも、私のお膝元においておけば有効活用できるかもしれないからな。できなくてもまあ、正史には関係ないから痛くもない。

「何も矢面に立たせるだけが利用価値じゃないさ。彼女にはその頭の中に溜まった知識を存分に開放してもらおうじゃない。……彼女も、『裏』とはいえ『学園都市ナンバーワンの善人』の下で働けるのならそれは本望だろうしね」

「……流石親船さん、超あくどいですね」

「慈悲深いと言ってよ」

そう言って、私は布束に関する話題を打ち切る。『これから』という絹旗の言葉は、それだけを意味するものではないだろう。

「『絶対能力進化（レベル6シフト）計画』だっけ？　結局、体晶を使って大コケしたばっかりだってのによくやるわよね。……あれ？　アレは別の開発チームが計画してたんだったか。確か木原うんたらっていう女が主導してたはずだった訳だけど」

「テレスティーナ＝木原＝ライフライン、だね。あの人も御坂さんに倒されて、そのあと暗部に堕ちたって話だけど。……まあ、それはいいとして」

どうも話が横道に逸れ易い。やや強引に話を打ち切り、本題に入る。

「一方通行（アクセラレータ）の絶対能力進化（レベル6シフト）に干渉するだろう御坂さんをどう扱うか、だけど。ぶっちゃけ、私は今のところ不干渉を貫くつもりだよ。もしかしたら御坂さんが一方通行（アクセラレータ）と衝突するのもプランの内かもしれないからね。下手にアレイスターの虎の子にチョッカイかけて一〇年前の焼き直しとか、洒落にならないからね」

「超意外ですね。『アレイスターに敵対行動だと認識されない方法でアプローチをかければいい』とか言い出しつつその具体策も提示するものだと思ってたんですが」

「私も一応人の子なんだけどね？」

「結局、魔王第一形態の間違いでしょ」

失言したフレンダの頭を両手の拳でグリグリしつつ、私は考える。

はっきり言って、上条が介入さえすれば御坂と一方通行（アクセラレータ）の本格的な邂逅は起こりえない。だとすれば、私がすべきなのは上条が絶対能力進化（レベル6シフト）計画の存在に絶対気付けるようにそれとなく誘導すること。

まあ要するに、妹達（シスターズ）の死体を目の当たりにするように誘導すれば良いと言うわけだ。これは本来のプランの動きなのだから私が罰せられる理由もないし。そういう意味で『これからどうするか』は決まっているが、まあこれはコイツらに説明しても仕方がない。

今日は八月一九日。明日は八月二〇日。『とある魔術の禁書目録（インデックス）三巻』が始まる日だ。まさか、この事件に『かする程度』とは言え関わることになるとは思わなかった。……だがまあ、やるしかないのは間違いない。

……あー、そういえば上条を誘導するとなると私も高確率で妹達（シスターズ）

の姿を見なくちゃいけないのか……。上条のことだから危ないことには関わらせないとは思うが、念の為上手い離脱の仕方を考えておかないとな……。

＊＊＊

side other

廃墟と化した研究所跡にて、中学生くらいの茶髪の少女がたたずんでいた。

茶色い髪は地毛なのか、染めたような不自然な色合いではなく、肌と調和が取れた、上品な茶色だった。立ち振る舞いの一つをとっても高貴さが感じられるこの少女は、見るものに『きっとどこかのお嬢様なんだろう』と思わせるほどだ。

……尤も、現在の服装はお嬢様とは似ても似つかない少女趣味なモノで、このせいで彼女の素性を八割ほど隠してしまっているが。

少女の名前は御坂美琴。

人間を捨てる、とも揶揄される投薬や脳開発によって異能の力を得る学園都市において、『三番目に人間を捨てている』怪物だ。

『そもそも今回の指令は、まんまと研究所をつぶしに来た御坂さんに同じ超能力者(レベル5)をぶち当てて倒すことなんかじゃない。御坂さんが来てもいいように超能力者(レベル5)の能力者を用意しつつ、戦闘している隙を突いてデータを外部に移送すること。当然、御坂さんがどう足掻いたところでデータは外部に移送されちゃって、実験は続行、妹達(シスターズ)の無駄死には止まらない、って訳』

美琴は、先ほど小豆に言われたことを思い出していた。

（なら樹形図(ツリーダイヤグラム)の設計者を破壊することで四六時中確認を取ってる科学者たちの情報源を奪おう、と思ったけど、どうやら既に第三者によって破壊されてたみたいね）

全ての対抗手段を奪われた美琴の心中は、穏やかだった。彼女は右拳を力強く握り締めると、常盤台の寮に帰って行った。

常盤台の寮に帰ると、既に彼女の後輩、白井黒子は自室に戻っていた。

自分の日常の存在を見つけて、少しだけ安堵の表情を浮かべそうになる美琴だが、何かを悟られてはマズイと表情を引き締める。その様子を見て、白井は何かを言おうとしたが、その前に美琴は左手を突き出して制止した。

「あーゴメン黒子。ちょっと野暮用でさー……。今疲れてるからお小言は明日以降っていう方向でー」

「なっ！？　お姉様っ！　黒子の愛のお説教に宵越しの文字は有り得ませんのよっ！？」

「あーはいはいごめんねー」

「ガーン！　完全にスルーされてますのっ！」

真っ白に煤けた白井はさておき、美琴はシャワーを浴びようとそのままシャワールームの方へ行ってしまった。

服を脱ぎ、一糸纏わぬ姿でシャワーを浴びる美琴は静かに考える。

（実験を止めようと裏方を潰しても駄目。元より、絶対能力（レベル6）がこの街の悲願とも言える目標よ。いくら止めようとしても、利権の関係からそれを引き継ぎたい研究機関はいくらでもいるはず）

今日一日で感じた戦慄を洗い流すように、美琴はゆっくりと自分の身体に指を這わせる。

（なら、裏方を潰しても無駄）

思考は、身体を流れ落ちる水のように危険な領域へと堕ちて行く。

（ポンポン沸いてくる金の亡者（クズども）と、たった一人しかいない第一位（クズ）、どっちを潰すのが現実的かしらね？）

美琴はもう一度、自らの右拳を握り締める。

いや――正確には、その掌の中にある白い塊の破片を。

（あの女は――第四位の麦野は言ってたわ。『アイツの能力はこの世のモノではない物質を生み出し操ること』。『この世のモノではない物質に干渉された事象は、この世のモノではない性質を得る』、って。確かに第一位の一方通行（アクセラレータ）はこの世のありとあらゆるベクトルを操る。じゃあ、『この世のモノではない性質』を持っていたら？

第二位が、第二位である理由がそこにあるとしたら？）

試す価値は、ある。少なくとも、自分がわざわざ瞬殺されるよりは、ずっと。美琴はそう考えた。今までの美琴なら、贖罪の為にもここで自分が死ぬことによって実験の幕引きを狙っていただろう。

でも、それでは駄目だと思ったのだ。

この場合、『死』とは逃げでしかない。一万人を殺した罪を、『自分が死ぬことによって償いますだから許して』、で済ませられる訳がない。

（……償いきれる訳、ないじゃない。一万人も殺した罪が、こんなちっぽけなクズ一人の命で、等価な訳ないじゃない）

この状況では、『死』という最大の罰は美琴にとって唯一の救いとなってしまう。そんな安易な逃げ道、許されていいはずがないのだ。

（確かに、一方通行（アクセラレータ）は一万人もの人間を殺したクズよ。でも、私だって同じクズ。そんなクズが、いつまでも正道な方法で、自分の手を汚さない手を使って、何かを為そうとしていたのがそもそもの間違いだったのよ。クズにはクズの、幕の引き方がある。どこまでも血みどろで、どこまでも救われない結末だけど。……それでも、あの子達にとってはこれが一番救いのある道）

そう考え、美琴はさらに手の中の白い破片を握り締める。

（一方通行（アクセラレータ）を、学園都市で一番人間を捨てた怪物を、――――殺す。それを成功させて、初めて私は『償い』のスタートラインに立てる）

その手には、どこまでも純白な殺意が握られていた。

05（後書き）

御坂、黒化。

大体小豆の所為ですが、原作御坂も殺す手段があればこんな思考になってたと思います。

06

side other

とある物語が始まった。

八月二〇日、午後六時一〇分。夏の夕暮れの学園都市で、上条当麻は一人呆然と立ち尽くしていた。彼の目の前には、一台の自動販売機が悠々と佇んでいる。

この自販機、七月末にとある二人の超能力者（レベル5）の戦闘に巻き込まれても正常に稼動したという優れものである。しかし、今日このときに限ってはこの自販機は本来の仕事を行っていない。上条が立ち尽くしているのも、その為だ。

（いや、ちょっと待てよ）

上条は心の中で呟く。

（確かにさ！　上条さんも入れる直前には今時誰も使ってないような二〇〇〇円札をツッコむのはどうかと思いましたよ！　でも普通イケるだろ！　だって流通してんだもん！　っつーか、対応してないなら対応してないで突っ返すとかするだろ！　少なくとも吸い込んだまま吐き出さずダンマリで『アワレ上条当麻は二〇〇〇円の損失です不幸ですね』なんて認められっかよ！）

心の中で呟くどころか血涙を流しながら叫ぶ上条だったが、具体的に自販機を叩くような真似はしない。

そんなことをしたら最期、不幸な上条は自販機に存在証明（ファンファーレ）されて近くの常盤台中学学生寮に存在する、暗部組織全員を一人で縊り殺

せる寮監（女性・嫁き遅れ）によって今日を生きる資格を奪われてしまう。

記憶喪失になって早一ヶ月弱、自身の不幸具合を身に沁みて理解していた上条は、どんな異能も殺せるけどこんな普通な苦境にはどうしようもない右腕を振り上げたまま暫し震え、やがて力なく下ろすと溜息をついた。

と、上条は背後からカツン、と靴が地面を叩く音を耳にした。

振り返ると、そこには『どこから見てもいいトコのお嬢様にしか見えない』雰囲気を漂わせた少女がそこにいた。

少女の名前は親船小豆。この学園都市の政治を司る十二人の統括理事会の一人、親船最中の孫娘である。

服装は短い丈のワンピースの上に薄緑色のシャツ、下には太腿のラインが分かりやすいジーンズ、靴はパンプスと、割と普通めな服装なのだが、それでも彼女の持つ『お嬢様オーラ』が全体の雰囲気を清楚にしていた。

上条は、数日前——八月一六日に彼女と知り合った。否、実際には中学校三年間＋高校に入ってからもずっと隣の席といういわゆる『腐れ縁の幼馴染』ポジションだったのだが、記憶喪失になってしまい七月二八日以前の記憶が吹っ飛んでしまった『今の』上条にとっては、八月一六日が初めて彼女と知り合った日なのだった。

「あ、あれー？　上条君、どうしてこんなところに一人でいるのかなー？」

振り返ってぽかんとしていると、小豆は気持ち上ずったような声で問いかけてきた。勿論、小豆は普段こんな喋り方をするような人格ではない。

八月一六日に出会って、軽く話した程度だが、それでも彼女の落ち着いた性格の片鱗は見えた。何せ、転んだ上条の横にすぐさま回

りこんで抱きかかえるほど、瞬時に冷静な判断が下せる人物である。

（……？　何緊張してんだ？）

そんな彼女が上ずった声を出しているのだから、まあそこまで深刻に考えたりはしないものの、違和感の片鱗のようなモノを感じた上条である。しかし、疑問に思っているのは良いが質問に答えないのもマズイ、と言うわけですぐさま口を開く。

「……何って、補習帰りに飲み物でも買おっかなーと不相応な望みを抱いてしまったが為に不幸の扉を開いたばっかりなのですが……」

「……あー、もしかして二〇〇〇円札とか入れてみたら誤作動で飲み込まれたまま停止したとか？」

「毎度思うけど幼馴染パワーすげえなオイ！」

八月一六日のときと同じく、寸分違わず上条の現状を言い当てた小豆。即座に突っ込んだ上条を普通に無視（スルー）した小豆は、そのまま自販機の側面に手を当てた。

「……？　お、親船さん？　その手は一体……？　まさかその手でバンバン自販機を叩いて二〇〇〇円札を奪還しようとか考えてるのではっ！？　お馬鹿っ！　そんなことしたら不幸な上条さんの煽りを受けてブーブー警報（アラーム）が鳴るに決まってるでしょうが！」

「お馬鹿は上条君の方だよ。何年も一緒にいる私がそんな教科書レベルの不幸マニュアルを知らないわけないでしょ」

必死に止めようとする（が、女の子の服を掴むのは気が退けるので掴むか掴まないかのところで手を虚空にさ迷わせているだけの）上条の方に見向きもせず、小豆はそう言い切った。何だかんだで不幸に理解のある女の子がいるのは有難いことだなー、としみじみ思

っている上条だったが、だとしたら何でだろう？　と疑問がわいてくるのが人情である。

「……やっぱりだ」

小豆は静かに呟いた。『何のことだ？』と上条が聞くだろうと予測していたのか、上条が言うまでもなく小豆は勝手に説明を始めた。

「学園都市の自動販売機は、『外』のモノと違って、中身のジュースを取り替える際に手間を減らすのと盗難防止の為に、扉部分の施錠を電子ロックで行ってるんだけど」

そう言って、小豆は件の電子ロックのところを指差した。そこには、僅かに隙間が開いていた。

「最近、相当大きな衝撃を受けて、それから修理されてないんだろうね。電子ロックが馬鹿になっちゃってるみたい。これなら……」

『あっ待て！』という上条の制止も聞かず、小豆は隙間に指を入れて慎重な動きで扉を開けてしまう。電子ロックが壊れかけている関係からか、扉を開けたところで自販機が警報を鳴らすことはなかった。

自販機の中身、缶ジュースやペットボトルが横向きに並んでいる棚のような光景が見える。入れられた紙幣は、通常お金を仕舞う金庫のようなところに収納されるはずなのだが、今回の場合は少しだけ入っているような状態の二〇〇〇円札が発見された。

「あったあった。どうやら二〇〇〇円札が対応してないから突っ返そうとしたときに誤作動を起こして停止しちゃったみたいだね。こ

れなら……っと」

　するり、とゆっくり二〇〇〇円札を抜き取った小豆は、そのまま上条に向き直ってにっこりと可愛らしい得意げな、それでいて上品な笑みを浮かべる。

「ほら、取れたよ。全く、上条君も気をつけなきゃ駄目だよ？　この自販機、常盤台の子が乱暴に扱ってるからボロが来てるって有名なんだから」

　言いながら上条に二〇〇〇円札を渡した小豆は、そのまま扉を閉めようと少し自販機から距離をとる。しかし、此処までされて何も動かないのは上条も何となく申し訳なさを感じた。

　……いや、そこまで明確な思考ではない。何となく、『じゃあ最後に扉を閉めるのはやっておくべきかな』みたいな、そういう思考に駆られたのだ。

　……自分が、不幸であることを忘れて。

「あー、ありがと。やっぱ二〇〇〇円札は質屋か何かで換金した方がいいのかねー。ミスって今回みたいなことになったら面倒だし、それに二〇〇〇円札だったらレア度も高いから多少高めの値段になるかもしれないし、よっ！」

　小豆が自販機から離れたのを確認した上条は、車のドアを閉めるみたいに勢い良く自販機の前面を押した。扉のように開かれていた自販機が、バダン！　という音を立てて閉まる。そこに至って、上条は顔面が真っ青になった。

　不幸な上条が、オンボロ自販機に対してこんな乱暴な扱いをすればどんな結果が起こるか、なんて目に見えている。

「……し、しまった――っ！！　ついつい二〇〇〇円を奪還したもんだから油断してこのオンボロが扉を閉めた衝撃でブーブー唸る可能性を考えてなかったッ！！」

「あーあー……。結局こうなるんだね……」

結局、ブーブーというとある自販機の存在証明（ファンファーレ）は、第七学区のとある公園に響き渡ることとなった。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

夕方までは、順風満帆だった。

垣根側からはあの後午前二時くらいに謝罪と条件を全て呑む旨の連絡が届き、これでとりあえず垣根関連はクリアしたと思った。

そこで今日は上条の補習が終わる夕方まで街をぶらぶら歩き、もう良い時間だから上条と御坂に会いに公園に向かったのだが、

……まさか……初っ端から乖離が発生するとはね……。

……正史では、上条が自動販売機の前で立ち尽くしていた時、背後から現れるのは私ではなく御坂だった。

元々私は、さりげなーくそのタイミングで混ざり、さりげなーく一〇〇三一号との遭遇を見届け、さりげなーく一〇〇三二号との邂逅も行い、さりげなーくフェードアウトする予定だったのだが、どういう訳か御坂が現れなかったせいで、私は不本意ながら上条と一〇〇三一号の遭遇をお膳立てしなくてはならなくなった。

……まあ、どちらにせよ私が同行するのは確定だったし、不測の事態が起こったら軌道修正はするつもりだったから、やることに変わりはないのだが。

しっかし、まさか私が御坂の代わりの役回りをする羽目になるとは……。こうなると、今日中に御坂、妹達（シスターズ）との邂逅を済ませないと。

最悪御坂に関しては私の思い出話でも良いけど、妹達（シスターズ）は日が落ちる前に邂逅させないとマズイ。でないと、死体から御坂に話をつなげることができないからな。

……確か、妹達（シスターズ）はこの辺りで研修をしていて、御坂の電撃に反応してやってきた、という話だった。先ほどの警報（アラーム）に反応してさらに近くにやってきている可能性もある。

……と言うわけで、私は上条と共に先ほどの公園から程近い高台にやってきていた。

とりあえず黒花との念話で妹達（シスターズ）――ミサカ一〇〇三一号の位置を把握した私は、上条がいつものごとく不幸（バカ）をやらかしたことにかこつけて、警報を聞きつけた人が追いかけてこないように逃げるのを装って一〇〇三一号と邂逅するために彼女のいる場所――この高台にやってきていたのだった。

ちなみに、逃亡する際上条が私のことを抱きかかえるようにして走ろうとしたが、そんなラッキースケベフラグを建てさせるほど私は無用心になったつもりなどないのでかわしてやった。上条は不幸にも勢い余ってスッ転んだようだが私の知ったことではない。

「はぁー、はぁー……。悪い親船。せっかく穏便に済ませてもらったっていうのに……」
「いいって。普通ならあそこでアラームなんて鳴らないもん。上条くんが悪いんじゃないよ」
息を荒げている上条は、土下座する勢いで私の目の前にひれ伏していた。流石に一〇〇三一号がこの近くにいるのに土下座プレイを強要しているようなこの光景を続けさせる趣味はない。肩に軽く手を置いて慰めてやると、上条はバッ！　と顔を上げてその涙ぐんだアホ面を晒した。
「う〝う〝っ、この優しさ……あの居候食いつき少女にも見習ってほしいものです……」
「居候少女？」
「あ〝っ」
あ、このバカまたやらかしたな。
でもまあ、私のキャラクター的に居候少女発言を放置することはできないしなー。とりあえず、軽く尋ねてみる。上手く誤魔化せるなら良し、誤魔化せなくてもまあ……放置でいいか。
「あーいや、その……えーと」
しかし、上条はあたふたと言いよどんでしまう。コイツは本当に嘘がつけない人間だな……。インデックスに記憶喪失を隠していられてるのも、アイツとの付き合いが短いからだったのだろう。だがまあ、此処で変に追及して記憶喪失をバラされても困る。
「……あー、良いよ良いよ。知られたくないことなら私、詮索しな

いから」

ポカンとしている上条に顔の前で手を振りながら、続ける。

「どうせ見ず知らずの少女を悪の組織から助けてついでに自宅に匿ってるとかそのへんでしょ？」

「うー……！　わっかんねえけど！　俺も詳しいことは覚えてねえけど親船に言われるとそんな気がする！！　ふしぎ！！」

事後にステイルからの報告書があったと思うが、すぐに燃やされてしまったのであんまり内容は頭に入っていないのだろう。っていうかいくら詮索しないからって『覚えてない』とか簡単に言っちゃ駄目だろ……、あ、ここはギャグ補正ってことにしてスルーしてあげるべきなのか。危ない危ない、あともう少しで空気の読めない女になるところだった。

「しかし、そうなると上条くん大変そうだね。ただでさえ赤貧生活を余儀なくされてるっていうのに、」

「おや？」

空気が読めない女認定を回避したことに安堵しつつ、世間話に興じながら一〇〇三一号が来るまで時間を潰そうかなどと考えていた私だが、後ろから聞こえた声でその必要がなくなったことを察知した。

姉（オリジナル）である御坂美琴とも微妙に異なる、抑揚のない声色。妹達（シスターズ）の特徴だろう。そんなことを考えながら、私と上条は声のした方に振り返る

「自販機の警報（アラーム）を聞いてやってきたのですが、位置関係と状況的にあなたがたが犯人ということで間違いないでしょうか？　とミサカ

は内心『こいつら完璧に黒だろ』と思いつつも被疑者の人権を尊重して確認作業に入ります」
「あれ？　御坂さん？」

一〇〇三一号か……と思いつつ、私はあえてスッ惚けて首を傾げる。すると、私の言葉に上条が連鎖的に首を傾げた。……勿論、コイツはスッ惚けてるわけじゃない。

「御坂？」
「何言ってるの上条くん。上条君の友達でしょ？　常盤台中学の二年生で、学園都市の超能力者第三位、超電磁砲（レールガン）の。……ああ、その調子だと適当なあだ名つけて本名で呼んでなかったから名前忘れたとかそんな感じなのかな」

私の鋭いツッコミと即時フォローに、『あ、ああそうそうそんな感じー』と乾いた笑みを漏らした上条はともかくとして。私は改めて一〇〇三一号のことを見る。

「……暗視ゴーグル（NV）。電子線を見ることができる御坂さんには必要のない装備だね」
「え？　何何？」

状況が上手く飲み込めていない上条は放置して、私は一〇〇三一号を見つめる。

「……そちらの方の察しの通り、ミサカはお姉様ではありません、とミサカは自身の秘密を正直に白状します。で、ミサカの質問は無視かよ、とミサカはツンツン頭とサイドテールを眺めながら心中で悪態をつきます」
「思いっきり暴露しちまってるじゃねえか……」

「ツッコんだら負けだよ、上条君」

一〇〇三一号のささやかな毒舌をスルーしつつ、私は彼女をじっと見つめる。……なんか無表情のまま頬を赤らめたような動作でもじもじすんのやめろ。キモイから。

「い、いやな！？　アレは不幸な事故っつーか……俺はただ二〇〇〇円を取り返そうとした、ただそれだけで……、……親船、パス！！」

「ここにいる上条君が自販機に乱暴をしたせいでアラームが鳴って、偶然一緒にいた私も巻き込まれました」

「嘘じゃない！　嘘じゃないけどさ！！　もっとこう……そこに至るまでの過程を！」

全て事実な私の証言に、上条は頭をかかえた。しかし、一〇〇三一号はそのこと自体にはあまり関心がないのか、軽く頷くだけで流された。拍子抜けなのか安堵なのか分からない間抜け面で、上条が溜息をつく。

「それにしても、お姉様ってことは妹さんになるのかな。あの第三位に妹がいるなんて初耳だったけど、こんなに瓜二つだとはねー。……暗視（NV）ゴーグルってことは、電子線は見えてないってことかな？　能力までは一緒じゃないんだね」

そこで、話を切り替えると、一〇〇三一号は何でもないようなことのように頷き、

「まあ、ミサカは所詮欠陥品ですからね、とミサカは量産タイプの悲しさに打ちひしがれてみせます」

「欠陥品って……。嫌な言い方すんなよ、」

「（上条くん、あの子にも色々とあるんだよ）」

ごく自然にクローントークを始めた一〇〇三一号に眉を顰める上条だったが、私が即座にフォローを出すことで事なきを得る。この時点で一〇〇三一号がクローンだって気付かれてもちょっとアレだしな。できるだけ情報量は正史と同じにしておきたいし。

「んじゃあ、お前はどうして此処に来てたんだ？　常盤台って補習とかあんの？」

「常盤台の内情にはあまり詳しくありません。私が此処に来ていたのは、研修の一環です、とミサカは簡潔に説明します」

「研修？」

一〇〇三一号の言葉に、上条が首を傾げる。……あー、そろそろ止めに入る頃合かな。

「研修って言えば、風紀委員（ジャッジメント）か何かかな？　大変だねー妹さんは」

「まあ、そんなところです、とミサカは何も知らない一般人に言い知れない優越感を感じながら答えます。にへらっ」

無表情なのに口元を歪める一〇〇三一号。……シュールな光景である。上条も既にこの少女のマイペースさには慣れたのか、明らかに研究機密の一端を吐いてる彼女にも大した反応は見せない。

「っつーか、さっきから思ってたけどさっきから自分のこと『ミサカ』ってさ、名前が御坂ミサカって訳じゃないんだから、おかしくね？」

「いえ、ミサカの名前はミサカですが、とミサカはミサカという文字が若干ゲシュタルト崩壊していることを危惧しながら答えます」

「……？」

ミサカの要領を得ない答えに、上条はさらに疑問符を浮かべる。私がどうこの状況を切り抜けようかと思っていたら、唐突に一〇〇三一号が踵を返した。

「……あ？　どうかしたの？　もしかして聞かれたくないことだった？　だったら、」

「いえ、そうではありません、とミサカは無用な心配を与えないためにあなたの言葉を遮ります。ミサカは研修中ですので、もう行かねばなりません、とミサカは貴重な人との関わりを胸に留めつつ答えます」

一〇〇三一号は、相変わらず無表情のまま答える。無表情ゆえ、その感情の機微は分からない。……まあ、この時点でコイツラに感情なんてある訳ないんだけどね。インストールされてないし学習もしてないんだから。

「そっか。そういえば風紀委員（ジャッジメント）の研修中なんだっけか。じゃあ、またな。頑張れよー」

「じゃあ、さよなら、妹さん」

「はい。さようなら、とミサカは別れの言葉を口にします」

『またね』とは言わず、私たちは別れた。

＊＊＊

「ホント、大変だったよね。多分あの場に私がいなかったら上条君、一晩中御坂さんと追いかけっこしてたよ？」
「……う、ううー……。話をする度親船に借りが増えていく……」
そんな訳で一〇〇三一号と別れた私たちは、一〇〇三二号とも邂逅を済ませておくべく黒花と連絡を取りながら一〇〇三二号の元へ向かっていた。
今は、御坂と遭遇できなかった時の為に私が御坂の人物像を説明しているところである。
「でも、可愛いところもあるんだよねー。ゲコ太の携帯持ってたし」
「……ゲコ太って、アレ？　たまに食玩とかについてくる」
「そう、アレ」
「はぁー、そんなビリビリ女にも可愛らしい趣味の一つや二つくらいあるんだな。てか、携帯ストラップならまだしも携帯本体って相当の筋金入りだぞ」
「その意外な一面にキュンと来ちゃったり？」
「バーカ。そんな伝え話でコロリと攻略されるほど上条さんの攻略難易度は低くありませんのことよ？」
なんでもないようなことのように話す上条。というか、友達のお話を聞くノリだ。記憶を喪失している身なのだから当然だが、それにしたってこれほど『他人の話を聞いてます』オーラを出されると流石に……。……報われないなあ、御坂。
「ん？」

そんな風に話していると、目の前に御坂美琴が現れた。……否、アレは一〇〇三二号だ。偶然、ではない。この邂逅を果たすために黒花と連絡を取り合いながら、それとなく上条の移動方向を誘導していたのだから。

「あれ？　お前、さっき研修に行くって……、あれ？」

「……？　発言の意図が分かりかねますが、ミサカは現在研修中です、とミサカは突然現れて意味不明なことをのたまうツンツン頭に困惑しつつも懇切丁寧に説明します」

「あー、パトロールかなんかが研修ってことか。大変だなぁ」

すっかり一〇〇三二号……というか、妹達（シスターズ）の調子にも慣れた上条は、いちいちツッコむことはせずに勝手に納得する。一〇〇三二号も行きずりに会っただけでそこまで立ち話をするつもりもないのか、早々に歩みを再開した。

「……そういうことです。それでは、私は研修の続きを。人との触れ合いも良いですが、それだけに興じ続けるのも本末転倒なので。さようなら、とミサカは再度、別れの言葉を口にします」

「おう、今度こそまたなー」

「うん、今度こそさよなら。研修頑張ってね」

……『研修頑張ってね』か。事実を知る私としては、我ながらこの上ない皮肉だ。さて、ここで一〇〇三二号に帰られてもちょっとだけ困る。本番は明日だが、今日は今日でしてもらわなくてはならない仕事がある。

「あれ、上条くん。猫の毛ついてるよ」

「あ？　マジか！　あークソ、夏だし猫って抜け毛の季節なのかね

ー。たっく、これから部屋掃除が大変になるー……」

ぴくり、と別れたはずの一〇〇三二号の動きが停止した。背後でその気配を察知した私は心中でほくそ笑むが、上条は気付かない。

「上条君……、猫、飼ってるの？」

「うっ、何だその非難がましい目は……。別にいいだろ。そもそも動物飼っちゃいけないなんてルール、守らなくちゃいけない道理が分かんねえし」

「……これまた大きく開き直ったね」

ジト目で見つめてみると、上条はバツの悪そうな表情で肩を竦めた。……ああ、自覚はあるのな。そっちの方が性質悪いが。

「それにあの状況じゃ猫を飼うことを拒否するなんざできるはずもなかったしなー……」

「相変わらず細々と不幸だね。……それでも、飼った以上責任持って最期まで面倒見ないと駄目だよ？」

「当然だろ」

まあ、インデックスのせいで泣く泣く飼う羽目になったのは知ってる。あまり苛めても可哀想なので、違う話を振ってみる。

「へー。でも、猫飼ってるんだー。……私、実は動物に触れたことあんまりないんだよね……。ちょっと見てみたいかも」

「……おぉ、なんかお嬢様っぽい発言だ。良いぜ、丁度良いしインデックスのことも紹介したいし、俺んち寄って来いよ」

「だから、私一応統括理事会の孫娘……」と一応形式上のツッコミを入れつつ、後ろの気配を確認する。……一〇〇三二号との距離

は先ほどとあまり変わっていない。つまり、先ほどから停止しっぱなしと言うわけだ。なるほど、可愛いものが好きな御坂のクローンなだけあって、小動物（かわいいもの）には目がないと見える。完全に一〇〇三二号が釣れたのを確認した私は、ここらで一〇〇三二号に話を振ってみようとしたが……、

「待ってください、とミサカは猫と触れ合える機会を前にして胸をわくわくしてかてかさせながら二人に話しかけます」

予想に反して、一〇〇三二号の方から声がかかった。

「……あり？　お前、さっき研修って……、」

「ミサカの研修内容はあくまで『パトロール』です。よって、学生寮の前まで行っても『パトロール』をしていれば問題ないのです、とミサカは一片の隙もない理論を振りかざしてこの少年の頭を縦に振らせようとします」

にやり、と無表情のままに得意げに口端を吊り上げた一〇〇三二号に呆れる私と上条。元々拒否する理由なんかないのに、わざわざ自分がついていく正当性を作ろうと言うのだから、微笑ましいというか、なんというか、である。

……何はともあれ、これで『正史通り』になった。

「……まあ、断る理由もないしな……。いいぜ、お前も一緒に来いよ」

「はい、とミサカは意気揚々と頷き二人の後に追従します」

上条はそんな一〇〇三二号の様子に、私は二人の様子に苦笑しながら、上条宅へと向かった。

０６（後書き）

実は、超電磁砲やオリスト、間接的な影響を除けばこれがこのＳＳでは初めてとなる『原作』介入となります。

八月二五日修正

07

そんな訳で、私達は上条の住むマンションの玄関（ロビー）前まで来ていた。

「へぇー、此処が上条君のおうちかぁー」

私は、マンションを見上げて感心したように頷く。……うむ、さすがマンション、でかいな。私の家よりもかなり大きい……居住可能面積だけで言えば一〇倍近くはあるんじゃないだろうか？　……集合住宅と比較してもアレか。まあ、私の家もお手伝いさんの居住スペースとかを考えたら集合住宅と言えなくもないんだけれど。

「ん？　やっぱり親船ってこういうトコ新鮮だったりすんの？」

「まあね。私の家、一軒家……一軒家？　……うん、まあ、そんな感じだからね。部屋の一つ二つだけで生活するっていうのはちょっと想像できないかも」

「いやまあ、一応１ＬＤＫは確保できてるんですが……あ、そいえば、御坂妹も常盤台だったよな。こういう『庶民の家～』ってのは馴染みないのか？」

「……はい、とミサカは答えます。ですが、外装の趣に違いはあれど、常盤台中学校の実態も『集合住宅である』という点を鑑みれば此処とさして変わりありません、とミサカは貧乏生活にコンプレックスを持ってるであろう彼の心にフォローを入れる優しさを見せます」

「……なるほど、これが『口は災いの元』ってか」

「災いが訪れるのはいつも上条君の方だけどね……いや、実際『口は災いの元』って上条君のことを指してるんじゃ……？」

「えっ、なにそれこわ、」

「んー？　おーう、上条当麻じゃないかー」

そんな感じで私たちが駄弁っていると、背後からウィーンという機械音と同時に、少女の声が聞こえた。

振り返って、ドラム缶みたいな清掃機の上にちょこんと座るメイド（黒花とはまた違うタイプの『メイド』だ。黒花は『侍女』、こっちはどっちかというと『家政婦』……と言う感じか）を見て確信する。……土御門舞夏か。

「おう、舞夏じゃん」

「そーいうお前はあれかー？　両手に花状態でハーレムかー？　お前も懲りないなー」

「ハーレムって……そんなの上条さんは今まで一度として出来たことないですよ？」

「ハハハ、冗談キツイぞー」

本当だ。冗談キツイぞ。……まあ、上条ＬＯＶＥな奴は多いといってもそこまでいるわけじゃない上に、殆ど上条の生活圏外にいるから本人に自覚はないのかもしれないが。

「んで、舞夏は一体何の用だよ？」

「んー、そうだな、クーラーのエアコンがブッ壊れたからこっちに涼みにきたー、というのはどうかー？」

「……いや、どうかー……じゃなくてよ。誤魔化す気ゼロだろ、それ」

「ＨＡＨＡＨＡ、まあ細かいことは気にするなー」

アメリカンな笑いを浮かべながら、上条をバシバシと叩く土御門（妹）。確か、日常的に土御門の家に入り浸ってるんだったか？

まあ、正直どうでもいいことだ。

「いくら家政学校に休みがねえっつってもよ、そんなにズル休みばっかで単位とか大丈夫なのか？　俺だって何故かしらないうちに単位がヤバくなってるくらいなのに……」
「ハハハー、心配御無用、これでも私は単位はとってる優秀なメイドさんでなー」
「……有能な怠け者ほどメンドクセェ奴はいないよな……」
「上条くん、有能な怠け者は軍師向きなんだよ。どっかの誰かの格言であった気がする」
「より正確には『前線指揮官』ですね、とミサカは注釈します。ハンス＝フォン＝ゼークトの組織論の一節で、理由は『怠け者であるがゆえに部下の力を遺憾なく発揮させる為』。もう一つは『どうすれば自分が、ひいては部隊が楽に勝利できるかを考えられる為』ということです。ちなみに、有能な働き者は参謀、無能な怠け者は総司令官、無能な働き者は処刑するしかない、と続きます」
「はえー……」

博識な一〇〇三二号に上条が感心していると、例のメイドが離れていることに私は気がついた。声をかけようかとも思ったが、とりあえずスルーしておくと、今度は上条が気がついた。

「お、もう行くのか？」
「んー、そうだなー。さらばだ上条ー」

土御門（妹）はそういうと、ドラム缶型の清掃ロボを叩いて動きを一瞬止めさせ、

「そうだー。家出少女を匿う時は、昼間は放逐して夜になったら家に帰ってこさせる『餌付け方式』が一番楽だぞー。四六時中家にいたら物音で回りにバレるリスクが高まるしなー。あと、くれぐれも

犯罪にならないように気をつけるんだぞー」

それだけ言うと、土御門（妹）はガガーッと清掃ロボの上に乗ったまま走り去っていった。取り残された上条は、自分がシスターを匿ってると気付かれていたことに唖然とする。そんな上条を見て、一〇〇三二号はおずおずと問いかけた。

「……猫以外にも、飼ってる人間（どうぶつ）がいたのですか、とミサカは『うわー犯罪者だやべー』という内心を隠しながら問いかけます」

「違うから！！　きっと俺もそんなことはしてないはずだから！！」

……即座に否定する上条だが、多分法はこいつを守ってはくれないと思う。

＊＊＊

横綱が一人乗ったら落ちます、って感じのエレベーターに揺られながら、上条の部屋のある七階に到着した。キーンコーン、という間の抜けたチャイムが鳴る。これ、最大で一トンまで持ちますって書いてあるけど絶対嘘だよな？　老朽化してもっと耐久力落ちてる気がするんだが……。

「私、男の子の家に行くの初めてかも」

そんなことを言いながら、エレベーターから降りる。まあ前世の経験があるから初めてではないので、体感的には“久しぶり”だ。……一六年ぶりなのだから、相当久しぶりだな。

中学時代は女友達との付き合いもあったから、友達の家に遊びに行くのは今生でも初めてではないが、やはり男と女では勝手も違うだろう。そんなわけで前世の感覚を思い出しながら歩いていると、上条宅のドアの前と思しき位置に、巫女装束と白い修道服を着た少女がかがんでいた。

……あれが、インデックスと姫神秋沙か。

そんな光景に対し上条は怪訝な表情を浮かべ、

「……つか、あいつら何やってんだ？　まさか鍵なくして締め出されたとかか？」

こちらに確認をとってくるような調子で呟く上条に、私は『そんなもん知るかよ』と言いたげな感じで肩を竦めた。黙ってても仕方がないと判断したのか、上条は気持ち声を張り上げた。

「おーい、お前ら、そこで何してるんー？　鍵失くして締め出されたのかー？」

「あ、とうま。違うよ、スフィンクスにノミがついてたから取ろうと――なっ！？　とうまの傍らに女の人が！？　しかも両手（ダブル）に花！？」

「既に。私は要らない子。ふふ。所詮私は。ヒロインになりきれない女。もしかしたら。この前の事件が最期のチャンスだったのかも」

上条が右手を挙げて呼びかけると、インデックスと姫神は素早く反応した。とりあえず、おずおずと頭を下げて挨拶する。インデッ

クスはそんな私の姿を舐めるように観察して、

「……右は悪の組織から逃げてきた少女、左はその悪の組織の女幹部と見たっ！」

「人聞きの悪いことを言うんじゃありませんっ！」

どーん！　と指を差すインデックスに、上条のツッコミが入る。

ちなみにインデックスから見て右は一〇〇三二号、左は私だ。

「こいつらは俺の友達だよ。で、さっき割りと聞き捨てならないこと言ってた気がするんだけど。三毛猫（スフィンクス）にノミがついてるってどういうこと？」

『いやーな予感がします』と顔面で訴える上条に、インデックスは何でもないような表情で答える。

「今朝、起きたらスフィンクスがノミだらけでね。多分とうまの掛け布団とか凄いことになってると思う」

「『思う』じゃねーよ！　風呂場ん中まで避難してるっつーのにわざわざ追尾して三毛猫投下（ノミばくだん）してんじゃねえ！最近妙に身体が痒いと思ったら原因はそれかーっ！？」

一通り叫び終えた上条ははっとして、

「っつか、テメェら部屋ん中は放置プレイか！　今頃中はノミ地獄になってんじゃねえの！？　……ハッ、それでテメェら外に避難してやがったのか！！」

だーもうこの後バル○ン買いに行かなくちゃーっ！　と絶望する上条。……だから動物を飼うっていうのは大変なんだよ。まあ後悔

はしてないみたいだから良いけど。

「で、インデックスちゃんが取り出してるそれは……『サルフィア葉』、かな？」

「うん？　さるふぃあば？　……これは『セージ』って言うんだよ。セージには浄化作用があるから、これを使って魔女学っぽくノミを追い払うって訳」

「……まじょがく？」

とりあえずオカルチックな単語が出てきたので首を傾げてみる。

ちなみに、『セージ』というのは『サルフィア葉』の別名である。サルフィア葉は能力開発にも使う薬草の一種だから、学園都市で勉学に勤しんでいる私は前世で中東の国を暗記したみたいにサルフィア葉の効能その他諸々も暗記しているのだった。命のやり取りと学校の勉強を両立できてる私って、実は凄いんじゃないか？

「あ、あー！　こいつ、宗教やっててさ！　まじょがくっていうのも、その教義らしいんだわ！」

「へー、そうなんだ。……でも、サルフィア葉……セージを食べてもノミを除去できる作用なんか身につかないはずだよ？　葉っぱ自体は薬効成分はあるけどノミに限らず生物に有害な成分は含まれてなかったはずだし……、」

「あ、うん。これはスフィンクスに食べさせるんじゃなくて、煙で燻してノミを退治する為のものだからね」

……空気が凍った。

いや、私はインデックスがこういう受け答えをすると知っていた訳だが、それにしてもいざ目の前にすると衝撃的だ。常識知らずというか、普通に考えて燃えてる葉っぱを生物に当てようとするだろうか？　視野狭窄ここに極まれり、って感じである。

「……煙で燻して、って……まさか、その葉っぱを燃やしてスフィンクスに近づけて～……って話じゃ、ないよな？」

「その通りだけど？」

キョトン、と純真な眼差しで首を傾げるインデックスに、絶望のあまり上条の手から学生鞄が零れ落ちた。

「待って。お手上げにはまだ早い。あなたが絶望したら。そこの猫はもう香草蒸しになるしかなくなる」

その言葉に、上条はハッとした。『そうだ、俺が諦めたらスフィンクスの命はここで潰えてしまう。そんなふざけた幻想、許せるわけがない！』……とかなんとか、無意味に熱いことを考えているのが丸分かりな表情だった。

「……あれ、巫女さん、何それ？」

上条がそんな風に意識を改めていると、その脇で姫神が巫女装束の袖から缶スプレーを取り出していた。……どう見ても殺虫剤だった。

「ん。魔法のスプレー」

もう一度言う、どう見ても殺虫剤だった。

……いや、私はこのネタ知ってたんだけどね？

「姫神ィィィいいいいいいッ！！　クソッタレ！　この場にまともな人間は親船と御坂妹しかいないってのか！！」

「落ち着いて上条君、私が今から猫にも安全なノミ取り薬を買ってくるから!!　それまで何とか持ちこたえて!!」
「だ、駄目だ親船!　こんなの、俺たちだけじゃ持ちこたえられねぇよ!!」

そんな感じで小芝居していると、ザッ、と足を踏み出す音が聞こえた。物音に私と上条が振り返ると、一〇〇三二号は堂々とした佇まいで、指先から紫電を迸らせていた。

「――要するに、今すぐノミを始末すればいいのでしょう？　とミサカはカッコよく決めてみます」

「ちくしょう!!　なんかもう台無しだけど認めるよ確かに今最ッ高にカッコいいよテメェ!!　で、どうするんだよ!?　このままだとこの銀髪シスターとエセ巫女、すぐにでも三毛猫を愉快なオブジェに変えちまうぞ!!」

切羽詰って問いかける上条に対し、一〇〇三二号はすっと右腕を上げることで答える。

「どうすると問われれば……こうします、とミサカは微弱な電波を以って彼の質問に応対します」

ビチッ！　と僅かに空気がはじける音が聞こえた。……なんだったか、確か、特定周波数の電磁波を浴びせてノミだけを殺傷したとか、そんな感じだったか？　ともあれ、猫の様子がおかしい。微弱とはいえ電撃を食らったんだから当然か。

「はいはい割裂空洞（ダークホール）」

通路の外側に音もなく発現した割裂空洞（ダークホール）に、びっくりして飛び上がった猫が吸い寄せられるように入っていった。

……姫神が拾うから大丈夫だけど念の為、とか思っていたが、よく考えたら正史でもギリギリの状況だったのだ。剥離が発生している現状で、『正史どおりに』姫神が猫の首根っこをつかめる可能性は低かったのだから、やっておいてよかったといったところか。

「え、えええ!?　スフィンクスぅ!?　スフィンクスが変な穴の中に入っちゃった!!」

「変なって……大丈夫だよ、その中は私の能力で作り出した安全な空間だから（多分）。私がちょちょっと引き摺りだしてあげれば……」

そう言って、私は割裂空洞（ダークホール）の縁に触れないように注意しながら、中に漂っている猫を引きずり出す。ふちに触れないようにするのは、割裂空洞（ダークホール）の内部とそれ以外では『向かう先』が違うので、触れると切断されてしまうからだ。

なまじ、『切る』わけではないので切断力は無限大である。……こういうイレギュラーな攻撃力は、瞬間移動（テレポート）に近しいものがあると思う。

割裂空洞（ダークホール）の中は基本無重力だから、等速直線運動をして穴の奥まで行ってしまいそうなイメージだが、これで中々抵抗がある。多分、拡散力場がたくさん詰まってる関係上そうなるのだろうが、なんとも不思議な仕組みだ。

「ふしゃーっ!!」

私に首根っこつかまれた猫は、これでもかというくらいに威嚇しながら、それでいて特に暴れもせずに引きずり出される。うむ、作

戦成功である。

「でも凄いんだよ！　二人ともありがとうなんだよ！　お陰でスフィンクスが救われたかも！」

そんな風にはしゃぐインデックスを尻目に、一〇〇三二号はぺこりと少しだけ誇らしげにお辞儀をした。

「特定周波数により害虫のみを殺害しました、とミサカは説明します。このタイプの虫除け機器は量販店などで販売されているので猫に影響はありません、とミサカは先手を打って相手に安心を与える心遣いを見せます」

そう言ってミサカは扉の方を一瞥すると、

「室内の方は、電磁波タイプでは電子機器に異常をきたす恐れがあるので、発煙タイプの殺虫剤を使用することを推奨します、とミサカは助言を与えておきます」

それだけ言うと一〇〇三二号は、ぽかんとしているインデックスたちや傍観している私をよそに、さっさとその場から去ってしまった。

「とうまとうま、あれが、真のパーフェクトクールビューティなんだね」

「爪の垢煎じて飲ましてもらえよ？」

＊＊＊

その後、上条の言葉に『爪の垢を煎じて飲む』っていうのは偶像の理論が曲解されてしまった、間違った知識の一例で～と魔術講座を始めたインデックスに、私の手前だからと言う理由で上条が必死に口止めをした後、私たちは発煙タイプの殺虫剤を買うために街中に出ていた。ちなみに、姫神はもう良い時間ということで小萌先生の待つアパートへ帰った。総台詞数三。“空気”の姫神の異名は伊達じゃないな。今適当につけただけだけど。

（……あー、別れるタイミングを逃した、か……）

そんな二人に同行している私は、ふとそう思った。

あの後すぐに『皆で行くかー』的な流れになってしまったので抜け出せなかったが、正直今日はこの後正史に関わる事件はなかったはず。上条に随行していく旨みなんか一切ないので、さっさとお暇したいところである。

「――で、とうま。この女の子は一体どこの誰なのかな？」

話もひと段落ついたところで、どこか責め立てるような声色のインデックスが上条に詰問する。そら来た。女の嫉妬は怖いんだぞ、経験者が語るんだから間違いない。

……上条信者の女の子は相手をいじめるとかハブにするとかそういう真似はしないからいいんだけどね、逆に目の敵にして直接勝負

を挑んでくるというか、イジメは対処が面倒だが、こういう手合いは相手にすることがそもそも面倒だ。

「んぁ？　聞いて驚くなよ、このお方はこの街を治める一二人の統括理事会の一人、親船最中の孫で親船小豆というのだーっ！！」

「いや、そうじゃなくて。私はこの子が『とうまにとって』どういう人なのか聞いてるんだよ？」

茶化したような上条の回答に、インデックスは凍りつくような声色で問いかける。……おぉ、怖い怖い。

「えっとそれは、」

「ただの同級生だよ」

このままだと上条がいらぬことを言ってインデックスの機嫌を悪化させそうだったので、私は先手を打って答えた。

「……ただの？」

「そ。誰かさんみたいに壮大な事件に巻き込まれてる最中に知り合ったわけでも、特別助けてもらったわけでもない。入学式の日に知り合って、それからずっとずるずると、日常の中で顔を合わせては適当な世間話に興じる、そんな、『ただの同級生』だよ」

そういって私がにこやかに笑うと、インデックスも私の言いたいことを悟ったのか、上条の方をにらみつけた。『ただの同級生』に知られるくらい、おおっぴらに人助け（フラグたて）をしているのだから、インデックスに怒られても自業自得、である。

しかし、インデックスはいつもの如く（多分）噛みつき攻撃には至らなかった。まあ、往来でガブリは流石にあれだけど。

……そろそろ頃合か。

『Ｏ－Ｍ「むーぎのさーん」』
『Ｍ－Ｏ「……どうした親船。修羅場は過ぎたか？」』

私が黒花を介して念話（テレパシー）で呼びかけると、打てば響くように返答が帰ってきた。

『Ｏ－Ｍ「修羅場って……まあ似たようなものだけど。上手く誤解は解いたよ。あとは二人だけのプライベートタイムを邪魔したくないから、適当に電話鳴らすなりしてこの場から離脱する理由付けをしたいんだけど」』
『Ｍ－Ｏ「それならお安い御用よ」』

ほどなくして、私の携帯電話が振動を開始した。着信：麦野さん。

「……あ、ごめんね。二人とも。ちょっと電話ー、もしもし？」
『ああ、もしもし、おっ嬢様ー？』

開口一番の『お嬢様』発言に、上条とインデックスが唖然とする。
……またしち面倒くさいことを……。コイツらの前では私の部下キャラで通すつもりなのか？　……いや、実際にも部下なんだけど。

「……お嬢様？　今、お嬢様って……」
「聞いたよ、とうま。私も今確かに聞いた」

しかし、そんな二人の様子を遠目に見ているはずの麦野は意に介さない様子でさらに笑いを堪えたような声で続ける。

『ちょおっと急用が出来ちゃったから戻ってきてもらえるー？　今

第七学区の自然公園にいるからー』
「あ、うん分かった」

打ち合わせどおりの麦野にこくりと頷いて、通話を切る。上条とインデックスを見ると、既に粗方の事情は把握してくれているようだ。

「あはは、ごめんね。そんな訳で私もう行かなくっちゃ」
「ああ、いいよ。今日はありがとな。何だかんだでお前がいなかったらウチの猫死んでたかもしれないし」
「本当にありがとうなんだよ、あずき」

二人の言葉に適当に頷き、挨拶を交わしたのち、私は上条たちと別れた。

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

「ただの同級生だよ」

そう言い切った小豆に、インデックスは内心安堵していた。自分と同じように、何かに巻き込まれて彼に惚れ込んだ、……『恋敵』でなくてよかった、と。しかし、安堵する反面『ただの』とわざわざつけるあたりに、何か不穏な色を感じる。インデックスはそう思ってさらに問いかけた。

「……ただの？」

「そ。誰かさんみたいに壮大な事件に巻き込まれてる最中に知り合ったわけでも、特別助けてもらったわけでもない。入学式の日に知り合って、それからずっとずるずると、日常の中で顔を合わせては適当な世間話に興じる、そんな、『ただの同級生』だよ」

……『日常』。小豆が何気なく言った言葉に、インデックスは内心どきりとした。

インデックスは、間違いなく上条の日常の中心に存在している。しかし、その実インデックスは上条にとってどこまでも『非日常』である。朝起きたらベランダに引っかかっていて、大怪我を負ったところを助けて、入院するほどの大怪我を負いながらもその人生を救って、今は居候。上条にとって、人を助けることは何ら特別なことではない。そんな、当たり前の流れの中で居候しているインデックス。魔術サイドの住人という、別世界の人間であることを鑑みても、彼女と上条は本質的なところで『よそ者同士』なのである。

それに比べて、この少女。

最初のＨＲ（ホームルーム）の自己紹介の時間にお互いの名前を知り、休み時間に親睦を深め、放課後に会ったら普通に話ができる、友達。確かに、彼女は上条との『特別な思い出』など存在しないのだろう。だが、彼女は持っている。たった一度の『特別な思い出』だけのつながり

ではなく、長い時間かけて、彼女自身の魅力によって作り上げられた、上条との思い出、が。劇的でロマンチックな出会いもなければ、共に死線を潜り抜けたとか、命を賭して助けたとか助けてもらったとか、そういうものも、何一つない。しかしどこまでも身近でどこまでも普通の、『友達』。

インデックスは思う。

それは、『助けてもらった』という唯一つの思い出でだけ繋がっている自分よりも、ずっと『上条の傍にいる』ということではないのか？　と。

自然と、視線が上条の方に向かった。

……勿論、そんなはずはない。確かに小豆は『自然な形で「上条の日常」の中にいる』存在だが、その『上条の日常』にはちゃんとインデックスも含まれている。インデックスの中で『あの事件』の思い出は色濃いが、それでも上条とインデックスの思い出はそれだけではない。何せ同棲しているのである。何気ない瞬間の中でも、上条とインデックスの思い出は確かに育まれているのだ。

……それでも、人間、隣の芝は青く見えるものである。簡単に言うと、インデックスは小豆に嫉妬しているのだ。

「じゃあまたね、二人とも。仲良くするんだよ？」

小豆は、そんなインデックスの心理を見透かしているかのように柔らかく微笑むと、そのまま二人の前から姿を消してしまった。

「……かなわない、かも」

「どうした？　インデックス」

静かに呟いたインデックスの言葉に、朴念仁は精神を逆撫でするような能天気さで問いかける。悩みは晴れないまでも、調子を取り戻したインデックスは心機一転、上条の頭をガブガブするのだった。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

「お帰り、親船」

第七学区の自然公園に到着した私を、『アイテム』プラス黒花が迎えた。

「いやぁ、今日も一段と超厚い面の皮でしたね、親船さん」

「……いやだなぁ絹旗ちゃん。人聞き悪いよ」

開口一番に皮肉を投げかけた絹旗は半ばスルーしてみんなの輪の中に加わる。麦野と絹旗とフレンダと滝壺はベンチに座り、メイド服姿の黒花はその脇で両手を身体の前に置いてメイドっぽく佇んでいた。……この街、メイド学校とかもあるから黒花が此処に立って

てもなんら違和感ないんだよなぁ……。

「それじゃ、親船も来たことだし、移動するわよ」

私がみんなの輪の中に加わると、麦野はそう言って立ち上がった。日も既に傾いている。暗くならないうちに帰らないと、また剥離要素（エラーポイント）の連中に襲われるしな。……いや、襲われるのは一向に構わないのだが、今日は上条たちの相手をしていて疲れたのでこれ以上疲れるイベントは嫌なのだ。

「第三位の動きはリサーチしておいたわよ。結局、昨日あんなに働いたのに此処まで首尾よく動けた私ってば凄い訳よ～！　これはお給料も、」

「弾まないよ」

歩き始めてまもなく、フレンダが意味もなく浮つき始めたので軽く制しておく。別に私が指示した訳ではないが……まあ、普通に考えれば分かるだろう。あの御坂が、あの程度で引き下がるような人間ではないということは。

「報告お願い」

「……チッ。第三位は、なんだか良く分からないけどもぬけの殻になった研究所を破壊し続けてるわね～。おおかた少しでも実験にダメージを与えようってハラなんだろうけど……結局、完全に無駄足になってる訳よ」

「ふむ……」

「ねえ親船、私も気になったから一応調べてはみたけど、どうしてそんなに第三位の挙動に興味持ってるの？　結局、無意味だと思うんだけど」

フレンダが眉を八の字にして問いかける。私が答えようとしたところで、ここまで黙っていた麦野が口を開いた。

「決まってるでしょ。あの日、私と親船は確かに第三位と敵対していた。その直後に第二位が乱入したから曖昧になってたけど、立ち位置としては私たちは第三位の敵だったのよ。それはつまり、研究者サイドの人間であるということ。何か、研究に関する情報を持っていると思われてもおかしくない。あの時は余裕がなかったから誤魔化せたけど、時間を置いて冷静になられたら第三位だってそのことに気付いてもおかしくない。むしろ、気付く方が自然よ。だから、もしもの時に私たちが有利に状況を運べるように、第三位の行動は常に把握しておかなくちゃならないっていうワケ」

……まあ、麦野の言うことにも一理あるよ。確かに、私が御坂の動向を気にしているのには、そういう理由もある。勿論、本当の理由は御坂が正史から離れて何をしているのか、監視する必要があったってだけの話だけどな。

『そういえば親船さん、正史でも御坂さんは万策尽きたあとは残りの研究所を手当たり次第に潰してました～』

『……なるほど、まあ、上条くんの前に現れてないだけで正史どおりではあるんだね』

一番変わって欲しくないところが変わってしまったのは痛いところでもあるんだが。

「ともかく、研究所を潰しているってことはまだ実験の中断は諦めていないはずだよ。最悪、私のところにも来るかもしれない。警戒しておいて損はしないよ」

私がそう締めくくると、フレンダはこくりと頷いた。

さぁて、とりあえず今日は御坂の動向をモニタリングしつつ、家に帰るとするか。明日は『絶対能力進化計画（レベル6シフト）計画』後半戦。最悪一方通行（アクセラレータ）との戦いに巻き込まれないように、剥離要素（エラーポイント）と戦闘、か……。面倒ではあるが、私の平穏の為にもやるしかない、か。

07（後書き）

次回は高確率で上条視点三人称となります。

08（前書き）

今回は全編に渡って上条視点三人称です

08

side other

八月二一日。

この日も結局上条は補習に明け暮れ、帰る頃には既に日が暮れてしまっていた。

「補習は明日で終わり……っつーか夏休みが八月二二日スタートって……、不幸だ……」

自分の好き勝手首を突っ込んだ上での結果なので、人はこれを『不幸』ではなく『自業自得』という。

「しっかも終バス逃したし……。ったく、小萌先生もこんな遅くまでやらずに終バス乗れるように時間調節してくれたっていいだろうに。なんという不幸具合……」

絶望に打ちひしがれながら溜息をついた上条は、そこで街道を走る車の走行音（学園都市製なのでほぼ無音だが）の他に、カラカラという何かが回るような音に気がついた。顔を上げると、風が吹いている訳でもないのに風力発電のプロペラが乾いた音を立てて回転していた。

「んー？　あれ、上条くんか。最近よく会うねー」

最近よく聞く声を聞いた上条は、プロペラを見るために上げていた視線を下ろす。そこには、猫を抱きかかえている小豆とゴーグル

をつけた御坂妹の姿があった。小豆は髪を下ろし、服装も普段の薄緑色の丈の短いワンピースと足のラインがはっきり分かるジーンズではなく、いつか見た高級そうな真っ白いワンピースと同系色の帽子を身に纏っていた。

そんな格好で猫を抱えて、毛とか大丈夫なんだろうか、と上条は考えるが、ぶるじょわじぃだから問題ないんだろうと考え直した。

「おう、親船と御坂妹じゃんか。こんな遅くにどしたん？」

ごく普通に上条が歩いているから忘れがちだが、現在時刻は午後七時近い。八月だからまだ夕暮れ程度だが、もうあと十数分もしたら真っ暗闇である。小豆のようなお嬢様がこんな時間までぶらついているのはいささか不自然だし、そもそも御坂妹に至っては門限があるだろう。

「うん。ちょっと『おうちの事情』で外に出てたんだけどね、」

そういって、小豆は身体を軽く振ってスカートの裾を揺らす。……確かに、普段はもう少し親しみやすい感じの服装だった。こんな風におめかししているということは、親船家の事情か何かで外出していた、ということなのだろう、と上条は適当に考える。

「その帰りに丁度妹さんと会ってね、なにやら猫を前に色々悩んでるみたいだったから、一緒に飼い主探してあげよーかって」

「……って、親船んちは駄目なのか？　結構広い家だったような気がするけど」

「んー……、駄目って訳じゃないんだけど、私はちょっと世話できるほど暇じゃないし、お手伝いさんの仕事も増やしたくないからそれは最後の手段かなー」

小豆は猫に頬を摺り寄せながら適当そうに答え、御坂妹に視線を寄せる。

「……ですが、これで引き受け先は見つかったのでは？　と御坂は例のツンツン頭に期待を込めた視線を送りつつ親船さんに問いかけます」

「うんうん。大体上条君は頼まれたら断れない性分だからね。最初は嫌がるだろうけど、グイグイ押していけばきっと勝手に折れるよ」

「オイオイオイオイ、テメェら何勝手なこと言ってやがんだ！？上条さんはそこまでお人好しじゃないでございますよ！？」

勝手に話を進めるお嬢と妹に、上条は思わず目を剥きながらもツッコミを入れる。御坂妹は本気だったのかしょぼんと落ち込んでいた様子だったが、小豆の方はぺろりと舌を出してあっさりと引いた。……御坂妹も含めてからかわれただけか、と上条は少し悔しい思いをする。

「……そうだっ！　名前、その黒猫名前決めてんの！？」

まんまと小豆の術中にはまった上条は、落ち込んでいる御坂妹のこともあってどことなく居心地の悪い空気を打破すべく、無理やりな方向転換を図る。しかし、純情っぽい御坂妹はそんな無理やりな方向転換にも簡単に引っかかってしまう。

「……それでは、この猫の名前は『いぬ』にしましょう、とミサカはどや顔で宣言します。……『猫』なのに、犬。……ミサカの持ちネタです」

にたり、と無表情なせいかどこか陰のある笑い方が怖い御坂妹である。

「お馬鹿っ！　もうどこから突っ込めばいいのか分かんねえけどとりあえずお馬鹿っ！！仮にも生き物なんだから、そんなゲームかなんかで気に入らないステータスが出たらすぐ消去するような奴に名づけるみたいな適当なのじゃなくてさっ！！」

即座に常識的なツッコミを入れる上条に、御坂妹は少しだけぽかんとした表情を浮かべる。やがて、指を顎に当てて視線を落とし黙考し始めた。これならまともな名前が出てくるだろう、と満足げに頷きつつ御坂妹の回答を待つ上条。しばし考えていた御坂妹は、どこか晴れやかな、それでいてやっぱりどや顔でこう宣言した。

「……では、シュレディンガーと、」

「ちょっと考えた結果がそれかよ！！」

直後、上条はツッコミの極地に到達した。がおー！！　と気炎を吐く上条に、御坂は無表情ながら雰囲気だけで呆れた表情を表現するという高等スキルを発揮しつつ、

「……まったくもう、さっきから難癖ばかりつけて一体何なんですか、とミサカはツッコミとイチャモンを混同したツンツン頭に辟易します」

「オーケー分かったテメェには上条さん説教スペシャルを単行本一冊分くらい食らわせてやるそこに直れいッッッ！！」

＊＊＊

怒りが臨界点を超えて鬼神と化した上条を小豆が宥める間に空の色はオレンジから紫に変わっていた。とりあえず落ち着きを取り戻した上条は、小豆と御坂妹の話し声を背中で聞きつつ歩いている。

小豆は、怒り狂う上条に代わって非常識すぎる御坂妹に一般常識並みの『名前』に関する知識を教えているのだった。

背中越しの小豆が言う。

「えっとね、とりあえず、『名前』っていうのは生き物っていうか、人間の文化にとって重要な役割を持つ訳なんだよ。単に個体識別っていう訳でもなくて、親がその子にどういう風に育って欲しいかっていうイメージを、名前に授けたりするの。あと、画数によって縁起が良いとか悪いとかっていう話もあるね」

まあ、これは迷信だろうけど。と付け加える小豆に、上条は『この場にインデックスがいなくてよかった』と思う。あの銀髪シスターなら、此処で画数の魔術的意味とそのご利益について語り始めるかもしれない、……というのは流石に上条の考え過ぎだが。

「……最近は語感第一とか格好良さとかで選ぶ人もいるけど、そういう人も『子供に格好良い名前をあげたい』とか『呼びやすいことから親しまれて欲しい』みたいに、基本的に子供のことを考えて名付けてたりするんだよ」

そういえば、『小豆』って言う名前も結構珍しいよなー、と上条は思う。語感第一の命名なのか、それとも『小豆』という単語に何

か深い意味があるのか、ただの高校生で漢字に特別強いわけでもない上条には分からない。

御坂妹もそんな『語感第一で選ばれてそうな名前の代表格』っぽい小豆が話すことだからか、何となく納得した様子で頷く。

「……なるほど、それは興味深い話です、とミサカは何度も頷きます」

そんな御坂妹に、『そういえば御坂妹の名前って何だったんだっけ？』と考える上条だが、それについては先日聞いた瞬間に立ち去られるという事態を引き起こした禁句ワード（疑惑）なのでスルーすることにした。女心は分からない上条だが、人並みに相手の心を理解する能力は備えているのである。

「で、さっきから上条君どっちに向かってるの？　こっちは寮じゃないけど」

そんな訳でさっきから無言な上条の横に歩きよりながら、猫を抱いた小豆が問いかける。すぐ隣を張り付くように歩いている御坂妹の姿がいじらしい。彼女は本当は猫に頬ずりしたいのに、何らかの理由で“撫で回し欲”を抑えているようだった。

「ん？　ああ、寄り道だな。ちょっと欲しい本があってな」

「それなら、先ほどの曲がり道を曲がったほうが近かったですが、とミサカは親指を立てて後ろを指し示します」

「ああいや、そっちは新書が並んでる本屋（トコ）だろ。俺が目指してるのは古本屋。

猫の飼い方に古いも新しいもないだろ？　そのくらい上条さんの懐事情は相当切迫しているのですよ……」

そんなことを言って、上条は目から血涙を流す勢いで呟く。実は上条、インデックスに正しい猫の飼い方を教授すべく猫の飼育本を立ち読みしようとしていたのだった。

古本屋ならば比較的容易に立ち読みすることが出来る。そうして得た知識をインデックスに伝えることで、経費をゼロに抑えようというのだ。一昔前にはお金のない学生が古本屋でゲームの攻略本を読みふけるという光景が結構見られた現代日本だが、上条は科学の最先端の街にあってそれと同レベルのことをしようとしていたのだった。

そんな上条の様子に、小豆はかわいそうなものを見る目になりながら言う。

「……、上条くん、……本、買ってあげよっか？」

「ッ！！！」

突如聞こえた天使の囁きに、上条はいつの間にか伏せていた顔をぱっと上げた。

「……今、なんと？」

「……いや、だから猫の飼い方のハウツー本、買ってあげよっか？　って。多分インデックスちゃん、言われただけじゃ理解できなさそうだし……」

「確かにそりゃそうだが……、っていやいやいや！！　流石にそれは申し訳なさ過ぎる！　それじゃ完全にヒモじゃねえか俺！！」

正確に言うと交際してる訳じゃないのでヒモとはいえないのだが、女の子に当たり前のように物を買ってもらうのは上条の矜持的には許容できなかった。

「いーよいーよ。古本って言ったら精精五〇〇円かそこらでしょ？　そのくらいだったら私の懐も痛まないし。それに、スフィンクスくんが死んじゃったら、私もちょっと悲しいからね……」
「私もそれが良いと思います、とミサカは自分の懐が痛まないのをいいことに思い切った意見を言います」

二人の言葉に、上条は少しだけ黙った。
瞬間、時が止まる。
そして次の瞬間には、上条の両隣には古代ヨーロッパっぽい簡素な布を纏ったエンジェル上条と、下半身が真っ黒い毛で覆われたデビル上条が現れていた。
まずエンジェル上条が言う。

『――仕方ねえだろうが！！　こうするしかなかったんだよ！　男として女の子から当然のように物をもらうなんて、できるわけねえだろうが！！テメェだってそうだろ！？　確かにタダで本をもらうのは懐に嬉しい、でも、そんなことできるわけねえじゃねえか！！』

拳を握って叫ぶエンジェル上条に、デビル上条は小さく歯を食いしばった。

『……ふざけんなよ』

デビル上条の呟きに、エンジェル上条が凍りつく。

『ああそうだよ！！　みっともねえよ！！　だが、それがどうしたって言うんだよ！！　そんなつまんねえ事情で、俺の懐が少しでも暖まる機会を潰せっていうのかよ！！　俺には、小難しい矜持なんかわかんねえ。でもな、テメェが俺の身近な懐のことをどうでも良いって言うんなら……、――――まずはそのふざけた幻想をぶち殺

す！！』

パキィン、という音が響き、上条の精神空間は終了した。

結論は、出た。

そして、上条は立ち止まる。

視線を上げた先には、『ＢＯＯＫ　ＯＮ』と書かれた看板のかかった古本屋があった。二人の少女の方へ振り返った上条は言う。

「――――頼むぜ親船。お前のお金（チカラ）を貸してくれ」

無駄にキリッと決めた上条は、そう言って颯爽と古本屋の中に入っていった。

＊＊＊

「……一応乗ってみたけど、あれで良かったの？」

空調の利いた店内に入るなり上条の横に並んだ小豆は、怪訝そうな表情で上条に問いかける。彼女の腕の中には猫はいない。猫は先ほど小豆が無理に御坂妹に押し付けたため、今は御坂妹と一緒に古本屋の前でお留守番である。

「ん？　あー、むしろアレで良いだろ。アイツ、どういう訳か分かんないけど猫好きのくせに猫を触るの遠慮してたみたいだしさ。良い機会だと思うよ」
「……、それ、多分ＡＩＭ拡散力場のせいだと思うけど」
ふふん、と得意げに鼻を鳴らす上条に、小豆は普段の眠たげな眼差しをさらにジト目に変えながら呟いた。えーあいえむ？　と首を傾げる上条。そんな上条に、『まあ、知らなくても無理はないね』と前置きして小豆は言う。
「要するに妹さんの身体からは微弱な磁場が形成されてる、ってことだよ」
「……ああ、地震の前触れんときみたいにか。それでアイツは動物に嫌われやすい、って訳か」
「そう言うとそこはかとなく嫌がりそうだけどね。そういう訳で、妹さんは猫が好きなのに猫からは避けられちゃう、っていう難儀な体質なんだよ」
ほうほう、と適当に頷きながら、上条は猫の飼育本を手に取り、その隣においてあった本に唖然とした。『猫の飼い方』と書かれた背表紙の隣には、『美味しい牛肉の調理法』とかいうタイトルの本が挿してあったのだ。
「……流石に、これはどうなんだろうね」
「……学園都市ってさ、たまにこういう所あるよな」
特に何がどうとは言わず、上条と小豆の二人は頷き合う。科学偏重な傾向のためか、学園都市の公共施設や量販店などはたまにこうした『消費者の細かい感情の機微』を度外視したことがある。

上条は『外』のことは詳しく分からないが、なんとなく『「外」なら動物の飼い方と料理本はバラバラに分類されてるだろうな』と思う。でもまあ、学園都市ではこんなこと日常茶飯事である。別に何か問題があるわけでもないし、というわけで上条は適当に猫の飼育本を脇に抱えた。

「……あれ？　上条君、本の中身確認しないの？」

「ん？　いや、親船が買ってくれるなら、わざわざ立ち読みする必要もないかなって。表に御坂妹を待たしてるし、あんまり遅くなるのは悪いだろ」

きょとんとしながら返す上条に、小豆はしばしぽかんとして、それから俯いた。何か間違ったことを言っただろうか？　と首を傾げる上条に、小豆は静かに顔を上げる。

「……上条君、それ、典型的な『騙されやすい消費者』だよ」

「なっ……！？」

いきなりの宣告に、上条は思わず息を呑んだ。

「よく考えてもみなよ。一口に『猫の飼い方』って言っても、猫にはたくさんの種類がある。そりゃ、確かに大まかなところは同じかもしれないよ？　でも、例えばロシアンブルーと三毛猫だと種としての性格だって違うし、毛の生え方だって細かいところは異なるから、もしかしたら上条くんの望む情報はないかもしれない。それだと、たとえ出費がないとしても困るでしょ？　下手に半端な知識を振りかざす危険性だってあるんだし、もっと慎重になるべきだよ」

「……な、なるほど……」

そういわれてみれば、確かにその通りだ。と上条は小豆の言うこ

とを鵜呑みにして懐にしまいかけた本を開いて読んでみる。

「……うわっ！　何だコレ！　『猫と接する上で必要な心構え』とかは書いてあるけど肝心の習性とか必要な器具について何の説明もねえ！　危ねえ危ねえ……。このまま買ってたら家で非常に不幸なことになるところだった……」

ほっ、とため息をつきながら上条は『猫の飼い方』を元の棚に戻すと、静かに小豆に目配せする。小豆は上条の目配せに頷くと、踵を返して上条から離れた。

「……手分けして、よさげな本を探そう」

＊＊＊

「……ん？」

紙袋をかかえ、傍らに小豆を携えた上条は既に暗くなりつつある夕暮れの下で首を傾げた。先ほど黒猫を抱えて不機嫌そうな雰囲気を放ちまくっていた御坂妹が忽然と消えているのだ。それも、猫を置いて。

「……怒って帰っちゃったのかな？」

猫を抱え上げた小豆が心配そうに呟くが、上条は『それはない』と確信できた。何だかんだ言って御坂妹は相当の猫好きである。口では嫌だとか言っていても、猫と存分に触れ合える機会があれば手放すことはない。まして、子猫を放置するなんていう無責任な行動などとれるはずもなかった。

「……トイレか？」

上条は呟くと、改めてあたりを見渡してみる。

夕暮れの商店街には何の異変もなかった。風力発電のプロペラは相変わらずカラカラ回っているし、路地には夏なのに葉っぱが落ちているし、女の子のものと思わしき革靴（ローファ）も片方落ちている――、

「……革靴（ローファ）！？」

あまりに自然に転がっていたため一瞬流しかけたが、そこはおかしかった。通常の生活で、革靴が転がっているような情景など見るはずがない。それに、あの靴はついさっき御坂妹が履いていたものと同種ではないか？

「……上条くん」

得体の知れない不安に襲われる上条と同じように、小豆も同じ感覚に襲われているようだった。上条は小豆の言いたいことを何となく悟ると、頷いて小走りで革靴のところまで向かう。拾ってみると、革靴はまだ汚れているわけでもなく、中からは若干の温度が感じられた。まだ、これを履いていた人間は近くにいる、ということである。

上条は迷わず路地の中を見た。しかし、夕暮れの路地は既に太陽から遮断されており、中は闇。ちょっと目を凝らした程度では何かが見えるはずもなかった。

「……、」

上条は、後ろに小豆がいることも忘れて路地の中に踏み出す。暗闇の中に入った瞬間、内臓にツララを突き込まれたような得体の知れない恐怖を上条は感じた。

かん、と上条は自分が何かを蹴飛ばしたことに気が付いた。視線を下ろしてみると、そこには金色……というよりは銅に近い、金属の筒があった。薬莢、だった。そういえば、先ほどから火薬の匂いのようなものもする。

おかしいじゃないか、と上条は思った。これでは……これではまるで、此処で銃撃戦か何かが起こった後みたいじゃないか、と――。

「かっ、上条、くん、あ、れ……」

小豆が上条の腕にしがみつく。普段なら『役得だ』と思う上条だが、今は小豆というただ一人の人間の恐怖が伝播するような錯覚しかなかった。小豆の指差すほうを見てみると、そこにはプラスチックのような、硬質で軽そうな材質の破片とバネみたいな、オモチャの部品じみたものが転がっていた。

……いや違う、と上条は思った。小豆が言ってるのはそこではない。彼女の真に指差している方には、足があった。二本の、女の子の足だ。何故か靴は両方なく、上条には見覚えのある白いルーズソックスを履いている。

そう、上条はあのルーズソックスに見覚えがある。ついさっきまで、こんなルーズソックスを履いた少女と、笑顔でふざけあってい

たではないか。足から先は闇に呑み込まれたように見えなかったが、上条には奇妙な確信があった。

「み、さ……か……？」

言いながら、上条は力ない足取りで少女の足の方へ近づいていく。腕に抱きついた状態の小豆が少しだけその動きに抵抗するが、構わず進むと抵抗もなくなった。

自分の呟きに、上条は心の中で『ふざけるな』と吐き捨てた。あれが、御坂妹な訳がない。そんなの絶対有り得ない、と。本当はそう考えていること自体が、上条の脳内を支配している思考を示しているようなものなのだが、彼はそれに気付けない。

果たして、近づいたことによって晴れた闇の先には、ひとつの死体があった。

その死体は、――顔面こそ真っ赤に吹き飛んでいるが――紛れもなく、数分前まで『御坂妹』と呼ばれていた『物』だった。

＊＊＊

「ひ、ぁ、あああ……！！」

腕を圧迫していた力がなくなったことで、上条は我に帰った。隣を見てみると、目を極限まで開いている小豆が力なくへたり込んでいた。

不謹慎だとは知りながら、上条は心の中で小豆に感謝した。

人は、自分以外にパニックに陥っている人間がいると不思議と冷静になれるものである。目の前の惨状を見てしまった上条は、今小豆がへたり込んでいなかったらその場で食べていたものを吐き出していたことだろう。

ついさっきまで笑いあっていた友達の、死体を見て。

「……警備員（アンチスキル）」

冷静さを取り戻したとはいえ、上条もパニックの極地に立っている。しばし呆然としていた上条だったが、急にはっとするとそう呟いた。御坂妹は、上条と小豆が本を物色していたたったの一〇分以内の間にこんな姿になった。なら、まだこの近くには御坂妹をこうした犯人がいるかもしれない。

「親船、ほら、親船！　しっかりしろ！！」

上条は未だにへたりこんでいる小豆の腕を引っ張ってみるが、腰が抜けているのか、小豆の反応は薄い。仕方がなく上条が腋の下に手を入れて抱え上げようとすると、小豆はそれを手で制して自らふらふらと立ち上がった。

「警備員（アンチスキル）を呼ぶぞ。此処は危ない。一旦別の場所に移ろう」

「……うん」

いいながら、上条はこんなに冷静に指示を出せる自分が怖くなっ

た。自分は、御坂妹のことなど何とも思っていなかったのか？　目の前の小豆のように、ショックで、何もいえなくなるのが普通じゃないのか？　と。

「……くそ！　圏外だ！」

携帯を操作していた上条だが、通話が出来ないことを悟ると思わず携帯を地面に投げつけかけた。寸でのところで思いとどまり、電波を回復させるためにも路地裏から出ようと歩く。今度は、小豆もしっかりついてきた。

古本屋の前まで来ると、上条は電波状況をもう一度見てして通話が可能なことを確認すると、一一九とボタンを押して救急車を呼んだ。不思議と、最後まで冷静に、淡々と状況を説明することが出来た。多分、親船が隣にいたから見栄を張ってたんだろう、と上条は思う。

「……、」

上条は自分の携帯電話に視線を落とし、それから小豆の方を見た。上条の携帯電話の電話帳には、御坂美琴という名前はない。妹が死んでしまった以上、美琴にも連絡すべきところなのだろうが、生憎と上条は美琴に連絡する術などなかった。

「……親船、携帯」

上条は、自分の発言が言葉足らずになっていることを自覚していた。なんと言うか、上手く舌が回らないのだ。御坂妹の死を目の前にして、平然と言葉を口にしている自分への嫌悪からかもしれない。

「……ごめん。私も、御坂さんの番号は分かんない」

しかし、小豆はそれでも上条の言いたいことを理解してくれた。

そっか、と言い返すと、上条は静かに空を仰ぎ見た。

空は既に紫を越え、黒に染まりつつあった。

しばらくそうしていると、ザッザッという音をたてて武装を固めに固めた警備員（アンチスキル）がやってきた。憔悴しきった表情の二人組がいたからだろうか、警備員（アンチスキル）は上条たちにすぐ気がついた。

「君たちが、通報してくれた人たちだね？」

警備員（アンチスキル）は宵闇に溶けるように黒いヘルメットと特殊繊維性のスーツを纏っていた。けが人の救助というよりは、凶悪犯の拿捕を目的にしていそうな格好だった。

「……あの。俺、確か救急車を呼んだと思うんですけど」

「ああ、事件性がある場合には自然と警備員（こちら）にも連絡は行くんだね。今回の場合はこっちの方が早くついたんだろうね」

警備員（アンチスキル）はそう言って一瞬路地の闇の中を見て、

「それで、『現場』の路地というのはこっちで合っているね？　これからそっちに向かうんだけど、まだそれを『やった』能力者が潜伏している可能性があるんだね。だから、できれば少しだけでもいいから『現場』の状況を教えて欲しいんだけど……大丈夫かな？」

「人が、一人死んでます」

答えたのは上条ではなく、小豆だった。上条は思わず小豆の横顔

を見るが、小豆は上条の方に見向きさえせずに口を開いた。

「体中から血を流していて、普通の凶器じゃできなさそうな怪我をしてました。多分、服の中まであんな感じです。血管を吹き飛ばしたりしない限り……あんな感じには、ならないんじゃないかと思います。多分、何かの『能力』です」

顔を真っ青にさせながら、小豆は事細かに状況を説明する。自然と、小豆は口を覆っていた。

「それで、それで、……怪我が、顔……顔が……ううううう！」

一番酷かった顔の怪我について話そうとしたところで、小豆は頭を抱えて唸りだした。そんな小豆に、警備員（アンチスキル）は首を振る。

「……分かった。もういいよ。辛いことを思い出させてすまなかったね」

「……、その子、私達の友達だったんです。昨日初めて会っただけの関係だったけど、すごくいい子で、優しくて。……なのに、どうして……」

小豆はそういうと、力なく項垂れた。どう感情を発露すればいいのかわからない、といった調子だった。そんな小豆の言葉に、上条は右手を握り締めることしかできない。

「……本来なら、発見者に同行してもらいたいところだけど……、……いや、すまないね。忘れてくれていいよ。流石に、こんな状態の子供たちをこれ以上追い詰めるような真似は、僕の矜持に反するからね」

「いや、行きます」

そんな警備員（アンチスキル）に、上条は毅然とした態度で答えた。言いたいことは、吐き出したい弱音は、小豆が全て吐き出してくれた。ならば、自分は全てに向き合うまでだ。何より、これ以上逃げ続けるのは、上条の中の何かが許せなかった。

「……君は、どうする？　僕としては、君は帰ったほうがいいと思うけどね。ほかの警備員（アンチスキル）が送ってくれるはずだしね」

「……はぃ」

小豆は、消え入りそうな声で警備員（アンチスキル）の提案を受け入れた。上条も、小豆の方を眺めはしなかったがそれでいいと思っていた。小豆は、上条ほど強くない。これ以上は、本当に危険だ。単純な身に迫る危険としての意味ではなく、心の問題で。

「……、上条君。御坂さんを、信じてあげてね」

警備員（アンチスキル）に連れられて上条から離れていく小豆は、最後にそう付け加えた。上条は意味が分からなかったが、とりあえず頷いて闇の奥へと歩を進めた。

とはいえ、上条だって『あの光景』をもう一度見るのは嫌だった。複数の大人に囲まれていることで、先ほどのような心細さを感じることはないだろうが、それでも。

しかし、路地に踏み出して一歩目で上条は違和感を覚えた。革靴（ローファ）が消えている。

上条は、路地の入り口とその奥に御坂妹のものと思わしき革靴（ローファ）が転がっているのを確かに見た。小豆もいたのだ。間違いない。後ろを振り返る。確かに、路地の入り口には革靴（ローファ）が転がっていた。上条

は混乱した。

（な、んだ？　一体……、この、言葉にできない不安感は、なんだ？　何か、重大なモノが掻き消えてるようなこの違和感は……、）

しかし、上条の前を歩く警備員（アンチスキル）は止まらない。歩いていくうちに、あるはずだったものが消えているのが分かってきた。薬莢がない。血がない。革靴がない。プラスチックの破片やバネもなくなっている。

そして――、

御坂妹の死体も、なくなっていた。

「う。ぁ、え！？」

上条は思わず、先導していた警備員（アンチスキル）の脇を通って御坂妹の死体があった場所まで走っていた。

「ど、どうしたんだい？　何か、あったのかな？」

「ちが、でも、え……、……ない。ないんです、此処に、確かにあったはずなんですけど」

呆然とあたりを見渡しながら、上条は呟くようにそういった。

警備員（アンチスキル）も、ヘルメットの下で信じられなさそうな表情を浮かべていた。それでも、上条の言っていることを嘘だと思わないのは、小豆の行動ゆえか。

「うそじゃ、嘘じゃないんです！　本当に、此処に、御坂妹が……、……ッ！！」

腕を振り回すようにして警備員（アンチスキル）の方へ向き直った上条は、必死な表情をふと笑みの形に歪めた。警備員（アンチスキル）達の表情に陰りが生まれる。彼らのうちの何人かは、今の上条のような状態を知っている。

「――――、ハハ。何言ってんだろ、俺。違うじゃねえか、此処に御坂妹の死体なんかなくて、全部俺と親船の作り話だったんなら、それが一番良い結末に決まってるじゃねえか」

力なく笑いながら、上条はビルの壁にもたれかかった。そこは、警備員（アンチスキル）が来る前に御坂妹が仰向けで倒れていた位置だった。

「何なんだ、何なんだよ！　俺は御坂妹に死んでて欲しかったのか！？　さっきから、親船はあんなに悲しんでたのに、動揺してたのに！！　俺は、俺は……ッ！！　くそ、なんにも感じてなかったっていうのかよ！？　俺は、こんな冷たい人間だったのかよ！！？」

頭の中に流れ込んでくる情報が、あまりにも多過ぎた。御坂妹の目も当てられない死に様。あそこで、本来なら上条はひとまず自分の悪感情を吐き出しているはずだった。しかし、小豆がいたから中途半端に押し留まってしまい、悪感情はその身の中に潜んでしまう。その後も、小豆が弱音を吐いていたから、上条自身も吐き出した気になっていたのだ。その実、強い負の感情を抱え込んだまま。

そして、此処に来てそれが暴発した。

何のことはない。記憶を失ってまで見ず知らずのシスターを助け、右腕を切り飛ばされながらも二人の少女を救い、神話の世界に住んでいるような吸血鬼と拳を交える上条だって、根っこはただの高校生なのだから。

「……それは違うね」

警備員（アンチスキル）は、そんな壊れかけの少年の肩を掴み、優しく立ち上がらせた。

「僕たちだってプロなんだ。それなりに子供達の嘘を見極める目だって持ってるね。……残酷なことを言うようだけど、――おそらく君の友人は確かに此処で死んでいるね」

「……、」

断言されて、上条は頭が真っ白になった。

御坂妹は、死んでいる。

たった二日程度の付き合いだったが、毒舌で、生意気で、無愛想で、でも可愛げがあって、猫好きで――……そんな、妙に人間臭い友達が、死んだという事実。

「ぐぶ……、」

その事実を正しく認識した時、上条は腹の中から何かがこみ上げてくる思いを感じた。まるで、それは呑み込んだ事実を拒絶するために吐き出そうとしているかのような働きだった。しかし、寸前で口を手で押さえることによりそれを防ぐ。

（……ダメだ、吐き出したら、ダメだ。これは、きっと吐き出しちゃいけない気持ちなんだ）

御坂妹は、死んだ。その事実に一番目を逸らしてはいけないのは、多分ほかでもない上条自身なのだから。

「……、探さなくちゃ」

上条はそういうと、身体の向きを闇の奥の方に向けた。

「……？　何を、」

「……すみません、でも俺……、やっぱりここで止まってるのは納得いかないんです！！」

制止する警備員（アンチスキル）を振り切って、上条は走った。この狭い路地では、重装備の警備員（アンチスキル）は却って身動きが取りづらい。その隙に、上条はさっさと走り進んでいく。

走っていると、やがて道はT字型に分かれた。左は大通りに繋がっているのか明るいが、右は暗闇の中に埋もれていた。上条は迷わず、体を右に曲げる。なぜか、左の道を行くなんて考えられなかった。

少し幅の広がった道を走り、酒瓶や放置自転車などの隙間をくぐり、得体の知れない汚物やらの粘液に覆われた上を進む上条は、やがてその先の闇に少女の姿を見た。

（……女の子……？）

そこまで考えて、上条は気がつく。今まで自分が走ってきた粘液には、女の子のサイズと思わしき靴跡がついていたことに。それだけじゃない。闇の先の女の子は、肩に『何か』を抱えていた。その『何か』は少女の身長と同じくらいの長さがあり、彼女の肩を機転に生々しく折れ曲がっていた。

上条は思う。これではまるで――、

（まるで、アイツが御坂妹の死体を抱えてるみたいじゃ、ないか）

そう考えた瞬間、上条は自分の顔から血の気が引くのを感じた。
だとしたら、あの少女は御坂妹を殺した犯人である可能性が高い。人をあんな風に殺すことができる力も、それを使うことができる精神も、上条にとっては途轍もなく恐ろしいものだった。

（それでも、止まる訳には、いかねぇ！）

上条は意を決すると、力強くもう一歩を踏み出した。闇が引き裂かれるように、少女の素顔が露になった。

そこには、御坂妹がいた。

「は、」

上条は思わず、言葉を失った。一瞬、自分が見たものが何なのかすらわからなかった。目の前にある事態を認識すると、呆けた表情の上条はゆっくりとその表情に力を戻していった。

「……お前、『誰』だよ」

あらゆる幻想を打ち消す右手を握り締めながら、上条は言う。御坂妹は、間違いなく死んでいた。小豆もいたのだ。いまさらそっくりな人間が現れたところで、それを信用できるはずもない。『姉』、という言葉が、上条の脳裏をよぎった。小豆の話では、美琴と御坂妹は同一人物なんじゃないかと思うくらいそっくりらしい。

御坂妹にそっくりな少女は、剣呑な声色の上条に、彼が見慣れたように小生意気な動作で首を振り、

「……何を言ってるのでしょう。忘れてしまいましたか？　先ほどまで一緒にいたはずですが」

その語り口が、あまりにも先ほどの御坂妹と同じすぎて、上条は思わず凍りついた。

「しかしまあ、貴方がそうなってしまうのも無理はありませんね。申し訳ありません。『作業』を終えたら、すぐにでもそちらに戻る予定だったのですが、とミサカは素直に謝罪します」

お前、と上条はつぶやきかけて、それ以上を言葉にできなかった。目の前の少女は、どこまでも『御坂妹』だった。これが偽者だなんて、上条にはどうしても思えなかった。

「生きて、たのか。ハハ、そうだよな。普通の人が、あんなところで無残に死んでるわけねえもんな。いったい俺は何を考えてたんだか。そうだ、悪い御坂妹。俺、変な勘違いしててさ。お前が大変な目に遭ってると思ってたんだ。もうすぐ警備員（アンチスキル）が来るから、悪いけど一緒にきて事情説明してくんないかな。……ああそうだ、小豆の方にも連絡しねえと、」

「……何を言ってるのか理解できませんが、」

慌ててまくしたてる上条に、御坂妹は不可解そうに首をかしげる。無表情だがなんとなく感情がわかる、そんな御坂妹の相変わらずな様子に、上条は安堵する。そんな上条の言葉をさえぎって、御坂妹は本当に不可解そうに、それでいて日常を話すような自然さで答えた。

「あなたの見た光景はすべて真実ですが、とミサカは至極当然のことを口にします」

今度こそ、上条は言葉を失った。

08（後書き）

次回も、たぶんその次も上条視点三人称です

09

side other

どこまでも真っ暗な路地裏。上条当麻は、そこで呆然としながらも今起こっていたことを思い出していた。

『あなたの見た光景はすべて真実ですが、とミサカは至極当然のことを口にします』

上条がよく知る、小生意気だが、どこか可愛げのあるその少女の口からは、上条の全く知らない『非日常』が飛び出す。

『……？　おや、こんなところに来ていたから、実験の関係者かと思ったのですが、どうやらミサカの思い違いだったようです、とミサカは自分の失敗を認めます』

目の前にいるはずなのに、まるで存在する『世界』が違うみたいに、手を伸ばしても触れられないんじゃないかと錯覚するくらいに『遠い』御坂妹。

『……何だよ、それ』

やがて彼女の肩の上の寝袋を思い出した上条が強張った声色で聞くと、御坂妹はあくまで日常のような穏やかさを称え、

『その寝袋に入っているのは、妹達（シスターズ）ですよ、とミサカは答えます』

しかし答えたのは背後からの声だった。弾かれる様に振り向いた上条の目の前には、先ほどまで見ていた御坂妹と全く同じ外見の少女がたたずんでいた。

『無用な心配をさせてしまったようで申し訳ありませんと、』『しかし貴方もずいぶん勇気がおありなのですね、』『猫の飼い主は結局親船さんで決定したのでしょうか、』『あの方なら安心して猫を任せられそうです』『名前がつけられなかったのは残念ですが、』『警備員（アンチスキル）への通報は「上層部」が隠蔽してくれるそうです』『正確には実働部隊もミサカのうちの誰かなんですけどね、と、』『ネタバレしてしまいますと、ここにいるすべてのミサカは個体が違うだけで本質は同じミサカであります、と、』『ちなみに、符丁（パス）を解読（デコード）できない貴方に実験の機密情報を教えることはできません、とミサカは断りを入れます』

上条は後ずさった。たぶん、自分の悟ったことを認めたくなかったのだろう。そして数秒ほど考え込んだ上条は、たぶんすべてを理解した。

『お、お前、ら、まさ、か……』

『ええ、たぶん貴方の考えている通りです、とミサカは頷きます』

言葉を失った上条を前に、御坂妹は眉一つ動かさずに続ける。

『ミサカ達は学園都市で七人しか存在しない超能力者（レベル5）、お姉様（オリジナル）の量産軍用モデルとして作られた体細胞クローン群――妹達（シスターズ）です、とミサカは答えます。そしてご安心を。貴方が今日まで過ごしてきたのはこの個体、つまりミサカ一〇〇三二号です。親船さんにも早く教えて、安心させてあげてください、とミサカは助言します』

上条は、何も言えなかった。踵を返す御坂妹達を、妹達（シスターズ）を、ただ見送ることしかできなかった。目の前の少女のあり方が、今まで自分と同じ世界の住人だと思っていた少女があまりにも違いすぎて、遠すぎて、悲しすぎたから。

「……畜生、何なんだよ」

さまざまな思考がめぐりすぎて、目的や原因が絡まりすぎて、上条はどう結論を出せば良いのか分からなかった。小豆に全部話すとか、御坂妹のことは忘れて生活するとか、そんなことが霞の様に沸いては消えた。

（それに、『実験』……御坂妹は『実験』って言ってた。だから上層部がこの一件を隠蔽してるって）

全く方向性がはっきりしない思考の中で上条がそう考えたとき、上条は何か引っかかるものを感じた。

（……『実験』）

御坂妹は確かに『実験』と言った。ということは……、

（あいつらの背後には、何らかの研究機関がある？　そう考えれば、体細胞クローンなんて大仰な用語が出てくるのにも納得がいく。……『体細胞クローン』？）

そこまで考えて、上条はあることに気がついてしまった。

（『体細胞クローン』って、確か髪の毛や血とかから遺伝子を抜き取ってそこからクローンを作る方式だったよな……？　……そして、

あいつらは御坂美琴の体細胞クローンだって言ってた）

そう考えたとき、上条は既に走り出していた。

（……まさか、……まさか。その『御坂美琴』って奴は、この実験に何らかの形で関わってるんじゃないか？）

だとしたら……、そう考えて、上条はぞっとした。御坂美琴という人物は、この非人道的な実験を容認しているのか？　と。自分と全く同じ顔をした少女を……いや、そういう問題ではない。あんなにも人間味のある少女を殺すことを、是としているのか？　と。そういうレベルで、この実験はこの街で認められているのか？　と。

小豆に聞いた話では、上条と御坂美琴はまだ知り合って間もないという話だ。それだけでは、上条の知らない一面があるかもしれない。小豆に聞いただけの、薄っぺらな思い出話だけでは、上条は御坂美琴を完全に信じきることなんて出来ない。

（……、）

そこで、上条は思い出した。

『……、上条君。御坂さんを、信じてあげてね』

上条に、会った記憶もない人間を信じることなんて出来ない。

彼はただの高校生で、人の死を見ただけで腰を抜かしてしまうくらいどうしようもない程にただの高校生で、決して完全無欠の聖人なんかじゃないのだから。でも、たとえ上条がただの高校生だったとしても、ただの高校生なりに、自分の友人を信じることくらいはできる。自分の友人が『信じてほしい』と言える位の人物を、信じるくらいのことはできる。

（……そうじゃねえか）

そこまで考えが至ったところで、上条はふと笑ってしまった。そう、体細胞クローンは、髪の毛や血などから遺伝子を抜き取ってクローンを作る方式である。だが、逆に言ってしまえば、本人の了承をとらなくたってクローンは作れるのだ。

「そもそもこんな国際法を無視したような実験を平然とする連中が、クローン元の同意を得たりなんてするはずがねえだろ」

そう思ってしまえれば、上条にもう迷いなどなかった。

確かに、彼は人死にだけで腰を抜かしてしまうくらい、どうしようもないほどただの高校生だ。だが、それと同等に、……いや、それ以上に。彼は、引いてはならないところで引かない勇気というものを持っている。

＊＊＊

上条は、夜の繁華街を駆け抜けていた。

あてなんかない。

それでも、上条は走り続けた。あまり走りすぎたせいか、日は既

に落ちきり、あたりは既に闇に包まれていた。

だが、上条は走りながら自分の中から力がわきあがってくるのを感じていた。御坂妹がクローンだったとか、そんなちっぽけなことで動揺していた頃には感じられなかった力の奔流。

（もう、御坂妹がクローンだとか、実験だとか、そんなものはどうだっていい）

あの少女が、あの小生意気な少女の存在が、違いすぎて、遠すぎて、悲しすぎるはずなんかない。明確な理由なんてない。ただ、上条は御坂妹と笑いあうことができた。小豆と三人で仲良く道を歩くことが出来た。それだけでよかった。そんな、当たり前のことを当たり前にできるような少女の命が、奪われていいはずなんかなかった。

走りながら、上条は思う。

（今はただ、アイツの首根っこ掴んで上条さん説教スペシャルを単行本五冊分くらいは聞かせてやらねえと気が済まねえ！！）

とはいえ、何のあてもなく走ったって実験場になんか辿り着けなくて当然である。走っていれば自然と到着するなんてご都合主義はこの世界にはない。せめて、何か手がかりでも。例えば御坂美琴と会えたり――。

そのとき、走りながら上条はあることに気がついた。

（……？　さっきまで全力疾走してたから気づかなかったけど、あの風力発電のプロペラ、風もないのにカラカラ回ってる……？）

上条の視線の先には、学園都市では電柱代わりに立っていると言

ってもいいくらい乱立している風力発電のプロペラがあった。そこで思い至る。風力発電などの発電に使われているモーターには面白い法則があって、モーターに特定の電磁波を浴びせるとモーターを回転させることが出来るのだ。

風もないのにモーターが回転する。そこに上条は、今日最初に御坂妹や小豆と会ったときの光景を思い出した。あのときは何も感じなかったが、あのとき回転していた風力発電のプロペラは、御坂妹の発する電磁波に反応していたのではないか？

そして、周囲に誰もいないのにこんなにも無数のプロペラが回る、という状況。高位の電撃使い《エレクトロマスター》。上条の脳裏に『学園都市の第三位』という文字列が浮かび上がる。

「御坂……」

回転するプロペラの先に、何かがあるような気がして、上条は走る足の動きを速めた。

＊＊＊

すべてをあざ笑うように薄く延びた三日月の下で、上条は一人の少女を見つけた。御坂妹とそっくりのその少女は、薄い月明かりの

下で独り静かに深呼吸していた。

「……おい、御坂」

上条は、努めて『自分が彼女と初対面であることが悟られないように』自然な声色で声をかけてみた。しかし、状況が状況だ。どうしても声が強張って、低くなってしまう。美琴は、そんな上条にたった今気がついた様子で振り返った。

「……あれ、こんな遅くにどうしたのよ。いつも私が追い回さなきゃ、この時間には寮に帰ってんじゃないの？」

自然な声色だった。

美琴のことを一切知らない上条でも、それがニュートラルな彼女の対応なんだということが分かってしまうほどに、自然な声色だった。だが、

「――うるせぇよ」

上条には、なぜかそれが非常に不愉快に感じられた。美琴のことなんて一切知らないはずなのに、記憶の上では全く見ず知らずの人間のはずなのに、まるで上条の記憶以外のどこかが本来の美琴の姿を知っているかのように、今の美琴の姿が上条には受け入れられなかった。

本当なら、此処で御坂妹がどこで何をしているか聞くべきところだったはずなのにも関わらず、上条は感情的な言葉しか言えなかった。

「そんな御託はどうだって良いんだ。全部知ってる。お前の『妹』がどういう存在か、実験でどんな目に遭ってるか」

上条がそういった瞬間、確かに美琴の表情が揺れた。それはまるで、幼い子供が怯えた時のように脆い表情だった。しかし美琴はすぐにその表情を覆い隠すと、代わりに絶対零度の仮面を被る。

「……、そう。で、アンタはどうするっての？　私のことが許せないから、此処で叩き潰す？　その、訳の分からない能力で」

「……、」

「……、……ッ！」

ボロボロの虚勢で問いかける美琴に、上条は何も答えない。そんな上条に美琴の表情はグズグズと突き崩されていく。

「何とか、言えよッ！！」

バジッ！　と紫電が迸り、上条を襲う。上条はこれを右手で振り払うようにして消し飛ばした。

「……ハハ、それが答えだってのね」

美琴は無言のままに電撃を振り払った上条を見て、すべての絶望を凝縮したような表情でただ笑った。

「……叩き潰す、だと……」

そんな美琴の耳に、低い低い、唸り声のような言葉が聞こえた。虚を突かれて一瞬本当に無表情になった美琴に、上条は猛獣のように吼える。

「っざけんじゃねえぞ！！　今でもテメェのことを信じてるに決ま

ってるだろうが！！」
「……ッ！」
「ああそうだよ、認めてやる。俺は本当のクズ野郎だ。こんな奴のことを一瞬だって疑ったクズ野郎だよ。でも、違うんだ！　もう違う、はっきりと分かった。お前はあの実験に進んで関与してた訳じゃない。そいつが分かればもう十分だ」
「……、」
「お前はきっと、この実験をどうにかして止めようとしてる。そうだろ？　なら、手を取り合えるはずだ。なあ、みさ、」

バジッ！！　と、先ほどよりも強い紫電が上条と美琴を分かつ。

「……そうね、アンタはどっちかというと『そういう奴』だったわね。……でも、それなら尚の事ご退場願わないとね」

美琴は、微笑んでいた。心の底から嬉しそうに。
そう言って味方になってくれる人がいたというだけで心が救われたとでも言いたげに、ボロボロの、とても綺麗な笑みを浮かべていた。

「もう、無理なのよ。アンタには分からないと思うけど、どんなに実験を妨害したって無駄だったの。研究所を破壊したところでほかの施設に研究の成果は委託されて実験は終わらない。もう学園都市内部の実験可能な施設は全部潰したけど、今度は外部の協力機関に情報だけ引き継いで実験を続けるらしいわ」
「……、」
「『絶対能力進化計画（レベル6シフト）』」

美琴は歌でも歌うような調子で語り続ける。

「学園都市最強の超能力者（レベル5）、検体名一方通行（アクセラレータ）に二万人の妹達（シスターズ）を二万

通りの方法で殺害させることで、絶対能力者（レベル6）に到達させようとする計画」

「……、」

美琴の口から明かされた計画の全貌は、あまりにも上条の想像を絶するものだった。

「まさかアンタ、第一位を殺そうとか、そういうこと考えるタイプの人間じゃないでしょ？」

そして、美琴のそれに対する解決策もまた、上条の想像を絶するものだった。少なくとも、今までの短い間の会話では美琴は簡単に『人を殺す』などと口に出来る人間ではなかった。その美琴が、誰かのことを『殺す』と決心するまでに、一体どんなことがあったのか。上条にその気持ちは分からないが、

「……ああ。そうだな」

「……、」

「でも、駄目だ」

美琴をこのままにしてはいけないと、上条は自然に思うことが出来た。

「そんな方法じゃ、救われない」

「誰が、救われないってのよ。妹達（シスターズ）は全員救われるわ」

あんなに優しい笑みを浮かべられる少女が地獄の底に堕ちて行くのを、黙って見ていてはいけないと、上条は思うことが出来た。

「お前だ」

そう言う上条に、美琴は一瞬、本当に一瞬だけ意外そうな表情を浮かべた。それからその表情は苦虫を噛み潰したようなものに変わり、そして上条を睨み付ける。

「私が、救われない、ですって？　当然じゃない。救われていいはずがないじゃない。一万人の命を潰した張本人が、大悪人が、今更幸せな平穏の中に戻れるとでも思ってるの？　だとしたらアンタ、お人よしを通り越して相当のアホよ。自分の友達は救われなきゃ気が済まない偽善者とも言えるわね」

「……、」

「ほらほら、何もいえないの？　だったらそこをさっさと退きなさいよ。私にはやることがたくさんあるのよ。今この瞬間だって妹達（シスターズ）は殺されてるかもしれない。こんなところで、余計な時間を食ってる暇はない」

「……嫌だ」

「……ッ！！　私のせいなのよ！！　私が！　あのとき不用意にＤＮＡマップを提供したりなんかしたから！！」

声を荒げた美琴に、上条は少しだけ目を丸くした。

「……どういう、ことだ……？」

「……今から七年くらい前に、一人の少女がいた。その少女は能力に目覚めたばかりで、その能力を人の役に立てたかった。そんなある日、少女は『筋ジストロフィー』という、筋肉が勝手に収縮してしまう病気の患者の様子を見せられた。『君の能力開発のメカニズムを研究できれば、筋ジストロフィーの患者を助けられるかもしれない』、少女はそう言われた」

アハハ、と美琴は力なく笑う。

「少女は、迷わず自分のＤＮＡマップを提供したわ。そのＤＮＡマップが、どんなに残酷な実験に使われるかも知らずに、ね」

だから、と美琴は言う。

「私が殺したのも同然なのよ。確かに、直接手を下したのは一方通行（アクセラレータ）かもしれない。でも、私にアイツを断罪する資格なんてない。私だってアイツと同じ、一万人もの人を殺した人殺しなんだから。分かった？　幻滅した？　だからさっさとそこを退きなさい」

「……それで俺が頷くとでも、思ってんのか？」

「……そう。だったら、……――力ずくで通らせてもらうしかないわねッ！！」

会話はそこで終わった。上条が構えようとした瞬間には、美琴の姿は既に掻き消えていた。

「ッ！？」

「此処よ！！」

上条の気がつかない間に懐にもぐりこんでいた美琴は、そのまま上条の腹に蹴りを入れる。恐ろしい速度で放たれた蹴りは、それだけで上条を数メートルも吹っ飛ばす。

「ッぐがァァああっ……！？　ガハッ！」

「……今のは初めてでしょ？　最近、似たような系統の能力者と手合わせする機会に恵まれてね。ちょっと真似させてもらったのよ」

美琴が右手を掲げる。右手の中には、得体の知れない素材で構成された白い塊が存在していた。彼女はその手の人差し指を立てると、

その先で紫電が発生し、ボン！　という音とともに空気が爆裂した。

「高圧電流を無理やり空気に流して、その抵抗熱によって爆発的に空気の体積を膨張させる、って言っても、ただの無能力者（レベル0）なアンタには理解できないか」

「ぐっ……、」

ふらふらと立ち上がる上条だが、美琴は上条の回復を待つほど優しくはない。虚空から浮き出るように砂鉄を集め剣を作り、先ほどの高圧電流による爆発移動を使って一瞬にして上条との距離をつめる。

（……速い。でも、動きが直線的だから次が読める！）

流石に、二回目ともなれば上条も慣れてくる。確かに美琴の動きは脅威だが、それでも彼女は『喧嘩慣れ』していない。身のこなしはよくても、それを利用する『体捌き』が未熟なのだ。

パキィン！　と砂鉄の剣が吹き飛び、一瞬の間が出来る。上条はその一瞬で次の手を考えたが、それよりも美琴が上条の顔面を蹴り飛ばして距離を置く方が速い。

体勢を崩した上条に無数の雷撃の槍が飛ぶ。咄嗟に回避できないと判断した上条は、右手を突き出すことで手の先に電撃を集中させた。再度の破砕音が響き、美琴の電撃がすべて無効化された。

「遅いッ！　遅いわッ！」

上条が電撃から気をそらしたときには既に、美琴は目の前にいなかった。声のした方を見ると、既にそこには拳を振りかぶっている美琴の姿。バギッ！　と頬を殴られる感触とともに、上条は地面を転がった。

「……ふぅん。やっぱり、アンタ私の『能力』は打ち消せるけど、私の素手のパンチとかは普通に効くみたいね」

冷静に分析する美琴の声を頭上に聞きながら、上条はふらふらしながら立ち上がる。そんな上条に、美琴は冷酷に告げる。

「超能力者（レベル5）ってのは、こういう存在なのよ。能力そのものだけじゃない。その枝葉に位置する現象でさえ、この有様。私の知る能力者には、地面をまるっきり別物に変質させる能力を持つ能力者もいれば、大空をものすごい勢いで飛び回ったり地面をマグマに変えたりする能力者、複数の能力を同時に扱ったり能力そのものを打ち消せる能力者……、そして、私のレールガンを『シケたモン』呼ばわりできる能力者だっている。そもそも、同じ人間だって考えること自体が間違ってるのよ。超能力者（レベル5）の連中は、普通の人間じゃ有り得ないような過酷な開発を行ってるわ。それこそ、人間をやめるくらい。化け物になるくらい」

「……、」

「これでもまだ、私の前に立ちふさがるっていうの？　ただの無能力者（レベル0）にすぎないアンタが、この私よりもずっと凶悪な、この街の頂点に立つ化け物に立ち向かうっていうの？」

美琴の言葉の裏側には、常に『だからもう立ち上がらないでくれ』という望みが見え隠れした。だからこそ、上条は膝を屈しなかった。化け物だとか、超能力者（レベル5）だとか、そんな有り触れた御託なんかよりも、自分のことを化け物だと切り捨て、ただ闇に突き進もうとする少女を、見捨てることができなかったから。

「関係ねえよ」

上条はもう一度、右拳を握り締めた。

「そんなこと、関係ないんだ。お前が大悪人とか、救われちゃいけないとか、相手が学園都市で一番の化け物だとか。そんなこと、俺が立ち上がる理由には何の関係もない。俺は、自分が助けたいからお前を助けるんだ。お前が一秒だってそんな風に苦しんでるのが許せないから、御坂妹が死んじまうのが許せないから、だから戦うんだ」

「……、」

そんな上条に、美琴は歯を食いしばった。白い塊を握る手が緩んでいることに気がついた彼女は、慌ててその手を握りなおす。

「――うるさいッ！！」

上条の言葉から一拍おいて、美琴は駄々をこねる子供のような動作で電撃を放つ。その電撃を右手で消し去った上条は、そのまま走って美琴との距離を詰める。

当然、美琴もそれを黙って見ているほど迂闊ではない。電磁力による斥力と空気の膨張による飛行を利用し、空に飛び上がる。空から雷のように降り注ぐ雷撃を転がるように回避する上条は、美琴の真下まで行くと右腕を振った。それだけで美琴と地面を反発させていた斥力は消滅し、美琴の体は重力に従って落下する。

「ッ！？」

「本当は、この拳を向けるのはお前じゃないってことくらい分かってる」

右拳を握り締める上条に、美琴もまた右拳の中の真っ白な殺意を

握り締める。ボバッ！！　という音が聞こえた。瞬間、美琴の落下速度が急激に上昇する。

「……ッ！」

「斥力を無効化したからって調子に乗られちゃ困るわね！　私には、まだ打つ手なんて星の数ほどあるのよ！」

眼前に美琴の蹴りが迫る。通常なら、此処でかわすのが普通だろう。しかし、上条はあえて回避を選ばなかった。

「ッ！？」

「でも、お前がもしも道を誤ってるっていうのなら、くだらない幻想にとらわれてるっていうのなら……、」

ゴッ！！　と硬い音が響いた。美琴の蹴りが、上条の額に命中した音だった。つ……、と上条の額から一筋の血が流れる。しかし、それだけだった。勢いを完全に止められてバランスを崩す美琴とは対照に、上条は少しも揺るがない。

美琴の体重が軽いとか、単純な肉体戦闘では喧嘩慣れしている上条に分があるとか、そういう理由もあった。だが、それよりももっと奥の所――心の問題における、両者の違いが、此処で浮き彫りとなった。

完全にバランスを崩した美琴に、上条は改めて右手を振りかぶる。

「俺は、お前をその幻想から開放してやる」

あらゆる幻想を殺す右手は、美琴の頭頂部を正確に打ち抜いた。

＊＊＊

「……で、どうするのよ」

両手で頭を押さえて涙目になっている美琴は、そう言って上条をにらみつけた。必要だったこととはいえ、女の子の頭に思い切り拳骨して多少罪悪感を感じていた上条は思わず後ずさりしながらも、

「単純な話だろ」

そう、言い切った。

「そもそも、この実験の前提には『一方通行（アクセラレータ）は最強である』っていう事実がある。なら、その一方通行（アクセラレータ）がただの無能力者（レベル0）に負けたら、そもそも実験は、」

「却下よ、却下」

緊張で顔を強張らせながらもそう言う上条を、美琴はきっぱりと切り捨てる。

これしかないと考えていた上条は、驚いて御坂の顔を見た。彼女の表情は、くだらない自己犠牲だとかを考えているような表情には見えない。守られる者（ヒロイン）というよりも、どちらかというと……今の上条と同じような、守る者（ヒーロー）の表情を浮かべていた。

「何よそれ。相っ変わらずアンタは横から全部掻っ攫おうとするわね。そんなことで私が納得するとでも思ったの？　この私が、常盤台の超電磁砲（レールガン）サマが、自分の問題を誰かにおしつけるような結末で納得するとでも思ったの？」

「お前、まだそんなこと言って……、」

「私にも戦わせなさいよ」

「……、」

毅然とした美琴に、上条は最早何も言えなかった。確かに、当然である。美琴は、今までこの実験を終わらせる為に戦ってきたのだ。まして、今回の実験を終了させるために一方通行（アクセラレータ）を殺す決意まで固めたほどである。それなのに、最後の最後、本当に大事なところを他人に任せるなんて、このお転婆娘ができるはずがない。

「そういえば、樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）によると、私と一方通行（アクセラレータ）の戦闘は私がどんなに逃げに回ったところで一八五手で殺される、って結論が出てるらしいのよね」

本来なら絶望の極みだろう情報を、美琴はさも嬉しそうに語った。まるでそれが、自分にある唯一の希望であるとでも言いたげに。

「結構なことじゃない。機械で私の強さが決められてるってのよ。始まる前から、何もかも決め付けられてるってのよ。だったら、やるべきことは簡単じゃない？　『どんなに逃げに回ったところで一八五手で殺される超電磁砲（レールガン）が、ただの無能力者（レベル0）と手を組んだだけで一方通行（アクセラレータ）を倒してしまった』……そんな素敵な誤算（ハプニング）が起きたら、続行なんてふざけた考えも消し飛ぶはずでしょ？」

ハッ、と上条は笑った。

こんなにも嬉しいことは、そうそうないと上条は思った。本当なら、自分が拳を握って立ち上がるだけでよかったのに、それじゃ満足できないという人がいる。自分と同じ志を持って、大きな敵に立ち向かいたいと横に並んでくれる人がいる。くだらない自己犠牲なんかじゃなく、『皆が幸せになる為に』戦いたいと望む人がいる。

「そう、だな。その通りだよ御坂」

グッ、と上条は右拳を握り締める。

クソッタレな現実を吹き飛ばし、大切な幻想を守るための右手を。

美琴もまた、右拳を握り締めた。正確には、その手の中にある白い白い、純白の希望を。

クソッタレな現実の中から生まれた、しかし彼女の大切な幻想を守る最後の武器を。

学園都市で七人しかいない超能力者（レベル5）の一人と、学園都市でも一人しかいない特別な無能力者（レベル0）は、互いの拳を打ち合わせる。

「一緒にぶち殺そうぜ。くだらない幻想を」

09（後書き）

結局御坂はそげぶされました。
暗部に堕ちて仲間が増えるよやったね小豆ちゃんコースもありましたが、流石にそれは没に。
多分次回も小豆の出番はありません。

九月二八日修正

九月二五日修正

１０？（前書き）

上条側三人称、ラストです。
小豆視点はこの後に投下する予定。

10?

side other

午後八時三〇分。

住人のほとんどが学生で構成されている学園都市では、この時間に出歩く存在など皆無である。しかし、この場所に関しては何時だろうと関係なく人はいないはずだ。

そんなことを思わせるがらんどうの操車場で、二人は佇んでいた。

殺される為にこの場にいる少女と、殺す為にこの場にいる少年。

根っこは真逆だったはずなのに、なぜか彼らの姿は同じように空虚な姿をしていた。

殺される為に生まれてきた少女を目の前にして、白髪の学園都市最強、一方通行（アクセラレータ）は言う。

「……ったくよォ、実験、実験、実験、ってさァ、一万回も同じ作業やってっとイイ加減面倒になってくンなァ、オイ」

クローンの少女、御坂妹のすべてを否定したような一方通行（アクセラレータ）の言葉にも、彼女は眉一つ動かさなかった。そんな御坂妹の様子に一方通行（アクセラレータ）は呆れたようにため息をついて、

「……チッ、もォ一万回も殺されてンだからさァ、ちったァ芸とか学ンでみやがれよォ。　俺の『無敵化』に付き合わせてる身でこンなこと言うのも申し訳ねェけどォ……あ、そォでもねェか！　ヒャ

ハハハハ！」

「……ミサカは貴方の笑いのツボが分かりません。よって貴方のことを笑わせるような『芸』を身につけることは出来ません、とミサカは回答します。それに、実験体である貴方とミサカ達が無用な繋がりを持っては、逆に実験に悪影響を及ぼす可能性があるのでは？　とミサカは指摘します」

あくまで事務的な回答に終始する御坂妹に、一方通行（アクセラレータ）は一瞬、本当に一瞬だけ本気で忌々しげに舌打ちし、

「あァ分かったよ、分かったからそれ以上その汚（きた）ねェ口開くンじゃねェ」

「……、」

それっきり、二人の間には沈黙が横たわった。

「……あー。クソッタレ、殺してもつまンねェ喋ってもつまンねェってコレ、完全に欠陥品じゃねェ？」

「……実験開始まで後一分です。所定の位置についてください」

御坂妹のあくまで事務的な会話に、一方通行（アクセラレータ）は最早ため息さえつかずに億劫そうな調子で歩き出す。結局今日も何も変わらなかった。今日も、クソッタレで退屈な『実験』が始まるはずだった。その瞬間までは。

「つく必要はないわよ」

一方通行（アクセラレータ）は一瞬、自分の耳を疑った。この声を、目の前の少女によく似た、それでいて決定的に違う声を一方通行（アクセラレータ）は知っている。

しかし、それでもこの声を聞く理由が分からなかった。あの少女

は、ついこの間完膚なきまでに叩きのめしてやったはずだった。こんな実験動物（モルモット）の為に、今更『全く勝ち目のない』戦いに挑む理由などない。ゆえに彼は自分の耳を疑った。

ザッ、と地を蹴る音が聞こえる。振り返ると、そこにはやはり第三位の少女。

「……ハッハァ、そォいうことかよ」

そして、その傍らにはつんつん頭の黒髪少年が佇んでいた。その姿を見て、一方通行（アクセラレータ）は思わず噴出してしまう。

「ヒャハ、馬鹿か馬鹿だろやっぱオマエ馬鹿なンですかァ！？　ナニ、何だよオイ！　この間あれっだけ完膚なきまでに叩きのめしてやったってのに、今度は『仲間を連れてくりゃ大丈夫』ってかァ！？　ギャハハハ！！　こいつァ馬鹿すぎて話になンねェ！　えェオイ実験動物（モルモット）！　オマエもオリジナルのこォいうセンス見習えよなァ！」

体を丸め、腹を抑えて一方通行（アクセラレータ）は嗤う。

「……ぇよ」

「……ア？」

これ以上何かあれば笑い転げてしまう、といった調子の一方通行（アクセラレータ）は、突如聞こえた声に耳を傾ける。つぶやいた少年は、今度こそ牙を向いて吼えた。

「うるせぇよ、っつったんだよ、この三下が！！」

一方通行（アクセラレータ）は、言葉を失った。

「……オマエ、今『三下』っつったのか？　この俺に？　学園都市の第一位に、」

「んなもん関係ねぇんだよ！！」

信じられないものでも見るような一方通行（アクセラレータ）の言葉をさえぎり、少年は吼えた。

「テメェが最強だとか、御坂妹が実験動物（モルモット）だとか、どいつもこいつもそんな小っせぇこと（ち）に拘りやがって……！　そんなくっだらねぇことが言いたいなら気が済むまで言ってやがれ！　そんなこと俺達には一切関係ねぇんだ！　誰がなんと言おうが、俺達は御坂妹を殺させやしない。テメェをぶちのめしてこんなふざけた『実験』も潰してやる！！」

グッと拳を握り、今までの愚かな挑戦者でもしてこなかったような啖呵を切った少年に、一方通行（アクセラレータ）は逆に感心した。

（今までの連中は、口じゃ偉そォにしちゃいたが、それでもどこか俺に対する恐怖を拭い切れてなかった。だが、コイツァ違う。本気で俺のことを倒せるとか思ってやがる。……ヒャハ。面白（おもし）れェ。すっげェ面白れェぞ、コイツはァ！！）

どんな能力を所持しているのか知らないが、自分に対してこれだけの口を利けるということは少なく見積もっても大能力（レベル4）――、もしかすると、それ以上かもしれない、と考えた一方通行（アクセラレータ）は、とりあえず小手調べにと足を小さく踏み鳴らした。

＊＊＊

瞬間、ボバッ！！　という爆音が響いて一方通行（アクセラレータ）の足元の地面が無数の弾丸と化した。

「う、おおおっ！？」

その動きに対応仕切れなかった上条は、次の瞬間には宙を舞っていた。といっても、瓦礫に吹き飛ばされた訳ではない。ベルトの金具は、美琴の左手とつながっている。

上条は、美琴の能力によって攻撃を回避していたのだ。しかし、上条はそんな当たり前のことさえ即座に理解できない。

「う、わあ！？」

「ちょ、暴れないで！　私の能力で浮かばせてるんだから、アンタの右手に干渉されたら一環の終わりよ！？」

「わ、わりい！」

一方通行（アクセラレータ）からかなり離れたコンテナに着地した上条と美琴は、そのまま一方通行（アクセラレータ）の方を振り向く。一方通行（アクセラレータ）の傍らには、既に御坂妹はいなかった。遅れて、タッという足音と同時、御坂妹がコンテナの上に着地する。

同時に、美琴の指からバチリと火花が散った。御坂妹の発する電

磁波に干渉し、引力と斥力のバランスを保つことで一緒に引っ張ってきたのだ。

「……どういう、ことですか、とミサカは唖然とします」

あまりのことに、着地してそのままへたりこんだ御坂妹はそうつぶやいた。

「ミサカは、必要な機材と薬剤があればいくらでも量産できるんですよ？　作り物の体、借り物の心、単価にして一八万、在庫にして九九六八も余りある、そんなモノの為にどうして貴方達はこんな死地に、――」

そこまで言って、御坂妹はくしゃり、と自分の頭に手が置かれたことに気がついた。

「な……、」

「はい、そこまで」

手を置いたのは、美琴だった。

「確かに、他人からしたらアンタはカプセルの中で量産されただけの存在なのかもしれない。実験のために生み出された価値のない実験動物（ルモット）（モ）なのかもしれない」

美琴は聞き分けのない子供にするようにぐしぐしと頭を撫でながら、とても綺麗な笑みを浮かべる。計算の上ではミリ単位で同じ身長なはずなのに、御坂妹にはまるで彼女が自分よりも一回り大きな存在であるかのように思えた。

「……でもね、それでも、私にとっては初めて出来た、『妹』なのよ？」

それだけで十分でしょ、と美琴は断言した。第一位の化け物と戦うのに、勝ち目など全くない戦いに身を投じるのに、それで十分だと美琴は言った。

「り、かい、できません」

そして、御坂妹は何故だか凄くそれを止めたかった。いくらでも生み出せる量産品の為に、世界でたった一人しかいないオリジナルが失われてはいけない。理屈の上ではそう考えられた。でも、御坂妹はそんなくだらない理屈とは全く別の次元で、美琴に死地に赴いてほしくない、と思っていた。これが何を指すものなのか、御坂妹にはまだ分からない。でも、自分の中にある『何か』が、彼女が失われることに激しく拒否反応を起こしていた。

「だって、貴女は世界で一人しかいないじゃないですか、そんなたった一人の存在が失われて良い訳、」

「だから、それはアンタも同じだって言ってんのよ！」

そう言うと、美琴は軽く御坂妹の頭をチョップした。意外に痛いその攻撃に御坂妹は両手で頭を抑えて悶える。

「安心しなさい。アンタの『お姉様』は、あんな最強に殺されるほどヤワじゃないわよ」

「しかし……、」

美琴は、それに、と聞こうとしない御坂妹の言葉を封じて上条に目配せする。静かに拳を握り締めた上条は、御坂妹の目を見据えて

言う。

「俺だっている」

「これ以上、ただの一人だって失わせやしないわ。アンタ達が何人いようと、私にとっては全員大切な『妹達』なんだもの。……自慢の、なんて言えないけど。そもそもお姉様を気取るのもおこがましいことなのかもしれないけど。……それでも、私は生きて戻る。生きて戻ってきて、そして、アンタの、アンタ達の『お姉様』になってみせる」

それだけ言うと、美琴は上条を磁力で引っ張りながら飛び上がった。背後でまだ御坂妹が何か言っている気がしたが、今はそれよりも敵に目を向けなくてはと上条は思った。一方通行（アクセラレータ）は、いまだに不気味な沈黙を守っている。それが、余計に上条を警戒させていた。

「よォ、お別れの挨拶は済ませたかァ？」

「必要ねえよ」

開口一番に人を馬鹿にしきった笑みを浮かべた一方通行（アクセラレータ）に、上条はそう言い返した。

「俺達が勝つ。それでテメェの幻想も打ち止めだ」

「そォかよ」

対する一方通行（アクセラレータ）はつまらなそうにそう呟き、

直後、ボバッ！！　と地面が爆発した。

「ハッ！　同じ手は二度も食わないわよ！」

当然、超能力者（レベル5）である美琴にとってこのくらいの攻撃は避けて当

たり前の小手調べである。電撃で高速移動しながら瓦礫同士を電磁バリアによって弾いた美琴は、上条の襟首を掴みながら一方通行（アクセラレータ）に肉薄する。

「ハッ……。接近すれば勝てる、ってかァ？」

しかし、接近されたはずの一方通行（アクセラレータ）はそれでも余裕を崩さない。否。彼にとってこの程度の予想外はまだ『楽しませる』段階にも値しない程度の事態だった。

「あァー……、超電磁砲（レールガン）の能力は『電撃を操る』だったか？　瓦礫を電磁バリアで防げるってならよォ、」

くかか、と嗤いながら一方通行（アクセラレータ）は両手を広げ、

「こォしてやれば防ぎよォはねェよなァ！？」

瞬間、轟！　と烈風が吹き荒れた。

美琴の能力は電気や磁気を扱うことができ、その応用で生半可な銃弾程度なら電撃による抵抗熱で蒸発させることができる。瓦礫に関しても同じであり、たとえ一方通行（アクセラレータ）がレールガン以上の速度で瓦礫を吹っ飛ばしたところで瓦礫の進行方向自体を捻じ曲げたり、瓦礫を即座に消失させることで衝撃波を発生させることなく威力を殺すことだってできる。

しかし、空気は別である。電気分解などで干渉する方法もあるが、それで烈風を消せるわけではない。まして、第一位の能力によって放たれた烈風である。磁力によってその場で踏ん張ったら却ってミンチにされることが約束された攻撃。

「うおォォおおおッ！？」

「ぐ、きゃあっ！？」

咄嗟に美琴は磁力による斥力を使って烈風の勢いに逆に乗ることで攻撃の威力を殺す。上条は一応烈風に右手をかざしてみたものの、一方通行（アクセラレータ）の手元から離れた風は既に異能の管理下ではないのか、通用しなかった。

「クソッタレ！　何だあの風！？　接近すらできないじゃねえか！」

「アレが第一位よ！　今更怖気づいた！？」

「まさか！」

吹き飛ばされながら悪態を突く上条。しかし、二人の気勢は此処へ来ても全く衰えない。圧倒的戦力差を提示されながら、二人はその戦況をひっくり返せると本気で信じていた。

「おらおらァ！　あンだけ啖呵切りやがったンだ、このくらいでくたばってくれるンじゃねェぞォ！！」

空中に浮かぶ上条と美琴に、白い悪魔の嘲笑が聞こえる。一方通行（アクセラレータ）がコッ、と地面を蹴ると、それだけでシーソーのように地面の大部分が吹き飛び数百の散弾となって上条たちを襲う。

「……ッ！！　こんなのッ！」

バチ！　と電撃が瞬き、数百の散弾の大半が消し飛ばされる。しかし、細かい粒は消しきれずに上条と美琴の体を強く叩く。激痛に眉をひそめる上条はしかし、次の瞬間さらに絶望的な光景を目にする。

目の前に、白い悪魔。

先ほどの散弾は、ただの牽制などではなかった。同時に、二人の

視界を潰してその間に接近し、直接殺そうとしているのだ。すぐ隣で、美琴が思わず息を呑む音が聞こえた。

「ひゃっははははァ！　どォした三下ァ！　ちったァ骨があると思ってたのは俺の思い違いかァ！？」

ズゥ、と闇が這い出てくるように両腕を突き出す一方通行（アクセラレータ）に、上条は思わず冷や汗を流す。まず、交わしきれるタイミングじゃない。美琴を蹴り飛ばせばある程度の距離は稼げるだろうが、それでは一時しのぎにしかならない。学園都市最強の能力者に触れられる、学園都市最強の能力を使われる、その先にあるのは当然――――死、そこまで考えて、上条はあることに気がつく。

「そンじゃさっさと愉快な死体（オブジェ）になりやがれェ！！」

勝ち誇ったような笑みを浮かべた一方通行（アクセラレータ）は、そう言ってまずは上条めがけて手を伸ばす。

そのタイミングで、上条は思いっきり己の右腕を一方通行（アクセラレータ）の頬に叩き込んだ。バギン！　と何かが砕け散るような音と共に、一方通行（アクセラレータ）の体はそれこそ枯れ木のように軽く舞った。

それから数瞬して、美琴の能力により上条は安全に地面に降り立つ。その頃には一方通行（アクセラレータ）も、のそのそと起き上がっていた。ベクトルを操作したのだろう、地上数メートルのところから全く受身を取らずに落下した一方通行（アクセラレータ）は、殴られた頬以外の箇所には砂埃一つついていなかった。

「そうじゃねぇか……」

上条は、自らの拳を握り締めて呟く。

「相手が第一位だろうがなんだろうが、俺の能力（チカラ）にはそんなこと関係ねぇんだ」

上条当麻の右手。自らの幸運を打ち消し、自身に有益な異能だろうと関係なく消し去ってしまうチカラ。……だが、その右手は平等に、学園都市最強の怪物の能力さえも打ち消せる。

『はは』、と笑い声が聞こえた気がした。上条が声の方を見ると、そこにはゆらりとよろめいた真っ白な少年が立っていた。

「面白（おもし）れェ……」

暫し俯き堪えるように笑っていた一方通行（アクセラレータ）は、そう呟くとカッと顔を上げた。

そこに至って、上条は初めて一方通行（アクセラレータ）の表情を見る。痛みに怯えるような、それでいてやっと自分にふさわしい存在を見つけたような愉悦。恐怖と快楽がないまぜになったその表情は、最早人間が浮かべていい表情ではなかったのかもしれない。

「最ッ高に面白れェぞ、テメェェえええええええッ！！」

音らしい音など、上条の耳には届かなかった。一方通行（アクセラレータ）が咆哮した次の瞬間には、上条の視界は一面の空で埋め尽くされていた。

「……ッ！？　な、え！？」

「馬鹿！！　何ボケッとしてんのよ！　下見なさい下！！」

突然のことに唖然としていると、すぐ近くから美琴の叱責が聞こえてくる。どうやら上条は美琴に引っ張られて飛び上がっているようだった。美琴の言葉に従って上条が下を見てみると、そこには真

っ白い粉塵が巻き上がっている光景があった。

「あれは……？」

「一方通行（アクセラレータ）の能力で吹き飛ばされたコンテナよ。全くもう、レールガンの二倍の速度で吹っ飛ばしてくるとかどうなの？」

自嘲する美琴だが、そこに悲壮感はない。しかし、そこで上条は気がつく。

「……おい御坂。コンテナならこのへんにたくさんあるぞ。アレがその一つを飛ばした結果だってんなら、空中に逃げたら……、」

上条が最後まで言い切ることはできなかった。何故なら、彼が最後まで言葉をつむぐ前に一方通行（アクセラレータ）の哄笑が響き渡ったからだ。例によって、音は聞こえなかった。ただ、今回は上条にもその姿を確認することができた。

一方通行（アクセラレータ）が地面を踏むたびに、彼の周囲にあるコンテナがひとりでに浮かび上がり、そして弾丸以上の素早さを以って上条に迫ってくるのだ。幻想殺しは、異能そのものを殺すことはできても異能によって加速したものを打ち消すことはできない。

「みさ……ッ、」

「いいのよアレで。アレで計算どおりなんだから」

しかし、御坂は全く不安を表情に出さなかった。否、そもそも不安を感じていなかったのかもしれない。一つ一つがレールガンの数倍の速度を持っているくせに、散弾のようにおざなりに放たれたコンテナ群を見て、美琴は笑う。

次の瞬間、すべてのコンテナが加速仕切る前に破裂した。

「……！？」

コンテナの中身らしい小麦粉の粉塵の中心に動揺する一方通行の姿があったが、すぐにかき消されてしまう。

「……確かに、レールガンの数倍の速度で放たれるコンテナなんて恐ろしいわよ。でもね、普通ならそんな速度で飛ばされる物質が慣性や空気抵抗に耐え切れるはずがない。おそらく一方通行（アクセラレータ）は、得意のベクトル操作を利用して衝撃を相殺できるように分布させているはず。なら、そこに私が電撃をしかけることで物質の状態を歪めてしまえば均衡はすぐに崩れることになる」

空中に浮かぶ美琴はそう言うと右手を翳（かざ）す。

「そういえば、今日は風がないわねぇ。こんな日は、素敵なことが出来るかもしれないわね。――――ねえ、一方通行（アクセラレータ）」

美琴は翳した右手を振り上げ、

「アンタ、『粉塵爆発』って知ってる？　まあ、屋外じゃたいした爆発なんか起こせないわよ。精精、二メートル程度の爆発が起きるか起きないか、ってところかしら？　でもね、爆発は起きなくたって、燃焼は起こる。酸素だって奪われるわ。アンタの能力――攻撃を反射することはできても、奪われたものを取り戻すことはできないでしょう？」

そして振り下ろす。その瞬間、一方通行（アクセラレータ）がいた場所は一瞬だけ閃光に埋もれた。とはいえ、小麦粉の塊が爆発したわけではない。単純に、美琴が放った電撃が一方通行（アクセラレータ）を包んだのだ。他にはポンという小気味の良い小規模爆発が起きた程度で、驚異的な大爆発は起こ

らなかったが、燻った煙が周囲を埋め尽くした。

「お前……そんな……」

「大丈夫よ大丈夫。アレぐらいでダメージ食らうような奴なら今頃私はこんなところにいないわ。それよりも今のうちに、」

思わず動揺する上条に、美琴は冷静に答えた。その言葉通り、煙は不自然にうねって弾け飛ぶ。そこには、のどを押さえてはいるものの全く表情は歪んでいない一方通行の姿があった。

「な、いくら一方通行（アクセラレータ）でもあの酸欠状態から即座に立ち直ることなんて……！？」

「……あー、死ぬかと思ったわ」

一方通行（アクセラレータ）は、健康そのものな声色でそんなことを呟いた。

「ったくよォ、さすが第三位、ってかァ？　確かに俺の能力はデフォじゃ反射になってるし、その反射が機能しねェ攻撃には弱いって弱点があるけどよォ」

能力で調達したのか、新鮮な空気を肺いっぱいに吸い込んだ一方通行（アクセラレータ）は、適当な調子で首をコキコキと鳴らしながら続ける。

「今までその弱点に気づけた奴はおろか、それを弱点として突けた奴だって一人としていねェンだぜ？」

ハッ、と嘲笑う一方通行（アクセラレータ）。二人を褒めているような口調だが、それは逆に『この程度が限界か』と言いたげな調子も含ませていた。

「喜べ雑魚共。オマエらひょっとしたら世界で初めてこの俺に『死

ぬかも』って思わせた存在かもしンねェぞ？」

会話はそれだけだった。

轟！　という音が聞こえたと思った瞬間、美琴と上条の体は空中に浮かび上がっていた。

「く、また突風……！」

吹き飛ばされたというのにまだ上条と美琴の距離がそんなに離れていないのは、美琴が磁力で上条の体を自身の近くに寄せているからに他ならない。磁力を複雑操作して空中で体勢を整えた美琴は、さあっと顔を青ざめさせた。

「どう、した？　み、さ、」

「マズイ！！」

突風の影響で上手く喋れない上条に、美琴は切羽詰った様子で短く悲鳴を上げる。彼女の視線の先には、石ころでも持ち上げるように巨大なコンテナを掴み上げる一方通行（アクセラレータ）の姿があった。

「――――そォいえば、今日は風がねェなァ」

漆黒の中に浮かぶ禍々しい純白は、心底嬉しそうな笑みを浮かべてそう呟いた。音のベクトルでも操作しているのか、彼のプレッシャーによって言いたいことが分かってしまうのか、その声は不思議と上条の耳にしみこんでいく。

一方通行（アクセラレータ）の掴んでいるコンテナから、蛇が体を持ち上げるようにゆっくりと音もなく白い線が浮かび上がり、ぱん、と破裂した。

「オイ。オマエら、『粉塵爆発』って言葉ァ……知ってるよなァ？」

瞬間、上条の意識は断絶した。

＊＊＊

ぼんやりとした頭が、少しずつクリアになっていく感覚が最初にあった。美琴の磁力操作で地面に叩きつけられる結末だけは回避できたのか、上条の体に思ったほど痛みはなかった。

ただ、勢いよく転がっていたのか、全身に小さな小石がめり込んでいるような小さな傷みが全身に残っていた。時間はよく分からないが、この体の痛みの感じからしてそこまで長い間気絶していたわけではないだろう、と上条は思った。

「ぐ、ぁ。み、さか……？」

目を覚ました上条は、まず美琴の所在を確認した。あたりに美琴はいない。上条は美琴とはぐれ、さきほどのコンテナ群の中で倒れていたようだった。

「くそ……、早く御坂と合流しないと。まさかやられてたりしないよな……？」

不安そうに上条が呟いた瞬間、轟！！　という爆音が彼の耳の奥に届いた。

「な、なんだ！？」

爆発。まさか一方通行（アクセラレータ）と美琴が争っているのか、などと思いそちらに意識を傾ける上条。しかし、そこには白濁した白い悪魔も優しい電撃使いも存在しなかった。

「……ぁ」

上条の目の前には、煤塗れで倒れこんでいる彼の幼馴染、親船小豆の姿があった。

１０？（前書き）

二話目です。

10？

「お帰り、外道」
「超お疲れ様でした、鬼畜さん」
「結局、クズはクズだったって訳よ」
「大丈夫だよ、私はそんなおやふねを応援してる」

……人がアカデミー賞並の演技をこなしてきた後に、この労いの言葉はどうなんだろうか？　フレンダに至っては労ってすらいないし。

というわけで、私は警備員（アンチスキル）の前にやってきた迎えの人（という体で呼びつけた『アイテム』＋黒花）と一緒に黒塗りキャンピングカーの中でお色直しをしていた。現在の服装はいつも通りの短い丈のワンピースにシャツ、下にジーンズとパンプスという格好だ。これから派手に一戦やるというのにあんなひらっひらした服なんか着てたら死ねる。

私の視線の先には、キャンピングカーの壁面にかけられた超薄型テレビがある。下部組織からのものと思わしき映像には、繁華街を走っている上条の映像が映っていた。どうやら、既に吹っ切れて御坂のところに向かっているらしい。正史だと一旦常盤台の学生寮に行っていたはずだが……、まあ、このくらいの乖離は許容範囲内か。

「いやーしかし、相変わらずお嬢様の女優っぷりには驚かされますね～。此処まで来ると感情の有無から疑いたくなります～」
「上条くんの動きを誘導する為には、『あの台詞』を言うのが必須だったんだよ。上条くんだってなんだかんだでただの高校生だからね」

私の髪を梳いていた黒花がそんなことを言い出した。……そう。私がわざわざ『実験』に掠るなんていう暴挙に出たのは、完全な白であるせいで却って『なんでこんなに都合よく修羅場を回避できたんだ?』と上条に疑惑を持たれないこと（今回だけで疑われることはないだろうが、今後上条の『原作沿い』をサポートしていくうちに何度も同じことがあったら疑念を抱かれる可能性がある）の他に、疑心暗鬼に陥った上条に『御坂を信じろ』という『行動の芯』になり得るものを提供する為だったのだ。

何の手がかりもなければ、あの直情径行馬鹿は私の予測不可能な行動をとるだろう。まあそれでも『実験を中止に追い込む』というベクトルに行動が向いているのは確実だろうが、結果私が不利になる可能性はかなりある。しかし、『御坂』という行動指針を与えればあの直情以下略馬鹿は『御坂』という存在に基づいた行動をとる。そこからなら常盤台の女子寮に向かう正史の流れに則っても良かったし、今回のように直接御坂に辿り着いても問題なかったのだ。

「親船さん、そこまで他人の心理分析できるんなら私、いらないんじゃないですかね～？」

そういうと、黒花は明らかに私を馬鹿にした調子で笑った。……チッ、黒花め。私が下手に出たら調子に乗りやがって。心理同調経由で私が見た一〇〇三一号のスプラッタ死体の映像を送りつけて黒花にあうあう言わせつつ、麦野達の方に向き直る。

「はい、じゃあ御坂さんの動きは掴めてるかな？」

「当然。どうやら第三位が研究所をボコボコ壊してたのは『実験』の場所が探知できなかったせいだったらしいって訳よ。結局、上が本気で情報を隠してたからなんだろうけど……。どういう理由か知らないけどついさっき情報規制が解除されて、今第三位は再度のハ

ッキング中だから、五分もしたら『実験』が行われる座標を特定できるんじゃないかしらーん」
「なるほど、じゃあ上条くんなら問題なさそうだね」

フレンダの報告に私は軽く頷く。此処でも若干乖離が発生しているようだが……まあ、それについては考えても仕方がない。上条が向かった以上、もう御坂と上条の邂逅は時間の問題。後は適時モニタリングしながら、不測の事態が起きれば下部組織を使うなりして上条の行動を誘導すればいい。

「で、私達はこれからどうするかと言うと……、」
「プチプチと剥離要素(エラーポイント)潰しだろ？　お前も飽きないね」

私が言いかけたところで麦野が口を挟んできた。その通り。一方通行編(アクセラレータ)といえば禁書のアニメ一期の一クール目山場だったはずだし、何より『第二の主人公』一方通行(アクセラレータ)が正史で初登場した事件でもある。前回の御坂と『アイテム』の一戦にも介入しようとした剥離要素(エラーポイント)が介入しない道理がない以上、警戒は強めなくてはならない。

「にしても、剥離要素(エラーポイント)も何の目的で第三位がらみの事件に介入しまくってんだろうねぇ。どっかでアレイスターのプランでも傍受してんのか？　にしてもあのガキがプランに大きな影響力を持ってるとは思えねぇが……」
「麦野さん、薮蛇かもよ、それ」
「……チッ、分かってるっての。テメェにゃ迷惑かけねえよ」

私が忠告すると、麦野は不承不承といった様子で頷いた。アレイスターのプランには確かに興味がある訳なのだが、かといって此処で下手にプランを逆算してアレイスターに目をつけられても面白くない。ただでさえ私には『襲われた』という動機があるのだから、

反逆ととられる行動は即座にアレイスターに悪印象を与えるに違いない、……というのは建前だ。

実際、妹達（シスターズ）の有用性程度は木原数多でも知っていたことだから、麦野が調べてもアレイスターにとっては痛くもないんだろうしな。でも、こういうところで釘を打っとかないといつか痛い目見そうな気もするし。そういうレベルで私はがけっぷちなのだ。

「で、今回はどこで超スタンバっておくんですか？　おそらく実験場では一方通行（アクセラレータ）と超電磁砲（レールガン）がぶつかり合うと思われますから、下手に近い場所にいると二人の戦闘の余波に巻き込まれかねないと思いますけど」

「正確には一方通行（アクセラレータ）と幻想殺し（イマジンブレイカー）、だけどね。……んー、とりあえず、操車場の外縁を囲むように待機してればいいんじゃないかな？　この間の二人一組で」

「えぇー、結局、そうすると私達のチームはどっちも下位能力者じゃん！　麦野チームは超能力者（レベル5）二人組でズルいわよー！」

私の提案に、フレンダが不服そうな声を上げた。

……フム、私の安全という面で見れば『何言ってんだコイツ』並みの意見だが、今回の目的を考えると的を射ている、か……。前回は『一番重要度の低いポイントの担当だから』という理由で黒花とフレンダを組ませた訳だが、今回に限って言えば重要度はどのチームも均一。

絹旗と滝壺のコンビはこの面子の中でもちょうど中間程度の戦力バランスだから良いとして、いくら私の安全が重要と言っても超能力者（レベル5）が一つに固まっては確かに戦力差に偏りが出る。相手にそれを悟られてフレンダたちから突破されて上条達と剥離要素（エラーポイント）が邂逅してしまったらもう目も当てられないしな。

「……じゃあ、私と沿受ちゃん、フレンダちゃんと麦野さんで組む。

それでいい？」
「……うん、結局それでいいって訳よ！」

私がそう言うと、フレンダは妙に満足げに頷きながらグッと黒花にサムズアップしていた。……何か示し合わせでもあったのか？　まあいい。黒花は『こちら側』だから反逆の可能性はないし、どうせくだらない話だろう。

「……も、目的地に到着しました！」

そんな風に割り振りが決まると、待ち構えていたかのように下部組織の男が上擦った声で到着を告げた。この男、幻想猛獣事件（AIMバースト）のときに運転やってた男だが、麦野の怪物っぷりがトラウマになったのか最近ずっとこんな感じなのである。私がお嬢の仮面被ってあやそうにも、コイツは私の本性知ってるからか逆にびくびくしてしまうし。……面倒な奴だ、目障りだし別の奴に取り替えてもらおうかな？

「それじゃあ、私たちは超此処で降りますね」
「みんな、武運を祈ってる」
「行ってらっしゃい。……無事に生きて帰ってこれたら今度はプールにでも行きましょ」
「またねー絹旗ちゃん、滝壺ちゃん。あと麦野さん、太っ腹なのはいいけどそれ死亡フラグだよー」

軽く手を振りながら車を降りた絹旗と滝壺に別れを告げつつ、麦野に軽口を叩くと、キャンピングカーも発進して次の下車地点に向かう。……さぁ～って、私も気を引き締めないと、なぁ……。

＊＊＊

「じゃあ、フレンダちゃんたちも頑張ってね」
「りょーかいって訳よー！！　今度は活躍したらボーナスよこせよーっ！！」
「それは了解しかねる」

まあ、どうせ麦野が全部片付けるんだろうけど。
黒塗りのキャンピングカーを見送った私は、そう言うと足元に割裂空洞を発現させる。現在時刻は——八時二〇分。確か実験開始が八時三〇分だったから、剥離要素（エラーポイント）がやって来るとしたらもうすぐなはずだ。

「……でも、来ますかね。剥離要素（エラーポイント）」

傍らの黒花が心配そうに呟くが、それに関しては問題ないだろう。確かに第一位との接触となると危険とみる連中もいるかもしれんが、少なくとも与謝野は来る。
やつらのボス、与謝野は筋金入りの馬鹿らしいからな。自分がＡＩＭ干渉系の能力だから一方通行（アクセラレータ）も潰せるとか考えて特攻にしくるだろう。間合いに入る前に『粉塵爆発って知ってるかァ？』とか言われて星になりそうだけど。

「来るよ。相手はそういう奴だからね。だからこそ私はアイツらを

殺したいんだし」
「……なんだか嫌な信頼の仕方ですね」
「信頼とか言わないでよ、気持ち悪い」

本当にやめてほしい。気持ち悪いから。いや、普通に考えて命の危険があるって分かりきってる事件に首突っ込んでまでフラグ建てようとしてるんだから、その筋金入りのハーレム願望というか、思想については最早敬意を払っても良いと思っているが……、何というか、普通に、好みの問題で生理的に無理って感じ？

「……随分酷(ひ)でェ言われ様だなぁ……」

確かに。我ながら取り付く島もない言い様だとは思うけど……、って、んん？

「ッ！！」

私は即座に声のした方向を見てみる。私の見た方向の数十メートル先には、他でもない与謝野菱形が立っていた。与謝野の服装は大きく着崩したワイシャツに黒のズボンと、制服なのか私服なのか分からないものだった。顔も良いので結構様になっているが、如何せんチャラ過ぎである。垣根よりもチャラい。

……というか、黒花。

簡易索敵を怠っていたのか、と責めるようなまなざしで黒花に視線を送ると、黒花はぶんぶんと首を振っていた。……なるほど、与謝野の能力はＡＩＭ系の少なくとも大能力(レベル4)はあるしな。超能力(レベル5)は言い過ぎだと思うけど。同系統上位種相手に能力を通用させろ、という方が難しい注文か……。

……あれ？　これって何気にマズイ状況じゃないか？与謝野は黒花の能力の上位互換みたいなモノだから心理同調(コンフォーミティ)は通用しない。そ

して、アイツは多才能力者（マルチスキル）みたいなモノだから私の並行結合（シンクロニズム）と同等もしくはそれ以上な訳で。

か、勝てる要素が全くねえ……。

救いは相手がこれ以上ないほどアホだってところだが、相手の弱さを作戦に組み込むようになったらおしまいだ。それは度外視して考えねば。そうすると、本格的に勝ち目がなくなってくる訳だが……まあ麦野と滝壺の早期召集は確定事項として、それまでどうやってコイツを抑えておこうか？

そもそも、真正面から戦えば確実に異能略奪（スキルインターセプト）の餌食になる。コイツが私の能力まで奪えるかは甚だ疑問だが、奪われないと高を括って挑むなどまず有り得ない。うーん、どうしようか……。まあとりあえず麦野には連絡を入れておこう。

『Ｏ－Ｍ「与謝野と遭遇。滝壺ちゃんを回収してコッチに来てくれない？」』

『Ｍ－Ｏ「フレンダと絹旗はどうすんだ？　絹旗はともかくフレンダは高位能力者が複数来たら対応しきれないわよ」』

『Ｏ－Ｍ「麦野さん達が合流次第私と沿受ちゃんは瞬間移動（テレポート）でフレンダちゃんのところに行く。で、フレンダちゃんは私達が合流次第絹旗ちゃんと合流しててもらう」』

『Ｍ－Ｏ「……了解。私が到着するまで持ちこたえてろよ」』

麦野と通信を終えた私は、改めて与謝野の行動を観察する。与謝野は先ほど（といっても二秒ほど前だが）と全く変わらず、制服なのか私服なのか分からないズボンのポケットに手を突っ込んでいる。二秒もあれば出来ることなど山ほどあるだろうに……いや、表面化していないだけで何かをしているという可能性もあるな。

「……初めまして、だね。与謝野……菱形、って言うんだっけ」
「……ああ、はじめましてだな、……呼び方はどうしようか。小豆ちゃん？　小豆たん？　それともあずにゃんとか？」
「『親船さん』で。変態さん」

……いや、聞いてはいたけど此処まで真性とは思わなかった……。しかも、私がこう言っても与謝野は勝手に悶えて（喜んで？）るだけで全く応えてないみたいだし……。まあ、完っ全に脈なしの黒花を『嫁一号』呼ばわりしてた時点で分かってはいたが、コイツ相当おめでたい頭してるぞ。

「んじゃ、小豆たんで。ずっとこう呼んでたんでね。今更癖は抜けないみたいだ」

全く話聞いてないし。

「此処にいるってことは、俺がこれから何をしたいかも分かってるんだろ？　そこ、退いてくれないかね？」
「無理。あなたにここを譲ったら私、死ぬから」

私の答えに、与謝野は首をひねって疑問符を浮かべる。ああ……、そっか。コイツは私の苦労とか知らないもんな。此処で道を譲ったら与謝野と上条が高確率で邂逅して、その結果状況が最早修正不可能なレベルで歪んで今後の事件で私の安全を保障するものがなくなり、私が死ぬ確率が九〇割くらい増すとか、そんな小難しい裏事情とか気にしなさそうだもんな、コイツ。

「まあいいや。君がどんなこと考えてようが、どうでもいいし。とりあえず、私的に上条君の邪魔をされるのは面倒なんだよね」
「……上条君……！？　クソッタレ！　既にフラグ建てられてたっ

てのかよ！！」

食いつくところがおかしい。そして私はまだフラグなど建てられていない。此処、結構シリアスな場面なんだよな？　何で私ツッコミに回ってるんだ……？　……あー、なんか相手してるのがダルくなってきた。これが話術っていう可能性もあるし、ペースを乱されないうちにやってしまおう。

「……まあ、訂正するのが面倒だからそれでもいいけどさー……」

「なっ！？　そん、」

与謝野がそういいかけた瞬間、私の爆弾発言で動揺した奴の足元に火炎放射（ファイアスロアー）で生み出した大量の炎を叩き込む。当然、これは相手にダメージを与える為のものではない。炎によって相手の視界を一時的にふさぐのが目的である。

与謝野が完全に燃え上がったのを確認した私は、黒花を掴んで先ほど足元に発現しておいた割裂空洞（ダークホール）から瞬間移動（テレポート）と透視能力（クレアボイヤンス）の拡散力場を放出、近くのコンテナの物陰に移動した。

コンテナの物陰に隠れて与謝野の様子を確認してみると、やはり与謝野は傷一つ負っていなかった。地上数メートルの位置で息を荒げながら滞空している。前回の戦闘で弱点だった『精神的動揺による能力解除』も多少期待していたのだが、どうやら流石にあの欠陥は克服してきているようだ。成長性のない能力を持つ私としては、相手が成長してくると言うのは面倒くさいことこの上ない。

「クソ！　いきなりなんてつれねぇじゃねえか小豆たん！」

言いながら、与謝野は周囲を見渡す。私はとりあえず与謝野が馬鹿正直にコンテナの陰を覗き込んだ時のために前方に割裂空洞（ダークホール）を発

現させる。これで、アイツが間抜けにもこちらの様子を伺った次の瞬間には火炎放射（ファイアスロアー）でミディアムになるという寸法だが……、

「……へっ、甘いな小豆たん！　見えてるぞ！！」

そう言うと、与謝野は空中を蹴るようにしてコンテナ上を飛び、私たちの頭上に現れる。

「お、お嬢様！」

黒花が引きつった声を上げる。……無論、こいつのコレは演技だけどな。表情に緊張感がなさすぎる。……与謝野がこうしてくることくらいは予想済みである。大体、私が透視能力（クレアボイヤンス）を使っているんだから、多才能力（マルチスキル）としては上位互換のアイツに同じものが使えない理由がない。ということはつまり、私は自分の策がバレていることを前提に策を練っていたわけだ、が。

ピシュン、と空気が一瞬にして圧縮される音と同時に、私と黒花はその場から瞬間移動（テレポート）し、また別のコンテナの物陰に移動する。先ほどまで私がいた地面には、小さめの割裂空洞（ダークホール）が口を開けていた。与謝野が上から来ることを予想して、あらかじめ設置しておいたのだ。

「……ッ！」

与謝野の表情が凍りつく。私が狙っていることが理解できたのだろう。回避しようにももう遅い。与謝野の全身を、炎と電撃が包み込む。上手く不意をついて狙えたわけだが……まあ、これはおそらく効かないだろう。相手は仮にも多才能力（マルチスキル）者なのだ。せいぜい強能力（レベル3）程度の攻撃で揺らぐとも思えない。

「無駄だぁ！」

案の定、攻撃は次の瞬間には弾き飛ばされる。当の与謝野はというと、電撃と炎のコンボを食らったのに服が少し焦げている程度のダメージしかない。まったくもう、分かってはいるけど同じ多才能（マルチスキル）力者としての格の違いを見せられた気分だなぁ……。まあ、多才能（マルチスキル）力者としての強さが『与謝野＞木山＞私』なのは分かりきったことなんだけど。と、そんなことを考えていると、

『Ｍ－Ｏ「もうすぐ到着するわ」』

麦野から念話が入ってきた。……フム、やっとか。おそらくあと一分弱で到着といったところだろうが……、一分弱か。まあそれなら何とかなるか。

「……おい、どうしたんだ？　さっきから攻撃の手が止んでるみてぇだけど」

そう言うと、与謝野はさっとあたりを見渡し、それから私に視線を合わせた。一応私と黒花はコンテナの陰に隠れているからあっちからは見えないはずなんだが、さっきと同じように透視能力（クレアボイヤンス）でも使ってるんだろう。

「全く、びっくりさせやがって。不意打ちで電撃と炎とか、俺じゃなけりゃ死んでるところだったぞ」

呆れたように頭を振ってため息をつく与謝野。まあ、お前じゃなくてもたいていの相手は死なないけどな、私と敵対するような奴らは。

「……知ったこっちゃないっての」

ボソリと呟いた私は即座に黒花を残したまま与謝野から見て右方向のコンテナの裏に転移する。どうやらあっちに私を積極的に倒そうとか、そういう意図はないらしい。まあ、『ハーレム要員』である私を殺すわけにもいかないだろうけど。そこはかとなくプライドが傷つけられる話だが、相手が勝手に手加減してくれるというならそれに甘えない手はない。ちょこちょこ逃げて麦野が到着するまでの時間を稼ぎたいが……、

瞬間、ドン！！　とお腹の底が響くような地響きが鳴った。……多分、一方通行（アクセラレータ）が『粉塵爆発って知ってるかァ？』とかやらかした音だろう。

「……ち、もう始まってるみたいだな。んじゃ小豆ちゃん、何も仕掛けて来ないなら俺は行かせてもらうぜ」

……ううむ、そこなんだよなぁ……。コイツの目的は私じゃなくて御坂。立ちふさがるならついでにモノにしちゃおうとか思ってるが、来ないなら来ないでスルーでもいいわけだ。対して私の目的はコイツの足止めだから関わりたくないからといって逃げてしまっては本末転倒、しかしあまり正面衝突しすぎると能力を奪われる……ジレンマだなぁ。

半ばげっそりしつつ、瞬間移動（テレポート）で与謝野の眼前一五メートルのところに現れる。一五メートルの距離は最早眼前とは言わないかもしれないがそこはそれ。私にとっては非常に不安な距離である。防御策くらいはあるけど。

「……おう、やっと出てきてくれたか小豆たん。もう降参してくれ

るか？　だったらちょっとそこで待っててくれ。これから一方通行（アクセラレータ）潰してく、」
「無理だね」
さっさと向かおうとこっちに歩いてくる与謝野に、私はきっぱり言い切ってみた。余裕そうな表情だった与謝野の顔が、少しだけ硬直する。
「……なん、だと？」
「無理だ、って言ったんだよ。大体、一方通行（アクセラレータ）のベクトル操作を『ＡＩＭ拡散力場の操作』ごときで打ち破れるわけないじゃん。だって、相手は『この世のありとあらゆるベクトルを操る』能力なんだよ？　君の拡散力場のベクトルを操られてしまえば、そもそも能力なんて効く筈がない」
実際にはこの時点の一方通行（アクセラレータ）は拡散力場のベクトルを操れるわけではないと思うので、こいつにも勝ち目はあるのだろうが……私以上に拡散力場についての知識がない与謝野であれば、このくらいのカマかけにも乗ってくれることだろう。
「何言ってやがる。俺の能力を使えば一方通行（アクセラレータ）だろうと能力を奪えるに決まってるだろ？」
……ふむ。平静を装っているようだが、明らかにプライドが刺激されてますって顔をしてるな。この話題は『当たり』か……。
「それに、仮にも学園都市第一位だよ？　能力を奪うんだか何だか知らないけど、そもそも奪わせてもらえる段階にあるとでも思ってるの？」
「……、」

私の言葉に、与謝野は黙り込んだ。
何だ、自分に都合のいいことしか聞こえないタイプの奴かと思ったら、割と冷静な見解も出来るんじゃないか。このまま私の言葉で説得して引き返させられるか……？　だったら嬉しいんだけど。

「いや、問題ねえよ」

しばし考え込むようなしぐさをしていた与謝野だったが、ふと顔から力を抜くとあっさりそう言い切った。……あー、やっぱり無理だったか。

「第一、俺には異能略奪（スキルインターセプト）があるんだ。たかが第一位程度に負けるはずがねえ」
「……いや、明らかに話が噛み合ってな、」
「だーいじょーぶだっつってんだろ！　心配すんなよ。俺は勝つ。勝って絶対戻ってきてみせる。だから安心して待ってろ」

与謝野は主人公が浮かべるみたいな爽やかな笑みで私の言葉をさえぎった。……あるぇー？　何でいつの間に私がコイツの心配をしてることになってるの？

「んー……、面倒くさいなぁ。此処は通せないよ。それ以上踏み込んだら本格的に攻撃開始しちゃうかも」
「構わねえよ」

ザッ、と足を踏み出す与謝野。なんだかんだでこういう動作が様になってるから増長するんだろうなぁ……。

「立ちふさがるっていうんなら、少しだけ大人しくしていてもら、」

与謝野がそう言いかけた瞬間。
地面が爆発した。
爆風に煽られ、私は一気に数メートルほど吹き飛ばされる。与謝野の攻撃にしては強すぎるな……。というか、こんな火力があるなら最初から使っているはずだ。とすると……、

「……チッ、勢い余って飛ばしちまったか。悪りぃな親船」

カツ、と靴がコンテナを叩く硬質な音が響く。
此処からだと見えないが、声からして間違いなく麦野だろう。とすると、おそらく滝壺もいるはずだ。とりあえず彼女たちには与謝野と戦闘を任せるとして。

「……にしても、随分飛ばされちゃったなぁ」

ともかく、物陰に置いてきた黒花と合流しなくては。そこまで吹き飛ばされていないはずだからすぐに見つかると思うんだが、あんまりこのあたりでぶらぶらしてると上条に見つかるかもしれないからな。まあそんなこと万が一にもないだろうけ、

「……ぁ」

そんなことを考えた瞬間、私の前方で聞きなれた少年の声が聞こえた。顔を上げると、そこには見覚えのあるつんつん頭の高校生の姿が。みんなご存知主人公上条当麻である。
……うんうんそうそう『万が一にもない』とかね、そんなこと言ったら来るに決まってるって今までの経験上分かってたんだけどなぁあははははは。

……ちょっと待とう。状況を整理しよう。この状況って……、

一、上条の視点では私は普通に表の人間である。

二、上条の視点では私は御坂妹の死体発見騒動で帰ったことになってる為、実験場所は知らない。

三、上条はタイミング的についさっきの麦野のアホが出した盛大な爆音を聞いている。

四、私は位置的に、その爆音と何らかの関係があるようにしか見えない。

五、爆音を辿ったらそこには素敵状態の麦野のクズと明らかに不審人物な与謝野の姿が☆

あっれえええええええええええええ！？　これ、もしかしなくても詰んでね！？！？

１０？（後書き）

一〇月一八日修正
一〇月二三日修正

11

「親……船……？」

「……、」

上条は、私のことを幽霊でも見るような目で見つめている。

……ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい！！　何がヤバいってこれ私の素性バレ寸前じゃん！　ちょっとでもコンテナの裏とか覗かれたら麦野が見える。直後の爆音の関係から言って私が真っ白というのはあり得ない。

……つまりー？

上条に私が裏と関わりを持った人間だってバレるってことだよ！！いつかはバレるかもしれない情報だろうが、今この時期にバレるのは好ましくない。バレるなら、上条が神の右席に目をつけられるあたりだ。私が裏に精通していると知られてしまえば、上条がそっち方面で困ったときに頼りにされる可能性は高い。

というか、上条にその気がなくても勝手に上条勢力にカウントされてその事後処理を担当させられるに決まってる。これから上条が巻き込まれる可能性の高い裏の事件といえば、シェリー襲撃、残骸（レムナント）争奪戦、ヴェント襲撃などなど。その他にも、エツァリや原作には描かれてないけど裏方で始末されてる外部組織から『上条勢力にいるから』という理由で狙われるかも。私はただでさえ外部組織から命を狙われやすい環境にあるわけだしな。

……本当なら回避できる命の危険が、勝手にこっちに舞い込んでくるのだ。絶対に避けたいに決まってる。

「……親船、どうしてここに……？」

「……、」

ヤバい、上条が問いかけに入りだした。完っ全に疑ってるよこれ、頭のどこかで『まさかこの実験に関与してる？』と思って『小豆に限ってそんなことないだろ何考えてんだ俺』的に自己嫌悪に陥りつつそれでも疑念が払拭できてない顔だよこれ。

「なぁ、親船、」

何かないか何かないか、『親船小豆』が、白のままこの状況を切り抜けられる策は……！！

「親、」

あーもう！！

「……なんで」

「……え？」

あああああああ！！　間違えて心の中で叫ぼうとした内容口走っちゃった！　ヤバいよ相当テンパってるよ私……、……いや、待てよ？　これは……いける！！

「なんで。こんなことしてるのさ」

「……何で、って、俺は、ここで御坂妹が殺されるって知って、だから……」

「そうじゃない」

私が何を言いたいのか今一理解できてないのか、上条は一転してしどろもどろになりながら答える。が、私は冷淡な調子でその言葉を遮る。

「警備員（アンチスキル）の人から聞いたよ」

私の言いたいことを察したのか、急に言葉尻が小さくなった上条を攻め立てるかのように、私は続ける。

「妹さん……いや、『御坂さんのクローン』の死体、消えてたんだってね」

私の言葉に、上条はわずかに息を呑んだ。クローンのことが私にバレているのを知って驚いたのだろう。そんな上条の様子は特に気にせず、私は続ける。

「調べてみたらあっさり出てきたよ、第三位のクローン。噂にもなってたみたいだしね。上条くんなら多分、実験のことが許せないとか考えて行動するんだろうな、っていうのはすぐに予想がついた。見つけるのも簡単だったよ。何せ、夜の繁華街で血相変えた少年が走ってるんだもん。その足跡くらいは簡単に辿れた」

そこで一旦言葉を止めて、息を吸ってから上条の目を見据える。上条の目には、最早動揺の色はない。……あるのは、『恐怖』か。ただの優しい女子高生だと思っていた友人の、醜い差別の一面が垣間見えることを、恐れているらしい。

「……上条君、本気で『実験動物（モルモット）』を助けようと思ってるの？」

ほんの少し。冷淡な中に、僅かに怒りをにじませて私は問いかける。そこで、上条の『恐怖』は『怒り』に変わった。

「……本気で言ってるのか、それ」

『実験動物（モルモット）』というのは、多分今の上条の逆鱗だろう。実験動物として何の価値もなく『処分』されている妹達（シスターズ）を助ける為に動いているのだから、当然だが。

「あいつが、御坂妹が、ただの『実験動物（モルモット）』だって、本気で思ってんのかよ」

「馬っ鹿じゃないの」

今度こそ、私は怒りを表面化させて吐き捨てた。上条の表情が一瞬消え、非常にフラットなものになる。

「そういうことを言いたいんじゃないよ、上条くん。そんなどうでもいいことを聞きたいんじゃない」

「……、」

そう。上条の視点から見た『親船小豆』はただのクラスメイトだが、決して冷酷な人格ではない。上条と同じように、人が死んだだけでうろたえるただの女子高生だけど、それでも知り合ったばかりの人の死を悲しむことの出来る、心優しい人間なのだ。……そんな少女がこの場に来るとしたら、どういう動機なのかと言えば。

「……それは、」

「馬鹿。本当に馬鹿」

言い淀む上条を、私は情け容赦なく罵倒する。しかし、その声に本気の色はない。それもそうだ。『私』は上条の命知らずな行動を責めているのではなく、その『方法の稚拙さ』を責めているのだから。

「仮に妹さんを助けることが出来たとして、上条くんは一体その後どうするつもりだったの？　第三位と同じ容姿、そして一万人弱もいる、そんな『気味の悪い存在』を、ただ救うだけで、その後は何も考えてなかったんじゃないの？」

違う、と上条は言いたかったのだろう。しかし、私の言葉に言い返すことができなかった。だって、結局のところそうなのだ。正史でだって、上条は一〇〇三二号の命を『とりあえず救う』ことしか考えていなかった。その後の処理なんかも、冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）が全部やってくれていたしな。

まあ、そういう風に細かいこと考えてたら一〇〇三二号を救うこともできなかったろうし、それが一概に悪いというわけではないのだが、統括理事会の孫娘たる『親船小豆』が指摘するとしたら、そこだ。

「それに、第三位と無能力者（レベル0）が手を組んで第一位を倒したから実験結果が信用できないっていう考えもナンセンスだね」

ボコボコに言われた上条は、目じりに涙さえ浮かべているが私は止めてあげない。『親船小豆』としては、此処で小言を止めるわけにはいかないのだから。

「ただの無能力者（レベル0）が一人で第一位を叩き潰したっていうんならまだしも、第三位もいるんじゃ『誤差』で説明されてもおかしくない。どうせやるなら――――そう、例えば『実験の予定にはない戦闘が乱立しすぎてもうどうなるのか予想がつきません』ってレベルまで持ち込まないと」

「……、」

「分かる？　上条くん。『実験動物（モルモット）』なんて呼ばれてしまってる妹さんを助ける為には、このくらいはしないといけないんだよ。その

くらい、あの子の陥ってる地獄は重く苦しく、そしてちょっとやそっとじゃ引き抜けない領域なんだよ」

そこまで言って、私は小さく溜息をついた。

「まあ、それについては安心して。元々そんな裏方の仕事を上条君がしてくれるなんて期待してないし。大方は私がやっておいてあげたから。上条君は思う存分暴れていいよ」

「……それは分かったけど、じゃあどうして小豆は此処に？」

「決まってるでしょ」

疑問符を浮かべる上条に、私はきっぱりと言い放った。

「私だってじっとしてなんかいられない。知ってるのに、友達が今まさに死力を尽くしてるっていうのに、裏方だけやって『後は貴方達の無事を祈ってます』なんて聖者じみた祈りを捧げてるだけの自己満足じゃ納得いかない。確かに私には上条君みたいに『理不尽な力を打ち消せる』能力はないし、あそこで戦ってる御坂さんみたいに学園都市で七本の指に入るような能力もない」

まあこれは嘘だけどな。

「――――でも、私だって戦える。誰かのために立ち上がるくらいのことはできる」

上条は一瞬何を言われたのか理解できないようだったが、自分が言われたことの意味を理解すると心底嬉しそうな笑みを浮かべた。

「……そう、だな。ごめん、親船。……ははっ、おかしい話だけどさ。俺、今すっげぇ嬉しいんだ。変だよな。友達がこれから命

の危険に晒されることになるっていうのに、それよりも『俺と同じように立ち上がってくれる奴がいる』ってことがこんなに幸せで幸せで、嬉しくって仕方ないんだ」

心底おかしそうに笑う上条に、私も一緒になって微笑む。

瞬間、私の背後で爆裂音が響き渡った。……麦野、空気呼んでくれたんだね。やっぱりお前は出来る第四位だよ。

「……そうだ。俺だけじゃない。御坂だっているんだ。あいつ、多分今も戦ってるはずだ。今の爆発も……、」

「いや、今の爆発は私の部下のものだよ」

「……は？」

「さっき言ったでしょ？　『どうせなら「予定されてない戦闘が乱立しすぎていてどうすればいいかわかりません」ってレベルにしちゃえ』って。私の部下の中にも、賛同してくれる人たちがたくさんいてね。誤魔化そうとしたんだけど、着いてきちゃった」

私のカミングアウトに、上条は少しだけ眉を顰めた。多分、全くの部外者にそんな危険な役を押し付けていいんだろうかと考えてるんだろう。

「……私たちに、あの人たちを止める資格はないよ」

苦笑交じりに言う私に、上条もまたはっとしたようだ。そう、私と上条だって元々は部外者。たまたま死体を見ただけで、別に実験に関与していたというわけでもないのだ。同じように実験の存在を知って立ち上がろうとする人たちを、『お前たちは部外者だから』と追いやることなんてできるはずもない。

……これで私が此処にいる理由と麦野関連クリア。

急場で色々とボロのある理論だったが、そこのところは上条の感情を揺さぶる話し方をすることで上手くカバーできたと思う。後は……戦闘に参加してる風に見せかけて『ああ、そういえばいたよね』ポジションを獲得するだけだ！！

「……あ！　やべぇ！　御坂！　こんなところで話してる暇なんてなかった！　御坂は今も戦ってるはずだ！　こうしちゃいられない、親船ごめん、俺先に行くわ！」

「……分かった。私もすぐに行くから」

これで最後なので、より一層表情をキリリとさせた私は、そう言って上条を見送った。思わず『頑張れよー』と手を振りたくなる衝動をこらえながら上条の姿が見えなくなるのを確認した私は、一気に体から力を抜いた。

「……はぁー……、ったく、本当に心臓に悪いね、これ」

誰に言うでもなく呟いた私は、とりあえずはぐれた黒花と連絡をとることにした。

『沿受ちゃん？』

『……っ！　親船さん！　そうでしたこうやって念話すればいいんでしたテンパりすぎてて忘れてました～！』

『……どしたの？』

『どうしたもこうしたも！　いきなり麦野さんと与謝野が空中戦を始めちゃったから、余波が凄くて凄くて～！　私もう、自分がどこにいるのかすら分かりません～！！』

……えー、それはちょっと困るな。

『落ち着いて沿受ちゃん。念話の応用で私の現在位置は分からなくても、大まかな距離と方角くらいは分かるよね？』
『……あ、はい～』
『ちょっとこっちも色々あってね。上条くんに加勢することになったから、沿受ちゃんも一緒に来て』
『一緒に……上条さんと？　……ええ！！　ってことは一方通行（アクセラレータ）と対面ですか！？　いやですよ～！　なんか目をつけられそうですし～！』
『自分の反射を破った存在ならまだしも、ただのＡＩＭ系能力なんて一方通行（アクセラレータ）のお眼鏡には適わないよ』
『でも今の一方通行（アクセラレータ）じゃＡＩＭ拡散力場のベクトル操作ってできないじゃないですか！　つまり能力使ったら最後、目をつけられるの確定じゃないですか～！　やだ～！』
『文句言わないの。一人でいるよりも私の傍にいるほうが安全でしょ？』
『……、』
あ、こいつ今『確かに』って思ったな。
『分かりました～。すぐそっちに行きます。そこ動かないでくださいね～！』
『時と場合によるけど、分かったよ。あと引き続いて麦野さんへの連絡ね』
『了解です～』
『……あ、そうそう。言い忘れてたけど、ちょっとやってもらいたいことがあるんだ……』
そう告げ、黒花と何言か連絡を交わした私は、一旦念話を切る。
必要な情報は手に入れた。少しばかり都合が良すぎる気はするが、

これぱかりは僥倖と割り切るか。今はただ、後顧の憂いが晴れただけでも良しとしよう。

『Ｏ－Ｍ「やっほー。そっちはどう？」』

返事が来るまでに麦野と与謝野に横槍を入れる準備をしようと思った私だが、具体的な行動を起こす前に麦野から返事が来た。

『Ｍ－Ｏ「絶賛詰め将棋中。後一分もあれば最低でも撃退はできるが、どうする？　深追いしてでも仕留める？」』
『Ｏ－Ｍ「いや、いい。そいつよりも重要な案件が出来たからね」』
『Ｍ－Ｏ「……聞こうか」』

コンテナの向こうから聞こえてくる『ぎゃはははははは！！どうしたヘニャ○ンもう終わりかァ！！』という馬鹿笑いから察するに、おそらく麦野の表面上の態度はこれ以上ないほどにマッドなのだが、そんなことは微塵も感じさせない彼女の念話に軽く噴出しそうになりつつ、私は状況説明を開始した。

『Ｏ－Ｍ「さっき麦野さんの攻撃で私軽く吹っ飛んだじゃん？」』
『Ｍ－Ｏ「……ああ、あれは悪かったわね。ちょっと加減をミスって、」』
『Ｏ－Ｍ「あの時、上条くんと遭遇したんだよね」』

麦野からの念話が途切れた。おそらく動揺のあまり黒花に念話を送ることさえ忘れてしまっているのだろう。

『Ｍ－Ｏ「……それで？　まさかとは思うが素性バレでも……？」』
『Ｏ－Ｍ「まさか。上手く誤魔化したよ。むしろ私達の行動の自由度は随分上がったと思う。ただ、ちょっとばかり辻褄合わせに苦労

したけどね」』

私はそこでもったいぶって言葉を切り、

『Ｏ－Ｍ「私と『アイテム』は、上条君視点から見たら実験を潰す為の善意の協力者ってことになってるから。それと、それにあたって行動条件が二つ。一つ目は上条くんと会ったときに印象を悪くさせないために、馬鹿笑いと罵倒語禁止。それから、上条くんの一方通行（アクセラレータ）撃退に協力すること。ああ、協力と言っても毒にも薬にもならない程度で良いよ。あとはまあ……苦戦してるようなら手伝おうかと思ったけど、あと一分で片付くんなら別に良いね。滝壺ちゃんの消耗は最小限にして、手早く終わらせて私に合流。その後一方通行（アクセラレータ）戦に介入するよ。一応適当に絹旗ちゃん組にも連絡しといて」』

『Ｍ－Ｏ「まあ、そのあたりが妥当か。……にしても適当って……絹旗とフレンダはどうするつもりだ。お前と合流ってことは、つまり二人が合流する筋書きはパァだろ？　前にも言ったが絹旗はともかくフレンダは集中砲火されたら耐え切れない。二人を合流させる手立てがないんなら、フレンダは一人で戦う羽目になるぞ？』

麦野が怪訝そうな色を持って念話を投げかけてくる。……ご尤も。しかし、先ほどの黒花との念話で後顧の憂いは断ってある。

『Ｏ－Ｍ「それに関しては問題ないよ。どういうわけか、今回の襲撃は与謝野一人らしいからね」』

実は先ほどの念話で、黒花に心理同調（コンフォーミティ）を利用した広域索敵を使ってもらっていたのだ。その結果、操車場どころか周囲二キロ圏内には剥離要素（エラーポイント）は勿論無関係の人間は一人もいないという結果が返ってきた。……実際には、能力者じゃないから引っかかってないだけで万一のときの処理の為に猟犬部隊（ハウンドドッグ）とかまぎれてそうだが、私の介入

に対して干渉してこないところからも今回は本当に『万が一の事態』のときだけ接触するスタンスなんだろう。

『Ｍ－Ｏ「一人……？　何でまた」』

改めて疑問の声を念話に乗せる麦野だが、流石にそこまでは分からない。

理論の上で言えば『与謝野の能力は複数の拡散力場の存在の上に成り立っているものだから、不用意に手駒を失う可能性のある危険な戦場に立たせないようにしている』という理由付けは出来るが、それだと暗部一色の『アイテム』戦に剥離要素（エラーポイント）を三人も投入した理由がなくなる。

与謝野が組織としての剥離要素（エラーポイント）の実権をそこまで握れていない可能性も考えられるが、単純に原作で登場したポピュラーなイベントの出番を与謝野が独り占めしたかったと考えたほうが自然だ。……こんな動機が一番自然だと思えてしまう奴というのも、なんとなく悲しい話ではあるが。

『Ｏ－Ｍ「さぁ……？　でも、そういうわけで剥離要素（エラーポイント）による襲撃の可能性はないから、適当に連絡入れるなりして一方通行（アクセラレータ）戦の手伝いしてほしいなーって」』

『Ｍ－Ｏ「……了解。一応そっちに向かうが、流れ弾でうっかり死んだりするなよ」』

『Ｏ－Ｍ「縁起でもないフラグ立てないでよ」』

麦野の念話に軽口で返し、私は上条が走り去って言った方向を見据える。

……一方通行（アクセラレータ）かぁ……、やだなぁ……。いや、他の超能力者（レベル5）に比べたらずっとピュアな子だと思うけどね？　でも、なんか面倒くさそうなんだよなぁ……。上条の手前、割裂空洞（ダークホール）以外の能力を使

うわけにもいかないし。まあ、その為の麦野たちなんだが。あと一分で片付くって言ってたし、今から適当に走ってれば上条のところに到着する前に合流してくれるだろうか。

「親船さん～！」

そんなことを考えていると、背後から緊張感を伴っているはずなのにどこか間延びした声が聞こえた。振り返ると、踝（くるぶし）くらいまであるメイド服のスカートを両手で持ち上げた黒花がいた。……遅くはないけど、なんとなく走りづらそうだな。今度ミニスカートも用意してあげようかな。

「よし、来たね。それじゃあ行こうか」

「はい！」

ようやく面子が揃った。さて、『どれだけ介入してるように見せかけて実質は傍観していることができるか』。此処が今回の事件の正念場だなぁ……。

＊＊＊

地面そのものが響くような音が連続していた。透視能力（クレアボイヤンス）を用いて

観察してみると、どうやら御坂が電撃で一方通行（アクセラレータ）を牽制しながら電撃で大規模な電離を発生させて酸欠にさせる作戦をとっているようだった。上条も介入のタイミングをうかがっているようだが、下手に突っ込んだら巻き込まれてしまうので迂闊に手を出せていないようだ。

「……どうなってます～？」

「御坂さんが大奮闘。上条くん正直足手纏いだね」

「それは、超能力者（レベル5）ですし～……。でも、彼女だけでは決定打にはなり得ませんよね？」

「……そこにどう切り込んでいくかが問題なんだけど、ねぇ……」

……うーむ、どうもジリ貧くさいな。とはいえ私が介入したところで状況が好転するはずもなし……。

「親船、待たせたわね」

「あれ、くろばなも居たんだ」

そんなことを考えていると、軽やかな着地音と共に麦野が後ろに降り立った。……空飛んできたんだね、滝壺を横抱きにしてるし。

「いい所に来たね、麦野さん。与謝野は？」

「『滝壺にお前の能力を解析させて御坂にやったみたいに封印させてやろうか？』って脅しかけたら逃げたわ」

「そう。まあ妥当だね。滝壺ちゃんの調子は？」

「一応体晶は持たせてるけど、まだ能力は温存してるわ。与謝野の能力は三〇メートルも距離を置けば安全だったし」

まあ、私が一五メートル距離をとっただけで能力範囲から逃れることが出来たし。原子崩し（メルトダウナー）にとっては三〇メートルの距離なんてあ

ってないようなものだからなぁ。

「流石に第一位に出し惜しみはできないから、一方通行（アクセラレータ）と戦闘になったら容赦なく使わせてもらうからね。滝壺ちゃん、問題ない？」

「うん、構わないよ」

滝壺が力強く頷いたのを確認した私は、麦野に目配せする。頷いた麦野は、そのままダン！！　と地面を踏みしめて飛び上がった。

「……行ったね。それじゃ沿受ちゃん。私たちも行くよ」

「はい！」

まあ、行くと言っても目と鼻の先なんだがな。それじゃあ……、

「はい、瞬間移動（テレポート）」

私の言葉と同時に、黒花と私の体は上条と一方通行（アクセラレータ）の死角となるコンテナの陰に移動した。同時に、麦野がコンテナの上に着地する。

「……あ、アンタは！」

「……あんたが、親船の言ってた『部下』か？」

現れた麦野にまず御坂が反応し、次に事情を知ってる上条が問いかける。

「正解。微力ながら助太刀に来た……、ってところかしらね？」

「……、」

『部下』って柄じゃないだろうに、という御坂のツッコミが聞こえてくるようだった。

『沿受ちゃん。御坂さんに念話ね』
『はいきました』

とりあえずボロを出されても困る。私は即座にフォローを出すことにした。

『「あーあー、御坂さん、聞こえる？」』
『「……ッ！？　何、なになに！？　新手！？」』
『「違う違う。私だよ、親船小豆」』

念話だというのに頭がキンキンするような声色を忠実に再現するという黒花の無駄な仕事の洗練さに呆れつつ、私は念話を返す。御坂も納得したのかある程度落ち着きを取り戻し、

『「何のつもり？　まさかアンタが馬鹿正直に私に助太刀しようってつもりじゃないのは分かるけど」』
『「人聞き悪いなぁ、そのまさかだよ。……と言いたいところだけど、……まあなんというか。御坂さんに都合の悪いことを企んでるわけじゃないから、それで手打ちにしてくれないかな？　で、本題だけど。一応今のところ麦野さんは私の部下で、御坂さんたちを助けに来た助っ人超能力者（レベル5）っていう立ち位置だから。そのつもりで口裏合わせてね」』
『「……アンタ、ホントに何のつもりなのよ……」』

呆れたように呟く御坂の小言はスルーし、私は念話を打ち切る。これで話すべき内容は全て話したしな。改めて、私は麦野の方を観察する。どうやら麦野は上条に一応の自己紹介し終えたらしく、一方通行（アクセラレータ）と話しているところだった。後は頃合を見て瞬間移動すれば、ついに戦闘開始、か……。

……今更だけど、一位とバトルとか嫌だなぁ……逃げたいなぁ……。

幕間０２／とある少女の東奔西走（ハードワーク）（前書き）

麦のん視点です。

幕間０２／とある少女の東奔西走（ハードワーク）

幕間０２／とある少女の東奔西走（ハードワーク）

ｓｉｄｅ麦野

始まりは黒花から届いたとある念話からだった。

『Ｏ－Ｍ「与謝野と遭遇。滝壺ちゃんを回収してコッチに来てくれない？」』

その言葉に、私は余計な感慨を抱くよりもまず『三組も居てどうしてあいつのところに親玉が来るのか』という呆れを感じた。

これは前々から考えていたことだが、どうやら私の可愛い雇い主サマはどこぞの幻想殺し（イマジンブレイカー）よりもよっぽど性質（たち）の悪い『不幸』を抱え込んでいるらしい。くだらない思い込（ジンクス）みなどは信じない性分の私だったが、魔術という科学の法則では説明できない現象がある以上、そんなこともあり得るだろうというくらいには考えることができるようになっていた。

その後は簡単な情報交換と今後の指針の確認。

まさかあの親船が無策で各チームのパワーバランスを崩すような指示を送るとは思えないし、同様にそんな指示を送らなくてはならないほど切羽詰った状況に与謝野が持っていけるとも思えなかったから、緊張感はあまりないが、あれで親船はたまにこちらの予想の斜め上を行く奇策を至極当然のように打つことがある。万が一というのもあるし、確認は必須事項だ。

……しかし、滝壺を拾って与謝野とぶつける、ねぇ……。正直なところ、素人の与謝野ごときならどのチームにあたっても潰せるような編成だったはずなんだけど。

滝壺と絹旗は滝壺のバックアップと絹旗の近接戦闘で殆ど詰みだし、私にいたっては相手の射程距離外からチクチク原子崩し（メルトダウナー）をぶっ放せばそれで事足りる。

親船と黒花……は、相性的には最低だがあいつの頭脳があるんだから負けは絶対にない。……いや、垣根戦のときに使った『右腕』でも出してやれば即座に決着が着くと思うんだが……、いや、あいつが隠し玉を簡単に披露するとは思えないし、異能略奪（スキルインターセプト）を食らう確率は万が一でも減らしたいといったところだろう。

「フレンダ」

「……んー？　なになに麦野ー？」

……この報告を伝えるのは非常に心苦しいわね。そう思いながら、私が隣でだらけきっているフレンダに声をかけると、相変わらずの能天気な調子で私のほうを振り返った。……ああ、この顔は『超能力者（レベル5）の第四位様がいるんだから結局私は今世界で一番安全な人間って訳よーっ！』って思ってる顔ね……。

「悪いけど、親船から招集がかかった。少しの間だけ留守番してくれない？」

「なばっ！？！？」

私が要件だけ簡潔にまとめて説明した瞬間、フレンダは女子が口にするには少しばかり危険な悲鳴をあげた。……悲鳴？　まあいい。

「なーにを血迷っちゃってるの麦野ォォおおおおおッ！？　私に

そんな大役がこなせるとでも思ってんの!?　万が一与謝野がこっちに来たらどうするの!?　結局死ぬでしょ、私！　与謝野にじゃなくて親船に殺されちゃうでしょうが！！」

「あー、それなら問題ない。与謝野が来たのは親船の方だから。それに、お留守番って言ってもほんの数分だから。いくらアンタでも、流石に強能力者（レベル3）や大能力者（レベル4）の一人や二人くらい、一分持たせられないわけないでしょ？」

「……う、でもそれは状況を整えたらの話であって、麦野が全部片付けてくれると思ってたから余計な仕掛け（ギミック）なんて用意しないし……」

「文句は聞かないわ。決定事項だから。それじゃ」

「あー！　待って麦野ー！　見捨てないでー！」

この期に及んで縋ろうとするフレンダを軽く突き飛ばして、原子崩し（メルトダウナー）の爆発を利用して飛び上がる。……いくら超能力者（レベル5）の機動力があるとはいえ、これは流石に働かせすぎじゃないか？　と疑問を抱きつつ、私は滝壺と絹旗のチームのところにまでやってきた。

「――という訳で、滝壺は借りていくわよ」

「……まあ滝壺さんは殆ど与謝野対策にしか活躍する予定がありませんでしたから貸し出しそのものは超問題ないですけど。……麦野も超大変ですね。多分与謝野を潰した後も超たくさんお仕事が待ってそうな空気ですし」

「そんなむぎのを、私は応援してる」

「はい、無駄口叩かない」

説明もそこそこにいきなり切り出したのにいやに同情的な二人にそう言って、私は滝壺を抱きかかえる。

肉感的な感触とは裏腹に、滝壺の体重は意外と軽かった。……体晶、か。出来ればあんなモン使わせないうちに片付けたいが、殺すとなると与謝野もある程度本気にはなるだろう。流石に無使用は厳

しいか……。

そんなことを思いながら、私は此処にきたときと同じように足元の地面を原子崩し（メルトダウナー）で熱して爆発、瞬時に加速して空を駆けた。『電翼』は消費が多すぎて使えないが、移動だけなら地面の爆発と体勢維持の為の最小限の能力使用だけで十分なので、私は密かにこの移動法を確立させていた。……まあ、案の定親船にはいつの間にか気付かれていたわけだが。

親船のいる位置と私の受け持ちはほんの一キロ弱しか離れていない。原子崩し（メルトダウナー）で風圧を打ち消すのは負担が大きすぎるからそこまで速度は出せないが、この速度なら一分とかからないだろう。

そうこうしているうちに、親船の受け持ちである地点が見えてきた。親船と与謝野は、一五メートルほどの距離を置いて何事かの会話を交わしているようだった。

……なるほどね、確かに与謝野相手なら下手にやり合うより会話に走ったほうが長く時間を稼げるわけではあるけど……、……潰す気はゼロかよ。良いご身分だなクソッタレ。そんな苛立ちを感じながら二人の間に原子崩し（メルトダウナー）を叩き込む。が……、

「あ〝っ！」

失敗した、と思ったときには時既に遅し。原子崩し（メルトダウナー）は私の想定以上の威力を以って親船を吹っ飛ばしてしまった。……高速移動中の放射はちょっとした集中のブレで威力が変動しちまうから要注意ってのは分かってたのに……まあ、死んではいなさそうだし気にするだけ無駄ね。

「……チッ、勢い余って飛ばしちまったか。悪（わ）りぃな親船」

「今の、わざとじゃないの？　むぎの」

「人聞き悪いわね。過失よ」

吹っ飛ばした親船の方は見ずに言い放った私に、滝壺がツッコミを入れてくる。そのツッコミを適当に流した私は、もう片方の被害者……与謝野の方に目を向けた。

「……！」

……緊張してるわね。流石に私が超能力者（レベル5）ってことは耳に入れてる、か……。

「お前らが沈利に理后か」

……、……。

ぞわり、と。

体中の肌が粟立つのを感じたと同時、私は殆ど反射的に原子崩し（メルトダウナー）を与謝野に叩きつけていた。

「うおおおおっ！？　危ねえな！　当たったら死ぬぞ！　カワイイんだからそういうことしなけりゃ良いのによ」

……私がカワイイ？

んなもん自分で良く分かってるからテメェに言われるまでもねェんだよッ！！

「むぎの、今凄いナルシ入ったね」

「うるさい滝壺。……そうねえ……、与謝野菱形くん、だっけー？」

滝壺のツッコミはスルーして、与謝野に問いかける。くん付けで呼ばれた与謝野は気を良くして、

「菱形くんで良い」

口を挟んできたが、私はこれもスルーする。

「君さあ……、」

全く以って気持ち悪い。黒花がコイツのことを毛嫌いしていた理由が少しだけ分かった気がする。なんて言うんだろうか……下劣な視線？　いや、それとはまた違ったベクトルの不快な視線をこいつから感じる。常に。

「キモいから、ブチコロシね」

与謝野は、『は？』とさえ声を上げられなかった。私がそう言い切った次の瞬間には、無数の原子崩し（メルトダウナー）で存在を塗りつぶされようとしていたからだ。まあ当然、与謝野もこれは躱（かわ）す。通常時の私の原子崩し（メルトダウナー）を真っ向勝負で捻じ曲げられる存在なんて、第三位くらいのものだしね。

高速移動か何かで上空に逃れた与謝野を見据え、私は自分が盾になるように滝壺を降ろす。

「はっはァ！　オンナノコに幻想抱いちゃってるドーテーくんの常識、ブチ壊しちゃおっかなァァああッ！！」

ギュン！　という電子音とともに、無数のレーザーが与謝野を襲う。しかし当然、与謝野は簡単にこれを躱していく。右、左、上、左、下、無数のレーザーの中のごく僅かな安全地帯を見つけ出し、そこに体を滑り込ませていた。……ちょっと前にやったシューティングゲームのプレイヤーみたいに滑らかな動きだ。

「あは、」

全てが計算どおりに運んでいることへの快感に、私は思わず笑みを漏らした。シューティングゲームというのは、相手の攻撃の隙間に潜り込むのも楽しいが、なるほど『攻撃を作る側』というのも面白いものだ。

親船が相手を策に陥れるときには、こんな気分を味わっているのかと思うと、彼女が策謀に走りたがる理由もどこか分かる気がした。……いや、アイツの場合相手を陥れることに快感なんか感じる余裕ないんだろうけど。

「う、……、……！」

滑らかに躱しているとはいえ、与謝野は高速移動で何とかレーザーを回避しながら接近しているような状態だ。とても口を動かせるような状態ではない。……その上、このシューティングゲームに与謝野の勝利はない。

わざわざ無数の原子崩し（メルトダウナー）を放っている理由は単純。私の体力を温存し、かつ相手を完璧に葬り去る。それだけだ。与謝野に対して馬鹿正直に極太レーザーを撃って消し飛ばそうとしても回避される可能性が高い。

与謝野が高速移動で私の弾幕をかいくぐっているのは、私に接近して異能略奪（スキルインターセプト）を発動させる為だけであり、回避しようのない弾幕がやってくれば即座に弾幕の範囲から抜け出し、私から距離をとるだろう。だから、奴から簡単に希望を奪うようなことをしてはならない。私の掌の上で踊らせ、『確実に始末できる機会』が来るのを待つ。

「オラオラどうしたァ！　躱すだけじゃいつまで経っても私にゃ辿

りつけねェぞォ！」

「それは……、どうかな……ッ！」

冷や汗を垂らしつつ、原子崩し（メルトダウナー）の隙間に潜り込む与謝野。冷静に考えることができれば『自分が躱すことの出来る程度の隙間が常に相手の攻撃に発生している』ことに何か違和感を感じても良い訳だが、全力で回避している人間がそんなことを考えられるはずもない。

……そろそろいい距離かしらね。

与謝野と地面の距離を見比べながら、私は心中で舌なめずりしながらそう思った。今のアイツは四方八方を原子崩し（メルトダウナー）のレーザーに囲まれている状況だ。回避しようと思えば簡単に外側に出ることが出来るわけだが……なら、外側からさらに攻撃を加えればどうなる？

奴と地面の距離は精精四メートル程度。そのくらいの距離であれば、原子崩し（メルトダウナー）で派手に地面を爆発させればマグマが届く距離だ。四方八方をレーザーに囲まれている状態で、新手のレーザーを躱しつつマグマの防御……それは、たとえ第三位だろうと出来ない所業だ。

「さァて菱形くゥゥん！　焼き加減は何がお好みかなァあッ！」

ゴバッ！！　と地面が爆裂した。

同時に、ダメ押しとばかりに原子崩し（メルトダウナー）の物量を増やして与謝野の逃げ道を完全に封鎖させる。唯一の脱出経路にはマグマがあるわけだから、これで与謝野は完全に死んでくれるはずだが……、

「ぐ、熱（あ）っちィィいいいいッ！？」

……残念ながら、死んでくれなかったようね。多才能力（マルチスキル）の手数を見誤ったか？　念動力（サイコキネシス）を使えば確かにマグマくらいは払えるかもし

れない。とはいえ、それでも原子崩し（メルトダウナー）に対応しながらマグマの発生を察知できるはずもないと思うのだが……、

「むぎの。ＡＩＭ拡散力場を探知されたんじゃないの？」

適当に原子崩し（メルトダウナー）を撃ちながら何故仕留め損ねたのかを考えていると、後ろから滝壺の声が聞こえた。

……なるほどね、拡散力場か。確かにそれなら私がマグマを生み出す直前に攻撃を探知して回避行動を事前にとれた可能性がある。アイツは親船と違って『ＡＩＭ操作』の応用で多才能力（マルチスキル）を手にしているわけだから、多才能力（マルチスキル）とは別にＡＩＭ探知の能力者としても見なくてはいけなかった訳だ。

「……なるほど。それじゃあ原子崩し（メルトダウナー）のレーザーに頼った攻撃じゃイタチゴッコになる可能性があるわね……」

「体晶、使う？」

「いや。あんな三下ごときに使っちゃ色々な方面に申し訳が立たないわ」

言いながら、私は次の手を考える。単なる多才能力（マルチスキル）とＡＩＭ探知だけなら、原子崩しを陽動に使った肉弾戦でブチコロシなんだが、奴の能力はあくまで『異能略奪（スキルインターセプト）』。下手に接近されたら能力を奪われるのは火を見るより明らかだ。

……ううん……、やっぱり此処は変に時間短縮は狙わず、『絶対にこっちに接近できない状況』を維持しながらチクチク撃っていくのが妥当か？　今回は時間制限があるわけじゃない。むしろ相手のほうにあると言っても良い。実験が終了すればおそらくコイツは前回みたいに帰っていくからな。……全く何を考えているのか分からないが。

ともかく、それでなくとも相手に『こんな奴を相手にするのは割

に合わない』と思わせておけば簡単に撃退できるはずだ。

「オラオラどうしたクソガキがァ！　チョコマカ逃げてるだけじゃいつまで経っても始まらねえぞォ！」

「くッ……そッ！　何だよコイツ！　いきなりブッ飛びやがっておっかねえ！」

「だァから女に幻想抱いてんじゃねえっつってんだよ童貞！　その汚ねえツラ爆散させてやっからちょっとそこで止まってろォ！」

与謝野のことを頻繁に挑発しながら、レーザーを断続的に撃ち込む。……当然、何も考えてない訳じゃない。撃ち込みながら、演算代理機を使って与謝野の回避パターンを集計し、次にとる可能性が一番高い移動方向を予測、さらにそこに適切な攻撃を撃ち込むことで相手の動きを制限しているのだ。

幸い、この程度の演算なら私にもリミットはないに等しいしな……。相手が自分が詰め将棋に追い込まれていることに気付けばそれでよし、気付かず第一位と幻想殺しの戦いが収束するまで逃げ回ってるんならそれもいい。私は樹形図の設計者じゃないから何手でアイツが音を上げるかなんて分からないが、おそらく三〇〇手もやってれば諦めてくれるだろう。

「おらァ！　さっきまでの威勢はどうした菱形くゥん！　逃げてばっかじゃお姉さんを楽しませることなんざできねえぞォ！？」

「ぐ……ッ！　ぁ、……！」

焦燥感を煽る為に挑発を繰り返すが、与謝野は既に必死すぎて聞こえていないようだ。……此処でマグマを叩き込めば殺せるか？……いや、マグマに集中を散らした一瞬の隙に逃げられる可能性がある。与謝野の多才能力のレパートリーには瞬間移動は存在していないようだが、風力操作系や念動力系はたくさん取り揃えてるみた

いだからね。

そんなことを考えながら原子崩し（メルトダウナー）を撃ち込んでいると、親船から念話が入ってきた。

『Ｏ－Ｍ「やっほー。そっちはどう？」』

このタイミングで念話を送ってくるってことは、……何か動きがあったか？

『Ｍ－Ｏ「絶賛詰め将棋中。後一分もあれば最低でも撃退はできるが、どうする？　深追いしてでも仕留める？」』

『Ｏ－Ｍ「いや、いい。そいつよりも重要な案件が出来たからね」』

片手間でレーザーを撃ち込みながら問いかけると、親船は真面目な調子でそう答えた。……重要な案件？　与謝野の撃退よりも重要な案件というと……第三位か、幻想殺し（イマジンブレイカー）関連だろうか。

片方が死んだとかか？　幻想殺し（イマジンブレイカー）が死んでくれていたら少しばかり愉快な展開が見れそうだが。とはいえ、親船が『重要な案件』というのだ。何かマズイ話かもしれない。

『Ｍ－Ｏ「聞こうか」』

少し思案した後、私はそう答える。すると答えた次の瞬間、与謝野から小型の炎が飛び出してきた。……念話に意識を傾けていた私は少し面食らいつつも、原子崩し（メルトダウナー）の攻撃を継続しながら並列して壁を生み出し炎を回避する。……これで何十手が短縮できたかしら？

「ぎゃはははははは！！　どうしたヘニャ×ンもう終わりかァ！！」

とりあえず返す刃で少しばかり原子崩し（メルトダウナー）の攻撃を増量させながら、親船の返事を待つ。

『Ｏ－Ｍ「さっき麦野さんの攻撃で私軽く吹っ飛んだじゃん？」』

……？　何だ？　あの時怪我を負って、それが原因で瞬間移動（テレポート）が出来ないとか、そのあたりかしら？　重傷ではないだろうが……。フレンダから救援信号は出ていないからまだ差し迫った危機はないが、そうだとしたら少しマズイかもしれない。とりあえず謝っておくか。対処はその後考えれば良い。

『Ｍ－Ｏ「……ああ、あれは悪かったわね。ちょっと加減をミスって、」』

『Ｏ－Ｍ「あの時、上条くんと遭遇したんだよね」』

……！？　何、幻想殺し（イマジンブレイカー）と！？　驚愕のあまり、原子崩しの照準がブレてしまう。……一〇〇手ほど相手に余裕を生んでしまっただろうが、そんなことは気にならなかった。

まさか素性バレでもしたか？　マズイわね……、表の世界の人間に私達裏の人間の存在がバレるのは非常にマズイ。下部組織を使って記憶を……消せるか？　あの幻想殺しの能力を超えて。ちょっとした拍子に頭に触れれば能力が解除されるだろう。

薬物ならばどうにかなるかもしれないが、そもそも奴を捕まえるのが難しいだろうし、メインプランに下手な干渉をすれば小豆の地位が危ない。

『Ｍ－Ｏ「……それで？　まさかとは思うが素性バレでも……？」』

そう言って、私は小豆の返事を待つ。

……最悪の場合、私が『泥』を被る必要がある。たとえば、『小豆に反旗を翻した後に小豆に罪を擦り付ける為にメインプランの一人、上条当麻を殺害しようとした』……とかな。

『Ｏ－Ｍ「まさか。上手く誤魔化したよ。むしろ私達の行動の自由度は随分上がったと思う。ただ、ちょっとばかり辻褄合わせに苦労したけどね」』

しかし、親船は私の悲壮な覚悟を蹴り飛ばすようにあっさりとそう言い放った。……そうね、そうだったわ。コイツがその程度のイレギュラーで躓くはずがない。とすると、『辻褄合わせ』によって新たに行動条件が生まれたってところか。

『Ｏ－Ｍ「私と『アイテム』は、上条君視点から見たら実験を潰す為の善意の協力者ってことになってるから。それと、それにあたって行動条件が二つ。一つ目は上条くんと会ったときに印象を悪くさせないために、馬鹿笑いと罵倒語禁止。それから、上条くんの一方通行（アクセラレータ）撃退に協力すること。ああ、協力と言っても毒にも薬にもならない程度で良いよ。あとはまあ……苦戦してるようなら手伝おうかと思ったけど、あと一分で片付くんなら別に良いね。滝壺ちゃんの消耗は最小限にして、手早く終わらせて私に合流。その後一方通行（アクセラレータ）戦に介入するよ。一応適当に絹旗ちゃん組にも連絡しといて」』

『Ｍ－Ｏ「まあ、そのあたりが妥当か。……にしても適当って……絹旗とフレンダはどうするつもりだ。お前と合流ってことは、つまり二人が合流する筋書きはパァだろ？　前にも言ったが絹旗はともかくフレンダは集中砲火されたら耐え切れない。二人を合流させる手立てがないんなら、フレンダは一人で戦う羽目になるぞ？』

親船の言葉に、私は問いかける。

今のところフレンダからの救援信号はない訳だが、それでもいつ

剥離要素（エラーポイント）が来るか分かったものじゃない。今のフレンダの装備は多分ロケット弾とプラスチック爆弾とテープ爆弾程度だろうから、大（レ）能力者（レベル4）が二人も来たら対処しきれないだろう。……何か策でもあるんだろうか？

『Ｏ－Ｍ「それに関しては問題ないよ。どういうわけか、今回の襲撃は与謝野一人らしいからね」』

『Ｍ－Ｏ「一人……？　何でまた」』

親船の回答に、私は思わず聞き返してしまった。

『Ｏ－Ｍ「さぁ……？』

……何か知ってそうだが、今のところ私に教える必要はないということだろう。気になるところだが、いつか親船が話す気になったら話せば良い。こいつは私が聞かないと困ることはちゃんと話してくれるしな。

『でも、そういうわけで剥離要素（エラーポイント）による襲撃の可能性はないから、適当に連絡入れるなりして一方通行（アクセラレータ）戦の手伝いしてほしいなーって」』

なるほどね。それで『適当に連絡』か。

まあ絹旗はともかくフレンダが役に立つかは分からないが……いや、矢面に出ない親船が『部下がこれだけ頑張ってるのは上司である私の功績だよ』っていう印象を与えたいだけか。……一方通行（アクセラレータ）くらいなら私と滝壺が遠距離からちょこちょこ妨害してやればそれだけで十分『働き』はこなせてると思うが。

『Ｍ－Ｏ「……了解。一応そっちに向かうが、流れ弾でうっかり死

んだりするなよ」』

『Ｏ－Ｍ「縁起でもないフラグ立てないでよ」』

最後に軽口を叩き合い、私は意識を戦場に戻す――前に、黒花に念話を送った。

『黒花。フレンダと絹旗に連絡。「剥離要素（エラーポイント）乱入の心配はないから、第一〇〇三二次実験場に集合」』

『……Ｆ－Ｍ「それは私に『死ね』と言いたい訳？」、Ｋ－Ｍ「超了解です」』

『絹旗は話が早くて助かるわ。フレンダには三分で到着しなかったらオシオキって伝えておきなさい』

『相変わらずフレンダさんには容赦ないですね……。分かりました』

これで二人に関しては問題ない。やるべきことを終えた私は改めて意識を与謝野に戻した。勿論だが、先ほどからずっと原子崩し（メルトダウナー）による攻撃は継続中だ。さっきは『数百手』と言ったが、与謝野も人間だからそろそろバテているはず。そろそろ退散する頃だろう。……が、割と一刻を争いそうだし、追い討ちをかけてやる。

「……菱形くぅん？」

私は意図的に狙撃の手を緩めながら、与謝野に声をかける。奴に話をさせるだけの余裕を与える為だ。勿論、反撃に移るほどの隙は与えないがな。

「……なんッ、だ……ッ！」

「さっきからさぁ、私の後ろにいるこのコのこと忘れてない？」

レーザーを撃ちながら親指を立てて後ろの滝壺を指した私に、与

謝野は軽くぎょっとした。目だけを動かして滝壺の様子を確認すると、明らかにトランスした表情で何事かをブツブツ呟いていた。

『Ｍ－Ｔ「滝壺!?　体晶やったのか!?」』

私は一瞬面食らったが、それを表情に出さずに念話で問いかけた。いくら滝壺でも私の許可なく体晶を使うとは思えないが……、

『Ｔ－Ｍ「いや、演技だよこれ。そろそろむぎのも追い込みに入ると思って」』

……気が利く……といえばいいのだろうか？　ここは。とりあえず念話で褒めてやりながら、私は与謝野との会話を続ける。

「……むぎの。逆算、終わったよ」
「……だ、そうだぞ？　菱形君よォ」

それを聞いた与謝野の体が、明らかに強張った。

「……逆、算!?」
「ああそうだ。知ってるんだろう？　テメェはＡＩＭ系の能力で、後ろの滝壺も同じＡＩＭ系の能力だ。それもテメェ以上の、な。つまり、テメェの能力をその防御の上から強引に『封印』することだって可能な訳よ。分かる？　この事態の意味することが」
「……ッ！」

次の瞬間、与謝野は私が意図的に作った穴から高速で抜け出した。その表情は焦っているというよりもどこか、悲壮や絶望などの色を濃く刻んでいた。

「……逃がすと、思ってんのか？」
「逃げるんだよ！！」

適当に撃ち込んだ原子崩し（メルトダウナー）を必死に回避しながら、与謝野は逃走する。追いかけてもいいが……、それよりも今は親船の援護だ。あんな三下に構っている暇はない。

……にしても、あいつが滝壺の能力を詳しく知らなくて助かったな。滝壺の能力は体晶がないとまともに発動させることさえできない。上手くハッタリでごまかせたのは幸運だった。

「……むぎの。急がないと」
「分かってるっての」

すぐに後ろを振り向いた私は、滝壺を横抱きにして足元のコンテナを爆裂させ、その反動で空中に飛び上がる。上から見るとあたりの景色が一気に俯瞰できる――、親船はあそこか。

「……こうしてると、何だかむぎのが王子様みたいだね」
「やめてよ滝壺。これでも私は年頃の女の子だぞ」

……割と真面目な思いだったりする。確かに化け物みたいな戦力を持ってるが、私だってお洒落したい年頃なんだ。親船みたいに半ば女を捨ててるわけでもないし、魔王みたいに扱われるのも嫌だ。

「……年頃の女の子は、どーてーとかふにゃ×んなんて口走らないよ」
「……、……黙りな」

一応、自分の戦意を向上させる為というのと、相手に私を三下だと思わせて油断を誘う為の作戦なんだけど……、……改めた方が、

いいのかしら……。そんなことを考えつつ、しかし表面上は憮然とした態度で切り捨てた私は、空中でさらに空気を爆裂させて親船の背後に降り立つ。既に黒花との合流は済ませているらしく、親船の半歩後ろに黒花が就くいつもの体制になっていた。

「親船、待たせたわね」

「あれ、くろばなも居たんだ」

私たちの到着に気付いた二人は、すぐさま振り向いてきた。黒花が私たちの姿を見るなり恭しく会釈する。親船は満足そうに笑い、

「いい所に来たね、麦野さん。与謝野は？」

「『滝壺にお前の能力を解析させて御坂にやったみたいに封印させてやろうか？』って脅しかけたら逃げたわ」

実際にはこうは言っていないが、大体同じことだ。

仮にも一つの組織の長としては相当に小物くさい幕引きだったが、親船はさほど相手の対応に落胆する様子も見せない。……こいつの価値観で言えば、『駄目なときは潔く退くのが賢い人間』だからな。危なくなったら逃げるのは全然小物くさい行為じゃないのかもしれないが。

「そう。まあ妥当だね。滝壺ちゃんの調子は？」

「一応体晶は持たせてるけど、まだ能力は温存してるわ。与謝野の能力は三〇メートルも距離を置けば安全だったし」

「流石に第一位に出し惜しみはできないから、一方通行（アクセラレータ）と戦闘になったら容赦なく使わせてもらうからね。滝壺ちゃん、問題ない？」

「うん、構わないよ」

やはり、体晶は使うか……。第一位の能力に割り込みをかけたら、

滝壺の『限界』が来るかもしれないが……、まあ、その時は滝壺は正式メンバーから降ろして親船系の下部組織の一員に組み込んでやればいいんだが、どうも胸騒ぎがとれない……。そんなことを考えていると、親船が目配せしてきた。『行け』ってことか。まあ、時間もないしな。さっさと行くか。

私は地面を爆裂させて飛び上がる。戦闘現場はすぐそこなので、ひとっ飛びしたら第一位と第三位、それから幻想殺し（イマジンブレイカー）が一望できた。

「……むぎの。余計な心配はいらないよ。私は自分の役目を果たすだけだから」

「……テメェのそれこそ余計な心配だよ。第二位を蹴散らした私がいるんだぞ？　余計な気遣いする暇があるんだったらフレンダと絹旗との連絡してろ」

「……うん」

滝壺にそう言い含めておいた私は、三人の視界に入りやすいようにコンテナの上に降り立つ。すると、戦闘していた三人の視線が一気に私達に集中した。三人の視線に晒される中で、滝壺を私の後ろに降ろしてやる。

「……あ、アンタは！」

「……あんたが、親船の言ってた『部下』か？」

第三位が取り乱したように声をあげ、幻想殺し（イマジンブレイカー）が訝しげに問いかける。

「正解。微力ながら助太刀に来た……、とでも言えばいいか」

「……、」

私はそれに対し、なるべく優雅な動作を心がけて答える。こうい

うのは第一印象が重要だからな。いきなり口汚い言葉を吐いたら駄目だって親船にも釘を刺されてるし……。

「……オマエは何だ？　ドコの組織の人間だ」

「お前に答える義理はないわね」

不機嫌そうな調子で問いかけた第一位に、私は出来るだけ精神を逆撫でできるように答えた。

「……ただまあ、少しくらいは教えてやろうか」

右手で肩にかけた髪を弄りながら、私は言う。

「学園都市第四位――麦野沈利。そこのガキどものお助け役ってところかしらね」

12

「ギャハ、」

麦野と会話していた一方通行（アクセラレータ）が、小さく笑う。多分麦野にプライドを傷つけられたとかそのあたりだろう。私は割裂空洞（ダークホール）を作って瞬間移動の準備をする。

「第四位のオマエが、助っ人？　ギャハハハ！　さっすが超能力者（レベル5）は違うなァ！　笑いのセンスがポンコツ共とは段違いだぜェ！」

全くだ。第四位の麦野が真正面から第一位にぶつかって生き残れるなんて、そんなものは最早ファンタジーである。……そこまで分かってるのに『じゃあ何か小細工をしてくる可能性があるな』って思わないから君は正史でも上条に負けたんだね、一方通行（アクセラレータ）君。

まあそれはともかく。

戦闘、戦闘である。もう嘆いても仕方がないから腹を括るが、一方通行（アクセラレータ）との戦闘だ。策を練るのは当然として、私の登場タイミングが非常に重要になってくるだろう。早すぎても私の命が危なくなるし、遅すぎてしまっては上条や御坂に『お前何してたの？』と思われてしまう。

まあ、ある程度遅くなっても私の存在感をあいつらに与えておく為の麦野でもある訳だが、私自身も活躍できるようならしておいた方が良い。

さて、どうするか。

まだ麦野と一方通行（アクセラレータ）が本格的に衝突、戦局が混乱していない状況

で飛び出すのは有り得ない。かといって、このまま留まり続けても決定的にタイミングを逃してしまう可能性があるわけだが……。

……、ううむ。

「……親船さん？」

考え込んでいると、隣で心配そうにしている黒花が声をかけてきた。

「何かな、沿受ちゃん」

「いや、さっきから何を心配そうにしているのかな、と～……」

「……何って、上条君たちの戦闘に乱入するタイミングが掴めないことだけど」

何を言ってるんだコイツ、と言いたげに首をかしげると、黒花はぽりぽりとバツが悪そうに頬を掻いた。……フム、何か作戦を思いついてそうな顔だな。とりあえず聞いておくか。

『何か考えでもあるの？』

意思の疎通を早める為に使った念話が予想外だったのか、黒花はびくりと肩を震わせたがすぐに持ち直した。

『いや～……。現実離れした考え方なのは重々承知なんですけど、こういう時の親船さんポジションの人はもっと援軍を集めて登場するものだから、とりあえず絹旗さんやフレンダさんを拾ってから合流した方が良いんじゃないかな～……と』

いや、私の瞬間移動（テレポート）じゃ最大で私含めて二人までしか移動できな

いし。……ん？　いや、一箇所に集めてから突撃すればいいのか。フレンダと絹旗を個別にこの場に回収して、それから突撃。それなら良い感じに時間も潰せるし、私の作戦への貢献度も高まる。というか登場時のインパクトを上手く調整すれば、戦闘にも参加しなくてもよくなるかもしれない。……確かに妙手だ。黒花は必然的にこの場に残るから、そういう意味ではリスキーな作戦と言えなくもないけど。

いやー、まさか黒花が自分の身を危険に晒してまで私に貢献してくれるとはな。いや、従者だから当然なのかもしれないけど嬉しいよ。本人は全くそんなこと考えてなさそうだけど。

「……分かった。それじゃあ、私は行くね。瞬間移動（テレポート）の定員は二人までだから、沿受ちゃんは此処でお留守番だけど」

「ええっ！？　それマジですか！？　じゃあナシ、やっぱナシ、今のナシ～～！！」

「……ええー……」

「じゃっ、じゃあせめて！　せめて滝壺さんをこっちに寄越すように～！」

「……一応聞いておいてあげるけどさ」

「ありがとうございます～！」

即座に私の足に縋りついて来た黒花を放置するわけにも行かず、その必死さに若干ヒきながら麦野に念話（テレパシー）を送る。

『Ｏ－Ｍ「あー……麦野さん？」』

『Ｍ－Ｏ「なんだ？」』

『Ｏ－Ｍ「いまさらで悪いんだけどさー……滝壺さん、やっぱりこっちに回してもらっちゃ駄目？」』

勿論、本気で聞くほど私も馬鹿じゃない。

黒花を納得させる為、断られるのを承知で聞いているのだ。何せ、滝壺は対一方通行（アクセラレータ）のジョーカーである。……いや、時期と体調から言って、多分一方通行（アクセラレータ）の能力を暴走させる前に『限界』が来ると思うけどね。それでも、そのことを知らない麦野からしたら格上を潰す為の貴重な駒だろう。それを、普通手放せるわけがない。

『Ｍ－Ｏ「それだったら、私もお願いしようと思ってたところよ」』
『Ｏ－Ｍ「そうだよねー駄目だよねー、いやいや沿受ちゃんがどうしても……って、え？」』

しかし、帰ってきたのは予想外の肯定だった。

『Ｍ－Ｏ「正直、今の滝壺の体調じゃあ第一位の能力を妨害させるにもちょいと心許ないんでな。そもそも、私にコイツを庇いながら戦えるほどの力量はない。それなら、親船のところに預けたほうが得策だと思ってたところよ」』
『Ｏ－Ｍ「なるほど、それはよかった」』

……フム。それならひと安心、か。

『Ｍ－Ｏ「話は終わりか？　それならこれからそっちの方に滝壺を向かわせるが」』
『Ｏ－Ｍ「うん。……ああ、私はちょっと席を外すから、滝壺ちゃんには『沿受ちゃんを目印にして』って言っておいて。位置は近くだからすぐ分かると思う」』

それだけ伝えると、私は念話を終了した。当然仲介している黒花にもこの情報は余すところなく伝わってるわけで、彼女の表情にも安堵の色が宿っていた。

……これでよし。そう考えた私は、未だに私にすがりついている黒花を無視して瞬間移動（テレポート）した。

私の移動できる最大距離なんてチャチなもので、ほんの三〇メートル前後しかないが最近は昔に比べて連続瞬間移動の需要が高まっていて、私自身も瞬間移動することに慣れてきているので瞬間移動を用いた移動速度そのものは結構速くなっていたりする。能力が成長してる訳じゃないけどな。

ここからの距離だと……一番近いのはフレンダか。コイツは面倒くさそうだなあ……戦闘で功績を立てたらボーナス追加って言えばやる気出しそうだけど。まあ、面倒な奴は先に片付けるに限る。

そう考えて、私は再度瞬間移動した。

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

滝壺が戦線を離脱し、麦野が一方通行（アクセラレータ）を相手に撹乱を開始して、既に三分が経とうとしていた。

原子崩し（メルトダウナー）による高速移動、それから弾幕による目潰しで上条と美琴が一方通行（アクセラレータ）に接近するチャンスを作ってはいるのだが、そこは流

石に学園都市第一位。第四位程度では足止めにすらならず、麦野は相手の攻撃をかわしながら申し訳程度にレーザーを叩き込むのが精一杯だった。

（……ッ！　クソが！　親船のヤツ、『一方通行（アクセラレータ）』はデフォルトだと対象物のベクトルを反転させる「反射」しか使っていないから、ベクトル操作のときに発生する一瞬の隙を突いて原子崩し（メルトダウナー）のベクトルを反転させれば攻撃は通るよ』だと！？　簡単そうに言いやがって！　さっきから演算代理機をフルに使ってるっていうのに、一向に出来る気配がしやがらねえ！）

麦野は低空を高速で移動しながら内心で毒づく。一方通行（アクセラレータ）の弱点は前もって小豆から聞いていた麦野だが、聞いたところで攻略できるような第一位なら誰も苦労はしない。そもそもこの方法は一方通行（アクセラレータ）のことを知り尽くしている木原数多だから成功できたようなものだ。

同じことを杉谷という『忍者』の末裔がやったこともあったが、彼は一方通行（アクセラレータ）に対してそれほどのダメージを与えることすらできず、しかも自分は却って拳を痛めるというマイナスしか帰ってこなかった。そもそも、『ベクトルを反対にする』なんていうのはそれほどの化け物業なのである。

（……できるのは、精精反射される前にベクトルをほんの僅かにズラす程度）

とはいえ、麦野の試みが一〇〇パーセント失敗していたかといいうと、そういう訳でもない。麦野が一方通行（アクセラレータ）に向けて放ったレーザーは、真逆に反射されて後続とぶつかり四方に撒き散らされるのではなく、線香花火の火のように四方八方に飛び散っていた。

これは、麦野がどうにかしてベクトルを真逆に変えようとした結

果間に合わず起こった現象だ。結果として、これが一方通行（アクセラレータ）の視界を潰すことに役立っていた。

（……、……やはり、攻略には『幻想殺し（イマジンブレイカー）』が不可欠か）

そう考えるのは非常に癪だったが、麦野は諦めてその事実を認めることにした。

そもそも、今回のメインプラン二人の戦闘はどうもアレイスターの『プラン』の一環のような気さえする。とするならば、麦野がどう画策したところで『そうせざるを得ない』ようにプランが練られているはずである。現に、一方通行（アクセラレータ）を倒す為には幻想殺し（イマジンブレイカー）が必要だと彼女も結論付けてしまっているのだから。

「……忌々しい。本当に忌々しいが」

正直なところ、麦野は上条を手助けするつもりなど毛頭なかった。むしろマグマで軽くやけどをさせたところでバチは当たるまいとさえ思っていたほどだ。しかし、こんな状況に陥ってしまえばさしもの麦野も上条を援護するほかない。

アレイスターの思い通りに行動するハメになることよりも、小豆の安全を脅かす最大の要因である男の手助けをするという事実が麦野にとっては何よりも忌々しいことだった。

「……上条当麻」

一方通行（アクセラレータ）の放った衝撃波で吹っ飛ばされている上条を発見した麦野は、高速移動を使って即座に彼の元に移動する。上条は荒く息を吐きながらも既に立ち上がっており、戦意はまだ十分に感じられた。というか、この男が戦意を喪失する場面が想像できないくらいである。

「時間がないから手短に説明する。これから私が全力でアイツの気を引く。その隙にお前は第三位と協力してアイツに接近しろ」
「なっ……え？」
いきなりの言葉に首をかしげる上条に、麦野は軽く舌打ちする。
「二度は言わないわ。いいか、アイツを倒すにはお前の力が必要不可欠なんだ。私も第三位も色々とやってるが、それでも決め手には程遠い。……頼んだぞ」
それだけ言うと、麦野は再度飛び上がった。
あの右手なら、近接戦（クロスレンジ）に限定すれば一方通行（アクセラレータ）とて手も足も出ないだろう。ベクトル操作による音速の飛び道具は確かに脅威だが、一方通行（アクセラレータ）そのものの動きは運動の出来ない高校生程度だ。麦野ほどではないが、明らかに喧嘩慣れしている上条であれば負ける道理はない。
……しかし、問題はそこまでどうお膳立てするか、である。
何度も言っているように、麦野は単なる第四位。超能力者（レベル5）の中でも（序列で言えば上位な小豆は超能力者（レベル5）最弱なので除外するとして）四番目に強い程度の実力である。順位が二つ飛んだ最強の第一位を相手に、隙を作ることだけでも可能だろうか？
（……考えても、やるしかないのよねぇ……。ああ、親船が第一位と戦いたくないって言ってた理由が分かる気がするわ）
あれは、流石に強すぎる。
心の中で呟いてから、何となく思考が小豆に似てきたな、と苦笑した麦野は空中で再度空気を爆発させて一方通行（アクセラレータ）に接近を開始した。

（……とは言ったもののッ！）

接近してきた麦野に対し、飛んで火にいる夏の虫だと言わんばかりに放たれた一方通行（アクセラレータ）の攻撃をかわしつつ、麦野は考える。

（このままだとマジで対抗策がないわ……。クソッタレ、どんな攻撃も反射、唯一の抜け道だろう『反射の逆用』もこの戦いじゃクリアできねぇ。考えろ……、この状況で、一方通行（アクセラレータ）の注意を逸らすレベルでいいから一矢報いる方法……、）

必死に脳内で策を練っていたのが仇となったのか。

そこまで考えたところで、麦野は腹部に衝撃を感じた。

一方通行（アクセラレータ）が放った瓦礫の衝撃によってさらに生まれた瓦礫が、原子崩し（メルトダウナー）の防御を掻い潜ってきたのだ。瓦礫を介して大幅に威力が減少しているはずなのに、食らった麦野は天地が逆転したかのような錯覚を覚えた。

「ごばッ……！？　ぐ、ごァああああッ！！」

堪らず咳き込みながらも、麦野はなけなしの力を使って原子崩し（メルトダウナー）の移動を続ける。激痛で集中力が乱れている最中の能力行使ゆえか、麦野の体が少しずつ自分自身の能力によって焼けていく。

（い、きが……ッ！　呼吸が、できないッ……！！）

ごろごろごろと、麦野は自分の内臓が不気味にうごめく感覚がした。まるで意志を持った別の生物のように、自分の体の中を動く感覚が彼女を襲う。しかし、それでも麦野は一方通行（アクセラレータ）の撹乱をやめなかった。それをやめるということは上条や美琴と交わした言葉を裏

切ることであり、彼らを危険に晒すこと、それは長い目で見れば小豆の首を絞めることでもあるからだ。

「ぐはッ……、はぁッ、はぁッ！」

「ほォ……。随分と根性あるじゃねェか、オマエ」

そうしながらも何とか一方通行（アクセラレータ）の注意を引き、そして持ち直した麦野を見て、一方通行（アクセラレータ）は感心したような声を上げた。対する麦野は少しずつ息を整えながら、その口元に少しずつ不敵な笑みを募らせていく。

「……あァ？　何がオカシイ」

「いやね……。お前の叩きつけてくれた瓦礫のお陰で『攻略法』が見えたんだよ。全く、困ったもんだ。私は知らぬ間にこんなに親船に依存していたみたいだ」

麦野が自嘲するように笑った瞬間、ゴバッ！！　と一方通行（アクセラレータ）の周囲を原子崩し（メルトダウナー）が取り囲んだ。球形になったそれは、ところどころでガス抜きをするように高熱の空気を噴出しながら、段々とその大きさを小さくしていく。

「……何のつもりだ？」

瞬間、球形の檻の一角が派手に吹き飛び、怪訝な表情の一方通行（アクセラレータ）が見えるが、すぐさま他の原子崩し（メルトダウナー）が集まって壁を再構成する。

「……あれは……酸欠狙い？」

美琴がボソリと呟いた声が、麦野の耳元にまで届いてきた。麦野はニヤリと口端をゆがめて、軽く頷く。

そう。一方通行（アクセラレータ）の能力は、『あるもの』を動かすことはできても『ないもの』を増やすことができる訳ではない。原子崩し（メルトダウナー）の檻によって空気を膨張、抜くことによって、内部の酸素量を減らせばさしもの一方通行（アクセラレータ）も事態の妨害に動き出さざるを得なくなる、というわけだ。

「……ッ」

一方通行（アクセラレータ）もそのことに気がついたのだろう、檻から抜け出そうとしているが、そもそもアレは原子崩し（メルトダウナー）製。破壊しても修復されるし、一方通行（アクセラレータ）自体が移動しようとも追跡して彼の酸欠を継続させようとする。

これこそ、麦野が思いついた策略。瓦礫を腹に食らった時に呼吸ができなかったことと御坂がやっていた攻略法から、『どんな能力者も呼吸ができなければ死ぬ』ことに思い至ったのだ。

（全く、解法を提示してる奴が目の前にいたっていうのに、できもしない親船の方法に執着してたなんてね）

小豆の頭脳は確かに有能だ。一方通行（アクセラレータ）の反射を逆手に取る作戦だって、明らかに格下な麦野が一方通行（アクセラレータ）を揺さぶるのに有効な手札の一枚だったに違いない。

しかし、彼女の頭脳が提示する策が『万能』でないことは今までの生活で十分分かってきたはずだった。にも関わらず、麦野は小豆の作戦を遂行することに無意識に執着し、それが結果この苦戦を招く一因になっていたのだ。

「……反省、しなくちゃね」

自分を責めるようなその口調には、落ち込んだ色はない。むしろ麦野の口元には、不敵な笑みが浮かび上がっていた。すっかり調子を取り戻した麦野は、原子崩し(メルトダウナー)を操作しながら上条達の元へ合流する。

「麦野！　大丈夫！？」
「『さん』を付けろよ。年功序列だ第三位(バカヤロウ)」
「いだっ！」

すぐに駆け寄ってきた美琴を、麦野は即座に指突で出迎える。

「……心配すんな。この通りだよ。……それより、上条当麻」
「なんだ」
「畳み掛けるぞ」

一気に声のトーンが落ちた麦野に、上条は顔を引き締め頷く。麦野の言葉に呼応するかのように、一方通行(アクセラレータ)を覆う原子崩し(メルトダウナー)の塊が彼女達に接近する。麦野は限界までそれをひきつけると……、

「死に晒せこのクソアマがァ！」

ボバッ！！　と、原子崩し(メルトダウナー)の檻が爆裂し、一気に一方通行(アクセラレータ)がその顔を外気に晒した。しかし、そんなことは麦野始め上条も承知の上だった。

むしろ、そのために麦野は上条達の元までわざわざ接近したのだった。

「くっくっく、飛んで火に入る夏の虫だなァ第一位……。テメェの相手は私じゃねえ。任せたぞ、上条当麻！！」
「了解だ麦野っ！！」

身を翻して一方通行（アクセラレータ）の攻撃を回避した麦野の背後から、猛烈にダッシュする上条が現れる。一方通行（アクセラレータ）は攻撃をかわされた一瞬の思考の空白により、その動作に咄嗟に対応できない。

「……妹達（シスターズ）だって、生きてるんだぞ」

上条は思い切り拳を握り締め、

「何でお前みたいな奴の食い物にされなくちゃならないんだよッ！！」

バギン、という何かが砕ける音と共に、一方通行（アクセラレータ）の体がノーバウンドで何メートルも吹っ飛んだ。

＊＊＊

「やった……な」

その光景を見て、麦野は思わず呟いていた。

学園都市最強とはいえ、それは肉体が最強という意味では当然ない。……むしろ、肉体と言う点で見れば麦野が最強だという説もあ

るのだが……これは置いておこう。
ともかく、肉体そのものは貧弱な高校生が、ノーバウンドで何メートルも吹っ飛び、完全に停止するまで何回転も地面を転がるほどのパンチを顔面に受けたのだ。戦闘どころか、意識の維持すらままならないはずだ。

……反射の効かない、毒物（オゾン）による攻撃、酸素の欠乏、反射のメカニズムを逆手に取った、ベクトルを乱す攻撃。そして、反射そのものを打ち破る右手による攻撃。極め付けに、一方通行（アクセラレータ）の明らかな敗北。
……計画（プラン）通りどころか、計画（プラン）では絶対に有り得ないだろう事態まで発生してしまった。この分では、計画の続行は不可能、だろう。
つまり、麦野は無事にミッションをクリアしたことになる。

「だから――、これから発生するのはきっと、ただの残業（エクストラステージ）ね」

すっかり勝利ムードに浮かれていた上条と美琴は、その言葉に思わず首をかしげる。次の瞬間、麦野の背後に転がっていた一方通行（アクセラレータ）が爆裂した。

「なっ……！？」
「ど、どういう……！？」

爆裂の中心地に、一方通行（アクセラレータ）は佇んでいた。ゆらり、と幽鬼のように起き上がる彼の周囲は、まるで蜃気楼のように歪んでいた。
空気が砂糖水か何かのようになったかのような揺らめき方だが、これはあくまで『この世の現象』を操って起こっている事態だった。様々な現象が重なりすぎて、まるで異世界の事象のように見えているだけだ。

「くか、き、くかきくけこかきくけこかきくけこかきくけこかきくけこかきくけこかかかか――――ッ！！」

とても人間のものとは思えない雄たけびを上げた一方通行（アクセラレータ）は、正気を失ったその瞳に上条達の姿を納める。轟！！　と、明らかに不自然な烈風が吹き荒れ、上条達の体が空高く舞い上がった。

「う、わあ！？」

上条はその動きに当然対応できないが、すぐに美琴に体を支えられる。……この上条、美琴のこのサポートがなければ今回の戦闘で軽く三回は死んでいる。

「な、何よ何よ、一方通行（アクセラレータ）は気絶したんじゃないの！？」

「してたわよ、明らかにね」

狼狽した調子の美琴に、吹き飛びながらも冷静に麦野は答える。

「生存本能かしらね……。無意識に生体電流を操作して、意識の覚醒を促したんじゃないかしら？」

「そんなこと……っ！」

「可能だろ。何せ第一位の『反射』は無意識にプログラミングされているものみたいだし。

そのくらいの安全装置を設定していたって、何らおかしくはないわ」

即座に反駁しようとした美琴だったが、すぐにもっともらしい説明をされて思わず黙り込んでしまった。……いや、薄々自分でも分かっていたことなのだ。ただ、現実を認めたくなくて文句を言っていたに過ぎない。

「……心配するな。もう実験は続行できないレベルで崩壊してる。見ろよアイツの怒りよう。安全装置まで発動させて、しかもあんな調子じゃもう元の軌道に戻すことなんざ不可能だろうよ」

『一番の問題は、私たちがここから生きて帰れるかどうかだがな』、と皮肉ったように笑う麦野に、美琴も上条も何もいえなかった。麦野はもう役目を果たしたから、此処からすぐにでも逃げるつもりでいるのだろうが、美琴と上条はそう考えてない。

まだ、終わってない。

実験が終わったとか、そういう話ではない。此処で完璧に叩き潰さないと、一方通行（アクセラレータ）はきっと独断で妹達（シスターズ）を殺し続ける。

「……チッ、こっちもこっちでやる気かよ」

そんな二人の様子を察したのだろうか、麦野は忌々しい調子で呟いた。

「……やるのは問題ないが、私はもう援護しないぞ」

麦野の言葉にも、上条と美琴は動じた様子などなかった。あるいは当然だと思っているのだろう。麦野の目的は実験を中止に追い込むことであって、一方通行（アクセラレータ）を負かすことではない。まして、上条や美琴にもこれ以上戦う理由などない。一方通行（アクセラレータ）だって同じだ。

今までが大義名分を持った『戦い』なら、此処から先は気に食わない相手を一発殴る為だけの『喧嘩』。麦野が手を出す義理はない。

「……勘違いするな。私だってあのヒョロもやしはブン殴りたい気分だ。……だが、今日は品切れなんだよ」

そう言うと、麦野は自分の首に取り付けられている黒いチョーカーを指で示した。

「……演算を、補助してるの？　どこかに怪我でも？」

「近からず遠からず。私の能力は制御しづらい仕様だからね」

とっ、という軽い音と共に麦野と美琴は手短なコンテナの上に着地する。遅れて、磁力によって速度を制御された上条もコンテナの上に乗った。それを確認した麦野が力なくしゃがみ込む。

「……今ので打ち止めだ。原子崩し（メルトダウナー）の檻は妙案だったが、少し使いすぎた……。やるんだったら、お前らでやってくれ」

『そろそろ「丁度いい」頃合だろうしな』、という麦野の呟きは、上条と美琴の耳には届かなかったものの、二人は苦々しい顔で頷き、それから一方通行（アクセラレータ）の方を見る。

一方通行（アクセラレータ）は既に先ほどの哄笑をやめており、愉快そうな様子で何事かを呟いていた。

そして、その頭上には巨大な光の玉。

「あ、あれは……プラズマ！？」

これには、流石の麦野も戦慄した。

（嘘、だろオイ……！　あの第一位、まだあんなモン作る余力を残してたってのか！？第三位の能力でバラすのも多分無駄、幻想殺し（イマジンブレイカー）も……ベクトル操作の『結果』であるプラズマには手も足も出ねえ！）

火力方面ならば一番頼れる自らの能力も、先ほど底を突いた所だ。
だが、
「これは……底を突いたとか甘ったれたこたぁ言ってられないわね……！」
萎えた膝に手をかけ、麦野は震えながらも立ち上がる能力が使えないからといって泣き言を言いながら死ぬくらいならば、身を削って能力を使って死ぬほうがまだ有益である、というのが麦野の考えだった。
しかし、その肩にぽんと手が置かれる。置かれた手は、男の右手だった。少しずつ集約していたはずの原子崩し（メルトダウナー）が一瞬で霧散する感覚を、麦野は感じる。
「あん……？　何のつもりだ、上条当麻」
「やめろよ」
対する上条は、あえてドスを利かせた麦野の声色にも一切動じることなく、毅然として言い放った。
「もう、限界なんだろ」
上条は、今も巨大化しつつあるプラズマの方をしっかりと見据えながらも言う。
「俺にお前の能力のデメリットとかなんて分からないけど、よく分からない小道具を使ってまで能力を補正するくらいなら、それは多分すごい取り回しにくい能力なんだってことくらいは分かる。今のお前の状態で、そんな能力を使えばどうなるかくらい、分かるだろ」
「……」

即座に反駁しようとした麦野だが、それは思いとどまった。上条に言われて、我に返って考えてみたのだ。

今の能力の補正が出来ていない、それどころか平常時よりも弱弱しい状態で、あのプラズマを消し飛ばすレベルのレーザーを撃てば、まず間違いなく麦野は消し飛ぶ。腕がとかそういうレベルではない。最低でも上半身、下手をしなくても全身が消し飛ぶ可能性がある。

麦野だけならそれでもいい。しかし、此処には上条と美琴がいるのだ。上条の防御が間に合えばまだ良いが、間に合わず、二人とも消し飛ばしてしまったら目も当てられない。

……上条が、そう言う意味で『どうなるかくらい、分かるだろ？』と言ったわけではないだろうが、そこに思い至った麦野は決断できずにいた。

「……じゃあ、どうするんだ？　アレを見ろ。どう軽く見積もっても摂氏一万度はくだらない灼熱だ。それに直径だって二〇メートルくらいはあるでしょうね。超電磁砲（レールガン）ごときじゃ、どうにもならないサイズよ」

「……、」

麦野の言葉に、上条と美琴は押し黙る。

「まあ、こいつも電撃使い（エレクトロマスター）だし、あのプラズマの成長を分解するくらいのことはできるだろう。でも、やったところでどうなる？　アレは風によって空気を凝縮して作られたモノだ。同じように風を操る術がなくっちゃあ、どうしようも、」

「それってさ、要するに『風を操る術』があればいいんだよね？」

諭すような調子の麦野の言葉を遮ったのは、場違いとさえ感じるほどに能天気な口調の声だった。コンテナの下から聞こえてきたそ

の声に、一同は即座にコンテナの下を見る。

「……親、船……！」

全員を代表するように、上条が呟いた。

13

「待たせたね。上条君御坂さん、麦野さん」

そう言って、私は不敵な（でもそれでいて黒い感じはしないように見える）笑みを浮かべる。私の傍らには、通信用の黒花、護衛のフレンダと絹旗、さっき合流した滝壺がいた。

そして、さらにその後ろには――、

「……って、御坂妹！？」

一〇〇三二号。御坂と上条が守るために、あえて遠くに置き去りにした少女は、私が連れてきた。

「……ちょっと。どういうことよ？　何でアンタがこの子を連れてきてるの？」

一〇〇三二号を一目見た御坂は、底冷えするような声色で私に問いかけてくる。まあ、当然のリアクションである。私に対する信頼度なら御坂よりも高い上条でさえ、不信感を露にしてるくらいだ。麦野は『またか……』と言いたげな顔をしているが。失礼な奴である。この考えに至るのは結構当たり前だろう。

「それに関しては、ミサカの方からお願いしたのです、とミサカは親船さんのことを擁護します」

私が弁解するまでもなく、後ろにいた一〇〇三二号が前に進み出てそう宣言した。……ちなみに、これは私が事前に示し合わせたわけでもなく、かといって洗脳したわけでもなく普通に真実である。

移動している最中、とりあえず保険にでもと思って一〇〇三二号のところに行って少しばかりお話したところ、彼女は何を考えたのか『私も連れて行ってください』とお願いしだしたのである。正直彼女にその気がなくても上手く乗せて戦闘に巻き込むつもりだったので、これ幸いと快く承諾したのだった。

「何で……、」

「ミサカは」

それでもなお食い下がろうとする妹想いの御坂の言葉を遮るように、一〇〇三二号が話し始める。

「今でも、このミサカの命に貴方がたの命が懸けられるほどの価値があるとは思えません」

「……、」

そう言って、自らの胸に手を当てる一〇〇三二号。御坂は何かを言いたげにしていたようだったが、飲み込んで黙り込む。

「私は……、実験動物でした。作り物の体、借り物の心、単価にして一八万、在庫にして九九六八も余りある、そんな下らない木偶人形――――でした、とミサカは告白します」

「それは研究者どもが勝手にっ……！」

「しかし！！」

たまらず声を上げかけた御坂の声に、一〇〇三二号の声がかぶさる。今まででは考えられないほどの剣幕に、御坂は思わず怯んでしまった。

「今は、違います。相変わらずミサカは自分の命に価値があるとは

思えません、とミサカは断じます。しかし、そんなミサカにも価値を見出してくれる人たちがいる、ということをミサカは学習しました。そして、そんな人たちの命が失われるなんて嫌です、とミサカは拳を握り締めます」

そう言って、一〇〇三二号は私の方を横目でちらりと見た。……ここまでは、私が聞いた話と同じだ。先ほどコイツと遭遇したときも、一〇〇三二号は同じことを言っていた。

「……そういう風に思う気持ちは、『心』は決して借り物や作り物なんかじゃない」

ボソリと呟かれた一〇〇三二号の言葉に、私は思わず目を丸くしてしまった。

……先ほど、一〇〇三二号に言われた言葉に対し、私が返した言葉だ。あの時は相槌を打つように自然に出てきて、よく考えもせずに言った言葉だったのだが、まさかあれがこいつのこの行動の遠因になっていたのか？

「……親船さんに言われた言葉です。周りがどう言おうと、心の底から思った気持ちはミサカだけのモノだと。それは絶対に、曲げられないモノだと。……それが、自分の『大切なもの』だと。だから、自分の『大切』に素直になれば良い、借り物だとか作り物だとか、そんなことは関係ない。たった一人の『自分』が決めた『大切』の為に、迷わず行動すればいい、と」

『だから、「私」はここに来たんです』、と一〇〇三二号ははにかむように微笑んだ。それは先ほどまでの無表情な少女とはまるで別人のような、『感情』を感じさせる笑みだった。

……んー……、まあ、いいか。今この時点でこのレベルまで

感情が育っていても、大勢（たいぜい）には影響を与えない、はず。

「ミサカのことを助けに来てくれる、そんなやさしい人たちを決して死なせない。それは……多分、世界中でミサカ達にしかできない仕事だと思いますから。それをやって初めて、ミサカ達は『あなたの妹』になる為の『スタートライン』に立てるはずですから、とミサカは仕事を開始します」

「あん、た……っ！！」

一〇〇三二号の独白に、御坂は感極まって涙を流しているようだった。そんな姉にひとつ笑みを向け、一〇〇三二号は元の無表情に戻る。

「妹達（シスターズ）検体番号一〇〇三二……いえ、『私』から、全ての『妹』に、『お願い』します！！　力を、貸してください。――――このくだらない物語の幕を、私達の手で下ろすのです、とミサカは決意を新たにします！」

一〇〇三二号が、そう言ったときだった。轟！！　という音と共に、先ほどまで完全に安定していたプラズマの球が大きく揺らいだのは。

……細かいところは色々と誤差が出たが、大筋は計画通りである。御坂に対する親愛が気持ち強まっているような気がしないでもないが、それはそれで御坂にとってもいい変化だろう。妹達（シスターズ）が中心になるような事件は……うん、もうないな。あっても打ち止め（ラストオーダー）関係だし。

さて、それでは……、

「……ほら！　上条君、御坂さん！　何ぼさっとしてるの！」

私の声で、二人ははっとしたようにこちらを見た。……完全に私の存在忘れてたな、コイツら。

「お膳立ては、これでおしまい。後は、あなたたちが決着を！」

さも、『私がここまで状況を良くしましたよ』的に言っておきつつ、二人に一方通行（アクセラレータ）に止めを刺すよう言う。アイツとの距離はおよそ五〇メートル……上条と御坂ならば、相手がプラズマの乱れに動揺しているうちに終わらせられるだろう。

「……ッ！　ありがとう、親船ッ！」

思い切り拳を握り締めた上条と御坂は、そのままの勢いでコンテナを飛び降りた。私は隣で控えている絹旗のほうを見て、

「絹旗ちゃん。もう大丈夫だとは思うけど、一応行ってあげてくれないかな」

「……はぁ、せっかく終わりだと思ったのに、やっぱり親船さんは超人遣いが荒いです。でもまぁ、良いですよ。私も、この能力の元になったモノがどれほどの力を持つのか、超確認したかったところですしね……！」

ダッ！！　と地面を踏み抜いて、窒素装甲（オフェンスアーマー）を展開した絹旗はそのまま走り去っていった。

……よしよし、これでとりあえず布石は全て打った。正史では気流の乱れだけで片付いたのだ。一方通行（アクセラレータ）の状態を鑑みても、それほどのことにはなるまい……。

……あれ？　今もしかして私、何かのフラグ建てちゃった？

＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

上条は、走りながら自分の体に力が満ちていく感覚を感じていた。この土壇場で、新たな力が目覚めたとか、そういう類のものではない。人が人たる、最大の力――意志の力が、此処に来て最大限に強まっているのだ。

（御坂も、麦野も、親船も）

体はとっくに疲れ果てているはずなのに、まるで無尽蔵に力が湧き上がってくるような、そんな高揚感を感じつつ、上条は地を蹴る。隣には美琴がいた。後ろには、親船の仲間らしい中学生くらいの少女が追随してくれていた。

（親船の仲間の人も、――御坂妹も）

これまで、上条は何かと一人で戦うことが多かったような気がす

る。三沢塾のときだって、ステイルは上条と離れて戦っていたし、アウレオルス戦も手助けはあったが概ね一人での戦いだった。上条が覚えていないだけで、きっとその前も、ずっと前から、大事なときにはずっと上条は一人で戦ってきたのだろう。

それは、周りが助けてくれないとか、そういうことではない。多分、上条はそういう状況になるたび、ずっと周りの人間を遠ざけてきたのだ。

でも、今は違う。

カインとの一件。カインの仲間であるドロシーとフレッドは、一緒に彼女を救いたいと申し出てきた。助けようとしていたカインでさえも、自分の中のどうしようもできない衝動と戦っていた。上条は、それを補助していたに過ぎなかった。

そして今回も。

上条は、一人で一方通行（アクセラレータ）と戦おうとしていた。しかし、美琴はそれを拒絶し、『一緒に戦いたい』と言った。小豆も、『じっとしてなんかいられない』と言った。何の事情も知らないはずのその部下でさえ、同じ志を持っていた。そして、助けようとしていたはずの御坂妹も、こうして立ち上がってくれていた。

心強い、と上条は思った。

一人で戦っても、上条はきっと大丈夫だっただろう。彼はそういう人間で、事実本来ならばこれからもそういう生き方をするはずだったのだから。しかし、それでも、仲間がいるだけでこれほど違うのか、と上条は思った。

「チッ……！　ざけンじゃねェぞ……！　どいつもこいつもナメやがって、本気で勝てるとか思っちゃってるンですかァ！？」

プラズマを乱され、混乱の極致にある一方通行（アクセラレータ）は、そんなことを

言い出した。そんな様子を見て、上条は思う。

――似ている、と。

性格や、行動はまるで別だろう。真逆と言ってもいい。残虐で残酷で救いようのない悪党、それが一方通行（アクセラレータ）だ。しかし、そんな薄っぺらな表面とは違う、根本のところで、上条と一方通行（アクセラレータ）は似ていた。

おそらく、一方通行（アクセラレータ）もまた、人を頼らないことに慣れてしまったのだろう。そう思うと、上条は急に一方通行（アクセラレータ）が小さく見えた。最強だとか、第一位だとかといった肩書きが、まるで小さな子供の虚勢のように見えた。

「クソが……、そンな目で見てンじゃねェ！　雑魚がちまちまと馴れ合ったところで、ナニも変わらねェってことを教えてやる！！」

まるで、子供の癇癪だった。一方通行（アクセラレータ）は左手で顔を押さえながら、残る右手を天高く振り上げ、そして勢いよく振り下ろす。それだけで、まるで地盤全体が崩壊したかのような揺れが上条たちを襲った。

「なっ……これは」

「超動かないでくださいッ！！」

動揺する上条と美琴の前に、親船の近くにいた護衛の少女が躍り出る。地面の揺れによって銃弾並みの速さで飛び出した瓦礫は、上条たちの盾となるように現れた少女の体にことごとく命中する。流石にこれを正面から受けるのは厳しかったのか、護衛の少女は軽く膝をついた。

「ば、お前！」

「超大丈夫ですよ。この身は学園都市最強の『防御』を植えられた身……。この程度の超豆鉄砲、屁でもないです」

『それよりも！』と、護衛の少女は声を張り上げる。上条達の眼前にあった地面は、地震によって発生した大規模な断層のように盛り上がっていた。

「な、こんなの登ってるような時間……、」

「大丈夫よ、行けるわ！！」

思わず上条が怯みかけたところで、上条の隣から白い塊が噴出した。

未元物質（ダークマター）。

この物質を生み出した能力は、そう呼ばれている。触れた人間の発する微弱な電気信号によって自在に伸縮する性質を持ったこの『鉱物』は、電撃使い（エレクトロマスター）の最高峰である美琴が扱えば、自由に形を変える武器となる。

そう、自在に、だ。

――即ち、ヒーローが走るべき道にもなる。

ギュバッ！！　という音と同時、美琴の右手にあった白い塊が、瞬間的に巨大化し一筋の線となる。そこには、この塊を人殺しに使おうとしていた美琴の姿はもうない。彼女もこの瞬間、紛れもなくヒーローだった。

「……ありがとう！」

「礼には及ばないわ――」

バチリ、と前髪の先から紫電を迸らせた美琴は、大きく息を吸って叫ぶ。

「失敗したら承知しないわよ、『当麻』ッ！！」

美琴の激励を背に、上条は細く白い道を駆け上がる。巨大な断層を越えた先には、白い白い一人の少年が立っていた。まるで、信じられないものを見たような表情だった。有り得ないと思っていたものが実際に存在したことを悟ったときのような――地球人が宇宙人を目撃したら、きっとこんな表情をするだろう、と思わせるような、この局面では馬鹿馬鹿しくなるくらい間の抜けた表情だった。

「く、そが」

状況を理解したのか、即座に苦々しく表情を歪めた一方通行（アクセラレータ）は、無意識に呟いていた。……全く挽回できない局面ではない。確かに今はプラズマの制御を乱した直後で、しかも地面にかかる力のベクトルを操った直後だから、即座に攻撃にベクトル操作を用いることは難しい。しかし、それでも緊急回避に脚力のベクトル操作を用いるくらいの余裕はあった。

だが、一方通行（アクセラレータ）の中のプライドが小さく囁く。

――此処で逃げて、自分は『最強』でいられるのか？　と。

『最弱』のくせに、自分を倒すと言ったくせに。色んな仲間の力を借りて、『独り』じゃ何もできないような奴に。……背中を見せて、それでその後も、自分は『最強』を謳っていられるのか？　と。

答えは、否だった。

一方通行（アクセラレータ）は最強である。目の前の無能力者（レベル0）は、最弱である。

退かない理由など、それで十分だった。

「付け上がってンじゃねェぞ、最弱がァ！！」

一方通行（アクセラレータ）は、右の毒手と左の苦手を同時に突き出す。触れさえすれば、一方通行（アクセラレータ）の勝ち。そんな、喧嘩と呼ぶことすらおこがましい争いに対し、上条は何の恐怖も抱かなかった。

ボッ！！　という轟音と同時、上条の乗っていた白い道の先端が、一方通行（アクセラレータ）に着弾した。勿論これは即座に反射され、ダメージなど与えることはできなかったが――――それでも、彼から一瞬の隙を奪うことには成功した。

「あ、の、アマ……ッッ！！」

「……歯ぁ食いしばれよ、最強（さいじゃく）」

一瞬の隙。しかし、それは一方通行（アクセラレータ）にとって致命的な隙となった。上条は体中の力を振り絞るように拳を握り締め、腕を引き絞る。

――最弱。

勿論、一方通行（アクセラレータ）は最強である。指先一つ動かすだけで人一人を吹き飛ばすような竜巻を起こすことだってできるし、たとえ核爆弾の直撃を食らおうが、彼にとっては全て対岸の火事に過ぎない。何物も傷つけることが出来ない、最強。

だが、一方で一方通行（アクセラレータ）は最弱だった。強さとか、そういったくだらない観点とは別の人としての強さで、一方通行（アクセラレータ）は最弱だった。

対する上条は、まぎれもなく最弱だ。いくら踏ん張ったところで、顕微鏡レベルの異能さえ発現できない本当の『無能』。その右手には特異な力が宿っているが、これも異能を打ち消すだけ、異能がなければ何の効果も発揮できず、異能だけしかない一方通行（アクセラレータ）を倒すのにさえ他者の力を借りなくてはならない程度の力しかない。

だが、この瞬間上条は、上条たちは確かに最強だった。上っ面の強さではなく、人間的な力において、上条たちは確かに二三〇万の頂点に立っていた。

「俺の……俺たちの最弱（さいきょう）は、ちっとばっか響くぞ！」

ゴガン！！　という鈍い音が響き、学園都市最強の少年はあっけなく吹っ飛ばされた。

＊＊＊

ｓｉｄｅ小豆

その日の深夜。

私は、入院者が着るバスローブのような服を纏って、第七学区のとある病院の中にいた。……なんというか。今回、私怪我するような要素全くなかったよね？　と主治医でもある冥土帰（ヘヴンキャンセラー）しに聞いてみたのだが、彼曰く『激しい運動をしなかったかな？　打ち身と、あと肋骨が折れてるね？　火傷も多少あるし、爆発に巻き込まれたりとかしただろう？　多分、怪我はそのときのものだと思うよ？』……らしい。ああ、麦野だね、どう考えても麦野だね。

恨みを込めて麦野に視線を送ると、奴はバツが悪そうに顔を背けて診察室から出て行こうとして、ナースに押さえつけられ、弱弱しい悲鳴をあげていた。麦野の怪我は私を遥かに越えるダメージの大

きさなのだ。

ええっと、大きなものだと腰骨、肋骨の骨折。あと内臓に幾つか切れ目が入っていたらしい。麦野に聞いてみたところ途中でイイのを一発もらったから、多分それだろう、とか。あと、絹旗も負傷していた。まあ、彼女に関しては全身に無数の打撲と、あと右腕が一箇所陥没骨折って話だけど。

尤も、私も含めて学園都市の最先端治療を施してくれるそうだから、ほんの三日で退院できるらしい。まあ、あれだけボロボロになっていた上条もすぐに退院してたくらいだから、考えてみれば当然なのかもしれないけれど。

そうそう、上条はあの後すぐに撃沈、御坂も疲れの為かあっさり気絶してしまった。多分翌朝には二人できゃっきゃうふふしていることだろう。明日の朝一に顔出してからかってやる。

で、私は現在、一〇〇三二号と病院のロビーで顔を合わせていた。

「……妹さん、無事で何よりだよ」

「いえ、こちらこそ、とミサカは頭を下げます」

正史と違って上条と御坂が実験前に介入したから、一〇〇三二号は目立った負傷もなくこの場にいた。一応、調整の為という名目で此処にいるが、実際は入院しなくても、通院するくらいで良い筈だ。まあ、これは他の妹達（シスターズ）にも言える事だが。

「……ありがとうございました、とミサカは一度上げた頭を再度下げます」

そう言うと、一〇〇三二号はまた頭を下げた。……言われなくても分かる。『あの発言』の件だろう。結果的にあの言葉のおかげで一〇〇三二号は快く私についてきたわけだが、この乖離は大丈夫な

んだろうか。

人の心の変化というのは、結構侮れないものだ。麦野一つとっても、私がした『油断するなよ、あと仲間もしっかり使えよ』という説得のせいで彼女の精神性は最早正史とは別人、『アイテム』関連の事件は、私が正史どおりになるよう、もしくは発生しなくてもどこかで帳尻が合うように調整しなくてはならないと思ってるほどだ。

『原作』で妹達（シスターズ）はそこまで重要なファクターを持っていないが、この事件で起きた彼女達の変質が、後々大きな乖離となって私の目の前に立ちはだからない保障など何一つない。世界は私を中心に（悪い要素が）回っているのだ。

「頭、上げてよ。私は別に、あなたに感謝されたくてああいうことを言ったわけじゃないし」

軽く苦笑しながら、私は一〇〇三二号の肩に手を置いた。顔を上げた一〇〇三二号は、相変わらず無表情である。先刻御坂に笑顔を見せていたのが、まるで夢のようだ。

ただ、何となく一〇〇三二号の表情が和らいでいるということは分かる。普通の人間ならば微笑んでいるところだろう。そう思っていると、ふと一〇〇三二号の表情が暗く落ち込んだ。無表情なのに器用なことをするなぁ、と内心感心しつつ、私は怪訝な表情を浮かべた。

「……私は、生きて戻ることが出来ました。でも、私は相変わらず、自分という存在に価値を見出せていません、とミサカは自己嫌悪に陥ります」

そう言われて、私は得心が行った。……ははぁ、なるほど。本来なら調整の為に打ち合わせに行っているはずのこの少女が、何で私のところに来たんだろうと不思議だったが、こういう理由があった

わけか……。

多分、コイツは私に助言をもらいたいんだろう。彼女を踏み出させたのは私の言葉だし、どうしたらいいのか分からなくなったら私に頼りたくなるというのも人情である。

……だが。

生憎と、私は妹達（シスターズ）の補助役になるつもりは毛頭ない。こいつらは色々とデリケートな存在だしな。ヒューズ＝カザキリ現出のときとかに暴走に巻き込まれて～、みたいなことがないとも言い切れないし、ある程度の距離はとりたい。

それに、こいつらも一から一〇まで私にサポートしてもらってたら、成長なんてできないだろうし、……というのは後付の理由だけど。

「『死ねない理由』は、出来たと思います、とミサカは小さく呟きます。ですが、その理由は『こんな自分の死でも、悲しんでくれる人がいるから』というもの。確かにお姉様や、あの人、親船さんを始めとした私を助けてくれた方々は『大切』ですが……このままでは、私は、私たちは、自分の存在理由をそうした助けてくれた人たちに押し付けるだけになってしまう気がします。……とても、親船さんの言葉――『たった一人の「自分」が持つ、「大切」に従って』手に入れた『理由』ではありません、とミサカは肩を落とします」

「……で、妹さんは私に『自分はどうしたら良いか』助言をもらいに来た、って訳だね？」

気持ち不機嫌そうな私の言葉に、一〇〇三二号は申し訳なさそうな調子で小さく頷いた。何だ、褒められたことをしてるわけではないって自覚してるんじゃないか。じゃあ、話は簡単だな。

「……いくら私でも、ないものは作れないよ」

「……え？」

諦めたように嘆息した私に、一〇〇三二号は一瞬意味が分からないといった表情を浮かべて首をかしげた。

「はっきり言うね。今の妹さん達に、『助けた人たちを悲しませない為』以外に『生きる理由』なんて……ない」

「……、」

「だって当然でしょ？　今までのあなたたちの生きる理由は『一方通行（ラレータ）を絶対能力（レベル6）にする為』だけで、それ以外には何もなかった。そういう風に調整されて育てられた。だから、どんなに取り繕ったってそれ以外に生きる理由なんてない」

「……そ、うですね」

一〇〇三二号は、私の残酷な物言いに、少なからず落ち込んでいるようだった。まあ、この段階で落ち込めるほど情緒が成長しているだけで随分なものである。……さて、このくらい辛辣なことを言っておけば一〇〇三二号の中にも私に対する苦手意識が芽生えただろう。ここらへんで話を落とすか。

「……辛いだろうけど、最後まで聞いて。だから、究極的にはあなたが、『自分の為に生きる』理由を見出さないといけないんだよ」

「……このミサカの為に、ですか？」

「そう」

「……、」

『どうやって』、と言おうとしたのだろう。寸前で思いとどまったらしい一〇〇三二号は、ぎゅっと口を閉じてこちらを見据えてきた。光のない瞳の中には、確かに意志の光が宿っているように思えた。『分かった、俺やるよ！』みたいな熱血的精神である。……こ

のまま順当に行けば、助けてくれた上条に対してラブを抱くようになるだろう。そうすれば正史どおりである。

そう思った私は、ふっと笑ってから一〇〇三二号に背を向けて自分の病室に戻る。既に消灯時間は過ぎているのだ。こんな風に会話していられるのは、ひとえに病院の人たちが空気を読んでくれていたからだろう。

「……ああ、そうそう」

最後に言い忘れたことがあったのを思い出した私は、一〇〇三二号の方を振り向く。

「――いつかは、名前で呼び合えると良いね。いつまでも妹さんじゃ寂しいし」

いちいち一〇〇三二号と言うのは、とても呼びづらい。三二でミニちゃんとかそういうあだ名でもつければいいのに、と思いつつ私はそう言って微笑みかける。

まあ、感情のない妹達（シスターズ）にこんな洒落たジョークが伝わるはずもないか。私は、ぽかんとしている一〇〇三二号にそれじゃばいばーい、と手を振ってその場を後にした。

＊＊＊

ｓｉｄｅ御坂妹

……名前。

ミサカの心の中に、その言葉はすうっと入り込んできました。このミサカを表す単語は、『あの人』が呼んでくれた『御坂妹』という言葉、それからこの世に生れ落ちたときにつけられた『検体番号一〇〇三二』だけ。確かに、お姉様の名前である『美琴』、親船さんの名前である『小豆』という言葉と比べると、どうしても名前らしくないのは否めません。

『――いつかは、名前で呼び合えると良いね。いつまでも妹さんじゃ寂しいし』

そう言って微笑みかけてくれた彼女の言葉が、ミサカの脳裏によぎります。……ああ、あなたは結局、どこまでも優しい人なのですね。自分で考えろと言っておきながら、こんなにあっさりと分かるヒントを残してくれる。

……だって。だって、憧れてしまうじゃないですか。『お姉様』が出来ただけでも嬉しかったのに。その上、『名前で呼び合える友達』なんて。思わず、名前が欲しい、と思ってしまうじゃないですか。

ともあれ、当面の目的は決まりました。

結局あなたの提示してくれた通りにしか動けない自分に嫌気が差

す思いですが、それでもこの気持ちは、あなたが提示してくれたから、だけで抱いているわけではありません。

次に会う時――は流石に無理でも、いつか、私が他の人と同じような生活ができるようになったときには。名前で呼び合えるように、なっておきますからね。

――――小豆、ちゃん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7645r/

とある世界の剥離要素（エラーポイント）

2011年11月26日01時21分発行